ジャーマン・ロック集成

マーキームーン社刊



MARQUEE SPECIAL EDITION

ジャーマン・ロック集成

ENCYCLOPEDIA OF GERMAN ROCK

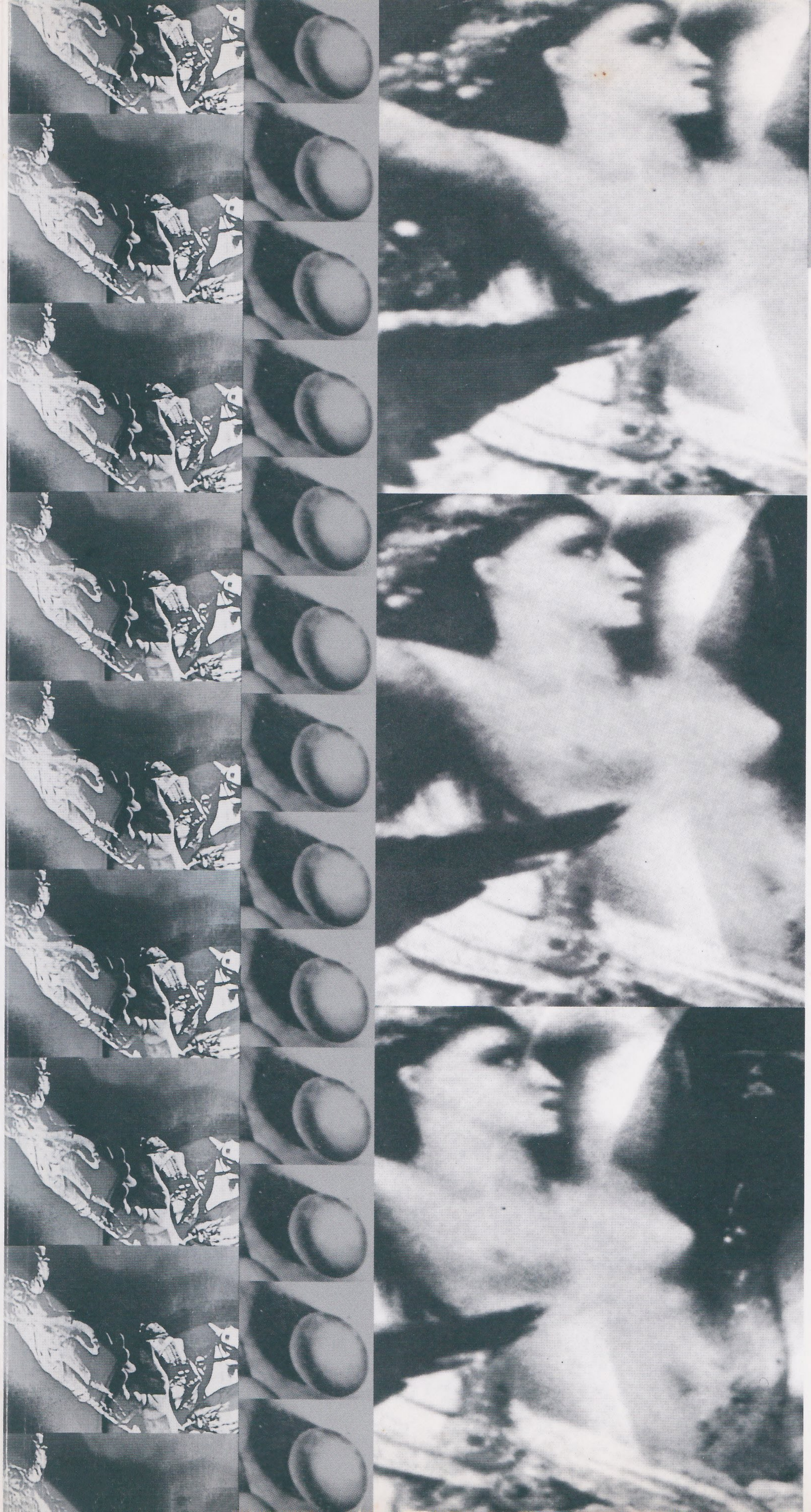
ユーロ・ロック集成 2

MARQUEE
SPECIAL EDITION

ジャーマン・ロック集成

ENCYCLOPEDIA OF GERMAN ROCK

ユーロ・ロック集成 2



ジャーマン・ロック集成

マーキームーン社刊

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK

2

– GERMANY –

1969 – 1994



序

◉

夢のジャーマン・ロック

ジャーマン・ロックは甦る。このまったくもってとらえどころのないカテゴライズは、ポピュラー・ミュージックの全てを呑み込んでしまう。既にカテゴリーではないかもしれない。

'70年代にジャーマン・ロックは、プログレッシヴ・ロックの最も突出した部分としてとらえられていた。これが'80年代になるとニューウェイヴに影響を与えたシーンとして見直され、そして'90年代の今、ジャーマン・ロックは一方でサイケデリック・リヴァイヴァルの最奥であり、一方ではハウス・ミュージックの源流ともされている。ジャーマン・ロックは、世代交代が急速に進み音楽の価値観が揺らぎ始めると、必ずと言っていい程呼びさまされる。ジャーマン・ロックは、変化していく音楽＝ポップ・ミュージックの原型その染色体のようなところがある。

ジャーマン・ロックがこれ程までに読み替えられ過去の産物であるにもかかわらずエッセンスが抽出されていくというのに、一向に表沙汰にならないのも、まず第一に線引きやマッピングが最も無意味であるからに他ならない。これ程、形として出し難いシーンはない。ロック、ジャズ、ブルース、トラッド、クラシック/現代音楽等、既成ジャンルの全てに移行していってその境が曖昧極まりなく、また混り合い、そしてありがちな尺度では計れない畸型を産み出したのだから、もっともなことだ。

'70年代にあってはポップ・ミュージックがアメリカ＝イギリス主導のうちに語られた事も、ジャーマン・ロックの正体を一層不透明なものにしたかもしれない。ヨーロッパ、ドイツは見過されているに等しい。ヒッピー・カルチャー、サブ・カルチャーとして英米から入り込んだフランク・ザッパやヴェルヴェット・アンダーグラウンド、ピンク・フロイド、ジミ・ヘンドリクス等の音楽は、伏せられた中で、既存のカテゴリーを呼び寄せながらどんどんと変形/変質していった。そこにはドイツに根づく表現主義指向の強さをうかがわせるものがある。言ってみればジャーマン・ロックは、ポップ・ミュージックの秘部のようなものだ。あまりにも雑然としていてロックが砕かれ、ある時は消し込まれており、立ち入る事を拒むところがある。磁場と言っていいかもしれない。未だ認知されない部分を持っている。

そしてジャーマン・ロックの不透明さは、このように音楽スタイルを尺度にしていない所にこそ、それらしさが横たわっていることにある。音楽という形よりも、音という単位に主眼が置かれていることが多く、一方向に固定されず、逆を言えばアイディアの宝庫となっているためでもある。聴き方によっては幾つにもとらえられる。定まっていない事がジャーマン・ロックの特質と言っていい。それだけにリスナーの感性は試され、能動的であればある程、その感性は開かれていく。ジャーマン・ロックは何らかの役割を果たすところにこそ特質があり、それ自体が鑑賞向きではないことが多い。まるで行間を読むに等しいPOPOL VUHがあるかと思えば、意味を一切そぎ落とした音そのものの連続でしかないCLUSTER周辺まである。全てにおいて、ジャーマン・ロックとは、一律でない事だけが言える。これは本当に希なシーンだ。恐らく最も規格ずれしたポップ・ミュージック・シーンに違いない。ポップ・ミュージックとは、本来これ程までに豊かなものである事、それと同時にリスクのあるものである事、時代を超えるという事、新鮮な事、そして謎めいていて、それは夢でもある事。ジャーマン・ロックは何度も読み替えられ封印されることがない。

最後にこのような性格上、イタリアン・ロック集成とは少し形態を変えてアーティスト別に、そして便宜上のカテゴライズを独自に設定しての編集にさせていただいた事をお断りしておきます。御協力頂きました多くの方々に感謝します。

1994年6月2日　松本昌幸

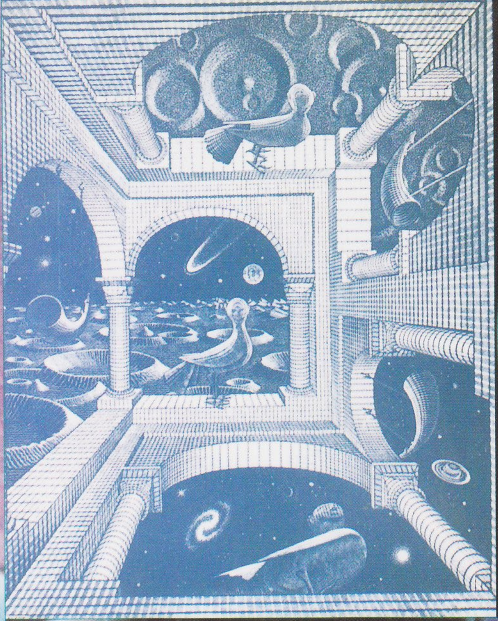
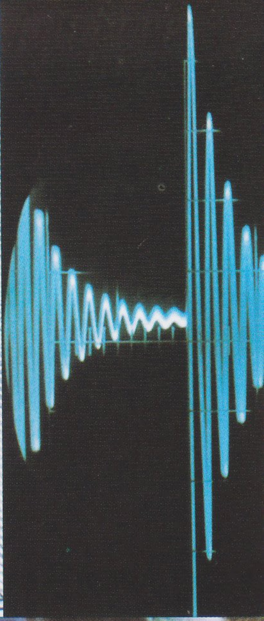


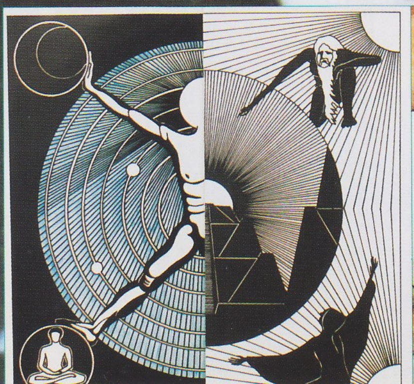


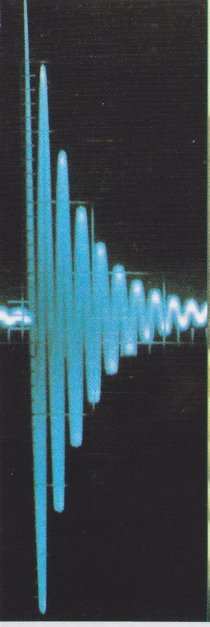
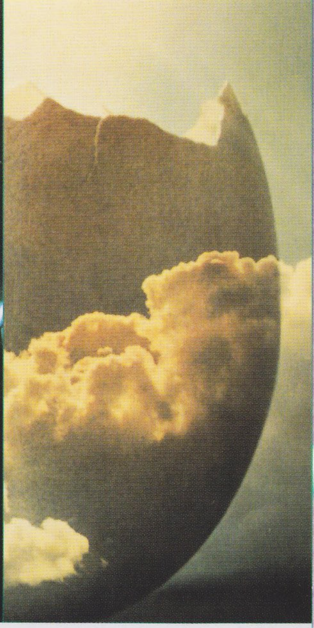
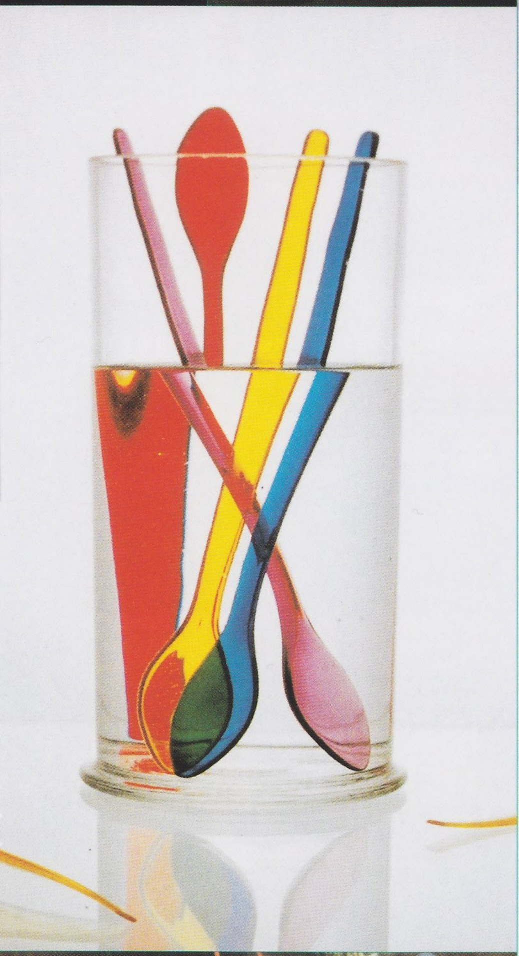











GOLGATHA
DIES IRAE
CHILDREN'S GAME
DIES IRAE
GOLGATHA
Elga
Cajun Man
Streets Of London
WIND
JOSEPHINE
PUPPET MASTER
SINGLE
MAXI-SINGLE 33 RPM
THE PRINCESS AND THE MINSTREL
SCHLITTENFAHRT
WIND
MIDNIGHT CIRCUS
coloured is gay
get it
SILENT NIGHT
CAN
SILENT NIGHT
CAN
VILLA WUNDERBAR
EMMA MYLDENBERGER
GURU GURU
MORE HOT JUICE
20th CENTURY ROCK
Kin Ping Meh
I WANNA BE LAZY
SOMETIME
JOY UNLIMITED
EARLY MORNING MOANIN
Proud Angelina
Elster Silberflug
Ich fahr dahin
ZWEISTEIN
Come On People
I'll Be Your Singer, You'll Be My Song
A.R. & Machines
Demon Thor
Billy The Kid
(I Had A Little) Love Affair
ariola

イタリアやイギリスのシングル程には探求されていない様だが、ドイツにも当然重要なシングルが多数ある。その筆頭が本誌53号でも紹介したタンジェリン・ドリーム。コメントは重複するので控えるが、1stと2ndの間に録られたとおぼしき両面未収の傑作シングルである。ジャケ違いのイタリア盤もある。

次いでオール・レーベルのもう一つの大物未収シングル、アモン・デュール。片面は3rdの曲の別テイクでよりサイケ、もう片面も未収、ジャケも素晴らしい。その他オール・レーベルにはバース・コントロールが3枚、フロー・デ・コロンが3枚、W&Wが2枚等、10枚以上のシングル・リリースが確認出来るが、TD、ADに次いで注目を惹きそうなのが、ゴルガサというバンドの作品。このバンドはLPを出しておらずこのシングルのみで消えた様だ。演っている曲はあのDies Irae、フォルムラ・トレ、ヴィジターズ、グレイシャスで知られる「怒りの日」で、ブラスを使用し結構迫力がある。何故かイタリア盤も出ていて、やはりジャケ違い。オールと言えばピルツ、コスミッシェだが、コスミッシェには知る限りシングルは無い。ピルツはレコ番がポリドールの番号なので続いておらず調べるのが大変だが、ヴィールス、ディーズ・イレ、W&W等のシングルが確認されている。ジェリー・バーカースの未収作もある。また、シングルのみのアーティストでエルガという女性ヴォーカリストの作品もあるがカントリー調のフォーク・ロックでいただけない。ヘルダーリン路線を期待したのだけれども。

ハード系の雄、オレンジ・ピールにも未収シングルがあり、まず文句の無い出来。同じジャケのイタリア盤、オレンジ輪切りジャケのスペイン盤に加えて、イギリス盤はジャケ無しでなんとリフレクションからのリリース。実は某オムニバスにも収録。ジェロニモも複数出しているが不勉強のためどれが未収か不明。ファンには気になる所だろうが、ナイト・サン、ヘアリー・チャプター、プロフェッサー・ウルフ等にはシングルは無い様だ。ドロッセルバルトは2枚あり、一枚はカット、もう一枚は未確認。ヤヌス、エピタフにも一枚ずつ未収シングルを確認。

シンフォ系ではウィンドがCBS時代に2枚残しており、一枚は片面未収でジャケ違いプロモもあり。パルシファルが残した唯一のシングルも良い出来で、2枚組再発に収録(のハズ)。ミッドナイト・サーカスはB面が未収でメロトロン&フルート入り、ちょっとジャケ違いの仏盤あり。本当は秘密にしておきたかったギャラクシス、典型的自主シンフォニック、オルガン・シンセ・メロトロン入り。クレジットはあるのに何故か歌ってくれない女性ヴォーカルが恨めしい。スイスのサーカスはB面が、ライヴ・テープから取った、とクレジットされているので多分未収。

最後にアヴァンギャルド系。ノイには少くとも2枚のシングルがあり、片方は、回転数違いの曲で構成されていたアルバムの、欠けている45回転ヴァージョン。これなどはシングルが揃って初めて完結した作品となる特異な例。見ればわかるブレインチケットのシングル、正しくはコットンウッドヒル名義だが、B面未収。このシングル、どうもイタリア・オンリーらしく、3rdアルバムをイタリアン・ロック集成に載せたのは間違っていなかった、と一人で納得している。ジョエル・ファンドルーゲンブロックのイタリアのみのソロLPもある。カンやアモン・デュールIIでは、カンに外国盤ジャケ違いが多数あるが、AD IIは「天使の雷鳥」仏盤しか思い出せない。クラフトヴェルクは別冊が出来そうな程沢山ジャケ及びヴァージョン違いがあって、専門外の私にはムリ。中野氏にお任せしたい。シュルツェは基本的にはシングルは無いが、ヴァーンフリード名義のプロモが一枚ある。ポポル・ヴーには結局無いと思いたいが、後期にプロモが切られている可能性はある。ディヨン・ユンのシングルも未だ現物未確認。ファウストのシングルはジャケ無しイギリス盤以外にジャケ付仏盤が発見された。レコメンからは、あの赤いの(1stプレスはシルクスクリーン・ジャケ)と版画のもの以外にオムニバス・シングルに一曲収録、しかし私はどの曲がファウストなのか未だにわからない。レコメンからは2枚組シングルの装丁のものもある模様。また最近CD化に伴って、トニー・コンラッド/ファウストのアウト・テイクスがシングルで出回った。ついでだがトニー・コンラッド/ファウストのLP、ドイツ・ポリドール盤も存在するらしい。ジャケ無しテスト・プレス、10枚のみとの噂……

イタリアだけじゃない森下　忠/アンニ・ヴェルディ

ASH RA TEMPEL
New Age Of Earth
design:Peter Butschkow
1976

various artists
The Cosmic Jokers
cover:Peter Geitner





various artists
Galactic Supermarket
cover:Peter Geitner

various artists
Sci-Fi Party
cover:Peter Geitner



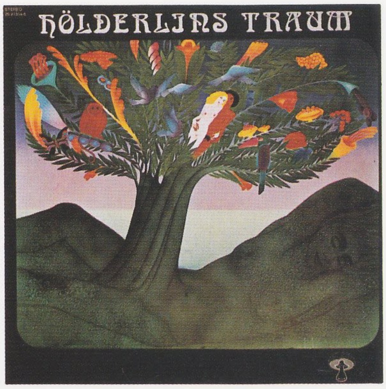


various artists
Gilles Zeitschiff
photo:Marcel Fugère
design:Peter Geitner
1974

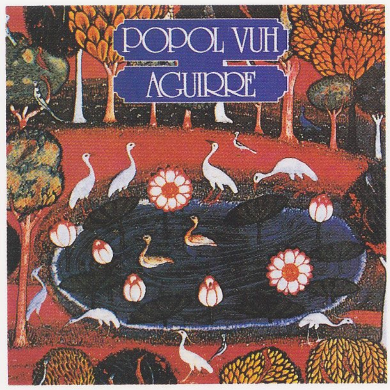
various artists
Planetten Sit-In
design:Peter Geitner
1974







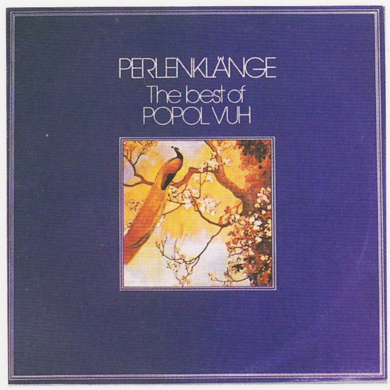
HÖLDERLIN
Hölderlins Traum
cover:Helmut Friz
1972



POPOL VUH
Aguirre
1976



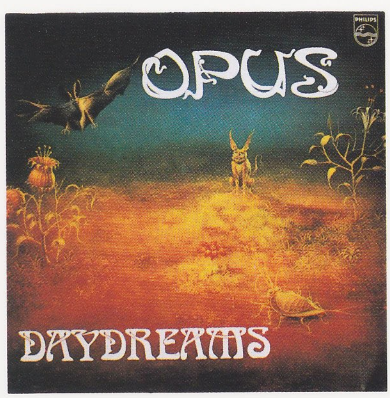
POPOL VUH
Das Hohelied Salomos
AD & Design:Ulli Eichberger
1975



POPOL VUH
Perlenklänge
1976

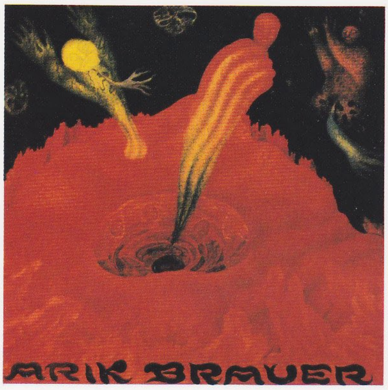


NOVALIS
Sommerabend
1976



OPUS
Daydreams
painting:Kurt Mikula
design:A. Moller
1980

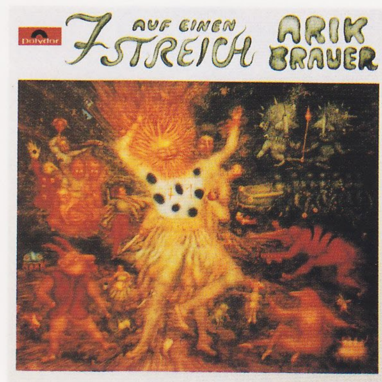
ARIK BRAUER
Arik Brauer
painting:Arik Brauer
1971







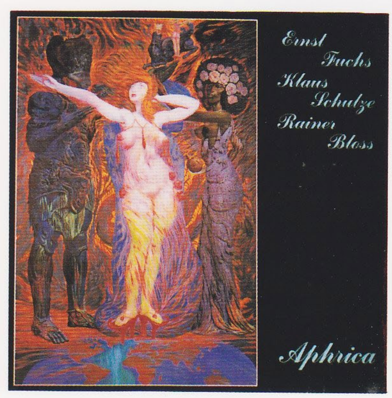
ARIK BRAUER
7 Auf Einen Streich
painting:Arik Brauer
1978



ARIK BRAUER
Geburn Für Die Gruabn
painting:Arik Brauer
1988



ERNST FUCHS/
KLAUS SCHULZE/
RAINER BLOSS
Aphrica
painting:Ernst Fuchs
design:Klaus D.Müller/Claus Cordes
1984





EMBRYO
We Keep On
design:Holger Matthies
1973



TANGERINE DREAM
Stratosfear
design:Cooke-Key Associates
1976



TANGERINE DREAM
Ricochet
photo:Monique Froese
layout:Graphiti



ASH RA
Belle Alliance
design & photo:Detlef Maugsch
1980

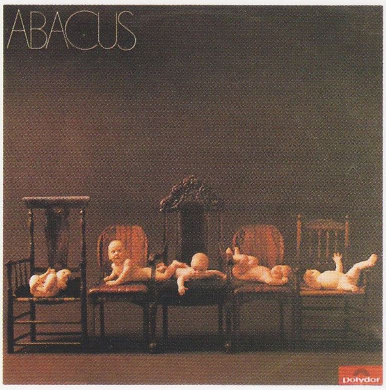


HANS JOACHIM ROEDELIUS
Durch Die Wüste
photo:Christine Roedelius
1978

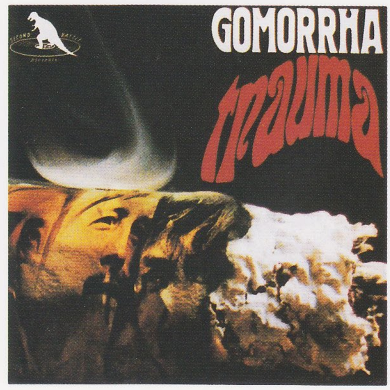


MOEBIUS & PLANK
Material
design:Kilian-Moebius
1981

ABACUS
Abacus
photo:Gestaltungs-technik Fotografie
design:Jürgen Köhlert



GOMORRHA
Trauma
design & photo:Graphicteam Köln
+ U. Watschounek
1972



CHERUBIN
Our Sunrise
AD:Ulli Eichberger
head painting:Eckhard Kruse
1974



PAUL & LIMPE FUCHS
Stürmischer Himmel



ANNEXUS QUAM
Beziehungen
illustration:Peter Geitner
design:Wellemsen + Geitner/
Studio fürWerbung + Gestaltung

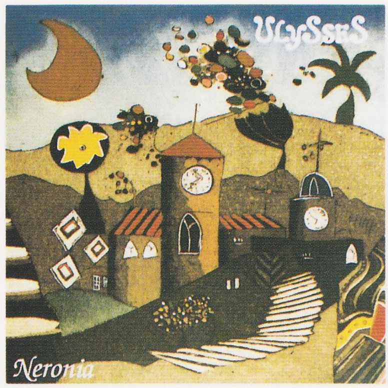


MCCHURCH SOUNDROOM
Delusion
design:H. Matthies

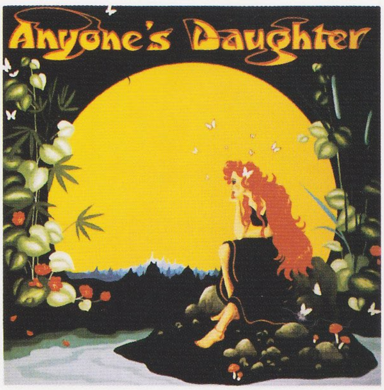




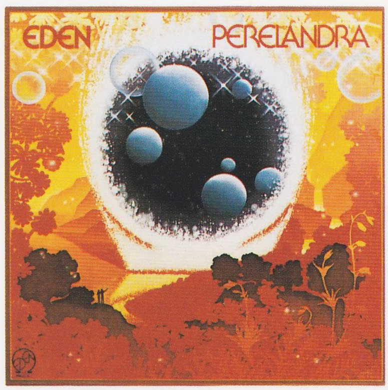
HOELDERLIN
Hoelderlin
painting:Christian Grumbkow
1975



ULISSES
Neronia
Artwork:Friedhelm Kötter
Logo-Design:Carsten Bergemann & Josef Rainfurth
1993



ANYONE'S DAUGHTER
Anyone's Daughter
painting:Eva Rudolf
1980



EDEN
Perelandra
cover:Albrecht Fietz
1981



EDEN
Erwartung
cover:Albrecht Fietz
1978



WALLENSTEIN
Stories, Songs & Symphonies
design:Harald Grosskopf
typographie:Peter Geitner

POPOL VUH
Hosianna Mantra
design:Ingo Trauer, Richard J. Rudow
1973

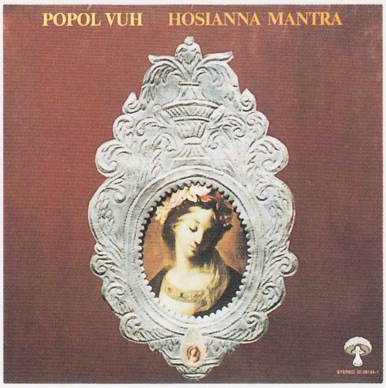
BETWEEN
Contemplation
painting:Guntram Holdgrün
design:Ludwig W. Janz
1977

EMTIDI
Saat
cover:Helmut Friz
1972

AMON DÜÜL
Disaster

TANGERINE DREAM
Zeit
design & painting:Edgar Froese
1972

EMBRYO
Opal
design:Reinhard Hippen
1970













jacket art

CONTENTS

ユーロ・ロック集成② ドイツ編
ジャーマン・ロック集成

税込定価3600円
1994年8月10日第1刷発行

発行所●マーキームーン社
〒161 東京都新宿区下落合
3-15-18 SYビル 404
Tel：03-3954-2055
Fax：03-3954-9563
編集人●松本昌幸
発行人●賀川雅彦/山崎尚洋
監　修●川上徹人
編　集●古田　賢
川上史郎
中島俊也
協　力●宮川訓朗
レイアウト●古田　賢
写　植●木下隆由(TKルーム)
有井康雄(アドコープ)

協力者(50音順/敬称略)
秋田昌美
伊藤直継
いわねあつみ
内田哲雄
宇藤毅平
江田和宏
榎本隆一
大関善行
河原博文
木野草司
小林裕之
小山哲人
坂地紹一
坂本　理
G.S.M.
渋谷一彦
嶋田博之
島村昌樹
城元隆志
杉山　薫
高森秀幸
高山直之
Chihiro S.
津田幸一
中西暢久
中野泰博
中藤正邦
仁木民雄
野田　努
野呂利治
福島恵一
菩提寺伸人
松尾裕正
松山晋也
三輪岳志
六井久人
村本隆文
森下　忠
山田泰三
山本雅幸
欧亜(EURASIA)
吉瀬孝行
渡部　暁






Ohr, Kosmische, Pilz
ジャーマン・プログレッシヴ・ロックの至宝
遂に日本発売開始!!

EUROPEAN ROCK COLLECTION

8・24発売●各税込¥2,200
直輸入盤はすべて日本語解説付

●お待たせしました。ユーロ・ロック・シリーズ15年目にして、遂にあのジャーマン・ロックの至宝と折り紙つきのOhr, Kosmische, Pilzの3大レーベルの秘蔵盤が続々と日本初登場します。出てそうで出たことなかったこのお宝たち、この際全部買ってしまおう!
●さらにBIG NEWS!イタリアのプログレ最先端ともいえるVINYL MAGICより「NEW PROG. '90」も同時に発売が開始されるのだ。こちらも大注目!!

5:1特典盤プレゼント
ネクサス・プログレッシヴ・ロック(KICS-2518～2533)及びユーロロック・コレクション(KICP-2727～2739)(KICP-7032～36)、11月、平成7年3月発売予定のこのシリーズ(全・約50タイトル予定)の中から5枚お買い上げの方にⒶリシャール・ピナス〈エルドン〉のスペシャル・ライヴを予定。Ⓑ「オルメ/RARITA' NASCOSTE」各8cmCDのいずれかをプレゼントします。(尚Ⓑは現在庫がなくなった場合Ⓐをお送りします)尚、都合によりⒶの発送は10月以降になります。ご了承下さい。帯下の応募券5枚とⒶかⒷいずれかをご記入の上、送料・手数料として定額小為替400円(郵便局でお求め下さい)を下記宛お送り下さい。(〒/住所/氏名/年令を併せてご記入下さい)
【宛先】〒112東京都文京区音羽1-2-3 キングレコード株式会社・販促第2部
「NEXUS～ユーロ・ロック特典盤'94」係
【応募〆切】平成7年6月30日(当日消印有効)

ポポル・ヴー/ファラオの庭で
●KICP-2728(日本初発売)



ポポル・ヴーの2作目は、デビュー作と同じくシンセサイザーを多用している。次作「ホシアンナ・マントラ」以後のアコースティック楽器中心のサウンドとは随分と外見違っているものの、不思議と受ける印象は似ている。それはとても神聖なイメージがあって大自然に通じていくようなメンタルな浄化、高揚を感じさせてくれるものだ。彼らららしい。代表作の一つ。

アシュ・ラ・テンペル/セカンド(振動)
●KICP-2734(日本初発売)



「First」に続く2作目。デビュー作とともに、オリジナル・アシュ・ラ・テンペルによるアルバム。次作「SevenUp」の頃にはバンドの実体がなくなりセッションになる。そうした経緯からもうかがえるように、2作目はデビュー作を受け継いで、更にブルーズ・ロックの下地や「神秘」～「ウマグマ」の頃のピンク・フロイドの影響まで読み取れる。アルバムの後半には彼らのメロディアスな面が出ていて、はずせないところ。

ポポル・ヴー/一人の狩猟者、そして七人の狩猟者
●KICP-2735(日本初発売)



3枚目の「Hosianna Mantra」で、それまでのシンセサイザー中心のサウンドから一見大きな方向転換を成し遂げたポポル・ヴーは、'70年代中頃になると幾らかロック寄りになる。5枚目に当るこのアルバムから3作はフリッケを含む3人編成で、そうした傾向を見せた。このアルバムは1曲1曲のカラーやメロディがはっきりしている上に、静 動の構成が曲に盛り込まれているのでとても親しみ易い。

グル・グル/UFO
●KICP-2736(日本初発売)



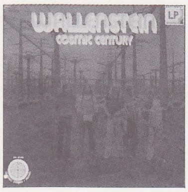
初期のアモン・デュールー派やアシュ・ラ・テンペル、そしてカンと並んで、'70年代初期のジャーマン・ロック・ヘヴィ・サイドを代表するグルグル。その極めつけのデビュー作。ヘヴィとは言っても、そこは実験意欲さかんなこの時期、そしてブラック・ユーモア旺盛な彼らの事、とても一筋縄では行かない。ヘヴィ・トーンで繰り広げられる即興には息苦しいような重圧感がある。ある意味でロックの核心を突いている。

ラード・フリー/アイム・アラウンド・アバウト・ミッドナイト
●KICP-2737(日本初発売)



デビュー作の延長線上にある2作目。'75年のリリース。エルドンのリシャール・ピナス(g)も参加しており、また初期のエルドンにも通じるかのようなアヴァンギャルドな空気を感じとれるアルバムだ。ラード・フリーは数人のサックス奏者から成る特異な編成で、エレクトロニックな音響効果を狙ったようなサウンドが特徴だが、やがてそれはジルベール・アルマンの次なるユニット、アーバン・サックスで本格化する。

ヴァレンシュタイン/コズミック・センチュリー
●KICP-2738(日本初発売)



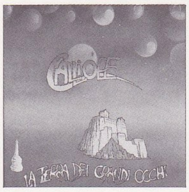
前作「Mother Universe」の流れを受け継ぐ3作目。初期ジャーマン・ロックのシンフォニック・ロックの名作として折り紙つきのアルバムでもある。相変らず演奏水準は高くはないが、それを補って余りある程の彫りの深い叙情性が、これまでも多くのファンを魅了してきた。ピアノとメロトロンを中心にしたサウンドを更にヴァイオリンを加え、曲自体までが抑揚のあるものになって一体化した。彼らの最高作と言い切れる内容だ。

アルティ・エ・メスティエリ/明日へのワルツ
●KICP-2739(日本初CD化)



"芸術家と職人たち"が、そのバカ・テクのすべてを出し切った傑作。アルティのセカンド・アルバムに当たる本作は、デビュー・アルバムと並んで、単にイタリアン・ロックの傑作というだけでなく、今後もプログレ・ファンのためのマスト・アイテムとして長く語り継がれていくだろう究極の一枚。フリオ・キリコの最高のプレイが聴けることでも知られている。ここでのキリコのドラミングは衝撃だ!!

カリオペ/ファースト(大地の目)
●KICP-7035〈直輸入盤〉(日本初発売)



期待のプログレ・レーベル、よりの第一弾は中々の力作。いきなり懐かしのキーボード群(ハモンドM3、メロトロン400、ミニ・ムーグ、クラヴィネット、ソリーナ、アープ)に変拍子と、ハマリ過ぎプログレ・パターンのオン・パレード。正にプログレのやり尽し、これでもかプログレといった感じ。向うのプロフィール紹介にも"ヴィンテージ・キーボードをフィーチャー"なんて堂々と書いてある。

シンドーネ/インカ
●KICP-7036〈直輸入盤〉(日本初発売)



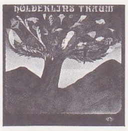
一曲一曲は悪くないが、どこかもうひとつの感があった一作目と比べると、テーマ付きのトータル・アルバムのせいか、ずっとプログレっぽい!? クレジットをよく見るとメンバーが一人増えている。しかもキーボード奏者だ。ダブル・キーボードとくれば、グリーンスレイドにレア・バード。しかしタイプはかなり違う。次々と繰り出されるキーボード・ソロは、とてもスリリング。

好評発売中(いずれも日本初発売)


アシュ・ラ・テンペル/ファースト
●KICP-2727



ポポル・ヴー/ホシアンナ・マントラ
●KICP-2729



ヘルダーリン/ヘルダーリンの夢
●KICP-2730


ヴァレンシュタイン/ファースト(電撃戦)
●KICP-2731


ヴァレンシュタイン/マザー・ユニヴァース
●KICP-2732


ロマンティック・ウォリアーズ/バトルフィールド
●KICP-7032
〈直輸入盤〉



カリオペ/国境の街
●KICP-7033
〈直輸入盤〉



イル・カステッロ・ディ・アトランテ/我こそは北の大地を支配するものなり
●KICP-7034
〈直輸入盤〉

お知らせ
●6月22日発売と告知しました「ラード・フリー/ファースト」(KICP-2733)は都合により発売を延期致します。
●リシャール・ピナス(エルドン)の最新作「サイボーグ・サリー」は9月21日キングレコードより発売(世界同時)されます。

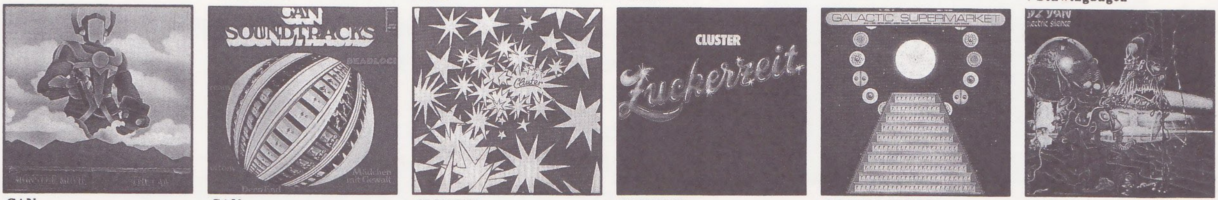
発売元:キングレコード株式会社☎03-3945-2114

disk union 新宿店

ジャーマン･ロック不滅の名盤群
～ジャーマン･ロック集成　発刊記念の大特集～



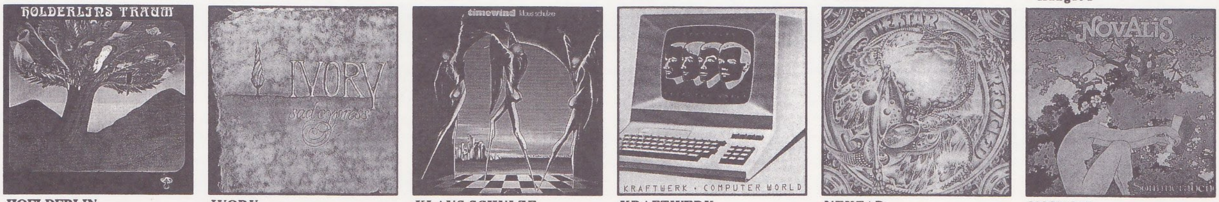
AGITATION FREE / Malesch — AMON DUUL II / Phallus Dei — AMON DUUL II / Yeti — ANYONE'S DAUGHTER / Adonis — ASH RA TEMPEL — ASH RA TEMPEL / Schwingungen



CAN / Monster Movie — CAN / Soundtracks — CLUSTER / II — CLUSTER / Zuckerzeit — COSMIC JOKERS / Galactic Supermarket — DZYAN / Electric Silence



EMBRYO / Rache — EMTIDI / Saat — FAUST / So far — GURU GURU / UFO — GURU GURU / Hinten — GURU GURU / Kanguru



HOELDERLIN / Holderlins Traum — IVORY / Sad Cypress — KLAUS SCHULZE / Time Wind — KRAFTWERK / Computer World — NEKTAR / Recycled — NOVALIS / Sommerabend



POPOL VUH / Hosianna Mantra — POPOL VUH / Aguirre — TANGERINE DREAM / Phaedra — TONY CONRAD with FAUST / Outside The Dream Syndicate — WALLENSTEIN / Cosmic Century — WIND / Morning

プログレッシヴ･ロック LP･CD･雑誌･パンフ
高価買取中

プログレッシヴ･ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、ディスクユニオン新宿店をご利用ください。廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。詳しくはお問い合わせください。

disk union
ディスクユニオン 新宿店
6F：プログレッシヴ･ロック専門フロア

Phone：03−3352−2691

営業時間：午前11時～午後8時(日･祝は午後7時まで)

「プログレ祭り」
1994年9月30日まで
開催中!!
★PILZのバッヂ
★Vertigoのバッヂ
★VertigoのTシャツ
プレゼント中!!
詳しくは店頭にて
(残りわずか、早いもの勝ち)



WORLD DISQUE

営業時間13：00～19：30
火曜定休

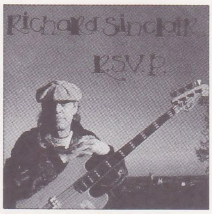
404 SY Bldg. 3-15-18 Shimo-Ochiai,
Shinjuku-ku, Tokyo 161 JAPAN
Tel ：03-3954-5348
Fax ：03-3954-9563



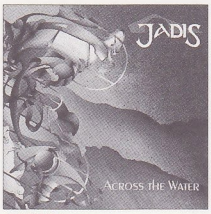
7月30日(土) CD廃盤セール
(時間は平常通り)

国内廃盤、ライヴCDを中心に今や入手困難なアイテムをサービス・プライスで一挙放出。あなたが欲しかったCD、必ずあります！

ワールド・ディスク7～8月特選レギュラー・ディスク
(入荷の極々一部です)



RICHARD SINCLAIR (U.K.)
ミスター・カンタベリーの最新ヴォイス・メールが到着。ピップ・パイル、ジミー・ヘイスティングス他豪華ゲストを迎えてジャジーな面をも加味した意欲作。比類なき魅力の歌声と暖かさは健在、文句なし。ファン必聴。



JADIS (U.K.)
ミニ・アルバムに続いて待望の2ndアルバムがリリース。英国の中軸として、キャリアとセンスに裏打ちされた高品質な内容はさすがです。メロディアス・シンフォ/ポンプ系でも特にギター・プレイは断トツ。個性あり／



CZAR (U.K.)
'70年英国、フォンタナ・レーベルといえばコレ。遂にCD化。サバス級の重さ、暗さにクリムゾン級のメロトロン、と来て一筋縄ではいきません。アンダーグラウンドにしてプログレッシヴ。これぞ英国の凄み、一級品。



POLLEN (Canada)
発売が延びていた北米シンフォニックの代表格、今度こそ出ます。ジャケットのイメージどおりのドラマティックかつメロディアスな演奏。大物と呼ぶにふさわしいクオリティを誇る一作、叙情性と構築美は抜けてます。



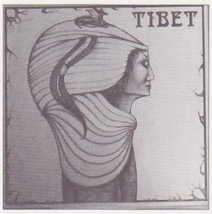
CLEARLIGHT (France)
シリル・ヴェルド率いるスーパー・ユニットの4作目。ジャズ・ロック的要素を昇華したメロディアスな面に加え、ミニマル・ミュージックの方向性を大幅に導入しています。彼らならではの流れるような演奏は見事です。



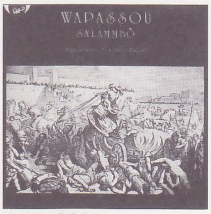
FINCH (Holland)
熱き魂の伝導者、フィンチの3rdアルバムも遂にCDに／ よりアンサンブル志向が強まり、組曲構成の大曲も。メンバー・チェンジを経てのラスト・アルバムにして彼らの魅力全開の一作。フィンチの作品にハズレ無し。



MANEIGE (Canada)
'77年の3rdアルバムがCD化。Key,G,Fl等、多彩な音色をフィーチャーした演奏に加え、弦楽器をも導入して穏やかでリリカルな味わい。カナディアンの代表的バンドたる実力を見せつけます。残された大物、遂に上陸。



TIBET (Germany)
'79年、ベラフォン・レーベルに残された唯一の作品。ハモンド、メロトロンを効果的に聴かせる情熱たっぷりのメロディアスな演奏。ジャーマン・ロックとしては異色ともいえる内容だけに、逆にオリジナリティを感じます。



WAPASSOU (France)
フランスが生んだ孤高のファンタジック・ユニット。クリプト・レーベル時代の代表どころが再発。Key,Vln,女性スキャット、Gが織りなす浮遊感はまさに夢見心地。これぞヨーロッパ的ロマンティシズムの極めつけ。



CAROL OF HARVEST (Germany)
ジャーマン・フォーク・ロックの超レア・アイテムが限定再発。女性ヴォーカル入りの味わい深いサウンドは、いわば英国フォーク乗りで聴けるものです。プログレ・ファン向けアイテムとして一級品。一聴の価値十分／

その他の入荷

輸入CD、LP

OZRIC TENTACLES/Arborescence
GENTLE GIANT/Last Time Live
MATCHING MOLE/
　BBC Radio 1 Live In Concert
DAVE GREENSLADE/
　Pentateuch Of The Cosmology
CAEDOMON/
　Caedomon(rare! rare! good! folk.)
STONE ANGEL/Stone Angel
LEAFHOUND/Growers Of Mushrooms
TON TON MACOUTE/
　Ton Ton Macoute(from Repertoire)
KALEIDOSCOPE/
　Tangerine Dream, Faintly Blowing
PINNACLE/Cyborg Assassin(＋4bonus)
DOGFEET/Dogfeet
　(＋2bonus, good! rare! good! good!)
ALFRED TISOCCO/Ballet Collection
OPUS AVANTRA/Lyrics
SITHONIA/Folla Di Passaggio
JEAN PASCAL BOFFO/Carillons
CATHERINE RIBEIRO＋ALPES/
　Ame Debout, La Deboussole
CAROL OF HARVEST/Carol Of Harvest
HAIRY CHAPTER/Can't Get Through
MYTHOS/Mythos
JULVERNE/Le Retourn Du Capt. Nemo
ITZIAR/Itziar
HAIZEA/Hontz Gaua
NIEMEN/Aerolit
JOSE CID/10000 Anos Depois Entre～
EELA CRAIG/Eela Craig
KAIZEN/Gargula
QUATERNA REQUIEM/Quasimodo
SAILOR FREE/The Fifth Door
U TOTEM/Music For Imaginary Films
MARCO ANTONIO ARAUJO/
　Entre Um Silencio E Outro(＋2～3bonus)
JACKAL/Awake
BUCCANEER/Buccaneer
FM/Black Noise
RICHARD SINCLAIR/R.S.V.P.
GANDALF/Colours Of Earth
POLLEN/Pollen
ATLAS/Bla Vardag
MANEIGE/Ni Vent Ni Nouvelle
ALAN SORRENTI/Alan Sorrenti
RAGNAROK/Ragnarok
UTOPIA/Utopia
PEKKA POHJOLA/Katkavaaran
　Lohikaarme, Keesojen Lehto
GUALVERTO/Gualverto, Vericuetos
V.A./Sci-Fi Party
FAUST/Live In Concert Vol.1, Vol.2
DEBORA SEFFER/Bluesong Rouge
LA 1919/Jouer, Spielen, To Play
　(＋Chris Cutler, Charles Hayward)
WOOLLY WOLSTENHOLM



WORLD DISQUE SET SALE LIST Vol.113
8月25日発行!!

遠方の方、忙しくて店に来られない方の為に毎月お送りしている通信販売のリストです。この中には、自信を持って推薦する推薦盤コーナー、主として在庫残りの貴少盤を安価に供給するサービス・コーナー、世界中から集めたLP/CDをストックするスペシャル・ストック・コーナー、そして入手困難な貴少盤/中古盤を扱う貴少盤コーナーがあり、充実したストックからご希望のアイテムを購入できる便利なシステムです。ユーロ/プログレッシヴはもちろん、ブリティッシュ、トラッド等のストックも扱っています。マーキーとこのリストさえあれば鬼に金棒!! お申込は簡単。200円分の切手を同封の上、最新リスト希望と明記してマーキー内ワールド・ディスク通販係までお送り下さい。最新リストをお送りします。
(通信販売のお問合せは従来通り03-3954-2055までお願いします。3954-5348はお店専用電話です。)

WORLD DISQUE：〒161 東京都新宿区下落合3-15-18
SYビル403(駐車場に挟まれた白いビル)





精神変容の旅

●高森秀幸

1）

音楽は旅である。旅をトリップと言い替えてしまうと途端に妖しげな色彩を帯びて来てしまうが、まさにジャーマン・ロックは精神のトリップ、意識変容の旅に他ならない。今現在ジャーマン・ロックがどの様な人達の間で、どの様に聴かれているのか私には分らない。音楽の聴き方なんて処方箋があるわけではないし、受け止め方も千差万別だ。つまるところ個人個人の問題である。それは大衆の支持を受ける流行歌であろうと、誰も聴きはしない様なガチガチの現代音楽であろうと例外ではないだろう。要は視点を何処に置くかだ。自分の視点を持つ事、それだけでいい。そして見えて来る光景を自然に受け入れる事が出来ればそれで充分である。

以前、ジャーマン・ロック（いやプログレッシヴ・ロックと言ってもいいのだが）が、〝自己満足の音楽〟という嘲笑めいた語調で論難された事がよくあった。平たく言ってしまえば「売れる音楽は○、売れない音楽は×」という様な事であるが、そもそも音楽なんて皆、自己満足なのではないだろうか？ 自己が求める物に忠実であれば、他人がどう評価しようと瑣抹な事だ。リスナーを感動させようなどと考えるのは不遜でさえある。「売れる、売れない」という基準を持ち込む事自体、音楽とは別の不純物を付加させてしまい、より音楽を見えにくくさせるだけだ。皮肉めいた結論を言わさせてもらえば、概して「売れない」音楽をやっているミュージシャン達は決して自らの音楽に満足してなどいはしないし、同じ処にとどまってはいないが、ろくでもない音楽をやってる連中は、「売れている」事に満足しているだけで、同じ処をぐるぐる廻っているだけである。実際、'60年代〜'70年代のロック・ミュージシャン達は現状打破を掲げて、その怒りやいらだちを音楽にぶつけていたのだし、その音楽はリスナー達への挑発であった。満足する事など念頭には無かったに違いない。悪しきコマーシャリズムに毒されたミュージシャンとリスナーの馴れ合いこそ自己満足の極みだと言いたい。

大分横道に逸れてしまったが、実は音楽が自己満足的であろうとなかろうと本当はどうでも良い事であり、どう受け止め、何を感じるか、何を考えるかが重要なのであって、ジャーマン・ロックも大方そのあたりに集中しているわけである。以下、個人的な独断と偏見でジャーマン・ロックを旅してみたい。

II)

日頃見なれているものがふと違って見えたり、本来あるべき所に収っていないような感覚を持った事は誰にでもあるに違いない。そうした非日常的感覚を、一見無表情な仮面を付けながらも悪意に満ちた優しさで見せてくれるのがファウストである。彼らのよく使う手段として、単調なリズムの繰り返しやノイズの導入がある。繰り返しというのは物理的には同じ状態の持続であって、変化・発展の余地はない。しかし心理的には微妙な揺れ動きを伴うものだ。それが時には高揚感を生み出し恍惚の境地へと導く事(民族音楽)もあれば、精神的安逸へと導く事(環境音楽)もある。しかしファウストは、簡単にはいい気持ちにさせてはくれない。リズムの流れを寸断し、位相をずらし、裏返す事によって平衡・安定を破り、さらにそこへ一見何の関係もないノイズを流し、陳腐とも言えるメランコリックなメロディーを挿入する事によって、似ても似つかない日常性を出現させるのである。それは裏返された日常性の悪夢とも言うべきものである。だがファウストの音を聴き込んで行く内に、その音の滑らかさ、曲展開のダイナミズム、ノイズと演奏の巧みなバランスに驚かされる事になる。そこにこそ彼らの本来の姿がある。ファウストは実験的なバンドなどではなく完成された様式美を有したバンドであったのだ。〝Krautrock〟を聴けばいかに彼らが繊細な美意識を持っていたか解るだろう。さらに言えば、彼らは単にリスナーの意識を攪乱させ、悪夢を見させたのではなく、現代の袋小路に陥った自我を解体させ、無心の境地に導くような領域にまで踏み込んでいたのである。

そして無垢で無心の心洗われる境地を目の前に広げて見せてくれたのがノイである。彼らもやはり徹底した繰り返しの魔術でロックのリズムを根底から解体し、虚構化させた。さらにテープの早回しや遅回しによる曲という概念の無意味化は我々の見ている現実の曖昧さ、不確かさを認識させ、ちょうど写真のポジとネガのような反転した世界を垣間見させる。ノイの音は病的に明るい。それは太陽の光ではなく、サーチライトの様な人工的な光だ。しかしそのどちらも波長が違うだけで本質的には同じである。一度その本質にまで降りて行き再び世界を見渡す時、風景は一変するのである。ノイのラスト・アルバムは、赤子のような無邪気で思考が生まれる以前の純粋さに満ちている。

III)

誰しも見てはいけない物を見たいという欲求がある。しかし見てしまって後悔する事もあるのだ。いやその期待との落差にではなく、見る事が止められなくなってしまう事にである。アモン・デュールIIとはそんなバンドである。特に1st「Phallus Dei」は混沌として未整理な分、妙に心のひだにまとわり着いて来て危うい。エキゾチシズムをくすぐる中近東風メロディー、太古の呪術的怨念に満ちたツイン・ドラム及びパーカッション、不安を呼び醒ます不協和音的オルガンやヴァイオリン、気怠く虚に木霊するコーラス、どれをとっても意識の裏側にベッタリと張り付いて離れなくなる。そして呪文のような得体の知れない言葉。「ラダマ、ラダマ、ウワカン、ウワカン」何度唱えたことか。夜の密かな就寝儀礼の内はいいが、通勤ラッシュの脱力状態の脳裏に突然浮かび上がって来るようになると完全に中毒である。

アモン・デュールIIのメロディ感覚には、こうした「だるまさんがころんだ」「つるとかめがすうべった」風の幼児体験的又は呪縛的なものが強く、それが粘着質の演奏と結び付いて生理感覚にまで浸透して行くのである。実際彼らの音は妙になまめかしく、倦怠感や嘔吐感、喪失感といったネガティヴな感覚と飛翔感や浮遊感、陶酔感といった上昇する感覚とが入り混じりながら、幻覚や幻聴、夢の記憶、既視感、誇大妄想といった精神作用を呼び起こして行くかのようである。

さらにアモン・デュールの描く世界に至っては、集団的催眠すら引き起こすかのような狂燥と凶暴性が渦巻いている。混然一体となった演奏と呻き声のような歌は、一見原始共同体の祭祀のようにも思われるが、テクノロジーと情報の張り巡らされた現代社会の窒息的状況の中で引き裂かれつつある自我の投影なのである。そんな彼らの音に痛ましさを覚えながらも陶酔してしまう私は、いつまでこちら側に踏みとどまっていられるのであろうか?

IV)

人間に係わる概念の中で最も重要に思われるのが〝時間〟という概念である。特に音楽は〝時間の芸術〟と言われる程密接した関係にある。多くの音楽は起承転結という時間の流れの上に成立しているが、民族音楽、ミニマル・ミュージックなど、自然発生的に或いは意



●クラウス・シュルツェ

図的に「始まりも終わりもない、時間的制約を取り払った」音楽も存在する。しかしそれでもなお、レコードやCDという媒体を通す限り、音楽は閉じた時間の輪の中で表現されるのである。ところで〝時間〟には時計で測られる〝物理的時間〟と人間の精神活動と密着した必ずしも物理的時間とは一致しない〝心理的時間〟がある。例えば、何かに熱中していると時間が経つのが速いとか、夢における時間経過の混乱・無秩序とかが思い浮かぶが、永遠に続く時間、一瞬の中に永遠性を内包する時間を強く感じさせるのがクラウス・シュルツェである。

シュルツェの音はミニマル・ミュージックの影響を感じさせるが、杓子定規に一つのフレーズを繰り返すのではなく、よりうつろうようなメロディ感覚が情動と結び着いた滑かさを持っている。特に生命の源である〝水〟を強く連想させるシンセサイザーやオルガンの音色が溶け合う空間を生み出し、時間さえも溶解させて行くのである。代表作の「Timewind」は果てし無い時間の流れと果てし無い時間の広がり―まさに宇宙そのものである―で気が遠くなるようなアルバムである。そしてそれは過去から現在・未来へと続く時間の一部を仮に音楽作品上に照射したものに過ぎない。全てを記憶の縁へ、忘却の彼方へと押しやってしまい、リスナーを孤独な時間の独房に迷い込ませるシュルツェの音は、その表面的な滑らかさとは裏腹に最も危険性に満ちた終りのない旅なのである。

V）

脈絡のないひとり言めいたものを書き綴って来たが、以上のようなジャーマン・ロックの印象は文中で取り上げた5つのバンド及びミュージシャンのみにとどまらず、多くのバンドに共通するイメージである事を述べておきたい。例えばOhrレーベルに残されたオムニバス・アルバムを聴いてみれば、その多様な音楽性―ジャズ、フォーク、ハード・ロック、現代音楽、ブルース、クラシック、アジテーション…―を有するにかかわらず、共通した精神的背景（ヒトラーの亡霊、サイケデリック体験）を窺わせる暗い色調で統一された怨念と衝動が渦巻いている事がわかるのである。そして未だにそうした怨念や衝動に呪縛されている自分に気づいてしまうのだが、ある若い友人が、グル・グルやアモン・デュールを〝カッコイイ〟とストレートに表現するのを聞くと、うらやましくもあり、寂しさも感じてしまうのである。

OHR







PILZ



KOSMISCHE



ドイツ・プログレッシヴ・ロックの中枢を形成していた3レーベル。ウルリッヒ・カイザーによって運営されたこのレーベル群の詳細を知ることは、ジャーマン・ロックの核に近づく、メタ・フィジカルな幻想の旅である。

●山本雅幸

'70年代初期のジャーマン・ロック・シーンは、ヨーロッパ独特の伝統的土壌と歴史的必然性からなる精神革命ムーヴメントによって様々なオリジナリティーあふれる作品群を生んだ。それらは、'60年代におけるドイツのフリー・ジャズ・シーンがそうであったように、マイナー・レーベルによる活発なレコーディングから始まり、本来のドイツ・ゲルマン民族の持つ感性や理性を重視した、いわゆる知的探究心に満ちた、新しい音楽であった。

〝新しい音楽〞＝ドイツ・ミュージック・シーンは、このドイツ・マイナー・ジャズ・シーンを原動力として息づき、さらにエレクトロニクスによる新しい音楽的手法（現代音楽）を伴って、一大アンダーグラウンド・ミュージック・シーンを形成した。しかし、何と言っても、'60年代後半にアメリカ、イギリスから飛火してきたサイケデリック・ムーヴメントの影響がシーンの拡大、活性化に一番大きく反映した。

民族音楽、クラシック音楽、現代音楽という豊かな音楽的土壌に育まれてきたドイツのミュージック・シーンは、このムーヴメントの影響によって、様々なフォルムを展開させていき、ドイツ独自の音楽を確立していく。この時期、シュールレアリズム運動とドラッグ体験等に代表される人間精神の拡大を表現の主要テーマに置いたアーティスト達は、それぞれ個性的な意識の変革を求めていった。とりわけ、ミュージック・シーンにおいては、実験的で精神主義的な音楽を主流に、従来のジャズ、ブルース、ポップスといったジャンルにとらわれない、自由な意識に根ざした独自の音楽性を築こうとするグループが、多く輩出した。そして、ドイツ特有の国民的文化風土に支えられた表現主義、無限の宇宙的神秘に対して抱いた、人間精神の憧れであるドイツ・ロマン主義を源流に、'70年代初期のジャーマン・ロック・シーンの一大マンダラ絵巻を残したのが、ロルフ・ウルリッヒ・カイザー率いるOhr－Pilzプロダクションであった。

Ohr－Pilzプロダクションは、'68年に、ロルフ・ウルリッヒ・カイザー（以下R・U・カイザー）の主宰で、ドイツのエッセンにて「エッセン・インターナショナル・ソング・フェスティバル」というコンサートを開いた。この時に、フランク・ザッパ他、サンフランシスコのミュージシャン達が招かれ、ドイツのアンダーグラウンドなグループに衝撃的な影響を与えたという。新しいポップ・ミュージックを模索、確立するにあたって、当時のサンフランシスコのアンダーグラウンド・シーン、とりわけF・ザッパは予言者的存在に見えたのであろう。R・U・カイザーは、当時のインタヴューで、ジャズ、ブルース、ポップス、エレクトリック・ミュージックというジャンルを超えた新しい音楽の創製の手がかりとして、F・ザッパの存在を大きく扱っている。また、社会の変化に伴う価値観及び認識を音楽という一つの表現方法で、様々な形態の音楽性を、彼ら（ドイツのアンダーグラウンド・グループ）によって伝達されることを期待し、その手段としてOhrレーベルを発足したという事を述べている。つまり、プロダクションの主要命題は、音楽は、歌のみによって伝

えられるのではない…ということであった。それは例えば、スローガンをかかげて聴衆を煽動するシュプレヒコールであったり、教会で合唱する讃美歌であったり、詩の朗読であったり、マントラの吟唱であったりするのだ。このように様々な表現形態を伴うことによって生まれた伝達方法は、当時においては新しい水準の音楽であったと言えよう。

ドイツのアンダーグラウンド・グループは、こうしてR・U・カイザーのOhrレーベルに籍を置くことになり、アルバム制作にあたってはグループ及び、ミュージシャン達にプロデュース全般が任せられた。オリジナリティあふれるミュージシャン達は、Ohrレーベルのもとで自由にレコーディング・コンセプトを活かし、それぞれの方向性を追求していき、'70年代初期のジャーマン・ロック・シーンに貴重な形跡を残していったのである。

Ohr－Pilzプロダクションは、'70年から'74年の間に極めて加速度的にアルバムをリリースしていった。OhrはMetronome、PilzはBASF傘下に、その全容はOhr 32枚（0番から始まって33番まで、1枚は欠番になっている）、Pilz 20枚となっている。また、それぞれシングルもリリースしているが、それらの展開も短期間で終結し、一部のグループ、ミュージシャン達は、Ohrレーベルの落とし子Ohr－Kosmischeに参画していくことになる。

まず、レーベルの発足が時期的に一番早かったOhrのライン・ナップから簡単に紹介してみることにしよう。

Ohr（OMM56…）の0番にリリースされたのが、FLOH DE



●FLOH DE COLOGNE

COLOGNEのセカンド・アルバムにあたる「Fliessbandbabys Beat-Shaw」。変則的なハード・ロックと威圧感のあるドイツ語で罵倒するようなヴォーカルを特徴とする政治色の強いグループで、Ohrに4枚のアルバムを残している。サード・アルバムの「Rockoper Profitgeier」（LIVE）はOhr－Pilzプロダクション唯一のカラー・レコードで、透明に近い真紅色（初回プレス）と淡いローズピンク（セカンド・プレス）の2種類がある。シングルもOhr時代に3枚残している。

Ohr

LP

OMM（5）	56000	FLOH DE COLOGNE	Fliessbandbabys Beat-Show（'70）
OMM	56001	LIMBUS 4	Mandalas（'70）
OMM	56002	BERND WITTHÜSER	Lieder Von Vampiren, Nonen Und Toten（'70）
OMM	56003	EMBRYO	Opal（'70）
OMM（5）	56004	TANGERINE DREAM	Electronic Meditation（'70）
OMM（5）	56005	GURU GURU	UFO（'70）
OMM	56006	V.A.	Ohrenschmaus（'70）
OMM（5）	56007	ANNEXUS QUAM	Osmose（'70）
OMM	56008	AMON DÜÜL	Paradies Wärts Düül（'70）
OMM	56009	ROGER BUNN	Peice Of Mind（'71）
OMM（5）	56010	FLOH DE COLOGNE	Rockoper Profitgeier（'71）
OMM	56011	PAUL UND LIMPE FUCHS	Anima Sound Stürmischer Himmel（'71）
OMM（5）	56012	TANGERINE DREAM	Alpha Centauri（'71）
OMM（5）	56013	ASH RA TEMPEL	Ash Ra Tempel（'71）
OMM（5）	56014	XHOL	Hau Ruck（'71）
OMM（5）	56015	BIRTH CONTROL	Operation（'71）
OMM（5）	56016	WITTHÜSER & WESTRUPP	Trips Und Traüme（'71）
OMM（5）	56017	GURU GURU	Hinten（'71）
OMM	556018	V.A.	Mitten Ins Ohr（'71）
OMM	556019	MYTHOS	Mythos（'71）
OMM	556020	ASH RA TEMPEL	Schwingungen（'72）
OMM	556021	TANGERINE DREAM	Zeit（'72）
OMM	556022	KLAUS SCHULZE	Irrlicht（'72）
OMM	556023	WALPURGIS	Queen Of Saba（'72）
OMM	556024	XHOL	Motherfuckers Gmbh & Co. KG（'72）
OMM	556025	BIRTH CONTROL	Believe In The Pill（'73）
OMM	556027	V.A.	Kosmische Musik（'72）
OMM	556028	ANNEXUS QUAM	Beziehungen（'72）
OMM	556029	FLOH DE COLOGNE	Lucky Strike（'72）
OMM	556030	ARNO CLAUSS	An Tante Gertie In Zons Am Rhein（'72）
OMM	556031	TANGERINE DREAM	Atem（'72）
OMM	556032	ASH RA TEMPEL	Join Inn（'72）
OMM	556033	FLOH DE COLOGNE	Geier Symphonie（'72）

Ohr Today

OMM	560001	IHRE KINDER	Live 82（'82）
OMM	560002	BIRTH CONTROL	Bäng（'83）
OMM	560003	REBEL	Stargazer（'83）
OMM	580001	ANIMA	Der Regt Mich Auf（'82）

Single

OS 57000 AMON DÜÜL：Eternal Flow／Paramechanical World（'70）
OS 57001 FLOH DE COLOGNE:St. Pauli, Du Mein Loch Zur Welt／Bruno-Leid（'70）
OS 57002 WITTHÜSER & WESTRUPP：Einst Kommt Di Nacht／Wer Schwimmt Dort（'70）
OS 57003 BIRTH CONTROL:Hope／Rollin（'70）
OS 57004 WITTHÜSER & WESTRUPP：Nimm Einen Joint, Mein Freund／Lasst Uns Auf Die Reise Gehen（'71）
OS 57005 BIRTH CONTROL:The Work Is Done／Flesh And Blood（'71）
OS 57006 TANGERINE DREAM:Ultima Thule Part 1／Part 2（'71）
OS 57007 BIRTH CONTROL:What's Your Name／Believe In The Pill（'72）
OS 57008 GOLGATHA:Dies Irae／Children's Game（'72）
OS 57009 GLOH DE COLOGNE:Emil In Erkenschwiek／Zahlen Musst Du（'72）
OS 57011 ARNO CLAUSS：Karlchen／Manchen Leuten Möcht Ich Gerne In Die Fresse Schlagen
OS 57012 FLOH DE COLOGNE：Der Löwenthaler／Bayrisches Heimatlied（'73）

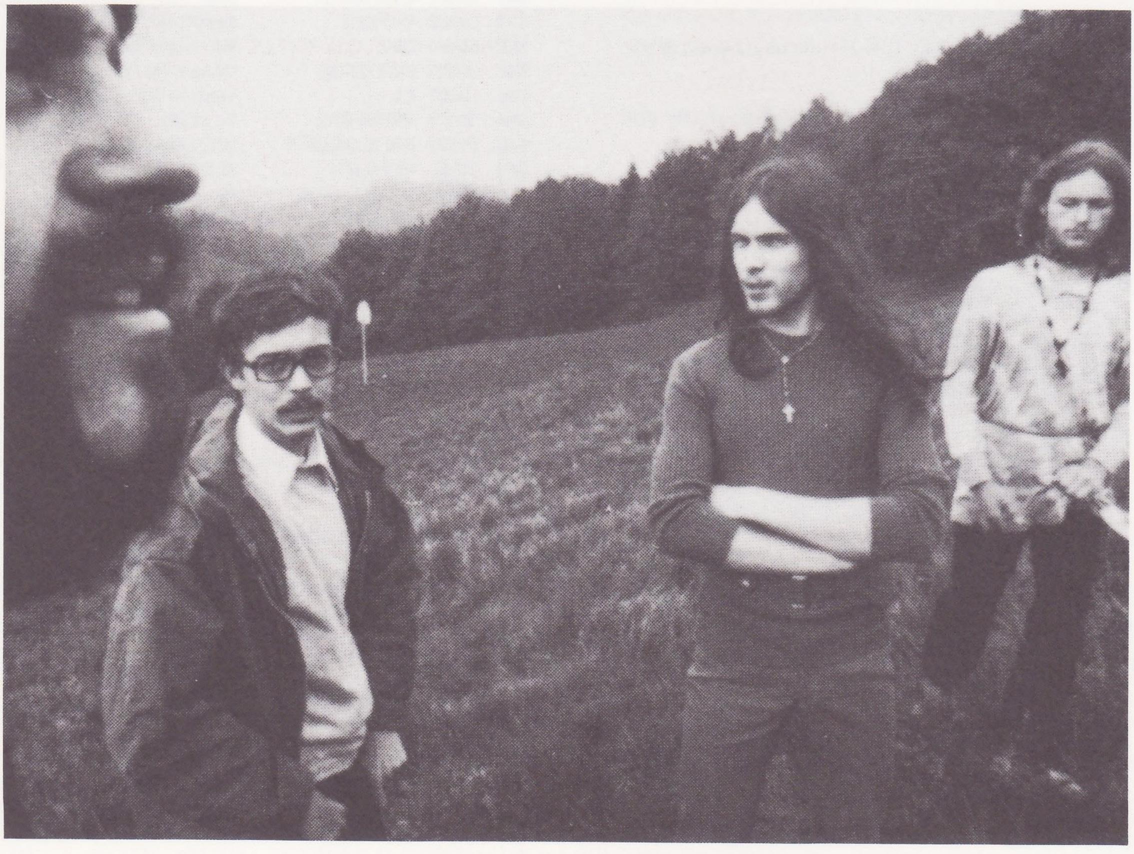
また、このグループは、Ohr亡きあとも、シーンに残り、Planeレーベルから3枚のアルバムを発表している。

'68年に起こったアモン・デュールの分裂劇が、'70年代ジャーマン・ロック・シーン屈指のヘヴィ級インターナショナル・グループ、アモン・デュールⅡを生んだことは周知の事実だが、オリジナル・メンバーによるAMON DÜÜL Ⅰは'70年に「Paradieswarts Düül」を発表した。Metronome時代の攻撃的なサイケデリック・サウンドに比べ、このアルバムは、極めて単調なリズムによる静かなサウンドに変わり、東洋的な無常感さえ漂っている。そこでは、彼らの思想的なテーマ(政治的イデオロギー)が、穏やかで安らぎに満ちた即興演奏に乗って、実に旨く表現されている。"Love Is Peace"——それは時代の象徴でもあった。アルバムの他に未発表テイクのシングルを1枚Ohrから出しているが、アルバム同様、オリジナル・アモン・デュールを知る貴重な手がかりと言えるだろう。

ANNEXUS QUAMのファースト・アルバム、「Osmose」は、タンジェリン・ドリーム、アシュ・ラ・テンペル、グル・グル等の初期の作品と並んで、Ohrレーベルの代表的なアルバムの一つと言っていいであろう。そのサウンドは、Ohrレーベルのほとんどのグループがそうであるように、フリー・ミュージック的な要素を強く有している。ジャケットは、サイケデリックに彩られたイラストで、その、手の込んだ変形デザインは、当時ならではの代物である。また、このグループは、'70年に来日し、万国博のドイツ会場をメインに金沢と富山でコンサートを開いている。たぶん、シュトックハウゼンあたりに代表される現代音楽系列のミュージシャンとして紹介されたのであろうが、当時、日本国内では三波春夫の歌が鳴り響き、岡本太郎芸術が爆発していた。Ohrレーベルも、しっかりドイツの国から、コンニチワと浸透しつつあったのだ。

XHOLはXHOL CARAVAN(HansaレーベルからLPとシングルを1枚ずつ出している)を前身とするフリー・ジャズ的なサウンドにブルース色を加えたアヴァンギャルド・ロックである。Ohrに2枚のアルバムを残して消えたグループだが、ラ

●ANNEXUS QUAM





●AMON DÜÜL



●LIMBUS

イヴを収録したファースト('70年)「Hauruk」はエネルギッシュな迫力に満ちたテンションの高い内容である。演奏後、ライヴハウス内に響きわたるディープ・パープルのレコードが当時の状況を反映していて印象深い。

FLOH DE COLOGNE同様、'70年代後半まで意欲的に活動していたBIRTH CONTROLは、典型的なハード・ロック・タイプのグループである。Metronomeレーベルをデビューに、Ohr→CBS→Brainと活動の場を展開していったがOhr時代に発表したアルバム「Operation」はハード・ロックとは少し違った要素を盛り込んでいて面白い。B面ラストの11分にも及ぶ"Let Us Do It Now"は、Ohrレーベルでは珍しくクラシカルなサウンドを醸し出している名曲である。また、このグループは、'80年代初頭、POP IMPORTレーベルと同時期に発足したOHR TODAYレーベル(4枚のアルバムをリリース)から1枚アルバムを発表している。

ROGER BUNNは、イギリスの作曲家であり、また詩人兼ギタリストという、いわゆる当時のヒッピー文化に代表されるフォーク・シンガーである。唯一のアルバム「Piece Of Mind」はWITTHÜSER&WESTRUPPの民族音楽的な味わいとは違ったメディテイショナルなフォーク・サウンドで所々にオーケストレイションによるプログレッシヴ的要素も備えた内容である。Ohr屈指のレア・アイテムでもある。

また、Ohrレーベルにはダブル・アルバムのオムニバスが3枚ある。それぞれ初期、中期、後期のグループを詳しく紹介したもので、レーベルの変遷を見事に物語った内容に編集してある。1作目「Ohrenschmaus」には、前述のアモン・デュールの未発表シングル、3作目の「Kosmische Musik」ではアシュ・ラ・テンペルとクラウス・シュルツェのLP未収録曲がそれぞれ収録してあって、どれも単なるオムニバスを超えた興味深い内容になっている。

他に、MYTHOS、WALPURGIS、LIMBUS 4等、Ohrレーベルならではのアンダーグラウンド・グループが当時多く存在したが、それらは、ほとんど'70年代初期のシーンで燃え尽きてしまった。しかしタンジェリン・ドリーム、アシュ・ラ・テンペル、グル・グル、エンブリヨといった有名なグループとともに、それらのグループの残した形跡は貴重だ。それは、決してサウンド面だけで理解されるものではなく、ジャーマン・ロック・シーンの全盛期を形成する一つの実験的な精神史でもあったのだ。

蛇足ながら、Ohrレーベルの初期(0番から4番まで)に発表されたアルバムの初回ジャケットには、真ん中あたりに切り込みが入っていて、そこには、その昔、富山の薬売りのオジサンにもらったようなゴム製のフーセンがオマケで付いていた。

Ohrレーベルと、ほぼ平行してPilzレーベルも'70年代初期のジャーマン・ロック・シーンに独創的なアルバムを多く出している。先発隊のアヴァンギャルド・ファミリーOhrに比べて全般的にフォーク、トラディショナルなサウンドを有するグループが多く、中でもHÖLDERLIN、BROSELMASCHINE、EMTIDIなどはジャーマン・ロック・シーン屈指の名作を残した。これらのグループは女性ヴォーカルのトラディショナルな情趣にメロディアスなメロトロンを加えた深遠な美の世界を思わせるサウンド空間を現出させている。まさに、ドイツきってのロマン主義的な色合いに満ちたサウンドだと言えよう。

WITTHÜSER & WESTRUPPは、ヨーロッパの民族音楽の中にドラッグ・カルチャーを彩ったメディテイショナルなサウンドをミックスさせた二人組のグループである。Ohrレーベルから発表した2枚のアルバムは、どちらもフォルクス・リートの域を出ない地味なものであったが、Pilzレーベルに残し

●HÖLDERLIN

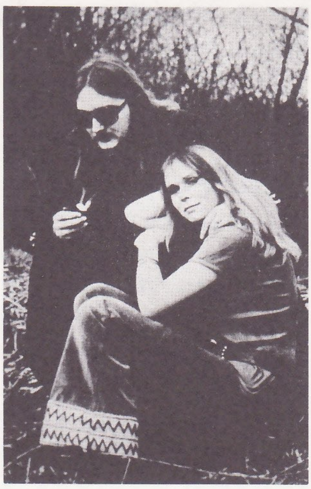


た2枚のアルバムは、多彩なミュージシャンの顔ぶれも揃い、彼らのサウンド・コンセプトを十分に活かした傑作である。'71年に発表したサード・アルバム「Der Jesuspilz」は「福音書の音楽」というサブ・タイトルがつけられた、宗教色の強いメディテイショナルなコスミック・ミュージックである。当時のドラッグ・カルチャーの洗礼を全身に受けた極めてスピリチュアルなサウンド・コンセプトを全面に打ち出した内容と言えよう。彼らは、このサウンド・コンセプトを携えて各地の教会を回り、コスミック信者たちの布教活動に専念したという。それに続く「Bauer Plath」では、ヴァレンシュタインの全面的な協力のもとに、メロトロンを大々的にフィーチャーしたプログレッシヴ・サウンドになっている。また、このグループは4枚のシングルの他にブートレッグも'71年に出されている。

FLUTE & VOICEもメディテイショナルなフォーク・タイプのグループで、当時シーンに多く見られた東洋的志向の強い内容のアルバム「Imaginations Of Light」をPilzから出している。このアルバムは、かつてテイチクより発売されたことがある。

Pilzレーベルには、トラディショナルな傾向のグループの

●EMTIDI



●BRÖSELMASCHINE



Pilz

LP

20 21100-2	BRöSELMASCHINE	Bröselmachine ('71)
20 21090-1	JOY UNLIMITED	Schmetterlinge ('71)
20 20114-7	DIES IRAE	First ('71)
20 21088-2	FLUTE & VOICE	Flute & Voice ('71)
20 21095-2	ARDO DOMBEC	Ardo Dombec ('71)
20 21098-7	WITTHÜSER & WESTRUPP	Der Jesus Pilz ('71)
20 21099-5	RUFUS ZUPHALL	Phallobst ('71)
20 21102-9	VIRUS	Thoughts ('71)
20 21103-7	MCCHURCH SOUNDROOM	Delusion ('71)
20 21114-2	V.A.	Heavy Christmas ('71)
20 21276-9	POPOL VUH	In Den Gärten Pharaos ('71)
20 21314-5	HÖLDERLIN	Hölderlin's Traum ('72)
20 29064-6	WALLENSTEIN	Blitzkrieg ('72)
20 29077-8	EMTIDI	Saat ('72)
20 29097-2	ANIMA	Anima ('72)
20 29113-8	WALLENSTEIN	Mother Universe ('72)
20 29115-4	WITTHÜSER & WESTRUPP	Bauer Plath ('72)
20 29116-2	V.A.	Rapunzel ('72)
20 29131-6	J. BERKERS	Unterwegs ('72)
20 29143-1	POPOL VUH	Hosianna Mantra ('72)

Single

0519041-7 WITTHÜSER & WESTRUPP:Die Erieuchtung / Die Aussendung ('71)
0519134-0 WITTHÜSER & WESTRUPP:Bauer Plath / Das Lied Der Liebe ('72)
0511106-1 DIES IRAE:Lucifer / Tired ('71)
0511101-0 VIRUS:King Heroin / Take Your Thoughts ('71)
0511556-3 JOY UNLIMITED:Early Morning Moanin / Proud Angelina ('72)
0519128-6 JERRY BERKERS:Na Na Tschu Tschu Tschu / Es Wird Morgen Vorbei Sein ('72)

他に正統派プログレッシヴ的要素の強いグループも存在した。WALLENSTEINは'71年にPilzでデビューし、Ohr-Kosmischeレーベルを経て'70年代後半の商業レベルにうまく迎合したグループである。リーダーでキーボード奏者のユルゲン・ドラーゼは、幼い頃からベートーベンやバッハ等、自国のクラシック音楽に親しみ、研究したという。また、'72年に、『オルガニザツィオーン・ヴァレンシュタイン』を組織し、音楽の他に、芸術、科学、文学等の分野にも活動の範囲を拡げていった。グループ名「ヴァレンシュタイン」とは、ドイツ・ロマン派の文豪シラーの戯曲名からとったものである。また、当初はグループ名をBlitzkreigと名のっていたが、同名のグループがロンドンに存在したためヴァレンシュタインと改名せざるを得なかったという。そして、Blitzkreigは、そのままファースト・アルバムのタイトルに使われることになった。その"電撃戦"を思わせる息をもつかないスピーディでヘヴィなサウンドは、Pilzレーベルの中でも、ひときわ光彩を放っている。'72年に発表されたセカンド・アルバム、「Mother Universe」では伝統的なクラシック色を随所に散りばめた壮大なシンフォニック的サウンドになっている。母なる宇宙に想いを馳せて甘く



●WITTHÜSER & WESTRUPP



●RUFUS ZUPHALL



●WALLENSTEIN

語りかけるようなユルゲン・ドラーゼのヴォーカルが印象深いこのアルバムは、ジャケット・デザインに使われたユルゲンのおばあちゃんに捧げられたものであろう。このクラシカルなコンセプトは、Ohr－Kosmischeから'73年に発表された「Cosmic Century」で一気に開花するが、4作目リリース後、Ohr－Pilzプロダクションの消滅と同時に、オリジナル・ヴァレンシュタインは解体した。'72年にベーシストのジェリー・ベイカースがソロ・アルバムをPilzから出しているが、バック・ミュージシャンはヴァレンシュタインの面々である。独語のヴォーカルが何とも味わい深い。

Pilzレーベルでブリティッシュ・ロックの影響を受けたグループと言えば、JOY UNLIMITEDが、その代表格であるが、他にもPilzならではの異色グループが存在した。ブリティッシュ・ジャズの持つアヴァンギャルド的側面をサウンドにうまく取り入れたRUFUS ZUPHALLやARDO DOMBEC、ブリティッシュ的なオルガンの響き、美しいフルートの音色が印象的なMCCHURCH SOUNDROOMなどである。

Pilzで最も有名かつ独特の美的世界を構築しているアルバムと言えばPOPOL VUHのサード・アルバムにあたる「Hosianna Mantra」であろう。

ポポル・ヴーの音楽性は、リーダーであるフロリアン・フリッケの音楽体験的な精神史を如実に物語ったものだ。彼は14才までフライブルグの音楽アカデミーで学び、その後ミュンヘンのRudolf Hindemithに師事するが、19才で全てを断念する。音楽に自分の将来性を見いだせないまま、25才までは、"ただ生きているだけだった"という日々を送る。そして、自分の中にある音楽的な新しい方向性を見つけ出すきっかけとなったのが、ムーグ・シンセサイザーとの出会いであった。フロリアン・フリッケの、エレクトロニクスと民族音楽の融合による新しい音楽観は、こうしてポポル・ヴーのファースト「Affenstunde」(Libertyレーベル)を生み出した。また、サウンド的に、その延長線上にあるセカンド・アルバム「In Den Gärten Pharaos」(Pilzレーベル)ではポポル・ヴーの持つ厳粛で神秘的な美の世界を垣間みせている。フロリアンは、もともと叙事詩や神話をヒントに多くの音楽的アイデアをひらめかしていた。'72年に発表された「ホシアナ・マントラ」は、彼が友人からもらった1冊の旧約聖書(ユダヤ人哲学者、Martin Buber翻訳の…)との出会いによって生まれた

ものである。聖書をモチーフにした新しいポポル・ヴーのサウンドは、以後Ohr-Kosmischeからのアルバムを始めとして様々な作品に反映されているが、「ホシアナ・マントラ」は、フロリアンの音楽的感性が最も美しい結晶となって表れた作品である。彼にとって音楽とは、考古学と哲学とが必然的に伴うものなのであった−−。

ちなみに、このアルバム以降、ポポル・ヴーの重要なサウンド・エッセンスとなる韓国人女性ヴォーカリストDjong Yunは、ミュンヘン・オリンピックのためのオペラを書いた有名な作曲家Isan Yunの娘である。

Ohrレーベル同様、Pilzにもオムニバス形式の作品が2枚ある。1枚は「Rapunzel」というドイツ・ロマン主義文学の絵本から抜け出たようなタイトルのベスト・テイク集。ヘルダーリン、エムティディ、ヴァレンシュタイン等のグループのトラディショナルなテイクのみ収録してある。いわば、Pilzレーベル紹介のための良質なマニュアルといった内容である。各グループを詳しく紹介したリーフレットも付いている。もう1枚は、'71年にBASFレーベル協力のもとにリリースされた「Heavy Christmas」。Joy Unlimited、Virus、Dies Irae、Libido、Ardo Dombec、Flute & Voice、Marcelといった7グループによる「クリスマス・ソング集」なのであるが、静かなホワイト・クリスマスの夜には全く不向きの、どれも狂おしい演奏によるヘヴィそのものの内容になっている。曲は全て、このアルバムのために書かれたもので、オムニバスでありながら非常に個性的なアルバムだと言える。Pilz系以外のグループについて詳しくは不明だが、MarcelはMarcel Schaarという名のミュージシャンのことでBASFレーベルからオーケストラを使ったメディテイショナルなトラッド風のアルバム「Dreams Consumed」を出している。また、LibidoはAchim Reichelを含むスタジオ・ミュージシャンによるグループらしい。

Ohr-Pilzプロダクションの存続が危ぶまれていた時期、R・U・カイザーはアシュ・ラ・テンペル、クラウス・シュルツェ、ヴァレンシュタイン等のメンバーと共に新たな旅立ちに向かった。R・U・カイザーは、それらのミュージシャン達に自分のスタジオを自由に使わせ演奏させた。そして、当時ドイツでは最も録音技術の設備に優れていたディエルクス・スタジオを彼らに紹介し、そこでも自由にセッションができるように援助したのである。こうして、Ohr-Kosmische Musik一連のアルバムが、R・U・カイザーの独断的なプロデュースによってリリースされた。また、このシリーズでは、独自のサウンド・コンセプトを確立していったヴァレンシュタインの「Cosmic Century」やポポル・ヴーの「Einsjäger Und Siebenjäger」といった大傑作もリリースされた。ちなみに、シリーズ11番目にあたる作品「Cosmic Jokers/Sci Fi Party」のジャケットに、「おお、我がコスミック・ミュージックよ万歳!!」と得意満面な顔をして登場しているオジサンがR・U・カイザーである。アシュ・ラ・テンペルの初期作品を含む、Ohr-Kosmischeレーベルのアルバムは、ほぼ同時期にフランスとイタリアからもリリースされた。

このレーベルが生まれた背景には、ドラッグ・カルチャー真っただ中でのティモシー・リアリー(以下T・リアリー)との交流が何よりも大きく絡んでいた。この時期、R・U・カイザーは、LSDの予言者と呼ばれていた、元ハーバード大学心理学教授T・リアリーとアシュ・ラ・テンペルの橋渡しもしている。

スイスに亡命中のT・リアリーのもとへ、自分たちのファースト・アルバムを手土産にしたR・U・カイザーの使者アシュ・ラ・テンペルの一行が訪れた。彼らは、そのお返しに清涼飲料水(7UP)のビンを受けとった。彼らは、それを回し飲みし……空前絶後のライヴを行った−−と、まあ劇的な出会いは、こんな風であったろう。Ohr-Kosmischeの1番「Seven Up」には、T・リアリーを迎えてのスタジオ・ライヴとベルン・フェスティバルでのライヴが収録されている。「ワルプルギスの夜」と題されたこのライヴでは、マニュエル・ゴッチング、ハルトムート・エンケ、ロジといったメンバーに多彩なアーティスト達が加わり、魔女の膏薬被験者集団さながらの乱痴気騒ぎをくり広げている。また、Ohrレーベル最後の砦にあたるアシュ・ラ・テンペルの「Join Inn」では、M・ゴッチングのエネルギーの源泉である女性ローゼマリー・ミューラー(ロジ)がT・レアリーとの出会いを、やさしい穏やかなヴォイスで静かに語っている。これはクラウス・シュルツェがアシュ・ラ・テンペルのオリジナル・メンバーとして参加した最後のアルバムであり、'72年の12月に制作された。また、K・シュルツェはシンセサ

Kosmische

KK 58001	ASH RA EMPEL	Seven Up ('73)
KK 58002	SERGIUS GOLOWIN	Lord Krishna Von Goloka ('73)
KK 58003	WALTER WEGMÜLLER	Tarot ('73)
KM 58004	WITTHÜSER & WESTRUPP	Live 68-73 ('73)
KM 58005	KLAUS SCHULZE	Cyborg ('73)
KM 58006	WALLENSTEIN	Cosmic Century ('73)
KM 58007	ASH RA TEMPEL	Starring Rosi ('73)
KM 58008	COSMIC JOKERS	Cosmic Jokers ('73)
KM 58009	POPOL VUH	Seligpriesung ('75)
KM 58010	COSMIC JOKERS	Galactic Supermarket ('74)
KM 58011	COSMIC JOKERS	Sci Fi Party ('74)
KM 58012	COSMIC JOKERS	Gilles Zeitschiff ('74)
KM 58013	COSMIC JOKERS	Planeten Sit-In ('74)
KM 58014	WALLENSTEIN	Stories Songs & Symphonies ('75)
KM 58015	ASH RA TEMPEL	Inventions For Electric Guitar ('74)
KM 58016	MYTHOS	Dreamlab ('75)
KM 58017	POPOL VUH	Einsjäger Und Siebenjäger ('75)

イザーの他にパーカッションも担当し、大作「Tarot」の制作と並行して行われたセッションでもある。H・エンケは、このアルバムを最後にシーンから消えていった。

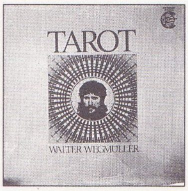
「7UP」に続くOhr−Kosmischeの初期の作品(2番と3番)は、さらにコスミック・クォーリーズの面々とT・レアリー、及びスイスの芸術家との密接な交友関係を物語っていて、サウンド面以外にも興味深いアルバムである。

Ohr−Kosmischeの2番には、ベルンの作家ゼルギウス・ゴロヴィンが「Lord Krishna Von Goloka」というアルバムで登場し、3番の「Tarot」という一大セッション・アルバムでは、バーゼル出身の画家、ヴォルター・ヴェグミューラーが中心人物となっている。彼らは、やはりスイス人である、チューリヒの画家H・R・ギーガーと共に、'71年に『T・リアリーの亡命庇護権を与える運動グループ』という組織を結成し、T・リアリーの亡命を計画し、遂行させた。この運動の内容は、リアリーのLSD人体実験を非難する者に対して、リアリー側について弁護することであり、またLSDにおける精神医学の効用を、リアリーが自由に実験する権利を得る……等といったことを主要なテーマとしたものであった。また、T・リアリーの文化的な功績であるインド文化及びインディアンの研究も、このグループは大きく評価し、それらは彼らと交流があったミュージシャン達にも影響を与えていった。S・ゴロヴィン名義のアルバム「Lord Krishna Von Goloka」に見られる東洋的風土志向のサウンド・コンセプトは、その代表的なものであるといえよう。実は、この人物、H・R・ギーガーとは親友同士で、当時、映画作家との共作によって『High』という題名で、ギーガーの絵についてのドキュメンタリー映画を制作している。ダブル・アルバム「Tarot」の主役、W・ヴェグミューラーは、空間演出的な作品を制作する傍ら、イラストも多く描いている。コスミック・シリーズでは、「Tarot」に付いている大アルカナ22枚のカード・デザイン画を始めとして、「Seven Up」のダブル・ジャケット用のイラスト、及び「Lord Krishna Von Goloka」のインナースリーヴ等、初期のジャケット・デザインを手掛けている。どことなく神話的で幻想美術を思わせる、その独特な画風は、LSD体験によるものかどうかはわからないが一見の価値のある異様な色彩感を秘めている。タロットは、〝魔術師〟R・U・カイザーの幻出させたコスミック・ミュージシャン〝愚者〟総出演による、シリーズの中でも極めて完成度の高い一大コンセプト・アルバムである。コスミック・クォーリーズのアーティスト達は、ドイツとスイスをつなぐ文化圏から、地球大気圏外の宇宙に意識の解放を叫んだ。銀河の彼方に爆発する光の群のように、ジャーマン・ロック・シーン全盛期にきらめいたそれらミュージシャン達の活動は、単にLSDによる様々な夢遊体験(音楽的感性の追求)を試みただけではなく、当時ならではの社会認識に束縛された肉体の可能な限りの解放をT・リアリーとともに体験した旅であった。伝統的音楽の歴史とドイツ人気質のひたむきな探究心から一大ムーヴメントをなしていった、夢と冒険とロマンにあふれていた'70年代初期のジャーマン・ロック・シーン……R・U・カイザーのOhr−Pilz−Kosmischeレーベルの様々な活動が、マイナーでありながら、後のジャーマン・ロック・シーンの方向性を決定する大きな要因となったのは言うまでもない。



SERGIUS GOLOWIN
Lord Krishna Von Goloka
LP/Kosmische Musik KK58.002 '73年

ヴァレンシュタインのジェリー・バーカーズ、ユルゲン・ドラゼ、W&W、クラウス・シュルツェ、ヨールグ・ミエルケが奏するギター、ベース、ピアノ、メロトロン、シンセサイザー、フルート、タブラ、コンガ等、様々な楽器を駆使しての摑み所のない混沌とした夢幻的な音の流れの上をエコー処理されたドイツ語による語りが響き渡るといった宗教的な雰囲気をも加味した本作、ゼルギウス・ゴロヴィンなる詳細不明人物の名義作である。内ジャケットやアルバム・タイトルからもユートピア指向が伺え全体にオルガンとアコースティック・ギターの響きが印象的であるがA②におけるメロトロンによるコーラスを交えての神秘的空間は白眉。プロデュースはロルフ・ウルリッヒ・カイザー。コスミッシェ系サウンドの変種。(松本)



WARTER WEGMÜLLER
Tarot
LP /Kosmische Musik KK58.003 '72年
CD/(Fr.)Spalax Music BOX 791

ロルフ=ウルリッヒ・カイザー主催するコスミッシェ・レーベルのミュージシャン等のセッション・アルバムでヴァルター・ヴェグミュラーのために集まった友人達のレコードである—そういえばアシュ・ラ・テンペルのロジも同姓だった—。ヴァレンシュタインからドラゼ、バーカーズ、グロスコフ、アシュ・ラ・テンペルからゴッチングとエンケ、W&Wのヴェストルップそしてシュルツェが参加している。音は「コスミック・ジョーカーズ」等の一連のサウンドと同系であるが曲としての完成度は保たれている。タロットカードにそった22曲から成りヴェグミュラーの詩(一部シュルツェなど)がその上で読まれるといった内容である。ブロマイドとタロットカード付。各ミュージシャンの個性差が曲に反映し面白い。(嶋田)



V. A
The Cosmic Jokers
LP /Kosmische Musik KM58.008 '74年
CD/(Fr.)Spalax Music 14293

一連のコズミックセッションものの中でも、M.ゴッチング色の強いアルバム。J.ドラセ、H.グロスコフ(ヴァレンシュタイン)、M.ゴッチング、H.エンケ、D.デァクス（アシュラテンペル）そしてシュルツェの5人がメンバー。〝宇宙の無法者〞とは多分に遊びでやったセッションなのだろうが、えてしてこういった作品にミュージシャンのルーツや個性はダイレクトに出るものである。当然LSDなどを服用しての演奏なのだろうが、各メンバーの感性が融合し反応し合いながらうねるような流れをつくり出している。アシッドによる精神の開放を信じ間主観的領野をダイレクトに体験しつつ音楽を創ろうとした、若きフロンティア達の記録である。今やビッグとなったシュルツェ、廃人となったというエンケを彼らは予想したろうか。(嶋田)



V. A
Galactic Supermarket
LP /Kosmische Musik KM58.010 '74年
CD/(Fr.)Spalax Music 14292

コズミックセッション中、「Tarot」とならぶ傑作。〝Mr Cosmic〞K.シュルツェがフューチャリングされた1枚。怒濤のようなストリング＆シンセが、浮遊感のあるアンサンブルに寄せては引いてゆく神秘的雰囲気をもったアルバム。ジャケットもマヤ風宮殿に細胞分裂した原子核が描かれ、古代宗教とテクノロジーという、カウンターカルチャー風かつサイケデリックなもの。メンバーはシュルツェの他コズミック・ジョーカーズの面々、歌詞はGillesとRosiに依っている。74年のリリースだが、もしそうなら「Black Dance」「Time Wind」を発表している頃のはず。恐らく73年、「Picture Music」の頃ではないかと思われるのだが。こういったセッション聴くと、Goプロジェクトへの参加も決して伏線のないことでもないと思える。　(嶋田)



V. A
Sci Fi Party
LP /Kosmische Musik KM58. 011 '74年
CD/(Fr.)Spalax Music 14884

これはコズミックセッションを編集し、スタジオワークを加えたオムニバスで、コズミックレーベルからの企画ものといった内容。Ohr-Cosmicのオーナーでプロデューサー、ロルフ・ウルリッヒ・カイザーの作品と云っても良いかも知れない。60年代後半から70年初頭のドイツロックシーンでOhr. Pilzレーベルを運営したカイザーは、あまり良く云われていないがやはり時代を築いた大物プロデューサーであろう。タンジェリンドリーム、グルグル、アモンデュール、エンブリオ、アシュラ、ベルダーリン、ヴァレンシュタインなど、これ程の個性の強いミュージシャンを制御するというのは唯者ではない。今古典として再評価されている事態をカイザー本人はどう思って見ているのだろう。時代の熱気を伝える一枚である。　(嶋田)



V. A
Gilles Zeitschiff
LP/Kosmische Musik KM58.012 '74年

このアルバムも編集もので、Gilleという女性のエコー処理したメッセージに導かれて、コズミックセッションの断片がコラージュされている、といった内容である。所謂サイケデリックカルチャーものだが、フラワームーブメントの脳天気さとはちょっと異なり、いわば修復不能な程にはずれうわついた感じがある。やや古いがキッチュな感触とも云おうか。恐らくPilzを設立し、あのアモンデュールに3枚目の変化を起こさせたプロデューサー、RU.カイザーの嗜好を反映していると思われる。人脈的に近くにいながらタンジェリンドリームのメンバーがこの手のセッションに全く参加していないのは、この嗜好にあわなかった故であろうか。カイザーは全んど無批判にユートピアを夢みていたのかも知れない。　(嶋田)



V. A
Planeten Sit-In
LP/Kosmische Musik KM58.013 '74年

73年発足したコスミッシェ・レーベルには8枚のセッション色の濃いアルバムがある。すなわちリリース順に「セヴン・アップ」「ロード・クリシュナ・フォン・ゴロカ」「タロット」「コスミック・ジョーカーズ」「ギャラクティック・スーパーマーケット」「サイ・ファイ・パーティー」「ギレズ・ツァイトシッフ」そして本作がそれである。第4弾以後は同一の単なるセッションを編集したものでこれらエレクトロニクスによるスペイシーなトリップ・サウンドの指揮者がカイザーであり仕掛人がティモシー・リアリーであったと言える。シンセサイザーの飛び交う中をエコー・ヴォイス、ドラム等が入り乱れる様は本作において最も変化に富みまとまりをみせている。音楽的内容よりも録音技術、音の面白さの点で評価されうる1枚。(松本)



V.A.
Kosmische Musik
LP/Ohr OMM 2/56.027 '72年

当時、注目を集めていたコズミック・ミュージックを演奏する代表的なアーティストとして、POPOL VUH、Klaus Schulze、ASH RA TEMPEL、TANGERINE DREAMの作品を集めたサンプラー。このレーベルには他にも2枚のサンプラーがあるが、本アルバムはASH RA TEMPELとKlaus Schulzeの未発表作品を含む重要なものである。また、カバー綴じ付けのブックレットには各アーティストの音楽に対する考え方などが記されており、当時の背景を知る重要な手がかりを与えてくれる。各アーティストの当レーベルにおける最良部分を収録してあり、入門用としてはうってつけのアルバムである。M C.Escherの作品を用いたカバーのセンスも良く、マスト・アイテムの1枚となっている。　(Helmut)

MAIN ARTISTS

AMON DÜÜL



AMON DÜÜL

●榎本隆一

ドイツ・ロック史の中でも5指に数えられる程重要なバンドであったにもかかわらず、これまで語られる事のあまりに少なかったAMON DÜÜL一派の軌跡を今回取りあげる事になった。1人でも多くの方に聴いてもらえる機会になればと思う。

AMON DÜÜLの連中がミュンヘンで共同生活を始めたのは'67年のことだ。彼らはその後ドイツ各地を転々としていく事になるのだが、当時の様子をブレインやスカイ・レーベルからソロ・アルバムを発表しているギタリスト、ギュンター・シッケルトから直接聞いた事があるので以下にまとめた。ギュンターはAMON DÜÜL達がベルリンにいた時に多少の交流があったようだ。

「AMON DÜÜL達はドイツ各地を転々としていた。それはとてもコミューンと呼べる程のものではなく、単に共同生活をしていたようなものだろう。'67年にベルリンでやったライヴを見たけど、音を左右のPAにガンガン飛ばして、かなりアヴァンギャルドで凄かった。」

バンドは当初Chris Karrer(g), Peter Leopold(dr), Ulrich Leopold(b), Rainer Bauer(g,vo)を中心に組まれていたのだが、翌'68年に早くも二つに分裂してしまう。といってもChrisが抜け彼が新たに自分のバンドを作ったにすぎないのだが、どうやら元々のバンドの名付け親はChrisだったようで彼のバンドもAMON DÜÜL IIを名乗った。結局後に登場するAMON DÜÜL UKを含めると、AMON DÜÜLというバンドは3つ存在した事になる。

オリジナルAMON DÜÜLはその後も残ったメンバーで活動を続け、秋にはEssener Sontag Festivalという大きなコンサートに出演、注目をうけるが、ドラマーのPeterもAMON DÜÜL IIへと移籍してしまう。ChrisやPeterの脱退は政治的活動をメインに考えるメンバーとの対立が主な原因であったようだが、皮肉な事にそのポリティカルなメンバーもバンドに最後まで残る事はなかった。

Peterを失ったバンドは'68年末に長時間に渡るレコーディング・セッションを行うが、実はオリジナルAMON DÜÜLの残した音源のほとんどはこの時のセッションによるものである。翌'69年に入ると、どちらのAMON DÜÜLもそれぞれアルバムを発表する。オリジナル・バンドはメトロノームから「Psychedelic Underground」を、IIの方はリバティーから

「Phallus Dei」をリリースした。見事なアート・ワークによるジャケットに包まれた「Psychedelic〜」は今日に至るまでドイツ・ロックを代表する一枚に数えられている。その内容は前述のレコーディング・セッションの中から最も充実した部分を抜き出し、レコーディングにかけた時間以上をトリッキーなギミック等のスタジオ・ワークに費やして作られたものだ。かつては攻撃的で過激な音の代表のように語られる事の多かったアルバムであるが聴き直す度にその音の本質的なやさしさを感じる。このアルバムのひとつのテーマは明らかに〝ドラッグ〟である。A面は〝あるトリップ〟とでも題されたような作りになっている。繰り返しを基本としながらも突然ドアが風で開き別の部屋へと音が移動したり、B面の針飛びさせたりする部分や、ラストの圧巻ともいえる混沌とした音の溶けぐあい、総体的に音の飛ばし方やセンスのよいコラージュはドラッグ(しかもアシッド)抜きには語れないだろう。又、音色でいえば耳にこびりつくようなベトベトした質感や、遠くで鳴っているような位相の使い方、オブラートで包むような雰囲気等々、聴きこむ程さまざまな顔が見えてくるアルバムである。なお同じドイツのFAUSTの1stアルバム('71年発表)もセッションをもとに緻密な編集作業をへて作られておりその共通点が興味深い。「Psychedelic〜」は'71年に「This Is Amon Düül」として、又'81年に「Minnelied」(日本盤タイトルは「恋歌」)として再発されている。

1stアルバム発表後、彼らは2ndアルバムの準備に入る(当初メトロノームとは5枚契約だったらしい)。「Collapsing-Singvögel Rückwärts & Co.」がそれだ。2ndアルバムも1st同様'68年末のレコーディング・セッションからのマテリアルをもとの音源として使っている。1stで使用された部分とは対称的に静の部分を主に用いて、やはりエフェクト処理やコラージュを多用して作られた。無自覚であることを主題にしたかのような曲の断片が唐突に分断され、リスナーにわざと印象を残させないように作ってあり、前作を凌ぐ過激な作品といえよう。1st同様'69年に発表された。

2ndアルバム発表後、政治的な活動を行ってきたメンバーはバンドを抜ける。そして'70年11月〜12月にかけてレコーディングされたのが彼らの最後の作品となった3rdアルバム「Paradies Wärts Düül」である。ここではバンドに残ったUrlich, Rainer, Rainerの妻であるEllaを中心にゲストを交え録音された。

楽園(ぱらだいす)に向かうデュールというタイトルのこのアルバムはメトロノームから離れ'70年に設立されたばかりのOHRレコードから'71年に発表された。このアルバムで彼らは大きな変化をみせた。

①ギミック等は一切使っていない　②いわゆる作曲された曲を演奏している。　③アコースティック楽器を多用している　④歌詞が英語で歌われている

このような変化は1stや2ndアルバムを評価した人達にとって許せないものがあったらしく、「日和った」「ただのフォーク」等欧米をはじめ日本でも今だに高い評価を得られない原因となっている。しかしここで見られる楽曲の出来は素晴らしく、演奏も単なる弾き語りではなくギターによる不思議なリフの繰りかえしを中心に作られており、そのサウンドは他にほとんど例を見ない独自な空間を作り出す事に成功している。このアルバム全編に漂う儚さは何に例えたらよいのだろうか。全ての音にこめられた寂寥たる情景や終末感は尋常なものではない。彼らは結成からたった3年の間にある部分を通過してしまったのだろう。ハッキリ言って1st、2ndに勝るとも劣らない作品である。

なお、このアルバムのレコーディングと前後してAMON DÜÜL IIも2ndアルバム「Yeti」を録音しているのだが、その中の〝Sandos In The Rain〟という曲で、オリジナル・デュールのRainerとUlrichがゲスト参加している。この曲は「Yeti」の中でも異色のナンバーで、「Paradies〜」と明らかに通底している。発表順でいえば「Yeti」の方が先なのだ



が、オリジナル・デュールが与えた影響の結果ではなかろうか。

〝Prardies〟--アルバムと共に彼らはシングルをリリースしている。A面はアルバムには収められなかったナンバーで、実に悲しく暗い曲調はアルバムの持ち味とはまた別のものだ。この曲は後にOHRレーベルのオムニバス「Ohrenschmaus」に収録された。B面はアルバム収録曲ではあるがテイクは全く違い、ここではよりわかりやすい、いわゆるフォーク・ロック的なアレンジがなされている。このテイクは今のところこのシングルでしか聴く事が出来ない。

オリジナルAMON DÜÜLはこの後解散し、以降おおやけな音楽活動は一切行っていないようだ。しかしその後の



'72年にBASFより未発表作品ばかりを収めた2枚組アルバム「Disaster」が発表されている。このアルバムにはメンバーやレコーディングについてのクレジットは、なされてはいないがどうやら例の'68年末のレコーディング・セッションからのもののようである。明らかに編集やミックス等なされている事から、1stを作っていく過程に出来た幾つかのヴァージョンのうちのひとつとも考えられる(あるいはメトロノームとの5枚契約の為に準備されたものかもしれない。いずれにしても解散後に新たにミックス等されたものとは考えにくいのだが、この時のレコーディングは明らかにマルチ・トラックのマスターが残っているようなので何ともいえない)。内容は1stや2ndとも違う質感の音が詰っており、彼らの作品の中では最もヘヴィーである。このアルバムでもやはり、遠くで小さく少女に喋らせてそちらに注意を引いておき、直後に突然耳元でヴォーカルが入ってくるなど、遠近感のある音作りを行っており聴くべき点の多い作品である。また、1stでもまるで幻聴のように聴こえたビートルズの"I Should Have Known Better"がより長くハッキリと収録されている。この有名な他人の曲をも、まったく自分達の曲にしてしまっている点でこのバンドの持つ極めて高いオリジナリティーを知る事が出来る。

このアルバムの他にも実は'84年にオリジナル・デュールの作品が発表されている事はほとんど知られていない。「Experimente」がそれだ。この2枚組アルバムも一切のクレジットはなく、いつどのようなメンバーによる録音かなどは一切不明である。ただ"Special Track Experience"と題された曲が1番から24番まで収録されているだけだ。発売元のタイムウィンドなるレーベルは、例えばエルヴィス・プレスリーやマリア・カラス、キンクスやヤードバーズ等のベスト盤などを発売しているところなのだが(内ジャケがその広告になっている)何故AMON DÜÜLの未発表音源を発売したのか理解に苦しむ。

その内容であるが、まずその音の良さ、クリーンさに驚かされる。彼ら独特のあの澄んだ音色が実にシャープに聴こえてくるのだ。音源は例によって'68年末のレコーディングからのものらしいが、特筆すべき事になんと加工する前のマルチからおとされたものが聴けるのである。これによって素顔のAMON DÜÜLを実にリアルに聴く事が出来る大変貴重なしろものなのだ。ここでのマテリアルは、1st、「Disaster」で使用されたと思われる部分も含んでいるように思うが、大半は使用されなかった部分である。いずれにせよ例のレコーディングでは似たようなリフを延々と何テイクも録っていたと思われ、ビートルズじゃあるまいしどこでどう使用されたかなどあまり意味のない事なのだが…。勿論このアルバムを作品として評価する事は出来ないがこのアルバムの存在によって、例えば1stアルバムがセッションの中で偶然生まれたものではなく、ある目的をもとに意図して演奏し、さらに意識的に加工、編集のうえ作り出された結果である事が良くわかる。このような性質のバンドである以上、このアルバムも単なるアウトテイク物以上のクォリティーは楽にあるし、バンドの持つ魅力を別の形で堪能する事が出来る。

以上がオリジナルAMON DÜÜLの残したマテリアルの全てと、その簡単な軌跡である。彼らは最後までバンドのような明確な形態をとる事はなかった。あくまでも彼らは共同体であったからだ。

一方その共同体からまっ先にとび出していったChrisのAMON DÜÜL IIは、その後20年以上に渡って活動を続けていく事になる。

本稿は以前筆者が他誌に発表したものをもとに加筆、訂正したものであり、内容、表現の一部が重複する事をおことわりしておきます。

AMON DÜÜL II

●Chihiro S./榎本隆一

第1章 〈誕生〉

オリジナルのAMON DÜÜLから分裂したグループ、AMON DÜÜL II(以下AD II)は'69年に「Phalls Dei」で、レコード・デビューした。当時のメンバーは以下の通りで、Karrer、Rogner、Leopoldの3人はオリジナルのAMON DÜÜLに在籍していた。

Chris Karrer : g,vln,vo
Folk-U Rogner :
Peter Leopold : dr
John Weinzierl : g,vo
Renate Knaup-Krotenschwanz : vo
Dave Anderson : b
Shrat : conga

中近東〜インド系民族音楽を取り入れ、曲のサビ等に変則拍子を用いた楽曲。エフェクトを凝らしたサウンド。ベルベット・アンダーグランドにも似た攻撃的なデカダンス。まさに〝Chaos Bringer〟とでも言うべき姿だ。AD IIとOlaf Kublerの共同プロデュースという鉄壁の体制は「Vive la Trance」まで続く。Küblerは時としてゲスト的にサックス奏者として加わることも、少なくなかった。

バンド分裂について、『政治的方向に走る者と、総合芸術にこだわる者に別れた』とも、『決定的違いが原因で別れた』とも伝えられる。ここでは、双方とも同じグループ・ネームを名乗る(オリジナルとII の違いこそあれ)という特殊な状況が生まれたことに注目したい。

グループは'70年に2枚組「Yeti」を発表。組曲的に進行する〝Soap Shop Rock〟を含む曲集的なA・B面と、モーダルなインプロヴィゼーション中心に収録したC・D面。(余談だが、当時の邦盤は、1枚物としてリリースされていた。)D-2はオリジナルのAMON DÜÜLからゲストを迎えてのセッションだが、Thomasの幽玄なフルート・プレイが印象的だ。ちなみにUlrich(b)はPeterの兄弟であるUlrich Leopoldだと思われる。

'71年に、またもや2枚組の「Tanz Der Lemminge」がリリースされる。HAWKWIND参加のために脱退したD. Andersonの代わりに、Lothar Meidをベーシストに迎えたこのアルバムの構成は前作と似ており、C・D面は即興色/



実験色の強い作品になっている。こういった大胆な2枚組を立て続けに発表できたのは、当時の彼等の評価が高かったということも要因のひとつだろうが、当時のAcid/Drug Cultureの流れの中で、どういったものがヒッピーや若者に好まれていたのかという問題とも不可分である。Trip Musicの人気投票ベスト3にTANGERINE DREAMやHAWKWINDが入るような時代だ。Grassをキメて拡大された時間感覚と弛緩しきった肉体にとって、延々と続くインプロビゼーションやサウンド・エフェクトは納得の出来る存在だ。Junkieにとって「Trip Music」はHighになるために必要不可欠な背景だ。一般的に言って、Grassの場合、一定のムードの持続は喜ばれる。

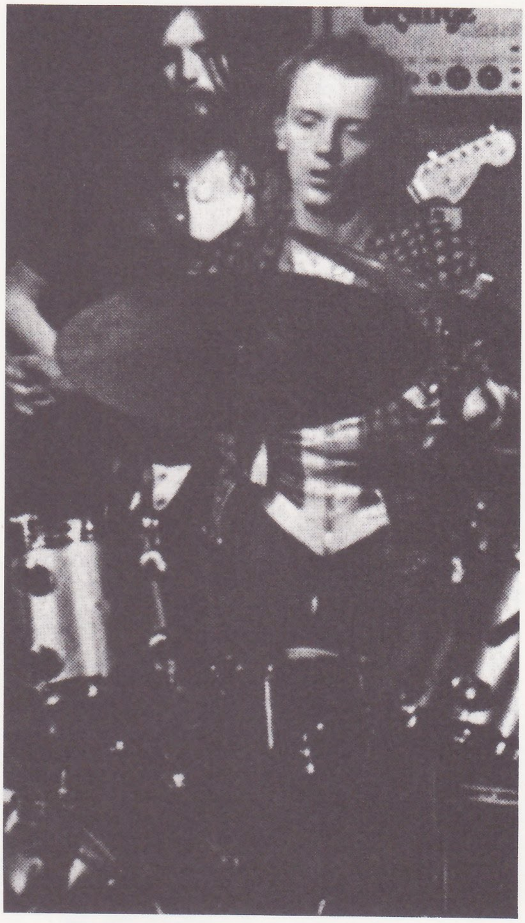
この時期の彼等は時折アコースティックなアプローチを見せるものの、本質的にはサイケデリック・バンドだったのだろうと思う。組曲風に複雑に進行する楽曲も、一つ一つを取ると、かなりシンプルな作りをしていることに気付く。本作で注目すべきはエンジニアであるKarl-Heinz Hausmannをメンバー扱いし、A・B面ではエレクトロニクスを担当させているという点である。当初からコミューン性が強いバンドではあった。が、この場合、バンド内にサウンド・エフェクトや音響を考える人間を専任で置くことによって、混沌としたサウンドを保つことに成功した。この役目はF.U.Rognerが引き受けることも多かったのだが、彼は本作ではC・D面にしか参加していないし、次作でもゲスト扱いである。1stから5thまでのカバー・アートは全て彼の手によるものであることを考えると、この時期のRognerは演奏者であるよりもデザイナーであろうとしたのではないか。

'72年に4th「Carnival in Babylon」を発表。前作ではエンジニアも兼任していたK.Hausmannが主体となって、キーボードやエフェクトを行ない、エンジニアリングはPeter Kramperがやっている。Renateがレギュラーとして復帰。もう一人のドラマーとしてDanny Secunds Fichelscherが参加。アルバムとしては、地味ながら、よく練れた楽曲が揃っている。A-2中間部の無秩序なツイン・ギターが印象的だ。

グループは同年7月に名作「Wolf City」を録音している。メイン・ドラマーはD.Fichelscherで、P.Leopoldはパーカッション等で数曲ゲスト参加しているのみである。抜けたK.Hausmannの代わりに、F.Rognerがレギュラーとして復帰し、ゲストのJimmy Jacksonと共にキーボード群を操っている。Chaotic Progressive Rockとでも言うべき本作は、始めてAD II に触れる方にもお薦めである。

〈第2章　変化〉

'73年はAD II にとって、変化の年となった。彼等は、前年



暮れに行ったロンドンでのライヴを、1月の終りにリミックスしているが、L.Meidが脱退し、バンドは専任ベーシスト不在のまま、春のイギリス・ツアーを行っている。WeinzierlとFichelscherが持ち代えでベースを奏くという編成で行われたこのツアーは最後のイギリス公演となった。この時の模様は、'92年に「Live in Concert」としてリリースされた。

AD II は、Meid/Küblerのプロジェクト「Utopia」に参加する一方、新たにベーシストとしてRobby Heiblを迎え、バンドの立て直しを図っていた。Karrer、Weinzierl、Rogner、Renate、Leopold、Heiblの6人に、ゲストを加えた形で74年に発表された「Vive le Trance」は一般にポップ化した駄作と言われるが、実際にはトップから"Dr."までのナンバーのグレードは非常に高い。確かに曲調はわかりやすくなっているが、漂ってくる匂いは明らかにAD II のものである。Heiblのヴァイオリンをフューチャーした"Dr."は秀逸である。ただし、それ以降のナンバーはかなり退屈である。要するに中盤まで

でとそれ以後の落差が、かなり激しいアルバムである。Weinzierlがベースを弾いている曲が数曲あるが、これはHeibl加入以前からリハーサルを進めていた作品なのかもしれない。本作はAD IIとOlaf Kübler共同プロデュースによる最後の作品となった。

'75年になるとL.Meidがベーシストとして戻ってくる。Lolipop移籍第1弾である「High Jack」は、Meidがストリングス/ブラス・アレンジを務めており、彼のカラーが色濃く出たスペース・ポップ・ロックである。

この年は、久々の2枚組アルバム、「Made in Germany」も発表されている。ベースは再びHeiblにチェンジし、新たなメンバーとしてNando Tischer(vo,g)を加えた7人編成である。ブラス/ストリングス・セクション&オーケストラ・パーカッションという編成のトップ・ナンバーは、後にメンバーとなるJorg Eversの作品。当時、一枚編集の米盤が国内で大量に流通し、逆にこの2枚組はあまり輸入されなかったようだが、聴き比べてみると、かなりアルバムとしての印象が違う。ポップなナンバーのみを抜き出した一枚物と違い、真剣に作ってあるように感じられる作品である。(残念ながら、現在CD化されているのは1枚編集の方である。)

〈第3章 新生AMON DÜÜL II〉

'76年に発表された「Pyragony」では、大幅なメンバー・チェンジが見られる。Karrer、Weinzierl、LeopoldにKlaus Ebert(b)、Stefan Zauner(kbd,vo)という5人編成である。

「High Jack」あたりの路線を踏襲した非常に聴きやすい作品だ。実際、バンドとしても、Ebert/Zaunerあたりのカラーが色濃く出ている。確かにカバー・ワークもZauner&AD IIとなっている。インド的なトップ・ナンバーは明らかに昔からのサウンドの延長上にある音楽なのだが。

以前の彼等は基本的な技術よりもエフェクト/ギミックといった特殊技術や、混沌とした雰囲気を売りにしていた訳だが、これ以後のAD IIは通常のロック・バンドとの差が強くなっていく。

'77年の「Almost Alive」でもその感は強い。トップ・ナンバーのヴォーカル部バックは以前からよく使っていたコード進行だが、この曲でのEbertのヴォーカル・ラインはレゲエの影響が見られる。本来ならばこの時期にそういった音楽まで吸収していたということは、勉強熱心なミュージシャンとして語られるべきことなのだが。Karrerの歌うA-3のストリングス・アレンジはJ.Eversが行っている。テクニック的には非常に安定したものを感じさせるアルバムではあるが、一番AD IIらしくない作品だ。

'78年の「Only Human」はWeinzierlが抜け、残りの4人で制作されている。このあたりになると新生AD IIとしての魅力が出始めてくる。B-1で聴けるサウンドは久しぶりに混沌とデカダンスを感じさせる作品だ。

Karrer率いるAD IIのラスト・アルバムはそれから3年後の'81年に発表された。この作品では、昔のメンバーが何人か復帰している。RenateとRognerがカムバックし(Zaunerは演奏面はゲスト、エンジニアに専念)、抜けたLeopoldの代わりに久々にFichelscherが戻ってきている。ベースは以前から交友のあるJorg Eversにチェンジ。本作ではプロデュースも行なっているが、AD IIのベーシストとしては前任者よりもハマっていたようだ。

前作をよりダイナミックにしたようなアルバムからは、Rognerがもたらした'80年代的混沌が感じられる。'76年以後のAD IIでは一番彼等らしいヘビイなサウンドだ。また、ゲストとしてMeidやWeinzierlの名が見られるのは、最後だと思うと昔からのファンにとってはうれしいところだ。

〈第4期 近年〉

こうして、AD IIの歴史は幕を閉じたかのように見えた。だが、'80年代に入ってから、AD II名義のアルバムがイギリスから何枚かリリースされている。この話の裏にはDave Andersonの姿があったのだ。AndersonにWeinzierl、ドラムに元VDGGのGuy Evans、ヴォーカルにJulie Wareingという4人に、適宜ゲストを加えた形での演奏となっており、正確にはAMON DÜÜL IIとすべきではないのだろうかと思うのだが、強気のDave Andersonは、後に「II」を取ったりしている。だが、このバンドが割と良いのだ。各アルバムのクレジットや発表年度が曖昧なのだが、「Hawk Meets Penguin」は初期AD IIの流れにある作品。「Meeting with Menmachines Unremarkable Heros of the Past」はJ.Wareingをフィーチャーした唄物。「Airs on a Shoe String(Best of)」は上記の2枚からのセレクトに未発表曲を加えたベスト。Amon Duul with Special Guest Robert Calvertという名義でリリースされた「Die Losung」はCalvertをリード・ヴォーカルに起用した名盤。

要するにこの辺のアルバムはAmon Duulの名を借りたDave Anderson Bandなのかと思っていると、全然彼等と関係ない「Amon Duul/Full Moon」なんてアルバムが出ていたりするので、頭が痛い。また、「Wolf City」前後の編成でAD IIが再編し、O.Küblerと共にレコーディングしているという噂もある。



AMON DÜÜL
Psychedelic Underground
LP/Metronome MLP 15332 '69年

ベルリンの壁の近郊でコミューンを形成していた彼等は68年、総合芸術を目指すアモン・デュールⅡと政治色の濃い一派、アモン・デュールに分裂した。これは後者、ライナー、ウルリッヒ、ヘルゲ、クリシュケ、ヘルオノーラ・ロマーナ、アンジェリカ、ウッシによるデビュー作でありジャケットも含めてドラッグとの強い関連にあった当時の状況、ヒッピー・ムーヴメントを象徴する１枚である。無に等しい技術のパーカッシヴなドラム、歪んだギター音、叫き声等が単調な繰り返しをもって同時進行する重いノイズ音塊はそのエナジーの発散力においてロックの持つ過激性を赤裸々に表出している。独盤「ディス・イズ・アモン・デュール」「ミネリッド」米盤「アモン・デュール」国内盤「恋歌」は本作の再発盤である。　（松本）



AMON DÜÜL
Collapsing
LP/Meronome SMLP 012 '69年

アモン・デュールはレコード・リリース以前にⅠとⅡに分裂し、Ⅰが「サイケデリック・アンダーグラウンド」を、Ⅱが「ファルス・ダイ」をそれぞれ69年にリリースする。Ⅰは結局、メトロノームに２枚とオールに１枚の計３枚のアルバムをリリースして解散してしまうが後にBASFより編集盤「ディザスター」がリリースされる《BASF 2929079-8 '71》。1stが赤裸々にプリミティヴな攻撃的エナジーを発散させていたのに対し、この2ndからは様々なエフェクト処理のもとに奇妙な浮遊感を感じることができる。独特のコラージュによる一連のジャケット・ワークもさることながら、この無自覚な集合体を統合し、操作し得たのは一体誰の仕業なのであろうか。ここにはロックの最も根源的な核が凝縮されている。　（山崎）



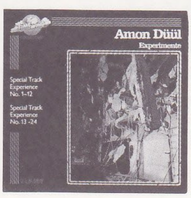
AMON DÜÜL
Paradies Wärts Düül
LP/Ohr OMM 56008 '70年

オリジナル・デュール最後のスタジオ録音として'70年末に録音されたサード・アルバム。政治的活動を行ってきたメンバー達が抜けたことにより、前２作とは大きく作風を変えた作品となった。それまでが、プリミティヴな即興演奏にミキシングの際に多くのエフェクト処理をほどこしたスタイルであったが、本作では一切のギミック処理を排除し、曲らしいアレンジの楽曲をアコースティック楽器を主体とした演奏できかせている。単調なギターのリフが長々と続き、その上を英語による歌詞が力ない声でけだるく歌われるスタイルで、寂寥感のある世界だ。彼等は、その短い数年の命の中で、一生に匹敵する時間と等しい経験をくぐり抜け、今、晩年の終末感の中に漂っているかのようだ。　（山崎）



AMON DÜÜL
Disaster
LP/Basf 2929079 '71年

AMON DÜÜL、計５種類のアルバムのうち、純オリジナル・アルバムは「Psychedelic～」と「Paradise～」のみ、他は未発表音源を編集したもの。「Disaster」は発売元のBasfが２枚組にまとめたものとも、1st時の未発表セッションを使っているとも云われている。ロックの規約に入る前の熱狂と陶酔をレコーディングできた彼等は、ある意味で幸福だったと思う。手垢がついていないという意味では相当に純粋にも思う。ロックが１回りを既に過ぎてしまった今、この音楽にアヴァンギャルドな切羽詰る所での斬新さよりも、懐しさや憧れを抱く人は少なくないかもしれない。情報が音楽を上回って有効なものとなり氾濫し取捨選択せざるを得ない状況になってしまった今以後、二度とレコーディングできない種のものだ。　（松本）



AMON DÜÜL
Experimente
LP /Time Wind Collection DB/50142 '84年

'84年にありきたりな編集物シリーズの中の一つとして発売されていた未発表音源集。音質がやけにクリアーで1stの印象が強いだけに意外な気さえする。ほとんど手が加えられておらず、ありのままのセッションが聴ける。いわゆる裏流出なのだろうが、それがAMON DÜÜLで起ってしまったところが面白い。音自体よりもむしろその経緯を知りたくなってしまう。なにしろ、彼等の初期の音には出来／不出来はあるはずもなく、もしあるとすれば、それは編集上でのこと。「Disaster」やこのアルバムを聴くと、AMON DÜÜLたるところの音楽「Psychedelic Underground」が編集の勝利だったことが、今更ながらにわかる。　（松本）



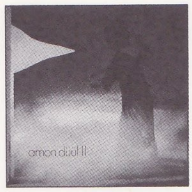
V. A.
Ohrenschmaus
LP/Ohr OMM 2/56.006 '70年

Ohrレーベル初のコンピレーション、２枚組。このアルバムはAMON DÜÜL唯一のシングル「Eternal Flow/Paramachamical World」のA面曲を収録していることで話題にのぼる。他の収録アーティストはいずれもアルバムから収録になる。一般にはジャーマン・ロックの中心レーベルとされるOhrだが、そのとおりOhr全33枚をながめれば、ほぼ全ジャンルの音楽が並ぶことになる。これは今となっては意外と知られていないかもしれない。これ程多様な内容のレーベルは他に二つとないと言っていいだろう。しかもそれはドイツで初めて音楽を開いたのだから、ここをあばけばジャーマン・ロックの半分以上がつかめる。少なくとも何が特異なのかが伝わるはず。あまりにも重要であまりにもヘヴィ。　（松本）



AMON DÜÜL Ⅱ
Phallus Dei
LP /Liberty LBS 83279　'69年
CD/(Fr.)Mantra 012

アモン・デュールは'68年に分裂し、クリス、フォルクとペーターを中心としたアモン・デュールⅡは本アルバムでデビュウを飾る。一般に「政治的方向に走る者と音楽的な完成を求める者に分裂した」といわれるが、後のⅡの活動を考えると、あながち、まとはずれな意見ではない。本作では、次作でみせるような三次元的な音の広がりはそれ程ないが、混沌としたヘヴィーな演奏は彼等の表現主義的なサウンドを既に確立しており、サイケデリック感も申し分ない。又、以後、5作目までのカヴァー・アートを担当するフォルク・U・ログナーのワークも素晴らしく、当時のⅡの音楽性とマッチしたシュールリアリスティックな感覚は現在でも高く評価されている。(山崎)



AMON DÜÜL Ⅱ
Yeti
LP /Liberty LBS 83359. 60　'70年
CD/(Fr.) Mantra 010
/Repertoire REP 4275 WY

アモン・デュール・セカンド、70年発表の2ndアルバム。2枚組の内、旧サイドAとBの曲は作曲がなされており、サイドCとDは即興演奏によるものである。方法の違いのため両者の間に若干の差違を感じるが、基本的には全編を通じてサイケデリックな雰囲気と攻撃的なエナジーが満ち満ちている。その攻撃性という点では旧サイドCのタイトル・チューンと旧サイドDの1曲めで頂点に達するが、それに続くアルバム・ラストのD②の曲では呪術的な世界が醸し出され、タイトルの「Yeti」をいやが上にも見せつけられてしまう。さらに本作以外の作品も含めて、彼らのジャケット・デザインの類稀なセンスにも圧倒される。なお、本作にはアモン・デュールⅠのレイナー(G. Vo.)とウルリッヒ(B.)がゲスト参加している。(城元)



AMON DÜÜL Ⅱ
Tanz Der Lemminge
LP /Liberty LBS 83 473/74 X　'71年
CD/(Fr.) Mantra 014
/Repertoire REP 4276-WY

初作「ファルス・ダイ」ではオリジナル・アモン・デュールの名残か幾分パーカッシヴな面が見られたが、この3作目は前2作を継承しつつも特に組曲形式の旧A、B面においてアコースティック・パートやギミックを複雑に折り込み迷路のような難解な音作りの頂点にある。旧C面のインプロヴィゼイションに至ってはエコー、リヴァーヴによる不明瞭で多彩な音色が氾濫した音響でありドラッグ・サウンドとしての性格が強くジャケットのようなイメージ・フィルムを見る思いである。またシタールの使用等によりインド的な趣きが感じられる。構成は前作と酷似しているが曲想は対称的にソフィスティケイトされたものである。以後7th「ヴィヴ・ラ・トランス」まではやや軟化傾向にありながら一定のヴォルテイジを保つ。(松本)



AMON DÜÜL Ⅱ
Carnival In Babylon
LP /United Artists UAS 29327　'72年
CD/(Fr.) Mantra 063

さすがに前作、前々作、もしくは〝Phallus Dei〟の力強さや視覚イメージの氾濫は後退し、スケール・ダウンした感は否めないが、代って、レナーテ・クナウプの等身大のヴォーカル力量を生かして、歌から曲としてのまとまりそのラインに比重を置いたアルバム。次作の踏み台になったアルバムという気もする。〝All The Year Round〟等は、確かにこのアルバムならではのメロディックな小曲だ。彼等の音楽が整理され始めている。それは音楽が態度だった彼等の位相が、楽曲を作り演奏するミュージシャンへと変化してきた事を意味していると思う。その変化の中でバランスが保たれ、前々作からの流れをも継ぐ。ラストのバンド作〝Hawknose Harlequin〟はコンパクトながら曲想がふくらみ、次作へとつながる。(松本)



AMON DÜÜL Ⅱ
Wolf City
LP /United Artists UAS 29406　'72年
CD/(Fr.) Mantra 013

6枚目。前作「CARNIVAL IN BABYLON」(72年)と比べると、カール・H・ハウスマン(kdb)が脱け、ピーター・レオポルド(per)もA②③、B②にのみゲスト参加、代わりに前作ではゲスト扱いだったフォルク・ログナーが出戻りで正式参加している。この頃から次第にC・カーレル(vln, g)がデュールⅡをリードするようになり、以前の即興重視から整然とアレンジされた曲を演奏する方向に進む。その頂点に達するのが本作で、ジャーマン・ロックのエスプリと曲自体の良さをかねそなえた名盤である。ユートピアにも収録されている名曲B③と他のナンバーとの完成度に差がないことからもそれは明らかである。グループは現在までに20枚以上ものアルバムを製作し続けているが昔の面影はない。(Chihiro S.)



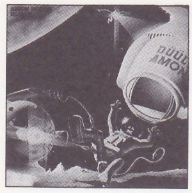
AMON DÜÜL Ⅱ
Vive La Trance
LP /United Artists UAS 29504　'73年
CD/(Fr.)Mantra 062

「Wolf City」からジミー・ジャクソン(kbd)がぬけて、あの天空に響き渡っているコーラス・メロトロンが消え、4作目以後のコンパクトな方向性が続くならば、当然こうした型の定まったサウンドになるだろう。もはや3作目までの視覚に訴えかけるようなイメージの氾濫は望めないが、楽曲指向の洗練度は一層高まり、毛色は異なってもそれなりに楽しめる。どの曲もはっきりと曲のカラーが打ち出されているだけにつかみやすい。シングル曲の集まりといった傾向がある。ポップという程でもなく、以後への移行の狭間で、初期とのバランスを保った独立作として、このアルバムにのみ確立されたカラーを感じさせる。音楽の傾向には違いがあるが、アルバムのポジションとしては2枚組「Made In Germany」に似ている。(松本)



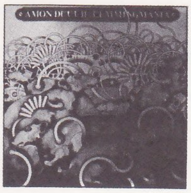
AMON DÜÜL Ⅱ
Live In London
LP/United Artists UAS 29466 ’74年

アモン・デュールⅡの音楽は、構成された楽曲はもちろんのことであるが、スタジオでのギミック処理や視覚的に訴えるカヴァー・アートの幻想性に依る所も大きく、さらにドラッグを加えての、いわば〝羊水〟の中ではじめて100%の効果をリスナーにもたらすといえる。ライヴの場合、どうしてもギミック類の使用に限界がある為、スタジオ盤程のトリップ感は伝わりずらいようだ。もっとも生のライヴに接していれば、彼等の存在感や雰囲気の中で意識も高揚するであろうが、こうして録音されたライヴを聴く限り、ものたりなさを感じてしまうことも事実だ。攻撃的な側面も持つアモン・デュールⅡだが、彼等の持ち味は、スタジオ・ワークでより発揮されていると思う。演奏自体は決して悪くはないのだが。（山崎）



AMON DÜÜL Ⅱ
Hi Jack
LP /Nova 6.22056 ’74年
CD/Castle CLC 5009

アルバムの約半分はこれまでのADⅡらしさをなんとか感じとれるが、残り半分は遠く隔たるサウンドになっている。’72年録音の「Live In London」を別とすれば、前作「Vive La Trance」から一挙に加速したような変化だ。ポップな方向性は既に見えていたとは言え、少々露骨なような気がする。「Wolf City」あたりまでの反動なのだろうか。それともこの方向性は、これ以後、「Only Human」へと至る音楽性を考えると、むしろメンバー自身のめざした第一歩なのか。どことなく英米を視野に入れより広いアピールを狙ったように思える。次作に当たる「Made In Germany」が一種のアイディア物であることを思うと、初期のADⅡはこのアルバムで消え去ったといっていいだろう。（松本）



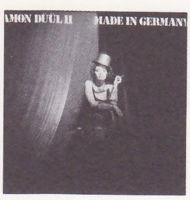
AMON DÜÜL Ⅱ
Lemmingmania
LP/United Artists UAS 29723 ’75年

ADⅡ唯一のオリジナル・ベスト・アルバム。実際のところは、シングルの両面にアルバム収録曲を足したもので、未収録曲はない。今の時代ならば、それこそ初期3枚の未発表曲（これはありそうだ）を片面位使って収録しそうなものだが、当時は恐らく英米で彼等が知られ始めた頃だったのだろう、そしてUAとの契約残り、もしくはUA離籍の機に合わせたのかもしれない、事後処理ともバンド紹介とも言えそうな内容になっている。さすがにこの1曲から始めるしかない〝Archangels Thunderbird〟の重低音イントロに胸がすく。’70年代初期ジャーマン・ロックの最もかっこいい一編だろう。邦題も〝天使の雷鳥〟ときてコテコテの’70’s。アルバムの性格上、小粒なのは仕方ない。「Live In London」と並んで未CD再発。（松本）



AMON DÜÜL Ⅱ
Made In Germany
LP/Nova 6. 28350 XD ’75年

こちらが未CD化のオリジナル「Made In Germany」、2枚組。ジャケの身なりとアルバム・タイトル、そしてオープニングが〝Overture〟、アルバム中には〝Metropolis〟〝Ludwig〟とあり、これらを照らし合わせると、この大作は一大コンセプト作のような気がする。オーケストラの派手な盛り上げ〝Overture〟から始まり、バンド、オーケストラ双方絡みながらの進行。これ以前、以後のADⅡから離れた単独作を思わせる内容で、力が入っているものだ。レナーテ・クナウプ在籍最後のアルバム、すなわちサウンドは随分と変化してきたとは言え、かつてのADⅡを背負った面々での最後の力のふりしぼりを感じさせる。曲によって幾らかかつてを思わせる部分も少なくない。2枚組フルでなければあまり意味がない。（松本）



AMON DÜÜL Ⅱ
Made In Germany
LP /Nova 6.28378 ’75年
CD/Castle CLC 5019

元は2枚組だが、当時からジャケット違いの1枚物もリリースされていた。1枚物の方はオリジナルからポップでキャッチーなナンバーをセレクトしたもので、現在CD化されているのはこちらである。オリジナルの方もCD化して欲しいものだ。聴き比べてみると、かなり印象が違うからだ。もっとも、こちらの盤のセレクトが悪いとは言わない。実際ヴァイオリンが印象的な〝Dreams〟はADⅡらしい名曲だ。だが、本来「アルバム」というものが、曲順も含めたトータルで評価されるべきなのは言うまでもない。（Chihiro S.）



AMON DÜÜL Ⅱ
Pyragony
LP /Nova 6.22890 ’76年
CD/Castle CLC 5020

前作を最後に看板ヴォーカリスト、レナーテ・クナウプがぬけて、彼女はPOPOL VUHに参加し現在に至る。決してうまくないヴォーカリストだが、それでも彼女の音程の悪さが初期ADⅡの不安定な演奏、そして何より不定形な楽曲に、一種の効果として似合って、すべてをひっくるめて’70年代初頭の空気に染っていたような気がする。サディスティック・ミカ・バンドではないが、居ることが華となってバンド、音楽が成り立った時代にADⅡはドイツの象徴でもあったことだろう。替ってキーボード奏者、ステファン・ツァウナーが加入し、これまで弱かったポップ面に大胆なアレンジを加え、遂にはバンドも完全に別バンドに至った。曲によってはフェイセズみたいだ。また別の曲ではシンセサイザーが飛び交う。（松本）



AMON DÜÜL II
Almost Alive

LP /Nova 6.23305 '77年
CD/Castle CLC 5021

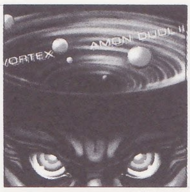
前作とほぼ同メンバー、音の方もアメリカナイズをもこなしたR&B、バラードあり、③のようなシンフォニック・アレンジありと様々。演奏技術は上がっているが、音楽にイマジネーションはなく、サウンド・ポリシーも見当らない。「Pyragony」から「Only Human」への3作、つまりADII最悪の時期と多くのリスナーに云われ続けるこの時期で、仮に別バンドとしてとらえたうえで、もし見るべきものがあるとすれば、それはS.ツァウナーがメインになったシンフォニック・ロックふうの部分しかない。3作各々に少しずつそういった曲がある。他は聴けたものではない。ADIIというバンドは、もともと時代の流れに呑まれたバンドで、'70年代初期にしてもだからこそ「Yetj」「Tanz〜」になった気がする。（松本）



AMON DÜÜL II
Only Human

LP /Nova 6.23561 '78年
CD/Castle CLC 5022

ただのポップで始まるADIIのラスト・アルバム。バンドはこの後、解散し再び活動し始め「Vortex」を出すが、このアルバムがまがいなりにもAMON DÜÜL（II）というネームのついたバンドの最後かと思うと、悲しいものがある。それはE,L&Pの「Love Beach」どころではない。「Hi Jack」で未だ曖昧だった方向性はここへ帰結した。それはどう転んでも改悪としか思えない帰結だと思う。前作、前々作どころではなく、ディスコがかってもきた。バンドが不明だ。そんなどこにでもある音楽の中で、やはりS.ツァウナーのキーボード位がなんとか聴くにたえられるか。完全なただ音楽としか思えないのだが。WALLENSTEINといい、ADIIといい、あまりに悲しいジャーマン・ロックの行く末だった。（松本）



AMON DÜÜL II
Vortex

LP /Teldec 6.24874 '81年
CD/Castle CLC 5023

C.Karrerの率いたADIIのラスト・アルバム。D.Fichelscherの一時復帰で、このバンドの黄金期には、常にパーカッションが隠し味になっていたことを思い出した。ADIIは、パーカッションが鳴っていた方が、ADIIらしいサウンドになる。〝We Are The Machine〟は「Hi Jack」路線の楽曲だが、ゲストのL.Meidの放し飼い状態のベースが印象的だ。メイン・ベーシストのEversも、前任者よりはバンドにマッチしていたと思う。このボルテージの作品ならば、次作も聴いてみたかった。(Chihiro S.)



AMON DÜÜL II
Hawk Meets Penguin

CD/Thunder Bolt CDTB 102 '?年

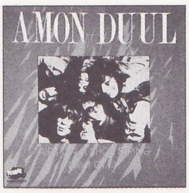
表題はAnderson（Hawk）とWeinzierl（Penguin）の再会を意味しているのだろうか。モーダルな即興から始まるトップの表題作はJ.Wareingのスキャットに導かれる美しいナンバーだ。2曲目はエフェクトと民族音楽的なヴォーカリゼーションをバックに、ジャーマン・ロック的な低音の語りを加えた即興色の強い作品。'70年代中盤以後のADIIが失ってしまった「混沌の精神」がここには存在している。「Almost Alive」あたりのADIIよりは、納得できる作品だと思う。'82〜'83年頃の作品だと思われる。(Chihiro S.)



AMON DÜÜL II
Meeting With Menmachines
Unremarkable Heroes Of The Past

LP/Demi Monde DM 006 '83年

J.Wareingを前面に押し出した唄物。Weinzierl、Anderson、Evarsというバックによるポップスというのも、薄気味悪いような気がするが、これが意外とハマっていると言うか、お里が知れていると言うか、不思議なバランスの上に成立している。曲によっては、往年のフレンチ・ポップスのようにも響く。Illuminated盤は'83年、Demi Mond盤は'85年リリースで、ジャケットが異なる。前者のクレジットはAMON DÜÜL II、後者はAMON DÜÜLである。〝Drummer's Nightmare〟はAndersonのもう一つの古巣、HAWKWINDを思い出させる作品。(Chihiro S.)

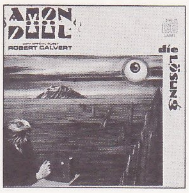


AMON DÜÜL
Airs On A Shoe String
(Best Of...)

CD/Thunder Bolt CDTB 043 '87年

「Hawk Meets〜」と「Meeting With〜」からのセレクトに、2曲の未発表曲を収録したベスト。未収曲のグレードも高く、AndersonのAMON DÜÜLの入門用には最適。未収曲の内、〝Olaf (Where's My $ 20,000？)〟のOlafとはKublerのことだろうか。彼にはAndersonかWeinzierlに未払い金でもあったのだろうか。ここでのWeinzierlのプレイは、'80年以降ではベストかもしれない。中盤以後のサイケデリックむき出しのアプローチは、キャリアを感じさせる名演。後半のベース・リフの一部は〝Drummer's Nightmare〟の原形だと思われる。(Chihiro S.)

AMON DÜÜL
Die Lösung
CD/Demi Monde CDTL 009　'?年



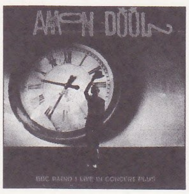
Calvertの（多分）最後の録音物となったと思われる作品。個人的にはAnderson絡みのAMON DÜÜLでは一番好きなアルバムだ。このバンドは女性ヴォーカリストこそいたものの、「メインになる男性ヴォーカルリストの不在」という問題に頭を痛めていたのではないか。Calvertの参加は、この問題を解決しただけではなく、バンドをより広がりのあるものにした。実際、このAMON DÜÜLとCalvertの相性は、思いのほか良い。カリスマ時代のHAWKWINDよりも優れたマッチングかもしれない。「Drawn To The Flame」での彼の絶唱は心を打つ。なお、プロデュースにOZRIC TENTACLEのEd Wynneのクレジットがある。　(Chihiro S.)

AMON DÜÜL Ⅱ
Füül Moon
CD/Thunder Bolt CDTL 011



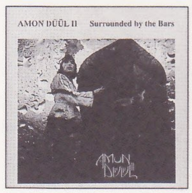
本作は'89年の録音であるが、謎の作品である。AndersonやWeinzierl等はクレジットで見る限り、演奏面では直接関係していないようである。ただしThanks toのコーナーにAndersonの名があり、完全に無関係という訳ではないと思われる。（クレジットはファースト・ネームのみ、変名もあり得るかもしれない。）各作品はオリジナルのAMON DÜÜL、初期HAWKWIND, AndersonのやっていたAMON DÜÜLをミックスさせたようなサウンドである。実際このバンド名でも、違和感を感じないだけのレベルと指向性を持ったアルバムである。　(Chihiro S.)

AMON DÜÜL Ⅱ
BBC Radio I Live In Concert
CD/(U.K.)Windsong WINCD 027　'92年
/MSI MSIF 3095



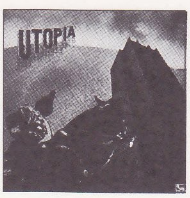
'73年春、グループ3度めにして最後になったイギリス・ツアー時の収録。アルバムで言うと「Vive La Trance」の頃。実際は「Wolf City」の時のADⅡと思って構わない。「Live In London」とは重複しない。デビュー作1曲目の〝Kanaan〟も収録されている。演奏自体は相変わらず荒く、初心者に向くような内容ではないかもしれないが、初期のADⅡを聴き終えた人には手放しですすめたい貴重な音源。どれ程絶讃しても物足らないカヴァー・ワークのことを思えば、生のライヴでの視覚効果が知りたいところ。ただこの荒削りな演奏のみで終っていたとは、とても思えない。是非とも映像を見たいジャーマン・バンドの一つだ。　（松本）

AMON DÜÜL Ⅱ
Sorrounded By The Bars
CD/(Fr.) MSI Spalax 14810　'93年



BBCライヴCDで伏線の張られていたAD全盛期ラインナップでの復活第一作。と言っても12曲中2曲のみ新録で他は1st〜6thからのリミックスである。必ずしもベストの選曲とは言えないが、未だ神秘的なオーラを放っていた初期デュールを知るには、様々なタイプの曲があって無難かも。問題の新録は、「狼の町」の1曲目の再録とラストの新曲。再録の方はかなりリズミックなアレンジだが、結構イケル。レナーテの声が若い！　新曲の方もやはりレナーテの巫女的ヴォーカルが刺激的だが曲自体は今一つ。結構派手。フル・アルバムを待って評価したい。　（高森）

UTOPIA
Utopia
LP /United Artists UAS 29438　'73年
CD/(Fr.)Spalax Music



ロウター・マイトを中心としたユナイテッド・アーティスト系のミュージシャン（アモン・デュールⅡ、エンブリヨ、パスポート、ナイアガラ等）によるセッション的作品。ロウターはエンブリヨ、パスポート、アモン・デュールⅡといったバンドを渡り歩いてきたジャーマン・ロック史上屈指のベーシスト。本作はアモン・デュールⅡの「Wolf City」にも収録されているB①の為にマニアにも人気が高く、入手も困難だが、近々CD化される予定。転換を目前とした当時のジャーマン・ロック界の状況を考えると、或る意味で象徴的な作品である。トリップ仲間を総動員してのローターの試みは結局、ドラッグ・カルチャー最後の狂い咲きで終わってしまった。全曲マイト＆オラフ・クプラーのペンによる作品である。　(Chihiro S.)

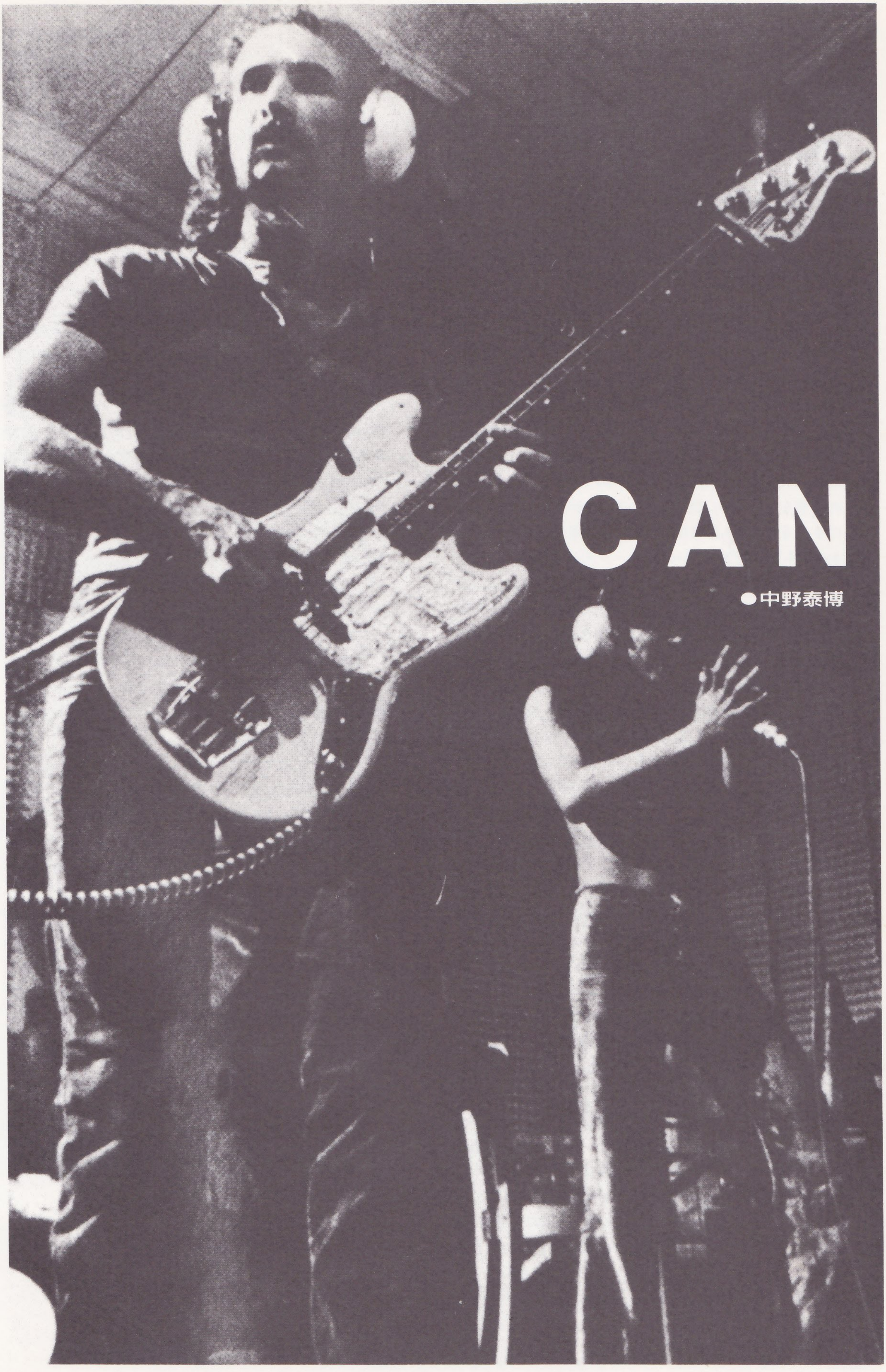
CHRIS KARRER
Chris Karrer
LP/Vinyl 6.24328　'80年



ADⅡの中心人物、クリス・カーレルのソロ。ほとんど知られていないアルバムだ。'80年のリリースというから、ADⅡ解散後、再編の間の録音になる。カーレルはvo, g, sax, vlnを受け持ち、やはりヴォーカルが入れば「Only Human」の延長かと思わせる。カチッと締った録音でタイト、おかずの音色は彼のヴァイオリンなどが聴けて部分的に興味をひくが、リズムが聴くに値しない部分が少なくない。それでも全体の出来は決して悪くない。凝った曲もある。参加4人のうち、Jörg Eversは元EMBRYO, 18 KARAT GOLD、そして再編ADⅡに加わった。　（松本）

CAN

●中野泰博



CANのグループとしてのスタートは、'68年・ホルガー・シューカイ、ミカエル・カローリ、ヤキ・リーベツァイト、アーミン・シュミットの四人の基本メンバーに、デヴィッド・ジョンソンなるフルート奏者を加えて行ったコロンでのコンサートである。当時のプレイは仏タゴマゴ社からのカセット、「プリヒストリック・フューチャー」で聞く事が出来るが、すでにテープ・エフェクトを使用している。同時期にH.シューカイはアルバム「カナクシス」の録音を行っており、現在に至るまでのサウンド・コラージュの手法をふんだんに活用している。その年の秋、I.S.の妻ヒルデカルド(解散までCANのマネージメントを勤めた。)が黒人、マルコム・ムーニーをグループに加入させ、いきなり1stアルバム「モンスター・ムーヴィー」を録音。何とオープニング・ナンバーの「ファーザー…」はそれまで唄など歌った事の無かったマルコムの2度目の練習時のテイクだと言う。

'68年、I.S.名義のシングル「カーマ・スートラ」を全員で録音した後、フリー・ミュージックに専念するため、D.ジョンソンはグループを離れる。CANと言う名前はこの後になってやっと決定した。'69年から本格的にコンサート活動を開始、現存するマルコムVo.のテイクは全てこの一年に録音されたもので、彼は早くも'70年の始めにアメリカへと帰ってしまう。彼は現在でもメンバーと交流があり、後のダモ・鈴木脱退の際にも再加入をさそわれ、独行きの飛行機チケットまで用意したにもかかわらず、実現はしなかった。そして'70年5月、ケンジ「ダモ」鈴木とミュンヘンで出会うわけである。その日の晩のステージに引っぱり出された彼は、以来メンバーとして「フューチャー・デイズ」まで在籍する事になる。(ちなみに記念すべきこの日のコンサートは、彼が唄い始めるや客がぞろぞろ帰りだし、終了時には60名たらずのファンしか残っていなかったと言う。)この後、多くのサウンド・トラックの仕事を手がけ、本来2ndになるはずだった「タゴ・マゴ」に先がけリリースする。この「タゴ・マゴ」までの録音は古城の一室をスタジオ化した場所で行われている。その'71年末に「Shikako-Maru-Ten」とカップリングした「スプーン」が独国内でNo.1のヒットを記録、グループの人気を不動のものとした。その後の'72年、2月のフリー・コンサートでは実に一万人ものオーディエンスを集める。この時のステージは50分の記録映画「カン・フリー・コンサート」として残されている。4thの「エゲ・バミヤジ」と前後して英国ツアーも行い、最高傑作との噂も高い「フューチャー・デイズ」を録音した'73年夏、ダモ鈴木はグループを離れる。この脱退については「エホバの証人の布教活動のため」とか、「スタジオの中で突然奇声をあげ、走り出たまま帰らなかった」等の話があるが、定かではない。

'74年、四人編成のまま「スーン・オーバー・ババルマ」を制作。カローリがVoをとり、音楽的にも前作にひけをとらない作品に仕上る。この後、レコード会社をヴァージンに移すのだが、間にアウト・テイク集の「リミテッド・エディション」がUAからリリースされている。誰が最初に間違えたのか知らないが、昔からこのアルバムは「90ポンド」で売られたなどと言われたが、(通常レコードは3ポンド前後)全くのデマ。安価極まる97ペンスが当時の売価である。移籍第一作の「ランデッド」において行きづまりを感じた彼らは、元トラフィックの黒人ベーシスト、ロスコ・ジーを加入させ、ホルガーがテープ、エフェクト類に専念出来るようになったのもつかの間、元来持っていたアフロ指向のリズムに、彼はあまりに適しており、黒人音楽そのものへとグループのサウンドは変化してしまい、急速に独自性を失う結果になってしまう。「フロウ・モーション」と、ロスコと同じく元トラフィックのパーカッショニストを加えた「ソウ・ディライト」を機に、ついにホルガーがグループを脱退。その後の「アウト・オブ・リーチ」はとてもほめられた出来ではないが、しばらくのブランクの後発表されたラスト・アルバム「CAN(インナー・スペース)」では編集にホルガーが関わったためか、多少の独自性をとりもどしている。

あまりに多種の音楽性を持ち、定まったスタイルを持たなかった彼らは、その後のセッション・ワークの幅広さを見てもうなずけるが、ホルガーを筆頭に全員が現在でも活動を続けており、特にパンク/ニュー・ウェーブ以降のミュージシャンの中にも彼らからの影響を語る人間が後を絶たない。



CAN
Monster Movie

LP /Music Factory SRS 001　'69年
CD/Spoon CD 004

荒々しいファズ・ギター、シャウトするヴォーカル、2トラック録音のスタジオ・ライヴで制作されたファースト・アルバム。この時点でシューカイ、シュミット、リーベツァイトの3人は30歳を超えていたのだから恐ろしい。オクターブを上下するベースラインや、低音を弾かないキーボード等、後のスタイルも充分発揮されているが、本作の聞き所はやはり黒人ヴォーカル、マルコムの狂気の叫びと、空間を自由に操る20分の大曲〝You Doo Right〞だろう。既成のスタイルに何ら囚われる事の無いイマジネイションの爆発が記録されている。この作品は限定500枚の自主制作だった初回発売より25年を経過してなお、若者達にインパクトを与え続けている。'69年ジャーマン・ロック・シーンの最重要期を象徴する重要な作品である。(中野)



CAN
Soundtracks

LP /Liberty LBS 83 437 I　'70年
CD/Spoon CD 005

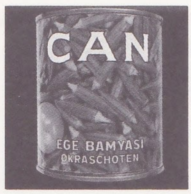
'70年の間に彼らの録音したサウンド・トラックを集めた作品。当然トータルな構成では無いが曲のツブはそろっており、未聴のファンには入門編として勧めたい。脱力したダモのヴォーカルとツボを押えたドラムが気持ち良い2曲目や、狂気が内面に充満して爆発寸前のテンションを創る5曲目、圧巻は14分に及ぶ〝Mother Sky〞で、荒くスピード感のあるワンコードのリズムに浮き沈む各メンバーの演奏が素晴らしい。マルコムのテイクは2曲だが圧倒的な世界があり、ここに収められたダモ・ヴォーカルの5曲はホルガーにミュンヘンのカフェで声をかけられた'70年5月から8月までの僅か3カ月内に録音された物。しかしこの音楽の使われた映像は「早春」以外はまずお目にかかれない。当初2ndになる予定の「Tago Mago」に先がけてリリースされた。(中野)



CAN
Tago Mago

LP /United Artists UAS 29 211/12 X　'71年
CD/Spoon CD 006/7

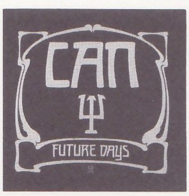
幾つかの音楽性を合わせ持ったCANのガレージ的な部分とフリーな部分を集大成した2枚組サード。謎の東洋人、ダモ鈴木は増々冴えわたり、日本語ナマリの英語で大活躍である。前作までは表立った効果を出していなかったシューカイが次第にエフェクトを導入し始め、各楽器音に遠近感がついて来た。ここまでの作品は全て古城の一室をスタジオとした一発録音で、事前に作曲された物では無い。リーベツァイトがCAN結成前にはフリー・ジャズ畑の人間だった事もあり、インプロヴィゼイションの長所も欠点も合わせ持った2曲の大曲も収録。CD化により2枚組が一気にきけるようになったがシンメトリーなオープニングの①と⑤との対比がぼやけてしまったのが残念。LPではイギリスのみ、エンベロップ仕様の別ジャケットで出ていた。(中野)



CAN
Ege Bamiyasi

LP /United Artists UAS 29 414 I　'72年
CD/Spoon CD 008

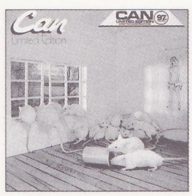
初のヒット・シングル〝Spoon〞を含む名作。(TV番組「ナイフ」のテーマ曲だったため、シャレで作った曲との事)それまでのエネルギーの爆発的な曲調から、次第に立体的な構成に気を使い始めた時期で、けだるく美しい2曲目や、独自の音色でリズムを解釈した4曲目など、短かい曲に佳曲が多い。冒頭の〝Pinch〞はその後も長くステージ演奏されていた。アルバムはまったくトータル性を欠いており、その姿勢はまったくアナーキーでさえあるが、この後の作品では見られなくなる性質でもある。時間合わせに入れられた5曲目に代表されるフリーの曲も、現代の耳には冗長に聞こえるが、時代は'72年、まあ許してやって下さい。この作品からレーベルがUAに移り、イギリスでの評価を高め、後のヴァージンとの契約へ繋がる訳である。(中野)



CAN
Future Days

LP /United Artists UAS 29 505 I　'73年
CD/Spoon CD 009

完成度の高いタイトル・ナンバーにより、多くの人が認める最高傑作。演奏がメロディに依存せず、音響を中心とした発想は恐らくホルガーによる物だが、録音そのものが非常に立体的になっており、遠く近くゆらめくダモのヴォーカルがエフェクトされて行く様は快感そのもの。ただしメンバーはこのまとまった曲には不満足だったらしく、「シンフォニックになりすぎた」と語っている。3曲目も後にシングル・カットされる得意のワンコード・ブギといったタイプの曲で、曲間の効果音が素晴らしい。おおげさな盛り上がりなどひとつもないが、ここに収められた「ぶっ飛んだ」感覚は体験しないと損だぞ。前作とは全く対照的な構成されたアルバムである。この時期のライヴもレコード化される予定だったが、PAトラブルのため、中止されている。(中野)



CAN
Limited Edition

LP/United Artists USP 103　'74年

UA時代の未発表曲集。後に「Unlimited Edition」(LPでは2枚組)に含まれたので、今となってはあまり意味のないアルバムになってしまった。アルバム自体は脈絡のない切れ端の寄せ集めにもかかわず、これが逆にバンドの特色を助長させるところが、まさしくCANらしい。言い替えれば、CANというバンドとその音楽性の懐の深さ、柔軟性を証明するようなアルバムだ。少しGONG等にも似た有り方だ。様々な揺れや脱力感ある切れ端が並んでいるが、中でもA②の〝Doko E〞は印象的。ダモ鈴木が日本語で昭和40年代の公害をテーマに歌う。その語呂合わせふうのダラダラしたつぶやきからして独特だが、ドイツの先鋭と日本の四畳半湿めっぽさが説明なしに直結してしまい妙なリアリティも起こる。(松本)



CAN
Soon Over Babaluma
LP /United Artists UAS 29673 I　'74年
CD/Spoon CD 010

前作録音後に脱退したダモ鈴木の穴を埋めるべく、ムーニーにまで声を掛けた彼等だが、結局カローリがヴォーカルを取る事で本作の制作に入る。他のメンバーより10歳も若い彼は各アルバムでも一番平凡なロック・ギターを弾いている人物である。2曲目のみシュミットが唄っており、低音の変態的な声はルックス通りである。旧B④⑤は得意のとりとめ無く変化するナンバーで、細かなリズム・ボックスに乗せ切り変わる曲が最終的に静かなうねりのキーボードに飲み込まれて行くという大作。前作同様バランスのとれた構成といえる。オリジナル・ジャケットは銀紙印刷でピッカピカだった。早くもレゲエのリズムが取り入れられた①は③と共にショート・ヴァージョンがシングルとしてリリースされている。　(中野)



CAN
Landed
LP / (U.K.) Virgin V 2041　'75年
CD/Spoon CD 25

ヴァージンとの契約後の作品。ワン・コードの速い曲は各アルバムに1曲ぐらい収録されていたが、エフェクトも含め本作の1曲目は出色の出来。2～3曲目で早くもダレてしまうあたりがこの当時の不調を表している。4曲目はライヴ録音からスタジオにつながり、曲とも呼べない未完成なセッションなのだが刻々と変化して行く演奏はCANならではの個性。ラストの曲は45分のテイク〝Magic Day〞から編集された物で、曲中にラジオ・モスクワの音楽をそのまま使用して録音された。(この曲には日本人女性ヴォーカルをフィーチュアした別テイクがあるとの事)編集を前提としたガレージ・ロックとはなんとパラドキシカルであろうか！ジャケットもまた良くバンドの特色を表している。初の16トラックの録音での作品。　(中野)



CAN
Unlimited Edition
LP / (U.K.) Caroline CAD 3001　'76年
CD/Spoon CD 23/24

'74年発表の廉価盤のアウトテイク集「Limited Edition」に更にLP 1枚分のソースを加えリリースされた作品。当然マルコムもダモの声も聞ける。公式発表された曲の原曲と思われる物もあり、クオリティの差こそあれ、充分に楽しめる内容になっている。彼らの場合スタジオ内での自然発生的な曲が初期には大部分を占めており、当然ぼう大なアウトテイクが存在する。そのうち何曲かはE.F.Sシリーズのナンバーでアルバムに収められている。日本語で唄われる2曲目は30分以上のセッションの一部分で、プライヴェート・テープで出回っている他の部分ではダモは全くデタラメをならべたてている。CANの持つ様々な側面が未整理のまま羅列された作品だが、その分特徴が際立って分かり易いともいえる。　(中野)



CAN
Flow Motion
LP / (U.K.) Virgin V 2071　'76年
CD/Spoon CD 26

本来持っていたアフロ志向のリズムが表面化してきた作品。ポップなナンバーの〝I Want More〞がシングルとして久々のヒットとなった。きちんと整理され録音された演奏は破綻なくまとまっており、「衝撃」は影をひそめている。特筆すべきはやはり録音で、単調になりがちな各曲に彩りを与えている。レゲエのトリップ感覚だけを拡大させた超脱力ナンバー〝Flow Motion〞はファン必聴。捨て曲も幾つか入ってしまっているが、トータルなアルバムとしては成功した方だろう。(前作は明らかに失敗)彼らの特色のひとつには「バランスを聴く」点があり、本作を始めとする中期には絶妙な物があった。5曲目は再びシュミットのヴォーカル曲で、個人的には彼の方がカローリよりCANに適したヴォーカリストだと思うのだが。　(中野)



CAN
Saw Delight
LP / (U.K.) Virgin V 2079　'77年
CD/Spoon CD 27

トラフィックから二人の黒人プロ・ミュージシャンが参加、シューカイがエフェクトのみに専念した作品。演奏は当然完成度を増し音数も多くなったが、あくまでそれは既成のスタイルの中での話で、かつての非常識なまでの独自性には影がさし始めたという事だ。リーバップの細かなアフリカ風パーカッションは現代のワールド・ミュージックを10年以上先取りした物と言えるし、リーベツァイトとの絡みは快感！アナログ・サンプリングがはさまれた4曲目は後期の代表曲と言いたい。1曲目も得意のワンコードに乗せた好ナンバー。ただしそれらが既成概念の音楽の上で行われている所が、彼らの場合致命的になった訳で、時折入るヴォーカルに不安を感じるが、そのまま次作では最悪の結果を生む事になる。　(中野)



CAN
Out Of Reach
LP/EMI IC 066-32 715　'78年

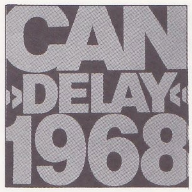
ついにシューカイの抜けてしまったCANの最低の作品。かつての音空間からはマジックが全く無くなってしまい、ここにあるのは気のぬけた演奏のみである。唄はメロディに依存し、昔と同じ音色が出ると悲しさすら感じる。決してポップスを演っている訳ではなく前作と演奏自体に大きな変化は無いのだが、平淡な録音は、たとえばカローリのギターなどはその弱点をモロに出してしまっているのだ。思えばCANの魅力は初期はインパクトであり、中期以降はダモ鈴木にインスパイアされた間の構造をシューカイが西洋的に構成した点にあったのだが、それらすべてを失った本作は、後にメンバー自身も認める失敗作である。　(中野)



CAN
Can (Inner Space)

LP /EMI IC 066-45 099　'79年
CD/Spoon CD 28

さすがに前作にはメンバーも不満足だったらしく、編集にシューカイを起用して好作品となったラスト・アルバム。明るく伸びやかなオープニング・ナンバーはもとより、2曲目ではフェイズ音が進行する曲全体をかき消すサイケデリックな佳曲。中半数曲の凡作は時期からして止むを得まい。そして自らの解体を予言するかの、音色もミックスも演奏自体もヤケクソの様な大運動会ナンバー〝Can Can〃でアルバムは幕を閉じる。ジャーマン・ロックのカオスの時代から10年、世界はニュー・ウェイヴ全盛の時期で、エンターテイメント／ショービジネスでない音楽のありかたを誰もが模索していた。意識的な多くのバンドがはっきりとCANからの影響を語っていた。彼らとのセッションという次の音楽探究へとメンバーは散って行く事になる。　(中野)



CAN
Delay 1968

LP /Spoon 12 '81年
CD/Spoon CD 012

CAN解散後、各国各レーベルに分散した自らの作品を統括してマネージメントすべくスプーン・レーベルが設立された。長く入手不可能だったシューカイの「Canaxis」やシュミットのソロ・ワーク等をリリースする中で発表された1st時代のアウト・テイク集が本作である。当然すべてのヴォーカルはムーニーで、このヘヴィさは後には消えてしまった特色なので貴重なアルバムである。内容も正規のアルバムに何のひけもとらない堂々とした物だ。パンクの連中に影響を与えたという事実も当然と思えるボルテージの高い演奏は、20年を経た現代でも充分通用するだろう。しかしこの26年前の、2トラック・ダビングなしのアルバムを「古臭く」してしまえないロックとやらは、やはり死んでいる。
(中野)



CAN
Rite Time

CD/Phonogram 838 883-2　'84年

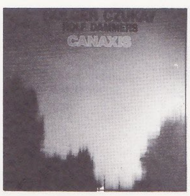
再結成が噂され、レコーディングに入ったというニュースから待つ事2年以上たってリリースされた最新作。何とヴォーカルはマルコム・ムーニーで、その声は少しも変わっていなかった！　一説によるとダモにも声をかけたとの事だが、彼は自己のバンドで活動中のため加わらなかったとの事。しかし内容に関してはほめられた物では無く、シューカイも充分工夫してはいるのだが、曲の中心となるアイデアが不在で、単なる演奏に流れてしまっていて、個々のソロ作品の方が大分ましに聞こえる。6曲目がミックスを変えシングルとしてリリースされているが、結局再結成はこれ1枚で終わってしまった。　(中野)



CAN
Cannibalism 2

CD/Spoon CD 21　'92年

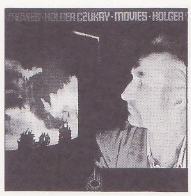
CANの編集盤としては、「The Classic German Rook Scene(68-72)」、「Unlimited　Edition(68-75)」、「Opener(71-74)」、「Cannibalism(68-74)」、「Incandescene(69-77)」がある。「Cannibalism」は78年にU.A.から発売され、80年に〝Spoon〃と〝Chain　Reaction〃が入換えられてSpoonから再発された。その後LPからCDへのメディア変換が進み、収録時間の関係から〝Soul　Desert〃と〝Splay〃を削って、89年に「Cannibalism 1」として発売された。本作はその続編で、74年から81年にリリースされたアルバムから選曲してある。ボーナス・トラックとして、71年発表のシングル曲〝Turtels Have Short Legs〃と〝Shikaku Maru Ten〃、さらにもう1曲〝Melting Away〃が加えられている。「Cannibalism 3」は、ソロ・アルバムの編集盤である。　(Helmut)



HOLGER CZUKAY, ROLF DAMMERS
Canaxis 5

LP/Music Factory SRS 002　'69年

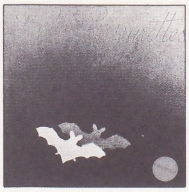
本作はかつてCANの1st「Monster Movie」を限定600枚リリースしたMusic Factoryからその2番として発売されていたもので後のLP再発により存在が明らかとなったもの。シューカイは現代になってようやく世に知られる様になったが、CAN時代も含めて常に微妙な音処理の感覚を持つ。この25年も前のアルバムは未だ彼が現代音楽の領域から作成した物で今ほど派手でない分だけ手法が際立っている。すすり泣く様な電子音とヴェトナムの唄をコラージュしたA面は秀作だ。CAN以後のアルバムは全てCDで手にする事が出来るので一聴願いたい。テープ・コラージュを駆使した彼の音楽は大変穏やかで、他のジャーマン・ロック・バンドには無い人間味溢れるものだ。そしてそれはCANの浮遊感覚に通底する。　(中野)



HOLGER CZUKAY
Movies

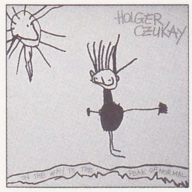
LP/EMI EMC 3319　'79年

ホルガー・シューカイの1stソロ・アルバムにして、文句なしに彼の最高傑作。あらゆる面での彼の音楽の魅力がいっぱいに詰まっている。リーベツァイト、カローリ、シュミット、リーバップという参加ミュージシャンは全員CANの仲間達だ。CANというバンドは'70年代前半にピークを迎え、Virginと契約後の彼らは、よりポップな方向性を模索しながら、さほどの成果を得るに至らなかった。しかし、そんなバンドの低迷をよそ目にシューカイはこの上もなくポップで、しかも充分に実験的な音楽を見事に提示してみせた。このアルバムによって、CANは'80年代以降の多くの音楽の隔世的な始祖となった。逆に、このアルバムの成功がCANのバンド生命を決定的に絶ってしまったとも言える。美しくも痛快な音楽。　(坂本)



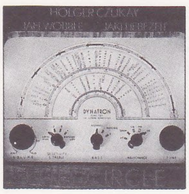
HOLGER CZUKAY/CONNY PLANK
Les Vampyrettes
LP/EMI F 667 226　'81年

CAN周辺で最も衝撃度の高い作品は何か、と問われたならば、私は迷わずこの12"シングルを採り上げる。ホルガー・シューカイとコニー・プランクが連名で発表したこのシングルには、〝Biomutanten(公害アニマル)〞と〝Menetekel(没落への警告)〞の２曲が収録されている。CANというバンドが常にどこか陽性な感性を持っていたのに対し、この音楽は陰惨で恐ろしい。ダモ鈴木の一時帰国の印象を歌にしたという音楽。この地の底から響きわたる声のおどろおどろしさは、つまり現実的には日本への警告を意味する。これほどに凝縮された暗黒色の煌めきは、滅多に拝める代物ではない。できればこのユニットでもっと多くの作品を残してもらいたかったが、プランクの他界でそれもかなわぬ夢となった。　(坂本)



HOLGER CZUKAY
On The Way To The Peak Of Normal
LP/EMI EMC 3394　'81年

シューカイの単独冒険旅行は続く。いきなり18分にも及ぶ組曲〝Ode To Perfume〞が幕を開けると、そこには思いがけないほどに重量級のロック・ビートが展開し、気ままなシューカイ流のフレーズが次から次へと絶妙に重ねられて行く。シューカイがひとりでも充分にカッコいいロック・アーティストであったことをまざまざと思い知らされる。リーベツァイトやコニー・プランクらの名前に混じって、若いS.Y.P.H.の面々やジャー・ウォーブルといったミュージシャン達の参加が非常に興味深く、シューカイの音楽がプログレッシヴ・ロックとは違ったシーンと何の違和感もなく連鎖し始めた意味は大きい。最もロック色の強いシューカイのアルバムであり、また、『Movies』と並ぶ彼の代表作でもある。　(坂本)



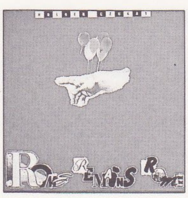
HOLGER CZUKAY/JAH WOBBLE/JAKI LIEBEZEIT
Full Circle
LP /Virgin 205866　'82年
CD/Virgin CDOVD 437

『On The Way To The Peak Of Normal』以来意気投合したのだろう、シューカイは元PUBLIC IMAGE LTD.のジャー・ウォーブルと活動をともにし、12"シングル等をリリースしていたが、それをアルバムに纏めたのがこの『Full Circle』だ。ヒット・ナンバーの〝How Much Are They?〞に始まる彼らの演奏は、紛れもないシューカイの音楽であり、しかも当時低俗化をきたしつつあったニューウェイヴ、エレクトロニック・ポップに対するこの上もなくスマートな回答でもあった。この音楽が例えばTHE ART OF NOISEの登場を促したことは間違いない。'82年にはもう１枚、続編とも言える『Snake Charmer』がジャー・ウォーブル、ジ・エッジ(U2)との３人名義で発表されている。　(坂本)



HOLGER CZUKAY
Der Osten Ist Rot
CD/Virgin　'84年
東芝EMI VJCP-23065

CAN結成以来、ホルガー・シューカイの音楽は殆ど変わっていないにも関わらず、音楽シーンの方が彼を奪い合うという形で様々なシーンと接触を繰り返して来た。ここでは久々に目立ったゲストもなく、ヤキ・リーベツァイト、コニー・プランクらと楽しい実験を思いのまま繰り広げている。これまたヒット・ナンバーとなったタイトル曲は、改めて聴き直すとまるでカール・ストーンの音楽の先取りのようだ(こんな音楽がヒットしてしまうというのが、時代の方で彼に吸い寄せられたかのようで、興味深い現象に思える)。全体にメロディーのはっきりとしたポップ・チューンの多いのが特徴だ。但し、日本人メーキャップ・アーティスト、ミチの歌は例の「暗い青春の会」路線。　(坂本)



HOLGER CZUKAY
Rome Remains Rome
LP /Virgin 206258　'87年
CD/Virgin
東芝EMI VJCP-23065

『Der Osten Ist Rot』から３年のブランクを経て発表された本作は、前作からの延長線上にあるポップ指向がより明確化した作品だ。特にリズムの歯切れがいい。リーベツァイト、カローリ、ウォーブル、オリ・マーランドらが参加。いきなり飛び出す陽気な〝Hey Baba Rebop〞は、亡くなったリーバップ・クワク・バー(perc)に捧げる追悼ナンバー(その後、リーバップの追悼盤『Melodies In A Jungle Mans Head』がＪ・エルボーグの手で制作されている。彼の雄姿はTRAFFICのヴィデオ『Live At Santa Monica』で拝むことができる)。教会音楽やブルガリア民謡を大胆に採り入れたナンバーは、この'90年代半ばに来て突如脚光を浴びて来たENIGMA等の一部アンビエント・ハウスのまさに先駆けそのもの。　(坂本)



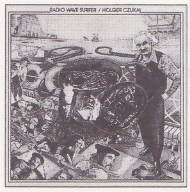
DAVID SYLVIAN & HOLGER CZUKAY
Plight & Premonition
CD/Virgin 2-90904　'88年
ヴァージン・ジャパン VJCP-23077

'83年頃デヴィッド・シルヴィアンの１stソロ・アルバム『Brilliant Trees』('84)のレコーディングに参加したホルガー・シューカイは、シルヴィアンから絶対の信頼を得、以後、何度となく接触を繰り返すことになる。『Words With The Shaman』('85)にもＪ・ハッセル、Ｐ・ジョーンズらと参加している。そして遂にはふたりの連名プロジェクトにまで発展を見せ、〝Plight〞と〝Premonition〞の２曲からなるアルバムの発表へと至った。年齢差は相当あるが、ふたりの感性はかなり近く、また、シルヴィアン自身がシューカイの影響を強く受けてしまった後なので、音楽的にはどちらが主導とも判断できない。シューカイのいつもの毒気が抜けてしまっているのがこのプロジェクトのカラーと言えるだろう。　(坂本)



DAVID SYLVIAN & HOLGER CZUKAY
Flux + Mutability
CD/Virgin CDVE43 '89年
ヴァージン・ジャパン VJCP-23078

まさか立て続けに出ようとは思いもしなかったシルヴィアンとのデュオ2作目。今回も"Flux"と"Mutability"の2曲入り。前作と違うのは、シューカイ人脈のゲスト達が参加していることで、リーベツァイト、カローリのみならず、ミチや、何とマルクス・シュトックハウゼンまで参加している。結果として当然のようにシューカイのカラーが強くなっており、特に"Flux"はまるでCANのニューエイジ・ヴァージョンといった趣だ。逆に"Mutability"の方はシューカイ自身は演奏に参加せず、殆どシルヴィアンのソロ演奏(リーベツァイトがフルート(!)で参加)になっているが、シューカイにとってはスタジオそのものが楽器であり、ミキシングに参加すればそれは彼の音楽になる。心地よい精神安定剤。 (坂本)



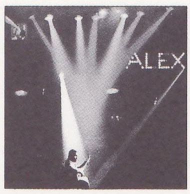
HOLGER CZUKAY
Radio Wave Surfer
CD/Virgin CDV2651 '91年
東芝EMI VJCP-28030

ソロ・アルバムとしては『Rome Remains Rome』以来4年ぶりの作品であるこの『Radio Wave Surfer』は、何とCAN時代から始まってシューカイ初のライヴ・アルバムだ。残念ながらメンバーのクレジットが全くないのだが、'87年1月のCanスタジオでのライヴと'84年12月のベルリンでのコンサートが収録されている。伝えられる所では、'87年の演奏にはリーベツァイトとカローリが参加しているらしい。サンプリング技術など影も形もない時代から同じことをやってのけて来たシューカイは、スタジオの魔術師だったが、そんな彼がオーヴァーダブなしのワンポイント・マイク一発録りで聴かせてくれるステージは、思いがけず飾り気のない想像以上に厳しい表情をしたポップ・ミュージックだ。とても生々しい。 (坂本)



HOLGER CZUKAY
Moving Pictures
CD/Mute CDSTUMM 125 '93年
アルファ ALCB-780

'80年代半ばにD・シルヴィアンと関わって以来、シューカイのアルバム・リリースは極端にペースが落ちてしまい、スタジオ録音としてはこれが6年ぶりになる。しかしそのブランクは決して無駄ではなかった。このアルバムの音楽はこれまでの作品とどこか違う印象を受ける。その最大の要因は、おそらく音楽のシリアスさにあるだろう。いつものあの玩具箱を引っくり返したような賑やかさが影を潜め、例えばLES VAMPYRETTESの陰惨さに還った上、過剰な装飾を廃し、表現が極度に深みを増している。これを傑作と言わずして何なのだろう。20分に及ぶ最終曲にはリーベツァイト、カローリと並んで、元PHANTOM BANDのヘルムート・ツェルレットの名前も見える(彼はC・ドーラン周辺でも活動している)。 (坂本)



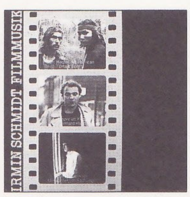
ALEX
Alex
LP/Pan 87 305 IT '74年

アレックスというドイツ人シンガー&ギター奏者のデビュー作。彼は他にソロで2枚、デュオで2枚をリリースした後、'80年代に入ってALEX ORIENTAL EXPERIENCEを結成し、更に6枚のアルバムを出している。トルコ音楽に強い関心を持つとライナー・ノーツにあるとおり、このアルバムでの音楽は、そちらを向いたSSW作。そしてプロデュースにホルガー・シューカイとヤキ・リーヴェツァイト。シューカイはエンジニアも兼任。演奏のクレジットはないものの、このベースとドラムはどう転んでも'74年のCANだ。二人のパターンがほとんどの曲で"Vitamin C""Pinch"と言う。アレックス自身もトルコ音楽とカントリー&ウェスタンが合致したような音楽性を持っていて民族音楽色豊か。中々の好作だ。 (松本)



PHEW
Phew
LP /Pass 3F-28002 '81年
CD/徳間 32WXD-104

最近のフューは何となく母性が芽生えたかのような柔らかさを感じさせてまたいいのだが、アント・サリーで"おはようアーント・サーリ、どうでもいいワ!"と突き離したフューもそれはそれでよかった。このアルバムでのフューはバックをかためたH.シューカイ、J.リーベツァイト、C.プランクに向って「ハゲ頭のおやじ」とか言ってミソクソだったのをよく覚えている。録音はプランクのスタジオにて。編集はプランクとシューカイが行っている。プランクはカチッとした空間幅をもたせた音造りをする人だっただけに、少しフューのはみ出しがおさえられている気がする。CANの二人も比較的寡黙で、双方の距離感が奇妙な静けさをつくり出したように思える。フューのものだが今は亡きプランクの記録でもある。 (松本)



IRMIN SCHMIDT
Filmmusik
LP/Spoon 003 '81年

CANのキーボード奏者のソロ・アルバム第1作目。タイトルどおり映画音楽を編集したもので、3本の映画から収録されている。A②の共同作曲を除いて、全ての作曲とアレンジ、プロデュースを行っている。とは言うものの、ゲストの演奏に依るところが多い作品である。Max Lasserのギターや Bruno Spoerriのサックス、Peter Keiserのベース、Walter KaiserのドラムとPAISTE-Cymbalsが一体となって、多彩な雰囲気を生み出している。なおA③とB⑤では、Michael Karoliもギター・ソロの後追い録音で参加している。哀愁の漂うギターのプレイが印象的な曲、サックスがリードをとるスローな曲、スピード感と緊迫感に溢れる曲、単調なビートを繰り返す曲など、幾つかのテーマを繰り返して多様に展開している。 (Helmut)



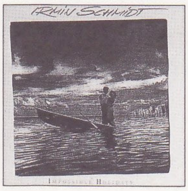
IRMIN SCHMIDT
Filmmusik Vol.3 & 4
LP/Spoon SPOON 018/19 '84年

イルミン・シュミットはCAN以降、TOY PLANETを結成していたこともあったが、主に映画音楽を手がけて現在に至っており、Spoonレーベルからは既に５枚以上の映画音楽集がリリースされている。これは'84年に発表された２枚組ＬＰであり、５作の映画を採り上げている。ヴォーカル・ナンバーも数曲あって（内２曲はハイナー・ミュラーの作詞）、決して単調な印象はないものの、音楽自体はCANに比べればちょっと集中力に欠ける。リーベツァイト、カローリ、それにリーバップの参加は当然として、マンフレート・ショーフやゲルト・デュデック、トリロク・グルトゥの参加はかなり意表を突く。どちらかと言えば、こうしたジャズ系のミュージシャンを採用した実験的なインストゥルメンタル・ナンバーが面白い。　（坂本）



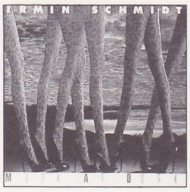
IRMIN SCHMIDT & BRUNO SPOERRI
Toy Planet
LP /Spoon 011 '90年
CD/Virgin Venture CDVE 48

実はイルミンの音楽は現在が最も素晴らしく、近年では他に類を見ない不気味な変態ポップスを発表している。CANで十年のフリーフォームをやったからとは言え、本来この人は『譜面』の人であり、シューカイと好対象と言えるのが一連の下手くそなスペース・サントラだったが、徐々にCANに囚われない曲を書き始めた。本作は全くインフォメーションの無い人物との共作による『トイ・プラネット』というアルバム。（ああややこしい）共演者がサックス奏者のため、非常に下品（失礼）な作品。イルミンにしては珍しく、シーケンサーのリフ等を使用したりしてこの後の活動の片鱗が見え隠れするが、やはり過渡期の産物といえる。ヴァージン傘下のニューエイジ・レーベル・ヴェンチャーからのリリース。　（中野）



IRMIN SCHMIDT
Impossible Holidays
LP/WEA 9031-72220-2 '91年

こいつは最高／不気味なポップスの傑作だ。一連のサントラと違い、しっかりとアレンジされたバンド編曲の作品なのだが、本来はベロベロの叙情ピアノや俗曲であるはずの収録曲が、イルミンのリード・ヴォーカル一発でひっくりかえっているのだ。彼はときたまCANでもヴォーカルをとったことがあるのだが、このアルバムでは全面的に歌っている。ルックスどおりのもう変態的としか言いようのない低音で、ヌメヌメとしたフレーズをなぞり、曲調のエセ・メランコリックなムードにピッタリなのだ。声量が無いだけにオン・マイクの録音で、つまりささやくような唄い方になっていて気持ち悪さ倍増である。ところで彼はインタビュー等から伺うと相当堅い奴なのだが、もしかするとこれはマジなのかも…。　（中野）



IRMIN SCHMIDT
Musk At Dust
LP/WEA IRMIN 1CD '92年

不気味メランコリック第二弾。つまりは確信犯な訳だ。アルバム・タイトルからしてエキゾチックである。フリーフォームな部分は全く無く、すべてきちんと作・編曲された楽曲で、例によって全曲共ヴォーカルはイルミン自身。無国籍な民族音楽的旋律にまつわりつく彼の声は、かつてのCANのダモやムーニーと互角の際立った魅力がある。シューカイが不参加（どうやらこの二人がうまく行ってないらしい）のため録音は普通のもので、音楽的に目新しい手法がある訳では無いにもかかわらず、これだけ異質の作品というのも珍しい。彼らほど活動が長いと永年のファンでも個々のソロ作品までフォロー出来なくなるものだが、前作と合わせ必聞盤である。CANの理性面を発展させ、完成させた作品とも言えよう。　（中野）



DUNKELZIFFER
In The Night
LP/Fünfundvierzig 4502 '84年

このバンド自身は前後にも作品を発表しているのだが、この2ndと次作にはダモ鈴木が全面的に参加しており、日本語／をまじえて歌っている。意外と聞かれていないようだが、これが良いのだ／彼のメロディ・ラインたるや、ありがちなどーでもいいフレーズなのだが泣かせる、グッとくるのである。バックの演奏も古臭く、実にジャーマン二流的な雰囲気があり、カンのイメージをよく抽出している。ただしプログレの要素は皆無、カンのガレージ的な部分、又はダモ鈴木を好きな人間だけが聞けば良い。（ラリって書いたに違いない）ジャケットはもちろん彼による物で、実にきたない字でタイトルやクレジットが日本語で書き込まれている。初回のみ螢光インクを使っているのでマニアは要チェツク。　（中野）



DUNKELZIFFER
III
LP/Fünfundvierzig 4523 '86年

前作との間には全曲アルバム未収録の12インチ、『You Make Happy』がありこれにも当然ダモが参加して日本語でゴチャゴチャ訳の解らやいことをしゃべっている。このアルバムでもバンド自体はCAN同様やはりフリーフォームのセッションが音楽性らしいのだが、そんな事はダモの存在ひとつでぶっとんでしまっている。２曲目『秋のある日に』などはマイナー調のど演歌ロックである。一体他のドイツ人メンバーはどういうつもりだったのだろう？裏ジャケにスラムのような場所で演奏する20枚位のステージ写真があり、髪の短いダモの写真が何枚かあるが失禁モンである。この後ダモはグループを離れ、自身のバンドを結成するのだが、『ステージでの自由な演奏』が目的との事で録音作品は発表していない。　（中野）

FAUST

●榎本隆一



破るべきタブーの為に

1960年代後半、世界は大きく変わろうとしていた。俗にいう文化大改革、ヒッピー・ムーヴメントが世界中を呑み込んでいったのである。

愛と平和、そしてドラッグ、共同体(コミューン)、サイケデリック。若者は夢を見た。ロックが生まれてから初めて体験する大きな夢。「ロックで世の中を変えるのだ」。世界中のあらゆる文化が影響を受け変わっていった。しかしそれは夢以上の大きな失望とともに10年と続く事なく消えさってゆくのである。

ビートルズの登場によって、あらゆる意味でロック・ミュージックは大きく変わっていった。そして世界中の誰もが違った方法で彼らを超えようとしていた。ビートルズ自身でさえ、そう考えた様に。'60年代末、そんな時代であった。

ドイツのジャーナリスト、ウーヴェ・ネッテルベックにも、ひとつのアイディアがあった。そして彼にはそれを実行できるだけの力があったのだ。

彼は独ポリドールから多額の金を提供させ、ハンブルグとブレーメンの間にあるヴィメという街の廃校にレコーディング設備をそなえ、ファウストというバンド、それに有能なエンジニアであるクルト・グラウプナーらと共にコミューンを形成したのである。

共同生活、いつでも音楽できる環境、そしてそれをすぐに録音する事ができる状況、バンドが持つ全く独自な音楽性。——これが彼らの夢を実現させるものののすべてであった。こんな事がまだ可能であった'71年初頭の事である。そして彼らは日々練習、録音に没頭していった。6ヵ月がたって、ファウストはハンブルグ・ミュージック・ホールにおいてデビュー・ライヴを行い、同年9月、1stアルバム「Faust」を完成させた。

このアルバムでは、細かい曲のモチーフを完成させずに継いでいき、作為的に再構成する、という手法がとられている。よって片面1～2曲という作りになってはいるが、トータリティを考えて編集されているので弛(だ)れるところが少なく、意外な程に聴きやすい。恐らく、長々とした演奏を録りっぱなしにして最終的に編集・加工して作られたものであろうが、そういったコラージュ、あるいはカットアップの手法を曲作りの段階において、すでに取り入れている要素も聴く事が出来る。また、

極度に異化された音の数々を見事にコントロールしているエンジニアのクルトと、編集作業を曲の一部にさえしてしまっているウーヴェの役割も見のがす事は出来ない。このような点でも彼らは共同体バンドとしての存在を全うしているといえよう。よってファウスト名義で出たアルバムのすべてに、ウーヴェ、クルトの名があるのは当然である。

アルバム完成も束の間、ウーヴェはハンブルグに来ていた英国人アンソニー・ムーアのソロ・アルバムをプロデュースする事になる。言わずと知れたスラップ・ハッピーのメンバーであるアンソニーは、アンダーグラウンド・シネマのサントラの仕事を通じてウーヴェやファウストのメンバーと知り合ったらしい。そしてウーヴェの提案により「Faust」完成直後の'71年10月、ヴィメにてその1stソロ「クラウドランド・ボールルーム」が作られている。クレジットにはファウストのヴェルナーやギュンターの名もある。連中は、アンソニーの2ndにも、そして発売されなかった3rdソロ、さらにスラップ・ハッピーの1st、2ndにつきあっている。

ファウストとしては、アルバム発表後ドラマーの1人アルヌルフが脱退するが、翌'72年の活動には目をみはるものがあった。すなわち3月に2ndアルバム「So Far」の録音、5月から6月にかけてヴェルナー、ジャン・エルベ、ギュンターの3人はウーヴェ/プロデュースによるスラップ・ハッピーの1stアルバム「Sort Of」のレコーディング、10月には映像作家(ビジュアリスト)トニー・コンラッドとヴェルナー、ジャン・エルベ、ルドルフの3人が共演。ウーヴェのプロデュースによって、これはトニー・コンラッドwithファウストという形で発表された。その間に、アンソニーの2ndソロ「Secrets of The Blue Bag」を作り、さらに自分達の解散後に発表される事になってしまったレコーディングも進めている。尋常ではないスケジュールである。

さて2ndアルバム「So Far」であるが、1stのそれとは全く異なったコンセプトにより作られている。すなわち、それぞれの曲のモチーフを一応完成させた形で残し、全9曲のバランスによってその特異性を示した作りになっているのだ。それぞれの曲が実に良く出来ており、彼らのアルバムの中では最も聴きやすく、耳に残りやすい作品となっている。このアルバムからは"So far/It's a bit of Pain"がシングルとしてカットされた。"It's a〜"は、未収録曲であったが、のちに"Ⅳ"に再録されている。

この2ndアルバムは、1stと対になる事によって、ファウストとしての一つの独自な世界を示したと言えよう。結局彼らが解散までに作ったアルバムは、全てこの2枚からのモチーフの延長線上にある。蛇足ではあるが、この2枚のコンセプトを2枚組にして発表、デビュー出来た幸福なバンドがマザーズ・オブ・インベンションである。

'73年ファウストはドイツ・ポリドールを離れ、発足まもない英ヴァージン・レコードと契約する。ヴァージンはレーベルのキャンペーン用のアルバムの一つにファウストを起用した。ウーヴェは録り溜めておいたヴィメでのマテリアルに新たに音を加えたりしながら編集・加工し提出した。このアルバムは「Faust Tapes」というタイトルで、バンドのプロモーションとレーベルのキャンペーンの意味も含め48ペンスという超低価格にて発売された。メンバーは、このアルバムをバンドの3rdと見なされる事を望まなかった。急いで作られた事もあるだろうし、基本的にボツ・テイクである上、アレンジし直す事も出来なかったのだろう。ウーヴェの編集にしても少々荒く、若干弛れる所もある。'71年6月から'73年6月までのマテリアルを使用しているが、音は2ndアルバムの延長であり、1stのカオス的質感は出ていない。すぐれた楽曲も多く含まれており、アレンジ・編集・加工にもっと時間をかけていれば3rdアルバムとしても充分な内容であったと思える。

ヴァージンは、「Tapes」の発売にあわせて、ファウストの英国ツアーを開始させた。そしてツアー終了の6月より、マナー・スタジオにおいて次のアルバムの録音が開始された。「Faust Ⅳ」である。彼らにとってはヴィメ以外の場所での初めてのレコーディングであり、もはや自分達のペースで進める事は出来なくなっていた。このアルバムでは、曲作りの段階で、すでに反復を溶け込ますという2ndの手法を進めた曲も数曲みられるが、B-2は2ndの曲にプラス・アルファされたものであり、B-5もシングルからの曲の再録である。イギリス発売という事を考えに入れたとしても、本来の彼らの姿勢から言えば不本意であったのではあるまいか。しかしながら全体的なクオリティは極めて高く、それぞれの音が溶けあうように流れ、丁度1stと2ndを混ぜ合わせ精製したような感じになっている。

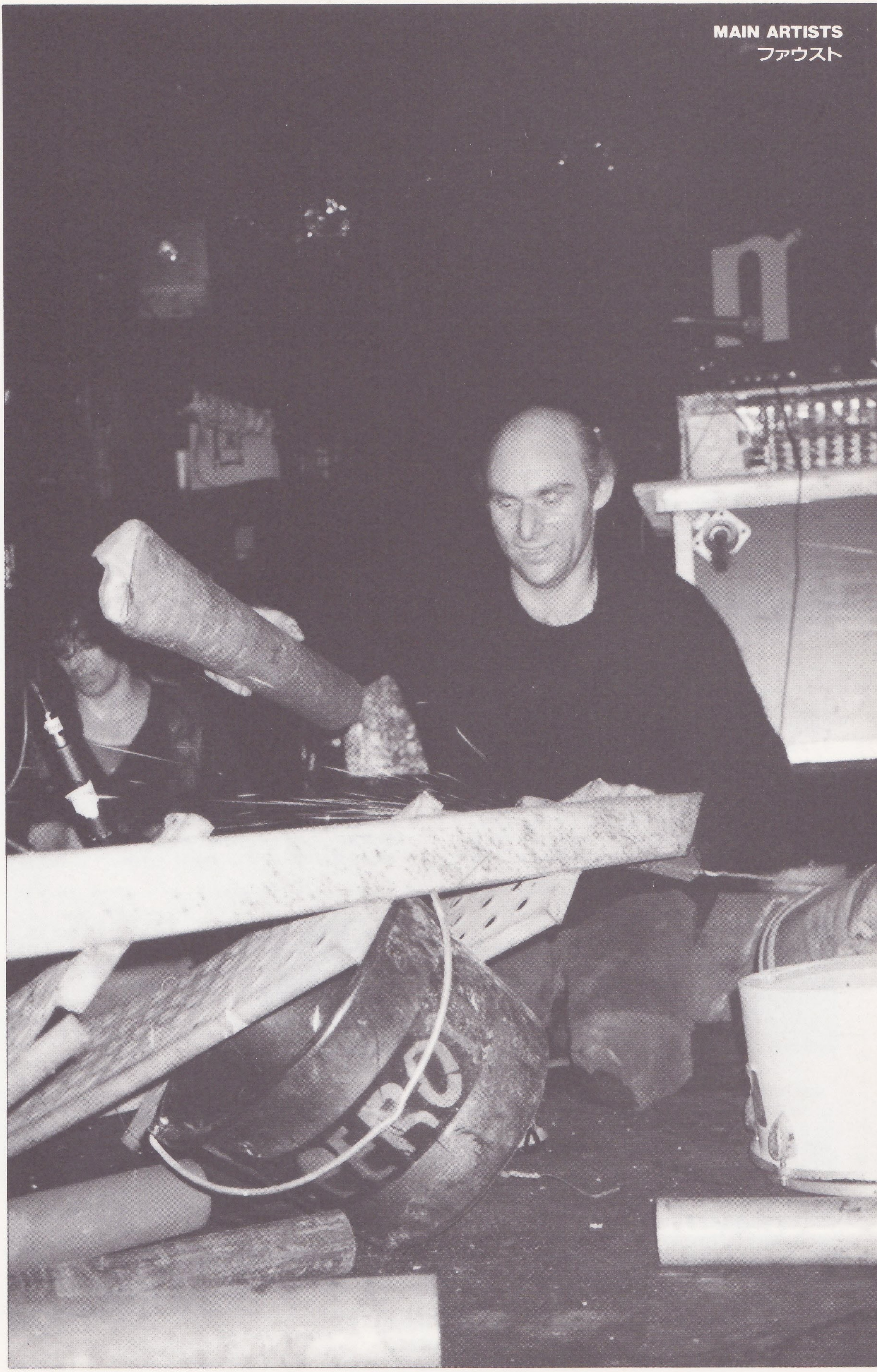
アルバム完成後の9〜10月にかけてファウストはヘンリー・カウとのプロモーション・ツアーを行うが、メンバー・チェンジを繰り返すようになり、翌'74年春グループのまとめ役であったウーヴェがついに匙を投げてしまいバンドを離れ、ファウストは自然消滅へと至るのである。時代は最早、共同体のような存在である事を容認してはくれなかった。

結局ファウストとは何だったのか。彼らの音楽性の根底に常に流れていたもの、それは徹底したプラクティカル・ジョーク、あるいはアイロニカルな方法論的展開であったと言えるだろう。

——こうして彼らの夢は一つの幕を閉じた。しかし次は俺達の番であるという事を忘れないで欲しい。

ロックとは、あなた方にとって何であるのか、その問いに対し「生き方」あるいは「アイデンティティー」であると考える者にとって、ファウストの残した音は、まぎれもなく体験すべく作られたものであると言えよう。

まだまだ破るべきタブーは無数にあるのだから。





FAUST
Faust
LP /Polydor 2310 142 '71年
CD/ポリドール POCP 2155

透明ジャケットで創られたファウストのファースト・アルバム。彼等は本作、「So Far」「Tapes」「Ⅳ」と計4枚のリーダー・アルバムの他、トニー・コンラッドとの共作盤、アンソニー・ムーアの１stアルバム、スラップ・ハッピーの1st等にも参加していることが知られている。様々なモチーフを細断し、無作為に再構成するという手法を持つファウストの特異性はこの１stアルバムにおいて、エフェクトの使用を伴い最も明確に表れている。ことファウストに関しては諸説が粉々としているが、的確な表現は未だに成されてはいないように思う。ただ、プロデューサーであるウヴェ・ネッテルベックの役割もみのがすことはできないと思うがどんなものであろうか。
（山崎）



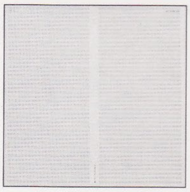
FAUST
So Far
LP /Polydor 2310 196 '72年
CD/ポリドール POCP 2156

ファウストの２作目。ジャケット、レーベル・マーク等全てが黒一色で統一され、９曲各々に対してのイメージ・イラストが添えられている。前作が継ぎ目なしの比較的長い曲の中に様々な音響コラージュを形成していたのに対し、本作では９曲という小品に細分され、各曲はそれぞれ独立した小曲として分離している。しかしこの場合、批評は各曲に対して成されるべきではなく、全体を見回して始めて成立するものである。ベルベット・アンダーグラウンドからの影響を感じさせるファウストであるが、ベルベットがルー・リードという強い個性によってひきずられるのに対し、ファウストには全体としての意志がバランス良くブレンドして一つの完結をみている。
（山崎）



FAUST
Tapes
LP /(U.K.)Virgin VC 501 '73年
CD/(U.S.)Cuneiform ReRF 2 CD

アルバムの１音目と最後の１音が物語るのは、このアルバムが続いている中のある部分だということ。それは、もしかすると彼等が見せかけた作為なのかもしれない。この３作目はコラージュによってひたすら並列される内容を持っている。デビュー作の立体構造はなく、始まりも終りもない連続性がある。FAUSTはそうして羅列し続けることで起承転結を排除し、通俗の音楽に対して明解な態度をとっているかにも思える。そこが彼等の目くらまし、もしくは成り行きまかせのユーモアなのか、その境目をリスナーに悟られず尻尾を巻くところが、まさしくFAUSTだ。少なくともアルバムのコンセプトは、全作中最も明解なだけに、デビュー作と並んで代表作としたいところ。突起はない。徹底した垂れ流しコラージュ。　（松本）



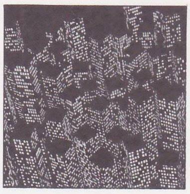
FAUST
Ⅳ
LP /(U.K.)Virgis V 2004 '73年
CD/Virgin CDV 2004

いささか自暴自棄なほど暴力的だと思わずにはいられない。コラージュを支えるべきしなやかなフモールや気紛れな悪意、その実したたかな計算は影を潜め、専ら後戻りだけはしないという決意のもと、演奏は集団自殺するレミングの群れのように、先を争って加速を続ける（盲いてあることが、全員共通の基盤となり演奏を支える）。いつもなら、さりげない流れの中に、一見それとはわからぬように仕組まれる亀裂や陥穽といったミクロな暴力（これに不意打ちを食らうことこそが〝ファウスト〟を聴く喜びなのだ）は、ひとつに凝集して沈澱してしまったかのようだ。サックスをはじめとした演奏性の突出が、このような事態を招いたのだろうか。取りつく島なく横たわる音楽の残骸は、どこか預言者的ではある。　（福島）



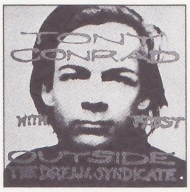
FAUST
Return Of A Legend Munic & Elswhere
LP/(U.K.)Recomended RR/25 '86年
（録音'73〜'75年）

周到な計算も、頑なな反復も、ダダイスティックな破壊的身振りも、白昼夢に耽るようなルーズな退廃も…ここには何ひとつ全体をおし包み、あるいは結び付けようとするものはない。粉々に飛び散った音のかけらが、鋭利な切口にギザギザとした輝きをたたえ、浜辺に打ち上げられた残骸のように、半ば砂に埋もれ、あるいは剝き出しのまま横たわっている。それを「まとまりのなさ」と受け取れば、本作品がグループ「消滅」後の'75年までの長期間にわたる未発表テープからの編集盤であることに原因を求められもしよう。しかし、〈ファウスト〉とは常にロマンティックな心象風景や物語なぞに抽象できぬ、こうした過剰な細部の荒涼たる集積ではなかったか。ちなみに初回1000枚はホワイト・ヴィニール盤。
（福島）



FAUST
71 Minutes Of
CD/ReR Megacorp ReRF1CD '89年
（録音'71〜'75年）

本ＣＤは前記ＬＰ『Return Of...』から１曲を除いた残りと、同じくReRから1988枚限定でリリースされた『The Last LP』(ReR36)のカップリングであり、また後者自体が、やはりReRからリリースされた、いずれも『パーティ３』テイクを音源とする３種の７インチ盤（２枚組１種とそのバラ売り）に３トラックを追加したものである。それゆえ、ここでは後者についてのみ述べることとしたい。ゆっくりとしたオーヴァーラップのうちに異なる速度とうねりが交錯する独特のルーズな浮遊感が全体を香るように浸しており、オモチャ感覚のエレクトロニクスとヴォイスがふわふわと浮き沈みしながら、甘く密やかな耳鳴りを連れてくる。ちなみに除かれた１曲は切なくもチープなコラージュ・ナンバー。
（福島）



TONY CONRAD WITH FAUST
Outside The Dream Syndicate

LP/(U.K.)Caroline C1501　'73年
CD/(U.S.)Table of the Elements Li

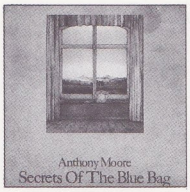
黒コマと白コマ（透明）のみから成るコンラッドの実験映画『フリッカー』を観ていると、２種類のコマが交替する度合により、チカチカと画面がちらつく感じと、むしろ点滅する画面に照らし出されている感じが交替する。これはパルスの間隔を狭めていくと、ある点から持続音のピッチ変化として感じられる現象の視覚への置換である。また本ＣＤ解説によれば、コンラッドにとって「協和」とは、絶えず自己修正しながら、それへ向かって接近していく持続した過程であるという。この永久革命的視点に立てば、単一のコードが、アキレスと亀の競走のように永遠に続く、極微小なポリフォニーを生み出す種子となる。本作の波動に浸る時に感じる得も言われぬ豊饒さは、両者の結合により生み出されたものと言えよう。（福島）



ANTHONY MOORE
Pieces From Cloudland Ballroom

LP/Polydor 2310162　'71年
CD/ポリドール 23MM 0238

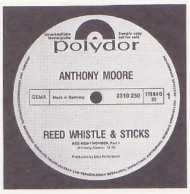
Ａ面を占めるヴォイス・ピースでは、カリヨンのように同一和音を鳴り響かせ続けるピアノを背景に、３人の歌手（多重録音使用）が各々繰り返す言葉遊びのような呪文が、自然発生的にずれや遅れをはらみ、もつれ絡まって、至るところ隆起や陥没といった不整合を生じながら、複雑極まりない豊饒をもたらす。コンラッドの「協和」音楽と仕組みは同じだが、脱神秘化してみせた聡明さが光る。また、Ｂ①ではシンバルの弓弾きによる倍音が熱帯植物のように被い茂り、Ｂ②では複数のキーボードの編み上げるミニマルな組みひも模様が、ゆっくりと巡りながら次々に新たな面を見せていく。ここで音楽は簡単な思いつきから自然成長的に繁茂し、自らをかたちづくる。そこに音色の選択によるごく淡い彩色が施される。（福島）



ANTHONY MOORE
Secrets Of The Blue Bag

LP/Polydor 2310 179　'72年

スラップ・ハッピィのアンソニー・ムーアのセカンド・ソロ。この頃のムーアは現代音楽に興味を持っていたようで、そこからフィードバックによって本作を制作した。本アルバムは大きく分けて３つの楽章から成っているが、メインになるのは「ドレミファソ」の単純なくりかえしである。それが楽章によってヴァイオリンから女性ヴォイスに変化する程度で、そのテーマに、さらに２声程の対旋律がのっている。恐ろしい程に人をくった構成。このあたりの感覚は、ジョン・ケージあたりからの影響とも思われる。こんな大胆で売れもしない作品をリリースした独ポリドールの器の大きさに感心する。商業主義的な発想からは生まれ得なかったであろう、胸のすくような作品として僕は常に高く評価している。（山崎）



ANTHONY MOORE
Reed Whistle & Sticks

LP/Polydor 2310 250　＊promo only

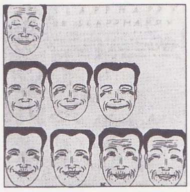
スラップ・ハッピーのアンソニー・ムーアは、70年代の初期——すなわち前衛的なロックが主流をなしていた時期ですら、異端的に思えるような、新しい感覚を持った特異なアーティストであった。その業績は今やFAUSTと共に伝説にすらなりつつある。彼が独ポリドールに残した３枚のアルバムは、ファウストのメンバー及びネッテルベックを加えて、とびきり前衛な作品であり、ドイツ現代音楽の系譜の上に位置するものである。本アルバムはポリドール時代の３枚目で、正規盤が創られずにオクラ入りしてしまったいわく付きの作品である。ゾッとするような感覚、そしてリアルな録音技術——恐しい程のセンスである。ヴァージン以降のソロ・ワークよりも、彼の才能の切れを感じる好作品としてあげておきたい。（山崎）



SLAPP HAPPY
Sort Of

LP/Polydor 2310 204　'72年

スラップ・ハッピィの持ち味は、一見、なんでもないようなサウンド構成の中に、隠し味のように微量につめ込まれる非日常的な幻想性にある。微量におさえることによって、逆に効果が最大限に発揮されているのだから、試みは成功したに違いない。カヴァー・アートをじっと眺めると、一見、ありきたりの風景画のようだが、実は３つに分かれており、遠近感がゆがめられている。音のほうもそんなイメージだ。基本的にポップなサウンドのヴォーカルものである。完成度としては次作のほうが上であると思うが、何度聴いてもあきのこない、このファースト・アルバムも捨て難い魅力を持っている。（山崎）



SLAPP HAPPY
Acnalbasac Noom

LP/(U.K.)Recommended R.R. 5　'80年
CD/ReR SHCD

「Sort Of」「Slapp Happy」に続く、グループ３枚目のアルバム。実質的には「Slapp Happy」の別テイク集とも言えるもので、11曲中10曲が重複しており、アルバム・タイトルの「Acnalbasao Noom」も、両アルバムの１曲目の曲「Casablanca Moon」のつづりを逆にしたものである。ヴァージン・レーベルとの関係で、「Slapp Happy」が再発出来なかったため、このようなアルバムがリリースされたと思われる。ファウストのメンバー、Jean Hervé Peron(b)、Zappa Diermaier(ds)、Gunther Wüstoff(sax)のバック・アップを受け、ダグマー(vo)、アンソニー・ムーア(g, key)、ピーター・ブレグヴァド(g, vo)が作り出したサウンドは、やはり、ポップでノスタルジック、そして、粋である。前作よりやや明るい雰囲気。（賀川）

GURU GURU

●松本昌幸

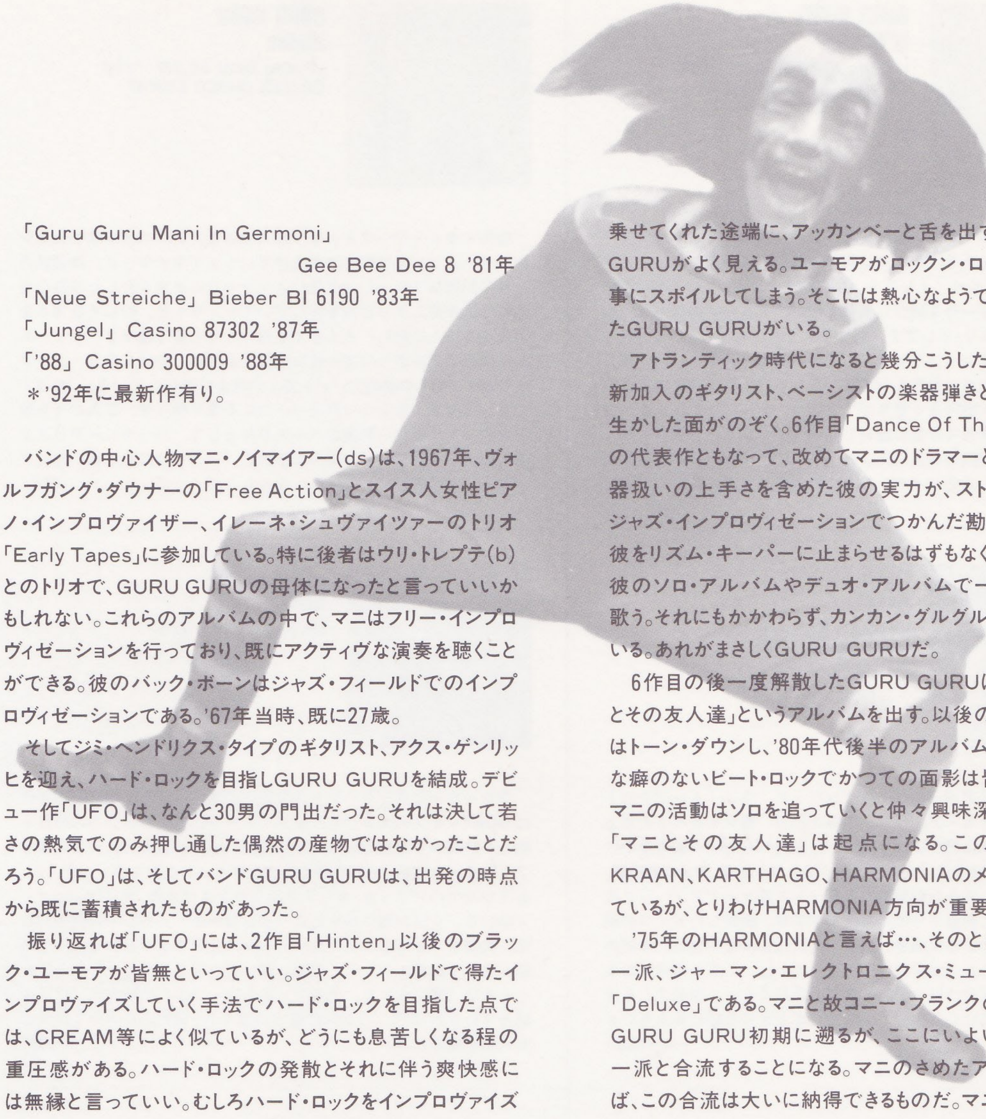
ブラック・ユーモア。これはジャーマン・ロックの斬り口としては大いに活用できる。CANの歪さからベラフォン・レーベル系のカヴァー・ワークにうかがえるグロテスクな絵、はたまたKRAFTWERKの着せ替え人形ふうのサウンド・アプローチまで、多くの所でこのユーモアが見え隠れしている。ジャーマン・ロックは一点集中、局部肥大といったシリアスさの一方で、意外とこれを笑い飛ばすような軽さを同時に持ち合わせることがある。両極端、支離滅裂、性格不明なのも、そんな所から端を発している。

ずばり書いてみると、GURU GURUはCANに近く、むしろKRAFTWERKに近い。AMON DÜÜLとは異質。これはもちろん音楽の形の話ではない。バンド・コンセプトでの話だ。バンドが音楽をどのような態度で産み出しているか、どのように扱っているか、という点での話。GURU GURUの音楽は、例えばAMON DÜÜL系の全方向にのめり込む時の陶酔感が稀薄だ。どこかで茶化してこちらの酔いをとぎれさせる。その連続だ。しかもその茶化しは時には悪意めいたものをすら感じさせる。それはCANに通じ、そのさめた態度はKRAFTWERKが「Autobahn」以後で見せ切った擬態振りに通じる。GURU GURUの最も特徴づいた性格とは、つまり全力を尽くしている自分をもう一歩引いた位置からながめて笑い飛ばす、そんな悪意めいて、自虐的でもある極めてさめた視線にある。一般にGURU GURUは4作目「Guru Guru」までとは云われているが、もしも、彼等つまり中心人物マニ・ノイマイアーのアプローチが、このブラック・ユーモアに大いに関係すると仮定した時、なるほど以後の茶化されたアルバム群も彼等らしい。アクス・ゲンリッヒの重金属質のギター音がなくなった後もこの部分が変らずあった。

簡単にディスコグラフィーを書いておこう。

「UFO」 Ohr OMM 56005 '70年
「Hinten」 Ohr OMM 56017 '71年
「Kanguru」 Brain 1007 '72年
「Guru Guru」 Brain 1025 '73年
「Don't Call Us (We Call You)」 Atlantic ATL 50022 '73年
「Dance Of The Flames」 Atlantic ATL 50044 '74年
「Mani Und Seine Freunde」 Atlantic ATL 50157 '75年
「Tango Fango」 Brain 1089 '76年
「Globetrotter」 Brain 60 039 '77年
「Live」 Brain 80 018 '78年
「Hey Du」 Brain 60 187 '79年





「Guru Guru Mani In Germoni」
Gee Bee Dee 8 '81年
「Neue Streiche」Bieber BI 6190 '83年
「Jungel」Casino 87302 '87年
「'88」Casino 300009 '88年
＊'92年に最新作有り。

バンドの中心人物マニ・ノイマイアー(ds)は、1967年、ヴォルフガング・ダウナーの「Free Action」とスイス人女性ピアノ・インプロヴァイザー、イレーネ・シュヴァイツァーのトリオ「Early Tapes」に参加している。特に後者はウリ・トレプテ(b)とのトリオで、GURU GURUの母体になったと言っていいかもしれない。これらのアルバムの中で、マニはフリー・インプロヴィゼーションを行っており、既にアクティヴな演奏を聴くことができる。彼のバック・ボーンはジャズ・フィールドでのインプロヴィゼーションである。'67年当時、既に27歳。

そしてジミ・ヘンドリクス・タイプのギタリスト、アクス・ゲンリッヒを迎え、ハード・ロックを目指しGURU GURUを結成。デビュー作「UFO」は、なんと30男の門出だった。それは決して若さの熱気でのみ押し通した偶然の産物ではなかったことだろう。「UFO」は、そしてバンドGURU GURUは、出発の時点から既に蓄積されたものがあった。

振り返れば「UFO」には、2作目「Hinten」以後のブラック・ユーモアが皆無といっていい。ジャズ・フィールドで得たインプロヴァイズしていく手法でハード・ロックを目指した点では、CREAM等によく似ているが、どうにも息苦しくなる程の重圧感がある。ハード・ロックの発散とそれに伴う爽快感には無縁と言っていい。むしろハード・ロックをインプロヴァイズすることで崩していくようなベクトルが働いている。それはTANGERINE DREAMのデビュー作に似て、独自の語法を確立する前夜の通過儀礼にも思えるものだ。一般に出所不明とされるジャーマン・ロックは、ロック、ジャズ、現代音楽等様々な所を崩した地点から出発した例が多い。

こうしてロックでありながら非ロックだった彼等は、次作「Henten」から勢いよくロックを笑い飛ばすようなバンド・コンセプトのもと、遂に4作目「Guru Guru」に至る。

4作目「Guru Guru」は実にGURU GURU妙技に尽きる。ジミ・ヘンドリクス・ギターを解体し、散らばった残骸を音響効果、ギミックとして再構築した傑作〝Der Elektrolurch〟(電気蛙)を収録したこのアルバムは、しかしA面のロックン・ロール〝Medley〟においてGURU GURUのアプローチが、とても鮮明だ。実に気持ち良さそうにロックン・ロールを演っている。多分趣味で本人達も好きなのだろう。ところがこれが笑える。吹き出してしまうのだ。アクス・ゲンリッヒの重く切れの鋭いギターやマニの駆けずり回るような巧妙なドラム等で乗せてくれた途端に、アッカンベーと舌を出す、そんなGURU GURUがよく見える。ユーモアがロックン・ロールの乗りを見事にスポイルしてしまう。そこには熱心なようで思いっきり引いたGURU GURUがいる。

アトランティック時代になると幾分こうした傾向が後退し、新加入のギタリスト、ベーシストの楽器弾きとしての上手さを生かした面がのぞく。6作目「Dance Of The Flames」はその代表作ともなって、改めてマニのドラマーとしての個性、楽器扱いの上手さを含めた彼の実力が、ストレートに伝わる。ジャズ・インプロヴィゼーションでつかんだ勘のようなものが、彼をリズム・キーパーに止まらせるはずもなく、これは近年の彼のソロ・アルバムやデュオ・アルバムで一層表情豊かに歌う。それにもかかわらず、カンカン・グルグルと氷上ではねている。あれがまさしくGURU GURUだ。

6作目の後一度解散したGURU GURUは、'75年に「マニとその友人達」というアルバムを出す。以後のGURU GURUはトーン・ダウンし、'80年代後半のアルバムなど、ありきたりな癖のないビート・ロックでかつての面影は皆無だが、むしろマニの活動はソロを追っていくと仲々興味深い。その意味で「マニとその友人達」は起点になる。このアルバムにはKRAAN、KARTHAGO、HARMONIAのメンバーが参加しているが、とりわけHARMONIA方向が重要。

'75年のHARMONIAと言えば…、そのとおりCLUSTER一派、ジャーマン・エレクトロニクス・ミュージックの傑作「Deluxe」である。マニと故コニー・プランクの出逢いは既にGURU GURU初期に遡るが、ここにいよいよCLUSTER一派と合流することになる。マニのさめたアプローチを思えば、この合流は大いに納得できるものだ。マニは最初からロックン・ローラーではない。以後、メビウス、プランク辺りと組み「Zero Set」等を出す。

そして何よりバンドGURU GURUの勢いを上回るような近年のソロ・ワークが、かつての〝カンカン・グルグル〟から中枢をとり出したかのように、〝居る居るグるグるマニなのだ〟牧瀬理穂だった事は、記憶に新しいではないか！と来る。



GURU GURU
UFO

LP /Ohr OMM 56 005　'70年
CD/ZYX CD 556005-2
　/キング KICP 2736

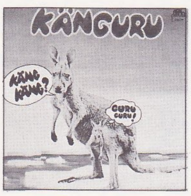
60年代後半イレーネ・シュヴァイツァー・グループ、グローブ・ユニティーといったフリー・ジャズ界で活動していたマニ・ノイマイアー（Dr）、とウリ・トレプテ（B）がアクス・ゲンリッヒ（G）と共にこのデビュー作を制作したのが70年。グループの代弁者であるマニ、30歳、ウリ・トレプテ、29歳時点での作品である。ポポル・ヴフのフローリアン・フリッケ、カンのホルガー・シューカイ等、30歳前後にして独自の世界を切り開いている点、前歴や後の足跡を考慮すると様々な興味ある言及ができよう。本作にはグル・グル独特のユーモアは皆無で非常に重苦しい空気がヘヴィーなサウンドと合い溶け込み、実験的作風（Ｂ①）、マニのフリー・ジャズを引きずるドラミング等、初期ドイツ・ロックの代表作と言える。　（松本）



GURU GURU
Hinten

LP /Ohr OMM 56.017　'71年
CD/ZYX OHRCD 556017

窒息するようなヘヴィーなうねりの中を、テクニカルな小技とシンコペーションの連続で泳ぎ抜けていくノイマイヤーと、浮遊感のある夢幻的なフレージング及びエレクトロニクスを介した多彩な音色と音像操作により彩色を施していくゲンリッヒ。むしろ希薄さを志向する二人に対し、あくまでもねっとりと重く黒々とヘヴィーであり続けるグルグルの音の核に位置するのは、やはりウリ・トレプテである（彼らの乖離は『ＵＦＯ』の時より進行している）。彼はくぐもった引きずるような声をベースにも乗り移らせ、三人のうち最も奥まった位置から剛直なパルスを発出して、ハーモニーやリズムのではなく、サウンド総体の下部構造（ブルースにまみれ、エレクトロニクスに焼け爛れたそれ）をかたちづくっている。　（福島）



GURU GURU
Känguru

LP /Brain 1007　'72年
CD/Brais 5117372

マニ・ノイマイアー、アクス・ゲンリッヒ、ウリ・トレプテのトリオ編成でのラスト・アルバム、通算３作目。裏ジャケットの氷上で元気よく能天気に飛びはねるマニこそ、GURU GURUの真骨頂か！そして愛想をつかせたか？トレプテはグループを去る。1stの重圧感、2ndの発散、そして今回露見したドロ〜ンと浮かんでヌメ〜ッと沈んでいく感触、と黄金トリオの成す事やる事、徹底したドイツの相が出ており、ファンは大満足。好調なGURU GURUである。今回のメディテーショナルな空気は次作「Guru Guru」へわずか延長されるとは言え、これはやはりトレプテの色なのだろうか。派手さこそ少ないが、意外と茶化した部分も少なく、まとまりを感じる人もいるかもしれない。　（松本）



GURU GURU
Guru Guru

LP/Brain 1025　'73年

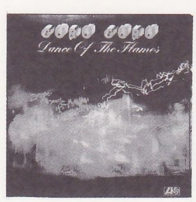
フリーキーなロックバンドは独国内に常に存在する様で、'80年代にもDAFタイプのエレクトリック・ビート以外にグルグルの影響を明らさに受けていると思われるものがいくつか有った。彼らの最もフリーキーな部分はOhrの再発により耳にされた方も多いと思うが、もうひとつのブラック・ユーモア的なセンスは本作、又は「Kanguru」で聴ける。Ａ面の毒に満ちたロックンロール・メドレーは代表的な例。特筆すべきＢ①で、ギター、ベース、ドラムスと言うロックの最も平凡な編成において、想像し難い音世界を作り上げている。タイトルは「電気ガエル」の意で、その通りカエルの聴覚化（!?）を試みているわけだ。（ちなみに彼らは後々も、独国内において絶大なる人気を保った。）　（中野）



GURU GURU
Don't Call Us, (We Call You)

LP/Atlantic ATL 50 022　'73年

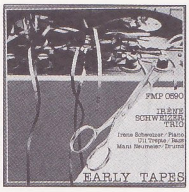
グルグルの５枚目。メンバーはマニ・ノイマイアー(ds)、アクス・ゲンリッヒ（g）、ハンス・ハルトマン（b）のトリオ。初期グルグルの看板ギタリスト、ゲンリッヒ最後のアルバムになる。その割にはおとなしい。前作までのユニークなプレイも重いトーンもほとんど聴けない。それでも'70年代後半以後の割とどうでもいいサウンドにはなっていなくて、違った意味で聴き所はある。Ｂ面には能天気なユーモア全開の曲もあるが、ロング・ナンバー２曲のＡ面では意外にきっちりと演奏が聴ける。マニのかけずり回るようなスティックさばきも健在。次作「Dance of The Flames」に通じる細やかな音造りだ。ただのロック野郎ではない一癖あるサウンドが、さすがグルグル。フリー・パーカッション・プレイを挟むＡ①が聴き物。　（松本）



GURU GURU
Dance Of The Flames

LP/Atlantic ATL 50 044　'74年

グル・グルには12作のアルバムがあるがその間に２度の解散を経験している。１度目の解散は本作後であり、この時点でオリジナル・メンバーは既にマニ・ノイマイアーを残すのみである。初期４作以外は音の軽薄さ故にいささかマニの冗談も行き過ぎに感じられる中にあってこの６作目はホウシェンク・ネヤデプールのロック・スピリット溢れるジャズ・ギターを中心に真剣な演奏を繰り広げている。実にシャープな音を切り出す攻撃的なギターとハンス・ハルトマンのベースにいつになく巧みなマニのドラムが絡み最もスマートな形のグル・グルが演出される一方、民族打楽器を多用した曲等にも整合感を生んでいる。グル・グルすなわちマニは彼の最もテクニカルな作品＝本作を発表後、長く低迷し現在に至っている。　（松本）



IRENE SCHWEIZER TRIO
Early Tapes
LP/FMP 0590　'78年(録音'67年)

彼女独自のピアノをリトル・パーカッションの集合体のように扱う仕方と、少ない音数や簡素な音型により最大限印象的な効果を与えるエコノミックな演奏ぶりは、ここで既に完成されている。もはや伝説となった〝フェミニスト・インプロヴァイジング・グループ〟('77年)や、最近の〝カネイユ〟('86年)といった女性ばかりのグループでの活動は、リンジー・クーパー(reeds)、マギー・ニコルス(vo)、ジョエル・レアンドル(b)ら豊かな人脈を残しており、彼女の組織者としての手腕の確かさは、タクトロス・フェスティヴァルや自身のレーベル「インタクト」の活動に現れている。最新作はマギーとジョエルを迎えてのトリオ〝レ・ディアボリーク〟(Intakt)。マニとウリの産婆を務めただけでは決してない。　(福島)



TIERE DER NACHT
Hot Stuff
CD/(Swi.) Rec Rec ReCDec 42　'93年

'80年代にほとんど話題にならないままリリースされたGURU GURUのアルバムとは違って、こちらはマニ・ノイマイアーの充実したドラム／パーカッション・プレイがたっぷりと楽しめる。相棒のルイジ・アルケッティ（g、b、tapes、mandlin、GURU²のギタリスト）との息はぴったり。1～4分台の曲～破片が25個、収録されている。細やかさ、緊張感、ユーモアに溢れるインプロヴァイズド・ミュージックのたぐい。相変わらず今もマニの手数は多く、「UFO」やそれ以前のイレーネ・シュヴァイツァー・トリオの頃の力味もなく実に気持ち良さそうな演奏だ。それでいて一音一音が無駄なく確か。マニはGURU GURU流のヘロヘロしたvo、そして新たにガムラン、トロンボーンも披露する。冴えわたる会作。　(松本)



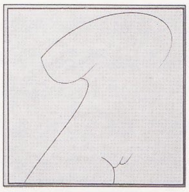
MANI NEUMEIER
Privat
CD/Admission To Music 003CD '92年

CD棚の片隅で衝立のように鎮座している木箱を引っ張り出してみたら、駅弁の箱であった。てな訳はなく、なんとマニおじさんのあやしい新譜であった。蓋を開けると、さらにあやしい土着化したおじさんの全裸姿（一部修正）があった。ついに来たか。これは期待に汗を握るべきか、匙を投げてしまうべきか…。結果は匙は残った。ドラムスと様々なパーカッション、SEによる呪術的雰囲気の漂う民族音楽寄りの音だ。決して目新しい試みではないが、醒めた視点と共に気合いも感じられる引き締った演奏が展開されている。実は、'70年代後半以降のマニ・ノイマイアー＝グルグルはカスとの噂を信じて見て見ぬ振りをして来たのだが、それが本当だとするとこれは久々の復活と言えるのではないか。　(高森)



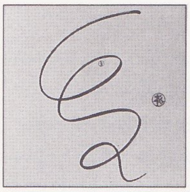
LUIGI ARCHETTI (Switzerland)
Gitarre Solo
CD/Admission To Music 004CD　'93年

〝Das Ohr〟と名打たれて、このジャケ、そしてこの人物が近年のGURU²のギタリス、しかもついこの間、マニ・ノイマイアーとのデュオ、TIERE DER NACHTで「Hot Stuff」を共作したと来れば、あまりにもドイツ過ぎて往年のファンを喜ばせそう。作風はこの前のデュオ作に近く、全35曲、基本的にインプロヴァイズド・ミュージック。同時期に出たマニの丸い変なCDに匹敵するクオリティで、こちらはギターものと思えば、当たらずとも遠からず。両者各々に創意的趣味に走っていて面白い。FMP、リコメン系のフリー・ギター・ファンへ。　(松本)



ULI TREPTE
Kick Up
LP/Spacebox SP2　'84年

全体にジャズ／ブルース色が濃く（ブルースハープをフィーチャーしたA②は「ブルー・ブルース」と名付けられている)、flやclによる中近東風の演奏が続く。しかし、ウリ自身による荒涼殺伐としたヴォーカルと、ガサガサとこわばり、身をたわめながら、くぐもった唸り声をあげ続けるベース(B①)。あるいはメディアの荒廃を即物的に映し出した歌詞をぶっきらぼうに読み上げていく声と、幾重にも交錯するインプロヴィゼーション（A④）…至るところに、ザラザラとした現実のモノとしての手触り／どこまでも内面化できぬ異物感を感じ取ることができる。グルグルにおいても、サウンドの核はノイマイヤーのテクニックでも、ゲンリッヒのエレクトロニクス操作でもなく、トレプテの強固な意志にあった。　(福島)



L.S.BEARFORCE
L.S.Bearforce
LP/Up Art 001　'83年

Lotus Schmidt、Mani Neumeier、Edmund Heimann、Edgar Hofmaan、Winfried Beckらによる作品。白ビニールとピクチャー盤の２種類のフォーマットでリリースされた。リーダーであるSchmidtの地を這うような重くタイトなベースと、Neumeierの重いドラミングが、強固でプリミティブなリズムを繰り出している。小気味良く切れるHeimannのギターに加え、Hofmannのサックスとフルート、Beckのコンガが一体となって、それぞれの曲をとても躍動感にあふれるものに仕上げている。聞いているうちに思わず体が動きだしてしまうような、フィジカルな内容である。次のステップではどのような手法をひねり出してくるのか、大いに期待が持てるユニットの作品である。　(Helmut)

EMBRYO

●小山哲人

十数年前、我が国で最初の〈ユーロ・ロック〉のブームが起こった頃、なんと言っても一番人気だったのはジャーマン・ロックである。なにしろファウストの1stが10万円近くで取引されていた時代だ。それまで主にブリティッシュ系のストレートなロックしか馴染みのなかったわれわれは、あの異様なまでに重く(あるいは軽く)、観念的なサウンドこそ〈出口なし〉のロックを異化/転生するものだと信じて疑わなかった。ポップとアヴァンギャルドを軽々と往復するカン、クラフトヴェルクやノイが唱和したロック未来派のオプティミズム、野蛮さをむきだしにして彼岸のサイケデリアへ到達をめざすアモン・デュール。いずれもがロックが未だ〈音楽〉でしかないことを笑い、別な次元での知覚体験を用意してくれたのである。



そうしたジャーマン・ロックがもっとも衆目を集めた当時にあっても、エンブリオは極端に人気のないバンドだった。かなり初期に国内盤が発売され、知名度だけはそれなりにあったにもかかわらず。

ミュンヘンをベースとするアモン・デュールII・ファミリーの別ユニットとしてデビューしたエンブリオは、最初の2枚のアルバム「Opal」「Embryo's Rache」では本家ADIIとさほど差異のない音楽を演奏していた。彼らの音楽が独自性を主張するようになったのは'72年の第3作「Father Son And Holy Ghost」あたりからで、ベースが刻む重苦しいリフはまだADIIの影響の圏内だが、シタールやマリンバ、ジプシー風ヴァイオリンのエスニックな味付けが既に〈ドイツ・ロック〉のティピカルなイメージを逸脱しはじめている。われわれがドイツ・ロックに思い描いていたイメージとはつまり、英米のロックのフォルマリズムに対する異議申し立てであり、先述したように方法論は様々だが、弁証法的レヴェルではパンク/ニュー・ウェイヴと共通するものだったように思う。

そうしたコンセプチュアルなアプローチではなく、〈エスノ〉と〈ジャズ・ロック〉を折衷する〈形式主義〉の立場を取ったエンブリオは、当時のジャーマン・ロック・シーンのなかでも一際ユニークかつ孤立した存在だった。日本に限らず英米でも、ジャーマン・ロックのファンとはすなわちプログレ・ロック、あるいはエクスペリメンタル・ロックの聞き手であり、カンにせよファウストにせよ、バンドのレーゾンデートルとはそうした周囲の評価と無関係にはありえなかった。今日にして思えば、人一倍身勝手なファンの思い入れなど無縁の所で、活動の場を確保できたのがエンブリオの幸運だったと言えよう。周知のように彼らは現在も活動中であり、しかも中心メンバーであるクリス・カーラー、エドガー・ホフマン、ロマン・ブンカ、クリスチャン・ビュシャールの4人の顔ぶれは20年前とまったく変わっていないのである。

'70年代後半以降、彼らはグループ初期の最大のアイデンティティーだったジャズ・ロックのイディオムも捨て去り、様々な地域の民俗音楽へ傾倒していく。ワールド・ミュージックが一般化した現在ではこうしたアプローチはなにも珍しくないし、'70年代のドイツでもポポル・ヴーの神秘主義的な東洋指向やカンの疑似民俗音楽シリーズ〝Ethnological Forgery Series〟などの試みがあったが、エンブリオの採用した方法はそのどれとも異なるものだった。すなわち、エンブリオの音楽を補塡する一要素として民俗音楽を用いるのでなく、バンドがまるごと〈旅行学習団〉となって現地へ乗り込み、地元ミュージシャンとやった押しかけセッションをレコード化してしまうのである。これがポール・サイモンやスティングであれば、やれ異文化の剽窃だの文化帝国主義だのといった論議になるのだろうが、エンブリオはそんな倫理はどこ吹く風とばかり、飄々としたフットワークでフィールド・レコーディングの旅を続けてきた。採算を度外視して彼らがこうした活動を展開できるのは、バンド・デビュー後にメンバーが大学へ入り直し、一応もっともらしい名目を立ててドイツ政府や私立財団から文化助成金を得ている背景もある。

今年発売されたばかりの最新作「Ibn Battuta」のスリーヴには、過去十数年間に彼らが旅したルートが記されているが、アフリカ大陸西岸から日本まで(エンブリオが来日したのは'91年、和歌山で行われた〝湯浅祭り〟のため。この情報はマーキー誌でも事前にチェックできなかった)、彼らのようなマイナー・バンドとしては驚異的なほどの広範囲だ。

昨年初めてベルリンを訪れて、ドイツ社会に根を張ったトルコ系移民のコミュニティーの強さを納得したのだが、エンブ



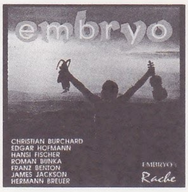
リオがこうした活動を選んだ理由は実はまだよく分からない。再度来日する機会があれば、是非尋ねてみたいもの。彼らが発表してきた数多くのアルバムは、日本ではプログレ・ファンにも、ワールド・ミュージックのファンからもソッポを向かれたままだが、ロック・ミュージシャンが雀の涙ほどの文化助成を得るにも難儀するのがこの国の現状だ。エンブリオの身軽な活動ぶりを羨ましく思うのは、ぼくだけでないだろう。





EMBRYO
Opal
LP /Ohr OMM 56.003 '70年
CD/(Ita)Materiali Sonori MASO CD 90012

'70年4月に録音されたデビュー・アルバム。正式メンバーはジョン・ケリー（g)、エドガー・ホフマン（s)、ラルフ・フィッシャー(b)、クリスチャン・ビュシャール（ds）の4人で、ベッツィー・アラー（vo）など3人のゲストを迎えている。オリジナル盤はジャケ中央の切り込み部分（へその緒？）にゴム風船のオマケが付けられていた。ジャズ・ロック色はまだ皆無であり、同時期のAD II とも共通する呪術的リズムに乗ってサックスやヴァイオリンがコズミックなしプレイを展開する。復刻CDにはホフマン＋ビュシャール＋ロウター・マイト（b）のトリオによる69年8月のセッションが2曲、30分弱に渡って追加収録。ドラムズは定型ビートを刻んでいるとは言え、こちらは殆ど底無し沼のようなインプロ大会。（小山）



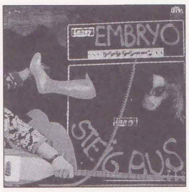
EMBRYO
Embryo's Rache
LP /United Artists UAS 29 239 I '71年
CD/(Ita.)Materiali Sonori MASO CD 90050

『胎児の逆襲』という邦題でかつて何度も国内発売された第2作。日本でのエンブリオのパブリック・イメージはこのアルバムによって決定されたと言っていい。ケリーに替わってロマン・ブンカ（日本語の〝文化〟が名の由来だそうです）がベースで参加、フィッシャーはフルートへパート・チェンジした。ベースやキーボードの弾く定型リフの上でサックス、オルガンが延々とソロを繰り広げる初期エンブリオのスタイルが確立された作品だ。皆が好き勝手に叩いているようなパーカッションが未整理で暑苦しいが、ファルファイッサ・オルガンやメロトロンが醸し出すスペイシーな感触は魅力的。本作に収録の「スペイン万歳、でもフランコはダメ」が原因で'72年のスペイン・ツァーがキャンセルされた経緯がある。（小山）



EMBRYO
Father Son And Holly Ghosts
LP/Liberty UAS 29 344 I　'72年

中近東、南アジア圏の民族音楽を素材にすることの多いドイツ・ロックにおいてエンブリヨの場合それが単なるモチーフでないことは、その集大成11作目「Embryo's Reise」に顕著である。またエイプリル・レーベル設立、インド、アフガニスタン、パキスタン等、未電化地域への発電機導入コンサート等、精力的な音楽活動は特筆に値する。ギター、ベース、ドラムの他サックス、フルート、ヴァイオリン、キーボード、マリンバを使用したジャージーな彼等のサウンド。この3作目ではベースを軸とし、より柔軟性のある地味な音作りではあるがマリンバを潤滑油とした流れのあるサウンドはアコースティック・ギター、落ち着きのあるフルート、ヴァイオリンを部分的に配置することにより、アクセントをつけている。（松本）



EMBRYO
Steig Aus
LP/Brain 1023　'73年

ブレインへ移籍、73年にリリースされた第4作。ブンカの弾くサズのアラビックなイントロの後、本格的なジャズ・ロックに突入する。とは言っても、ブランドXやZAOと比較すればはるかにルーズな演奏ですが。スリーヴ表面に〈フィーチュアイング・ジミー・ジャクソン〉とクレジットされている通り、HABOOB、UTOPIAを経たこの黒人キーボード奏者のメロトロンが全編に重く垂れこめ、60年代にビュシャールがヴァイブ奏者としてそのバンドに加わっていた大物ジャズ・ピアニスト、マル・ウォルドロンのエレピも大活躍。いわゆるフツーのユーロ・ロック・ファンが身構えずに聞けるのがこのへんのアルバムでしょう。ホフマンがアルトと持ち換えで演奏するヴァイオリンの黄昏た響きも哀感を誘う。（小山）



EMBRYO
Rocksession
LP/Brain 1036　'73年

勢いまかせのワイルドなインプロヴィゼイションがそれなりのパワーとインパクトを持っていた前作と比べ、アンサンブルの整合感を重視するようになったアルバム。ずいぶんとタイトになったビュシャールとヨーク・エヴァーズのリズム・セクション、ふたりのキーボーディストもエレピとオルガンに担当楽器を整理することですっきりとしたソロを聞かせる。長尺の曲ばかり（全4曲）収録されているため中だるみする部分もあるが、初期エンブリオのめざした〈エスノ・ジャズ・フュージョン〉がほぼ完成したのが本作だろう。すっかりヴァイオリンが板についたホフマンのプレイが光るスロー・ナンバー"Warm Canto"の美しさは特に印象的。前作と同じ73年にリリースされた第5作。（小山）



EMBRYO
We Keep On
LP/BASF 2021865-3　'74年

ドラム、マリンバ等担当のChristion Burchardを中軸とするエンブリヨは幾多のメンバー移動を重ねながらも多数のアルバムを発表している。本作は5th「ロックセッション」に続き74年リリースされたがレコーディングは2nd「エンブリヨズ・ラッヒェ」に参加していたロマン・ブンカ（ギター）を再び加え更にチャーリー・マリアノ（サックス、フルート）等を迎えて72年12月、3作目と4th「スタイッヒ・アウス」との中間期に行われている。サックスとギターが前面に出ることによるジャズへの傾倒と中近東色の濃い民族音楽への傾倒がそれぞれC.Burchardのドラムとパーカッションを底辺に前者のパワフルな演奏、後者の土埃と蜃気楼が舞うような曲想に両極化されている。非常にアグレッシヴな作品である。（松本）



EMBRYO
Surfin
LP/Buk 1722385-3　'74年

独BASF傘下のBukから出た'75年作。ここでは正式メンバーがビュシャール、ブンカ、ウヴェ・ムールリッヒ（b）の3人となり、マッコイ・タイナーやエルヴィン・ジョーンズらとプレイしてきた著名なアメリカ人サックス奏者、チャーリー・マリアーノ（s,fl）がホフマンと共にゲスト参加している。1曲目、いきなりクラヴィネットの刻むファンキーなベース・ラインと陽気なヴォーカルが飛び出してきて面食らってしまう。そういえばドイツにもランディー・パイなんていうロイク専門のバンドもありましたっけ。2曲目のタイトルはずばり「今日の音楽」。やはり当時の合衆国製流行音楽の影響が顕著なのだろうが、ギクシャクとした16ビートがなんともヘンで、一概に駄作とは言えないチープな味わいがある。（小山）



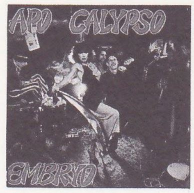
EMBRYO
Live
LP/April 0003　'76年

前作あたりで一般的ジャーマン・ロック・ファン（？）の視野から殆ど消え去ってしまったエンブリオ。本作もこのジャケットでは、買えという方が無理というもの。が、情けないスリーヴ・デザインとは対照的に、初のライヴ・アルバムである本作、プレイはなかなか気合いが入っている。収録は76年2月で、ビュシャール／ブンカ／マリアーノ／ホフマン／ムールリッヒらを中心とする9人編成のバンドによる演奏だ。ファンキーなリズム・パターンを採用しつつも、〈フュージョン〉と呼ぶには余りにイナタいインストゥルメンタルは、同時期のグルグルと共通するかも知れない。B面5曲目には「頂度今」なるタイトルのナンバーが収録されているが、特に日本情緒を意識した演奏ではない。（小山）



EMBRYO
Bad Heads And Bad Cats
LP/April 0005 '76年

発売順は「Live」の後だが75年秋に録音されたアルバム。この年、エンブリオはイタリア、フランス、オランダ、スイスへの7週間以上に渡るツァーを成功させたほか、国内でもビーレフェルト・フィルハーモニー・オーケストラとの共演コンサートを行うなど、精力的に活動した。野外でのフリー・コンサートへ出演することも多く、こうした経験がPAやアンプリフィケイションに頼らない次のステップの布石となったらしい。前作から参加している黒人女性ヴォーカリスト、マリア・アーチャーの歌を大々的にフィーチャーした演奏が目立ち、曲の展開にヴァラエティが出てきた。「Surfin」以降の3作のなかではもっともまとまりの感じられるアルバムだ。　(小山)



EMBRYO
Apo-Calypso
LP/Schneeball 0010 '77年

77年6月にスイスのサンライズ・スタジオで録音されたエイプリル・レコードでの第3作。筆者は初期〜中期エンブリオの音楽を形容するのに、それなりに愛情を持って〈ウンコなジャズ・ロック〉などと言うのだが、それにしてもこのジャケット。アタマ痛くなってきたなぁ。ビュシャールが各種パーカッションとオルガンに専念し、ビュツ・フィッシャー(ds)、ミハエル・ヴェーマイヤー(kbd)が新規参加。ブンカやビュシャールのワイルドなヴォーカルが久々に聞けるせいで、演奏はロック的な荒っぽさを取り戻した気もするが、基本路線は何も変わっていません。ホフマンがバンブー・フルートのような音色でテーマを奏でる〝Amnesty Total〟の落ち着いた演奏が聞きもの。　(小山)



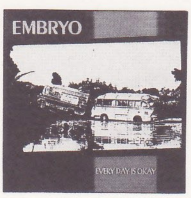
EMBRYO
Embryo's Reise
LP/Schneeball 20 '79年

78年9月から翌年3月にかけて、エンブリオはアフガニスタン、パキスタン、インドを訪れた。楽器、PAはもちろん自前、音響&撮影クルー、メンバーとその家族総勢20名以上がトラックとヴァンを連ねてドイツから陸路移動するという大変なツァーである。この2枚組LPは『エンブリオの旅』というタイトル通り、その様子をドキュメントしたもので、現地のミュージシャンとのセッション、帰国後にスタジオでそれらにダビングを施したもの、バンド単独による演奏などが入り乱れて一大パノラマを展開する。初めて旅したアジアで民衆の渦の中に飛び込み、エンブリオは大いに精気を獲得したようだ。従来路線のジャズ・ロックにしても、以前とは比較にならぬほど活気の漲った演奏である。これは傑作です。　(小山)



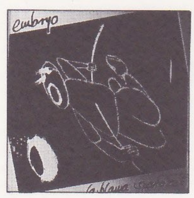
EMBRYO
Life
LP/Schneeball 23 '80年

79年のインド・ツァーの際交流があったのだろう、翌年にエンブリオはバンガロールにある伝統打楽器の学校〈カルナータカ・カレッジ・オブ・パーカッション〉の十数名をドイツに招き、共演コンサートを催した。80年7月にベルリン、ハンブルグ、ハノーヴァーで行われたライヴの実況盤が本作である。エンブリオ側からはビュシャール、ホフマン、ムールリッヒ、マリアーノら7名が参加。収録された全4曲の内3曲で演奏に加わっているが、伝統音楽への敬意が逆にメンバーを萎縮させてしまったようで、妙にこぢんまりしたプレイになっているのは残念。付属のリーフレットにはタブラに類する各種パーカッションのポリリズムが分析されていて、〈学習者〉であるエンブリオの立場を明らかにする。　(小山)



EMBRYO
Every Day Is Okay
LP /Kateriali 0121 '84年
CD/(Ita.)Materiali Sonori MASO CD 90039

イタリアの〈Materiali Sonori〉から続々と発表されるエンブリオの近作群だが、どれもカヴァー・デザインが一様にダサいため、ワタシのような物好きでも外見と内容をなかなか識別できません。本CDが、80年にグループ結成10周年記念として発売されたベスト&未発表マテリアル集「Anthology」(Kateriali 0121)と同一だとは今回初めて知った次第。タイトル曲は「Surfin」収録の〝You Can Turn Me On〟が改題されただけで、他にもドイツ語の原題を英語に移しただけという紛らわしい既発表曲があります。新規登場の音源では珍しくブルース・ハープがフィーチャーされた〝Muhldorf〟(77年録音)のヘヴィーな演奏が新鮮。74年、78年のライヴも3曲収録。　(小山)



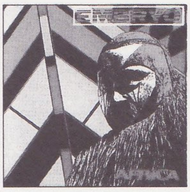
EMBRYO
La Blawa Sparozzi
LP/Schneeball 28 '81年

79年に訪れたカブール、81年11月にビュシャールが単身滞在したカイロなどで収録した音源とミュンヘンでのスタジオ録音を編集した2枚組。リズム・ボックスを導入したエスニック・テクノ(?)的なサウンドは、ブンカがこの後結成する別ユニット、ディッシデンテン(別稿参照)の原型となったと思われる。当時のRIO系グループと共通する屈折感も感じられるアルバム。録音時期、場所も様々ならメンバーも流動的だが、クリス・カーラーの参加に注目したい。あと、〝Uli Bassenge〟なる変名のベーシストは当然ウリ・トレプテでしょう。そういえば、ダンボール・ケースに荒っぽいシルクスクリーン・プリントというアート・ワークもトリプテの「Space Box」とよく似ている。　(小山)



EMBRYO
Zack Glück
LP / (Ita.) Materiali Sonori MASO33026 '84年
CD / (Ita.) Materiali Sonori MASO CD 90038

80年代もエンブリオの〈世界漫遊〉シリーズは継続していくが、本作は久々にバンド単独で録音された84年のアルバム。バンドはホフマン、ビュシャール、ヴェーマイヤー、ブンカを中心とする7人編成となった。マリンバやヴァイブ、各種パーカッションが刻む細分化されたリズムがサウンドの核となっているが、メロディ楽器との関係がポリリズミックなアンサンブルを形成するまでには至らず、通りいっぺんのエスノ・ニュー・エイジ・ミュージックに終わっている。すぐに各人のソロが始まってしまうジャズ・ロック時代の悪い癖(?)はなかなか直らないようだ。ブンカが弾くウードをはじめ、個々の楽器演奏は何度もの旅の経験を反映してかなり熟練度を増してきているだけに残念。　(小山)



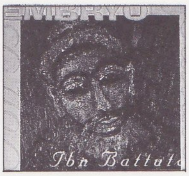
EMBRYO
Africa
LP / (Ita.) Materiali Sonori 33036 '85年
CD / (Ita.) Materiali Sonori MASO CD 90022

85年初期、エンブリオはナイジェリアのラゴスを訪れ、現地のパーカッション・グループと共演した。「Embryo & Yoruba Dun Dun Orchcster」(Schneeball 1043 12) に続いて発表された本作、双方の混成メンバーによる〈ドゥンドゥン オルケスター〉名義の録音も含まれているから、その続編と言っていいだろう。リード・ドゥンドゥンを操るムライナ・オイェラミ率いるアフリカ勢のポリリズムがやはり強力で、またしてもエンブリオは影がうすい。ラゴスと言えばアフロ・ビートのスーパー・スター、フェラ・クティの本拠地であり、よりコンテンポラリーなポピュラー・ミュージックが根付いている都市だけに、もうちょっと違った展開を望みたかった。　(小山)



EMBRYO
Turn Peace
LP / EFA-Schneeball 01045/08 '90年
CD / Schneeball 10452

89年2月から9月にかけて、ドイツ国内で行われたコンサートから収録したライヴ盤。バンド結成20周年を祝うべく集まったゲストは久々の復帰となるウォルドロン、カーラーの他、ペーター・ミヒャエル・ハーメルといった意外な人物も。世界各地を旅した80年代の総決算的意味を持つアルバムで、ワールド・ミュージックが一部先進消費大国でトレンドとなるはるか以前からロック/ジャズ/民俗音楽の境界線上で活動してきた誇りと重みが感じられる。戦闘的なジャズ批評で知られるヨアヒム・E・ベーレントが「アメリカにはエンブリオに類するようなワールド・ミュージックのグループは存在しない」と語るライナー・ノートも感動的だ。　(小山)



EMBRYO
Ibn Battuta
CD / Schneeball INDIGO 1052-2 '94年

『三大陸周遊記』を著した14世紀の旅行家、イブン・バットゥータの足跡に、バンドで歩んだ旅程を重ね合わせて制作されたコンセプト・アルバム。91年に来日した際の写真がスリーヴに使われているが、内容は別にジャパネスクしているわけでなく、テーマに沿ってアラビア〜インドの土着音楽の匂いを強く漂わせたもの。本文原稿にも記したが、エンブリオの民俗音楽の摂取方法はまず現場のスタイルをそっくり再現することから始まっており、音だけ聞いてこれを演奏しているのがドイツの白人バンドだとは誰も思わないだろう。ブックレットで謝辞が捧げられている大勢の人々の中には、なんとマイク・パトゥ&オリー・ハルソールの名もある。ひょっとして交流があったんでしょうか。　(小山)



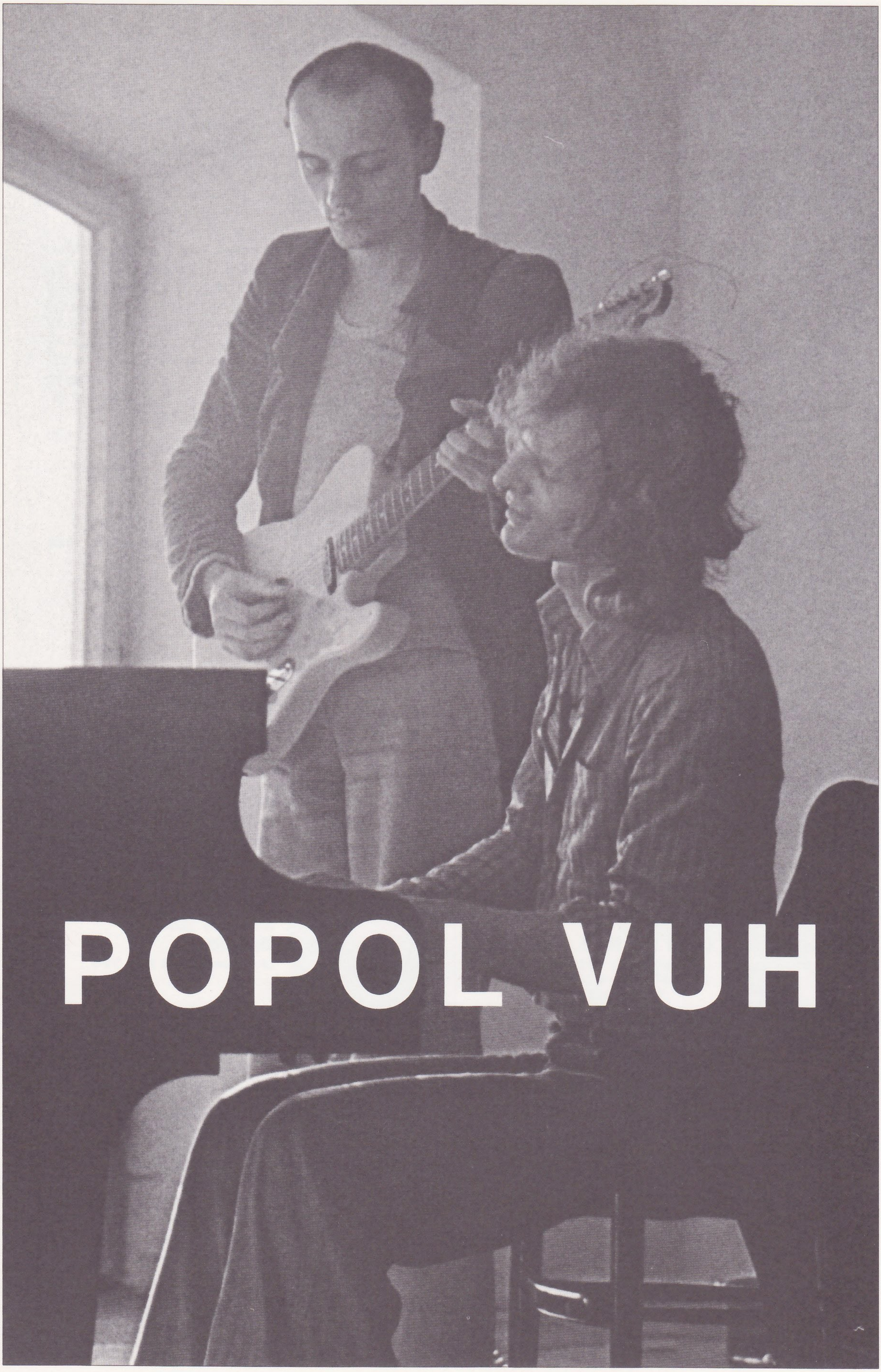
DISSIDENTEN
Out Of This World
LP / Sire Records '89年
CD / Sire Records 9 26030-2
ワーナーパイオニア WPCP-3419

生憎、詳しい情報を持ち合わせていないので、取り敢えずEMBRYOの周辺バンドとしての紹介をさせていただく。DISSIDENTENは'80年代後半からドイツで大変な人気を得ているワールド・ミュージック、エスニック・ビート・バンドだ。メンバーはフリード・ヨッシ(fl、vo)、マーロン・クライン(kb、d、vo)、ウーフェ・ミュルリッヒ(g、b、vo)の3人。全員EMBRYOに在籍していたことがあるらしい。EMBRYOは現在ワールド・ミュージックの元祖として高く評価されており、その代表的派生バンドがDISSIDENTENと認知されている。本作ではいきなりポップ・サウンドが炸裂するが、次第に興味深いワールド・ミュージックの実験が展開し、かなり面白い。尚、ヤスパー・ファントフのPILI PILIとは相互に緊密な交流がある。　(坂本)



SIEGFRIED SCHWAB
Meditation
LP / Melosmusik GS 701 '79年

Sigi Schwabことジークフリート・シュワブは、かつてWolfgang Daunemと活動し、その後の'71年〜'72年にかけてはEMBRYOに在籍していた経緯がある。その後もクラウス・ドルディンガーのバンドに参加するなど、どちらかと言うとジャズ・サイドのギタリストだが、このアルバムを聴くと、近年のAS HRAとCLUSTER & ENOを合わせ民族音楽色をそえたような音楽になっている。それはニューエイジ系のギタリスト作という印象もある。いずれにしても朝露を想起させるようなすがすがしさが強く、肌目細やかでもある。他にも数々のアルバムを出しているので、興味のある人は追った方がよさそうだ。ac-gと薄っすらとかすむようなエレクトロニクスの調合がいい。L.マクドウエル・ファンは必聴。　(松本)


POPOL VUH

神秘なる音の木霊

ポポル・ヴーの誕生から円熟期への軌跡

●山崎尚洋

ポポル・ヴーとはすなわちリーダーであるフローリアン・フリッケ自身である——と、いささか極論じみているが、こう言い切ってしまっても良いと思う。彼の音楽に対するアプローチがーポポル・ヴーの音楽を変化させてきたのであるから。

ポポル・ヴーの音楽は'71年のデビュー作から現在に至るまで、自然や神秘というものをテーマにゲルマン的なロマンティシズムを友にした幻想的な音楽を創り続けてきた。

20年以上の間に手法こそゆるやかな変化をみせてはいるが、サウンド・コンセプトともいえる前述のスタイルはいささかも変化していない。この比類なきアイデンティティを持ったポポル・ヴーの音楽とはいかなる経過を持って形成されていったのか。今一度、ここでその歴史をたどりながら考えてみることにしよう。

1960年代の初め、当時16才だったフローリアン・フリッケはヴェルナー・ヘルツォーク(当時18歳)という偉大な友人を持った。ヘルツォークは御存知のように、今では中堅のドイツ映画の監督である。以後、彼等の友情は現在まで続き、ヘルツォークの映画のサウンド・トラックスをしばしば受け持つばかりではなく、時には映画出演までするという親密な関係が保たれているのである。彼等は音楽と映画というアプローチさえ異なるものの、同じような信念や発想を持ち、表現していきたいと考えていた。ある日、2人はミュンヘン大学の図書館で不思議なマヤ文明の教典を翻訳した本に出会った。これが「ポポル・ヴー」というタイトルであり、グループ名の由来である。

'60年代の後半に、フローリアン・フリッケは巨大なムーグ・シンセサイザーを購入した。当時のフリッケは、かの狂気王ルートヴィッヒが君臨した、アルプスの麓にあるバヴァリア地方の山麓にある大きな旧家に住んでおり、ムーグ・シンセサイザーで彼の音楽を創り出すことに熱中していた。シンセサイザー/エレクトロニクス系のサウンドというと、そのパイオニアとしてタンジェリン・ドリームやクラウス・シュルツェの名が有名であるが、タンジェリン・ドリームは初期に於いてはオルガンを主体としたサウンドでシンセサイザーを使用しておらず、また、クラウス・シュルツェがドラムを捨ててシンセサイザー・サウンドを追求し出した時、彼はフリッケのムーグを購入したという事実でも明白なように、フローリアン・フリッケこそが、ムーグ・シンセサイザーによるドイツ・エレクトロニクス系のパイオニアであったと断言できるだろう。フリッケがムーグ・シンセサイザーを使用して制作したアルバムは、ファースト「Affenstunde」、セカンド「In Den Gärten Pharaos」、そして「Aguirre」の3作に過ぎず、それ以後はエレクトロニクスの限界を感じたとし、アコースティックな作風に移行していく。しかし、これら3作で聴けるサウンドは、非常に豊饒な空間を有しており、今聴いても全く古さを感じさせない程に完成された芸術であったと思う。さらに、自然というものの神秘(夜の湖、オリエンタル・ムード漂う森林の描写等)を印象派的アプローチでエレクトロニクスで表現することによって作品を形成していくという手法は、他のエレクトロニクス系アーティストのどれとも一線を画するユニークなもので、強いていえば、数年後にクラスターが表現した(「Sowiesoso」以降の作品。クラスター&イーノが代表作だろう)世界が同傾向のものであるといえるだけである。多くのアーティストが未知の電子音というイメージから宇宙的なサウンドや形而上的なサウンドを求めたのに対し、エレクトロニクスという当時最先端の楽器を自然へと回帰させようとしたフリッケの手法には非凡なものを感じる。

'72年になると、フリッケはムーグによる音創りを止め、アコースティックな楽器を使用することになる。この頃からタイトル等も神への賛歌的な内容のものが増えていく。しかし、フリッケの表現する神とは、キリスト教の神ではなく、より自由な発想の元に古今東西の特定の神をさししめるものではなく、強いていうなら、フリッケ自身の心に描く神への賛歌というべきものであると思う。そういう神への賛歌/ミサ曲としてできあがったのがサード・アルバムである「Hosianna Mantra」である。ピアノをメインに、韓国人女性ヴォーカリスト、ディヨン・ユンを迎え、グループ「ギラ」のギタリスト、コニー・ファイトを始め様々なゲストを迎えて創られた比類なき透明感を湛えたミサ曲である。後の作品より即興的要素が強く、その分、豊饒なイメージを聴く者に与えることと思う。このアルバムと前作の2作はピルツ・レーベルというマイナー・レーベルからの発表で、10年以上も前には見ることもままならぬ程の貴重盤で、これらの美しいジャケットを手にした時の興奮は今でもき

のうのことのように想い出す。僕のなつかしい想い出として蛇足ながら書き添えさせてほしい。

しばしのブランクの後、'74年に「Seligpreisung」を発表。前作でのギタリスト、コニー・ファイトに加え、新たにダニエル・フィッヒェルシャーというギタリストを迎えての第一作である。コニーのギターがどちらかというと持続音をメインにしたものであるのに対し、ダニエルのそれは、時としてピアノとの共存を可能とするメロディを浮き出させる種の奏法をしている。全体の印象として、よりクラシカルな、アレンジされた楽曲が増え、洗練された印象が強い。

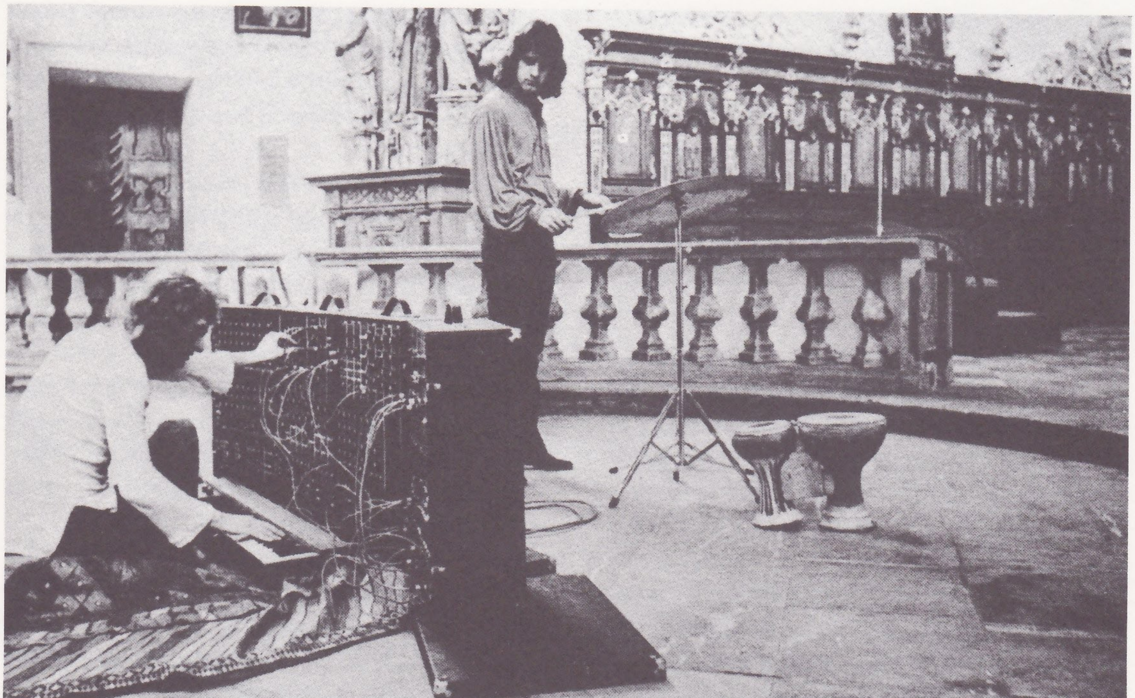
翌'75年の「Einsjäger & Siebenjäger」になると、ダニエルのギターとフローリアンのピアノとのアンサンブルがメインになり、B面の20分弱の大曲は、アレンジされた楽曲としての大曲ということで、初めての試みであったろうと思う。

同'75年の「Das Hohelied Salomos」と翌'76年の「Letzte Tage Letzte Nächte」は5作目でのスタイルを発展させていったもので、さらに力強いギターやパーカッションによるダイナミズムを加えることによって新鮮な作風を感じさせている。

次作として発表された「Aguirre」は、発表年こそ'76年だが、以前のエレクトロニクス時代に創られた作品である。ここでの表現力は熟成した感があり、夢幻的なイメージも豊かさを感じさせている。フリッケの代表作の一つとして推したい一枚だ。

'77年の通算9作目の作品「Yoga」はイタリアのみの発売である。この作品は他のポポル・ヴーの作品群とは違う、インド音楽自体を収録したもので、おそらくインド人達による演奏で、演奏にはフリッケは関与してはいないと思われる。どういう理由でこの作品がイタリア盤のみという形でひっそりと発表されたのかはわからないが、ポポル・ヴーのディスコグラフィに不思議な彩りを与えていることだけは事実だ。

駆け足で'77年までのディスコグラフィを追ってみた。ここまでの作品群を通して聴いてみた時、ポポル・ヴーのイディオムはこの時期まででほぼ出ているように思う。以後の作品群はこれらのモチーフをより熟成させる方向に進んでおり興味深い。



'76年「ガラスの心」以後

——「雅歌」のたとえ——

●松本昌幸

フリッケが旧約聖書を題材にした時期、すなわち'73年の「Hosianna Mantra」から'76年の「Letzte Tage Letzte Nächt」に至る期間で、最もポポル・ヴーの音楽を代弁したのは、ディヨン・ユンだったように思える。フリッケが、彼の一貫した音楽観を、旧約聖書のキリスト教世界観という具体的なフィルターを通して、より音楽、響きとして実現する際、ユンのソプラノ・ヴォイスは好材だったに違いない。「Hosianna Mantra」は、そうしたフリッケの音楽を具体化したモニュメンタルなアルバムだが、ユンの占める役割について言えば、コニー・ファイトのギター、ロベルト・エリスクのオーボエと同じ位置でしかない。彼女がポポル・ヴーを代弁したのは、「Das Hohelied Salomos」('75)である。このアルバムは、まるでディヨン・ユンに捧げられたフリッケのキリスト教旧約聖書、カトリックへのオマージュのようだ。

—人脈から見たポポル・ヴ—

'70年代後半以後のポポル・ヴーを人脈から斬った場合、大きくは二つに分けることができる。一つは、'76年から'79年への流れ、もう一つは、'79年以後の期間である。

①'76年～'79年

旧約聖書を扱った時期を過ぎたフリッケは、イタリアPDUからの要請で「Yoga」を製作した後、旧友ヴェルナー・ヘルツォーグの映画「ガラスの心」のサントラを担当する。アルバムは、フランスで「Coeur De Verre」、ドイツでは「Herz Aus Glas」として、各々'77年にリリースされたが、映画自体は'76年発表のものだ。宗教色の強いサウンドとフリッケ、フィッヒェルシャーのユニットは一貫しているものの、ここでAMON DÜÜL II、RALF NOWYのアルバム、BETWEENの「Hesse Between Music」('75年)、そしてポポル・ヴーの「Das Hohelied Salomos」でセッション参加してきたシタール奏者、Alois Gromerをメンバーとして迎える。翌'78年にもヘルツォーグ監督の映画「ノスフェラトゥ」のサントラを製作し、更にBETWEENのオーボエ奏者ロベルト・エリスクらの参加を得る。

これら2作、「Coeur De Verre」と「Brüder Des Schattens～」は、サントラ盤ではあるものの、実際に映画の中で使用されている曲は、わずかで、むしろ、サントラ製作依頼を受けて作られたポポル・ヴーのオリジナル・アルバムと見た方がいい。

ヘルツォーグはフリッケにこの時期の製作の契機を与えたとも言えて、彼の果たした役割は、'73年から'76年にかけての旧約聖書をめぐる製作の代替とも言えるほどの性格を持っている。

この2作を経て'79年にフリッケは、純粋なオリジナル・アルバムを製作する。そのアルバム「Die Nacht Der Seele」では、レナーテ・クナウプを正式なヴォーカリストとして迎えて、彼女は以後のポポル・ヴーの重要なファクターとなる。単にユンの代替という以上に、フリッケがキリスト教を題材にした音楽から土俗的な、原始宗教を想起させる音楽性を打ち出す際のフィルターが、クナウプだったように思える。このアルバムは、新旧のメンバーがそろい、次作「Sei Still～」で更に具体化されるサウンドの布石になった点で、大きな分岐点に当るものだ。

②'79年以後

「Die Nacht Der Seele」の土俗的な響きを継いだ「Sei Still～」がリリースされたのは、'81年だった。フリッケ、フィッヒェルシャー、クナウプのユニットが、'79年以後のポポル・ヴーである。「Sei Still～」は、フリッケ製作のビデオ作品のサントラでもあり、彼の映像への関心がヘルツォーグを通して間接的に実現する以前に表現されたという意味で、頂点にあるアルバムだ。クナウプの声は、力強さとある種、俗っぽさがあって、これが土俗的な響きやイメージを想起させるには、ユン以上に適切だったと思える。以後、ポポル・ヴーは基本的にこのユニットで製作を続けていくが、アルバムのテーマから見ると、'83年の「Agape Agape」と純ピアノ曲〝Spirit Of Peace〟は、何かの題材を通してフリッケの音楽観が打ち出されるという間接的表現から一歩進んでいる。フリッケのそれが宗教色の強いサウンドをも上回って、タイトルに表されていると言っても構わないだろう。よりフリッケ自身の精神に音や響きのピントが合ってきたと見たい。特に彼のピアノを大きくフィーチュアした〝Spirit Of Peace〟は、彼自身の音楽の原点ともとれる。



'82年の「Fitzcarraldo」と'87年の「Cobra Verde」は、共にヘルツォーグ映画のサントラだが、前者は既成曲だし、両作品ともポポル・ヴーはサントラの一部を担ったにとどまっている点で'76年〜'79年の時期のサントラ製作には及ばない。

—ヴェルナー・ヘルツォーグとの関わり—

ポポル・ヴーは「Hosianna Mantra」以前のシンセサイザー・サウンドから、アコースティック・サウンドに変わるのを期に、以後をフリッケ、フィッヒェルシャーのユニットで歩んできたが、もし、音楽やサウンド以外の所でユニットを考えるなら、映画監督ヴェルナー・ヘルツォーグの存在を抜きにすることはできない。

＊'67年「生の証明」
'72年「アギーレ・神の怒り」
'73年〜'74年「跳躍の孤独と恍惚」
＊'74年「カスパー・ハウザーの謎」
'76年「ガラスの心」
'78年「ノスフェラトゥ」
'81年「フィッツカラルド」
'87年「コブラ・ヴェルデ」

以上が、フリッケが何らかの形でヘルツォーグ映画に関係した作品である。＊印の作品は、フリッケ自身が出演しているもの、他はサントラを担当しているものだ。「跳躍の孤独と恍惚」は、テレビの映画シリーズ「境界ステーション」の一つとして作られた45分のドキュメンタリーで、サントラ盤は製作されていない。

ヘルツォーグは、1942年9月5日、ミュンヒェンで生まれた。映画製作については独学。'60年代はアメリカでテレビ局の仕事をしていた。処女作は、'62年の短編「ヘラクレス」。'67年の長編処女作「生の証明」でベルリン映画新人監督賞、'72年の「アギーレ・神の怒り」でベルギー映画批評家協会賞、'74年の「カスパー・ハウザーの謎」でカンヌ映画祭審査員特別賞及び国際映画批評家連盟賞、'81年の「フィッツカラルド」でカンヌ映画祭監督賞を各々受賞している。ドイツ映画第2世代の一角を担う監督で、イタリアのネオ・リアリス

モ、フランスのヌーヴェル・ヴァーグ、アメリカのニュー・シネマに相当するニュー・ジャーマン・シネマに枠組みされる映画監督である。

—フリッケ＝ヘルツォーグ＝キンスキー—

フリッケの一貫した音楽姿勢は、ヘルツォーグの脚本や撮影などの様々なテクニック面を度外視したようなテーマへの執着という製作姿勢で共通点がある。そしてヘルツォーグ映画の、隔絶された世界からの視点というテーマを最も代表する俳優が、クラウス・キンスキーである。ヘルツォーグ映画の主人公は、どれもこの視点を持っていて、「アギーレ・神の怒り」や「小人の饗宴」「闇と沈黙の国」のように、映画の舞台や、逆に主人公が何らかの特殊な性格・性質を持つなどの、相異なった条件を引き合わせることで、視点を逆転させる。その際の主人公の一方的な視点と周囲のそれとのギャップを浮き立たせることで、ヘルツォーグは時に風棘を込め、更にはドイツ、ヨーロッパ精神の（キリスト教的な）帝国主義的な部分の崩壊へも言及していく結果になっている。「アギーレ・神の怒り」は、このテーマが最も明確になっている点で分かり易い。フリッケとヘルツォーグの結びつきは、フリッケの神秘主義的なサウンドが喚起するものにあるのではなく、むしろ無骨なまでの貫徹力だと言えるし、それはこれまでヘルツォーグ映画の数々を最もうまく演じることのできたキンスキーに、イメージが通じる。

この三者の執念にも近い独自の語法へのこだわりと、その果てに三者が見ているものの共通項を指して、一般に彼らのことを〝ドイツ的〟とか〝ロマンティシズム〟と言っていることだけは、間違いない。ヘルツォーグの映像が、ドキュメンタリーで培れた現実的なものであっても、ポポル・ヴーの音楽のミスティシズムと通底するのは、まさにここだろう。ヘルツォーグは事あるごとに、音楽の重要性を口にするし、フリッケの音楽を自分の映画のある重要な部分を言い当てていると言うのは、まさにここだと思える。



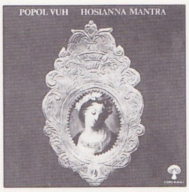
POPOL VUH
Affenstunde
LP /Liberty LBS 83460 '71年
CD/Bell BLR 84 706
/(Fr.)MSI Spalax 14205

多くのシンセサイザー奏者が、その電子音楽という未知への期待感からか、表現形態を宇宙や人間の内的宇宙へと求めたのに対し、フローリアン・フリッケはシンセサイザーで自然を描写しようとしたところが独特だ。電子というものを母なる大地へと回帰させるという発想は、一見奇抜なようで、理にかなっていると思う。しかし、シンセサイザーをこうした表現手段に用いたことにより、彼はシンセサイザーの可能性に意味を感じなくもなったのであろう。ここに演奏されているイメージは、正にアナログ盤の内ジャケットに描かれた世界と等しい。夕暮れが近づく湖に、次第に宵闇がせまる情景をシンセサイザーで描写しているのである。豊かなイマジネーションを持つリスナーには素晴らしい夜の世界が目前に広がる。（山崎）



POPOL VUH
In Den Gärten Pheraos
LP /Pilz 20 21276-9 '72年
CD/キング KICP 2728

フローリアン・フリッケがシンセサイザーをメインに使用した最後の作品。ここでもあくまで夜をイメージする叙景感な描写が行われているが、たった1人、夜の湖水にただずむ人間には当然、訪ずれるであろう、不安感、神秘、孤独感をも表情している結果、前作よりも神秘的なイメージが支配しているともいえる。この、自然と超自然が混在する空間は、フリッケの旧友である映画監督ヴェルナー・ヘルツォークが描くところの世界とも符合する。何かを語っているようで、何も語らない。それでいて、リスナーはその作品の中に自己の経験からくるイマジネイションを付加していき、いつしか、作り手と聴き手が一体となり、独自の世界を描写していることに気付く。（山崎）



POPOL VUH
Hosianna Mantra
LP /Pilz 2029 143-1 '72年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14209
/キング KICP 2729

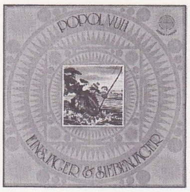
フローリアン・フリッケがエレクトロニクスを捨てた後に生み出されたのがこのサード・アルバム「ホシアナ・マントラ」である。手法こそ違えフリッケの生み出す作品群は大自然と合致する方向へ向かっており、自然とはすなわちフリッケの神の同義である。アカデミズムやヒエラルヒーに一切とらわれることのない教会音楽が存在するとすれば、それがポポル・ヴフの音楽であるといえる。あらゆる現実とのしがらみから手を切り、精神の深みからわき出る情感を音に表現するメソードは、真に自由であり、歴史、現実、カテゴリーといったものからとき放たれた「神秘」の世界である。ゲストであるコニー・ファイト(ex. GILA)のエレキ・ギターもとても深みのある音を創り出してフリッケのピアノと一体化している。（山崎）



POPOL VUH
Seligpreisung

LP /Kosmische Musik KM58.009
'73年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14217

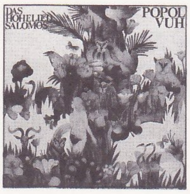
初期の名作といわれる「Hosianna Mantra」の次の作品。同時期の作品なので「Hosianna～」と同傾向の作風である。ただし、前作が大曲志向であったのに対し、本作品はA面3曲、B面5曲の小曲から構成されている。もう1つ、本作品からギターとドラムスをこなすダニエル・フィッヒェルシャーが加入したことも前作との差違である。ダニエルのドラミングが入ったことで、ややロックっぽく聴えるようだ。個人的には、この時点ではポポル・ウフのサウンドとダニエルのドラミングが本当に融合していないような多少の異和感を感じる。最もこれは好き嫌いの範疇であるので個人の感性に委ねたい。韓国人女性ヴォーカリスト、デュヨン・ユンもこの作品には不参加。美しいオーボエの響きが印象的だ。（山崎）



POPOL VUH
Einsjäger & Siebenjäger

LP /Kosmische Musik KM58. 017
'75年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14218
/キング KICP 2735

3作目から7作目「Letzte Toge-Letzte Nachte」に至る時期のフリッケがキリスト教世界を色濃く反映していたことは4th「Seligpreisung」＝新約聖書中、山上の垂訓の中心部分、6th「Das Hohelied Salomos」＝旧約聖書中「雅歌」等からも伺える。アモン・デュールIIよりダニエル・フィッヒェルシャー（G, Dr）を迎え韓国人女性ヴォーカリスト、ディヨン・ユンとの3人による本第5作はピアノ、A・ギターの静、ドラム、E・ギターの動による対位作風が功を奏し完成度の高い作品となっている。次作ではより繊細美溢れる女性的なサウンドが、7作目では起伏ある力強いサウンドが聴かれ東洋的色彩をも備えた宗教色の濃い一貫した音楽性には比類なきドイツの深遠な美を垣間見ることができる。（松本）



POPOL VUH
Das Hohelied Salomos

LP /United Artists UAS 29781 I '75年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14211

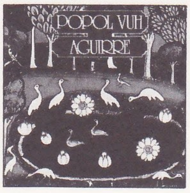
POPOL VUHの音楽は、音に託された精神の極みを伴ってとても深い所に届く。そう感じる人は少なくない。表面をなぞる種の、スタイルを云々する種の音楽から最も遠くに有って、時には音楽というジャンルで語らない方が本望なのかもしれないとすら思える。このアルバムは、教訓の多い旧約聖書にあって最も詩的な安らぎの章「雅歌」を題材にして、フリッケの音楽観がディヨン・ユンのコーラスを通すことで、一層鮮明だ。彼は「雅歌」に詩＝音楽性を見い出していたと思う。ユンの非俗なコーラスはこれをデリケートに縁取る。楽園をモチーフにしたデザインも文句ない。1曲目の異教的な雰囲気もインパクトが強い。そして他の多くの曲中に柔かでおぼろげな音使いがある。整合感はなくスケッチ風のタッチだ。（松本）



POPOL VUH
Letzte Tage-Letzte Nächte

LP /United Artists UAS29916 I '76年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14213

'76年の作品。重ねられたエレクトリック・ギターを主体としたサウンドが基本となっている為か、全体的に壮大で力強い印象である。この時期になると、ダニエル・フィッヒェルシャーがポポル・ヴフのサウンドに溶け込み、安定した仕上がりをみせるようになった。ダニエルはギターを主体にプレイするようになり、ドラムスはパーカッション的な使用もみられ、彼の持ち味をポポル・ヴフのサウンドの中に浸透させている。又、曲創りに彼が関与した曲も3曲程ある。神秘的、呪術的なイメージがあり、ヘルツォーク映画の中の自然と対峙しながら、いつしか、それが神秘へと変化していくようなイメージと重なる作風だ。（山崎）



POPOL VUH
Aguirre

LP /(Fr.) Ohr 840. 103 '76年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14219

フローリアン・フリッケの親友であり、映画監督であるヴェルナー・ヘルツォークの映画「アギーレ、神の怒り」のサウンド・トラックとしてリリースされたアルバム。映画は72年に製作されたが、初演は75年にフランスで行われた為、本アルバムもフレンチ・オウル・レーベルから同年リリースされた。ペルー征服の為に南米に渡ったピサロの分隊がアマゾンの奥にあると噂されたエルドラド（黄金郷）を求めてさまようが、遂に一人残らず死滅してしまうといったストーリーの映画であるが、エレクトロニクスを使用したポポル・ヴフの効果的なサウンドと絶妙にマッチした好作品である。後に再発売された独ポップ・インポート盤、日本キング盤はいずれも収録曲に変更がある。（山崎）



POPOL VUH
Yoga

LP /(Ita.) PDU PLD SQ 6066 '76年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14207

70年代のドイツ・プログレッシヴ・グループの中で、東洋志向を感じさせるものは多い。アモン・デュール、コズミック系のアーティスト達、エンブリヨetc.あの時代のドイツ音楽の一要因である「捨てる」という作業が東洋思想との共通点をみい出したからであろう。ポポル・ヴフは東洋というものを一つのモチーフとして消化しているに過ぎないが、このアルバムでは、インドのミュージシャンを起用してほとんど純粋なインド音楽を録音している。フリッケはおそらく演奏には関与してはいないのではないだろうか。これも彼の純音楽への一つの試みであると理解できる。聴いてみると、ポポル・ヴフの音楽として同化してしまうのは、コンセプトが明確である為の現象である。LPはイタリアのみのリリース。（山崎）



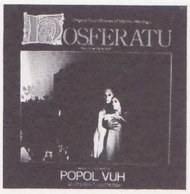
POPOL VUH
Coeur De Verre
LP / (Fr.) Egg 900 536 '77年
CD / (Fr.) MSI Spalax 14214

映画「ガラスの心」のサントラ盤とは言うものの、実際にはあまり使われておらず、むしろ彼等のオリジナル作と思った方がいいだろう。ドイツでは「Herz Aus Glas」のタイトルの別ジャケットで出た。フィッヒェルシャーのel-gがこれまでになく前面に出る部分が多く、ラウドな録音状態もあって、音の印象が派手だ。彼のギター・ワークと重苦しくも感じられる宗教的イメージのメロディが合致した佳曲が多い。また一方では彼等の音楽の核心とも言えそうな静寂感も相変らず通じている。とりわけ1曲目の前半部の下りは、POPOL VUHの傑作だと思う。全てを洗い流してしまうような情感の深味が静けさを持って有る。全体にもう幾らか研ぎ澄ますことも可能なアルバムとも思えるが、ひかる部分は多い。（松本）



POPOL VUH
Brüder Des Schattens —Söhne Des Lights
LP /Brain 0060 167 '78年
CD / (Fr.) MSI Spalax 14208

かつてイタリアでは「Nosferatu」(PDU Pld A 7005)、日本では「幻日の彼方に」(テイチクSUX 168) として発売されていたものと同内容。旧A面全てを費したタイトル曲は、'70年代後半の彼等を代表するナンバーと言っていいだろう。前半部のオーボエとコーラスを生かした暗い色調と後半部のac-g、p、sitarによる下地にel-gのリードをのせた反復メロディとの2部構成になっている。牧歌的な響きをする後半部は前半部共に肌目細やかな仕上りだが、特に彼等の音楽のたおやかさが際立って感じられるものだ。その室内楽調のアプローチは、POPOL VUHのオーボエ奏者ロベルト・エリスクがもう一方で在籍したBETWEENに近い。このアルバムは映画「ノスフェラトゥ」のサントラ盤である前に彼等の作だ。（松本）



POPOL VUH
Nosferatu
LP / (Fr.)Egg 900.573 '78年
CD / (Fr.)MSI Spalax 14212

ヘルツォークのドラキュラ映画「Nosferatu」のサントラ盤。イタリアPDU等から発売されたイラスト・カヴァーの「Nosferatu」は、タイトルこそ同じだが、内容は現在CDで出ている「Brüder Des Schattens～」なので要注意。両作ともサントラ曲を収録してはいる。こちらの「Noferatu」は様々なタイプの小曲が並び、またBETWEENでのセッションを経て参加したAlois Gromerのシタールがよくフィーチュアされている。中にはフリッケがシンセサイザーを使って映画中では不気味な効果をあげた曲もある。いずれにしてもインド音楽にも曲にもならず効果音ふうであることには違いない。「Brüder～」のオリジナリティを思うと、やはり「Nosferatu」はサントラ盤の性格が強い。（松本）



POPOL VUH
Die Nacht Der Seele (Tantric Songs)
LP / (Ita.)PDU Pld A 7014 '79年
CD / (Fr.)MSI Spalax 14204

この時期のポポル・ヴフのサウンドは呪術的というのがぴったりくるもので、ダニエル・フィッヒェルシャーとフローリアン・フリッケのコンビによる作風も円熟の極みにまで達している。パーカッションやヴォーカルの使用法も洗練度が増し、他のグループには全くみられないような独特なスタイルである。夜の闇の中にうごめく神秘。静寂。その中から木霊するゆったりとしたピアノの響き。初期のイメージからこの時期までのイメージの良質な部分が最良の形でこの作品の中につめ込まれている。これだけの深度のある音楽を聴けば、彼等が一朝一夕にできたグループではないのはすぐにわかるだろう。彼等が身につけた、様々な手法を駆使して制作されたポテンシャルの高い作品として推したい。（山崎）



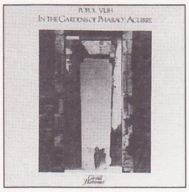
POPOL VUH
Sei Still, Wisse Ich Bin
LP /IC KS 80 007 '81年
CD / (Fr.)MSI Spalax 14210

フローリアン・フリッケ、ダニエル・フィッヒェルシャーの他、元アモン・デュールのレナーテ・クナウプ、クリス・カーレル、そしてコーラス隊が参加して制作された。コーラスによるヴォーカリゼイションをメインにした作風で、それが呪術的な壮大なイメージをふくらませている。1つのメイン・テーマとそれにからまる対旋律、パーカッションはドラムスという枠を越えた独特なスタイルである。この時期、このアルバムの曲のイメージ・フィルムが制作された。死海のロケーションで荒涼とした砂漠が映り、この作風と寸分たがわないものであった。このアルバムをリリースしたICレーベルは、当時、クラウス・シュルツェのプロダクションで新しいサウンドを求めるアーティストに開放されていた。（山崎）



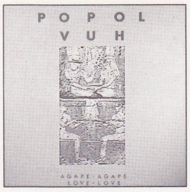
POPOL VUH
Fitzcarraldo
LP/ZYX 20021 '82年

'81年製作のヘルツォーク映画「フィッツカラルド」のサントラ盤。POPOL VUHは「Sei Still～」から3曲と「Brüder Des～」からショート・カット1曲の計4曲を収録。他はヴェルディなどのオペラをオムニバス形式で収録していて純然たるサントラ盤となっている。POPOL VUHのオリジナル・アルバムとは言えないが、フリッケとヘルツォークのかかわりを思ったうえで、この映画がスペクタルを試み多少なりとも話題になったことを考慮すれば、彼等の共作ということで数えておきたい。ヘルツォーク監督が今をときめくヴェンダース監督他と来日しジャーマン・ニューシネマが注目されたのもこの頃だった。映画自体は内容が薄かったが、その時を機にして認知され、ビデオ化が進み、その中でも彼等の音楽を聴けるに至ったことは嬉しい。（松本）



POPOL VUH
In The Garden Of Pharaos/Aguirre
LP /Celestial Harmonies CEL8/9 '83年
CD/Celestial Harmonies 13008-2

このアルバムは単なるカップリングではない。「In Den Gärten～」の全曲と、「Aguirre」のタイトル曲パート１＋２に加えて、LPではD面に３楽章から成るピアノ・ソロが21分も収録されている。この内パート２はアルバム「Spirit Of Peace」のＡ②と同曲だが、他の２曲はアルバム未収曲で、もともとこのピアノ曲はソナタ的に３楽章あり、これが完全版ではないだろうか。繊細な響きを大切にした曲で、これ程素朴でプリミティヴでありながら心を打つことのできるピアノ・ソロ作品は、フリッケの音楽を象徴するものだ。　（山崎）



POPOL VUH
Agape Agape
LP /(Nor.)Uniton U 15　'83年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14215

久しぶりにコニー・ファイトが加わって４人編成で製作されたアルバム。更にゲストにはJan Lorck Schieming、Nina、そしてデビュー作以来のFrank Fiedlerまでいる。だからと言ってさして変りのないのもPOPOL VUH。各曲はこれまでのメロディを変形させたりしながらのものも多く、比較的地味とも思える内容だ。「Hosianna～」のコニー・ファイトがいる割には、と思うからかもしれない。同じメロディを何度も使う彼等だが、ここまでくると単なる焼き直しというよりは、聖歌等に近い繰り返すたびの印象づけの作用、そちらの方に思えてくる。POPOL VUHのメロディはどれも簡素で、簡素なだけに浸み入るタイプのものだが、それらは繰り返すたびに深まるだけのメロディでもある。とてもメンタルだ。　（松本）



POPOL VUH
Spirit Of Peace
LP/(Nor.)Cicada C 001　'85年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14216

濃いピンク一色のジャケットでノルウェイから届き、暫くして聖者が湖に向って礼拝する写真のジャケットでイタリアからも届いたアルバム。タイトル曲は既に「In The Garden Of Pharaos/Aguirre」独Celestial Harmonies盤に片面全曲収録された純ピアノ曲で、このアルバムにもそのうち７分が収録されている。レデリウスのピアノ物に響きをかけたような、それでも何やら精神至高ふうのイメージを宿らせるような、そんな印象がある。フリッケの最も個人的な部分という気がする。少なくともベーシックとは言えるだろう。アルバム全体としては前々作「Agape～」と同様、もう一歩ポイントが欲しいところ。コニー・ファイトが今回はゲストで参加している。
（松本）



POPOL VUH
Cobra Verde
LP/(Fr.)Milan A 353　'87年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14214

ヴェルナー・ヘルツォーク、フローリアン・フリッケ、クラウス・キンスキー、このドイツ一意固地なトライアングルの最後になってしまった映画「Cobra Verde」、そのサントラ盤。ブルーノ・ガンツと並んでヘルツォーク映画に欠かせなかったキンスキーは、今は居ないデビュー期以来エレクトリック・キーボードを避けてきたフリッケが、久し振りにそれを使ったサントラでもある。オーケストラふうに使っている。多分、映画に沿ってのことだろう。何曲かに「Die Nacht Der Seele」以後の古代儀式音楽ふうのサウンドも聴けるが、ほとんどはオーケストラ・タッチのもの。そうした中にPOPOL VUHメロディが顔をのぞかせる。フリッケ、フィッヒェルシャー、クナウプの他にゲストも加わっている。　（松本）



POPOL VUH
For You And Me
CD/(Fr.) Milan 261 061　'92年

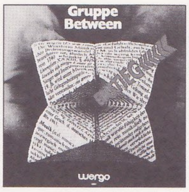
'87年のサントラ『Cobra Verde』以来の新作。メンツは中期以降のゴールデン・トリオ、F・フリッケ（p）、ダニエル・フィッヒェルシャー（g）、レナーテ・クナウプ（vo）だが、半分以上でグイド・ヒエロニムス（kb、g）が作曲又は編曲に関わっており、またアイリッシュ・ハープのアン＝マリー・オフォレルという女性が１曲参加しているのが目新しいところ。その曲はもろクラナド系トラッドでこのバンドとしては全く新しい試みだが、その他は相変わらず何かのアルバムに入っていたような節回しのリアレンジ、それも上澄みだけを要領よく継ぎはぎしたアプロウチが目立つ。なかなかポップで聴き易く、BGMとしてはまずまずだが、やっぱ出がらし的トホホ感はぬぐえない。　（松山）



POPOL VUH/FLORIAN FRICKE
Spielt Mozart
CD/Bell Classics BLR 84901　'91年

フローリアン・フリッケがモーツァルトのピアノ曲を演奏している作品。一応、ポポル・ヴフの名儀もカヴァーにはクレジットされているが、それはセールスを懸念してのことで、一連のポポル・ヴフの作品とは違う、フリッケのソロ・ワークとして聴くのが正しいだろう。フリッケらしい、細部に至るまで繊細な味付けを忘れず、左手の動きなどに神経を使って弾いているのがわかる。ただし、細部にこだわり過ぎた為か、フリッケの弾くモーツァルトはこうだという明確なコンセプトが伝わってこないところは残念だ。２つのソナタ（KV330、KV570）、１つのロンド（KV494）、１つのアダージョ（KV540）から成る。　（山崎）

BETWEEN



BETWEEN
Einstieg
LP/Wergo 1001　'70年

BETWEENの音楽は、このアルバム・デビューの時から終始一貫している。音楽を研究・修得したタイプのミュージシャンの集団らしく、アカデミックな臭いがする。もちろん通り一辺倒の勉強でないことは、音楽の懐の深さでよくわかる。ジャズ、現代音楽、民族音楽を渡る所に有るノン・ジャンルの良さを吸収した上で確立されたスタイルだ。しかも国籍も使用楽器も異なるソリストが集まっただけにヴァリエイションに富む。そう思って裏ジャケの写真を見ると、ペーター・ミヒャエル・ハーメルなどほとんどヒッピーで意外だが、考えてみれば'70年代頭のことだ。このアルバムは後のクリアーな音楽性からすれば詰めも甘く散漫な部分が多いものの、方向性はしっかりしている。彼等にしてはフリーキーな方だろう。　(松本)



BETWEEN
And the Water Opened
LP/Vertigo 6360 612　'73年

VERTIGOの渦巻レーベルでリリースされた本作は彼らの2nd。パーカッションのCotch Black(米)、弦楽器(ギター等)のRoberto Detree(アルジェンチン)、オーボエのRobert Eliscu(米：POPOL VUHへも参加)、キーボード＆ヴォイスのPeter M. Hamel(独)というメンバーの他に、エレクトロニクスのFabian Arkus(オーストリア)、バンブーフルートとパーカッションのDuru Omoson(米)がゲスト参加している。オーボエやオルガンなどが入れ替わりながら、中近東からインド地方のたおやかな旋律を流麗に奏で、その他の楽器が色付やアクセントを加えている。またミニマル風に循環するリズム・パターンは、聴く者の心を落ち着かせて瞑想の世界へと導き、暫し現実の時の流れから遊離させる。　(Helmut)



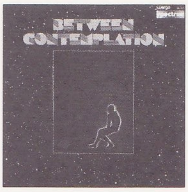
BETWEEN
Dharana
LP/Vertigo 6360 619　'74年

ペーター・ミヒャエル・ハーメル(vo、kb)の在籍していたロック・バンドとして知られるBETWEENだが、少なくとも本作で聴く限りはエスニック・サウンドに惹かれたクラシック・ミュージシャンとそれに応えた仲間達、といった印象がある。何しろエルネスト・ブール指揮のオーケストラまで参加しているのだから、主役はクラシック・サイドのミュージシャンだろう。後にPOPOL VUHに参加するロバート・エリスク(ob)はミュンヘン・フィルのメンバーでベルリン・フィルの客員メンバーという本格派。優雅な音楽だ。ハーメルやロバート・デトレ(g)は客演する形でEMBRYOと交流しており、これもまたワールド・ミュージックの先駆けとして捉えて差し支えあるまい。コッチ・ブラック(perc)はその後NIAGARAに参加した。　(坂本)



BETWEEN
Hesse Between Music
LP/EMI IC 062-29 546　'74年

BETWEENの４枚目のアルバムは、ヘッセの詩を朗読した企画物として出ている。全編に渡って彼等の音楽が聴けるものの、あくまでも朗読がメインのもの。ドイツ語がわからないとその点では面白味も半減する。仕方のないところだ。それでも音楽はその性格上、バックグラウンド・ミュージックとして合っているし、BETWEENでは聴けそうもない教会音楽、古いタイプのジャズ・サウンドも聴ける。そのあたりは詩に合わせたというふうだ。メンバーはハーメル、ドテレー、エリスクの布陣に変化なく、Tom Van Der Geld、Gary Lynn Todd、Peter Friedrich Muller、Al Gromer (POPOL VUH) 等多くがセッションしている。既にこの時次作の顔振れが何人かそろっている。ジャケの絵はフリードリヒの傑作　(松本)



BETWEEN
Contemplation
LP/Wergo WER-SM 1012　'77年

６枚のソロ・アルバムにて半ミニマル・ミュージック、東洋の伝統音楽等を鍵盤楽器に取り込んでいるペーター・ミヒャエル・ハーメルを基軸にポポル・ヴフ参加、実はクラシック界のオーボエ奏者でもあるロベルト・エリスク、アルゼンチン国籍のギタリスト、ロベルト・デトレー等をメンバーとするビトゥイーンの５作目。一貫してインド音楽、コンテンポラリー・ジャズの要素を内包した現代音楽を瞑想的音響空間にまで至らせる音楽性はウッド・ベース、シタール、タブラを使用しつつ浄化されきった理知的な響きと硬質な美しさを放つ。本作はより音色に清寒さ、凝結感があり静的かつ内向的、Ａ面は曲ごとに各楽器を活かしておりグループの音楽構成要素を全体のサウンドまで拡大した形になっている。　(松本)



BETWEEN
Stille Über Der Zeit
LP/Wergo SM 1023　'80年

最終作。これ以後BETWEENのアルバムは出ていない。リーダー格だったハーメルが今も順調にソロ活動を続け新作を出し続けるのみ。BETWEENの音楽は、もともと音もクリアーなら、音楽の方向性もクリアーだが、このアルバムでそうした傾向は一層進んだ気がする。中心メンバーの三人、ハーメル、デトレー、エリスクの共作は、1曲のみで他7曲は各々ソロを持ち寄ったもの。従ってハーメルはキーボード曲、デトレーはギター曲、エリスクはオーボエ曲と、くっきり色分けされている。かすか遠くにシタールが波打つようにループし、そこに静謐なオーボエの音色が少しアラビック調にメロディをとると、POPOL VUHの'70年代後半の作品を聴いているような気になる。全曲ひたすらクリアーだ。　(松本)



PETER MICHAEL HAMEL
Hamel
LP/Vertigo 6641 055　'70年

初ソロ作品でありながら、2枚組の大作である。70年代初期の重要な作品を多数手がけたMUSIC FACTORYから出版されている。作曲から演奏まで全てHAMEL自身が行っている。彼は作曲と音楽史の他に心理学と社会学を大学時代に専攻しており、興味の対象の幅広さを窺わせる。音楽的にはインド、インドネシア、チベットの影響を多大に受けたようで、本作以降の音楽に色濃く反映されている。本作では、ピアノの弦をワイヤとイレイザで押さえることによって音色を工夫したり、予め曲の展開の概略とタイミングだけを決めて各トラックごとに独立した演奏を録音して再生するといった、実験的な工夫がいくつか凝らされている。時間に追われる日常生活から精神を解放し、潤いを与えてくれるような音楽である。(Helmut)



PETER MICHAEL HAMEL
The Voice of Silence
LP/Vertigo 6360 614　'72年

彼の2ndソロ・アルバムで、作曲はもちろんのこと、ヴォイス、ピアノ、オルガン、ハルモニウムの演奏、ジャケットのデザインまで彼独りで手がけている。A面1曲、B面2曲のコンセプト・アルバムで、非常に繊細かつスピリチュアルな内容である。宗教といってもキリスト教ではなく、仏教によるもので、自然や宇宙との融和・同一化の思想に導かれている。そのことは、彼の発するヴォイスとオルガンやピアノの音が調和的に一体化するところに象徴的に表れている。端的に例えれば、声明による音空間を楽器やヴォイスを使って音楽的に表現した作品と言えるであろう。円形を基本とした曼陀羅に似たカバー・アートも、至福に満ちた無限の天上界のイメージとよく合っている。(Helmut)



PETER MICHAEL HAMEL
Nada
LP/Wergo SM 1013　'77年

BETWEENの中心人物、キーボード奏者、というよりも作曲家と言った方が適切か、ペーター・ミヒャエル・ハーメルの'77年のリリース。作曲はBETWEENが「Hesse～」「Contemplation」を製作していた'75～'76年に行われている。彼はバンドと並行してこれまでにもソロ・アルバムをリリースしているが、初期の「Hamel」「Voice Of Silence」あたりに較べると、このアルバムは随分と硬派に思える。全4曲でB面は1曲。ほとんどがミニマル・ミュージック寄りのもの。現代音楽肌のシリアスなアルバムと言っていい内容になっている。ピアノ、シンセサイザー、オルガン等をはっきり使い分け、無駄のない整然とした印象を受ける。感情移入をしづらい音楽だ。彼が後に注目されてから国内盤も出た。(松本)



PETER MICHAEL HAMEL
Organum
CD/Kuckuck CD 074　'86年

17世紀に生まれたイエズス会士、あるいはルネサンス最大の百科全書的幻想科学者アタナシウス・キルヒャー。その著書『普遍音楽』には天空の音楽や音響論の他に、自動演奏機械に関する記述もあったという。『普遍音楽』第2巻の挿画「世界創造の和声」をジャケットにあしらった本作はハメル自身によるパイプ・オルガンの響きが、喩えるならアルヴォ・ペルトにも通じる澄明さとひたむきな意志を持って聴く者の内側に波のように染み入る。永遠なるものへの共感。音楽による世界創造を示すオルガンの鍵盤の下にキルヒャーは「神の永遠の叡智は世界の領域でこのように演奏する」と記したが、ならばこれはその再演への試みなのかも知れない。(高山)



PETER MICHAEL HAMEL
Transition
LP/Kuckuck 063/064　'83年

BETWEENでの活動を経てクラシック・サイドへ移行したペーター・ミヒャエル・ハーメルは、ドイツを代表するミニマル・ミュージックの作曲家として一躍名を馳せたが、この頃から徐々にネオ・ロマン派へのシフトを始めたきらいがある。本作はハーメル自身の演奏を収録した2枚組LPで、ピアノ曲が3曲(〝Transition〟、〝Let It Play〟、〝Transpersonal〟)、プリペアド・ピアノのための曲が1曲(〝Mandala〟)、パイプ・オルガンとコンピューター、シンセサイザーのための曲が1曲(〝Apotheosis〟)という構成だ。〝Mandala〟は楽器の特殊性もあってやはりミニマル色が強い。一方、ピアノ曲にはいずれも曖昧さが残る。〝Apotheosis〟の派手さがロック・ファンには一番受け入れ易いかも知れない。(坂本)

AGITATION FREE



AGITATION FREE
Malesch

LP /Vertigo 6360 607　'72年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14250

後にASH RAの片腕になるルッツ・ウルブリッヒやシンセサイザー奏者としてソロ活動を始めたミヒャエル・ヘーニッヒらが在籍していたバンド。アルバムは計３枚。これはデビュー作。２作目になるとすっきりと型のついたサウンドになるが、こちらはその前段階とも言えて、とても意欲的な部分が目立つ。エレクトロニクス・サウンドにしても、その異次元空間仕立てのトーンが随分と粗野なイメージを与え、むしろ新鮮にも感じる。これを基調にしてビート感のないロック・サウンドが乗り、突如として中近東のバザールさながらの生録がカット・インするなど、音響の位相変化が刺激的だ。そして瞑想感もある。CDになってこれらの効果が一層向上しているので、当時のロックの異型・変質ぶりを聴くに手頃だ。　(松本)



AGITATION FREE
2nd

LP/Vertigo 6360 615　'73年

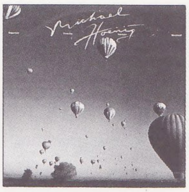
ルツ・ウルブリヒ、シュテファン・ディーツ、ブルクハルト・ラウシュ、ミヒャエル・ギュンター、ミヒャエル・ヘーニヒの５人によるアジテイション・フリーのセカンド・アルバム。ペーター・ミヒャエル・ハーメル参加のファーストに比べて、実験性や攻撃性が薄れ、ノイジーな部分やフリー・フォームな部分があるにせよ、後にウルブリヒがゴッチングと創り出す後期のアシュラの音を思い起こさせる。このグループはドイツ・ロックの古参で、クリス・フランケ（元タンジェリン）ミヒャエル・ヘーニヒ（タイム・ウィンド、タンジェリン）らが在籍していたことで知られる。同系とはいっても、そのスタイルははるかにオーソドックスで、形式の創造というよりも、既成手段の否定という意味が強い。　(嶋田)



AGITATION FREE
Last

LP /(Fr.) Barcley 80. 162　'76年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14229

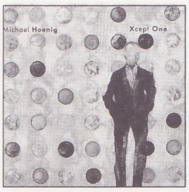
アジテイション・フリーは２枚のスタジオ作品でトリップ・ミュージックとしてのロック・サウンドを追求し、中近東志向の見え隠れするファーストから、タイトにアレンジされた2ndへと移行し分裂、解散してしまう。この作品は彼等のスタジオ・セッション・テイクを集めた３枚目の作品でフランスでのみ発売された。Ａ面は2nd時の作曲で、アレンジされた曲を演奏しているが、それ程の広がり感はない。が、Ｂ面にくり広げられるインプロヴィゼーションこそ、彼等のアイデンティティーの感じられる好テイクである。フリー・ロックの可能性を追求しながらもヘーニヒのエレクトロニクスのハード分野への興味も感じられ、彼等の歩んだ道の最高部に位置する音であるが、同時にそれが彼等の限界ともなってしまった。　(山崎)



MICHAEL HOENIG
Departure From The Northern Wasteland

LP/Warner Bros. WB 56 464 77
'78年

TANGERINE DREAM加入のためにバンドを離れたC・フランケの後釜としてAGITATION FREEに参加。K・シュルツェとTIME WINDを結成。P・バウマンのオフにTANGERINE DREAMのツアーに参加。こういった経歴でも判るように、ミヒャエル・ヘーニッヒはTANGERINE DREAM直系のミュージシャンであり、この１stアルバムの音楽も『Rubycon』あたりの音楽に近い。この大手レコード会社とのソロ契約をきっかけに彼はロサンジェルスへと住まいを移し、単身自らの音楽の研究にいそしむことになる。フィリップ・グラス、ダニエル・レンツといったミニマル・ミュージックの音楽家達と交流しながら、'84年にはドン・プレストンと来日。その後も、ウェイン・ショーターのアルバムに参加するなど、人脈を広げながら活動を続けている。(坂本)



MICHAEL HOENIG
Xcept One

LP /Cinema IC 064-74 6919 1　'89年
CD/東芝EMI CP32 5504

余り話題には上らないが、ヘーニヒのファースト・ソロ「四次元への飛翔」は数あるシンセサイザー・アルバムの中でも上位に位置するポテンシャルを持っていた。'84年に尚美学園のバリオホールで開かれた「今、電子音楽は」と題されたイヴェントで来日した際にも、現代音楽然とした他の参加者に対し、オーバーハイムの厚い音でその延長上のシンセサイザー・ミュージックを聴かせてくれたヘーニヒ。ニュー・プログレッシヴを標榜したシネマ・レーベルの一枚として、Ｐ・モラツやＰ・バーデンス等と共にリリースされた本作では、リズミカルなパートに今日的な軽さも感じられるが、ハロルド・バッドとの共作に於るたゆたう穏やかな流れや、ミニマルをポップに転化するセンスは流石に一流の作品だと思う。　(高山)

ASH RA (TEMPEL)

●河原博文(協力：山本要三)



■Ash Ra(Tempel)のサウンドについて■

Ash Raとはギタリスト、Manuel Göttschingを中心としたソロ(プロジェクト)の事である。Ash Ra Tempelの結成は、Tangerine Dreamを脱退したばかりのKlaus Schulzeが、Manuel Göttsching(G)、Hartmut Enke(B)の三人で結成した1970年に遡る。彼らの演奏は、当時の他のジャーマン・ロック・グループと同様に、'60年代後半から流行していたサイケデリック・ムーヴメントの影響を大きく受けており、グループ名にもその影響が見受けられる。(「Ash＝形を有するもの、無常なもの、限界のあるもの、Ra＝認識、洞察、だが具体化されないもの、Tempel＝存在の確固さの象徴を意味する。」)

変形見開きジャケットの一作目「Ash Ra Tempel」('71)は、コズミック・ヘヴィ・ロックとでも云うべき音世界を、A面では暴力的に、B面では瞑想的に演奏している。'71年のサウンズ誌人気投票でニュー・グループ部門2位に選出された事からも、当時の彼らの活動が注目されていた事が判る。〝Rolf-Ulrich Kaiserのプロデュースについて、Klausは決して満足していませんでした。でも私は違った立場にいたので、──Ash Raを結成した時、私は17才で、Klausより幾つか年下でした。──私は、何も言えなかった。〟(Manuelインタビューより)

この一作目の発表後、Schulzeが、ソロ活動の為脱退。'72年にサイケデリックな色彩が濃い、ブルース・ロック的な二作目「Schwingungen」を発表。同年スイスにて、〝Lord of Hights〟と云われていたTimothy Learyと「Seven Up」を録音。7UPに入っていたLSDを、参加メンバーが服用しTimothy.の導きでセッションした模様が収められている。又、このLSDセッションが契機となって、Cismic Couriers Sessionが行われる様になる。(参加メンバーは、Ohr、Kosmische、Pilzレーベル周辺のアーティスト達。)「Seven Up」やCosmic Couriers Sessionの内容は即興演奏が多く、大げさなエコー処理が施されていて、良くも悪くも当時のサイケデリック・シーンを表現している。

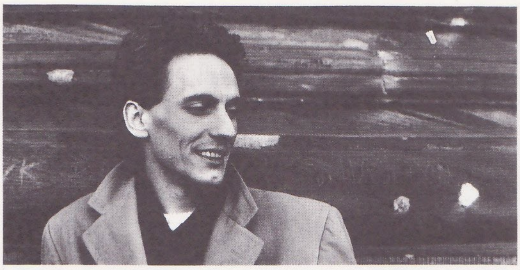
'73年には、「Tarrot」セッションの合間を利用して、Schulzeと「Join Inn」を録音しており、1stの続編といった内容となっている。この後、オーバー・ドラッグでEnkeは廃人となり、Ash Ra Tempelは、Manuelが一人残った形で続けられる。同年、プロデューサーDieter Dierksの好みがかなり反映した「Starring Rosi」を発表。〝即興とは違う何かをやってみたかった。歌をやりたかったんです。〟(Manuelインタビューより)

'74年には、自身のスタジオを作り上げ、4トラック・テープ・レコーダーを利用した、ギター演奏だけによる、ミニマル・サウンド作品「Inventions For Electric Guitar」を発表。ここでテクニカルな進歩を遂げた演奏を展開しており、ギター・リフ等に、後の作風の萌芽が見受けられる。

'76年フランスのIsadoraからリリースされた「New Age Of Earth」は、'77年にVirginから全世界に向けて発売され、名義もAsh Raに変えている(ジャケットも変更)。演奏者としての意識と作品内容が、今迄と違う事をアピールしたかったものと考えられる。実際の所、本作以降でのエレクトロニクスの大幅な導入によるカラフルな曲想は、Ash Ra Tempel時代の重々しい、サイケデリックなギター・バンドというサウンド・カラーとは、別物と考えた方が良い。前出のインタビューにもある様に、Ash Ra Tempel時代のリーダーはManuelではなかった訳で、初期のAsh Ra Tempelは、EnkeとSchulze及び、Rolf-Ulrich Kaiserの発言権が強かったと見做すべきである。又、本作より導入したイタリア製リズム・マシン、EKO Rythm Computerが、「E2-E4」迄のAsh Raサウンドの隠れた要となっている。

以降コンスタントに、「Blackouts」('78)、「Correlations」('79)、「Belle Alliance」('80)、「E2-E4」('84/ハウスで引用)、「Walkin' The Desert」('88)、「Tropical heat」('89)を発表し、作品によっては、Lutz Ulbrich(G,Key：元Agitation Free)、Harald Grosskopf(Ds：元Wallenstein)が参加している。LPではリリースされなかった昔の作品も近年、CD化されている。(「Le Berceau de Cristal」、「Dream & Desire」)。

Ash Raの作り出す音は、リズミカルなシーケンサー・リズムの上にギター・リフを作り上げ、その上でソロ・プレイを繰り広げるというパターンなのだが、耳障りの良い音を好んでいる事と、さえずる様なギター・ソロや華麗な曲展開に特徴があり、他のエレクトロニクス(ポップ)・グループとは一線を画するインストゥルメンタル・グループである。'78年から頻繁にファッ



ション・ショーの音楽を担当しているのも、Ash Raのモダーンな感性が評価されているからではないだろうか？「誰にでも出来そうで、絶対出来ない」作品を作り出すAsh Raの感性は、エレクトロニクス・ロック・グループの姿見である。余談ではあるが、色んな作品でメロトロンを良く使っているので、メロトロン・ファンもチェックする様に。

■Manuel Göttschingを中心とした Ash Ra(Tempel)の歴史■

1952年　9月9日 Manuel Göttschingベルリンにて生まれる。
1970年　Ash Ra TempelをKlaus Schulze(Ds,エレクトロニクス：ex Tangerine Dream)、Manuel Göttsching(G)、Hartmut Enke(B)のメンバーにて結成。
ベルリンのクラブや画廊でギグを行う。
1971年　「Ash Ra Tempel」リリース。ベルリンとスイスのツアーを行う。
K.Schulze は、ソロ活動の為に脱退。
1972年　「Schwingungen」リリース。ベルリンでギグ。
「Seven Up」をTimothy Learyと録音。
1973年　「Tarrot」セッションの合間を利用してSchulze と「Join Inn」の録音。
「The Cosmic Couriers」のレコーディング・セッションに数多く参加。
「Starring Rosi」リリース。
ドイツ、フランス、オーストリア、スイスのツアー。
1974年　スタジオ・ローマのセット・アップ。
「Inventions For Electric Guitar」リリース。
パリにてライヴ。
1975年　イギリス、フランス、ドイツをLutz Ulbrich(G,Key：ex Agitation Free)をメンバーに加えて、ツアー。
Philippe Garrel 監督の映画〝Le Berceau de Cristal″担当。('93年にCD発表)
ドイツのテレビ映画〝Winter″の音楽担当。
1976年　「New Age Of Earth」リリース。7日間のフランス・ツアー。
1977年　ラジオRIAS局の放送用に「Dream ＆ Desire」録音。('90年にCDにて発表)
Lutz Ulbrich、Harald Grosskopf(Ds:ex Wallenstein)と共にフランス、イギリス、スイス、ベルギーのツアー。
8月のイギリス・ツアーではレーザー・ショーもサポート。
1978年　「Blackouts」発表。
Claudia Skoda のファッション・ショー用の音楽担当。
1979年　「Correlations」発表。
Big Birds のファッション・ショー用の音楽担当。
1980年　「Belle Alliance」発表。
ブリュッセルでのK.Schulzeのコンサートで共演。
1981年　Klaus SchulzeのRichard Wahnfriedプロジェクトにギターで参加。
11月のSchulzeのヨーロピアン・ツアーに同行。
バルセロナのSpanish TVに出演。
1982年　Trommelfeuerのファッション・ショー用の音楽担当。
1983年　Fights-Veitsのファッション・ショー用の音楽担当。
1984年　「E2-E4」をSchulze のICレーベルよりリリース。
1985年　イギリス UK ELECTRONICAフェスティヴァルに出演。
1986年　Ost-Westのファッション・ショー用の音楽担当
1988年　ManuelとLutz及びナレーターの3人で、ベルリン・プラネタリウムに於いて「Walkin' The Desert」の曲を披露。後、ラジオRIAS局でその模様を放送。
1989年　「Walkin' The Desert」をNavigatar よりリリース。(Lebelのオーナーは「Seven Up」で歌っていたMickie Duwe。)
1991年　「Tropical Heat」をリリース。
フランス・コローニュでライヴ。



ASH RA TEMPEL
Ash Ra Tempel

LP /Ohr OMM 56 013　'71年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14244
/キング KICP 2727

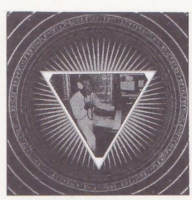
ブルース・ロックを基底にコスミッシェ・レーベルにおいてトリップ・サウンドを象徴したマニュエル・ゴッチング（G）のアシュ・ラ・テンペル。72年間、ドラッグとの関係が極度に強力であったこの音楽集団の変遷こそドイツ・ロックの創成期から現在に至る過程を如実に表している。この1stでのメンバーは他にクラウス・シュルツェ（Dr）とハルトム・エンケ（B）。A面の過激な内向性ハードロークB面の静寂なサウンド共に過多なエコー操作が成された即興演奏でありどろどろとした暗さを内包している。最終的にアシュ・ラ・テンペルはM・ゴッチングに集約され現在アシュ・ラと名乗り確実な足取りを示しているがこの変形ジャケットの中には一心不乱にギターに打ち込む18歳の情熱がある。　(松本)



ASH RA TEMPEL
Schwingungen

LP /Ohr OMM 556 020　'72年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14248
/キング KICP 2734

アシュラテンペルのセカンドである「シュヴィングングゲン—振動—」はシュルツェの脱退後、ゴッチング、エンケ、スティーブル・チェイス時代の仲間ヴォルフガング・ミュラー、アジテイション・フリーにいたヨーン・L、サックスのヴェラー、ボンゴ奏者ウィル・ポップによって録音された。アシュラテンペルの音楽的姿勢はドラッグによる精神解放と現代の没落した人間の表現にあり、彼らがLSD解放を叫ぶティモシー・リアリー博士や（何と7upでうたっている）オリダス・ハックスリー博士に強い影響を受けていることからも理解できる。音楽はこうした基盤の上で作用するものと考えられ、音だけを取り出して評価するのは意味がないが、一言でいえば、ヘヴィーで即興的なサイケデリック・サウンドである。　(嶋田)



TIMOTHY LEARY & ASH RA TEMPEL
Seven Up

LP /Kosmische Musik KK58001　'72年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14249

スイスへ亡命していたLSD研究者ティモシー・リアリー（LPを発売している）を迎えての3作目。前作までのバンド形態からオープン・セッション形式で録音されA面スタジオ・ライヴB面ベルン・フェスティヴァルでのライヴとなっている。ブルース、ロックン・ロール或いは「神秘」期のフロイドを彷彿とさせる曲調等、何れもラフな演奏に必然性の薄いエコー処理、音移動が成されておりスペイシーな効果音がそれら各曲を連結している。一連のセッション作（PLANETEN SIT-IN参照）の第1弾が本レーベルの初作であったことからもその位置づけ、取分この頃ドラッグ漬けであった彼等（エンケは発狂）による本作はリアリーとの出会いによりドイツ流サイケデリック・ムーヴメントを一際、象徴している。　(松本)



ASH RA TEMPEL
Join Inn
LP /Ohr OMM 556032　'72年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14246

「Tarot」セッションの合間を利用して、1st録音後脱退した、Shulzeとセッションを行った模様が本作である。セッションは②①の順に行われたそうである。1stのナンバーと同じではあるが、1stよりはサイケデリックな感覚が少なく、聴き易い。①ではコズミック・ヘヴィ・メタル・ロックとでも云うべきギター・トリオのインプロヴィゼーションが繰り広げられ、②では、「7 Up」の録音の時に感じた事を、Rosiが囁やく。〝彼方へ〞というタイトル通り、ストイックなメディテーション・サウンドで、至福のヴィジョンを体験出来る。トリップ・サウンドである。オーバー・ドラッグで廃人となったEnkeは、本作を最後に、音楽界から姿を消す。　(河原)



ASH RA TEMPEL
Starring Rosi
LP /Kosmische Musik KM58. 007
'73年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14247

初期のサイケデリックでドロドロとした、直接的にドラッグとの関連性のあるサウンドの後、マニュエル・ゴッチングは恐ろしい程に趣味的な作品を制作した。おそらく、グループとしてのアシュ・ラ・テンペルは前4作で分裂し、マニュエル・ゴッチングだけがグループに残った形になったのであろう。ここに聴くことのできるサウンドは、それまでのヘヴィーなものではなく、軽く、明るい作風へと大きく変化した。そして恋人であるロジ・ミューラーをカヴァーに使用し、タイトル名にもロジを使う等、全く個人的レベルの作品といえる。しかし、ソフトなドラッグ・ミュージックとしては良質であり、又、後のサウンドへの布石となった作品として注意をうながしたい。　(山崎)



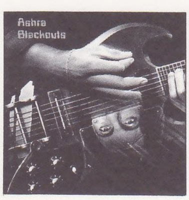
ASH RA TEMPEL
Inventions for Electric Guitar
(Ash Ra Tempel Ⅵ)
LP /Kosmische Musik Ohr KM 58.015
'75年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14245

通算6作目。ギター(エフェクタを含む)と4チャンネルレコーダー以外は何も使わずに作り上げた作品で、ミニマル音楽にひとつの分野を確立したと言っても良いのではなかろうか。ディレイによって重なったギターのピッキング・サウンドが特徴的で、別トラックとの微妙なリズムのずれによって不思議な音響効果を上げている。これはA①の曲に顕著で、面白い感覚を楽しむことができる。1stや2ndも含めて、彼は精神性の高い作品を作り続けており、メンタルな部分が昇華されて本作のA②のようなタイプの曲が出来上がるのではないだろうか。彼の作品を表層的に、過激だとかサイケデリックだと評するのは、本質を見落としていることにならないだろうか。
(Helmut)



ASH RA TEMPEL
New Age of Earth
LP /(Fr.)Isadra ISA 9003　'76年
CD/(U.K.)Virgin CDV 2080

通算7枚目の本作にはASHRA名義のVIRGIN盤も存在するが、1年早くリリースされた仏盤がオリジナルである。ギターの奏法をいろいろと工夫して独自のスタイルを確立したManuelが、さらに新しいステップを踏み出して作り上げたのが本作である。どの曲もタイトルと演奏内容が非常に良くマッチしている。A①では燦々と降り注ぐ陽光がリズミカルなギターとキーボードのサウンドによって、A②ではゆったりとした優しい雰囲気がバックのうねるようなサウンドによって実に巧く表現されている。また、夜の闇の中に潜む生命の息吹にそっと耳を傾けるような、優しさと暖かさに溢れた曲が、B面全部を使って表現されている。このアルバムを聴き終わった時、きっと「New Age Of Earth」の予兆が感じられるはずである。(Helmut)



ASH RA
Blackouts
LP /(U.K.)Virgin V 2091　'78年
CD/Virgin CDV 2091

本作は、事前にアレンジをかっちり固めて制作された内容となっており、「New Age Of Earth」よりも同じソロ作品とは云え、トータル・アルバム的に完成度が上がり、サウンドがよりオープンになっている。本作発表直後から、ファッション・ショーの音楽を頻繁に担当する事と関係しているのやも知れない。ギターの音が、とても伸びた美しい音を出していたり、当時はチープな音しか出なかったリズム・ボックスを、非常に巧妙に使っていたりとやはり、Manuelのセンスの良さに感心してしまう。日本では、本作がLP盤で一番最初にリリースされた。「このレコードは、心地良く聴くべきだ」(Maunel Göttscing)多重録音を行っている人は必聴盤となる作品。(河原)



ASH RA
Correlations
LP /(U.K.)Virgin 2117　'79年
CD/Virgin CDV 2117
東芝EMI VJCP-23043

「Starring Rosi」から「New Age of Earth」までのアシュラは、マニュエル・ゴッチングのソロ・プロジェクトとして、多重録音で制作されていたが、この頃のサウンドは、グループ形成をとっていることもあり、強いダイナミズムを感じるものだ。リズム、シークェンスとそれにシンクロするハロルド・グロスコフのドラミング。その上にのるマニュエル・ゴッチングのギター。シンプル化され、ソフィスティケイト化された感性は、この時代に於いてはかなり先行した美意識であり、はるか後のハウス・ミュージックの源流がここに聴くことができるといっても過言ではない。当時のポップ・ミュージックの中でもこのセンスは数年先を行くものである。(山崎)



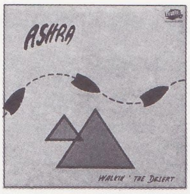
ASH RA
Belle Alliance
LP /(U.K.)Virgin 2163　'80年
CD/Virgin CDV 2163

「Black Out」以降のアシュラの流れは、ジャーマン・サウンドからハウス・ミュージックへと流れていく過程の中で重要な位置を占めるものだ。当時、プログレッシヴ・ロック・ファンの間でこの頃のアシュラに注目していた人間はいなかったようだが、これは、マニュエル・ゴッチングの感性が、ファンのレヴェルを大きく先行してしまった為に生じた現象であった。このことはノイやデュッセルドルフの流れをくむ作品にもいえることだが、ドイツのエレクトロニクス系のミュージシャン達は、70年代にすでにリズム・シークエンスによる平坦なリズムを好み、大きく時代を先行していた。当時のレヴェルでいえば、恐ろしい程にスタイリッシュなサウンドだ。
（山崎）



MANUEL GÖTTSCHING
E2-E4
LP /Inteam ID 20.004　'84年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14241

イタリアン・ハウス系のスエニョ・ラティーノに引用され、ハウス・ミュージックのファンにも聴かれている本作は、ポップでダンサンブルなミニマル・サウンドと云えば良いのであろうか？延々と続くEKO Rythm Computerのシーケンス・パターンに、金物系は、フランジャー、リバーブで憎い程の音響処理を施し、後半からギター・ソロを繰り広げていく。ASH RAの作品は、どれも少しづつ傾向が変わっているが、本作は特に異色の出来として一聴の価値はある。作品発表の頃は、リアルな音のドラム・マシーンが出始めた頃で、それ迄のチープなリズム・ボックスの音の効果的な使い方という視点から、本作を創ったのかもしれない。
（河原）



ASH RA
Walkin' The Desert
LP /Navigator NAV 8901-1　'89年
CD/Navigator NAV 8901-2
/(Fr.)MSI Spalax 14 240

1988年にベルリンのプラネタリウムで行われたイベント「Desert Sounds」に本作①〜④のオリジナル版を披露していて、同年ラジオでその模様が放送されている（Manuel、Lutz、ナレーターの三人編成）。そのライヴの再現が本作であり、ナレーションはカットされている。今迄の作品のエッセンスを抽出した様な内容で、余分な音は省かれ、一つ一つの音がきらめき輝いている。ここでは、ジャーマン・ロックの20年の歴史を作ってきた一人の男が、今だに才能の色褪せる事無く、天才が天才を証明している。⑤はCDのみのボーナス・トラック。サンプリング・キーボードを初めて導入。「Seven Up」で歌っていた、Mickie Duweの新興レーベルからのリリース。ASH RAの集大成的作品‼
（河原）



MANUEL GÖTTSCHING
Dream & Desire
CD/Musique Intempo 883・598-907
'91年

「New Age」を発表した後77年に、RIASラジオ局の放送の為に、作曲・演奏したもの。（①②が放送）やはり、作風は「New Age」の②③と良く似ているが、こちらの方がギターが良く歌っているのと、雰囲気が明るく、リラックスさせてくれる。ASH RA流New Age（ヒーリング）サウンドといったところか。音作りとしては、シーケンサーの音にディレイをかけて、細かいフレーズを作り出している事や、そのシーケンサー・リズムに合わせて細かいサブ・メロディーをギターのリフで弾くという、ASH RAお得意の手法がここに確立している。ライナーによると、73年よりRIASラジオには時々出演している様で、非常に興味深い。まだまだ発掘CDは出る？
（河原）



ASH RA
Tropical Heart
LP /Navigator NAV 8909-1　'91年
CD/Navigator NAV 8909-2
/(Fr.)MSI Spalax 14242

とにかく明るい。熱帯地方に関係する曲目ばかりで、ASH RA流カリプソといったところか？又々三人編成に戻っており、従来のシーケンス・フレーズを基に演奏するという形ではなく、又得意のディレイやミニマル的手法も使われていない。ライヴ演奏を前提とした、かなりノーマルな曲作りとなっている。インナー・フォトに写っている、91年コローニュのライヴでは、本作がメインで演奏されたのかも知れない。あくまでも推測だが、シーケンサーも含めた、MIDI機材の使い方の試行錯誤を行っている途中の様な気がする。（河原）



ASH RA TEMPEL
Le Berceau De Cristal
CD/(Fr.)MSI Spalax 14275　'93年

ニコ、ドミニク・サンダ出演のPhilippe Garrel監督の映画「Le Berceau de Cristal」（日本未公開）のサントラ曲をメインに、ManuelとLutzのセッションを収めた本作は93年に突如としてCD化された。タイトル曲は、75年8月7日カンヌでのライヴで、このテイクがサントラにも使われた。やはり、「Inventions」期の音だが、より瞑想色も濃く、当時のASH RAのライヴの雰囲気を良く伝えている。（74年のライヴでは「Inventions」と、この手の瞑想的な曲が1時間以上演奏されている。）他の曲は「New Age」に至る迄の、試行錯誤の記録と考えた方が良さそうだ。ドラム・マシーンにフェイザーやディレイをかけたり、ギター・シンセを使ったりと、かなり実験的な事をしている。
（河原）

KLAUS SCHULZE

●中野泰博

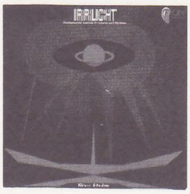


独のミュージック・シーンにおけるシュルツェの立場は多分我々が考えている以上に巨大なものであるに違いない。彼はこの20年近い年月に自身のソロ作品の他に数限りない活動を続けている。初期においては一連のコズミック・セッション・シリーズで、これはアシュラ・テンプルを母体としウルリッヒ・カイザーなるコスミック・レーベル主催者によって行われた。「タロット」等の有名な作品があるが、その参加メンバーから期待されるほどの音楽的な内容は無い。しかし独ロックの原体験であるドラッグ体験がモロに表面に出ている点ではひとつの時代を知る重要な記録ではあるだろう。シュルツェのソロ作品「イルリヒト」「サイボーグ」はそのコスミック・レーベルよりリリースされ、同じドラッグによる作品としても高水準の



音楽性を持っていた。当初からシュルツェの作品はいわゆるスペース・ミュージックとは一線を画しており、聞き手の安易な思い入れを許さない確固とした内容を展開していた。旧友・タンジェリン・ドリームが環境音楽的な評価を受け、BGMとして流される事はあっても、シュルツェの音楽は聞き流す事は出来ない。レーベルをブレイン、ヴァージンに移しての'75年ごろ、彼としてもひとつの節目になる「タイム・ウィンド」を制作、異世界の創出を完成させた。大変大ざっぱな分類をしてみると「イルリヒト」から「タイム・ウィンド」までの初期と、「ムーン・ドーン」から「X」までの中期、デジタル化と共に彼の内なるワグナーが表出する現在までの三期に分けられる。しかし現在こうしてふり返ると、どうしても中期の作品には不満が残る。サントラの「ボディ・ラヴ」は別としても、精神面での重厚さが他の作品とくらべ薄まった様なイメージがある。水準以上の作品は「ミラージュ」と「X」だろう。この時期彼はツトム・ヤマシタのプロジェクトにも参加、はっきり言ってどうでもいいシンセを弾いている。これを考えると、つくづくシュルツェと言う人はソロに向いている人間だと思う。そしてアーサー・ブラウンをVo(!)にむかえた「デューン」からが、実は彼の音楽が一番完成されて行く事になる。「X」の2枚目で試みられたクラシック的手法も充分消化し、彼の作品中最も重厚な内容になって行く。デジタル録音を始めた「ディグ・イット」「トランスファー」において、彼は最も良きパートナー、リヒャルト・ヴァーンフリートを得、彼名義の作品もリリースする。実はこのヴァーンフリートとは彼の使用しているコンピューター・システムの名前で、シュルツェは日夜彼と会話を続け作曲をしているらしい。当然ヴァーンフリートとしての作品は全てプログラム演奏で、通常のシュルツェの作品とくらべると構成がしっかりしている分だけロックっぽい。'80年前後の彼の活動は、おりからわき起ったニュー・ウェーブに対抗する訳では無いだろうが、I.C.なるレーベルを設立、実験音楽からニュー・ウェーブまで広域な作品をリリースしている。又、ステージにおいて時おり共演していたライナー・ブロスとの共作を含む小シリーズ「インティーム」もスタートさせ、長く音沙汰の無かったアシュラのマニエル・ゴッチングの作品を聞かせてくれた。この時の「アフリカ」は大変高度な内容を持ち、近年のシュルツェの作品でも傑作である。その後、ブロスを加えてのライヴをはさみ発表された「オウデンティティー」においても様々なアプローチが試みられており、彼の止まる所を知らない活動には本当に頭が下がる。ヴァーンフリートの一件でもわかるように、彼のメカ・マニアぶりは相当な物で、時おりジャケットに写る彼自身のスタジオ設備も個人の物としてはケタ外れの豪華さである。彼の音楽もタンジェリン同様、シンセサイザーの発達と共に表面的変化を見せてはいるが、曲の内容はアルバムを重ねる毎にヘヴィなものへ移っている。先にも記した通り、近年の作品にはデジタルのシンセサイザーをメインに使用しているにもかかわらず、ゲスト・メンバーの生ピアノ、チェロ等を加えても何ら不自然さを感じさせない音色・内容を持ち、ドイツ人としての精神面の課題を一手に引き受けている感がある。

今回は各アルバム毎の解説は意識的に触れずに話を進めてしまったが——そうしないと、とても終らない——彼の音楽は電子音楽と言う現在最先端の領域において、最も正統な音楽芸術を展開している事だけは記憶してほしい。最近軽々しく「シンフォニック・ロック」なる言葉が使用されるが、ほとんどが表面的にストリングスを使ったりしただけの粗末な物であるのに対し、シュルツェの音楽こそ真の意味でのシンフォニック・ロックではないだろうか。



KLAUS SCHULZE
Irrlicht

LP /Ohr OMM 556. 022　'72年
CD/(Fr.) Fnac Music 662012

狂った光と題されたシュルツェの1st。アシュ・ラ・テンペルを脱退した後シュルツェは自宅で様々な音の実験をくり返していた。93年の10枚組CD、「Silver Edition」にも「Irrlicht」第２章の原型となったと思われる72年のテイクLand partieが収められているが、孤独の中で自己の深層にまで分け入ってゆく彼の創作態度が生々しく残されている。時代はT.ライリーやラモンテヤングがミニマルミュージックをさかんに行った時期で、手法的には影響を感じるが、オーケストラの電子変調や階層的なヴァイヴレーション、音の空間的移動など、やはりシュトックハウゼンらの影響が強い。私は74年に遅れてこのアルバムを聴いたが、恐怖に捉われ最後まで聴き通せなかった記憶がある。ヘヴィーなバッドトリップミュージックである。(嶋田)

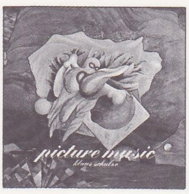


KLAUS SCHULZE
Cyborg

LP /Kosmische Musik KM2/58. 005
'73年
CD/(Fr.)Fnac Music 662011

約100分の電子音と電気変調されたオーケストラによるシンフォニーである。1st「Irrlicht」が漆黒の闇に閃く狂った光であるなら、この薄明のもとに疼くように波うち流れる音楽は、絶望的な孤独感に満ちている。シュルツェの初期の作品は妙に生命感のない、離人体験のような響きをしている。タンジェリンやアシュ・ラ・テンペルでの暴力的ともいえるドラミングも、この硬質だが壊れ易い感性に支えられていたのだろうか。シュトックハウゼンが切り開き、リゲティらが継承した響きの探求とエレクトロニックミュージックの可能性、パリ革命の挫折とカウンター・カルチャー、ベルリンという都市のもつ生々しい破壊と狂気の歴史。様々な出来事の洗礼をうけた多感な天才、シュルツェの疾風怒濤の時代の大きな結実である。

(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Picture Music

LP /Brain 1067　'73年
CD/(Fr.)Fnac Music 662013

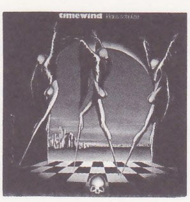
リリースが遅れたが３作目となるBrainレーベルからの第一弾である。個人的にはとても好きなアルバムで、この時期のシュルツェとしては非常に暖かいテクスチャーから生身の人間シュルツェを感じさせる。アシュラテンペル時代のようなドラミングの聴ける最後のアルバムでもある。白眉は１曲目トーテムで、アナログシンセならではの電子パーカッションが淡々と続く中から、悲哀に満ちたメロディーが紡ぎ出されてゆく。何と繊細で優しい心を持った人なのだろう。全ての音が夢から漂着した幻の様だ。一転して２曲目では推進的な演奏となり、加速の果てにまさに精神の扉を開けてトランス状態に陥ってゆくプロセスが音に体現されている。未消化な印象もあるが、随所にシュルツェの天才性が発揮されている名盤である。(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Blackdance

LP /Brain 1051　'74年
CD/Brain 8331292
/東芝EMI VJCP 23039

ヴァージンレーベル傘下のキャロラインと契約してリリースした４作目のアルバムで、ドイツのマイナーなミュージシャンであったシュルツェがワールドマーケットに問うた第一作である。深いフェイザー処理したオルガンサウンドに、12弦ギターやハンドドラムスを重ねて創られた意欲作である。３曲目ではE.W.ジーモンのバス・ヴォイスにルーピングした逆回転のリズムが入り、呪術的な死臭さえ漂う音世界を表出している。同じヴァージンレーベルのM・オールドフィールドやタンジェリンドリームに較べセールス的に成功しなかったのは、シュルツェの音楽のもつ根源的な暗さと冷たささえ感じさせる孤高性故であろう。しかしそこにはクラスター風の機械の油臭さはなく、どの音にも主体シュルツェの刻印が認められる。(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Time Wind

LP /Brain 1075　'75年
CD/Virgin CDCA2006

シュルツェの名を世界的としたヒット作でフランスではグランプリを確得している。アジテーションフリーのシンセ奏者だったミヒャエル・ヘーニヒとのデュオの名でもあったが、うまく行かずアルバムはすべてソロ。ヘーニヒはこの後P.バウマンの後任としてタンジェリンドリームに参加するが脱退し、ソロ活動となる。さて、シュルツェをして〝最も完成度の高い〟作品と云わしめた本作は、彼の心酔するヴァーグナーの死をテーマとしている。ヴェニスで急逝し、嵐の中をバイロイトに向う葬いの暗夜行路だろうか。タイトルはF.ハーバードのDuneから摂られていて、そこでは、今の現実が無数のTime windの錯綜した一点に過ぎない、と語られている。シュルツェはヴァグナーの無言の帰還を幻視したのだろうか。壁画的な作品である。(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Moondawn

LP /Brain 1088　'76年
CD/Brain 841353-2

76年１月、「Time Wind」の成功、Far East Family Bandの２枚のアルバムのプロデュース、そしてGoプロジェクトへの参加などの動きの多いさ中レコーディングされたBrainレーベルから２枚目のアルバム。このアルバムでシュルツェは〝私は新たな扉を開け進む…これはロックミュージックだ〟と宣言した。コズミック系まで何度も共演しているヴァレンシュタインのドラマー、H・グロスコフにサポートされた力強い作品。1曲目のコンセプトは以降80年の「Live」まで演奏されることとなるが、２曲目のドラマチックな展開は、真にシュルツェが自己のスタイルをブレイクスルーして行く姿である。「Time Wind」という完成度の高い作品を創り乍も、そのスタイルの焼き直しに安住せず新たな可能性を求めて行く求道者シュルツェの面目躍如。(嶋田)



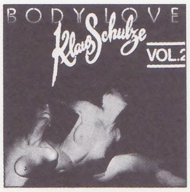
KLAUS SCHULZE
Body Love
LP /Metronome 60. 047　'76年
CD/MMG CDTB 123

シュルツェ初のサウンドトラックアルバムでラッセ・ブラウン監督のポルノ映画の音楽である。内容はヨーロッパの貴族か何かの退廃的猟奇的な生活を描いたもので、確か本邦でも〝絶頂人妻〟なるタイトルで上映されたと思う。何故かファックシーンになるとシュルツェの音楽が使われていたが、確かに「Time Wind」の頃までのシュルツェの音が、何かひとつ見えない壁の向うで鳴っていたのに較べると、より実体的でタイトになっていて、Body Loveというイメージに合うのかも、と思う。この音の存在感の変化はGOプロジェクトの影響が大だと思うが、「Moondawn」で生ドラムを起用し音のインパクトを強めたことから、同じ方向性での深化がみられる。2曲目〝Blanche〟ではシュルツェのピアノトーンのプレイが聴ける。　(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Mirage
LP /Brain 0060. 040　'77年
CD/(U.K.) Thunder Bolt COTB 033

シュルツェ8枚目のソロ・アルバム。初期から中期にかけての彼の試行錯誤の過程はこのアルバムを頂点として迎え、すべてここに流れつくと考えてよいだろう。本作以前の彼の作品群がアリアドネの糸だとすれば、さしずめこのアルバムは彼の行きついたアルカディアである。A面はリズムレスの滔々とした世界でうっすらと色彩感覚のある作品である。B面は比較的躍動感のあるリズム・パターンのシークェンスの上にクリスタルの湖を情景描写したもので視覚的な要素が多く導入されている。クリスタル・レイクの上を吹く風の音、草木のざわめき、鳥の飛び立つ様などをイントロダクションに自己の内的宇宙へと旅立つ為の導入剤的な役割と、孤高のロマン主義的アイデンティティーとが見事に共存している。　(山崎)



KLAUS SCHULZE
Body Love Ⅱ
LP /Brain 0060. 097　'77年
CD/Brain 511976-2

サントラ版の「Body Love」の翌年にリリースされた9枚目のソロアルバム。タイトルにこそ「Vol. Ⅱ」だが、こちらはサウンドトラックではなくスタジオワークによる別な作品である。とは云え基本的コンセプトには差がなく、敢えてこの作品をリリースしたのは、映像や時間に制約されずに、肉体的な躍動や性的エクスタシーそのものを音楽化するというテーマにチャレンジしたかった故であろう。完成度の点でも確かにⅡの方が上で、奇しくも同年アイランドからリリースした名盤「Mirage」と較べると多くの点で対照的なアルバムとなっている。「Mirage」がトラークルやクライストなど異端のドイツロマン主義の気質を有するなら、本アルバムはシュルツェの傾倒するニーチェのデュオニュソス的世界のエネルギーを有している。この2つは次作「X」で見事な融合を遂げる。　(嶋田)



KLAUS SCHULZE
X
LP /Brain 0080 023　'78年
CD/Metronome 833 627-2

クラウス・シュルツェの10枚目にあたるこのアルバムでは、ドラック、狂気、創造という3つの主題から、おそらく彼の心酔する6人の人物をタイトルに冠した作品が収められている（彼は最新作オウデンティティーに於いてもトラークルの詩を題材している）。70年代から常に第一線で活動してきた数少ないミュージシャンの一人であるシュルツェは、例えそれがシンセサイザーという注目を浴びた楽器のスペシャリストであったとしても、独自の語法と方法をもち、自己の音楽を絶えず発展させた音楽家としても最も才能ある人であった。彼の文学性は初期より感じられたが、この作品によって現在の活動の基本的スタイルが生まれている。シュルツェはシーン全体として語るにはあまりに巨人で、今や孤高の道を歩んでいる。(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Dune
LP /Brain 0060. 225　'79年
CD/Brain 811 842-2

ベストセラーとなったF.ハーバードの大河SF砂の惑星・Duneからヒントを得たと思われる。事実「X」でF.ハーバードへのオマージュも捧げている。シュルツェとSFは密接で、音楽とSFなる講演も行っているらしいが、ここで聴かれる音楽は描写的でなく、精神活動を高める香料メランジによって未来と過去を見渡すようになった主人公の、悲劇的ヒロイズムの抒情的音詩とも云えるもの。W.ティーボルトのつややかな、よく歌うチェロに、荒寥としたアラキスの砂漠を連想させるスケールの大きな音響が融合する。2曲目はアクターとしてアーサー・ブラウンを迎え、ヴァーンフリートの1st「Time Actor」の原型となるテイクが収められている。「Mirage」〜「X」と名盤をたて続けに発表したシュルツェの一大傑作である。　(嶋田)



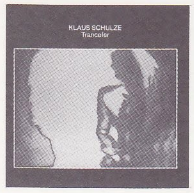
KLAUS SCHULZE
... Live ...
LP /Brain 0080. 048　'80年

シュルツェの初ライヴアルバムで79年のヨーロッパツアーのもの。「Dune」を思わせるA①、「X」のフレーズが聴かれるB①など、実際のライヴを知ることができなかったこの頃では、どんな音なのかと期待し納得した記憶がある。アーサー・ブラウンをフューチャーしたD面も仲々の出来だった。しかし、このアルバムはCD化されず、廃盤となってしまった。確かに録音状態が良好ではなく、音源が遠い感じで臨場感に乏しいが、アナログ時代のライヴを伝える価値あるアルバムと思うのだが…。特大ポスター付きで、中ジャケットにはツアー中のスナップ写真が沢山印刷されている。タンジェリンドリームのライヴ「Encore」と似たコンセプトだと思うが、意識的なのだろうか。このアルバムを境として、以降シュルツェはデジタル技術を導入する。　(嶋田)



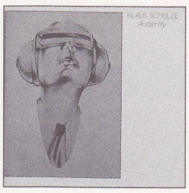
KLAUS SCHULZE
Dig It
LP /Brain 0060. 353　'80年
CD/Brain 811632-2

アナログの死を宣言した13枚目のソロ。デジタルにひっかけて〝探究〟をタイトルとしたのもシュルツェらしい。フューネラルマーチで幕をあけるこのアルバムは、それ迄の持続音と細かいシーケンスパターンの作風から変化を遂げ、よりリズムを強調した硬質のテクスチャーとなっている。サンプリングを多用したり、ボコーダー処理したナレーションを入れたりと、意欲的な取り組みが感じられるが、一方でICレーベルの設立や、ヴァーンフリートプロジェクトの活動など外的要因も多忙で、或る意味でマイク・オールドフィールドのプラチナム発表時の変化と似ていなくもない。しかし、一度確立した自己のスタイルから脱却してゆく姿こそシュルツェが真にプログレッシヴなアーティストであることを示している。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
Trancefer
LP /Brain 823 605-1　'81年
CD/Brain 823 605-2

マイク・シュリーヴとヴォルフガング・ティーポルドをゲストに加えた作品。シュルツェの作品としては短か目の曲が2曲のみ収録されている。前作同様硬質なテクスチャーだが、スタイルとしては以前に戻った印象もする。タイトルから想像されるように疾走感に満ちた、良質のトリップミュージックといえる。フェアライトにサンプリングしたチェロ以外はマニュアルでプレイされているらしく緊迫感も伝わって来る。完成度も高く、マイナーなシーンから出発して評価され、今や第一人者と位置づけられた彼の余裕と自信が感じられる。76年に参加したツトム・ヤマシタのGOプロジェクトの体験から、ひとまわりもふたまわりも音楽性を拡げたシュルツェの音世界がここにはある。良いオーディオで聴きたい作品。（嶋田）



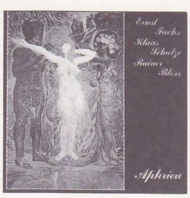
KLAUS SCHULZE
Audentity
LP /I.C. KS 80025/26　'83年
CD/Brain 81794-2

前作「Trancefer」から2年を経てリリースされた2枚組大作で、前作の2人のゲストに、この後暫くペアを組むライナー・ブロス（P.他）を加えた4人で創り上げられている。セバスチャンの自己同一性探究の物語というトータル・アルバムであり、A面の子供時代から成熟した時期までが順を追って作品となっている。最終曲は麻薬に耽溺したドイツの詩人、ゲオルグ・トラークルの同名の長詩が知られる〝夢の中のセバスチャン〟。具体音や引用されたフレーズを弾くチェロが効果的で、シュルツェの全体品の中でもドラマ性に富んだ個性的な作品。このセバスチャンがシュルツェ自身なのか否かは定かではないが、「Dune」以降のドラマチックな作風の頂点となった作品といえる。日本盤は1枚目のみとなりニューエイジ扱いされていた。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
& RAINER BLOSS
"Dziekuje Poland" Live '83
LP /I.C. KS 80. 040/41　'83年
CD/Brain 818620-2

シュルツェ2作目のライヴアルバムで、「Audentity」以降のパートナー、ライナー・ブロスとの連名での作品である。80年のライヴアルバムリリースの際に「これ限り」と明言した為かこのアルバムでは弁明めいたことを書いているが、やはり戦後の急速な経済的回復とは裏腹に、東側の、それもポーランドでベルリン出身のゲルマン的ミュージシャンが成功するということは、大事件であったのだろう。シュルツェの生年1947年といえば戦後間もない時代である。同じくタンジェリンドリームも2枚組のポーランド・ライヴをリリースしていることからもモニュメント性を伺わせる。曲は各都市でのコンサートを抜粋しているもので完成度よりも熱気が伝わって来るといった内容で、最後のテイクは観客の拍手と歓声が収められている。（嶋田）



KLAUS SCHULZE, RAINER BLOSS
& ERNST FUCHS
Aphrica
LP/Intean ID 20. 001　'84年

ウィーン幻想派をハウズナーと共に率いる現代絵画の巨匠エルンスト・フックスがカヴァーアートとヴォイスで参加した作品で3人の連名作となっている。美の神アフロディテとアフリアを合わせた造語がタイトルとなっていて、躍動的でパワフルなリズムと暴力的ともいえる呪術性をもった音響に満ちた作品で、CD化が望まれる。フックスはミュージシャンではないが野太い声で朗々と語り歌い、カリスマ的存在感があるし、シュルツェとブロスはさすがに息の合った演奏で、急激な展開をする部分などではスリリングな快感さえ感じる。デュオニソス的な狂宴のイメージで又エネルギーに満ちている。シュルツェ一派によるアシッド風〝春の祭典〟といえば多少イメージが伝わるであろうか。知られざる名作といえよう。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
Angst
LP /Inteam. ID 20. 003　'84年
CD/MMG CDTB 2.027

シュルツェは'84年にInteamレーベルを設立し、ヴァーンフリートの3枚目、「Aphrica」マニュエル・ゴッチングのソロなど名盤を次々とリリースして行く。多分にセッション的色彩の強い作品が多く、初期の作品に強く感じられる絶対的な孤独感や深い慟哭の響きに魅せられた者にとっては久々の完全なソロ作品ということで期待したアルバムであった。映画音楽らしくタイトルもシーンをイメージする分り易いもので、1曲目の〝Freeze〟など、単純な曲想ながら打ちふるえるメタリックな冷たさのある響きが、一瞬にしてシュルツェの世界に聴く者を引き入れてしまう。〝不安〟と題された映画の方は見めていないのでわからないが、サウンドトラックを再構成して創り上げたアルバムのようである。小品集といった趣き。（嶋田）



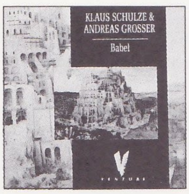
KLAUS SCHULZE
Inter ＊Face
LP /Brain 827 673-1 '85年
CD/Brain 827 673-2

84年自己のレーベルINTEAMを設立、ヴァーンフリートプロジェクトや数々のサウンドトラックなどの仕事のあった85年の作品、ソロ名義では18枚目になる。この時期の作品は仲々評価の難しいところで、70年代からのファンが失望して聴かなくなった頃だと思う。実際「Audentity」で一応の完成をみた手法から次のステップを模索する過渡的作品なのだろう。録音方法もアナログで、ジャケットのセンスからも、以前の作品にデジタル系の楽器を加えてリメイクした可能性もある。①～③の小品も同時期のサウンドトラック製作の副産物と思わせる部分が多い。何故自分のINTEAMではなくBRAINからのリリースなのか。契約問題なのかも知れないが。ウリ・ショバーなるパーカッショニストとのデュオ作品である。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
Dreams
LP /Brain 831 206-1 '86年
CD/MMG CDTB 039

前作「Inter ＊Face」とアルバム構成はほぼ同様で小品３曲と20数分の大曲が１曲収められている。イントロから大仰に始まるが、どうも散漫な印象があり、ギターとヴォーカルを加えた終曲も部分的に魅せられるところがないでもないがむしろシュルツェの苦悩が伝わって来る。東洋を意識した部分もかえって安易な印象を与えてしまうようだ。ICとINTEAMの両レーベルもうまく行かず、個人としても大変な時期だったのか。一方ではドイツを代表するミュージシャンとして本が出版されたりもして、その評価は不動のものとなっている。タイトルの〝Dreams〞はシュルツェとしては実にダイレクトで或る意味では作品も聴き易い、ロック色の強いもので、過度に期待を抱かければ良いのかも知れない。（嶋田）



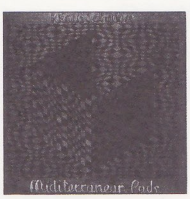
KLAUS SCHULZE & ANDREAS GROSSER
Babel
LP /Virgin Venture VE 5 '87年
CD/Virgin Venture CDVE5

ヴァージン傘下ベンチャーレーベルに移籍してのアルバム。有名なバベルの塔をジャケットにしている。サンプリングのドラムを使わず、生ピアノを加えたキーボードサウンド。あまりに淡々としていて最初は意図がわからなかったが、或る日夢うつつに大音量でかけていた時、後半から終結部に至る怖しい臨場感と崩壊のイメージに圧倒され、雄大なカタストロフに向う作品の線型の構成に改めてシュルツェの構成力とそれを維持してゆく精神力に脱帽した。何の変哲もない要素がつみ重なり増殖してゆく果に恐るべき結末が訪れるという、何やら宗教的世界観まで感じられる作品。他に類をみない作品だが、この作品をもって「Dune」から追探して来た叙事的な作風は後退してゆく。明らか新境地を拓いた大曲と云える。（嶋田）



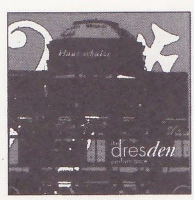
KLAUS SCHULZE
En＝Trance
LP /Brain 835 158-1 '88年
CD/MMG CDTB 2.061

21枚目のソロである本作品は最初のアナログ版の時は２枚組であったが、CDでは１枚に収められている。サウンドトラックであった「Angst」を除けば実に「Dig It」以来８年振りの完全なソロアルバムであり、内容的にも変な構えのない充実した４作品が収められている。「En＝Trfnce」とはまたシュルツェらしいタイトルで、入口の意味と夢幻状態に導入するという意味のダブルネーミングで、計らずか知ってか、以降現在に至るまでの作風の入口となったCD。使用機材はフェアライト以外は全て日本製で、シュルツェの日本好きもあるだろうが、日本のデジタル楽器が世界最高水準にあることを証明している。この時期のシュルツェは今ひとつ評価が低い気がするが、「Babei」と共に傑出したアルバムではなかろうか。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
Miditerranean Pads
LP /Brain 841 864-1 '90年
CD/MMG CDTB 081

「En＝Trance」発表後、シュルツェは6800人の観客を前にドレスデンでコンサートを行った。またドイツで人気を博したグループ〝Alphaville〞のプロデュースなども行っている。２年振りのこのCDは〝地中海の家〞をもじって〝ミディ地域の家〞と名付けられていて、シュルツェにしては明るい音質のナチュラルな響きをもつアルバムとなっている。これにはピアノやサンプリングのサックス・Elti Schulze（奥さん？）なる女声ヴォーカルの使用が影響しているが、「Babel」で見い出し「En＝Trance」で確立した方向性への、揺るぎない自信が音に表れている。音素材の種類が多く、ラテンパーカッションやエレキベースの音も使われ、いつになく饒舌な作品となっている。MMGレーベル最後のCDである。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
The Dresden Performance
CD/Virgin Venture CDVD903 '90年
/東芝 EMI VJCP 36013

シュルツェ３枚目のライヴアルバムだが、40数分に及ぶパート１、２が89年のドレスデンでのコンサート、パート３、４、５はスタジオテイクという構成である。トータル２時間半に及び聴き応えある作品。手法的には「En＝Trance」、「Miditerranean Pads」と同様だが、ライヴということもあって、より自由度の高い演奏で、むしろダイレクトにシュルツェの音楽的要素が捉えられる。多彩なパーカッションパターンの上に、画家が絵具を重ねてゆくように音がちりばめられてゆく。悠々と流れる大河を思わせるスケールを持つ。一方スタジオテイクはより曲の性格が明確で、残響処理をホールっぽくしているが、より構成されている。耽美的なパート３、４。イントロで能や雅楽を意識したと思われるパート５など、仲々の佳作揃いである。（嶋田）



KLAUS SCHULZE
Beyond Recall
CD/Virgin Venture CDVE 906　'91年

Ventureレーベルからの3枚目の本アルバムは限定版の「Silver Edition」を除くと近年と唯一のスタジオのみの作品である。サンプリングされたアコースティックギターのイントロから、「Miditerranean Pads」でもみられたナチュラル指向が一層完成されていることが伺われる。アレンジも考えられており、各作品の完成度も高く非常に良質なエレクトロニックミュージックのアルバムなのだが、シュルツェ独特の突き抜けた迫力というか、スケールの大きさに欠ける。3曲目の「Mirage」を思い出させるシーケンスパターンなど随所に以前の作品を想起される部分があり、それ故のアルバムタイトルか、などと考えてしまう。CDのブックレットにシュルツェの横顔が載っているが、40台半ばを迎えた男の真に含蓄のあるポートレイトである。　(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Royal Festival Hall vol. 1
CD/Virgin Venture CDVE 916　'92年

「The Dresden Performance」「The Dome Event」と同一コンセプトのライヴテイクとスタジオワークによって構成された作品。Vol. 1と2に分売されている。Vol. 1の方は91年9月10日のテイクと92年のスタジオテイクの曲が収録されている。音響のコラージュといった感のイントロから独特のシーケンスパターが始まる。時間の流れそのもののようなリズムの上を多彩な音色のメロディーとサウンドがちりばめられてゆく。44分半に及ぶライヴテイクは〝Yen〞と題され、各パートには忘却の淵から訪れ再び忘却の彼方へと消えてゆく迄の一連の音響ドラマにタイトルがつけられている。一方スタジオテイクではよりスタティクな音響が追求されている。全体的に抑制されたエネルギーを感じさせる内容で完成度は高い。　(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Royal Festival Hall vol. 2.
CD/Virgin Venture CDVE917　'92年

91年、ロンドンフェスティバルホールでのライヴと92年のスタジオワークから構成されたシリーズものの第二弾。同一収録のライヴを分売としたのは作品の対照性を強調したかった故であろうか。開始部から、霧にけぶる湖沼地帯の朝をイメージさせる音響コラージュで、猟銃の音や不思議な朗唱や女声スキャットから超現実的な〝古代の雰囲気〞に始まり、いつの間に我々はシュルツェの遥な彼方の見知らぬ惑星にいる、という具合である。「En＝Trance」以降のシュルツェの推選盤を問われれば、私としてはこのライヴシリーズ、特にvol.2を推す。スタジオテイクも完成度が高い（b.fとはフリードマン・バッハだろうか？）。かっての激しいパワーやロマンティズムは影をひそめ、成熟して自信に満ちたセバスチャンがここに居る。　(嶋田)



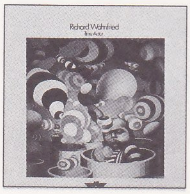
KLAUS SCHULZE
The Dome Event
CD/Virgin Venture CDVE918　'93年

91年5月11日、約1万人の観客の前で演奏された、ケルンカテドラルでのライヴ。92年作のスタジオテイクでフルアップされた74分のCD。ヴァージン移籍後6枚目のこのCDの録音は前作のロイヤルフェスティバルホールのライヴシリーズと同年のもので、内容的にもほぼ同様。イスラム風の詠唱のようなサンプリング、日本的なパーカッションなど異国的な雰囲気のなか、リズムパターンが鳴り出し、その上に様々のメロディーや音響が立ち現れて、消えてゆく。90年以降4枚のライヴCDを次々と発表して来たことは、機材の充実やレーベルのしっかりしたサポートばかりか、何よりもシュルツェの自信と意欲の表れであろう。最近のCDでは、ライヴのもつ緊張感が良い方向に作用しているといって良いだろう。　(嶋田)



KLAUS SCHULZE
Silver Edition
CD/KS1-10(1〜10)　'93年

'93年リリースの10枚組CDセット、内容は全て未発表のもので、'72年「Irrlicht」と同時期のもの、'75〜'77年のライヴなど貴重なものも多数含んでいる。8割は'92、'93年の作品で、3楽章の交響詩や、ゲオルグ・トラークルの生涯をテーマとしたオペラ〝Totentag〞の音楽、154分に及ぶ大作〝Picaso Geht Spazieren〞、Meditation 1, 2と命名された連作、フィルムミュージックが収められ、各曲のデータと共に年表やシュルツェ論の載ったブックレットが付いていてファンには流唾の内容。この巨人が今尚旺盛な創造力を保っていることを如実に示している。年表からは紹介されていないフィルムの仕事が結構多いことがわかる。ちなみに'82年の映画〝Next of Kin〞はCD未収のテイクを含み、本邦発売もされている。(邦題、悪夢の系譜、VAP67115-128)　(嶋田)



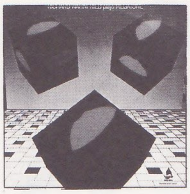
RICHARD WAHNFRIED
Time Actor
LP /I.C. 58 065　'79年
CD/IC 710, 094

「GO」でアル・ディ・メオラやS.ウインウッドと共演したのも驚いたが、アーサー・ブラウン、ヴィンセント・クレインらと組んだヴァーンフリートも予想を超えたものだった。時間軸を移動する男のSF的ロックオペラである。グループ名の由来は正確に知らないが、ヴァーグナーの名リヒァルトとヴァグナーの別荘ヴァーンフリート荘からとったのであろうか。ともあれその音楽はまぎれもないシュルツェのものであり、「Dune」や79年のヨーロッパツアーでのアーサー・ブラウンとの成果が結実した作品である。自己のレーベルICを設立し、思うままに作品を創っているシュルツェの姿がここにある。GO以来のつき合いであるM.シュリーヴと「X」のオーケストラアレンジ、「Dune」でのチェロをプレイしているW.ティーポルトのサポートも良い。　(嶋田)



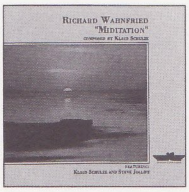
RICHARD WAHNFRIED
Tonwelle
LP /I.C. KS80.006 '81年
CD/IC 710.095

ヴァーンフリート名義の2作目。シュルツェ、M•シュリーヴ、M•ゴッチング、M・ガーヴェンス（ローリー）という悪い訳がないラインアップである。「Trancefer」と同年の作品のため、音素材の選択や曲のもつ雰囲気は同じだが、ゴッチングの抑制されたなかにも熱い情動を憶えるギターが全編にフューチャーされている。むしろシュルツェの参加した3枚目のアシュラテンペルのアルバムとさえ言えそうな音である。無駄な小細工なしの疾走感、またゆったりとした流れによどみつつ身をあずけてゆく快感。イギリスやフランスのグループが持ち得なかった独自の感覚が非常に生のままで表れているアルバムである。尚CDには3作目「Megatone」より2曲（1曲はショートヴァージョン）がボーナストラックとして収められている。（嶋田）



RICHARD WAHNFRIED
Megatone
LP/Inteam ID 20.006 '84年

ヴァーンフリートプロジェクト第3作。1作目イントロからアグレッシヴなドライヴを感じさせるが、ヴォーカルとギターをフューチャーした、最もロック然とした作品となっている。「Inter Face」でシュルツェをサポートしているウリ・ショバーがドラムスと技術サポートでクレジットされている。「Time Wind」や「X」で如実に表れているドイツ古典音楽の影響を一方の極とすれば、ヴァーンフリートの2枚目と本作は、タンジェリン、アシュラの創始に関与して来たロックミュージシャン、シュルツェのスタンスを示すものであろう。ヴァーンフリートの性格上、演劇的というかお遊び的なところもあるが、、シリアスなばかりでないシュルツェらしいユーモアも感じさせる作品である。（嶋田）



RICHARD WAHNFRIED
Miditation
LP /InteamID 20.009 '86年
CD/IC 710.096

ヴァーンフリート名義の4作目でラストアルバムとなる。MiditationとMidiactionという、シュルツェらしいネーミングがされている。メンバーはタンジェリンドリーム結成以前にエドガーフローゼと活躍し、その後「Cyclon」で1枚のみタンジェリンにも参加したスティーヴ・ジョリフェ（fl）、ティム・バレス（perc.）、カール・ヴァーンフリートとテックス・テキストンの2人のコンピューター、ジェニファー・ユーバーベルク（Sitar）である。同年のソロ「Dreams」に較べると、はるかに気楽にプレイしているように聴こえる。ジョリフェのフルートをフューチャーした破綻のない曲想だが、シュルツェがこのプロジェクトを終了したのも納得できるような気がする。これはニューエイジの範疇に入る唯一の作品だろう。（嶋田）



STOMU YAMASHITA
Go
LP/(U.K.)Island ILPS 9387 '76年

最近のツトムヤマシタは変に温和なナチュラリストになってしまった感があるが、このGoプロジェクト当時はけっこう危くて、ヒロイックな宇宙哲学に基く一連のツアーを行っていた。シュルツェの文脈からこのプロジェクトを捉えると、S.ウインウッドやA.ディメオラとの共演というミスマッチはあるが、M.シュリーヴとの出合いのような、後の多くの作品を生み出すきっかけともなっていて、いわばベルリンのマイナーな前衛音楽家が世界的音楽シーンに羽ばたく大きな転換点となっている。各曲の間ごとに現れるシュルツェのサウンドは「Moondown」から「Body Love」の頃の音の特徴をもっている。Goのヨーロッパツアーライヴでは、担当楽器を〝スペースマシン〟と紹介され、メンバー中最大の喝采をうけていたのが印象的だった。（嶋田）



RAINER BLOSS & KLAUS SCHULZE
Drive Inn (volume 1)
LP/Inteam ID 20.002 '84年

ライナー・ブロス、プロデュースの連名の作品。ドライヴの際に流れるのを想定したコンセプトアルバムなのであろうか、2～5分の短い曲が7曲収められている。続編としてライナー・ブロスのソロアルバムで、Vol.IIがリリースされている。作品の傾向は同様で、実用音楽というよりもdriveであるとかrunningであるとかいったイメージを音化したもので、トリップミュージックと捉えて良いだろう。「Audentity」以降86年までシュルツェはブロスと組んで多くの作品を残すが、どういう点で影響し合ったのであろうか。インタヴューによればピアニストとして評価していた様だが、ヴァーンフリートの1枚目で試みたロック・オペラの構想等で意気投合したのかも知れない。私にはかなり異質なミュージシャンに思えるのだが。（嶋田）



MICHAL SHRIEVE
Transfer Station Blue
LP /Fortuna FOR-LP 023 '86年
CD/Forfuna 17023-2

他にポポル・ヴやミヒャエル・ヘーニヒ、喜多郎などをリリースしているフォルチナ・レーベルから86年にリリースされたM.シュリーヴのソロ作品で、ケヴィン・シュリーヴ（g•key）とシュルツェが全面的に参加していて、音的には発表年代よりやや前、「Trancefer」、ヴァーンフリートの2枚目の頃の特徴がありその時期の作品と思われる。シュルツェの作品として捉えるのは、それ程彼が音楽の中心的存在となっている為で、〝GO〟で知り合ったM.シュリーヴとの実り多い成果のひとつと言って良いだろう。タイトル曲ではシュルツェ節といえる疾走感あるシーケンスに突然16ビートのフュージョン風ギターが重なり、ドイツロックとサンタナの奇妙なハイブリットミュージックとなる。軽いが、楽しめるアルバムである。（嶋田）

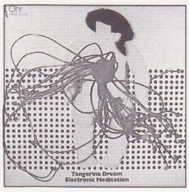
TANGERINE DREAM

●中野泰博

タンジェリン・ドリームに関して全てを書きつくすのは、このスペースでは不可能だ。何しろ1stアルバムのメンバーがエドガー・フローゼ、クラウス・シュルツェ、コンラッド・シュニッツラーなのだ。本誌13号のドイツ特集にも書かれていた通り、クラフトワークをのぞく、ドイツ電子音楽の流れは全てここから始まったと言って良い。とりあえずタンジェリンと言う名前に限って話を進めてみたい。

ドイツの初期のグループはほとんどがそのルーツとしてのロック否定からスタートしているが、彼らにおいてはヘヴィなハード・ロック・バンドとしての前身をこの1stアルバムにおいて解体している。彼らの指向は次作の「アルファ・ケンタウリ」までの間にギター、ドラムスと言ったロックの編成をも排除してしまい、1stで模索したフリーな音楽(いわゆるフリー・ミュージックでは無い)のためにキーボード・トリオと言う特異な編成として再スタートする。その点で彼らの原点でありひとつの頂点と言えるのは3rdの「ツァイト」だろう。黄金期を迎えるまでのメンバー、クリストフ・フランケとペーター・バウマンも揃い、そのインプロヴィゼーションによる感覚の異化と言うスタイルもこの時期に明確とされた。Ohr時代の作品には未だシーケンサーは導入されておらず、単調なオルガンとシンセの音のうねりを主体に構成されている。(ちなみに悪名高きM・M誌——本誌ではない——が初めてアルバム・レビューで0点をつけたのが「ツァイト」である。)このOhrのアルバムが評判になり英国ヴァージンと契約、彼らの名前を世界的に有名にした。聞き手のイマジネーションをかき立てる、メロディを持たないフレーズと、元ドラマーであるフランケの刻々と変化するシークェンサーによる「フェードラ」「ルビコン」等の名作が生まれた。当時の英国は同じヴァージン勢を別としても自国内のプログレッシヴ・バンドが渦を巻いていたはずだが彼らはその中にあっても堂々とトップ・グループの座を得る。この時期の彼らはリーダーであるフローゼのソロ・アルバムを一作ごとにはさみ、その実験的アプローチで得た物をバンドの作品にフィードバックさせていた。(ゆえにフローゼのソロには実験をささえる明確なテーマが存在している。)Liveの「リコシェ」をはさみ、'75年の「ストラトスフィアー(ロマン)」では彼らは初の用意されたフレーズを使用。次作の「サイクロン」では大失敗に終るのだが、「フォース・メジャー」を経てメロディのカットバックによるトータルなイメージと言う曲編成を完成させた。それまでのファンにとっては意外とも言えるこの音楽的変化は賛否両論を巻き起すが、続く精力的な活動には有無を言わさないものがある。メンバーとしては「ロマン」完成後ピーター・バウマンがソロのため脱退。数作のアルバムを発表後、'85年自身のレーベル、プライベート・ミュージックを設立し、エディ・ジョブソンのソロやジェリー・グッドマンのアルバムをリリース。視覚的変化を持った今日的シンセ・ミュージックをリリースしている。フローゼの「エイジス」、「サイクロン」においてはドラマーのクラウス・クリーガーが参加しており、彼はシュルツェのレーベルからもソロ・アルバムを発表している。この時期、第三のメンバーは二転、三転し彼らの試行錯誤がうかがえる。'80年以後、彼らはそのスタイルをほぼ統一してしまい、一作ごとの変化は各曲のテーマによる物になり、それまでの音楽的冒険を考えると少々淋しい限りだが、長くドイツ・ロックが関った精神世界の暗黒面は、現在ポスト・インダストリアル系のノイズ・バンドが受けついでいる。まぁヴァージン以後の彼らはおよそ重いという形容詞は当てはまらず一貫して「夢」の音楽化に勤めており、思想的背景をうんぬんするのは適当ではあるまい。かつて彼らの音楽について様々な評論が乱れ飛んだが、それぞれに音楽自体よりも評者自身の思考を重ねた物がほとんどだった。「哲学的な啓示」「精神の解放」etc…間違いではないにしろ、やはり思い入れ以上のものではあるまい。冷めた目で見れば、ドラッグとの深い係りで出発した彼らは、その中での即興演奏により、日常の空間を異化していたわけで、そのためには通常の楽器より、自分自身ですら驚ける未知の楽器・シンセサイザーを使用するのが最良だったのだろう。次々と開発されてゆく新しいシンセと共に、彼らの音楽は表面上変化を見せ、しだいに具体的なイメージの創出が可能になったと考えるのは不自然だろうか。ともあれ、彼らは現在でも第一線で活動を続けており、その音楽性は凡百のシンセ・バンドとは比較にならないクオリティを有している。





TANGERINE DREAM
Electronic Meditation
LP /Ohr OMM 56004　'70年
CD/Relativity 88561-8068-2

彼等の初作であり初期ドイツ・ロックの典型作。エドガー・フローゼ（G. Org）は現在もグループを率いクラウス・シュルツェ（Dr）は本作後アシュ・ラ・テンペルへ参加、1st制作後ソロ活動へ、KLUSTERでの作業を並行したコンラッド・シュニッツラー（チェロ）も同様に離脱、後にドイツ電子音楽を展開させる火種となり自らもソロ制作を行う。すなわちクラフトヴェルクの系譜を別としてドイツ電子音楽の流路は全てここに遡る訳である。不気味な響きのチェロ、厳つい音色のギター、連打のドラム等、音自体は既成のものだがやや乱雑な混沌とした演奏はハードロックを演っていたE・フローゼが次作「アルファ・ケンタウリ」にてシンセサイザーの可能性を発見するまでの実験的試行と言っていいだろう。（松本）



TANGERINE DREAM
Alpha Centauri
LP /Ohr OMM 56.012　'71年
CD/Relativity 88561-8069-2

続く「Zeit」「Atem」と並んでOhrレーベル、初期タンジェリン、そしてジャーマン・ロックが最も振動して野心的でもあり音楽の疑問符をなげかけた時代の傑作の一つ。クリス・フランケ、スティーヴ・シェロイダーを迎え、フローゼとのトリオ編成になり、いよいよタンジェリンが未踏の領域に入った実質的なデビュー作。その未整理でシンセサイザーやオルガン、フルート、ギター等を使っての手探りな混沌とした感触は、まさしくイメージの氾濫、可能性の宝庫と言っていいもので、今となっては斬新さ以上に初々しさすら感じさせる。フロイドがタイトル曲〝神秘〟等で方向を模索したに同じく、更にタンジェリンはドイツ気質とも言えそうな没入が激しく止まる所を知らない。電子音楽でも反復音楽でも未だない。（松本）



TANGERINE DREAM
Zeit
LP /Ohr OMM 2/56 021　'71年
CD/Relativity 88561-8070-2

タンジェリン・ドリームの3枚目で初の2枚組。近年のタンジェリンとはかなり趣きを異にする内容である。メンバーはフローゼ、フランケの他にペーター・バウマン、ゲストにステーベ・シュロイダーとフローリアン・フリッケ、他に4人のチェリストを迎えている。後々のタンジェリンに見られるシークエンスは確固とした形としては見られず、混沌とした大気の流れの内に悠久の時を感じさせる世界が展開している。A面では電子楽器を使用した初期ポポル・ヴフとタンジェリンとの異和感なく溶け合った姿が見られる。またチェロと電気楽器の調和は現代の室内楽と呼ぶに値するものだ。蛇足ながらフローゼのギターをギターと聴きわけられる人は多くはないであろう。オーケストラルな作風を持ち高完成度を輝つ。（韮沢）



TANGERINE DREAM
Atem
LP /Ohr OMM 556.031　'73年
CD/Relativity 88561-8071-2

前作以来の、いかにもゲルマン的なウルトラ・ロマン主義（悠久の彼方に隔てられた「古代」への遠い憧景）を継承しながらも、低く垂れ込めた濃密さは、ここで寂寥たる風景を希薄に満たすエーテルの広がりに取って替わられている。眼前の風景の圧倒的な壮大さ／崇高さに反比例して、視点たる主体は加速度的に矮小かつ希薄となる（先の希薄さはここから分泌される）。この風景はカスパール・ダヴィッド・フリードリヒの描く荒廃した礼拝堂や、風雪吹きすさぶ山頂に似ている。たとえTDのそれが疑似アミニズムを含む、いささか甘味の勝ったものであるにしても。ロマン主義の源泉たる混沌とした暗い過剰な情念は、次作以降、私的なファンタジーへと整理され、引き換えに彼らは世界的成功を手に入れる。（福島）



TANGERINE DREAM
Phaedra
LP /(U.K.)Virgin V2010　'74年
CD/Virgin CDV 2010
/東芝EMI VJCP 2513

代表作の一つ。このアルバムで彼等はイギリス進出し、また当時インディペンデントだったヴァージンの名前を「Tublar Bells」に続いて売ることにもなった。Ohr時代のフリー・スタイル～抽象イメージから一歩出て、フランケのシークェンサーを軸に、Ohr時代のうねりは時間軸を持って拡がっては狭まる明解なスタティックなものへと移行した。その記念碑的な意味合いで知名度の高いアルバムでもある。むしろ、こうしたサウンド傾向では次作の方が徹底しているが、「Phaedra」には無気質な電子音楽のイメージをそぐ叙情面も見え隠れして、決してメロディにこびない程度のバランスが保たれる辺りに人気があるのかもしれない。旧B①等は抽象的なのにメロディアスだ。整理されつつもイマジネイティヴ。（松本）



TANGERINE DREAM
Rubycon
LP /(U.K.)Virgin 2025　'75年
CD/Virgin CDV 2025
/東芝EMI VJCP 2514

前作と並び賞される彼らの代表作。前作でも効果的だったシーケンスはここでは柔軟な変化を見せながら、サウンドの心臓とも言うべき重要な鼓動を打ち出している。またその周囲に漂うオルガンやメロトロンの調べはシンフォニックな広がりすら持っている。それまでのロックにおける抽象的サウンドと言えば、彼ら自身もまたそうであった様にエレクトロニクス実験工場的なものか、密接なドラッグとの関わりを持ったサイケデリック・ミュージックの殆んどいずれかでしかなかったが、それを昇華させたかの様な普遍性を持った彼らの感覚的サウンドの世界的成功はやはり一大事件と呼ぶに相応しい。好みや思い入れを排して客観的評価を下せば、プログレ系アーティスト中、十指には入る重要なグループだ。（山田）



TANGERINE DREAM
Ricochet
LP /(U.K.)Virgin V 2044　'75年
CD/Virgin CDV 2044
/東芝EMI VJCP 2515

「Atem」後半から「Phaedra」で確立した反復パターンを受け継ぎ、尚かつこの時期のタンジェリン・ミュージックを総決算した感のある初のライヴ盤。つまりバウマン、フランケ、フローゼの全盛期を様々に集約して1枚に収録したもの。'75年の英仏公演が編集されている。「Rubycon」に典型的な反復パターンをベースにして、バウマンの色だろうかメロディを絡ませたり、ドラムを加えたり、またイコライズド・ヴォイスを挿入して曲調に変化をもたらせたり、と変化に富む。とりわけ旧B面中盤のヴォイス、エコーを駆使した場面でのリスナーへの心理効果は大きなものがある。冗長さを感じさせない編集だ。ここにはシンセサイザーを単なる添物としてではなく音楽の可能性へと向け、そこで確立されたスタイルがある。(松本)



TANGERINE DREAM
Stratosfear
LP /(U.K.)Virgin V 2068　'76
CD/Virgin V 2068
/東芝EMI VJCP 2516

邦題は「浪漫」。原題はStratosphere（成層圏）とfear（恐怖）の合成語とも言われている。またStratosphereには最上層、高度に抽象的あるいは実験的な領域という意味もあることを考えれば、本作に至って彼等は自ら一つの高みに到達したと認識し、そこで足のすくむ思いを感じたのではないか、そしてそれは聴く者にとっても同様と判断してこのタイトルを付けたのではないか、などと思えてしまう。ロマン派文学には鉱物志向、ピクマリオン・コンプレックスとも言われる石化の夢想が見られるが、従来の彼等の音楽も無機的な、鉱物質の美に喩えられて来た。しかし本作には血の通った、人間的な温もりが感じられる。嘗てのファンは本作以降をポップと切り捨てるが、むしろ夢の果実はここに来て熟し切った。　(高山)



TANGERINE DREAM
Sorcerer
LP /MCA 62-085　'77年
CD/MCA MCAD-10842

アメリカツアーの記録「Encore」とよりメロディアスに変貌を遂げた「Stratos far」とほぼ同時期に、タンジェリンドリームは初のサウンドトラックを手がけている。マイク・オールドフィールドが音楽を担当し一躍彼の名を高めた大ヒット作、エクソシストと同じウィリアム・フリードキン監督によるフィルム〝恐怖の報酬、Sorcerer〟がそれである。またこれはP.バウマン在籍時の唯一のサウンドトラックとなった。映画は興業的には失敗だった様だが、今でもビデオで見ることができる。コンガなど生楽器を使用したり、フローゼのギターがそれ迄になく前面に出て来たりと、当時のタンジェリンの方向性の変化が反映していて、むしろその後の小品指向の原型ともいえるアルバムである。前衛ロックグループからの訣別となったアルバム。　(嶋田)



TANGERINE DREAM
Encore
LP/(U.K.)Virgin VD-2506　'77年
CD/Virgin CDV 2506

TANGERINE DREAMがライヴでその真価を発揮するバンドであったことは『Ricochet』で既に明らかだったが、『Stratosfear』での大胆なメロディーの導入、作曲指向への転向に伴う、本質的なバンドの変質がライヴでどのように反映されたかを実証する大作（オリジナルはＬＰ２枚組）がこの『Encore』だ。アメリカ公演を収録した象徴的な作品であり、現在のTANGERINE DREAMへの始点として聴き取って何ら差し支えない。エドガー・フローゼの演奏はシンセサイザーにとどまらず、ギター、ピアノと賑やかだ。メロディーの構築性はまだ曖昧さを残しており、そこが今聴くと稚拙でもある。そんな中で、まだ音響で音楽を構築し得ていた時期の残滓を聴き取れる〝Desert Dream〟の演奏がもっとも感動的に響く。　(坂本)



TANGERINE DREAM
Cyclone
LP /(U.K.)Virgin V 2097　'78年
CD/Virgin CDV 2097

ペーター・バウマンの脱退により黄金時代のトライアングルは崩壊、彼等は'69年頃に活動を共にしていたスティーヴ・ジョリフ(Vo、fl、Key）とドラマーのクラウス・クリーガーを迎え、永い歴史でも異質の、ヴォーカル担当者を含む4人編成となる。そう、TANGERINEが言葉を持ったと論議を呼んだ本作を、試行錯誤、全人類的な統合音楽の理念を西欧のポップに切り換えたと断じるのはたやすいが、自己告白的な歌詩とアグレッシヴな音にもう一度耳を傾けてみて欲しい。ジャケットを描いたのはエドガー・フローゼ自身、奥方のモニカ・フローゼ撮影による内ジャケットには例によって愛息ジェロームがコラージュされているが、まさかこの少年が後にメンバーになろうとはこの時点で誰が想像したろうか。　(高山)



TANGERINE DREAM
Force Majeure
LP /(U.K.)Virgin V2111　'79年
CD/Virgin CDV 2111

結局前作でヴォーカル、フルート、キーボードを担当したスティーヴ・ジョリフは一枚で脱退。彼等は再び3人編成に戻るが、他の時期との相違として一人が専任ドラマーというのを見逃してはならない。ドラムスが入ることによって音は構築の度合いを強め、アコースティック及びエレクトリック・ギターを大きくフィーチャーしつつ、彼等はここでより明確な物語性を獲得する。それはこれまでの超時間的な空間の創出から、より時間的な音楽の流れに心を傾けるようになった結果と想像することも出来るだろう。彼等はとうにエクスペリメンタルなバンドでも、ドラッグや瞑想の為の音楽を提供する森の隠者でもない。世界的視野での、イマジネイティヴで純粋に鑑賞可能な音楽の創造。その意志が本作から伝わる。　(高山)



TANGERINE DREAM
Tangram

LP/(U.K.)Virgin 2147　'80年
CD/Virgin CDV 2147

空中分解寸前にまで至ったタンジェリン・ドリーム起死回生のアルバムは、85年まで在籍した第2期黄金時代の立役者シュメーリンクを迎えた3人によるもの。「Stratospher」以降追求して来たメロディアスなポップ性と最新のエレクトロニクスを駆使した前衛的な音響の探求が融合した完成度の高い内容で、パート1、2の計40分を弛緩させることなく構成している。フローゼのギターシンセも前作より全体のサウンドに溶け込んでいる。タンジェリン＝ドイツアヴァンギャルドという思い込みの強い人はともかく「Rubycon」に並ぶ名盤では。シュメーリンクのセンスだろうか、軍楽隊風のメロディーなどが出て来ておもしろい。タングラムというパズルが昔あったが、多彩な変化を示すと共にタンジェリンドリームの肖像という意味にもなる。（嶋田）



TANGERINE DREAM
'70～'80

LP/Virgin V BOX 2　'80年

'70年代の彼らを総括する4枚組ベスト・アルバム。『Alpha Centauri』～『Tangram』の彼らの演奏が満遍なく収められているほか、エドガー・フローゼ、クリス・フランケ、ペーター・バウマンのそれぞれの未発表ソロ演奏がＬＰ片面分収録されている。通して聴けば、確かに彼らの音楽は首尾一貫した流れで捉え得るが、しかし、彼らが音楽史上に最も大きな足跡を残したのは、やはり『Ricochet』までの黄金期と言わざるを得ない。それほど彼らは偉大な実験を行ったのだ。TANGERINE DREAMは前人未到の実験の中で、〝Atem〟終盤のたったひとつの音に収斂される特異点を経て、地上へと彷徨い出、徐々に通俗性を身に付けて行った。付録の写真集はアイドルだった彼らの貴重な記録だ（ダリの姿も見える）。（坂本）



TANGERINE DREAM
Pergamon

LP/Ariola 202 169-320　'80年
CD/Carol CD 1

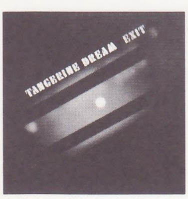
'80年、シュメーリンクが参加しての初のライヴアルバムで、タンジェリン・ドリームは西側のロックバンドの中では初めて東ドイツ内でコンサートを行ったバンドとして名を残すことになるが、その記念すべき記録である。ベルリンという地理的にも歴史的にも特異な都市のバンドであるタンジェリン・ドリームにとって、否、恐らくは戦後体験と同時に様々のパラダイムシフトを経験した全てのドイツの若者達にとって、これはモニュメンタルな事件であったのだろう。シンセサイザーという未知の楽器を用いた未知の音楽、その前進性と未来指向は、真に過去を忘れたい、祖国を二分されたドイツの象徴となり得たことは想像に固くない。音は「Encore Live」と「Tangram」2枚双方の要素を併せ持っていて、緊張感も伝わって来るもの。（嶋田）



TANGERINE DREAM
Thief

LP/Ariola 203 472-320　'81年
CD/Virgin CDV 2198

1978年、ペーター・バウマンを失ったエドガー・フローゼは、旧友スティーヴ・ジョリフェ、ドラマーのクラウス・クリューガーらを迎えタンジェリン・ドリーム推持を目指すが、今ひとつ評価されず、フローゼ自身も満足できないものであった様だ。結局、解散状態であったタンジェリンを復活させたのは才人ヨハネス・シュメーリンクの加入であった訳だが、フローゼはそこで、長年の実験的で難解なグループイメージからの脱皮を成し遂げる。そしてその後のタンジェリン・ドリームの活動は、スタジオワークによる作品、ライヴアルバム、そしてサウンドトラックという3本柱となり、この3者がほぼ同様のウエイトをもつこととなる。フランケ、フローゼ、シュメーリンク・トリオでの初サントラは、〝泥棒〟と題されたアクションもの。（嶋田）



TANGERINE DREAM
Exit

LP/Ariola 203 998-320　'81年
CD/Virgin CDV 2212

〝脱出口〟と題されたこの作品でタンジェリン・ドリームは方向性を変えたのではないかと思える。先ずそれ迄の大作主義から小品指向への転換、そして暗い重いというイメージから脱却したポップ性の獲得の推進である。タンジェリンのライヴはメドレー的な曲構成となるので大曲に見えるが実際は連続した小品のシリーズであって、少なくともスタジオ版では1枚1曲のようなパターンはこの作品以降姿を消す。同時に、東ドイツでの成功や世界的市場での評価から、また一方でのフローゼの77年以降数年の模索の時期の成果から、よりコスモポリタンな視点での自覚や自負が生まれたように思われる。アイディアをコンパクトな小品にまとめあげる手法は恐らく「Sorcerer」や「Thief」などのフィルムの仕事からの影響もあるだろう。（嶋田）



TANGERINE DREAM
White Eagle

LP/Virgin V-2226　'82年
CD/Virgin CDV 2226

ペーター・バウマンが愛想を尽かしてバンドを抜けてからのTANGERINE DREAMの生彩のなさはほとんど致命的だったが、にもかかわらず引きも切らないサウンド・トラックの依頼等で彼らは着実に営業実績を伸ばし、ここに来て漸く自分たちの語法をあるレベルまで引き上げることに成功した。エドガー・フローゼ、クリス・フランケ、ヨハネス・シュメーリンクの3人は、続く『Logos』で更に演奏に磨きをかけ、'83年6月、遂に待望の（遅過ぎる）来日を果たした。その演奏の完成度の高さは圧倒的だったが、しかし残念ながらこのTANGERINE DREAMはあのTANGERINE DREAMではなかった。彼らは『Logos』全曲をメインに、アンコールには本アルバム収録の〝Midnight In Tura〟を完璧に演奏したのだった。（坂本）



TANGERINE DREAM
Logos Live

LP /Virgin V2257 '83年
CD/Virgin CDV 2257

1982年11月、ロンドンはドミニオン・シアターでのライヴ。テクノ・ビートを導入した前2作（「Exit」「White Eagle」）に比べ、朗々とした響きを取り戻している。しかしこのふっ切れたような清々しさはどうだろう。重厚なタイトルとは裏腹に、不思議の国の旅にも似た、良質のファンタジイ小説を読むような起伏に富んだ展開。聴き手は目を閉じず、灯りを消さなくてもその中に入って行ける。彼等に今日凡庸なイメージを与えた多作サントラ病にも未だ陥っていない。シュメーリンクも文字通り三位一体に貢献している。'83年の6月に彼等は本作と共に初来日。第一部はインプロヴィゼイションによる新曲、第三部は〝Logos〞そしてアンコールは本作同様〝Dominion〞という構成で聴かせてくれた。 （高山）



TANGERINE DREAM
Hyperborea

LP /Virgin 205801 '83年
CD/Virgin CDV2292

'80年以降タンジェリン・ドリームは1年に1作の割合でスタジオ版のアルバムをリリースする。このアルバムはタイトルこそ高緯度地域と題されジャケットにも流氷の写真が使われているが、スチールドラムっぽい音やシタール系の音などが目立ち、他のタイトルなどからも当時のエスニックの流行の影響かと思える。牧歌的でエキゾチックな、明るいタンジェリンで、今ならニューエイジ・ミュージックとしてもイージー・リスニングとしても通用するような内容である。さすがにドラム・マシーンの音とかに機材的な古さを感じさせるが、それは10年前の音であり、Ohr時代のアルバムは20年前のものだと思うと、このグループが一時も滞ることなく変化を続けていることを痛感する。20年間第一線で活動するというのはやはり唯事ではない。 （嶋田）



TANGERINE DREAM
Poland

LP /(U.K.)Jive Electro HIP 22 '84年
CD/ワーナー・ミュージック 32 XB 221

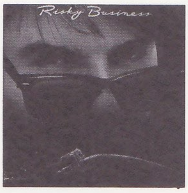
ヨハネス・シュメーリンクを3人目のメンバーとしたこの時期の彼らはなかなか充実した活動ぶりを展開し、再度ライヴ・アルバムのリリースに至る。前年にクラウス・シュルツェが発表したポーランドでのライヴ・アルバムの後を追うように、これもワルシャワでのライヴを収録した2枚組アルバムとなった。内容は、彼らの日本公演で第1部に演奏された未発表の組曲で始まる。ライヴとは言え、このアルバムからはシングル・カットがリリースされたり、一部が後に再利用されたりという事実からも裏付けられるように、かなりポップでキャッチーなフレーズが連発される。演奏は自信に満ちて力強く、聴き応えがあるのに、どこか見当違いの方向に進み出しつつある印象を受ける。 （坂本）



TANGERINE DREAM
Firestarter

LP /(U.K.)MCA MCF 3233 '84年
CD/Varese Sarabande VSD 5251

〝炎の少女チャリー〞として日本でもヒットした超能力をテーマとしたSF映画のサウンドトラック。フローゼ、フランケ、シュメーリンクの3人による作品。映画の方のストーリーも仲々にうまく出来ていて、音楽は気がつくと効果的かつ控え目に鳴っているという感じ。音楽作品としてならやはりアルバムで聴き通した方が良いが、映画音楽とはまさにこういった特質を持ったものが求められるのであろうし、タンジェリン・ドリームの音楽がこれ程映画に使われるというのも映像を妨げることなく効果的に作用する故と思われる。同じドイツのポポル・ヴがヘルツォークの作品のみで使われるのとは全く逆に、タンジェリンの音はこの無個性なところに汎用性があると考えられる。そういえばNHKのドキュメントなどでもよく使用される。 （嶋田）



TANGERINE DREAM＋V.A.
Risky Business

LP /(U.K.)Virgin V 2302 '84年
CD/(U.K.)Virgin CDV 2302

日本でも公開された、Tom CruiseとRebecca De Nornay出演の映画のサウンド・トラック盤。両親が家を空けたのを幸いに息子が羽目をはずして「危ないビジネス」に励んでいる時、予定より早く両親が帰ってきて……、という展開の映画。TANGERINE DREAMは5曲を提供しているが、テーマ曲を除いて「White Eagle」や「Force Majeure」の中の曲をアレンジし直した別テイクという感じで、これといった特徴の無い演奏内容である。彼らの他にBob Seger、Muddy Waters、Jeff Beck、Prince、JOURNEY、Phil Collinsといったアーティストが参加しており、そいった面で重要なアルバムと言えるかも知れない。なお「Lockere Geschafte」はドイツ語の公開タイトルで、収録内容は全く同じである。 （Helmut）



TANGERINE DREAM
Wavelength

LP /(U.S.)Varese Saravande STV 81207 '84年
CD/Varese Saravande VCD 47223

マイク・グレイ監督のSFフィルムの為の83年のサウンドトラック。音の質や曲想はやはり同年の「Hyperborea」、前作の「White Eagle」に近い。ほとんど同じメロディーやアイディアも出て来て、ひとりの作曲家に例えるならオペラ＝サントラでスタジオアルバム＝シンフォニーに相当するような関係にあるのかとも思える。全16曲で実に様々なアイディアの曲が収められていて、7曲目〝Alien Goodbyes〞などアコースティックギターにリードギターという全くのフローゼのソロ。やや散漫な印象をうけるが、アルバムの性質上仕方がないだろう。タンジェリン・ドリームはこの頃よりとにかく多くのフイルムミュージックを手がけるようになるが、まだぎごちないところも見受けられる。比較的素材のままアルバムにしてしまった感がある。 （嶋田）



TANGERINE DREAM
Flashpoint

LP / (U.K.) Heavy Metal HMI HP 29 '84年
CD/Heavy Metal HMI XD 29

ウィリアム・タネン監督のアクション映画の為の'84年リリースのサウンドトラック。エレクトリック・ドラムや初期デジタルシンセ系の音がなつかしく、ジャケットから察するに映画の方もまちがいなくB級といった感じで今更是非一聴を、と推めるつもりはないが、タンジェリン・ドリームというグループが、とにもかくにも新たなテクノロジーの進歩に併って次々と開発される音素材に対して開かれていて、自分達の音楽的な語法の中に導入して行くグループであることを如実に示していると云えよう。その点ではややうがった見方ではあるが、サウンドトラックの仕事というのは確実にビジネスとなるものであるうえに、様々の音響的な試行錯誤の可能な、いわば実験工房であると考えることができると思う。（嶋田）



TANGERINE DREAM
Heartbreakers

LP /Virgin 207 212-620 '85年
CD/Virgin 610467-225

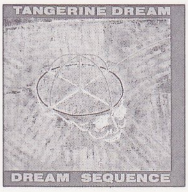
「The Park Is Mine」と同年のリリースのこれもサウンドトラック・アルバムで、こちらは都会的な生活の中での、男女のかかわりをテーマとした映画のようである。Virginレーベルからのラストか最後の頃のアルバムであるり「Phaedra」以降在籍し、云わばタンジェリン・ドリームを世界的存在にしたレーベルと訣別するのがこの85年で、同時にP.バウマン脱退後加入したJ.シュメーリンクがソロ活動の為にグループを去る年ともなった。しかし音の上では予想される様な動揺はみられず、真にその点こそが並のプロフェッショナルではないタンジェリンらしいところで、冒険をしない一方、安定した内容で及第点的なアルバムを制作している。全12曲、シーンごとの小品が並べられていて、随所にタンジェリンらしい工夫が見られる。（嶋田）



TANGERINE DREAM
Le Parc

LP /Jive 626 135 '85年
CD/Jive Electro 8.26135

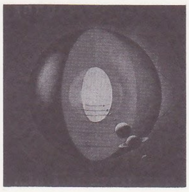
Virginを離れ、シュメーリンクの参加した最後のスタジオ作品。世界各地の公園をタイトルに冠した個性的小品が９曲収められ、「Exit」以降の小品指向の総決算の感がする。バルセロナのグエル公園・ロンドンのハイド・パーク、日本の龍安寺石庭など、選び方はフローゼのセンスらしい。シュメーリンク脱退の真意は不明だが、グループの新陳代謝が必要な時期だったのだろう。アルバムは、独特の作風の写真家による公園をテーマとした絵葉書をみる思いがし、ひと筆書きの名人芸を感じもする。暗に歴史的経緯のある共産圏ポーランドでのコンサートの成功を時を同じくして、タンジェリンはシンセ３人のスタイルとなって２度目のメンバーチェンジをすることになるが、その清算ともいえる水準の高い作品である。（嶋田）



TANGERINE DREAM
Dream Sequence

LP /Virgin 302 686-435 '85年
CD/Virgin CDTD 1

'85年リリースのVirgin時代のタンジュリン・ドリームのベスト２枚組CDである。シーケンサーリズムの反復とスペイシーな電子音を多用した独自のシンセサイザーミュージックで、最も成功したドイツのロックグループとなった彼らの10年に及ぶ足跡が辿れる。その革新性と影響力は計り知れず、今やひとつのジャンルとなったシンセミュージック、もしくはコンピューターミュージックの創始者の探求の歴史である。特に「Stratostear」から「Tangram」に至る作品も含めた初期〜中期タンジェリン・ドリームの入門には最適と云える。また１曲目及びラストの19曲目は未収録テイクであり共に'83年の作品。「Logos Live」と「Tongram」からの収録の割合が多く、彼らのその作品に対する自信の程が伺える。（嶋田）



TANGERINE DREAM
... In the Beginning

LP/ (U.S.) Relativity EMC 8066 '86年

クレジット表記では1985年になっているが、実際は1986年１月にリリースされたようである。彼らがOhrレーベルに残した４作と、契約の関係でリリースできなかった1973年制作のスタジオ・アルバム「Green Desert」を合わせた６枚組セットである。(それぞれの作品の詳細は、個別の欄を参照。)バイオグラフィーとディスコグラフィーを掲載したブックレットが付されている。ボックスのカバー・デザインはMonique Froeseによるものである。米盤と同時に英国のJive Electroからも同様のセット(TANG1)が発売された。最初の４作は、現在までにいろいろな会社やレーベルからLPやCDで何度か再発されているが、オリジナル盤の持つ荒々しく広がりのある音空間が忠実に再現されていないのが残念である。（Helmut）



TANGERINE DREAM
Legend

LP/ (U.S.) MCA 6165 '86年

Tom CruiseとMia Saraが出演した映画のサントラ盤。衛星放送されたこともあるので、話の筋は割愛させて頂く。本作のサウンド・トラックのスコアは、最初、Jerry Goldsmithによって書かれた。しかし、もっとモダンな曲の方が良いであろうという映画会社の判断により、TANGERINE DREAMの他にJon AndersonとBryan Ferryが採用されて曲を提供することとなった。このため北米では新しいサントラで、欧州などではGoldsmithのペンによるもので公開された。両面の１曲目を除き、彼らの演奏が９曲収められている。会社の意向をよく酌んでいるのか、ファンタスティックで不思議な雰囲気の、いかにもそれらしい作品に仕上がっている。カバー写真は印象的でインパクトが強く、一度見たら忘れられないものである。（Helmut）



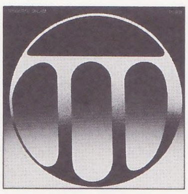
TANGERINE DREAM
Green Desert
LP /(U.S.)Relativity 88561-8072 '86年
CD/Jive Electro C TANG 1

これは'73年にベルリンのスカイライン・スタジオで収録された貴重な音源を'84年にリミックスしたアルバムだ。ちょうど『Atem』から『Phaedra』に至る短いながらも重要な過渡期に行われたレコーディング・セッションであり、その内容は非常に興味深い。何故かP・バウマン不参加、E・フローゼとC・フランケのふたりだけの演奏であり、バンドとしての正規の演奏とは言いかねるかも知れない。音響が簡素な分、演奏が生々しく、特にフローゼのギター・プレイ、フランケのドラムス・プレイが意外なほど素直だ。なるほど、何も成功に目が眩んで妙な大衆路線に乗り換えたのではなく、最初からこの二人はこういう感性を持っていたのだという証明になっている。バウマンの存在は大きかった。　(坂本)



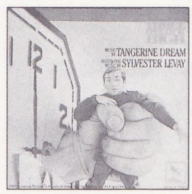
TANGERINE DREAM
Underwater Sunlight
LP /(U.K.)Jive Electro HIP 40 '86年
CD/ワーナー・ミュージック32XB-223

海は我々が暮らす大地や仰ぎ見る天空とはまた別の「宇宙」である。生命を生む一方でそれを呑み込む海。海はまた大宇宙である空と、小宇宙である人間の内側（内宇宙）と目に見えない繋がりを保っているようだ。故に海やそこに生きるもの達をテーマにした芸術作品が多い。本作もまたそうしたアルバムだが、例えばポール・ウインターの「鯨の詩」やNOVALISの「Flossenengel」と比べ、自然保護を謳ったと言うよりも視覚的な情景描写を追求したような色合いが強い。明確なテーマの設定、鯨の鳴き声を入れる等の具象性。こうした変化はヨハネス・シュメーリンクに代わって本作より加入のパウル・ハンスリンガーにも依るのではないか。これを機に彼等は続く「Tyger」で更に大きな転換を見せるのである。　(高山)



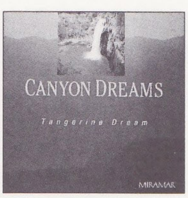
TANGERINE DREAM
Tyger
LP /(U.K.)Jive Electro HIP 47 '87年
CD/ワーナー・ミュージック32XB-224

本格的にヴォーカルを取り入れたアルバムとしては「Cyclone」に続く2作めとする。幻視の詩人画家ウィリアム・ブレイク(1751-1827)の詩に曲をつけるという試みは、ポピュラー・ミュージックでもさして珍しいことではないが、シンセサイザーのインプロヴィゼイションによる統合音楽という従来の彼等の在り方を考えるなら、詩が先行し構築して行く本作のアプローチはまさに大転換と言えるだろう。ギターソロまで取り入れた楽曲の完成度はさすがに高く、音も良いが、翌年発表のライヴを最後にクリス・フランケは脱退。2曲のインストの内〝21st Century Common Man〟はCRIMSONのパロディか。しかしブレイクすらろくに知らない国内盤ライナーの書き手の堂々とした無知ぶりには恐れ入った。　(高山)



TANGERINE DREAM
Three O'clock High
LP /(U.S.)Varsese Saravande STV 81339 '87年
CD/Varese Sarabande VCD 47307

'87年は、W.ブレイクの名詩、タイガーを歌詞としたアルバム、「Tyger」のリリース以外に多くのサウンドトラックがリリースされている。'86年にヨハネス・シュメーリンクの後任としてポール・ハスリンガーを加えてよりシンフォニックにロック色を強く打ち出した傑作、「Underwater Sunlight」を世に問うてから、堰を切ったように作品が創られたと思われる。このサウンドトラックにはタンジェリンの他にも複数のミュージシャンの作品が収録されていて単純に彼らの作品とは云えないが、個々の曲は安易に流れることなくそれなりの工夫がほどこされている。映画はややコミカルタッチの青春ものか何かだろうか。ストーリーとは関係なく聴いていても飽きないし、変化が多い為か、サンプラー的にも楽しめる内容。　(嶋田)



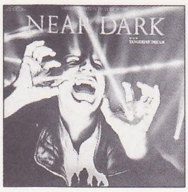
TANGERINE DREAM
Canyon Dreams
LD /(U.S.)Miramar ID 5171 '87年
CD/Miramar MPCD2801

'87年発表のヴィジュアル・オーディオ作品。CD版ではヴィデオ版に加えて、ジェローム・フローゼのペンによる〝Colorado Dawn〟がボーナストラックとして追加収録されている。これはサウンドトラックではなく、正規のアルバムと考えてよいが、作品の性質上ニューエイジミュージック的な刺激の少ない曲調のものが多く、音の方はほとんどシンセサイザーのみにもかかわらず、ナチュラル指向のコンセプトとなっている。セミ・クラシックを安易に使用した環境もののヴィデオに較べれば、遥かに音楽と映像のコンビネーションが考慮されていて、如何にも、という出来となっている。このスタイルの作品がもっと早く、多数制作されて良い様に思うのだが。彼らの音は流石で、熟練した職人の技を思わせるものである。　(嶋田)



TAGERINE DREAM
Livemiles
LP /Jive Electro 6.26825 '88年
CD/Jive CHIP 62

'86年アメリカ・ニューメキシコでのライヴをパート1、'87年西ベルリンでのライヴをパート2とした。フローゼ、フランケ、ハスリンガーの3人での初の正規ライヴアルバム。フローゼの妻モンクのアートワークもスマートである。上記メンバー2作のスタジオアルバムと3作のサウンドトラックをリリースした後の'88年の発表だが、全く破綻のない完璧に近いライヴが当初から成されていた証左となっている。しかし、このライヴアルバムのリリースの裏には長年のパートナーであり、或る意味では核ともなっていたクリストファー・フランケの脱退があったのではないか。バウマンの脱退で一度揺らいだ、云ってみればフローゼのグループ理念が再度危機に瀕することになる。演奏はとても3人のものとは思えない出来。　(嶋田)



TANGERINE DREAM
Near Dark
LP /(U.S.)Varese Saravande STV 81345 '88年
CD/Silva FILMCD 026

'87年リリース。これはSF.ホラー的内容の映画らしいが、タンジェリらしさが最も フィットした傾向なのか同年「Shy People」とは別の意味で安定度が高い。つまり「Sorcerer」以降の映画音楽のヴェテラン作曲家集団、タンジェリン・ドリームの本領発揮といったアルバムで、緊迫感のある鬼気せまるシーン、夢幻的なアトモスフェア、ドライヴ感あるアクションのイメージなど、真に職人芸的に作品をつなげてゆく。フローゼのディストーション・ギターは彼がラウドなブルース・ギタリストから出発したことを思い起こさせる。1曲目はちょっとクラフトヴェルクっぽいシーケンスだったりもする。画像といっしょだと尚良いのだろうが、シーンを思い描きながら聴いてゆくのも、この手のアルバムの楽しみ方だと思う。 (嶋田)



TANGERINE DREAM
Shy People
LP /(U.S.)Varese Saravande STV 81357 '88年
CD/Varese Saravande 47357

'87年のサントラで、最も正規のアルバムである「Tyger」に近い音をもっているのがこの「Shy People」で、単に音楽を担当しているというよりもかなり前向きに取り組んでいることを伺わせる充実した内容となっている。アンドレイ・コンチェロフスキー監督のこの映画はややサスペンス色の強いシリアスな内容のものらしい。ヴォーカル、ナンバーが3曲含まれていて、歌詞をフローゼが2曲、フランケとハスリンガーが1曲共作している。特に1曲目のShy PeopleはTigerとよく似たセンスの曲となっていて、聴き較べるとこちらのアルバムの方がサントラの分自由度の高い演奏で、のびのびと制作しているように感じる。構成もよくまとまっていて、「Tyger」を気に入った人はまず気に入るアルバムだと思う。 (嶋田)



TANGERINE DREAM
Optical Race
LP /(U.S.)Private Music 2042-1-P '88年
CD/Private Music 2042-2-P

「Alpha Cenauri」以降の朋友クリストファー・フランケがグループを去り、レーベルもP.バウマンが主催する新興レーベル、プライヴェート・ミュージックに移籍しての最初の作品。タンジェリン・ドリームをE.フローゼとC.フランケ＋1と捉えていたファンには一体どんな変化が引き起こされるかと思えただろう。結論から云えば、タンジェリン・ドリームのドイツ的重さというか、骨太なシンフォニズムをかもし出していたのがフランケであって、グループの音は更に明るくスマートとなった印象である。このアルバムではほぼ均等に2人の共作のウェイトが分かれている。メロディーは親しみ易さを増して、各曲ともアレンジもよくできている。7曲目の〝Sun Gate〟のみWadephul/フローゼ/ハスリンガーの共作と記されている。 (嶋田)



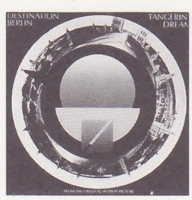
TANGERINE DREAM
Miracle Mile
LP /(U.S.)Private Music 2047-1 '89年
CD/(U.S.)Private Music 2047-2-P

一人の青年がある女性と運命的な出逢いをして間もなく、あと1時間で核攻撃が始まるとの情報を得る。息詰まる状況の下、二人はどのように脱出するか……、という内容の映画のサウンド・トラック盤。こういう緊迫感に溢れるテーマを効果的に盛り上げるには、彼らのサウンドがとても適していると思われる。アップ・ビートのリズミカルな曲からゆったりとしたバラード風の曲まで、実に多彩な内容である。ひと頃に比べると明るく軽い作りの曲が多くなったような気がするが、透明感と清々しさが増したと言えなくもない。砂時計が静かに時を刻んでゆくようなイメージを想起させる、シーケンサの絶え間ないリズムは、我々に「時間」というものを認識させてくれる重要な鍵となっているのではなかろうか。 (Helmut)



TANGERINE DREAM
Lily On The Beach
LP /Private Music 210 103 '89年
CD/Private Music 260 103

フローゼ＆ハスリンガー・デュオとなったタンジェリンの2枚目のアルバム。13曲入り。フローゼ2世のジュロームが〝Radio City〟でリードギターを弾き、H.ヴァルトナーが〝Long Island Sunset〟でソプラノサックスとフルートでゲスト参加している。フローゼもリードギターを担当、ハスリンガーはリズムギターとステックを担当するなど、今迄以上にロック色が強い。コンピューターがハード、ソフトとも進歩するなかでも、フローゼは何とかして音響にダイナミックな生命感とヒューマンなぬくもりをもたせようと苦心していて、そのかいがあって所謂コンピュータ・ミュージックの機械くささ、単調さに陥っていない作品となっている。この後の4人編成となるタンジェリンの伏線となるアルバムといえる。 (嶋田)



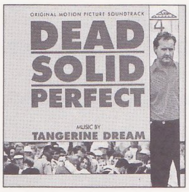
TANGERINE DREAM
Destination Berlin
CD/BMG 260440 '89年

フランケがグループを離脱した後、タンジェリン・ドリームは3作のフィルム・ミュージックを制作する。「到着地ベルリン」とはどういうフィルムなのだろう、ベルリンの壁の崩壊は象徴的な出来事であったことを想い出させる。アルバムは〝アレキサンダー広場〟を両端に配したトータルな構成で、同じテーマのヴァリエーションを聴いているような印象さえ受ける。印象的なメロディーも多く悪い出来ではない。しかし、ベルリンという都市が変化したように、ベルリンのドイツロックグループ、タンジェリン・ドリームも変化した。アヴァンギャルド、プログレッシヴというイメージを彼らに押しつけるのはそれこそアナクロニズムだろう。D.ボウイやR.リードのベルリンはここにはなく、今のベルリン市民の日常の姿がある。 (嶋田)



TANGERINE DREAM
Melrose
CD/Private Music 2078-2-P　'90年
/BMG ビクター BVCP 103

'90年代に入って、タンジェリンは再び3人編成となる。そしてC.フランケの後に加入したのは何とE.フローゼの息子、ジェローム・フローゼである。フローゼのソロや'70年代のタンジェリンのアートワークの中に何度か素材として使われていた彼である。担当もギター及びシンセ(key)と父親と同じ、真にフローゼJr.である。そしてJ.シュメーリンクの後任として加入したP.ハスリンガーの参加した最後のアルバムとなる。タイトル曲には前作「Lilly On The Beach」でもゲストで加わっていたH.ヴァルトナーがSaxを演奏している。こうしてタンジェリンは2世代バンドという稀なかたちとなった(何となくO.コールマングループを思い出す。ロックも年をとったということか)。2台の自転車が寄り添い1台が倒れている意味ありげな写真が載っている。　(嶋田)



TANGERINE DREAM
Dead Solid Perfect
CD/Silva Screen FILMCD 079　'90年

'89年、詳しいクレジットがないが、フローゼ＆ハスリンガーの2人によるサウンドトラックで、これもTV映画の音楽だろうか、プロゴルファーを主人公としたスポーツもののようだ。この時期の作品の中でも特に打ち込みのコンピューターミュージックという色彩が強く、やや手抜きをしたかな、と思わせるところが多い。タンジェリン・ドリームの特質はテクノロジーの取り入れの間口の広さが挙げられる。逆にその時の機材の性能やコンピューターソフトなどの機能に規定される訳で、それはスタイルや音楽性の根幹にまで影響する。その点でクラフトヴェルクなどの方が遥かにテクノロジーに対してシンカルで距離をとっているように思う。故にタンジェリン・ドリームに於いては、テクノロジーはファッションにはなり得なかった。(嶋田)



TANGERINE DREAM
The Park Is Mine
CD/Silva Screen FILMCD080　'91年

81年のフィルムミュージックThiefを皮切りに・ヨハネス・シュメーリンクを加えた新生タンジェリン・ドリームは、正規のアルバムワークと並行して、活動のかなりのウェイトをサウンドトラックに費することとなる。内容的には「La Park」の時期、シュメーリンクの参加した最後期の頃なのだが、音はかなりすっきりしたものでその後のメンバーチェンジ後のサウンドトラックと較べてもそれ程の異和感はない。これもTV映画の為のものなのかも知れない。フィルムミュージックはタンジェリンにとって、新たな音素材や機材（ソフトも含めて）で、どんなアイデアが実現可能なのかをみる最良の試金石であったのではないかと思われる。破綻のない音楽と云えるが、このアルバムは映像がないとやや辛い。　(嶋田)



TANGERINE DREAM
L'Affaire Wallraff
(The Man Inside)
CD/EMI 7956172　'91年

Peter Coyote、Jurgen Prochnow、Nathalie Bayeらが出演した映画のサウンド・トラック盤。映画の内容については詳細不明であるが、他の作品に比べてテンポの遅い落ち着いた雰囲気の曲が多いことから、映画のテーマや内容も割とシリアスなものではないかと思われる。全11曲で、45'20''の演奏が収められている。本作は、Edgar FroeseとPaul Haslingerの二人だけで作曲・演奏されている。すっきりとした音色が特徴的で、シンプルな作品に仕上がっている。ピアノの音色も生に近いアコースティックな味を大切にしており、全体の音の重ね方がいつもより少ないので、そういう印象を与えるのであろう。もちろん曲によっては、いつもの軽快な演奏を聞くことができる。　(Helmut)



TANGERINE DREAM
Deadly Care
CD/Silva Screen FILMCD121　'92年

'87年のTV映画の為のサウンドトラック。P.ハスリンガーは参加して居らず、フローゼとフランケの2人で作られたアルバム。CDでは実際のフィルムに使われたものではなく、ロングヴァージョンが収録されている。フィルムの内容は薬物依存から治癒して行くという、現代的テーマの社会派のものらしい。この年はサントラだけでも4枚のアルバムがリリースされていて非常に多作な年であった。このアルバムが何故2人で作られたのか、またこの後なぜフランケがグループを去ることになったかはよく解らないが、コンピューターやミディ機材の発展で3人編成を保つ必然性がなくなって来たことは確かであろう。クレジットを見ない限り何人で作ったのかは気付かないかも知れない。この頃の音としては地味な作品。　(嶋田)



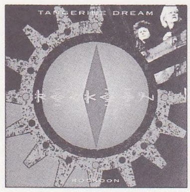
TANGERINE DREAM
Quinoa
CD/Volt 0001 CD　'92年

国際ファンクラブのメンバーを対象に、1000枚限定で配布された希少なミニ・アルバム。Edgar Froeseと息子のJerome Froeseの共作・共演で、プロデュースとエンジニアリングも二人だけで行っている。28'32''のタイトル曲Quinoaのみが収録されていて、このアルバムでしか聞くことのできない未発表作品である。プログラムと演奏の重ね録りと思われるが、手抜きはなく重厚なサウンドに仕上がっている。内容としては「Canyon Dreams」に近い印象を与える。リズムの無いゆったりとしたキーボードの和音進行とテンポの早いビートを伴う軽快な部分が交互に現れる、緩急のコンビネーション・パターンは相変わらずで、少しずつ異なるバリエーションが展開されている。　(Helmut)



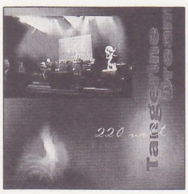
TANGERINE DREAM
The Private Music of Tangerine Dream
CD/(U.S.)Private Music 01005-82105 -2 '92年

このレーベルにおけるベスト編集盤で、「Lily on the Beach」、「Optical Race」、「Melrose」、「Miracle Mile」の各アルバムから選曲されている。この他に未収作品として、〝Beaver Town〞と〝Roaring of the Bliss〞の2曲が収められている。ともにFroese親子による作品で、近作でよく耳にする音色（サックスや声をサンプリングして加工した音？）を用い、軽快に疾走するようなリズムの曲に仕上げている。70年代の作品には、精神的なテーマを扱い、聴き手へのメッセージを含んだものが多かったような気がする。また音色やリズムも、今より心理学的にもっと工夫されていたように思う。最近の作品は、確かに聞き易く楽しくなったかも知れないが、なにかが欠落したように感じるのは私だけであろうか。 (Helmut)



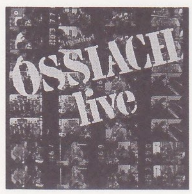
TANGERINE DREAM
Rockoon
CD/(U.S.)Miramar MPCD 2802 '92年

フローゼ父子によるアルバムで、全て2人の共作の曲11曲が収められている。プロデュース及びアレンジはE.フローゼ。リードギターにZlatko Perica（ツラツコ・ペリカ）、フルート、サックスでリッチー・ウェスターが全面的にサポートしており、タンジェリン・ドリームの最終形態が事実上このアルバムで確立されている。フローゼはコンピュータ・ミュージックの存在感の希薄さに疑問を感じたのだろうか、リード・ギター、サックスを導入し、エレクトリック・ドラムもマニュアルで演奏するなど、リアルタイムプレイの要素を増している。曲もよりロック色を強めたエネルギッシュなもので、これはジュロームの若さから来たものだろうか。ここには、ドイツ・アヴァンギャルドの雄だったタンジェリンの姿は全くない。(嶋田)



TANGERINE DREAM
220 volt Live
CD/(U.S.)Miramar MPCD 2804 '93年

1992年に行われた北米ツアーのライブ・レコーディング。EdgarとJeromeのFroese親子のキーボードとギターの他に、Zlatko Pericaがギターで、Linda Spaがサックスとキーボードでゲスト参加している。このツアーの様子は、「Three Phase」と題されたＬＤまたはビデオで窺うことができる。コンサート映像の他に、70年代のツアー時の映像やコンピュータ・グラフィックスによるイメージ映像が収録されている。ギター演奏が中心となる部分ではロック色が強く、サックスのプレイは黄昏の都市風景にマッチするような雰囲気を醸し出している。アンコールでJimi Hendrixの〝Purple Haze〞を演奏しているが、Froeseのギタリストとしての源流を覗かせるものとして興味深い。 (Helmut)



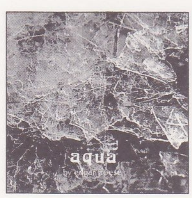
V.A.
Ossiach Live
LP/BASF 49 21119-3/1-3 '71年(?)

1971年にOssiacher湖で開催された「世界音楽フォーラム」の記録として制作されたもの。TANGERINE DREAMの他にANIMA SOUND、Friedrich Gulda、WEATHER REPORTなどが参加しており、John SurmanやJean Luc Ponty等のセッション・プレイも聞くことができる。その他にPINK FLOYDが参加しているが、彼らの演奏が本作に収録されなかったのは非常に残念である。TANGERINE DREAMの作品としては、〝Oszillator Planet Concert〞と題されるものが収録されている。第2作の「Alpha Centauri」にも通ずるゆったりとした浮遊感のある作品で、当時の「コズミック・サウンド」の雰囲気を伝えている。スタジオ・アルバムほど洗練されていないが、当時の彼らの様子を知る上では貴重な作品である。 (Helmut)



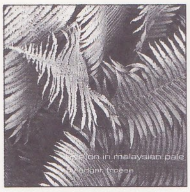
V.A
V
LP /Virgin VD 2502 '73年

ヴァージンレーベル初期のサンプラーアルバム。6本指のVサインジャケットから、知的なひねりのきいたレーベルカラーを伺わせている。収録されているのはM.オールドフィールド、R.ワイアット、Sヒレッジ、ヘンリー・カウ、スラップ・ハッピー、ハットフィールド＆ザノース、ケヴィン・コイン、クリアライトなど、実に錚々たるラインアップとなっている。タンジェリン・ドリームはこの中の唯一のジャーマン・ロック・グループとなっていて、序曲と題された未収録テイクが収められている。シーケンサーを用いないほぼ完全なインプロヴィゼイションによる作品。他の各々のアルバムからサンプルが多いが、今通して聴くと、なつかしかったり意外な発見があったりする。時代の熱気が伝わって来そう。 (嶋田)



EDGAR FROESE
Aqua
LP /Brain 1053 '74年
CD/Virgin 7872142
/東芝EMI VJCP 23045

ソロ1作目。録音は'73年末～'74年春にかけて。タンジェリンの「Atem」から「Phaedra」にかけての頃。「Water」ではなくて「Aqua」。〝水〞に立ち入って、その組成、物質の変化をとらえるような理知的とも森羅万象に立ち返るとも言えるようなアプローチは、同時期のタンジェリンのミニマル化ともとれる。〝水〞の生音をムーグ・シンセサイザー等によって再合成したそのリアリティは、生音以上かもしれない。人工的な生音の心地良さ、イメージ抽出された生音が、1曲目で随分に味わえる。霊気が漂い登るような音の揺ぎも、想像力をかき立てる。旧Ａ②の反復する低音、Ｂ①の飛来音やエンジン音の効果等、タンジェリンを形造る要素を各々拡大したような所もある。「Aqua」にフランケが加わりすぐ様「Phaedra」になる。(松本)



EDGAR FROESE
Epsilon In Malaysian Pale
LP /Brain 1074　'75年
CD/Virgin CDV 2040

E.フローゼ２枚目のソロ。EpsilonはYのことだが、Edgar自身のことかとも思える程詩的で抒情的なタイトル曲、名盤「Rubycon」に迫る２曲目〝maroubra bay〟と傑作揃いで、繊細で芸術家肌のフローゼの自然詩人的一面を伺わせるアルバム。フローゼのソロのみならず、タンジェリン・ドリームのアルバムを含めても５指に入る名作である。メロトロンの重厚な和声と具体音の効果的使用が醸し出す神秘性やシーケンサーのリフレインの呪術的な魔力など「Atem」〜「Ricochet」に至る作品のエッセンスが凝集した感がある。カテドラルやプラネタリウムでのライヴ、ニコとの共演など、タンジェリン・ドリームが最も個性的でプログレッシヴであった時期の、リーダーE.フローゼの夢幻的トリップミュージック。アートワークもすばらしい。（嶋田）



EDGAR FROESE
Macula Transfer
LP/Brain 60,008　'76年

エドガー・フローゼ３枚目のソロアルバムは何故かドイツBrainレーベルからリリースされた。75年76年のフライトにインスパイアされた５テイクが収録され、曲目はフライトナンバーらしく具体的なタイトルはない。フローゼのソロはタンジェリンの次作予告版的なところがあるのだが、「Ricochet」から次作「Stratosfear」のサウンドの転向を予期させる要素としては、Ａ面２曲のギターをフューチャーした曲であろうか。作品も小品指向となり淡々とした印象である。もっとも、フローゼはタンジェリンの実質的なファーストと云える「Alpha Centauri」以降もギターを手離したことはないのだが。タンジェリンよりもリラックスした、生身のフローゼのアイディアが伺える作品である。ショパンの幽霊に捧げられている。（嶋田）



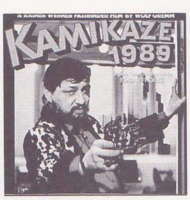
EDGAR FROESE
Ages
LP/Virgin 25 756　'78年

Virginからリリースされながら CD化されていない唯一のアルバムである。この頃、タンジェリン・ドリームは度重なるメンバーチェンジと共に方向性を見い出す為に苦しんでいた時期で、「Cyclone」と「Force Majeure」という評価の難しいアルバムをリリースするが、それにほぼ一致して、ドラムスにK.クリューガーを迎えて制作されている。内容は仲々の意欲作で、フローゼらしい虚飾を排した確固たる音での実にシンプルな構成の曲が収められている。ゴツゴツした手ざわりだが、妙に暖みのある音楽で、フローゼが目指していたものが結構示されていると思う。結局タンジェリンの方はヨハネス・シュメーリンクの参加で安定する。このアルバムはフローゼが唯一、自分の姿をジャケットに大写ししている。年輪とでも訳したい。（嶋田）



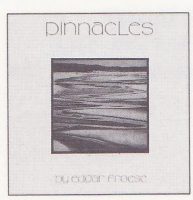
EDGAR FROESE
Stantman
LP/Virgin V 2139　'79年

何と伸びやかでナチュラルな音。音の粒が美しく煌いている。いかめしい容貌に似合わず、エドガー・フローゼという人は生粋のロマンティストなのだろう。ソロも既に５作めを数えた本作では、心地好く新しい風と共に我々を島の夢想へと誘ってくれる。セカンド・ソロの原題が「Ypsilon in Malaysian Pale」で、本人にも〝Samoa〟と付く曲があることを思えば、彼の内の南方への憧憬も推測出来る。〝A Dali-esque Sleep Fuse〟という曲名も、'66年に彼がスペインで画家ダリと出会った経緯を考えると興味深い。〝Drunken Mozart in the Desert〟という曲名にも、音楽の垣根を取り払う闘いを続けて来た彼がやっと辿り着いた境地での余裕と遊び心が感じられる。子供の心で聴きたい音楽。（高山）



EDGAR FROESE
Kamikaze 1989
LP /Virgin V 2255　'82年
CD/Virgin CDV 2255

ヴォルフ・グレムなる監督のサウンドトラック（ハードボイルドもの）である。W.フリードキンのフイルム、ソーサラー以降、タンジェリンはフィルム・ミュージックにハマるらしくかなり沢山の仕事をしているが、私の知る限りフローゼ単独のサントラはこれ１枚である。「Stuntman」の曲とよく似た曲が入っていたり、同時期のタンジェリンのアルバム「Exit」や「White Eagle」などに雰囲気が似ていたりする。フローゼは云ってみればドイツロックの代名詞的なグループのリーダーでありかつ最古参、つまりスーパースターなのだがどうしてもこの人物のスター的要素というのはどこだか分からない。実直かつ職人的な人柄なのであろうか。少なくともタンジェリン・ドリームの音楽＝フローゼの音楽であることは云って良いと思う。（嶋田）



EDGAR FROESE
Pinnacles
LP /Virgin V 2277　'83年
CD/Virgin CDV 2277

エドガー・フローゼ６枚目の最後のソロアルバム。ピナクルスとは、確かオーストラリアの砂漠にある、無数に立ち並ぶ石灰岩の柱のことだったと思うが、尖塔を意味しているらしい。音は「Stantman」以降の明るく躍動的なもの。タイトル曲は中盤から往年の「Epsilon〜」や「Ages」の雰囲気もあって、ブルース・スケールというより牧歌的なフローゼの節回しがふんだんに聴ける。このアルバム発表の後、「Polland Live」「Le Parc」などの充実した作品をタンジェリンで発表して行くこととなるが、ソロを打ち止めにしてもという決意が既にあったのだろうか。フローゼのディストーション・ギターがうなり出すあたりから音楽は推進的となり、悠々とした流れとなってゆく。構成も計算され、後の「Underwater Sunlight」など予告している。（嶋田）

CHRISTOPHER FRANKE
Pacific Coast Highway
CD/(U.K.)Virgin CDV 2661 '91年 /東芝EMI VJCP-28050



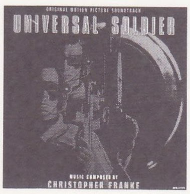
'70年にシュルツェに替わるドラマーとしてTANGERINE DREAMに加入、以来'88年まで活動を共にしたクリストファー・フランケ初のソロ作品。全盛期においてギタリスト出身のフローゼはメロディ、元々オルガニストだったP・バウマンは空間的広がり、そしてこのフランケはリズムと深みそしてパッチワーク（笑）を担っていた、というのが大方の見解で、その風貌と、彼一人の在籍中にソロを作っていないこともあり、もし出たら最もアヴァンギャルドなものになるのではないかと筆者などは考えていたのだが……。しかしサンプリングによるギターやピアノ音を随所に絡め、清冽なロマンティシズムが全編に漂うサウンド・ポエムは何処かパット・メセニーすら彷彿とさせる。まさに人は見かけではないことの証明か。（高山）

CHRISTOPHER FRANKE
McBain
CD/Sonic Images SICD 5011 '91年



アメリカでLDが発売されている映画のサウンドトラック盤。(劇場公開されたかどうかは不明。）彼とBerlin Symphonic Film Orchestraによる38分22秒の演奏が収録されている。(クレジット等の記述が殆ど無いので、曲名はよくわからない。）「Pacific Coast Highway」に続くサントラ・シリーズ１枚として企画されたものらしいが、発売直前にキャンセルとなったようである。15曲中２曲には女性ヴォーカルがフィーチャーされており､特にラストに収められたDIRE STRAITSのカバー曲〝Brothers in Arms〟は、しっとりとした表情豊かな作品に仕上げられている。Frankeのキーボード・プレイの比重は小さく、オケのドラマティックな演奏との調和を重視しているため、シンセ・アルバムという感じはあまり無い。（Helmut）

CHRISTOPHER FRANKE
Universal Soldier
CD/Varèse Sarabande VSD-5373 '92年



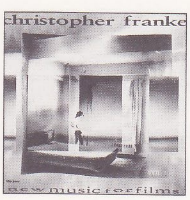
18年に及ぶ期間在籍したタンジェリン・ドリームを離れ、ソロ活動を始めたC.フランケだが、このアルバムはベルリン音楽院作曲科で学んだ彼の作曲家としての実力を示すもので、演奏はBerlin Symphonic FilmOrchestra。フランケはフルスコアの映画音楽の作曲者という立場を守っている。フィルムの内容は近未来設定のアクションものらしい。もちろんシーケンサーを使用した彼の音楽だが、タンジェリンでは隠れてしまっていたシンフォニック指向が前面に出ている。一方タンジェリンがフローゼとフランケの双頭グループであったことを実感させるものともなっている。アジテーション・フリー、タンジェリン・ドリームのドラマーであったという経歴がやや意外に感じられる程のプロフェッショナルなサウンドトラックである。（嶋田）

CHRISTOPHER FRANKE
The London Concert
CD/Varèse Sarabande VSD-5399 '92年



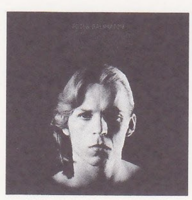
'91年10月のロンドン王立アポロシアターに於けるライヴ。フランケの学者風の容姿とトレードマークのBig Moogが裏面に載っている。スリーヴのアートワークも往年のタンジェリンを彷彿とさせるシュールなもの。フランケをリチャード.E.ロスがサポートしている。サウンドはタンジェリンより重厚なシンフォニックと云え､「Force Majeure」から〝Cloudburst Flight〟と「Underwater Sunlight」から〝Dolphin Dance〟がリアレンジされ演奏されている他､随所に｢Stratosfear｣や｢Whiee Eagle｣のフレーズやサウンドが聴け、フランケがタンジェリンのどの部分を弾いていたかがわかる。本家はロック色を強めたが、むしろ彼の方がタンジェリンを継承した感が強い。コンポーザーとしてもプレイヤーとしても優れた人であることがよく判る。（嶋田）

CHRISTOPHER FRANKE
New Music For Films Vol.1
CD/Varèse Sarabande VSD-5393 '93年



〝Eye of the Storm〟、〝Mcbain〟〝She Woke Up〟の３本のフィルム用音楽を集めたアルバム。C.フランケ、ソロ第３作である。全24曲のうち、１曲のみフランケとレオール・ホットの共作､他はフランケのペンによる作品で、「Universal Soldier」同様､ベルリンフィルム交響楽団とフランケの共演のものと、全んどフランケがソロで演奏しているものとがある。フランケのアレンジは、管弦楽に関してもしっかりしたもので、リゲティ風の特殊演法的な部分があったりしてフランケのルーツを垣間見ることができる。「Optical Race」以降、否､「Warsow Concerto」以後のタンジェリンに失望していた人にはむしろフランケの方が正統の継承者に感じられるだろう。結構Vol.2に期待してしまったりする。実に「音楽」としてよく出来ている。（嶋田）

PETER BAUMANN
Romance'76
LP/Virgin V 2069 '77年



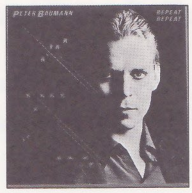
ペーター・バウマン初のソロ・アルバムは、「浪漫」とほぼ時を同じくして制作され、本作発表後、彼はTANGERINE DREAMを脱退する。それ故、自ずとここには彼とTANGERINE（＝エドガー・フローゼ）との相違が浮き彫りにされる筈だ。開かれた、より明るい方向を目指した後のTANGERINEに対し、ここで聴ける音には、リック・ライト風のエレクトリック・ピアノや鐘の音、弦やコーラスの導入も含めゴシック風の昏さがある。しかし冒頭のむしろKRAFTWERKに近いビートもロマンティックなメロディにくるむ所などはやはり彼らしい。ジャケットは生と死、若さと老いといった時間への問いかけを表現したのだろうが、このナルシズムに対し、「Ages」で自らの年輪を堂々と晒したフローゼの姿もまた対称的ではないか。（高山）

PETER BAUMANN
Trance Harmonic Nights
LP/Virgin V 2069　'79年



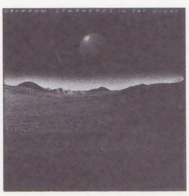
シュトルムの小説「みずうみ」を想起させる、憂愁に包まれたほの昏い森と湖の情景。ここから聴こえて来る音楽は精霊の囁きだろうか。それとも夜、人知れず自然が交わす会話の波調？ ペーター・バウマン２作めのソロ・アルバムは、例えば全盛期のシュルツェと比べると彼岸へと向かうルナティックな意志はそれほどには感じられない。だがこれはやはり夜の音楽だ。気が付けば孤り、ミスティックなゲルマンの森の中に居る。恐れずに耳を澄ませば、妖精や自然の息遣いが聴こえて来るだろう。可憐なメロディが夜明けの光を浴びて踊るまで。リコーダー、ホーン、ドラムスを加えた本作には精神療法的な韻律がある。あるいはこの調和的感覚は後に彼が主宰するPrivate Musicの原点と言えるかも知れない。　（高山）

PETER BAUMANN
Repeat Repeat
LP/CBS Inc. ARR 38059　'81年



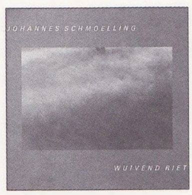
Virginから２枚のソロ・アルバムを発表したペーター・バウマンだが、TANGERINE DREAMでの実績から比較すると必ずしも納得の行く内容ではなかった。その彼が心機一転、新しい境地を開拓しようと果敢に試みたのがこの３作目だが、正直に言って、これは面白くも何ともない大失敗作。エレクトロニック・ポップに挑戦したのだろうが、全然似合っていない。折角のヴォーカルもデヴィッド・ボウイやゲイリー・ニューマンの亜流に終わっている。参加ミュージシャンが変わっていて、カーステン・ボーンは元FRUUPP。ギターは何と、アメリカの売れっ子セッションマン、ジョン・トロペイ。プロデューサーがロバート・パーマーと来る。更に１作発表した後、傷心のバウマンは渡米し、Private Musicを設立した。　（坂本）

PETER BAUMANN
Strangers in the Night
LP/Portrait AL(BFR) 38903　'83年



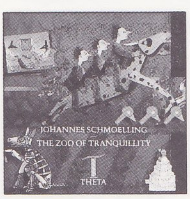
欧州を離れてアメリカへ渡ったBaumannは、全く新しいアプローチで作品を作り出すわけであるが、本作もその延長線上にある。彼の他にEli Holland(リード・ヴォーカル)、Rich Teeter(ドラム)、Richie Fliegler(ギター)、Bruce Brody(シンセとボコーダー)というメンバーが参加している。切れのよい軽快なビートにのった唄と演奏は、ダンス・ミュージックとしての一面を併せ持っている。シンセ類の音色には昔の面影を感じさせる部分もあり、B④のようにメロディ・ラインをそのまま流用している曲もある。また、ヴォーカルのハーモニーの付け方なども凝っていて面白い。ニューヨークという大都市に生活する人々の孤独な一面を映し出すとともに、したたかに生きる逞しさのようなものを同時に描いている。　(Helmut)

JOHANNES SCHMOELLING
Wuivend Riet
LP /Erdenklang IRS 942.160　'86年
CD/Erdenklang
/NEC アヴェニュー A32C-71



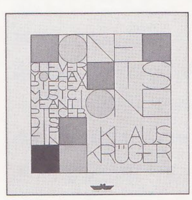
ペーター・バウマンの後継となったタンジェリン・ドリームの第３の男、ヨハネス・シュメーリンクの1stソロアルバム。'79年に一度解散状態となったタンジェリンに参加、「Tangram」以降、第２期タンジェリン黄金時代を築いたシュメーリンクは、フローゼの好みらしく、破綻のない職人的な腕と親しみ易いメロディーの才に富んだ1950年生まれのミュージシャンである。名盤「Le Parc」を最後に彼はソロ活動に入ったが、この1stアルバムは１曲目からメロディー・メイカーである彼の才能を示す曲が並んでいる。そしてタイトル曲パート１、２は、自然音を処理したサウンドなどを効果的に用いた完成度の高いコンピューター系ニューエイジ・ミュージックで、劇場やフィルムの仕事が多かったシュメーリンクのキャリアを表わしている。　（嶋田）

JOHANNES SCHMOELLING
The Zoo Of Tranquillity
LP /Theta 834 109-1　'88年
CD/Theta 834 109-2



ヨハネス・シュメーリンク'88年の恐らく２作目のソロ・アルバム。ポール・スプーナーのイラストブックにインスパイアされた作品という。元来劇場の仕事をしていたシュメーリンクらしく、ストーリー性や視覚的イメージを得易い、かわいらしい小品集といった趣向のアルバムである。タンジェリンの骨太のエレクトロニック・ミュージックを期待するとちょっとはぐらかされた感じがするが、仲々アレンジや音創りに凝った完成度の高いアルバムと云える。或る意味では非常にドイツ的と云えるメルヒェン(民謡)的な世界をコンセプトとしているらしい。色彩的な音使いから、タンジェリンの中でのシュメーリンクの役割りがかえって浮彫りにされておもしろい。一方、元タンジェリンという気負いは全んど感じず聴き通すことができる。　（嶋田）

KLAUS KRUGER
One Is One
LP/Innovative Communication KS 80013　'81年



クラウス・クリューガーとは、TANGERINE DREAMの過渡期の作品『Cyclone』('78)に参加していたドラマーのクラウス・クリーガーのことだ。E・フローゼのソロ・アルバム『Ages』('78)でも彼のプレイを聴くことができる。ごく短期間の在籍に終わったクリューガーだが、その後、クラウス・シュルツェのプロデュースによる本作を残している。全曲彼のドラムスがフィーチャーされているが、ほかにもvo、syn、b、perc、tapeと大活躍。この音楽はTANGERINE DREAMの周辺には大変珍しいタイプの硬派の切り口と実験性を併せ持つ。それは夫人でもあるMALARIAのクリスティーネ・ハーンが参加していることからも想像してもらえるだろう。今聴いても新鮮だ。その後彼はイギー・ポップのアルバム等に参加している。　（坂本）

ジャーマン・シンセサイザー音楽の語られなかった側面

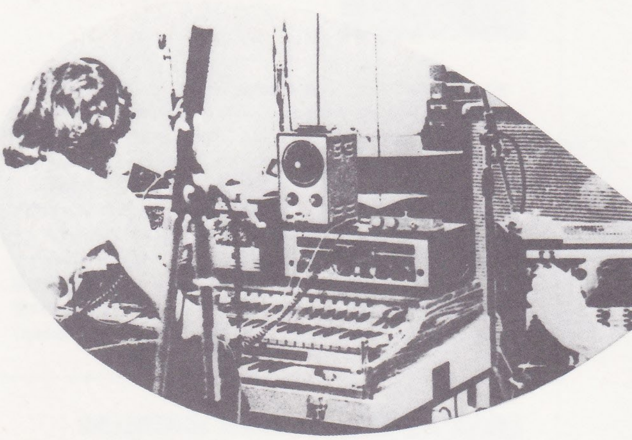
●中野泰博

いわゆるジャーマン・シンセ音楽のうち、タンジェリン、シュルツェに関しては本書に別項目で取り上げているので、ここではそれ以外の電子音楽について解説したいと思う。クラスターを代表とする一派の電子音楽についてだ。（タンジェリンのオリジナル・メンバーであるコンラッド・シュニッツラーはスペイシーな作品が多いのだが分類するとこちらに近いアプローチをしている）

他に類を見ない彼らの音楽性の特質は、簡単に言って音響と音色への特種なアプローチであり、スペース・シンセ物とは『イメージ』と『幻覚』の違いがある。無意識的だったのかも知れないが、結果として彼らの作品にはその他の要素が『思い込んだら一本槍なドイツ人』らしく徹底的に排除してある。つまりメロディ、歌、起承転結はもとより、エモーショナルな要素などが、はなから考えに入っていないのだ。（まぁ音楽であるからして音の高低、周期性による強弱はどうしても出てしまうが、それはポポル・ヴのフォルテ部分で空気が振動してしまうのと同じ『結果』である。）クラスター一派の音楽はシンセを使用するさい、従来の『何かのシミュレーション』、『リード楽器』といったアプローチではなく、音色・振動として目新しいものを選び、音量、定位を操作することにより遠近感をつけて他に類を見ない独自の作品に仕上げていった。そこには既製の音楽にあった文法による手法が皆無で、さらに『音楽を創る』という事が楽器演奏技術に依存しなくても可能という概念を、パソコンの打ち込みが普及するはるか以前に堂々と提示しているのである。クラスターの試みたこうした概念は一般にはなじみの薄いものだったし、現代のように自動演奏を可能にするハードも無かった時代だったのだ。前例の無い物は、それゆえ『聞き方が分からない』＝楽しめない＝駄作という図式にのっとり低い評価をされてきた訳だ。もちろんこう言った音楽要素は先のポポル・ヴの例を出すまでもなく無意識的に多くのミュージシャンがかかわる問題なのだが、それにしても彼らの場合は徹底的だったし、それを言葉で説明することはしなかった。実はクラフトワークも同様の方向から現在の音楽性を作り上げた訳で、その後巷にあふれた打ち込み音楽や、ポップスをシンセで演奏しただけの輩とは根本的に異なる。そうしてかれらの非常識なまでの独自性は当然ながら感覚を共有できるリスナーの範囲を限定していたとも言える。

しかし最近まで我国はジャーマン・シンセ音楽について、非常に歪んだとらえかたをして来たと言っていい。評価の9割がたが『ユーロ・ロック/プログレ』からのものだったのだ。つまりキング・クリムゾン、ジェネシス、イエスといった音楽を同時に愛好/評価する人間によって語られて来た歴史がある。もちろん、そう言った研究癖のあるリスナーぐらいしか英米以外のマイナーな、情報の殆ど無い上に聞き方さえも分からない音楽に接することはなかったからだが。

彼らによってジャーマン・シンセ音楽はタンジェリン・ドリームやクラウス・シュルツェを基準に、誤解を招く表現だがおもに叙情面で評価されて来た。（ハード面でのハッタリも無かった訳では無いが、当時は驚く事が出来ないほど情報不足だった。）この叙情とはつまり『ドラマ』のことである。筆者は日本におけるユーロ・ロックの捕えられ方の最大の特徴がこの



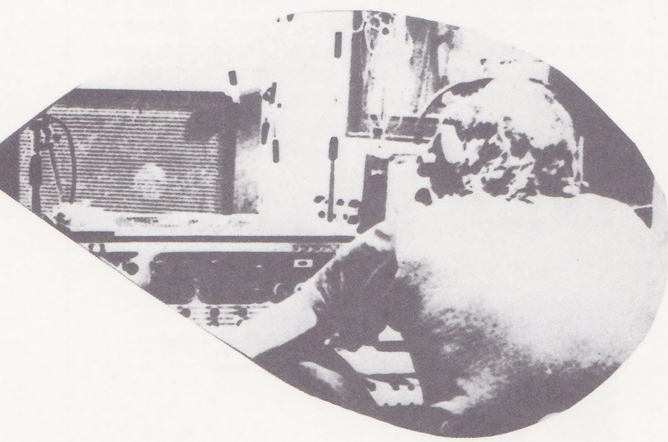
『ドラマ』なのだと思うのだが。たとえばそのタンジェリン・ドリームの音楽に、聞き手は精一杯イマジネーションを広げて、無意識的にせよピンク・フロイドの延長線上において解釈がなされて来たのだ。もちろんそれが極めて妥当なバンドもまた無数に存在していたのだが。長い間シンセ音楽は『瞑想』であり『スペースへのトリップ』としてしか捕えられなかったのだ。多少なりとも曲にイメージの感じられるクラフトワークが認められたぐらいで、クラスター以外でも例えばアメリカにおける'70年前後のムーグ・シンセ・イージーリスニングや、ウォルター・カーロス系列ながらポップスをシミュレイトしたホットバター、ムーグ音楽等の音色音楽は評価など無きに等しく、ごく一部のファンの支持に止まっていた。

ようするに『曲』を聞くクセがついていたのだ。この場合、実験は評価されても愛好はされなかった。



●ハルモニア

こうした傾向の中でクラスター一派はつい近年まで非常に理解者がすくなく、つまり人気がなかった。彼らの音楽にはドラマ性が全く無かったからだが、評価はおもにローデリウスの僅かなニューエイジ的側面に対するものだった。これにしてもSF宇宙音でないリラクゼーション・ミュージックを10年先取りしていた訳だが、生演奏に接する機会が皆無でレコードを大音量で聞くことの少ない我国では彼らの本質である音色・音響面での特質が伝わりにくいという条件もマイナスだった。しかしディシプリン・クリムゾンの本質が叙情では無いのと同様に、それはクラスターの本質ではない。音楽上においてこの点で最も顕著な働きをしているのがもう一人のメンバー、メビウスで、彼の出す音は、ソロ作品を聞けばわかるのだがほとんど『音楽』になっていない。奇妙な音の羅列であるのだが、注意すべきはそれがアヴァンギャルドではない点だ。ためしにどのアルバムでも良いからフル・ヴォリュームで聞いてみれば、その奇妙な電子音の規則正しい反復にたやすく幻覚効果を感じるだろう。彼らの原則はあくまで感覚異化の快感にある。



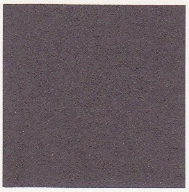
実はクラブで大音量で聞かれるハウス・ミュージックが現在正にこの感覚をメインに展開しているのだ。メロディ、演奏といった概念が無く、リスナーの感覚を異化し、トランスを与える効果をもたらす音色・音像変化だけの電子音の振動で踊る若者達は、今なんなくクラスターやアシュラの快感原則を感覚で理解している。マーキーの読者はまず絶対にそういった音楽のかかるクラブとかには足を運ばないだろうが、やはりユーロ・ロックもロックである以上、本来演奏された音量で聞くことは必要ではなかろうか。

ともあれ彼らはハード面でもコンセプト面でもスタイルの模索中だった初期の作品から、単一ビートの反復により『小節のあたま』という感覚を混乱させ浮遊する電子音で聞き手を酔わせるノイや、そのライヴ・ヴァージョンのハルモニア(これなどは御丁寧にもアシッド魔人グル・グルのマニ・ノイメイヤー入りだ)、ノイから粗さを消したトランス効果の高いデュッセルドルフ、なまぬるさが不気味なマイケル・ローター、前述クラスターの二人のソロとファミリー・トゥリーを広げ、確実にニューエイジと一線を画した作品を生み出している。'80年代に入ってからの共通項は『単一ビートによるリズムのモアレ効果』であり『イメージではない感覚の浮遊』である。(ただし近年のローデリウスはダメになってしまった。もともと最も叙情的なメロディを弾いていた男なのだが、すっかりムード・ミュージックになってしまった。まあ彼は今年60才なんでちょっと勘弁してやってほしい。)

シンセサイザーという道具の最大にして唯一の特質はヴァイオリンのシミュレーションではなく、聞いたこともない気持ちの良い音が出る機械だということを彼らの音楽は初めから証明していた。彼らの音楽は、聴いている間聴覚を刺激する妙な質感の電子音に酔うためだけのものだ。純粋音楽と言ってさしつかえあるまい。

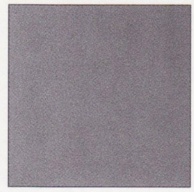
すべてのジャーマン・ロックには勿論あてはまる訳ではないが、ドイツには奇妙な質感/概念を持った奴らが多い。ロックの美意識からも易々と踏み外してしまう彼らの大胆な感覚は、アヴァンギャルドといえど既知の概念の良くて掛算的なイタリアと好対象といえる。'80年代の意識改革と言えるジャーマン・ニューウェーブの時代にもドイツ勢は主流とされたイギリスの感覚に全く囚われない概念の音楽を多数輩出したものだった。

'94年の現代、彼らの行ってきたスタジオでの音響工作の手法はハウスと呼ばれ、トランス感覚をメインに打ち出す若手ユニットが口を揃えてクラスター勢からの影響を指摘している。じつに25年の歳月がかかって本来の理解者を得た訳だが、一連の音のペイントに触れるのは今からでも遅くはない。異質な音感覚が本質である彼らの音楽は古びる事は無いのだから。



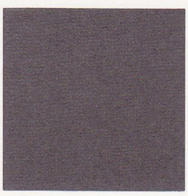
KONRAD SCHNITZLER
Schwarz
LP/Edition Rene Block KS 1001　'71年

カラー・シリーズの第１作目で、タイトルどおり黒いカバーとレーベルに統一されている。200枚限定のプライベート・プレス。「Eruption」というサブ・タイトルが付けられており、レコードの両面を二つのパートに分けてはいるものの、両面１曲構成の大作である。彼はTANGERINE DREAMのデビュー・アルバムにチェロとタイプライタの演奏で参加していたが、本作でも同様のチェロ演奏が行われていて、似たような雰囲気を出している。音楽と言うよりも「音」という感じが強い部分もあり、オシレータのロング・トーンが続いたり、無機的なベースのような音が循環し、太鼓や打楽器風の音が荒々しくかぶさるといった演奏が、少しずつヴォルテージを上げながら展開している。内に秘めたパワーを感じさせる作品である。　(Helmut)



KONRAD SCHNITZLER
Rot
LP/Edition Rene Block KS 1002　'72年

カラー・シリーズの第２作目で、赤いカバーとレーベルに統一されている。500枚限定のプライベート・プレス。「Meditation」というサブ・タイトルが付けられており、Ａ面にその曲が、Ｂ面には〝Krautrock〟というタイトルの曲が１曲ずつ収められている。バックを流れるオシレータの音は瞑想的であるが、縦横無尽に出てくるパルス状の音は力強く荒々しい雰囲気を持っている。その過激さは、Ｂ面においてテンポの早いリズムと一体となり、ピークに達する。前作に比べて音色の種類も増え、表現の幅が広がっている。なお'74年に、「Schwarz」、「Rot」、「Blau」のオリジナル・アルバムに、それぞれ内容の異なる30分カセット１本を加えた「Eruption Box:Work in Progress」(署名・番号入り)が、100セット限定で発表されている。　(Helmut)



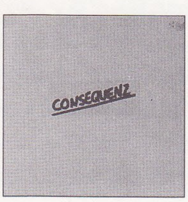
KONRAD SCHNITZLER
Blau
LP/(private press)KS 1003　'72年

この人を語らずして、ジャーマン・ロック（広義での、もちろん）は片手落ち、それ程の重要人物。たび重なる自主製作のおかげで一般リスナーの耳に届くことはなく、カルト的存在だが、音楽の方も相当なものだ。これは２作目に当るもので、ブリティッシュ物以上に奥深かった'70年代初期のドイツ・ミュージックの凄味を感じさせる。一切の迎合がない。おおむねはミニマル・ミュージックと言っていいものの、そこは当時だけあってか聴覚から脳へ達するような危険な音造りや音響効果がある。一口に現代音楽に押し込めない音の遊びや感覚主導のトリッキーさが、音楽の枠をいとも簡単に超えており、極上のドラッグ・ミュージックですらある。そして硬派な音楽でもある。まずは幻の傑作と言っていいだろう。　(松本)



CONRAD SCHNITZLER
Conrad von Berlin
LP /Paragon 66 052　'78年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14223
(Ballet Statique)

'73年の「Blau」以来、暫くぶりのアルバム制作である。プロデュースは、Peter Baumannが行っている。前作発表後も、カセット作品を制作するなど、音楽活動は続けていたようである。種々のアイデアを検討し実験を重ねた成果であろうか、本作に収められた曲はどれも整然としてまとまりのあるものに仕上がっている。独特なリズム・パターンで、奇妙な質感あるいは浮遊感を伴った、モノクロマティックで無機的な音響空間を創り出している。彼の音楽性は非常にユニークで、一般の脚光を浴びることは少ないかも知れない。しかし一部に非常に熱心なファンがいることからも、確固たる存在として認められるべきものである。Spalaxからの再発CDには、同傾向の作品が５曲、ボーナス・トラックとして加えられている。(Helmut)



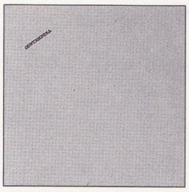
CONRAD SCHNITZLER＋WOLF SEQUENZA
Consequenz
LP/(private press.)KS 1004　'80年

Wolf Sequenzaとの共作アルバム、500枚限定のプライベート・プレスで、白いカバーにスティッカーを張り付けただけの簡単な作りである。曲名と録音方法について短い解説を付したコピーが一枚添付されているだけなので、詳しいことは不明である。エフェクタとエコー・ユニットを接続したミキサを通して、ギターやパーカッション、キーボード、シーケンサの音を２台のステレオ・テープレコーダでピンポン録音するという、シンプルなシステムを採用している。単調なフレーズを淡々と繰り返すだけの曲から多彩な音色をもったエキゾチックなものまで、全12曲の作品が収められている。余裕を感じさせる音作りには、どことなくコミカルな雰囲気が漂っている。
(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Auf dem Schwarzen Kanal
LP/Rca PC 5098　'80年

Super-Sound-Singleシリーズの１枚としてリリースされた12″シングル盤。Disco-Remixのキャプションからも明らかなとおり、ダンス・ミュージックを意図して制作された作品である。両面に２曲ずつ、計４曲が収録されている。この作品を聴けば、彼の実力が並々ならぬものであることは明白であろう。時流に乗った作品を作ろうと思えばいつでもできるが、彼の主義として、単にコマーシャルな作品を作らないだけなのではないだろうか。ビシッと決まったタイトで重いビートに合わせて、メタリックなボーカルとサウンドが緊張感を伴って展開される。彼の活動期を通じて、ひとつのピークを形成する作品と言えるのではなかろうか。ハイ・レベル・カッティングで、音質もかなり良い。　(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Contempora
LP/(private press.)CT 1001　'81年

200枚（一説には500枚）限定のプライベート・プレスで、白いカバーにタイトルのスタンプが押されただけの簡単な作りである。添付されているインサートには、スピーカー付きヘルメットをかぶりテープレコーダを腰に付けた本人のシルエットが印刷されており、彼の指紋とサイン、限定番号が書き加えられているだけである。従って曲名など詳しいことは、いっさい不明である。両面とも短い曲の断片がコラージュ風に寄せ集められており、全体がひとつの長い作品となっている。何の脈絡もない断片が次から次へと出てくる様子は、ある意味で、各種の手法の展覧会を行っていると言えなくはない。変化に富んだコンテンポラリー・BGMとして聞くのも面白いかも知れない。　(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Con 3
LP/Sky 061　'81年

Wolf Sequenzaとの共作アルバムの第２弾。比較的メジャーなレーベルから発売され、多くの聴衆の耳に触れた作品の１枚ではなかろうか。「Consequenz」と同様、ゆとりがあって遊び心にあふれた曲作りがなされている。ボーカルでは二人の他に、GilliとGregor(彼の息子と思われる。後にConradとの共作を発表)B⑤に参加している。部分的にはメロトロン風の演奏や変わった雰囲気の効果音が加えられて、なかなか面白い曲作りがなされているが、全体としてはコミカルな雰囲気に仕上がっている。生真面目に聞くよりも、気軽に楽しむべき作品と言えよう。　(Helmut)



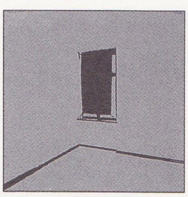
CONRAD SCHNITZLER
Conrad & Sohn
LP/(private press.)GS 1001　'81年

500枚限定のプライベート・プレスで、彼の息子Gregorとの共作アルバム。カバーにアルバム・タイトルが印刷されているだけで、曲のクレジットやキャプションは何も付されていない。従って詳しいことは一切不明である。両面とも演奏上はいくつかの部分に分かれているが、全体的には一続きのトータル・アルバムのようである。Ａ面には、イコライジングされて不明瞭なボーカルによる語りのような歌がチープなビートをバックに収められている。アグレッシブな印象を与えるとともに、重く沈んだ叫びのような雰囲気を漂わせている。Ｂ面には一風変わったリズム・パターンやサウンド表現を試みた作品がいくつか収められており、変化に富んだ興味深い内容となっている。　(Helmut)



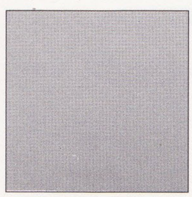
CONRAD SCHNITZLER
Control
LP/Dys DYS 04　'81年

両面通して合計36分以上に及ぶ表題曲のみ（ただし幾つかの小曲により構成)。ビートは所在無く希薄で、音は緩やかに引き延ばされ、ひとつのフレーズを織り成す前に力なく気化してしまう。ここでは定型さえもが、繰り返される度に少しずつずれていき、しまいにははらはらと散り離れる。それゆえ、聴く者は音の残像と戯れながら、あやふやな「現在」に虚ろに耳をそばだて続けるほかはない。白くおぼろに発光する器官をふわふわと揺らめかせながら、中空を漂い移ろう水母の振る舞いを、暗くした部屋の中、ひとり寝転んで見詰め続ける感覚。なお、米ＤＹＳはコロラドに本拠を置くニーモニスツ主催のレーベルであり、自身の作品のほか、ＭＢ、パスカル・コムラードらを凝った装丁によりリリースしていた。　(福島)



CONRAD SCHNITZLER
Conal
LP/Uniton 002　'81年

ノルウェーの新興レーベルからリリースされたアルバム。プレス枚数も3000枚と今までにない数である。この年にはカセット作品を含めて、過去の音源を元にしたと思われるたくさんのアルバムが発表されているが、やはり経済的な成功がその背景にあるのであろうか。本作の内容であるが、両面とも22分弱の大作が１曲ずつ、計２曲収められている。Ａ面の作品はリズムがあまり明瞭ではなく、フワフワとした雰囲気に仕上がっている。Ｂ面の作品も似たような傾向にあるが、浮遊する液体の滴が形をゆっくりと変えながらヒュルヒュルと流れてゆくようなイメージを与えるものである。これといった特徴はないが、この時期のスタイルを反映した作品の１枚である。　(Helmut)



KONRAD SCHNITZLER
Gelb
CD/Block EB 110　'74年

活動の比較的初期にカセット・テープの形で発表された「色名」連作のひとつ（本作は黄色)。後にＬＰで再発された（手元にあるのはこちらの方で、黄一色の無地ジャケットに収められている)。作品の感触は、彼のソロ活動を広く知らしめたEgg盤の、静寂のうちに氷結してしまったような構成美にはほど遠く、もっと感覚的にもナイーヴで、手作りの簡素な工芸品のような趣がある。基本的にはリズム・シーケンスを伴うチープな電子音楽であり、音色の一種言い難い暖かみを帯びた不透明さが、むしろ郷愁を誘う。その点で、湖畔に浮かべたボートの船縁を洗う波音をベーシック・トラックとしたＡ②が、小品ながら味わい深く印象に残る。彼の拠るサウンド美学の原点が伺い知れる１枚と言えるだろう。　(福島)



CONRAD SCHNITZLER
Grun
LP/Edition Block EB 111 '81年

カラー・シリーズの第５作目で、緑色のカバーとレーベルに統一されている。500枚限定のプライベート・プレス。例によってクレジットの印刷やインサートが付されていないため、レーベルに記載されたデータ以外の詳しいことは、一切不明である。'76年と'80年の作品をアルバムとしてリリースしたもので、Ｂ面は33回転と45回転のどちらでプレイされても鑑賞できるという珍しい作品である。Ａ面の作品は、循環するリズム・パターンに乗って、ストリングスのような奥行きのあるシンフォニック・サウンドがフェイジングしながら滔々と流れてゆくというものである。Ｂ面の作品は再生スピードによって、水辺をゆっくりと進む舟のイメージになったり、リズミカルで絶え間無い砂丘の風紋のイメージになったりする。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Convex
LP/(private press.)GS 1002 '82年

500枚限定のプライベート・プレス。カバーにアルバム・タイトルが印刷されているだけで、曲のクレジットやキャプションは何も付されていないので、詳しいことは一切わからない。次々と表情も変えながら展開される各種のサウンド・エフェクトによって、抽象絵画から切り取った異次元空間のような音宇宙が表現されている。ランダムとも思える音の組み合わせは全くのコンテンポラリー音楽と言ってよい内容であり、新しい表現の方向性を示唆する作品である。顕著なリズム・パートは全く加えられていないため、奇異な感じを受ける。なお、同じ年にリリースされた「Berliner/Berlin/in Berlin」というコンピレーション・アルバムにも、Schnitzler親子は１曲ずつの作品を提出している。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Berlin Express
LP/Cbs Portrait 4R9-03218 '83年

Schnitzler親子とPeter Baumannの共作による12''シングル（ただし再生回転数は33 1/3）である。プロデュースは、BAUMANNによる。本シングルの後に本格的なアルバムを制作する予定であったと思われるが、途中止めになったようである。このシングルはかなり珍しく、プロモ盤しか見かけないところからすると、正式発売されたかどうかもかなり怪しい。今となっては見当違いの感が強い〝The Russinans Are Coming〞という曲のロング・ヴァージョンがＡ面に、そのドイツ語ヴァージョンと〝The 4:08 to Paris〞という曲がＢ面に収められている。Ｂ②はBaumannらしいハーモニーの重ね方がしてあり、懐かしい感じがする。しかし全体的な内容のレベルからすると、ヒットは難しかったと思われる。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Con 1.7.84
LP/(private press.)CON 84 '84年

ドイツの音楽雑誌の企画の下に制作された、222枚限定のプライベート・プレス・アルバム。各カバーの表には彼の手形が押してあり、限定番号とサインが書き加えられている。予約注文者にだけ通信販売されたもので、一般には殆ど出回っていないため入手はかなり困難かも知れない。しかしながら作品の出来はなかなかのもので、一聴すべき内容である。ダイナミックで奥行き感に磨きのかかったサウンドは、シンプルでありながら力強い響きを聴かせてくれる。コンテンポラリーな表現をとっているが、音に躍動感があり色彩感も豊かなため、耳に馴染み易い仕方がりになっている。スチール弦を叩いて出したような音色は、特に印象的である。彼の代表作の１枚と言えるのではなかろうか。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Concert
LP/(private press.) 1-86-103 '86年

本作も曲名等のクレジットが付されていないため、詳しいことはいっさい不明である。初回プレスのみ、白色ヴィニルによる限定盤としてリリースされた。アルバム・タイトルどおりコンサートの内容を収録したものと考えられるが、ライン録りらしく会場の様子を窺い知ることはできない。（その分、音質は良いのであるが……。）幻想的な雰囲気を醸し出す現代音楽風の演奏がなされており、ピッチ・ベンドによるフニャフニャとした音やヒュンヒュンと流れるような電子音楽特有のサウンド効果と相まって、シュールな音宇宙を構築している。また、作品の随所に新しい音色やパターンによる表現が加えられている。部分的には、Philip Glassに似た手法も用いられている。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Micon in Italia
LP/Auf Dem Nil DMM 003 R '86年

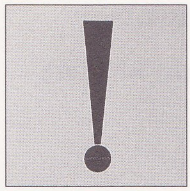
Michael Ottoとの共作アルバムで、曲によってはWolfgang Hertzがゲスト参加している。２分程度の比較的短めの曲が17曲収められており、それぞれの内容にマッチした簡単なタイトルが付されているようである。この共演はアルバム制作に良い結果をもたらしたようで、今までに無いスリリングでエキゾチックな雰囲気を引き出している。テーマ毎に音楽愛好家がちょっとしたアイデアを気軽に出し合って、即興的にまとめあげたような感じでもある。その分、アルバム全体としてのまとまりには欠けるかも知れないが、一つひとつの曲にはエッセンスが濃縮されていて充実している。デジタル・マスタリングによる録音と思われるが、ビブラフォンらしき音などは非常に生々しく録音されている。 (Helmut)



CONRAD SCHNITZLER & WOLF SEQUENZA
Consequenz II

LP/(Sp)Espelandor Geometrico EG 006
'86年

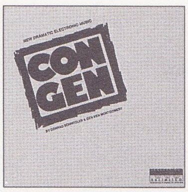
Wolf Sequenzaとの共作アルバム。スペインでのみ発売されたアルバムで、曲のタイトルから推測したところ、スペインの印象を作品にしたものと思われる。A面には短めの曲が8曲収められており、B面には長大な曲が1曲収められている。メロディ・ラインなど、どことなく異国風の雰囲気を持ってはいるが、演奏によってデフォルメされているのでそれほど明確ではない。A⑤で聞かれるリズム・パターンのようなモダーンなスタイルも取り込まれている。〝Kastilien〟と名付けられたB面の曲では、長い年月を越えてなお存在するその地方の風土といったものを確かな眼差しで捉えようとするかのような、重々しい演奏が繰り広げられている。　(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Congratulation

LP/(Sp)Espelandor Geometrico EG 009
'86年

本作もスペインのみで発売された作品で、Schnitzlerのソロ・アルバムである。曲のタイトルから、1986年8月19日から26日の間に作られた小作品を収めたものであるらしい。エレピのようなキーボード・プレイを中心にした曲が多く、リズミカルなメロディ・ラインは聞き易く小ぢんまりとしたものに仕上がっている。表現形式としては、一般的でスタンダードなものが採用されている。従って、フリー・ミュージックのようなタイプや、シーケンサ等によるタイトなビートを伴った重々しい作風を期待するリスナーにとっては、面白味の少ない作品であるかも知れない。しかしこれこそが長い年月を経て辿り着いた、彼の音楽の一つの到達点と言えるのではなかろうか。　(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER & GEN KEN MONTGOMERY
Gencon New Dramatic Electronic Music

LP/Gnerations Unlimited GC-LP 02
'88年

二人のアーティストによる共作アルバム。A面に小作品が8曲、B面には8個のパーツからなる組み曲が1曲収められている。A面ではチェルノブイリというタイトルに見られるような、現代文明の危機的状況をテーマに曲作りが進められているのであろう。サウンドによる表現で、リスナーに訴えかけようという試みだと思われる。そういう意味で、Doramatic Electronic Musicというタイトルが付けられたのではないか。聞いて楽しいエンターテイメントも良いが、内省を促すような硬派の作品をもう少し評価すべきではないだろうか。B面の曲は人間の情動を取り扱ったもので、気持ちの高ぶった状態や落ち着いて癒される状態、黙想へと向かう状態などが各パート毎に多面的に表現されている。　(Helmut)



CONRAD SCHNITZLER
Constellations

LP/Badland BAD No 005　'87年

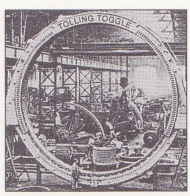
共に30分以上に及ぶ長尺の2曲は、いずれもシーケンス・リズムを欠いたつぶやくようなエレクトロニクスを基本として、短い場面の連続から成る。音はマクロなうねりを持たず、それぞれ孤独に眼の前を通り過ぎ、立ち止まりあるいは衝突して、気ままに集合離散を繰り返しながら、ただそこにある。それゆえスペイシーな広がりよりも、むしろ微視的に覗き込むような奥行きが強調される。タイトルの『星座』とは、実のところ分子模型のことではないか。この広がりを持たぬ宇宙を、時折マレビトのように楽器音が訪れ、エレクトロニクスの向う側でピアノが緩やかに階段を降り、パルスが流れ星となって過ぎるなか、オルガンが足元からひたひたと満ちてくる。なおジャケットは有名な月面に浮かぶ「人面」写真。　(福島)



CONRAD SCHNITZLER
Ballet Statique

LP/(Fr.)Egg 90184　'92年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14223

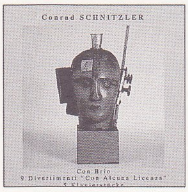
タイトルこそ違え、これは深夜のテレビ画面に現れた海坊主こと「Con Von Berlin」もしくは国内盤LPでは「Con」として知られていた'77年仏バークレイからのアルバム。なのだがこうしてCDにて再発売された際、5曲がボーナス・トラックとして追加された。それにしては15年の努力が水の泡と言うか、ほとんど差がない。つまりアウト・トラックなのか?何かとカルトで訳わからないが、追加曲1曲目の〝Frozen Bubbles〟等、タイトルそのままに凍った泡がはじけるもよう。それはエキセントリックではなくキャッチーだ。大きくうねる持続音の中を飛びはねるように単音が反復し微妙に変化すれば当然目が回る?人間の人各々の思いにではなく聴覚や生理感覚に作用させる彼の手法は健在で、質の高い5曲になっている。(松本)



SCHNITZLER-THOMASIUS
Tolling Toggle

CD/FünFundvierzig 57　'91年

コンラッド・シュニッツラーの新作はJörg Thomasiusなる人物との共同作品。昔の様な淡々と進行するアシッド・ミニマル的な作風は既に脱しており、音そのものの色合いやテクスチュアに重きを置いた小品が集められている。加えて、「いかにも機械で作りました」という様な彼個有の音処理も、柔らかいアナログ的なものから、金属的でデジタル的なものに変化している。ジャケットさながら、金属加工工場にでも迷い込んだ様な印象だ。こうした音処理の傾向は、少しばかり最近のチャールズ・ヘイワードと共通点が見出せるのだが、彼がディス・ヒートゆずりのニュー・ウェーヴ感覚で全体をまとめているのに対し、こちらはノイズ、または現代音楽よりのシリアス路線を狙っている。　(沢田)



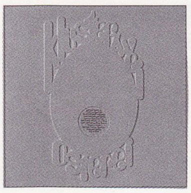
CONRAD SCHNITZLER
Con Brio
CD/(Fr.)MSI Spalax 14274　'93年

純然たるコンテンポラリー・ミュージックの作品。その完成度は極めて高いと言えるであろう。曲の制作時期により大きく３つの部分に分かれ、それぞれに５曲から９曲の作品が収められている。ホルン、太鼓、ストリングス、ピアノ、打楽器といった構成の少人数アンサンブルの作品を、ひとりで録音したようである。彼は創作活動の様子をずっと記録しているようで、そのサウンド・ライブラリの数量は膨大なものになっているらしい。以前にカセットのシリーズとして発売されたこともあるが、Serge Leroyなる人物によって選曲され、その抜粋として本アルバムに収められた作品は、その中のほんの一部分に過ぎない。ディジタル録音によって音の奥行き感が増し、より繊細な表現が可能となったようである。　(Helmut)



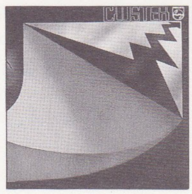
KLUSTER
Klopfzeichen
LP/Schwann Studio 511　'70年

基本メンバー、レデリウスとメビウスに加えコンラッド・シュニッツラーも参加のファースト。彼らの音楽に対しては実験的という言葉は使いたくない。ここで聞かれる演奏は淡々とした即興を電器処理したものである。明確なリズムは無く、シンセも使用されていないため、(次作では電子音を使用)一聴するとアヴァンギャルドな印象を受けるかも知れない。しかしジャズなどから派生したフリーミュージックとの最大の相異点は緊張を目的とせず感覚の異化のみを目指した点だろう。使用されたチェロやギターなども彼らにとっては音源のひとつにすぎない。しかしこれをドラッギーと書いておかないと嘘になるな。理詰めの現代音楽ではなく、あくまで感覚の産物による作品といえる。　(中野)



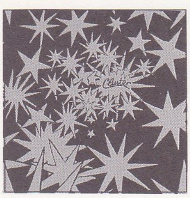
KLUSTER
Osterei
LP/Schwann Studio 512　'71年

ゆるやかに鳴される変調された楽器音、A面ではそれに朗読がかぶさる。前作と全く同様の構成のセカンドだが、徹底して平坦だったファーストに比べて大音量の部分も有り、大分メリハリはついている。多少のスペイシーな音はたぶんシュニッツラーの物だろう。残響の多い各音色はフレーズが皆無（これ、やろうと思ってもなかなか出来ない）の割には存在感がある。この二枚のLPはジャケットがプラスチック製で、タイトルなどが浮き出しているという異常なものだった。いかにも現代アート的な発想といえる。ただしこのジャケットはその材質ゆえに割れ易く、無傷で現存するものは少ないコレクターズアイテム。'80年に通常の体裁で再発されているが、その後の一連の作品とは大分印象の異なる作品である。　(中野)



CLUSTER
Cluster
LP/Philips 6305 074　'71年

Cのクラスターのファーストだが録音は「Osterei」の一カ月前に行われている。ただし内容は重さが消え、後の特質である奇妙な電子音の浮遊がメインという、前二作に比べあきらかに焦点の定まった内容になっている。(注・曲といえる部分は無い。音楽のコンセプトの話しだ。)選ばれた音色は決して軽やかな物ではなく、当時の機材上の限界から随分機械的な空間になってしまっているが、十分楽しめるまでに手法が確かになってきたのだ。すでに通常の楽器は姿を消し、音源は発信機のみで作られている。具体的なイメージはカケラもない。何の意図もなく現れて消える音が脳にキク。オリジナルは早くに廃盤になったが、スカイ・レコードからタイトルを「71」として、ジャケット変更のうえ再発されている。　(中野)



CLUSTER
II
LP/Brain 1006　'72年
CD/(Fr.)Spalax Music 14864

電子音の波調により自然に発生したモアレ的なリズムが最高に気持良いセカンド。現代のトランス・アンビエント・ハウスと何ら変わることのない内容である。②ではすでに異質な存在と言えるギター音が入るが、ワンフレーズが変調するだけで、重要なのは残響のトレモロの方だ。内ジャケに写る配線だらけの古臭い発信機があまりにカッコイイ！　たかがこれだけの機材で録音されたという事実は、彼らの音感覚がいかに非凡であるかを証明するものといえよう。(ラリっていただけでは原型のないものがここまで作品化されない。)各アルバム・ジャケットに於けるメビウスのデザインも極端に単純化されたもので、彼らの音楽の特質を良く表している。　(中野)



CLUSTER
Zuckerzeit
LP /Brain 1065　'74年
CD/(Fr.)Spalax Music 14865

リズムボックスに加え、パーカッシヴな音色を用いることで飛躍的に軽やかになった作品。前作までのかげりのある音に姿を消し、現在までの手法に意識的になった。②の間抜けなシンセ・ブギや⑤のシーケンスなどはクラフトワークに一歩先んじたテクノポップと言える。(ただしもちろんメロディなど無いが)意図的に高音をカットした音色は攻撃的要素が消え、異様に『流し易い』。各曲共３～４分前後の小品だが、この時間はべつに倍あったとしても何ら問題はない。機械のビートにより曲間の密度は均等であり、起承転結のない音響作品として製作されている。彼らにとって５枚目のリーダー・アルバムだが初めて裏ジャケットに二人の写真が付いている。どーでもいい顔である。(もちろん誉めているのである。)　(中野)



CLUSTER
Sowiesoso

LP /Sky 1005　'76年
CD/Sky CD 3005

前作との間にハルモニアとしてのレコーディングをはさんで発表された作品。本来の音楽性より幾分派手なハルモニアにおいて彼らが得たものは、多分リズムに対するアプローチ法だろう。本作では逆説的にそのリズムは平坦になっているが、ファーストのようなノン・ビートには決してならない。これはリズムの持つ高揚をかれらが選択せずに、反復の幻覚を抽出したということだ。散らされる電子音のタイミングも整理されて、ますますフラットな内容になっている。つまりもはや音色のみしか聞き所が無く、それに乗れなければ存在価値ゼロという極端まで来た訳だ。自分達のなすべきことを知った上での『何のハッタリもない』ジャケットが内容を端的にあらわしている。（中野）



CLUSTER & ENO
Cluster & Eno

LP /Sky 1010　'77年
CD/Sky CD 3010

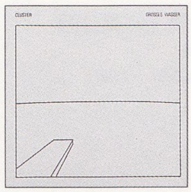
その後10年におよぶイーノの音楽性を決定付けた共演である。彼のディスコグラフィーではこの前作が「ビフォア・アフター・サイエンス」というロック・アルバムなのに対し、次作は「ミュージック・フォア・エアポート」なのである。クラスターは本来リラックスさせるための音楽でも、環境に合わせた音楽でも無いが、イーノのトリートメントにより、一枚の薄い幕がかけられたような録音になっているため、このアルバムが全作品中、一番環境音楽の概念に近い。極端に音数はすくなく、非自然的なまでに均一な断片が連なる各曲は摩訶不思議な空間を作り出している。一曲目のみにホルカー・シューカイが参加、発信音のようなベース音を聞かせてくれる。サスガ。（中野）



ENO MOEBIUS ROEDELIUS
After The Heat

LP /Sky 1021　'78年
CD/Sky CD 3021

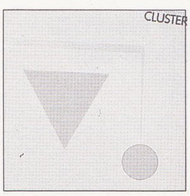
ジャケットからはいかにも環境音楽のようなイメージを受けるが、前作とはかなり違った内容のコラボレーション２作目。多分前作はイニシアチブをイーノがとっていたのだろう。反してこのアルバムでは、フレーズというには単純すぎるもののリフレイとリズムが存在し、数曲ではイーノがヴォーカルをとっている。再びシューカイの参加した④などは最高の不気味ポップであるし、これに最も近い感覚のアルバムといったら初期のイーノの作品しか思い当たらない。にも拘わらるクラスターの特異性は十分際立っており、.逸脱した感覚の傑作となった。ロックなど演ったことのないメビウスの無機質さに比べると、イーノですらずいぶん有機的すぎて聞こえるのが面白い。（中野）



CLUSTER
Grosses Wasser

LP /Sky 1027　'79年
CD/Sky 3027

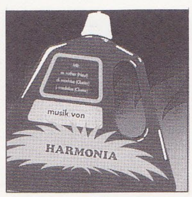
イーノとの競作を経て久々の作品。作風は完成の域に達しており、次作と並び最高傑作と言っても差し支えあるまい。最初の作品から10年目にして、彼らはようやく理想の音響製作システムを手に入れたのだが、この期間彼らのアプローチは常に不変で、単にハードの発達のみが音楽性の向上原因ともいえる。これは彼らの音楽がハードに依存していると言うことでは無く、たとえシンセがなくとも他の方法で彼らは奇妙な音楽を作り続けた事だろうが、たまたまシンセの成長期と活動時期がシンクロしたと言うことである。ただし彼らの本質が真に理解され評価されるまでにはあと10年が必要だったのだ。ま・芸術家ってのは死後に評価されるのが常だから良い方かもしれないが。しかしこの単純極まるジャケット・デザインは素晴らしい。（中野）



CLUSTEM
Curiosum

LP/Sky 063　'81年

メビウスのアートワークは彼の音楽と同質で、蛍光色の単純な図形、それがサイズを無視して置かれている。クラスターの音楽をこれ以上端的には表現出来まい。リズミカルにシーケース音が揺れ、遠く近く奇妙なシンセ音が現れ消える。クラスターの活動としては最後のアルバムになってしまったが、最もフラットに完成された作品。この後二人はソロ活動に入って行く訳だが、特異な音感覚を持っていたのはメビウスの方らしく、その後リリースされたどのソロ作品をとってもハズレは無いのだが、ローデリウスは作品毎にニューエイジ的な側面を増し、現在ではポップスでは無いにせよすっかり既成概念の音楽になってしまった。'85年位までは「Jardin Au Fou」等の傑作もあり聞けるのだが、近年ではベロベロのサックスを入れ筆者を呆れさせた。（中野）

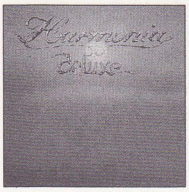


HARMONIA
Musik von Harmonia

LP /Brain 1044　'74年
CD/Brain 511977-2

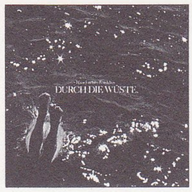
ハルモニアはNEUのM.ローターとCLUSTERの２人の合体グループである。インダストリアル風の妙にポップな音楽で、ジャケットワークもリキテンシュタイン風のポップアート、音楽のコンセプトもこの当りにあると考えられる。FAUST, AMON DÜÜLがダダイズムなら、TANGERINE, Cosmic系はシュールレアリスム、そして、NEU, CLUSTER一派はさしづめポップアート、ニューペインティングに担当するセンスをもっている。そうしてNEUがジャーマンパンクの原型、CLUSTERがジャーマンノイズの源流とも目されるのだが、'74年の発表当時はこの音を評価できたのは一部の先鋭の聴き手だけであった様だ。次作はマニ・ノイマイヤーの参加でローター色が強まるが、革新性は1stが優っている。情感や解釈を拒否した音の運動の表出。（嶋田）

HARMONIA
Deluxe
LP/Brain 1073 '75年



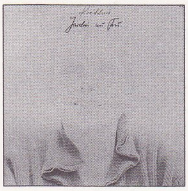
ブレイン・レーベルに２枚の良質な作品を残したハルモニアの2nd。G, Key, Voのミヒャエル・ローターはノイのメンバーでありクラフトヴェルクの系譜、Key, Voのハンス・ヨアヒム・レデリウスとSyn、ハープ、Voのディーター・メビウスはCLUSTERのメンバーであり、その系譜はKLUSTER,および、タンジェリン・ドリームへと連なっていく。前作は初期CLUSTERの延長線上にある前衛的な音響サウンドであったが本作はM・ローターの個性を反映しポップ色とエレクトロニクスが調和したソフトなサウンドとなっている。プロデュースは彼等とコニー・プランク、グル・グルのマニがドラムで参加。分離後M・ローターはソロへ、レデリウスとメビウスはCLUSTERを復活させる。（松本）

HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Durch Die Wüste
LP/Sky 014 '78年



サイド２の１曲目、〝Johanneslust〟(ヨハネの欲望)は、84年にイーノ／メビウス／レーデリウス／プランクのベスト盤『Begegnungen』の１曲目に、さらには同年のレーデリウスのベスト盤『Auf Leisen Sohlen』の１曲目にも収録されたほどの名曲である。78年にリリースされたレーデリウス初のソロ・アルバムは76年と78年にプランクの協力のもと録音されたものだが、76年といえばクラスターが『Sowiesoso』をリリースした年だ。『Sowiesoso』のサイドBとそのスリーヴ・アートでみせた控え目な叙情はあきらかにレーデリウスの志すところであったと、本作を聴くとわかる。そう、僕はレコード屋で本作のスリーヴの写真をみた瞬間にレジに走ったのだ。光り輝く深緑の海面に飛び込むのはレーデリウス自身か。（野田）

HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Jardin Au Fou
LP/(Fr.)Egg 90 291 '79年



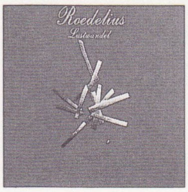
レデリウスの初期のプライヴェート作「Selbstportrait」(自画像)連作の始まりの頃、フランスでのみリリースされたアルバム。晴れやかな彼の表情が空気にかすむように同化していくジャケットが、とても彼らしいイメージに合っている。静然として向こうに居るような「Selbstportrait」の像になった彼よりも、このアルバムの彼はジャケット写真のように近しい。そんな音楽だ。「愚か者の庭」のタイトルに表された道化の、レデリウス流に薄められた感情、その色づきがある。少し物哀しく楽しげな、初期では情感に富むアルバムになっている。サーカスのイメージやワルツのリズムが童心を呼びさましてくれると思う。静かで素朴な彼の語り口は、いつものとおりなのだから尚更響く。特徴のある内容だから一層印象深いはず。（松本）

HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Selbstportrait
LP/Sky 028 '78年



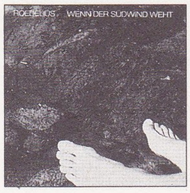
クラスターのハンス・ヨアヒム・レデリウスはバンド活動と並行して続々とソロアルバムを発表し続けている。78年に「Durch Die Wüste」を発表して以来、彼はゼルブストポートレイト(自画像)という連作を３作続けてリリースし、それが完結した後、5th「Lustwandel」、6th「Wenn Der Südwind Weht」7th「Offene Tueren」8th「Flieg Vogel Fliege」をリリース。又、フランスのエッグより発売された「Jardin Au Fou」も名盤として名高い。本作は彼の連作のVol.1あたり、極めて静寂感のある、知的で環境音楽的なサウンドに支配されたアルバムである。KLUSTER、CLUSTER、ハルモニア、そしてイーノとのコラボレイションと長い活動を続けるレデリウスであるが、尚今後の活動が楽しみなアーティストである。（山崎）

HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Lustwandel
LP /Sky 058 '81年
CD/Sky 3058



「Selbstportrait」シリーズを始め、数多くのアルバムを発表しているレデリウスだが、何か一枚となれば筆者は本作を推したい。最もメルヒェン的な「Jardin Au Fou」や無為の自然回帰の極とも言える「Vogel～」も良いが、彼の奏でるピアノやエレクトロニクスの旋律の甘美さがとりわけ印象深いのが本作だからだ。遊歩、漫歩ほどの意味通り逍遥するピアノのタイトル曲、古楽の再現といった趣きの〝Willkommen〟等、基本的には同一線上の彼のソロの中でも最も濃さを感じさせる。彼を含むCLUSTER関係を除けば、'70年代の物を薄味にしたような印象のSkyレーベルにあっては尚更か。プロデュースにはペーター・バウマンも関与。ジャーマン・エレクトロニクスの旅路の一つの帰着としても挙げられよう。（高山）

HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Wenn Der Südwind Weht
LP /Sky 064 '81年
CD/Sky CD 3064

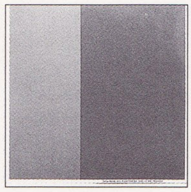


CLUSTERがミヒャエル・ローターとの共同作業HARMONIAを経た後'76年にリリースした「Sowiesoso」には、レデリウスのカラーがよく印されている。続くイーノとの二つの共作にしてもそうだ。その流れは、やがて'78年に始まるレデリウスのソロ・ワークへとつながったように思う。このアルバムは「Lustwundel」に続く７作目になるもので、そうした流れの中にある。近年の情に傾きがちな作風とは幾分違い、静けさは変わらずともより抽象的なイメージがある。それはエレクトロニクス・ミュージックの実験色が残留したような、そのうえでのスケッチ、印象派タッチを思わせる。イーノの「Music For Films」に近い感覚と作風と言えるかもしれない。もちろんもう少しシリアスで潔壁な印象だ。（松本）



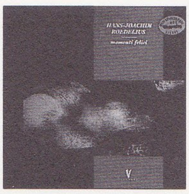
HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Flieg Vogel Fliege
LP/Sky 078 '82年

レデリウスは本当の意味でソロイストだ。共作もしなければ、音楽も個人的な趣味の産物に思えてしかたがない。音楽が静かだからといって、それは決してニューエイジ・ミュージックと称された種の音楽のようにリスナーに向けられたものではなく、極めて自己中心的なものだ。彼の音楽は常に彼の周りを回っていて、彼個人に帰っていく。たまたま、音のタッチがソフトだったゆえに、自己中心的であっても接っしやすいだけのことだ。とても個人的で、一人ゆえの自由。彼の音楽の有り家はそこだと思う。音の輪郭がぼけたようなel-pの音処理と打音のようなその使い方は、このアルバムでも変わらず、ユーモラスでもあるメロディもまた同じ。そして比較的音の動きが活発なサウンドになっている。やはり独特の音だ。(松本)



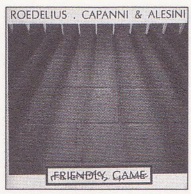
HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Geschenk Des Augenblicks
LP/(U.K.)EG EGED 34 '84年

タイトルは「瞬間の贈物」といった意味だろうか。瞬間瞬間に現れては消える思い、風に揺れる草花にふと感じる不思義と喜び。そうした瞬間を捕え、私達の前に差し出した小品集。'70年代初期の偶然性の探求をロマンティシズムに転化した、そんな言い方も可能かも知れない。EGレーベルに移っての本作ではチェロやヴァイオリン奏者も加えたアコースティックな響きがより一層の思慮深さのようなものを感じさせる。ECMのピアニスト、アート・ランディやマイケル・ナイマンの話題作「ピアノ・レッスン」にも同種の指向性を見出せるが、彼等ほどの美への耽溺はない代わりに、ここには老荘思想にも通じるような自然との無為の一体がある。瞬間の中の永遠。鳥たちの囀りと共に聴かれては如何だろう。(高山)



HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Momenti Felici
LP/Virgin Venture VE 4 '87年

ヴァージンが創った、いささかニュー・エイジ路線の成功をねらったVENTUREレーベル。ドイツ・エレクトロニクス楽派のサウンドがプログレッシヴ〜ニューウェイヴを通過してニュー・エイジへと流れる様は必然のようにも、又、時代の創り出すアクシデントのようにも思える。レデリウスはここしばらく、日本ではほとんど話題にもならずに独SKYレーベルから趣味的な作品をリリースしていた。このアルバムもそれらの作品とさして変化はない。変わることを拒絶しているようにも感じる。一種ポポル・ヴフの思想にも似たこういった作品を聴くと、安らぎの背後にある強い意志に戦慄を覚える。尚、このレーベルよりクラウス・シュルツェの近作も発表されている。(山崎)



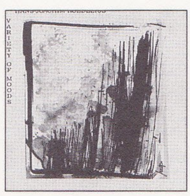
ROEDELIUS, CAPANNI & ALESINI
Frendly Game
CD/(Ita.)Material ; Sonori MASO CD 90040

92年にイタリアのレーベルからリリースされた本作はイタリアのふたりの音楽家、カパーニとアレッシーニとのコラボレーション・アルバムとなっている。3世代にわたる共演だそうだ。だが、50歳も半ば過ぎたドイツ出身の音楽家の若々しい受動的宇宙に、ふたりの歳下の音楽家はまんまと飲み込まれたようだ。しかしそれは夜と朝が無理なく溶け合った夜明けのごとくである。そう、彼は決して命令の音楽ではない。この作品と同じ年にリリースされたレーデリウスのソロ・アルバム『Frühling』の朗々たる柔軟とくらべると、こちらは切々たる詩情のアンビエントだ。ちなみに78年のイーノ/メビウス/レーデリウスの『After The Heat』から「Shade」を、それから10年以上たったこの作品でふたたび演奏している。(野田)



HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Der Ohren Spiegel
CD/(Swe.)Multimood MRC 010 '90年

ここのところ精力的にアルバムをリリースしているローデリウス。これは'89年から'90年にかけて録音された作品で、比較的、最近の彼の作風を伝えるもの。同じ年にリリースされた「Variety Of Moods」に通じる作風で、フルート、ピアノ、ヴィオラ、サックス等を加えて独特の世界を創り出している。基本となるのは彼のエレクトロニクスであるが、自然への融和をより進めた作品で、最初期のポポル・ヴーにも通じる音だがこちらのほうがアカデミックな音だろう。タイトルは医学用語で〝耳鏡〟のこと。(山崎)



HANS-JOACHIM ROEDELIUS
Variety Of Moods
CD/(Sp.)Nova Erk C.D-1002 '90年

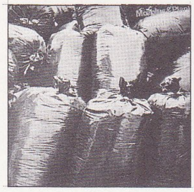
今年で60才になるレデリウスは、クラスター時代のアルバム「Sowiesoso」('76)以来、自然主義的なエレクトロニクスに固執し、現在に至っている。本作ではアコースティックな響きが増し、ピアノ・ソロに多くの時間を費している。元々、さほどの音楽的知識のない男がコンセプトにたよるのは当然だが、ここ10年来の彼は、それすら捨て、自己の内面から放たれる素朴な響きを、与えられた技量の中で表現しようとしているかのようだ。例え、技巧的に稚拙であったとしても、彼の境遇でできる最大の創作意欲を今も音に綴り続けているのだから、アーティストとして尊敬できる偉大な芸術家だと思う。芸術の深度とは、相対的な尺度で計るものではないかと、これを聴きながらつくづく思う。(山崎)

MOEBIUS & PLANK
Rastakraut Pasta
LP/Sky 039　'79年



タイトルにラスタクラウトとあるぐらいで、レゲエ・リズムを使用したアルバムである。冗談の様だが本当だ。ゲストとしてホルガー・シューカイがベースを弾いているが、このメンツで当然ファンキーな訳はなく、揺れるレゲエのトリップ感だけを借用した大脱力作である。B①ではヴォコーダー変調の歌？も入るが完全にシンセ音と同化してしまっている。リズムの効用で大変にリラックス出来る一枚。同時期にパンク/ニューウェーヴ勢がレゲエの攻撃性を取り入れたが、酩酊感覚の方に注目した彼らは筋金入りのラリ公かもしれないな。ラストの曲では最後に残った音楽要素の『リズム』までが排除され、音がただ浮遊するだけになる。多分楽しいレコーディングだったに違いない。一服どうですか？　（中野）

MOEBIUS & PLANK
Material
LP/Sky 067　'81年



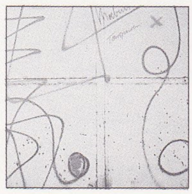
意外にもノイのようなリズムを刻むギターで始まる共演二弾。もちろんアシッド・シンセ音もパンして行くのだが、ドタバタしたドラムも入っている。この程度のギターはプロでなくとも弾けるし、クレジットも『ALL MUSIC BY～』で誰が何の楽器を弾いたかなんて解らないが、試しにやってみただけだろう。他の曲も、今回筆者は紹介として説明するためゴタクを並べているが、深い意味合いは無い。本来彼らの音楽は35分のオルゴールのようなものだ。アルバム・タイトルはそのものズバリで、かれら自身この音楽はそれ以上でも以下でもないことを自覚している。このアルバムは曲毎に違った方法により色々な音が飛び交う。2500円のオルゴールは安物だけど、このレコードはとても面白く鳴ってくれる。　（中野）

MOEBIUS & BEERBOHM
Strange Music
LP/Sky 071　'81年



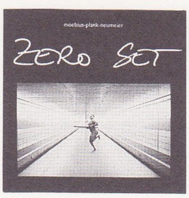
モロのタイトルだな。これ以上の説明は要るまい。すべての音をサウンド・エフェクトとして使用し構成している。彼らの使用する機材等は'81年当時としてはシンプル極まりないものなのだが、同時期に活動していたシンセを使用していたあまたのグループの音楽が現在では陳腐に聞こえてしまうのに対し、この音楽はいささかも古びること無い。ここに収録されているのは電子変調されたシンセ音ではなく、逸脱したメビウスの感覚なのだから。彼の卓越した音感覚に触れていると我々の音楽に対する概念がいかに拘束されたものであるかがよく解る。面白い音が出れば平気で生ドラマでもギターでも使用しているのだが、B②ほど奇妙なサックスは聞いたことがない。　（中野）

DIETER MOEBIUS
Tonspuren
LP /Sky 083　'83年
CD/Sky CD 3083



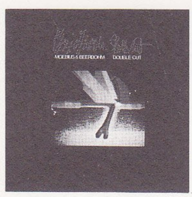
薄い水色の壁にスプレーされたフリーハンドながら幾可学的な線。いつもながらメビウス自信のデザインによるジャケットが内容を端的に表現している。タイトルはもちろん『音のスプレー』の意味。曲といえる節回しは皆無で音数も極端に少ない。性急な変化、盛り上がりは全く無く、一曲の間の質感は均等である。３～４分の曲が多いが別に倍の長さでも全く関係ない音楽である。妙な感触の電子音はそれぞれの周期で繰り返される。メッセージとか思い込み、思想などとは全く無縁の領域の音響作品。早すぎたトランス・アンビエント・ハウスと言える。奇妙な音色を発する事だけがとりえのメビウスの面目躍如。現代こそ再評価されるべきアーティストだ。全作品のCD化を切に希望する。　（中野）

MOEBIUS. PLANK. NEUMEIER
Zero Set
LP /Sky 085　'82年
CD/Sky CD 3085



メビウスのアシッド・シンセ＋シーケンサー、エンジニア、コニープランクの音像操作、グルグルの魔人マニ・ノイマイヤー！　このメンツはハモニアでもローデリウスを加えて作品を発表しているが、もともと歌やサビなどという概念の無い連中なのに加え、本作品ではメロディ奏者不在の構成が極めて異質の音楽を生み出した。ステップのきついシーケンサーがフィルターで音色変化して行き、抜群の浮遊感でSE、シンセがパンする。さらに大ノリでドタバタと騒ぐドラムが、機械音リズムに幻覚的な揺れを作り出すのだ。一連の関連作品中、特異な内容だがハデな作品なだけに分かり易いと思う。現代テクノを軽く10年先取りしたどころか、それらなど足元にも及ばない傑作である。こいつはキクぞ！　（中野）

MOEBIUS & BEERBOHM
Double Cut
LP /Sky 091　'83年
CD/Sky CD 3091

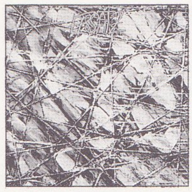


共演者については全く情報が無いのでメビウスのみの作品として評価させてもらう。ギター＆又はベースのエフェクトされた音が入っているので多分ギタリストなのかも知れない。もちろんそれも一音源としてしか使用しれていないし、フレーズと言える物はほぼ入っていない。無機質なのは従来の作品と変わらないが、それにしても曲と言う物が無いぞ。リズムキープ一音色であとは効果シンセ音のみ。これが絶対に盛り上がったりしない。時に低音は可聞範囲を越えて低くなり、幕のはったようなくぐもった振動となる。彼はこういった明確な輪郭を持たない音色を作るのが実にうまい。21分にわたる『ドッペルシュニット』の『正確なただたどしいリズム』が実に気持ち悪くて良い。　（中野）



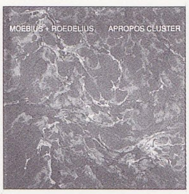
DIETER MOEBIUS
Blue Moon
LP/Sky 109 '86年

同名映画のサントラ。映画は未見なんでストーリーは解らないが、ジャケのスチール写真を見ると、アクション・ドラマ（！）のようだ。音楽の方は従来の作品と何ら変わる所が無く、こころなしかリズムのある曲が多い位か、しいてアルバムの特徴を挙げると曲数が多いだけである。こう書くと凡作のようだがもはや彼には明確な音楽性の変化があり得ないだけで、各曲は意表をつくユーモラスな音遊びに溢れており、サントラだからといってメロディなどカケラも入っていない。この音楽の特性は聞き込むことでは無いんで、感想文を書いても意味が無いのだが、意図なくからむシンセ音は気持ちが良い。しかし無機質なことこの上もないこの音楽、ドラマになんて使い用がないと思うのだが。（中野）



MOEBIUS & RENZIEHAUSEN
Ersatz
LP/Pinpoint 08581 '90年

メビウスのリーダー作にはハズレは無い。前例のない音楽だが、彼らの諸作品にはアヴァンギャルドに良く見受けられる対象への攻撃や、理論だった堅苦しさはみじんも無い。本作もメロディ皆無で曲の時間だけ、へんな音がオルゴールのように繰り返すだけなのだが、つまりこの間彼らの逸脱した感覚に酔えるという事である。感情に訴える事をしない、類い希な作風。例によって共演者は全く謎の人物。多分職業としてのミュージシャンではないかもしれない。この手の音楽の場合には既製の知識はかえって邪魔になるはずである。変調するシーケンスに乗るゆったりとしたエレクトロニクス音響、音色ひとつひとつを遊ばせる、これは音楽による感覚マッサージである。（中野）



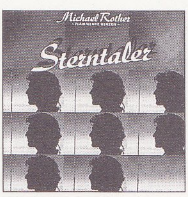
MOEBIUS＋ROEDELIUS
Apropos Cluster
CD/Curious CURIO 1 '90年

「Curisum」から９年ぶりの共作。タイトルは『時には/ついでに～』ぐらいの意味で、あくまで単発の再結成らしい。ここで聞かれるローデリウスの音は、残念ながら近年の諸作品同様大幅に叙情に流されたものだが、メビウスの発信する電子音が乗る事によって大きな付加価値を与えられ、クラスターの作品として成立している。こう書くと水準ギリギリの凡作に聞こえてしまうが、彼らの音感覚に不慣れな方には良い入門編といえる。つまり全てが未知の音響でない分、とっつき易い作品と言える。大体彼らのような存在が現役であること自体に感謝すべきだろう。まあ、カタイことはいわず、ただステレオで流しておけばよいのだ。きっと奇妙な感じを受けるだろう。それがクラスターの本質である。（中野）



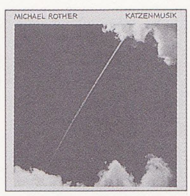
MICHAEL ROTHER
Flammende Herzen
LP /Sky 007 '76年
CD/SPV CD084-26102

かつてノイと並行しハルモニアに在籍していたギタリスト、ミヒャエル・ローターは現在スカイ・レーベル他でソロ制作を行っており同傾向のアルバムを多数発売している。これはその初作である。ここに聴かれるギター、シンセサイザーを中心とした透明感あるエレクトロニクス系サウンドはカンのヤキ・リーベツァイト（ドラム）の参加により軽快な味付けもされているものの音を詰め込み過ぎることなくリラックスした流れのある音作りが成されており、ハルモアの2ndを継承しつつよりメロディアスに仕上っている。彼の使用楽器はG、El-P、デジタル・ベース、Syn、Org、El-Per。９カ月を費やし彼とドイツ・エレクトロニクス・ミュージックの立役者コニー・プランクのプロデュースの下で録音されている（松本）



MICHAEL ROTHER
Sterntaler
LP /Sky 013 '77年
CD/SPV 084-26122

ノイ、ハルモニアの後のソロ第２作。ハルモニア1stのポップアート的手法に対し、ソロになってからはアートワークからも明らかな様にミニマルアート的手法（ウォーホール以降の）を追求している。ありきたりのダンボールを重ねるように、一見ありふれたメロディーナンバーのレディーメイド品を反復させることで、気付かぬうちに変質させ音の実体化を成し遂げるやり方で、ノイのラディカルな方法論を云わばやんわりと、しかし逆にサブリミナに行ったものとも云える。「ローターはどれも同じ」などと云っていると、アルバムだけでなく作品全てもフラクタル構造になる様に計算されていることを見逃してしまう。この差異の反復がエネルギーを産出して行く、音による、ポップアート化されたコマーシャリズムである。（嶋田）



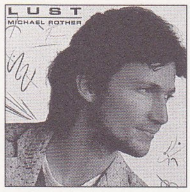
MICHAEL ROTHER
Katzenmusik
LP /Sky 033 '79年
CD/SPV CD 084-26162

今こそ実像がとらえられているCLUSTER、HARMONIAの系譜の中で、ミヒャエル・ローターの音楽は生き生きとしている。ジャケットをじっと見ていると、これがA・DÜÜL系の青ではなくてCLUSTER系の青だという気になってしまう。ローターが青を選べば、まさしく青以外でないこの青以外にはない。澄んでいるというよりも爽快という言葉が近い。このアルバムが３作目に当ろうとあまり関係ない。なぜなら彼の音楽は今も同じだからだ。意味合いなく有るギター音楽、ローターの音楽は何の意味づけもなくペラペラの音そのものだから、今このアルバムを聴いても古くも新しくもない。そのままだ。流しておくと生きてくる種の音楽の典型。「猫音楽」だそうだが、そう言うからにはそうなのだろう。（松本）



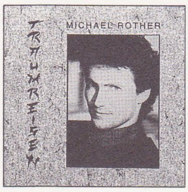
MICHAEL ROTHER
Fernwärme
LP /Sky 013　'81年
CD/SPV CD 084-26152

元NEU、HARMONIAのミヒャエル・ローター４作めの、唯一「熱地帯」と題され国内盤も出たアルバム。今回もヤキ・リーベツァイトがパートナーとして心地好いビートを刻んでいる。嘗て筆者にとって本作は、頭痛や歯痛の緩和剤でもあった。痛みのリズムを音楽のリズムに同化させ沈静させて行ったのである。北村昌士氏の言葉を借りれば「70年代後半に現われたドイツ・ロックの作品の中で最も美しく、充実感にみなぎ」っていた最初の２枚の延長上ながら、沖縄民謡を思わす〝Silberstreif〟、エスニックな響が無機的に流れる〝Klankorper〟は新たな表現への欲求か。ASHRAの「Correlations」同様第三世界を見据えたユートピア・サウンドの工芸品。飛翔するギターはM・オールドフィールドとも共鳴する。　(高山)



MICHAEL ROTHER
Lust
LP /Polydor 815 469-1　'83年
CD/SPV 084-26142 CD

ソロ通算５作目。前作まで名目上はソロでも、実質的にはパーカッションのJaki Liebezeitとの共演であったが、本作は名実ともにひとりで演奏・録音・制作を行ったアルバムである。サンプリング・マシーンなど新しい機器を多用して音を重ねていると思われるが、素直でナチュラルな雰囲気を醸し出していて、以前からの作品と同じ方向性を持っている。ヒット曲の〝Palmengarten〟に始まり〝Pulsar〟に至るまで、優しさにあふれてしっとりとした演奏を、あるいはメロディアスでリズミカルな演奏を聴くことができる。彼の作品には、NEUやHARMONIAの時代から一貫して、誠実で暖かい彼の人間性がにじみ出ているように感じられる。現代人の魂を癒してくれるピュアな音楽である。SPVのCDにはボーナス・トラック入り。(Helmut)



MICHAEL ROTER
Traumrisen
LP /Polydoy 883685　'87年
CD/SPV 084-26132 CD

ノイの特性のうちハデで荒い感覚はほとんどドラマーであるクラウス・ディンガーのものだったようだ。単一ビートはあるものの、ミヒャエル・ローターの音楽は圧倒的に浮遊感に重点をおいて作られている。本来ギタリストという性質上、クラスター・ファミリーの中では最も構成や音色が平凡に近いのだが、これだけ広がりのあるフラットなギターはなかなか弾けるもんではないし、メロデイも良い意味で希薄である。主張やメッセージ等はもちろん全く無いが、聞き手をリラックスさせる効果は抜群で、たまにはこんな音楽に耳を傾けしばしの間、頭を静めるのも良いと思う。　(中野)



MICHAEL ROTHER
Radio
CD/SPV 084-26112　'93年

'93年末、突然リリースされた本作は新曲６曲を含むものの、彼の全作品からセレクトされた21曲入りベストCDである。昨年末からこれを皮切りに全ての作品が新録音のボーナス・トラックを３～４曲ずつ加え、ランダム・レコーズから連続してCD化された。(実は以前ドイツ・ポリドールがほとんどの作品を一度CD化しているのだが、一瞬で廃盤になった)ノイから昇華した均等のビートと、のびやかな彼のギター、シンセによる各曲は一貫して極上のリラックス音楽であることがわかる。新録曲はTRANCE MIXだのCHILL REMIXといった現代的なサブ・クレジットがあるものの、曲自体は従来の作風と何ら変わる事はない。時代が奇妙にシンクロしたとは言え、反復とトランスの音楽は25年間にわたる彼のテーマなのだから。(中野)



NEU!
Neu!
LP/Brain 1004　'71年

同じリズムパターンでのテンポの変化、フェザー、フランジャー(ジェットマシン)とリバーブ(エコー)の切換え、そしてフリークっぽいヴォーカル。こんな好い加減な音がドイツ系New Waveへの影響のみならずPIL、イーノ他にも影響を与えた。とは言ってもイーノ(ビートルズ系)の持ついいかげんさは、初期ドイツロックにあるフリーク向けの好い加減さとは異なり、生温いほどほどにといった所で、曲が作れない、曲に成らないといった凄味は見られない。この好い加減さはジャケット、タイトルにも見られる。「NEU」は日常ドイツ製品のパッケージ等によく見られる、トラフィックコーンが日常アウトバーンで見られる以上に。　(菩提寺)



NEU!
2
LP/Brain 1028　'73年

ツナギ姿のジャーマンロックンローラーのまわしを入れないドラム(後にNewwave、ウルトラヴォックスなどに影響を与える)にも研きがかかり、ドイツ風グループ感強し。名曲superも曲に成っているが侮れない。(シングルは別テイク！)ジャーマンロックンロール的テープ、エフェクト操作、オーバーダブにより音数が増し妙なSEも加わりノイジーさも増す。1stに比べアルバム全体のまとまりが悪い一方で「75」にも通じる比較的まとまりのある曲もみられる名盤。ところでCD再発の予定はどうなったのでしょうか。トニコンも再発されたことだし、ノイやA.ムアーも再発してもらいたいものです。クラフトワークの1st、2ndも。　(菩提寺)



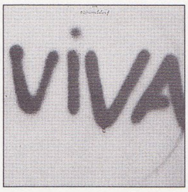
NEU!
Neu 75
LP/Brain 1062 '75年

ノイはクラフトヴェルクと並び、現代のロックの重要な方向を創りあげたバンドである。彼らの残した３枚のLPの内、本作が最も親しみ易い構造を持っているが、これは後のラ・デュッセルドルフにおいて進められる方向性である。彼らが執拗に打ち続けたハンマービートも当時の音楽ファンには冷笑された物だが、ニューウェーヴ現象以後、(まるで70年前半の全てのロックバンドがブルースを下地にした様に）頭打ちのビートはロックに不可欠なものとなった。ファースト・アルバム(72年)から一貫したこのビートはスカイ・レーベル等に受けつがれ、現在でも追従者が多い。ちなみにプロデュースはコニー・プランク。B①などは早すぎたパンクと言った感がある。
（中野）



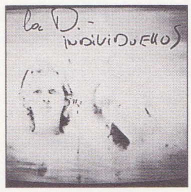
LA DÜSSELDORF
La Düsseldorf
LP/Nova 622550 '76年

NEUのビートをつくり出したクラウス・ディンガーが、ポップスを目指しLA DÜSSELDORFになった。NEUのギタリスト、ミヒャエル・ローターが行った先、HARMONIAの「Deluxe」を延長させたようなドイツ・エレクトロニクス派との合成物。トーマス・ディンガーの傑作「Für Mich」に流れるキーボードも、この辺りの分派になる。LA DÜSSELDORFのポップスは、KRAFTWERKなんかの人工的な臭いのする合成音を使ったドリーム感覚溢れるものだ。ドイツのこの周辺でなければ出てこなかったポップスという気がする。変にベトつかず、だからと言ってハンマー・ビートの冷たさでもないし、テクノでもないが、それらの感触はどこかで通じている。とても夢見な空気が充満しているので聴いてみてほしい。
（松本）



LA DÜSSELDORF
Viva
LP /Teldec 6.23626 AO '79年
CD/Teldec 8.23626

デュッセルドルフがNEUの発展バンドである事は周知の通り。本作はその２枚目の作品である。B面のSKY独得のビートに乗せた、きらめくばかりのナンバーは長年試行錯誤を続けた彼らの一つの頂点であろう。ジャーマンロックのイメージである「暗く重い」をはねのけ、真昼の明るさの中で自己を問うた彼らの音楽は下手な批評など受けつけないほど力強い。彼らの所属したスカイ・レーベルは共通してこのタイプの音作りをしたが、現代においても彼らの影響を受けたバンドは後を絶たない。ドイツを語る時、忘れてはならないのは、英米のロックがニューウェーヴを区切りに世代が変わったのに対し、新旧の交流がさかんであり、基本的な音世界が変っていないと言う事である。
（中野）



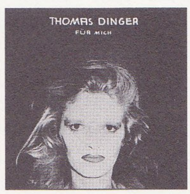
LA DÜSSELDORF
Individuellos
LP/Albion ALB107 '81年

工業都市デュッセルドルフの名を冠したクラウス＆トーマス・ディンガー兄弟のユニットの３枚目。相変わらずのマーチ風あり、ビートナンバーありといった内容だが、トーマス・カラーが強く出ている反面、疾走感や攻撃性は弱まり或る意味で煮つまってしまった感が強い。エレクトロビートを多用し音色のヴァリエーションは増しているが、従来の思い切りの良さがなく、トータル性があるにもかかわらず散漫とした内容になってしまっている。とは云え飛行時代を象徴するかの様な自信に満ちた明るい曲調は、かえってドイツ全体主義を連想させる部分などもあって、それこそインターナショナルではなく地域性、個人性を考慮しないと評価は難しいのかも知れない。ドイツ、イギリスでは大きな影響力をもっていたグループ。
（嶋田）



KLAUS DINGER
Neondian
LP/Teldec 6.26019 '85年

風貌、音楽性とも、ドイツ・ロック異色のパーソナリティーであるクラウス・ディンガーの、ノイでもデュッセルドルフでも、無論クラフトヴェルクでもない個人名義のアルバム。１曲目は行進曲風、テクノありパンク風ありで、パンクファッションにケバいダーティーなアートワークなど、端的に〝イカれてやがる〞。ドイツニューウェーヴのカリスマ的存在なのであろう。音はやはりノイのメンバーであったと一聴してわかるが、ローター程論理的でなく感覚的。音質の開放性や歌詞の外向性、ユーモアなど国籍不明の印象。ハンマービートのストレートさやマーチスタイルにドイツを感じはするが。ポップでダーティー、妙にカッコ良さもあって、デュッセルドルフよりバラエティーに富んでいる。
（嶋田）



THOMAS DINGER
Für Mich
LP/Teldec 6.25126 '82年

ノイの3rdにも参加し、解散後、兄K.ディンガーと共にLA DÜSSELDORFを結成したトーマス・ディンガーのソロアルバム。様々にメイクをほどこしたT.ディンガーの写真が、ジャケットワーク全体を埋めている。音もノイ、デュッセルドルフ系の質をもつが、カリオペっぽい生音楽を使ってみたり、３拍子の曲が多かったりと、一味ちがった雰囲気がある。意識的に異種の曲を並べた感が強い。兄がカリスマ性のあるタイプとするとトーマスの方は器用な才人といったタイプかも知れない。何となくイーノ兄弟を連想してしまった。A面が〝Für Mich〞で終わり、B面は〝Für Ench〞で終っていてコンセプチュアルなアルバムとなっている様だ。曲によって、ハルモニアの「Deluxe」の雰囲気に近いと云えば当っているかな。
（嶋田）

KRAFTWERK

●中野泰博

'68年、クラシックを学んでいたラルフ・ハッターとフローリアン・シュナイダーがケルンのラジオ局の放送した電子音楽を耳にして、その足でラジオ・パーツを買いに走ったのがクラフトワークの始まりらしい。真偽はさておき、彼らはエレクトロニクス音楽に興味を持ち、オーガニゼイション名義から2ndアルバムまで、未知の音源である電子音を模索する作品を作り続けていた。それは楽器音の電子変調であり、コンセプトとしては音楽の抽象化といっていい。注目してほしいのはこれらの初期作品から何ら既製の概念を基盤としていない点である。彼らの音楽は常にメッセージやエモーションによるロック幻想からはかけ離れていた。この乾いた姿勢がロック・フィールドからの評価をニューウェーブと共に沸き起こった『意識革命』の時代まで、正当に為されなかった原因といえる。

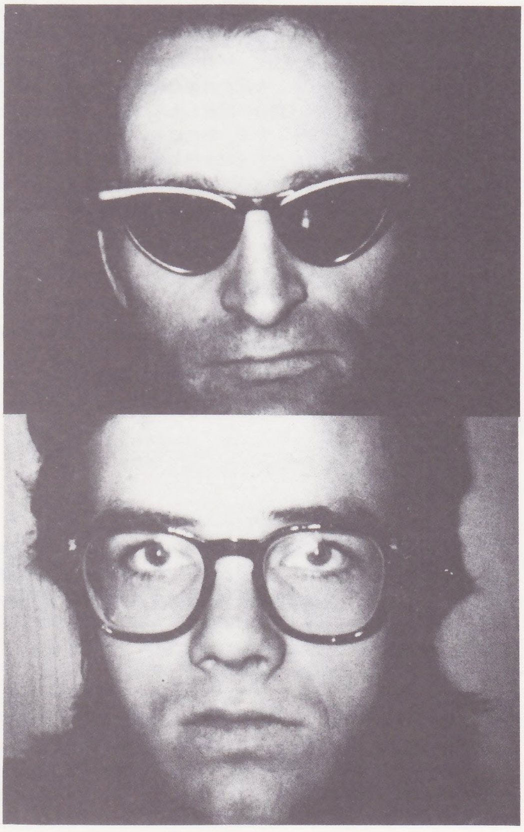
「アウトバーン」の制作された時代、シンセサイザーは実験音楽か、富田/W.CARLOSのようなシミュレーション、キース・エマーソン・タイプの『飛び道具』ぐらいにしか使われていなかった。唯一クラフトワークは電子音の習性に気を使い、その特性に合わせた音楽を作り上げていったのである。すなわち、機械によるリズム、コントロールされたノイズによるコード、定数倍のリフ、最小限の構成等である。彼らのその後の作品が、巷に溢れるシンセ/打ち込み音楽と完全に一線を画すのはこの点である。ポップスをシンセで演奏したのでは無く、電子音楽をカモフラージュするためのポップ性を彼らは使用したのだ。

サード・アルバム、「ラルフ&フローリアン」においてその後の音楽性をほぼ固め、「アウトバーン」以降の作品では自らを律するテーマを各アルバム毎に定め、「ラジオ・アクティビティ」までは多少の人間性が残ってしまったが、「トランス・ヨーロッパ」からは完全に人間的な誤差を排除し、聞く者の感情移入を受け付けない鉄の骨格のみとして成立している。〝モデル〟で恋をうたっても、もはやリスナーに伝えるものなど無い。

彼らと同時期からやはり無機質な電子音楽に取り組んでいたクラスター一派(別項参照)はさらに感覚的・音響絵画的なアプローチをとっており、クラフトワークのような明確な現実との接点はほぼ無い。彼らの音楽はその特質から、ドラマ/感動をもとめる従来のリスナーから理解がなかったが、プログレッシヴとは形式では無く、音楽の可能性の探求心であったはずだ。(この点から筆者は革新的な概念をもたない音楽は認めない。)

その後の'78年前後から沸き起こったニューウェーブはそれまでのロックの概念を一度ゼロにもどす事から始まったが、この時期ニューヨーク・ファンク、テクノポップ・ブームがこぞってクラフトワークの独自の感覚を流用し、彼らの打ち出し続けた電子音が一般の耳に届くようになった。機械音のリズムも新しいビートとしてディスコから火がつき、『オリジナル・テクノ』としての彼らの名前は飛躍的に高まった。(以前に「アウトバーン」のヒットもあったのだが、シリアスにうけとめた人間はいまい)

それまではスタジオでの音楽制作ユニットであり、単発的なライヴしか行っていなかった彼らは、'80年前後に自身のスタジオ『クリング・クラング』の改造を行い、機材の進化により可動式になったスタジオごとコンピューター・ワールド・ツアーを行った。シベリア鉄道経由でこの日本にまで及んだこのステージは一昨年のMIXツアーでも踏襲された構成で、四人がV字形に並列に並び、バックには4面のビデオ・スクリーン、電卓で客に端末機をいじらせ、ラストは演奏を順にオート





ORGANISATION
Tone Float
LP/(U.K.)RCA SF8111　'70年

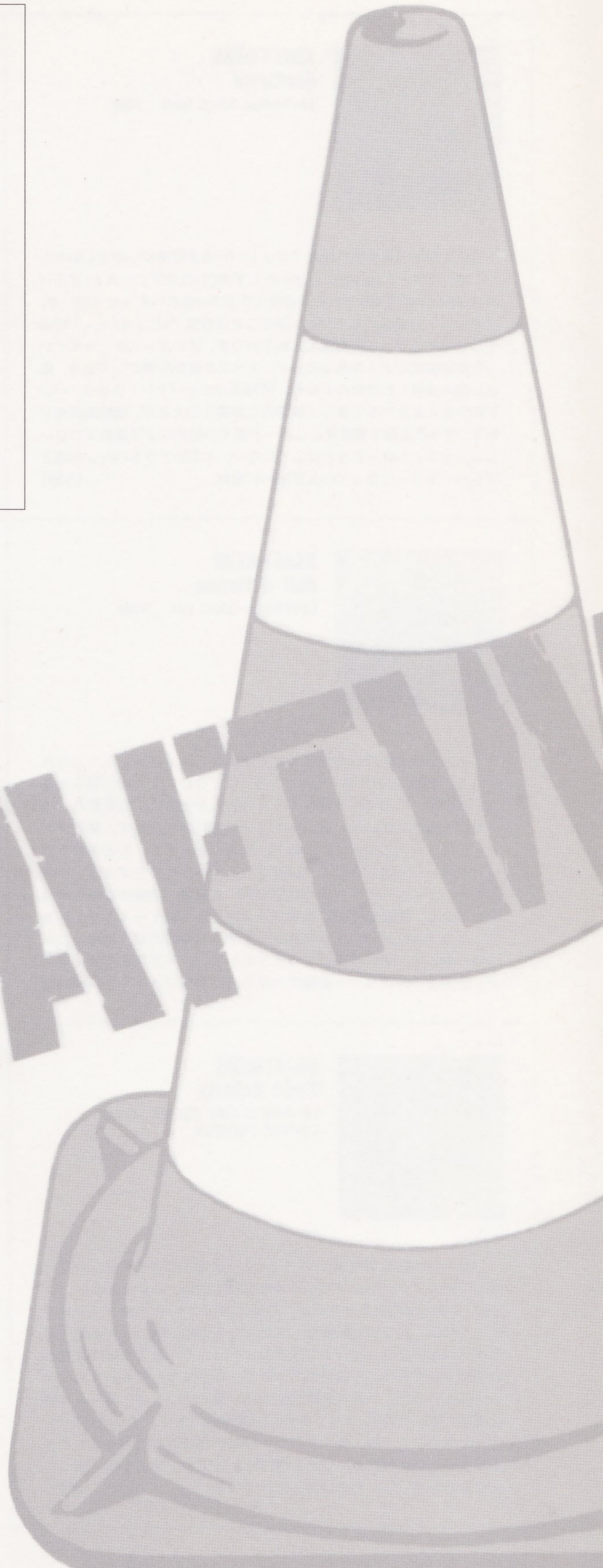
オルガニゼーションはクラフトヴェルクの前身であり、かねがねその名のみ知られていたが、ラルフとフロリアンのクラシックを学ぶ2人が出会って結成されたという事で、実験的なアルバムを作ったと思われていた。メンバー5人でKWよりもリズム楽器を多用してKWの1st・2ndで聴けるオルガンとエレクトリックフルートを主体にしたきわめてロックスピリット溢れる演奏をやっているのに驚かされる。すでにプロデュースにコニー・プランクの名がみられ、後にNEUを結成するクラウス・ディンガーは参加しておらず、KWの1stではバックを務めただけのようだ。KWとなってから次第に音は抽象的・シンプルな方向性をめざし、パーカッション群はエレクトロニクス楽器にとってかわり、「アウトバーン」で飛躍的な変化をとげていく。　（木野）

に切り替え、一人ずつ去って行く、というスタイルだ。

しかしこの後も'80年代は機材の進歩が著しく、なにをやっても半年後には時代遅れになってしまう状態で、彼らも沈黙を余儀なくされた。'83年に予定された『テクノポップ』なるアルバムは先行シングル『ツール・ド・フランス』がリリースされながら発売中止になり、更に3年後ようやく『エレクトリック・カフェ』として日の目を見た。しかしこの作品は音楽の完成度としては全く文句をつける部分は無いのだが、彼らのコンセプト、音楽性がもはや完成し行き詰まりかけている事を感じさせるものだった。

誰もが彼らの役割は終わったと思っていたのだが、それから実に5年のブランクの後発表された最近作「MIX」は傑作だった。これは既発表曲の再録音アルバムなのだが、最新のデジタル技術により過去のマスター・テープから音色が移植されており、まさにヴァージョン・アップといえる内容だったのだ。16ビートを『時代に流された』と取っても、『構成を細分化した』と取ってもかまわないが、おりからのハウス・シーンに奇妙に同調したこのアルバムで、またも彼らは『電子音の分野では孤高の存在』であることを証明した。（個々のアルバムに関する解説はレビュー参照）ただしこの間に15年間不変だったグループ内に亀裂が生じ、エレクトリック・パーカッションの二人（ウルフガング・フルーア、カール・バルトス）が脱退、エンジニアのフリッツ・ヒルパートが参加しているが、もう一人の席は今の所不定らしい。

ロック史上において、ひとつのジャンルの性質すべてを独力で作り上げてしまったという例は彼らだけではなかろうか。それはいまや先鋭音楽の中心を成していると言っていい。ともあれ彼らは現役であり、'94年中には新作を発表の予定である。





KRAFTWERK
Kraftwerk
LP/Philips 6305 058　'70年

ここで聞かれる音楽に現在ではメンバー自身納得がいかないのだろう。ビッグネームな存在にもかかわらず未CD化のファースト・アルバム。収録の四曲はそれぞれ10分前後でPOPSの要素はまったく無いが、当時のシンセ音楽にありがちな重苦しさは皆無である。実はこの時点でシンセサイザーは未だ導入されておらず、オルガン、フルートといった楽器編成による作品なのだが、すべての音色は加工してあり、曲は反復を使用した独自のものだ。同時期のジャーマン・ロック・バンドのカオスと比べると著しく無機的な音楽といえるが、当然生演奏であり、彼らの目指す完成度にはハード面での制約により至れていないしコンセプトもはっきりとはしていない。A①はアウトバーンの頃までレパートリーになっていた初期の代表曲。　(中野)



KRAFTWERK
2
LP/Philips 6305 117　'71年

'71年作。収録の各タイトルは端的に曲のイメージを解説していて、一曲めの『クリング・クラング』(ドイツ語で鉄をたたいた擬音/その後に彼らのスタジオ、プロダクション名になる)は金属音のモアレから規則正しいリズムが繰り返され、テープのスピードを上げてコードチェンジしてゆく。リズムは既にドラム・マシーンを使用しているが、前作同様基本的には生演奏。ただしギターやベースの音色も奏法もロックの常識外である。即興的な部分でも自己主張や緊張感とはまるで無縁な、空間を異質化させる感覚をメインに作られている点に注意されたい。中年のイメージしかないフローリアン・シュナイダーが内ジャケの写真で若者の顔しているのが気持ち悪い。ほんとキチガイだなこいつは。　(中野)



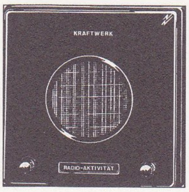
KRAFTWERK
Rolf & Florian
LP/Philips 6305 197　'73年

この3曲目を今の機材でリメイクすると、アンビエント・ハウスになる。未CD化のため『初期の3枚』などとひとまとめに語られる事が多いが、このサードは明らかに方向性が決まり、効果がハッキリと打ち出されている。重いイメージの音が姿を消して、音遊びがぐっとスムーズになっているのだ。アルバム・タイトルどおりサポート・メンバー無しの二人で録音され、前作からのリズムボックスに加え、ヴォコーダー(声の電子変調)も使用、演奏の機械化が始まっている。初回発売分にはサブ・メンバー、エミール・シュルトによるコミックが付いており、実に下手クソなのだが、当時の二人のガールフレンドの写真があったりもして、シリアスさが無くて良い。英国盤のみプリント基盤銀色浮き出しの別ジャケット。(中野)



KRAFTWERK
Autobahn
LP /Philips 6305 231　'74年
CD/EMI 7461532

車の走行のシミュレーションという必要最低限のテーマを基に制作された出世作。明確な機械リズムとリフレイン等、一気に手法を固め始めた。他の曲も『朝の散歩』は小鳥のさえずりや小川のせせらぎのシミュレーション、『コメット・メロディー』は流星の音というタイトル通りの内容である。楽器を演奏するという概念はこの時点ですでに無くなっている。実験音楽では楽しみにくいシンセ音(パルス、パン、刺激音)をぎりぎりの所で音楽にまとめあげた名盤といえるが、現在からするとまだ過渡期の作品である。タイトル・チューンをエディットしたシングルが大ヒットとなり、彼らの名前と存在は世界に知れ渡ったのだが、音楽性そのものの正当な評価をされていたとは言い難い。よーするにゲテモノ扱いだった。　(中野)



KRAFTWERK
Radio Activity
LP /EMI IC 064 82087　'75年
CD/EMI 7461322

いまさらこれをプログレ/ユーロ・ロックとして聴く人間はいないだろうが、テクノポップといえる曲は実に2曲・6分しかない。ラジオ/電波が今回のテーマだが、均等なエレクトロ・パーカッションの入らない、曲として形をなしていないその他の曲における電子音の構成の上手さは、ビートに依存しなかったここまでの音の使用法の研究成果であり、その後のフォロワーが逆立ちしてもかなわなかった最大の原因。一気に歌詞のある曲が増えているが、あくまで情景描写の範囲の内容。タイトル曲は近年MIXでもリメイクされたが、ここでのオリジナル・ヴァージョンは鉄の骨格のみによるストイックなカッコ良さがある。しかし時代はまだ'75年、前例の全く無いこんな音楽を演っていたのは彼らだけである。　(中野)



KRAFTWERK
Trans Europa Express
LP /EMI IC 064 82306　'76年
CD/EMI 7461332

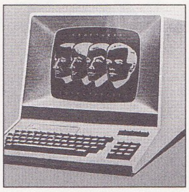
自らのスタイルを徹底して設定し、飛躍的に完成度の増した'77年の作品。規則正しいシンセ・アルペシオに乗せて、重さや暗さの全く無いマシン・ボイスがリフレインして行く。レトロな未来を歌ったバンドは幾つかあるが、彼らは音楽そのものがそう言ったイメージに作られている。一曲内での構成は均等に配分され、いわゆるキメという物が無いまま繰り返されている。『テクノ・ポップ』の誕生である。6チャンネルで録音されたというが、確かにそのくらいの音しか入っていない。ここまで構成要素を減らしてしまうとふつう曲にならないぞ。この作品以降アルバムはもとよりシングルまで独語と英語の二種類発売されるようになる。(さらにこのアルバムはフランス盤のみショールーム・ダミーは仏語。)　(中野)



KRAFTWERK
The Man Machine

LP /(U.K.) Capitol EST 11728　'78年
CD/EMI CDP 7461312

代表作であり完全という言葉の使える数少ない作品。機械による正確なリズム、極端に音数の少ないメロディ、定数倍の繰り返し。お揃いのシックなコスチューム、さらにマネキンのシミュレイトである元祖・テクノ・カット・ヘアー！ここまで彼らは独力で作り上げたのだ。ジャケットワークまで含めあまりに徹底的でポップスを期待する向きには、それすら最小限な内容にとっつきにくさを感じるかもしれない。実験音楽と遠く離れた姿勢同様、彼らはロックからも距離を置いて存在している。ヒット曲『ロボット』にせよシーケンス・パターンは最後まで何の変化も無いし、9分にわたる『ネオンハイツ』の2/3はきらめく電子音のリフレインだけである。そしてそれはその後のハウスの快感原則をも暗示している。　(中野)



KRAFTWERK
Computerworld

LP /(U.K.) EMI 3776　'80年
CD/EMI CDP 7461302

評価が決定的になったにも関わらず、前作から3年のブランクの後に発表された。日々進歩するテクノロジーを導入すべくクリングクラング・スタジオの改造を行って制作されたこのアルバムは、スタイル自体は前作から大きな飛躍は無いものの、トータルに完成しており、全体に余裕の感じられる『遊び心のある』非常に楽しい作品と言える。電卓のシングルは日本語を含む4カ国語でリリースされた。可動式にした電子機材により大規模なツアーが行われ、シベリア鉄道経由で現在まで唯一の来日を果した。ところでこの作品は必ずドイツ盤CDか、オリジナルLPを買うこと。ジャケット、クレジットが蛍光印刷のためで、ネオンのように光るデジタル文字がなければダメだ。そこまでコンセプトなのだから。　(中野)



KRAFTWERK
Tour De France

12″ Single/EMI 165204-6　'83年

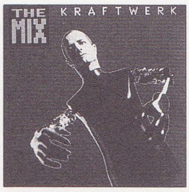
アルバム未収録のシングル曲〝ツールド・フランス〞は本来'83年にリリース予定の『テクノポップ』の先行シングルだった。しかしアルバムの発売は中止され、大半の曲は'86年の『エレクトリック・カフェ』に持ち越された。現在でも公式にはCD化されていない曲だがライヴでは必ず演奏されている。数多くのヴァージョンが存在するが、カール・バルトスのエレクトリック・パーカッションの炸裂するリミックス版はそれまでにないアグレッシヴさでありファン必聞といえる。フランス語が基本テイクで英語版は存在しない。(ノリが悪かったそうだ) ただし例によってドイツ語で歌っている。この前後からラルフは自転車マニアになり、ウルトラ・ハイテク・自転車を何台も所有しているとの事。何とドイツ人的な奴だ。　(中野)



KRAFTWERK
Electric Cafe

LP /EMI IC064 240644　'86年
CD/EMI 7464202

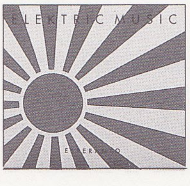
機材のデジタル化のため、'83年に企画されたアルバム『テクノ・ポップ』を先行シングル・ツール・ド・フランスをリリースしながらオクラ入りさせて、'86年まで発売の延びた9作目。〝テレフォン・コール〞(B①ハウスフォーンは12インチでしか聞けないリミックス)、〝ミュージック・ノン・ストップ〞がシングル・カットされ、アメリカのダンス・チャートのトップにもなった。A面に当たる3曲は連続しており、テンポも均一。音色のクリアーさはいつものことだが、難を言うとアルバムを通しての大きなテーマが不在で、彼らの意図しなかった『テクノ・ポップ・ブーム』とデジタル音源に振り回された感がある。それでも当時存在した他のエレポップ・バンドとの差異は大きく、孤高の存在であることに変わりはなかった。(中野)



KRAFTWERK
The Mix

LP /EMI Electrola 164-7 96650-1
'91年
CD/EMI 7966502

選曲はベストだが、すべて'91年に新録されたもの。15年不動だったメンバーが二人去り、エンジニアがメンバーと同等にクレジットされている。旧作のリメイクというと後ろ向きな情けないイメージがあるが、最新の機材はこの機械化されたバンドにとってプラスにしか作用しないのは当然で、このアルバムはまさにヴァージョン・アップといえる。だいたい彼らの単純化された曲は幾らでもエディットが可能で、同じメロディを使用しているだけで、音色、構成が別なのだから新曲といっていい。16ビートに細分化することにより構成は緻密になり、ダイナミズムを増している。熟知した音の抜き差し感覚は絶妙だ。同時代にあまたの打ち込み16ビートが氾濫する中、このアルバムの完成度は比べるべくなく頂点である。あたりまえだ。　(中野)



ELEKTRIC MUSIC
Esperanto

CD/SPV 084-92892　'93年

『The Mix』リリース直前にクラフトワークを脱退したカール・バルトスの新ユニット。5年に一枚しか作品をリリースしない事に不満だったという。もう一人のメンバーは'82年頃ラインゴールドというシンセ・ビートバンドにいた人物。鉄壁の理論のクラフトワークに比べ、あらゆる点で彼らなりにポップを意識した内容である。在籍中にはメロディ・メーカーだったことや、デジタル・リード・シンガー(マシン・ボイス)の所有者だということもあり、クラフトワークの特徴は色濃く残っているものの、圧倒的にハデな音作りである。アルバムと前後して別ヴァージョンのシングルを3種リリース。ライヴには同じく脱退したウルフガング・フラーも加わるという、彼の望んだフットワークの軽い活動を始めている。　(中野)

「ドイツ的」なるもの

●高山直之

「ドイツ人は、あらゆることを難しくしてしまう。自分にとっても誰にとっても」

J・W・V・ゲーテ

「ドイツ人はドイツ人以外の何者でもなく歴史からして、ドイツ人以外のものになろうにも、なりえない」

ゴードン・A・クレイグ

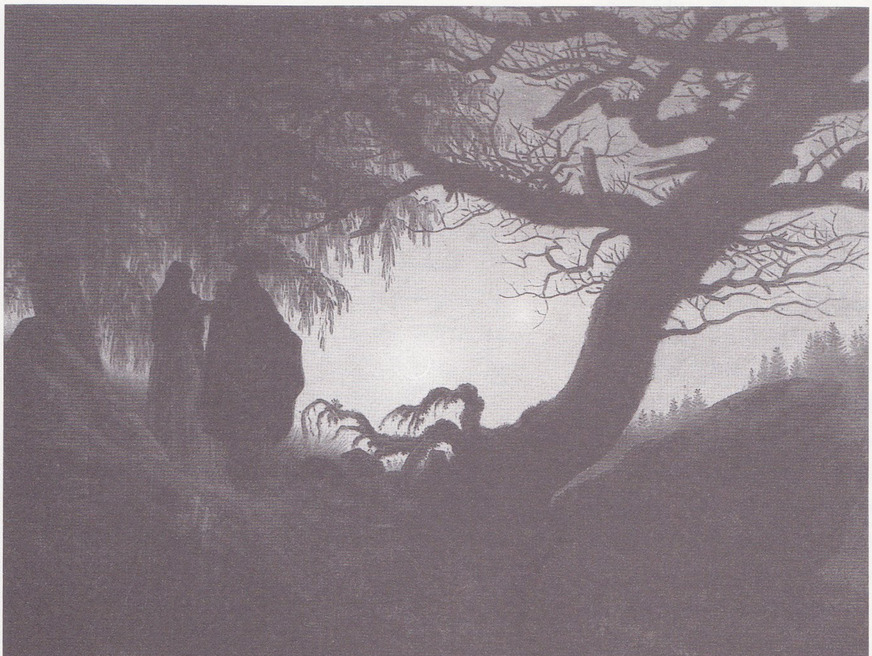
『ドイツ人』(みすず書房)より

我々はよく、物事に対して何国的という言葉を使う。曰く、日本的な風景、イタリア的な情熱、フランス的な味、イギリス的な小説等々。ではその「的」という言葉の真意、例えば「ドイツ的」と用いるときの、予め了解された共通認識、その実体は一体何なのか。普段何気なく口にしているこの〜的なるものへの問いかけこそ、その国の芸術を語る上でひとつの鍵となるものに違いない。風土や歴史に育まれた気質、国民性。いくばくかの偏見、思い込みも含んだイメージの総体。当然、個体から生み出される芸術作品をすべて国で切るのは無理があるし、愚かなことだ。しかし人間が環境の束縛から完全に逃れることも、極く一部の例外を除いてまたあり得ない。本稿ではドイツの風土、歴史の上に成立した嘗ての芸術作品と、'70年代のドイツ・ロック、そして現在のドイツを結ぶ一本の糸たる「ドイツ的」なるものを少しでも辿ろうと思う。今の筆者の興味からすれば些かヘヴィな作業だが、少なからず同国の生み出したものにこれまで接して来た人間の自己確認の意味も込めて。

まず確認しておきたいのは、国家の観念なんてえらくあやふやでいい加減なものだということ。FLOYDの〝A Great Day for Freedom〞ではないが、歴史的にも今日においても、戦争や政治的策略によって〝国境は砂漠の砂の如く変転し〞、ドイツが統一され、ECによるヨーロッパ統合が進んでも、隣国やアイルランドは南北に分かれたままだ。また日本でも単一民族国家だなんて嘘八百がまかり通っている。第二次大戦時のドイツや日本、そして今日でもネオナチや右翼が煽る民族的優劣や愛国心は、意図的に持ち出された幻想に過ぎない。しかし、民族と政治的単位である国家は必ずしも一致しないという事実を踏まえて尚、目に見えない「何か」が、少なくとも相応の歴史と安定性を持った国にはある。ではドイツのそれはいつ頃形成されたのか。一つはルターによる言語の整理だろう(ハイネによるとルターは最もドイツ人的なドイツ人、つまり神秘家にして実際家、狭量で厳格な学者であると同時に、星を愛で音楽演奏を好んだという)。形式よりも精神性を重んじ、内面に沈潜する傾向の強い彼の新教からしてドイツ的だが、ドイツ語による聖書の製作が齎したものは想像以上に大きいのだ。しかし政治的な意味で、ドイツが単一政府による一つの国家となったのは、16世紀の宗教改革から更に後の、ビスマルクを擁した19世紀後半である。その間ドイツは1618年に起った30年戦争で傷付き、小諸邦に分かれて来た。今日でもドイツはMARQUEE46号で松本氏も書かれているように、中央集権を持たない、地方分権色の強い国である。その一方で、ドイツ芸術の歴史は奥深い。文学では中世、〝ニーベルンゲンの歌〞(1200年頃)に代表される民族叙事詩、宮廷文学・騎士物語ではエシェンバッハ「パルツィファル」、恋愛叙情詩(ミンネザング)が花開き、15〜16世紀には印刷術の普及によって民衆本が流布(ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯、麗しのメルジーナ、ファウスト博士等々)し、靴匠ハンス・ザックスのように名を成す詩人も現れる。そして17世紀のバロック小説と、18世紀の〝シュトルム・ウント・ドランク〞、ゲーテやシラーの登場以前も、全くの空白だった訳ではなく、後の素地すら見出せる。ゲーテに代表される古典主義以降の、ロマン主義、自然主義、表現主義……というドイツ文学の流れと豊かさについては詳述しないが、古典主義とロマン主義の対立については触れておきたい。もとよりこの2者には相互の影響関係もあるのだが、敢えて図式化するなら古典主義=形式、南方への憧憬。ロマン主義=内面、北方への回帰、ということになろうか。しかしこの2つの方向性と心情は、共にドイツ的心性として、多かれ少なかれ一見この対立する感情が一人の人間に宿っているとさえ言える。このアンビヴァレントな感情もまた「ドイツ的」と指摘することが出来よう。両者の内、とりわけロマン主義は、現代に至る哲学、音楽、美術等様々な領域でその響きを聞くことが出来る。勿論ロック例外ではなく、精神性への耽溺、自国の自然、キリスト教深層下の異教・伝承(メルヒェン)、異界・超越性への志向。そうした心情(ゲミュート)の深み、「内面性(インナーリヒカルト)」こそ、ドイツ的精神の発露であった。神と個人との合一を旨とする神秘主義思想や観念論がドイツで花開いたのは偶然ではない。内面への沈潜はメランコリーと結び付く。ドイツの偉大な画家の一人、アルブレヒト・デューラーの「メランコリアⅠ」は、その謎めいた図像化だ。



●デューラー「メランコリアⅠ」(1514)
芸術家の挫折とも勝利とも、メランコリーの2面性とも解される謎めいた銅版画。



●フリードリヒ
「月を眺める男女」(1824)
ロマン主義精神とその雰囲気の精華。

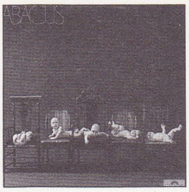
「ドイツ的」なるもの

もう一人、デューラーから約300年下ったドイツ・ロマン派の画家C・D・フリードリヒの風景画に見られる、自然とその向うの神性への敬虔なまなざし、宗教画としての風景画はやはり北方の、ドイツの地でこそ生まれたものだろう。バッハからベートーヴェン、シューベルト、ワグナー、ブラームス、マーラーに至るドイツ音楽の豊かさも周知の通り。トーマス・マンは講演録『ドイツとドイツ人』でこう語っている。「ドイツ人の世界に対する関係は、抽象的にして神秘的、すなわち音楽的」であると。音楽という形を持たないもの。秩序と混沌。先に挙げた大作曲家たちの音楽の持つ精神的な深みとメランコリア。ゲーテやモーツァルトといった幸福な例外を別とすれば、その要素は「ドイツ的」と言われるものを貫いている。だが彼方・不可視への憧憬は、彼岸・死への誘惑ともなり、精神の深遠さの先には、闇の深淵が口を開けているかも知れない。ドイツ精神は明晰さよりも、「もうもうとして、あいまいで、生成中の、朦朧とした、湿っぽい、覆いのかけられたもの、すなわち〝深遠なるもの〟を感じさせるいっさいの不確かで形のない、変わりやすい成長を愛する」と言ったニーチェの言葉を思い出す。だからと言って30年戦争やナチスの悲劇を、ドイツ的精神の病、そのマイナス面の噴出だけに帰すのも早計だとは思う。第二次大戦に関しては日本(人)も同罪なのだし、〝闇〟と〝光〟はすべての人間存在に含まれているのだから。しかしその光の高さ、闇の深さでやはりドイツは際立っているのだろう。そしてナチスの出現は、後のドイツ人の意識に大きな影を落とした。自らハイドであることを知ったジキルのように彼等は自らの中の闇と向き合い、自らと自国を語るとき、批判するにせよ評価するにせよ、それと闘わねばならない。それはロックでも同様に行われていた。ジャーマン・ロックが創出した闇と光、無秩序と典雅な優美さは、明らかに意識的な、自らの出自とその歴史を踏まえてのものだ。自国の文学作品(Faust,Wallenstein)や作家(Novalis, Hölderlin)をグループ名に冠するには、当然それ相応の理解と思い入れがあるに違いない。日本で言えば森鷗外とか真面目に名乗るようなものなのだから。それとドイツ・ロマン派に、イギリス・ロマン派のバイロンやシェリーのような、どこかロック・スター然とした〝スター〟が居なかったように、ジャーマン・ロックの自らロック界のスター・システムと距離を置いていたと思しき姿勢にも注目したい。それは貴族主義とスノビズムが魅力ともなる国と、根が庶民職人のビーダーマイヤーの国との違いもあるのだろうが。またジャーマン・ロックが主に影響を受けたのがクラシック、現代音楽の他に、ロックでは思弁的で、批評的・精神的なPINK FLOYDであり、B.J.H.のようなテクニカルでないシンフォニック・ロックが高い人気を得ていた、というのも象徴的だ。HR/HMにしろプログレッシヴにしろスタイリッシュに洗練された'80年代以降はともかく、'70年代にポジティヴな視点と高度なテクニックを前提とした、つまり生に対しても技巧に対しても肯定的なYESに相当するバンドがドイツには見当たらないのも、ニーチェが言うようなドイツ的なメンタリティ、そして批評性によるものだろうか。古典主義、ロマン主義、自然主義、表現主義という流れも、先行者への批判と否定から繰り返し生まれている。文学や絵画さえも音楽的であろうとする国、道にゴミ一つ落ちていないという潔癖性、そして発展する重工業と「緑の党」にも見られる自然・自国の森への愛着と、アルカイックなものへの憧れ。思弁と情緒。混沌を内包するが故の？堅さ。豊かなイマジネイションと説教臭さの共存するミヒャエル・エンデのファンタジィ。そうしたアンビヴァレンスを内包しつつ、ドイツ的という言葉は、森の深さと呼応する精神性の深みに収斂される。嘗ての故間章氏の紹介や横尾忠則の宗教的なTANGERINE DREAM礼賛は、時代もあっての些か自分に引き寄せた見方だと今では思う。一種生真面目で、例えば米や南欧の能天気(脳ではなくこれが正しい表記)なパワーとは余り縁のないジャーマン・ロックは、自らの深淵を見つめながら、技巧や様式を越えた地平で、やがて余裕を持つに至るが、国際的な衝撃と改革を齎した。森と寒さに培われた内面性、地方分権にも由来する、脱中心化・脱構築。情熱がない、人間味に欠けるという批判もあるが、「我々は人間の熱情のみをドラマと思い勝ちだが、覚めた冷たい熱情もその一種だ」という画家アングルの言葉を覚えておいて欲しい。

ここまで、幾分たどたどしい足どりながらロックを含むドイツ文化の中の「ドイツ的」なるものを跡付けて来た。しかし他者を問うことは自らを問うことでもある。現実と夢想・観念、人間性の闇と光、身体性と精神性、商業性と芸術性等々の葛藤(共に肯定するという実は険しい道もあるが)や、ファシズムへの危険性は我々自身の問題でもあるのだから。この文章も、ドイツのロックや諸芸術も結果としてではなく、契機として受け止めて頂ければ、と思う。

VARIOUS ARTISTS

ABACUS
Abacus
LP/Polydor 2371 225 '71年



初期のまだ幾らかおとなしい頃のヒプノシスをキーフに結婚させたようなカヴァー・デザインが中々のセンスだと思う。音の方も'71年ということを思えば、吹っきれのなさともたつきも少なく、1曲目9分半等でのハモンド・オルガンのトーンを生かしながらの曲の組立ての面白さもあって、ブルース系ロックの鈍さ半分、シンフォニック・ロックの萌芽有り、と中々のデビュー作だろう。オルガン・ロックの迫力は薄味だが、その分、リズム・チェンジの激しさと絡んで、AMOS KEYやFRUMPYと同じラインに置いてもいいかもしれない。クラシカルなフレーズが見え隠れするのもこの時代ならマニアックな対象ともなるはず。FAITHFUL BREATHのデビュー作程度には好まれる内容だと思う。（松本）

ACHIM REICHEL & MACHINES
Die Grune Reise-The Green Journey
LP/Polydor 2371 128 '71年



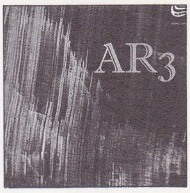
アルバム・タイトルと同名の映画を想定して制作された、サウンド・トラック作品。作曲から演奏まで、Achim Reichelひとりでこなしている。彼らの作品に共通する特徴として、ミニマル音楽の概念が盛り込まれている点があげられるが、そのスタイルはこの作品ですでに確立されている。短いフレーズが少しずつタイミングをずらせて次々に出てくる様は、水面上を波紋が順々に進んでゆくようなイメージを与える。耳をすませば不思議な世界へ導いてくれる、瞑想音楽としての要素も持ち合わせている。彼のヴォーカルにはグラム・ロックの影響を感じさせる部分や少しコミカルなところがあって、演奏による表現力と併せて聞き手を飽きさせない魅力がある。（Helmut）

ACHIM REICHEL & MACHINES
Echo
LP/Polydor 2633 003 '72年



ドイツ・ロックの中で重要作を多く発表していながらあまり話題にならないアキム・ライヒェルだが、'76年以降のどうでもいいアルバムばかりCD化されていては仕方ないかも知れない。しかし、ギター1本でメディティショナルで革新的な音楽を創っていた当時のライヒェルは、天才エンジニア、コニー・プランクの力を得て、この頃の〝最も進んだ〟ミュージシャンであったと云える。植物の成育のように増殖するフレーズ、時にアモン・デュールのアルバムを思い出させるパーカッションや幻覚のように現れるオーケストラの音など、生命感とマシーンの力を信じるライヒェルの哲学的とも云える信念を垣間見ることができる。'72年ハンブルクで録音された意欲作。多くの実験が成され結実した時代の、その中でも聴き応えある実験作。（嶋田）

ACHIM REICHEL
III
LP/Zebra 2949 006 '73年



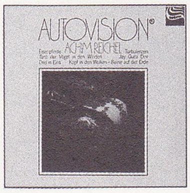
2枚組大作に続くサードは様々なタイプの作品集といった感の内容だが、ディレイマシーンを使った反復という手法は随所に使われている。基本的にはブルースや少しブラック・ミュージックの要素のあるロックだが、テリー・ライリーなどのミニマル・ミュージックの影響であろうか、シタールなどの東洋指向も相俟って、当時のカウンターカルチャーの中で形成された反復のもつ陶酔効果を主としたトリップ＝サイケデリックミュージックとなっている。B①のヴォーカルナンバーなど、どこまで本気でやっているのかわからないが、後のポップ路線への萌芽ともいえるもの。ドラッグのもたらす精神の開放やユートピアの実現といった、当時はまだ真面目に語られていた夢を信じている、そんな明るさが支配している。（嶋田）

ACHIM REICHEL
IV
LP/Zebra 2949 008 '73年

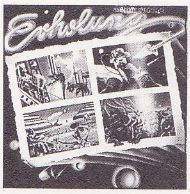


ARの中で最も構成力のある大作。ジャケットワークもシュールで美しい。ARの音は不思議な浮遊感をもって聴き手を包み込んでゆく。アシュラのM.ゴッチングの6枚目の手法を先取りした反復する折重なるフレーズの襞状の波。中期以降のポップス路線の為に評価が低いが、この頃のライヒェルはコズミック系やミュンヘン一派（アモン・デュール、ポポル・ヴ等）にも匹敵する独創性をもっていたと思う。自然音や民族楽器の使い方もポポル・ヴの初期と共通の感性を感じる。S.ライヒ程の理論的構築性はないが、短いフレーズがあたかも自生的に変化し、そのうえに瞑想的な声や管楽器が重なってゆくパターンは、かなり初期にミニマル・ミュージックとロックの融合を成し遂げていた証左となり得ている。AR版「Future Days」である。（嶋田）

ACHIM REICHEL
Autovision AR5
LP/Zebra 2949 016 '74年



ソロ名義になっての3作目（通算で5作目）。毎回多数のゲストを招いてアルバムを制作するので、けっこう賑やかな内容に仕上がっている。いつものReichelのエコー・ギターを中心に、サックスやクラリネットといった管楽器、オルガンやピアノ、パーカッションなどが重ねられている。また本作には新たにメロトロンが使われており、B②などではたおやかな雰囲気を盛り上げるために活躍している。テンポがやや早い曲もあればゆっくりとしたものもあり、リフレインによる瞑想的な曲の展開は相変わらずといったところ。本作を最後に、シマウマ模様の内袋でおなじみの当レーベルから離れることとなる。（Helmut）



ACHIM REICHEL
Erholung
LP/Brain 1068　'75年

Brain移籍してのアルバム、〝休暇〞と題されたこのアルバムは、75年の惑星旅行の印象から生まれたアンソロジーで、極色彩の沼のほとりで恐竜に乗ったり、宇宙遊泳をしたりといったイラストが描かれている。それ迄のライヒェルのアイディアや手法が端正にまとまりを見せた内容で、彼の独特の浮遊する様な幻想的音響、生命感溢れるポリリズム、シュールな具体音の使用等、取り合えずライヒェルを聴いてみようという人には推められるアルバム。しかしこの後ライヒェルはポップス路線となり再びこの作品までの方向性に戻ることはなかった。北ドイツ的風土からだろうか、彼の音楽には冷徹な構築性と同時に南国的な生命感や色彩への憧れといったものが感じられる。夢の中の風景のようなロマンティズムもある。(嶋田)



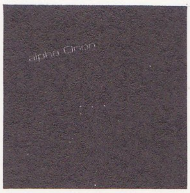
ALBERT MANGELSDORFF
Trombirds
LP/MPS 21 21654-3　'73年

28年生まれというから、ショーフやブレッツマン、シュリッペンバッハ達よりほぼ10歳年長である。50年代にクール・ジャズから始め(ドイツ最初のモダン・ジャズ・グループのメンバーだった)、ニュー・ジャズの動向に触れながら自らの語法を拡大しつつ、やがてＦＭＰのミュージシャンとの交流(例えばブレッツマン・トリオとの共演やグローヴ・ユニティ・オーケストラへの参加)に至った彼は、だがやはり内省的な寡黙さを手放そうとはしない。音楽の全体を視野に置き、演奏は慎重に音を選びながら進められる。ここで聴くことのできるトロンボーン・ソロは、数々の特殊奏法を駆使しながらも、ゆるゆると語り聞かせるようなソロと反復の多様な重ね合わせを基盤とした、抑制の効いた構成的なものである。(福島)



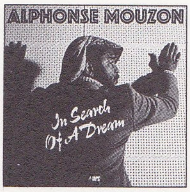
ALEXANDER VON SCHLIPPENBACH
Globe Unity
LP/MPS SB15109　'67年

ヨーロッパ・フリー・ミュージックのメルクマール。'38年ベルリン生まれのピアニスト、アレクサンダー・フォン・シュリッペンバッハはギュンター・ハンペル(sax、fl)やマンフレート・ショーフ(tp)のもとでフリー・ジャズを学び、本作によってヨーロッパ・フリーの枢軸を築き上げた。ここに参加したのはドイツを中心に活躍するＭ・ショーフ、Ｐ・ブレッツマン、Ｇ・デュデック、Ｇ・ハンペル、Ｗ・ブロイカー、Ｐ・コヴァルト等の錚々たる面々で、その中にはCANで活躍することになるヤッキ・リーベツァイトやGURU GURUを結成するマニ・ノイマイアーの名前もあった。これがGLOBE UNITY ORCHESTRAとなり、大いなる１時代を牽引。明快なコンセプトを持った痛快な彼らのステージは'80年に日本でも目撃できた。(坂本)



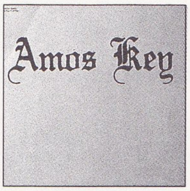
ALPHA ORION
Alpha Orion
LP/Glashouse 000 684　'84年

クレジットは無いに等しい状況なので、メンバー等に関することは一切わからない。オリオン座のアルファ星への旅をテーマとした架空の物語を音(楽)で表現したものと推測される。Ａ面はタイトル曲の〝Alpha Orion〞のみで、エフェクタ処理したドラム(またはシンセ・ドラム)の腹に響くような重低音の繰り返しを背景に、シンセによるビートが音色を変えながら少しずつ展開されてゆく内容である。Ｂ面は３曲から成り、何れも低音域で繰り返されるリズム・パターンが基本で、シンセがリズムを短く刻み、その上にヴォイスが重なったりする。全般的に非常にシンプルな構成と演奏で、冷徹かつ人工的な効果をねらったものと思われる。(Helmut)



ALPHONSE MOUZON
In Search Of A Dream
LP/MPS　'78年

アメリカ出身。ウェザーリポートの初代ドラマーでラリー・コリエルとも交流が深い。その関係でかヨアヒム・キューン、アルバート・マンゲスドルフ、フィリップ・カテリーン、ロルフ・キューン等と'70年代後半良く絡んでいた。本作では前記カテリーンやＪ・キューンの他Ｍ・ヴィトウスやＳ・ゴールドバーグ(元マハヴィシュヌ・オーケストラ)等を迎え、本来のファンク・フュージョン色は抑え目にヨーロッパ系のジャズ・ロックに接近した一枚。本人のあたりかまわず叩き回るドラムを軸にヨーロッパ系のメンバーが好ソロを披露しており特にＡ④でのヴィトウスのアルコ弾きは超絶的。又、カテリーンもシャープなフレーズを良くキメており彼のセッションの中でも上位のプレイだろう。(中西)



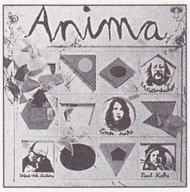
AMOS KEY
First Key
LP/Spiegelei 26 413 U　'73年

E.L.P.に触発されて結成されたバンドは世界中いたるところにあるがアモス・キイもそんなバンドの１つである。ドイツでE.L.P.に触発されたバンドというと他にトリアンヴィラートやトリトナス、S.F.F.等がある。これらの中で商業的に成功したのはトリアンヴィラートくらいのもので、トリトナスにしろこのアモス・キイにしろほとんど話題にすらならずに消えていったバンドである。あまり緊張感のないサウンドがわざわいしてかアモス・キイはコレクターの間でもあまりいい評判を得られていないようであるが、ドイツ・シーンの中では中級程度には十分評価できる作品「ファースト・キイ」を唯一の遺産として今に伝えている。(山崎)



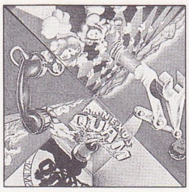
ANDROMEDA
Andromeda
LP/Vogue LDVS 17 205　'70年

このジャケでイギリスのANDROMEDAだったら誰もが怒っただろう、こちらはPeter Schild (kbd) とGünther Steinborn (ds) のデュオ、そしてエンジニアにコニー・プランク、というれっきとしたドイツ物。ちなみに表ジャケのノリは内ジャケへ通じ、またもふざけている。星も三つ出ていることだし、内容に多くを期待されても困りものだが、意外と聴ける。'70年ということでノリは'60年代の延長。その割には切れは良く曲変化はクラシカル・ロック／ジャズ寄りのNICE型。ゲストにg、bが加わると思っきり古臭くなる。スカスカしたハモンド・オルガンが駈け巡るがもう一歩ハード・ロックには至らず、'60年代エリアのポップ色にひきとめられる。でも古き良き味が至る所にある。当時のイギリスを向いた音。　(松本)



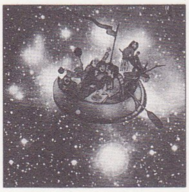
ANIMA
Anima
LP/Pilz 20 29097-2　'72年

Limpe FuchsとPaul Fuchsは'80年代に入っても活動し、ANIMA名義のアルバムやリンペのソロが出ている。もっぱらフリー・ミュージック、コンクレート・ミュージック等のサイドにいる。このアルバムは４人編成での録音で、ピアノはクラシック界で著名なフリードリヒ・グルダだったりする。グルダは純正クラシック以外の例えばジャズ／現代音楽フィールドでもユニークな活動をしているようだ。A面はスタジオ録音、B面がライヴ録音。全編フリー・ミュージックなのは当り前。リンペのフリー・ヴォイス、グルダのピアノ、パウルのホーン等が絡み合っては引いていく。同じ頃、Ohrからのアルバム外に、「It's Up To You」「(Alter Pfarrhof Produktion)」等のプライベート・プレスがあり超幻になっている。　(松本)



ANNEXUS QUAM
Osmose
LP/Ohr OMM 56007　'70年

彼等が'70年７月、大阪の万博で来日し東京、富山、金沢でもライヴを行った話は有名だが、未だ観たと言う人に出会ったことがない。裏ジャケに明記されてはいるが、実に意表を突く来日公演である。つまりドイツ・ロック初の来日バンドは、このANNEXUS QUAMだった。２作目同様にフリー・ジャズ／ロックの範疇にあるサウンド。こちらの方が未消化な感触ゆえにロック色も残っている。フロイドの〝神秘〟や〝太陽讃歌〟中間部のノリでフリー・ジャズに走ったようなサウンドと言えば近いか。それでもB面はリズムが刻まれるので比較的とっつきやすいだろう。全４曲ともタイトルはなく、曲も流しているだけのような山も谷もないものだ。当時の日本で言えばタジ・マハール旅行団あたりに近いか。　(松本)



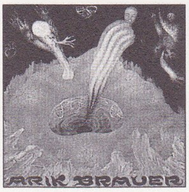
ANNEXUS QUAM
Beziehungen
LP /Ohr OMM 556 028　'72年
CD/(Fr.)MSI Spalax 14811

70年前後、英・米の模倣音楽から意識的に脱却すべく様々な実験的試行が当時のアンダーグラウンド・シーンを形成、拡大していったが、その大半がドラッグに触発されたメディテイション・ミュージックや自己の感性に埋没した観念的な音楽であった。しかし意識的であったが故に体系判断に基づけばドイツ人の音の嗜好、強いては気質を顕著に表わすのもこの時期の作品群である。彼等の1st「オスモゼ」に続くこの終作もその典型作であり暗い音色のサックス、フリー・スタイルのギター、ベース、フルート、パーカッション等によるフリー・ジャズ色濃厚なサウンドを有している。また緊迫感の薄い取り留めのない演奏は全体にうっすらと浮遊感を伴っておりメディテイション・ミュージックのようにも響く。　(松本)



ARDO DOMBEC
Ardo Dombec
LP/Pilz 20 21095-2　'71年

ドイツにはよくあるタイプのブラス・ロック、その多くの中の一つ。曲はどれもオーソドクス。リズムはどことなくビート・サウンドの名残も感じさせる。ヴォーカルを除けば、たいていはサックスかハーモニカがソロをとる。そんなこともあって、ピルツ・レーベルの中では昔から人気の低かったアルバムだった。音の傾向からすれば、ピルツというよりもベラフォン・レーベルにありそうなものだ。そう思うと、ジャケットの趣味の悪さも通じるように思えてくる。確かに聴かせ所、つかみ所の少ないアルバムという気がする。４人編成。これが唯一のアルバム。　(松本)



ARIK BRAUER (Austria)
Arik Brauer
LP/Polydor 2371 224　'71年

エリッヒ・ブラウアーはウィーン幻想派の画家である。この一派の画家としてはハウズナー、フックス、フッター、レームデン、ブラウアー等がいるが、それらの中でもブラウアーは直線のない夢幻的な色彩を持ち、すべての生物がアメーバのごとくにメタモルフォーズされてしまうという特異な感覚を持っている。ブラウアーは画家である傍、放浪癖が強く、フォーク・シンガーとしてスペイン・ギリシャ、アフリカ、イスラエル等へと旅を続け、その期間に創られた曲をこのレコードとして発売したものと思われる。内容的にはフォルクローレ的な色彩が強く、しかも意外な程に明るいもので、彼の描く絵とは対照的な感じさえするものである。彼は他にも２枚程LPをリリースしている。　(山崎)



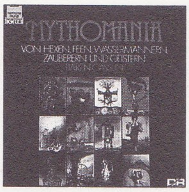
ARNO CLAUSS
An Tante Gertie In Zons Am Rhein
LP/Ohr OMM 556.030 '72年

イギリスのコレクターズ・アイテムの中軸・基本と言えばVertigoだが、その中で最も異色と言えばジミー・キャンベルだったと思う。これをドイツにそのまま置き替えると、Ohrのこのアルバムになる。日本でジャーマン・ロック物がコレクターズ・アイテムと化した15年前から、このアルバムだけは群を抜いて人気がなかった。ある意味で本気のコレクターか否かの踏み絵の役割を果たしていた感がある。内容はフォーク物。少しカントリー&ウエスタン・タッチだが、曲によってはオーソドックスだ。こっぴどく言われる程でもない。アルノ・クラウスは'74年にも「Live In Der Fabrik, Humburg」(Jupiter 88 127 IU) を出している。（松本）



ATTEMPT TO RESTORE
Alpha Collection 1
CD/CMV 08-5590

'93年のリリース。サイケ・リヴァイヴァルと言うには本格的な垂れ流し状態。g、b、dsのトリオ編成が中心で、かつてのASH RA TEMPELやAMON DÜÜL IIの垂れ流しを汲む内容になっている。'93年にしては随分と型がなく、雰囲気で流す。演奏の器用さはほとんどなく、冗長で散漫だが、そのニュアンスがまさしく'70年代前半のそれに似ていて、不思議でもある。例によってエコーがきいていて効果音のかぶせもある。そしてキーボードやサンプリング・コーラスも加えられている。けだるい雰囲気が充満しており、しかも全曲は3曲。変にロックっぽくないところを見ると、このけだるい流れがサウンド・コンセプトなのかもしれない。'90年代のアルバムには思えない内容だ。（松本）



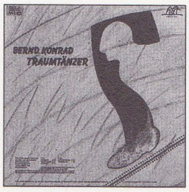
BAREN GASSLIN
Mythomania
LP /Harmonia Mundi 99948 '83年
CD/テイチク KUX-3248-H

ジャンル違いとの指摘があるかも知れない。しかし内容がとても素晴らしく、ドイツという土地に住むの人々の心の源流を伝える重要な作品だと思うので紹介しておきたい。ドイツの中世音楽を深く探求する4人のメンバーの作品で、ゲルマン民族の伝承音楽として欧州に広く残っている楽曲を、伝統的な楽器を用いて演奏し唄ったもの。歌詞の物語も示唆に富んでいて興味深い。A②の〝Zwei Schwestern〞(Cruel Sister)は、英国のPENTANGLEなどもとりあげているので、聞き比べてみるのも面白かろう。演奏も唄も一流のものであり、彼らのレベルの高さを認めないわけにはいかない。録音もずばぬけて素晴らしく、ピタリと音が定位し、奥行き感もしっかりとした名盤である。（Helmut）



BBFC (Switzerland)
Souvenir D'Italie
LP/Plainisphare PL 1267-19 '85年

ジャン－フランソワ・ボヴァール(brass)、ダニエル・ブールカン(reeds)、レオン・フランチオリ(b、key)、オリヴィエ・クレル(dr、perc)の巨漢4人から成るBBFCは、その体軀通りに骨太のサウンドと肉厚なオーケストレーションを聴かせる、むしろイタリア的とも言うべき大柄なユーモアと開放的なパワーを持った注目すべきグループである。彼らの演奏は言わばロングショットの「長回し」を多用した持続的な強度に満ちており、固定キャメラの前で、ヨーロッパの伝統が周到にモザイクと組み上げられ、「典型」の力を鮮やかに輝かせながら、また部分の強調と対比を巡って、ここに交錯する諸力を明らかにしつつ、そうした音楽の全体が演奏のパワーにねじ伏せられていく演劇的な魅力にも富んだものである。（福島）



BERND KONRAD
Träumtanzer
LP/Hat Musics 3509 '83年('80年録音)

ベルント・コンラートは現代音楽とジャズの両方にまたがり活動するミュージシャンで'82年のパンムジーク・フェスティヴァルで来日した事もある。そう書くと何やら訳の判ら無い難かしそうな事をやってそうだが、実は滅茶格好良いジャズ（ロック）だったりする。勿論ジャズ／クラシック双方の〝前衛〞に関わった経験は活かされているが良く消化されているおかげ大変判り易くも格好良い音楽になっている。アップテンポの超絶ナンバーの一曲目から静謐で拡がりの有る三曲目、更にニュージャズ的にシリアスなタッチを交じえながらもやはり凝縮された形になっているB面の二曲、と言った具合に聴き所だらけ。D.ロックウッドもイイ演奏をしている。レーベルからしてCD化も可能だと思うのだが。（中西）



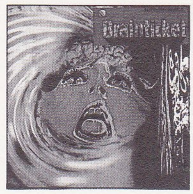
BERND STEIDEL
Psycho Acoustic Overture
CD/Shrapnel '92年
アポロン APCY 8079

GIT出身、シュラプネル、ディメオラの影響を受けた、と言う事が納得のフルピッキング無伴奏ソロからいきなりチューブラーベルズのあのフレーズをモチーフとしたかの様なフレーズが大迎なシンセで奏でられる。彼はオールドフィールドやフロイドにも影響を受けていたのだった。と言う訳で曲名もドイツらしく「ルードヴィッヒ二世の死」だの「ワルプルギスの夜」だのとそれ風でクラシカルなコーラスやハープを交えあくまでも大袈裟にテクニカルに様式美路線なのだが、無神経な早弾きを毎度やりたがる上アレンジも平板でどこかはき違えている印象は否め無い。いわゆるネオ・クラシカル派としてもB級の類だろう。まあ、話のタネ位にはなるがそれまでか。様式美派の好みは知らないので断言出来無いが。（中西）



BRAINSTORM
Second Smile
LP/Spiegelei 28596 5U　'73年

ブレインストームというとどうしても、1stアルバムのイメージから２流ジャズロックバンドと思われがちだが、どういうわけか、このセカンドアルバムではサウンドが一変していて驚かされる。内容はいわゆるシンフォニックタイプで、メロトロンを導入して、クリムゾン風の曲もおさめられている。しかし全体的にいうとメロディアスで聞きやすく、ヴォーカルは多少アメリカナイズされた傾向も感じられる。テクニック的にも1stアルバムから格段の進歩で、聞かず嫌いのドイツロックシーンにもこんな名盤が埋もれていたのかと痛感させられる一枚である。（坂地）



BRAINTICKET (Switzerland)
Cotton Wood Hill
LP /(Ger.)Bellaphon BLPS 19019
'71年
CD/Bellaphon 288.07.102

重いハモンド・オルガンのトーンが特長のブレインチケットのファースト。サイケデリックを地で行く内容。呪術的なオルガンのリフレインに乾いたギターと土着的なパーカッションが重なり、それに電子音や様々の具体音がコラージュされたり女声の誘惑的なメッセージが挿入されたりしてゆくタイトル・ナンバーは圧巻、洗練とは程遠いセンスだが高音を強調した硬質な音響処理、レスリーやパンニングの多用、反復のうねりの中に現われては消える象徴の断片と、ハードドラッグミュージックの追求が他の欠点を補って余りある名盤といえる。20年以上の前の作品故に古さは隠せないが、コンセプトの明確な比類のないサウンドと云えよう。本質的な意味でのヘヴィーメタルサウンド。この時代のドイツはシーンの凄さを本当に感ずる。（嶋田）



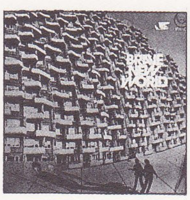
BRAINTICKET
Psychonaut
LP /(Ger.)Bellaphon BLPS 19104
'72年
CD/Bellaphon 288.07.092

リーダーのファンドルーゲン・ブレック（org、fl）以外メンバーが総変りして'72年発表のセカンド。音の質は1stに近いが、曲としてのまとまりが増した分、型破れな迫力が減った印象。ハンドドラムスのつぶやくような語法や、アモン・デュールⅡのプリミティヴなパワーと共通した破壊性など評価できる点は少なくないのだが。しかし、ジャケットも音もB級で、当時のアートロック、サイケデリックの語法内に留っている点がこのグループの限界を示していると云える。メンバーはほとんどドイツ人かドイツ系だが、ミラノでレコーディングされていて、３枚目がイタリアからリリースされていることから活動の場はドイツではないのかも知れない。確かにドイツのグループにはない輝めくような音の質をもっている。（嶋田）



BRAINTICKET
Celestial Ocean
LP/(Ger.)Bellaphon　'73年

前２作がジャケットの割りには今一歩音の方に踏み込めないままでいたBRAINTICKETも、ようやくこの３枚目のアルバムで一線を超えた。間違いなくスイスきってのその筋、ヨーロッパ全土から見てもこれ程純度の高いアルバムも少ない。ドラッグ・ミュージックに美しさやきらめきが混じり合ったかのようなどこか清涼感のある内容に変化している。キーボードやフルート、シタール、パーカッション等が入り混じる。前作の陰湿なイメージは薄れた。このアルバムは当時ジャケットをかえてイタリアでもリリースされ、バンドも紹介されている。サウンドの変化のつけ方等を思うと、前者までの平担な印象に比べて、イタリアには向いていたかもしれない。以後もアルバム・リリースをしたもよう。（松本）



BRAVE NEW WORLD
Impressions On Reading Aldous Hux-ley
LP/Vertigo 6360 606　'72年

タイトルにあるAldous Huxleyとは、第一次大戦後に活躍したイギリスの作家の名。主知的傾向の強い作品で文学界にデビューした彼は、やがて東洋宗教に立脚した神秘主義に没頭してゆく。BRAVE NEW WORLDというグループ名は彼の作品「すばらしい新世界」に由来している。タイトルとトータライズされたその内容からして、Huxleyの作品を題材に、そこから受ける印象を彼らなりの解釈によって音に表わしたものであり、極めて実験性の強い作品である。サイケ、ジャズ、民族音楽等多彩な要素をとり入れながらも、ギター、キーボード、フルートを中心に奏でられるその音からは極度な難解さは感じられない。新しいタイプの前衛音楽といえよう。（江田）



BRIGEEN DORAN (Switzerland)
Bright Moments
CD/B&W BW 020　'92年

ブリジーン・ドーラン（Sax）は顔立ちからも判る通りクリスティー・ドーランの妹（姉？）で本作ではベースのフェルナンド、ソーンダース（J・マクラフリン、J・ベック筆と共演）が参加している他、兄弟のクリスティーとデイヴ（Ds）が演奏のみならず全ての曲を書くなど実に家庭的なアルバムとなっている。もっともその音楽的方向性はクリスティーの物とは少し違い、よりリズミックなパターンの上に良く歌う彼女のサックスが乗ると言った感じでむしろこちらの方が一般的知名度が上りそうなサウンドである。とは言えクリスティーのギターラインが例のヨーロッパ的な物で時にエキセントリックに絡んだりする分只のフュージョンに終わってはいないが。尚、デイヴにもアルバムが有るらしく気になる所だ。（中西）



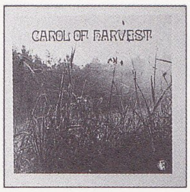
BRÖSELMASCHINE
Bröselmaschine
LP/Pilz 20 21100-2　'71年

ロルフ・ウルリッヒ・カイザーが設立したオール、コスミッシェと並ぶピルツ・レーベルは70年代初頭においてドイツの持つ深遠なロマンティシズムを表出していたが同時に神秘的色彩の濃いものであった。フォーク、トラッドに根ざしたサウンドを特色とする同レーベルにあって、この彼等の1stアルバムもヘルダーリンに比べ見劣りはするものの典型的なピルツ系サウンドと言えよう。B面ではフルート、シタール、コンガ、メロトロン等によるインド音楽風な部分もあるがジェニー・シュカーのヴォーカルをフィーチャーしアコースティック・ギターを基調とするリヴァーヴのかかったサウンドには奥深さが感じられる。後にギターのペーター・ブルシュは本グループを率い2枚、ソロで2枚の作品を残している。　(松本)



PETER BURSCH UND DIE BROSELMASCHINE
Peter Bursch Und Die Broselmaschine
LP/Intercord Xenophon 161 012　'76年

オリジナル・メンバーはPeter BurschとWilli Kissmerの2人だけで、他の2人のメンバーに加え、Jan Fride(KRAAN)、Mani Neumeier(GURU GURU)、Roland Schaeffer(GURU GURU)などがゲスト参加している。初作に比べると、全体的に明るく爽やかになった印象を与える。その一方でロックやブルース系の作品を加えるなど、演奏スタイルの幅が広がったようである。明るい日差しのもとで、暫しくつろいだ時間を過ごす際のBGMに適した音楽といった感じがする。何れの曲もBurschとKissmerのギターが中心で、フルートやチューバ、タブラ、サックスといった楽器が色づけを与えるかたちで重ねられている。いろいろな表情に富んだアルバムである。　(Helmut)



CAROL OF HARVEST
Carol Of Harvest
LP/Brutkasten 85004　'78年

P205、ブラック・スピリットとド廃盤揃いのブルートカステン・レーベルの中でも一際高価な一枚。音を聴いて納得、透き通る様なキーボード、泣きのギター、しっとりとした、それでいて母性的な強さも秘めた女性ヴォーカル、タメの効いた曲展開、落ち着いた演奏、自主っぽさは残るが、まあ、傑作と言ってしまってよい出来。歌詞も英語でクラウトロックっぽさは感じられない。異論もあろうが強いて比較するならアイルランドのフィオーナ・ジョイスの1stを挙げたい。ただし、こちらはよりシンフォニックをアレンジのフォーク・ロックで、長めの曲が多く全5曲の収録。発表当時ジャケットを多めに作ったらしく、近々レコードのみを新たにプレスし再発するとのこと、CDはその後か。　(森下)



CHARLIE MARIANO (U.S.A.)
Helen 12 Trees
LP/MPS 68.112　'76年

チャーリー・マリアーノはアメリカ出身でビ・バップ時代から名を知られ一時秋吉敏子と結婚していた事も有り日本との交流も深い。そんな彼が'70年代に入り渡欧、スーパーシスターやエンブリオに関わる他ドイツ、オランダ、スイス等のミュージシャンと交流を深める。また、民族音器にも本気で手を出すなど既に五十才前後だった筈だからその意欲には頭が下る。本作ではJ・ハマー、J・ブルース、J・マーシャル、故Z・ザィフエルト等を迎えソリッドながら落ち着きのあるジャズ・ロックを見せる。いわゆる派手なインタープレイの応酬と言ったタイプでは無いが様々な要素を取り込んだ落ち着きの中に見られる端々しさは貴重な物。さりげないが繰返し聴ける好アルバム。特にラストの曲が名曲。　(中西)



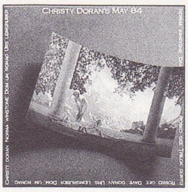
CHERUBIN
Cherub Safety Match
LP/United Artists UAS 29 780 I　'75年

彼らの2ndアルバム。CHERUB印のマッチがたくさん並んだカバーは、なかなか個性的である。基本的には、歌を中心に据えた作品である。しかしリード・ボーカルが前面に出てくるというものではなく、全体的なハーモニーを大切にした曲作りがなされている。シンプルなメロディーを基に、少し控え目で翳りを帯びた調子に仕上げられている。部分的に用いられたリコーダーやストリングス、ギターがリリカルで優しい雰囲気を伝え、マイルドな録音処理をして重ねられた各パートの音は暖かく和やかな印象を与える。作曲とバッキング・ヴォーカルで参加しているLucy Nealeの声は、プログレ・ファンのタイプ(?)かも知れない。　(Helmut)



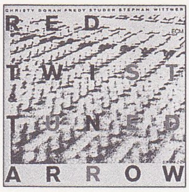
CHRIS BRAUN BAND
Foreign Lady
LP/Pan 87 586 IT　'74年

'71年に「Both Sides」(Basf 20 213994)を出しているCHRIS BRAUN BANDの2枚目のアルバム。ハスキーな声で歌う紅一点、クリス・ブラウンを中心にしたジャズ/ブルース・ロック・バンド。こちらのアルバムではシンセサイザーやメロトロンを使って幅を拡げている。その辺りが興味をひく所。基本的にはFRUMPYやATLANTISのような女性ヴォーカル入り少しアメリカンでもジャズ/ブルース・タッチややハード、というサウンドではある。ただし小曲でも癖のあるヴォーカル・メロディが面白味あって、ロング・チューンのラスト・ナンバーなどでは、ピアノを含めたキーボードやギミックが物言ってプログレッシヴな曲造りになっている。全体に垢抜けないサウンドではある。　(松本)



CHRISTY DORAN'S MAY 84
Christy Doran's May 84
LP /Plainisphare PL 1267.18 VICH '85年

タイトルの通り'84年の3月に録音された本作、OMのU・ライムグルーバー（Sax）OMにゲスト参加していたD・Uロマン、OM解散後バンド・イン・ハンドと言うバンド（作品の存在は不明）で一諸だったR・ジー（元気トラフィック、カン）の弟のデイブ（Ds)、N・ウインストン、T・グルトゥと言う素晴らしいメンバーを集めている。もっとも元来ラジオ用のライヴと言う事からもパーマネントなバンドでは無いのだろう。各々のソロを存分にフィーチャーしたセッション色の強い作品だが、順染みのメンバーが多いせいか散漫にならず安定した流れを持つのはさすが。全体にOMの音楽性を受け継ぎ編成を拡大した物との印象が強い。一過性の物では有るにしろ内容自体は充実しておりまずは貴重な記録と言える。 （中西）



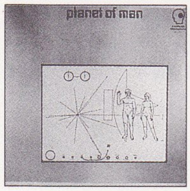
CHRISTY DORAN, FREDY STUDER, STEPHAN WITTWER
Red Twist & Tuned Arrow
CD/ECM 1342 '87年

それ以前から安定して好作を発表し続けていたものの'80年代の半ばごろからドーランは傑作を連発する様になる。本作もその一つで付き合いの長いシュトゥダー（Ds）とIntaktからギター・インプロヴィゼーション・アルバムを出す他ニューウェーヴ畑でも活動の有るヴィトヴァーとの連名作である。冒頭からシンセ、プログラミングを交えてひねくれたリズムの上をソロにアンサンブルに自在な動きを見せる両ギタリストのコンビネーションは実に見事。'80年代以降単純なソロ＋バッキングやツインリードに留まらないギター・アンサンブル物は数多くあるが、その中でもアイディア／センス共に最上級の物。ECMファンのみならずレコメンディッド系（カナダのギタリスト四人組等）のファンにも聴いてもらいたい一枚。（中西）



CHRISTY DORAN
What A Band
CD/HAT HUT hat ART CD 6105 '92年

ElectricとAcousticにエフェクトの中心にディレイを駆使した、彼の完全なソロ作品にして最高傑作。「ソロ＝単調、守備範囲狭い」の考えを持っている人は改めるように。彼の周辺作品で何か1枚というなら本作で決まり。卓越したプレイヤーが本気で音楽に向かい合ったときに（ここまでならあちこちにいる）実は最高にイカすセンスを兼ね備えていた、という希有の作品。勿論ここまで研ぎ澄まされるとシリアスさもある程度あるが聴いていて独りでに体が揺れてしまうような「揺さぶり」「ノリ」を持っているところが凄い。こんなプレイヤー兼コンポーザーはそうそうお目にかかれるものではない。この素晴らしさを小難しさの上に乗せないで真っ向勝負してくる潔さ。まさに「何というバンドだ！」 （伊藤）



CODE III
Planet Of Man
LP/Delte-Acustic 25-125-1 '74年

「ヘッドホーンの着用有無に関係なく同じ様に音が聴こえる」と注意書きされた同レーベルの第1弾。エレクトリック・エフェクトによる空間幅の広い音響の中にドイツ語の語り、イスラム風の女性コーラス、効果音（波の音、鳥の囀り）が現れ部分的にアコースティック・ギター、ドラム（担当のKlaus Schulzeについてあのシュルツェと同一人物か否かは不明）を交え曲として成立するものの実験音楽の色相が残っている。トータル作品として認識可能な点、計算された音の選択の点から混沌とした展開、雰囲気の押し流しは感じられず暗い色調を伴いながらも観念に陥ることなく極めてドイツ的な良質のサウンドを築いている。マンフレッド・シュンケ、エド・ケイによるこの作品、現代音楽からの流れを物語る。 （松本）



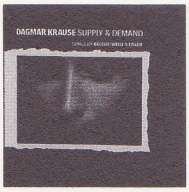
CREATIVE ROCK
Gorilla
LP/Brain 1017 '72年

ハード・ロック路線を歩んだバンドの初作。プロデュースとエンジニアリングはConny Plankで、B④では曲作りにも参加しているようである。サックスやトランペットといったブラス・セクションが加わっているため、パワフルで賑やかな印象を与える。ヴォーカルも安定した力強い唄い方で、ブルース色を帯びた表情豊かな歌を聞かせてくれる。この作品が特に重要という訳ではないが、当時の雰囲気を伝えるストレートなロック作品の一例として聴いておくのも悪くないであろう。なおグループは、74年に2ndアルバム「Lady Pig」をこのBRAINレーベルに残している。 (Helmut)



CUTURAL NOISE (Austria)
Aphorisms Insane
LP/CBS 84663 '80年

ゲルハルト・リジー、ヴァルター・ハイニッシュ、カール・クロンフェルトの3人のキーボード奏者によるシンセ・ミュージックだが、メロトロン（！）とギターの導入、視覚的なサウンド構成とB級ＳＦ映画のサントラのような物語的（ドラマティック！）な展開（音色も『アンドロメダ』あたりを連想させる）が、プログレ・ファンの胸を熱くさせる。ＡＢ面各1曲のタイトルが暗示する「時間の崩壊」、都市の疾走感と古代的な停滞した時間の対比、荒涼たる風景と宗教的啓示、電子的環境の中におおい繁る熱帯植物の森と水没していくイメージ群……ちりばめられた初期のＪ・Ｇ・バラードを思わせるヴィジョンは、最後にいささか唐突に訪れるカタストロフによって解決されるべき焦点を失い、そのまま宙づりとなる。 （福島）



DAGMAR KRAUSE
Supply & Demand

LP /Hannibal Records '86年
CD/Hannibal Records HNCD 1317

ダグマー・クラウゼは、SLAPP HAPPYを経てイギリスに渡り、HENRY COW、ART BEARSで稀代の活躍を見せた傑出した名ヴォーカリストだ。HENRY COW～ART BEARSで運命的に出会ったブレヒト／アイスラーの音楽に傾倒した彼女は、NEWS FROM BABELの後、ブレヒト・ソングの研究にいそしみ、遂にこのブレヒト・ソング集を発表するに至った。'85年にクルト・ヴァイルの音楽をテーマにしたコンピレーション・アルバム『Lost In The Stars』に参加したのが縁で、ハル・ウィルナーの主催するHannibalからのリリースとなったのだろう。ダニー・トンプソンやリチャード・トンプソンといったミュージシャンや彼女自身も参加したマイケル・ナイマン・バンドのメンバーも参加。ジョー・ギャリヴァンの名前も見える。(坂本)



DAGMAR KRAUSE
Tank Battles

LP /Island Records '88年
CD/Island Records ANCD 8739
/Voiceprint VP 138 CD

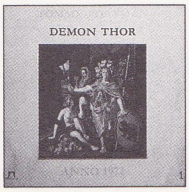
ダグマーのブレヒト研究は更に続く。今度はハンス・アイスラーの作曲作品に焦点を絞り、更に充実した内容となっている。参加メンバーがただ事でなく、前作に引き続き参加のD・トンプソン、ジョン・ハーレのほか、元GRYPHONのG・テイラー、元REGULAR MUSICのS・ホーマー、A・バラネスクを含むM・ナイマン／トム・フィリップス関係者、LOOSE TUBESのメンバー等々が名を連ね、プロデュースがＮＹクレズマー・シーンのグレッグ・コーエンだったりする。やはりＮＹシーンのマイケル・ブレアもその関係だろうか。ブレヒト・ミュージックの底の深さと、ブレヒト・シンジケートと呼びたいほどの途轍もない広がりを痛感する。かろうじてＬ・クーパーの参加がHENRY COWファミリーとの繋がりとして残る。 (坂本)



DAGMAR KRAUSE
Radio Session

CD/Voiceprint VPR016CD '93年

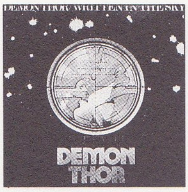
てんこ盛りと言っていい２作の後だけに、ソロ・アルバムのリリースが途絶えてしまったダグマーだが、Voiceprintの手により、久々のソロ・アルバムが登場した。若干音質に問題のあるミニ・アルバムではあるが、ライヴ録音をメインにシンプルながら非常に冴えた演奏を収録しており、待望のブレヒト・アルバムとしては結構よくできている。メンバーは前作参加のアンドリュー・ドッジ(kb、acc、vo)とサラー・ホーマー(cl、sax、vo)が中心となり、グレアム・テイラー、ジョン・ティルベリーも１曲ずつ参加している。多分ブレヒト・ソングの魅力はこうした小編成の方が判り易いのではないだろうか。すっかりイギリスに落ち着いている様子のダグマーだが、彼女の心は半世紀以上遡ったドイツにあるようだ。 (坂本)



DEMON THOR (Switzerland)
Anno 1972

LP / (Ger.) United Artists UAS293931
'72年
CD/ (Fr.) MSI Spalax 14290

デモン・トールのファースト・アルバム。ジャケットの絵を見ると、クラシカルでドラマチックなシンフォニック・ロックを想像するが、実際のサウンドは少し違っている。確かに、１曲目に収められた10分の大曲〝Story Demen Thor〟では、ややハードながらも、メロディアスなピアノ、厚みのあるコーラス、多少地味ながらも効果的なトロンボーン、鳴りの良いベース等のうまく組み合わさった、力強くドラマチックなシンフォニック・ロックを聴くことが出来る。しかし、他の小曲は、いずれもややポップで、ファンキーな、又は、カントリー・ロック的雰囲気を持っており、いくつかの曲の極一部にシンフォニック・ロックの要素が見られるだけである。ポップスとして聴けば評価も変わるだろう。 (賀川)



DEMON THOR
Written In The Sky

LP / (Ger) United Artists UAS 29 496 I
'73年
CD/ (Fr) MSI Spalax 14270

スイス人、トミー・フォートマンを中心とするデモン・トールは、ドイツUAから２枚のアルバムを発表している。本作は「Anno 1972」に続く２ndアルバムである。このアルバムの真価はＡ面すべてを費したタイトル・ナンバーに集約されている。この曲はフォートマンの奏でるメロトロン、ピアノを中心とした壮大なナンバーであるが、所々に女性コーラスやブラス隊をフィーチャーして、〝ファンキーなシンフォニック・ロック〟とでも言うべき独特な音世界を展開している。Ｂ面はそれに比べると割と平凡なロック・ナンバーに終わっているが、全体を聴き通して見ると、当時の彼等がインターナショナル・レベルでの成功を念頭において活動していたであろうことが十分に感じられる作品である。 (城元)

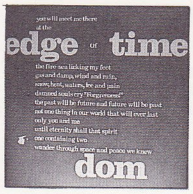


DOLDINGER'S MOTHERHOOD
Doldinger's Motherhood

LP/Liberty LBS 83 426 '70年

イギリスで言えばNUCLEUSのような存在。ジャズがロックと交わった時の産み落とし、そのドイツ版。後にPASSPORTを率いるクラウス・ドルディンガー、NIAGARAやMISSUS BEASTLY等に加わるポール・ヴィンセント、AMON DÜÜL II他で忙しいローター・マイト、ソロ活動で大成したウド・リンデンベルク、18KARAT GOLDで知られるキース・フォーシーによるジャズ／ロック・グループ。たった１枚とは言え、後々を思えば記念碑のようなアルバムだ。インター・プレイと言える程のものもなく、ヴォーカル・パートも少なくないが、'60年代よりジャズ側に居るドルディンガーにしてみれば、当時なりの意欲作だろう。管楽器の使い方はCOLOSSEUMタイプ。全体にはロック色がやや強い。 (松本)

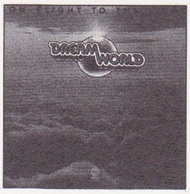
DOM
Edge of Time



LP /Melocord ST-LP-DOO　'72年
CD/Witch & Warlock w&w 005

タンジェリン・ドリームが頂点を極め、Ohr, Pilzといった一連の名作、秀作が生み出された時期に、限定500枚というまことにもってひっそりと発売された本作品は、Laszlo V. Baksay (b、vo)、Gabor v. Baksay (g、vo、fl)、Reiner Puzalowski (g、vo、fl)、そしてHans Georg Stopka (org、g、vo) の四人によって作られた。全員がヴォーカルというか、ヴォイスと呼ぶにふさわしいパートを担当しているためか、彼らはエレクトロニクスよりもアコースティックなものに趣を置いており、それ故、派手な演奏はなく、地味な印象をあたえる。東洋的なメロディが実験音楽とかみ合い不思議な音世界を作り上げ、ドイツのグループらしく単に情緒的に流されず、思想的なものを背後に感じない訳には行かない。（吉瀬）

DREAM WORLD
On Flight To The Light



LP/Vertigo 6435 050　'80年

元YATHA SIDHRAのKlaus FichterとRolf Fichterの２人組によって作られた作品。メロトロン、ハモンド・オルガン、ムーグ、プロフェット、アープ、その他多くの鍵盤楽器が使われているだけに音には十分な厚みがある。純粋なシンフォニック・ロックの作品というより、シンセサイザーのシーケンスに乗せてメロディーを弾くような部分が多いので、シンフォニック系のエレクトロニクス作品といってよいだろう。しかし、フルートを使用していたり、生ドラム使っていたりするので他のエレクトロニクス作品のように無機質で冷たい印象は受けない。A③の〝Sommerdays〞などはトロピカル・ムードでいっぱいだ。全体的にほのぼのとしていて気持ちよいが、素人くささが見え隠れしている所もある。（小林）

DZYAN
Dzyan



LP/Aronda LA-AS 10,006　'72年

フランクフルトのグループ、DZYAN（ツァーン？）の１stアルバム。ベラフォンに残したトリオ編成のものとは全く異なったメンバーで、全んどの曲を書いているラインハルト・カーヴァキイのみ残っていることから、DZYANとは彼のバンドなのだろう。サウンドはサックスなどが加わってジャズ・ロック的だが、ヴォーカル・ナンバー中心で、ベラフォンからのアルバムよりもロックっぽく、ギミックを多用するなど、サイケもしくはアートロック風である。演奏水準は低くないが、同時期にコズミック系、カン、ファウストなどは既にアルバムを発表していることから、旧世代に属するグループであったのだろう。ジャケットはタドやベーコンのセンスに近い。民族音楽色は強くないが、異質な響きへの嗜好が感じられる。（嶋田）

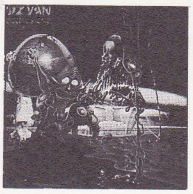
DZYAN
Time Machine



LP /Bellaphon BLPS 19161 Q　'73年
CD/Bellaphon 288.09.108

DZYANの２枚目、トリオに編成を変えベラフォンからリリースされている。1stに比して３人が同じウェイトをもって音楽を作っていて、仲々のテクニシャン揃いである。次作「Electric Silence」で完成をみる民族音楽的要素とジャズロックを融合させたDZYANの個性的サウンドの萌芽が垣間見られる。エデー・マロンのサズやアコースティックギターがみずみずしさを与えていて、ちょっと暗めのECM系サウンドという印象。このグループの美質は、早弾きなどテクニカルな側面よりも、ゆったりした異国的響きを強調した作品にあるのではないかと思う。トータルでみるとやや散漫な印象だが、シュールなジャケットワークと共に仲々の佳作で、ドイツロックの多様性を示す１枚として一聴に値する。もっと評価されよいグループ。（嶋田）

DZYAN
Electric Silence



LP /Bellaphon BIPS 19202 Q　'74年
CD/Bellaphon 288.09.120

G、B、Dsの最小の編成をもつ、どこか北欧的響きを持つジャズ・ロック・グループ、ツァーンのサード・アルバムが、この「エレクトリック・サイレンス」である（一作目「DZYAN」二作目「TIME MACHINE」)。サウンドは３枚とも同系統、即興主体のジャズ・トリオに民族楽器、アコースティック楽器が加わる。特にサズ、シタール、カリンバ等がかなり前面に使用されている曲が多い。ECMのテリエ・リピタルやヴァンガードのオレゴンなどと共通の響いを有する。技術はほぼ標準、ドイツ的というより、コスモポリタンな音楽性を感じさせ、独特といえる。当時のドイツロックシーンには、このような傾向のグループも多数あったことの一つの証明である。（嶋田）

EBERHARD SCHOENER
Trance-Formation



LP/EMI IC 064-32 526　'77年

エバーハルト・ショーナーは、キーボード奏者というよりも作曲家といった方が似つかわしいミュージシャンだ。そして'70年代から既にインターナショナルな土俵に立って創作活動していた。このアルバムは、彼が南アジアを訪れた時の印象をもとにして製作されている。彼にとって多分大きな神秘ともなった南アジアの異文化が、彼のヨーロッパ人としてのアイデンティティに立ち入り、そこで東洋崇拝に没することなく、あくまでも彼自身の音楽として表された代表作の一つと言っていいと思う。従ってサイケデリック文脈の瞑想感や観念没入のようなものは一切ない。全編を通じてグレゴリアン・コーラスと彼のキーボード・プレイを中心に静かで神聖なるイメージを与える。またポリス人脈との共作が多い人でもある。（松本）



EBERHARD WEBER
The Following Morning

LP /ECM 1084 2301 084　'77年
CD/ECM

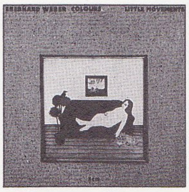
'40年生まれのユニークなベーシスト。エバーハルト・ヴェーバーは、アップライトのエレクトリック・ベースに独自のエフェクト処理を施し、さりげなく、しかしなんびとにも真似のできない魅力的な演奏で、いわくいいがたい幻想的な音楽を創造する。本作ではオスロ・フィルのメンバーによるチェロとフレンチ・ホルンとオーボェの奏でる霧のようにけぶるしっとりとしたハーモニーを背景に、決して派手ではないのに、うっとりとするような鮮やかなベース・プレイを聴かせてくれる。こんなにも中音域の美しい音楽がほかにあっただろうか。ヴェーバーはソロ・アルバムでは落ち着いた演奏に終始しているが、例えばラルフ・タウナーの『Solstice』を聴けば、どれほど驚異的な音楽家かが判る。　(坂本)



EBERHARD WEBER COLOURS
Silent Feet

LP/ECM 1007　'78年

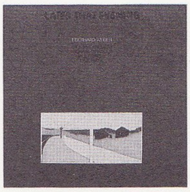
E.WEBER COLOURS名義による1stアルバム。(Weberのソロとしては4作目。) Weberの透明感のある音色／雄大なフレージングが堪能できるトップ・ナンバーは、ECMでも屈指の仕上がりである。単なるベーシストのソロではなく、リリカルでありながらK・ジャレットのように溺れすぎないRainer Bruninghausのピアノ、パッショネートなCharlie〝秋吉満ちるの親父〟Mariano(sop-sax, fl)、Weberと共にいかにもECM的な空間を演出する元S・マシーンのJohn Marshallと、バンドとしてのバランスも良い。バンド名義にしているのも理解できる。アナログ時のMaja Weberによるカラー・ブックレットも美しい。同メンバー／同名義で、80年に「Little Movement」をリリースしている。　(Chihiro S.)



EBERHARD WEBER
Little Movement

LP/ECM 1186　'80年

ECM系のベーシスト、エバーハルト・ヴェーバーが自らのグループ、COLOURSを率いて発表したセカンド・アルバム。他のメンバーは1作めの「Silent Feet」('77年)と同じくチャーリー・マリアーノ(Sax、fl)ライナー・ブリューニングハウス(key)そして元SOFT MACHINEのジョン・マーシャル(ds、perc)。荘重なオープニング、ミニマル風のシンセ、夢の様に去来するSE等、ヨーロッパ・ジャズにプログレッシヴの要素を取り入れたファンタスティックなジャズ・ロックが堪能できる。マーシャルのデリケートなドラミングも素晴らしい。ヴェーバーとブリューニングハウスは現在ヤン・ガルバレク・グループのメンバーとしても活動。またケイト・ブッシュのアルバムにもヴェーバーは名を連ねている。　(高山)



EBERHART WEBER
Late That Evening

LP/ECM　'82年

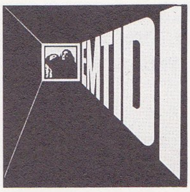
COLOURSを解散したE・ヴェーバーはOREGONのポール・マッキャンドレス(sax、cl、ob、horn)マイケル・ディパスカ(ds、perc)パット・メセニーの片腕ライル・メイズ(p)今をときめくビル・フリーゼル(g)という強力メンバーに声を掛け、4回のジャムと短期間のライヴ活動と共に本作を吹き込んだ。全4曲ヴェーバーのペンに依るものだが、メイズのうねるピアノ、フリーゼルの幽玄なトーンがシリアスな空気とより一層のイマジネイションの広がり、ダイナミズムを与えている。ヴェーバー自身のプレイもベースがいかにイマジネイティヴな楽器たり得るか再認識させてくれるようだ。いつもながらヴェーバー夫人によるリリシズム溢れるメルヒェン風のカヴァー・イラストも良い雰囲気を出している。　(高山)



EL SHALOM
Frost

LP/Attacca 27625　'76年

'76年、自主製作にて発表された本作は、「Fading Beauty」の頃のFAITHFUL BREATHに非常に近い音創りをしている。あくまでもB級ではあるが前者より幾分展開の多いドラマチックな曲想は、いかにも大仰な盛り上がりを好む我が国のシンフォニック・ロック・ファンの好みにぴったり一致する。B①のタイトル曲〝Frost〟においては叙情的なフルートに絡んでごく控え目ではあるがメロトロンの使用も確認できる。当時、NOVALISを筆頭にHOELDERLIN、INDIGO、MINOTAURUS、TROYA、WERWOLF、そして本作を発表したEL SHALOMといったグループ達による極めてアンダーグラウンドな活動を通して、ドイツ・ロマン派主義の一つのムーヴメントが形成されていた事が想像される。　(松尾)



EMTIDI
Emtidi

LP/Thorofon ATH 109　'70年

エムティディのファースト・アルバム。オリジナル盤はドイツ屈指のコレクターズ・アイテムだったが、後にほぼ完璧な形で復刻された再発盤が出た。メンバーは、セカンドと同じ、Dolly Holmes(g、Bousouki、Kazoo、vo)とMaik Hirschfeldt(g、fl、vo)の2人で、グループとして基本的コンセプトも同じである。ギター中心のシンプルな演奏をバックにした、やや感情を迎えた、フォーク・タッチの男女ヴォーカルを聴くことが出来る。全体の印象としては平坦な感が否めない。白黒の本アルバムのジャケットと美しいセカンド・アルバムのジャケットが、それぞれの作品の魅力を象徴しているかのようであり、同タイプの2作品ではあるが、その出来には明らかな差がある。　(賀川)



EMTIDI
Saat
LP /Pilz 20 29077-8　'72年
CD/Galaxis CD 9019

かつて、「よいこのジャーマンロック」で常に上位ランキングされていたエムティディのセカンド。ジャーマンロックファンは、ミーハーであるということを如実に物語る決定的な1枚である。カナダ人女性ドリー・ホルメスの奏でるオルガン、ピアノ、ハープシコードの無常感ただよう調べは、自然を慈しむ素直な感情の発露ともいうべきボーカルに一層の効果を及ぼし、全盛期を迎えんとするジャーマンロックの礎に一つの可能性を見い出し得た素晴らしいものだ。プロデュースは取締役のロルフ・ウルリッヒ・カイザー氏自らがやり、エンジニアとして出たがり屋、ディエーカー氏の名も〝ファンタスティック・マン〟としてクレジットされている。アートデザインは言うまでもなく、ヘルムート・フリッツ氏である。　（丸美屋）



EROC
Eroc
LP/Brain 1069　'75年

'78年に初めて国内盤が出たときには、SF的なジャケットを付けられて登場したGROBSCHNITTのリーダー、エロックことヨアヒム・ハインツ・エーリッヒのファースト・ソロ・アルバム。GROBSCHNITTではドラムスとエフェクト、作詩を担当している彼が、ここではすべての楽器を演奏し、安らぎ、美と悪意が交錯する文字通り「夢」の調べを奏でている。愛娘に捧げたのであろう童心へと誘う可憐なメロディ、夢幻的な永遠さを感じさせる2曲めの後の野卑な話声。GROBSCHNITTのファーストのフレーズをシンセサイザーで再演した〝Die Musik von Öiberg〟はガラスの砕ける音で途切れ、風の音と共にギターやドラムスが加わったシンフォニックな曲、不安を呼ぶ加工されたヴォイスと続く。厚みのある音も効果的。　（高山）



EROC
Zwei
LP/Brain 60,007　'76年

グロープシュニットのドラマーであり、事実上のリーダーでもある本名ヨアヒム・エーリッヒのセカンド・ソロアルバムである。発表は76年でちょうどグロープシュニットが3枚目の「ジャンボ」を出していた時期でこの頃のエロックはグループではドラムの他に各種エレクトロニクス、エンジニア、プロデュースまでこなし、このソロでも全ての楽器と処理を一人でこなしている。このアルバムは単に聞き流しているだけではすべて冗談の様に聞こえてしまうが、彼がグロープシュニットで果たした「裏切りのフレーズ」の集大成と見た方が正しい。次はこのメロディーで展開されるだろうという聴き手の予測をくつ返してしまうグロープシュニットでの彼のやり方が見事に開花している。78年にも3枚目が出ている。　（いわね）



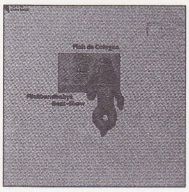
ERTLIF (Switzerland)
Ertlif
LP/Tell TLP 5510　'72年

ERTLIFはスイスのローカルバンドで活躍していたメンバーが集まり1969年に結成されたバンドで、1972年に唯一のアルバムである本作とここからカットされたシングルをリリースしている。そのサウンドは当時のブリティッシュ・ロックに多大な影響を受けたプログレ前夜的な（雰囲気的にはPROCOL HARUMを想起させてくれる）もので録音された時代を色濃く反映したものとなっている。以前、マニアの間ではメロトロンの使用が話題になっていたが、実際聴いてみるとそれほど大々的ではなく基本的にはギターとオルガン主体で、一部の曲に叙情性を出すのに効果的な使用をされているという感じに留まっている。ジャケはサイケ調の幻想的なものがオリジナルだが再発盤ではメンバーの当時と現在の写真になっている。
（島村）



EUROPEAN JAZZ ENSEMBLE
At The Philharmonic Cologne
CD/M. A music A800-2　'89年

ベースのアリ・ハウランド率いるこのグループ、結成は'77年と言うから他にも随分と作品は有るのだろう。本作のメンバーはM・ショーフ、E・ラヴァ、S・サルツマン、P・カテリーン、T・レヴィン(Dsa)を含む11人でバンド名にふさわしい多国籍編成だが全員がレギュラーでは無いと思う。御丁寧にメンバーの生年月日が書いてあるのだが、それによると皆、二次大戦前後の産まれ、言い替えれば'60年代代から'70年代のヨーロッパ・ジャズを支えた世代である。そう言った彼達がジャズ・ミュージシャンとしての彼達の言葉一インプロヴィゼーション一でもって互いに聴衆と語り合う。今やそれは先鋭的では無くなったにしろ立派に価値がある事だと思う。ベテランにふさわしく真剣で尚ふくらみのある音。　（中西）



FLOH DE COLOGNE
Fliessbandbabys Beat-Show
LP/Ohr OMM 56.00　'70年

彼らの2ndであり、Ohrレーベルの記念すべき第1作（レーベルの5枚目までゴム風船のおまけ付)。彼らは独自の活動路線を歩むグループであり、彼らを正しく理解しようとするならば、その活動の歴史と背景を理解すべきであろう。(政治色の強い学生運動に端を発したらしいが、ここでは割愛させていただく。)彼らの訴えたい内容に反して(?)、その表現形態はコミカルで楽しいものである。オルガンやギターによる耳になじみ易いフレーズの繰り返し、ファンキーなリズム、コケティッシュな効果音、ユーモアに溢れる歌(語り)……など、どれをとっても飽きのこない内容である。しかし、こういう表現方法を受け入れられるかどうかで、好き嫌いがはっきりと分かれると思われる。　(Helmut)



FLOH DE COLOGNE
Rockoper Profitgeier
LP/Ohr OMM 56 010 '71年

鳥を裂くとはらわたが出てくるという変形ジャケット。この趣味が既にFLOH DE COLOGNEなら、おまけに盤も朱色一色（赤一色というプレスもある）。ブラック・ユーモアもぎたぎたなうえ、とぼけたようなロック・ヴォーカルに極端にリズム感の悪いロックン・ロール崩れだったりと、何のとり得もない音楽、とも言える。言えるが、これは間違いなくFLOH DE COLOGNEの音楽だったりする。このアルバムは「Live」と名記しておきながらスタジオ録音をミックスして作為的につくられており、その辺りの事を込みで実はザッパ並みにユーモアと実験性に溢れていたか、もしくは演劇色の強い、ステージでの動きを込みにした音楽の面白味にたけたバンドだったかもしれない。寸劇＋音楽の一面がのぞけるアルバム。（松本）



FLOH DE COLOGNE
Lucky Streik-Live
LP/Ohr OMM 2/56 029 '73年

バキューン、カ〜ンというジャケットのおやじ達の目つき顔つきで全てがわかるFLOH DE COLOGNEの音楽性。今度は2枚組、大版ポスターつき。内ジャケットにステージ写真が載っていて、それによれば意外とロック・バンドふう少しトラッドの酒飲み風といった感じだが、メンバーのほとんどがむさくるしいことは言うまでもない。しかし演奏は意外にふざけていない。Ohr時代のアルバムでは一番オーソドクスかもしれない。ヴォーカル・パート（というよりも語り？）は例によって多くドイツ漬けブラック・ユーモアを感じさせたとしても、拍手も喝采。会場の笑いがない事を思うと、お笑い・小話ではなくアジテーションになっているのかもしれない。盤から音楽を聴いているだけでは伝わらない位置に居たバンドなのだろう。（松本）



FLOH DE COLOGNE
Geyer Symphonie
LP /OHR OMM 556,033 '74年

彼等について知ることのできる最古の情報は68年10月に制作された「Vietnam」（Pläne S 33 101）である。活動はその後も続いており、判明する限り11枚のアルバムをリリースする政治色の濃いバンドの様である。本作はオール・レーベル在籍時にリリースされた5作目であり、同レーベルの最終作でもある。ボンゴ、ドラム、サックス、フルート、マンドリン、オルガン、ギター、ベース、シンセサイザー、メロトロン、ピアノ等、30種類におよぶ楽器による様々な形態の演奏と効果音が次々とコラージュされドイツ語の語りによって曲進行がはかられている。初期ザッパのドイツ版といった感がある。ブラック・ユーモアが全体を貫き賛否の分れるところであるのはジャケットを見ても判る通り。（松本）



FLUTE & VOICE
Imaginations of Light
LP/Pilz 20 21088-2 '71年

ハンス・レッフェルト（E・ギター、A・ギター・フルート）とハンス・ブランダイス（シタール、E・ギター、ヴォイス）のデュオ作、唯一の作品である。シタール、ジャズ色の伺えるE・ギター等を中心に全編、各楽器の絡みとソロによって静的で極めて東洋的な音世界が淡々と繰り広げられている。薄日の差し込む中を気の向くまま自由に奏でられた様なそれは瞑想音楽と呼ぶことの出来る類の音楽である。アネクサス・クァムの音楽性とヒッピー・ムーヴメントが生み出したというべき夢幻的或いは東洋的な響きを持つ例えばW&Wの様なフォークとの中間に位置し、更に音を浄化した内容と言えば察知できようか。70年前後の西洋文化圏に花咲いたインド志向が音に反映された意味でその典型的作品と言える。（松本）



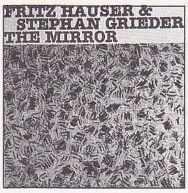
FREDY STUDER
Seven Songs
CD/Intuition INT 2056 2 '93年

OM以来クリスティ・ドーランと交流が深い他独、仏ジャズ・シーンでも活躍するストゥーダー初のリーダー作。メンバーが凄い。ドーラン・グルトゥ、ロマン・ブルーニングハウス、ヴィトヴァー、マリアーノ、ロスコー・ジーは人脈上成程と思うが他にもヴァスコンチェロス、タミア、ヴィトウス等の顔も見える。しかも全員が全曲に顔を出しているのだ。さぞやスケジュール調整が大変だったろうと思ったら制作に8年かかっている。それだけに只のオールスター顔見せ興行に終わらず各メンバーのらしさを活しつつも統率のとれたワールド・ジャズ・ロックの傑作になっている。大人数にもかかわらず各人共細部まで行き届いた演奏を見せるが中でもグルトゥとヴィトウスの両名の存在感は凄い！強力な一枚。（中西）



FRIEDRICH GULDA (Austria)
It's All One
LP /MPS '70年
CD/テイチク ULS-3198-P

バドゥラ＝スコダ、イエルク・デムスとともに「ウィーン三羽烏」の一人と賞されたピアニスト（'30年生まれ）。ベートーヴェンやバッハを主要レパートリーとする一方で、ジャズに情熱を傾け、時に俗謡を思わせる自作曲においてリコーダーを吹き、パーカッションを叩き、変装して歌を披露するなど、しなやかなユーモアと偏奇さに溢れた音楽世界をつくりあげている。本作ではドラムスを伴いアコースティックとエレクトリックのピアノを弾き分けており、クラシック／ジャズ／ポップスの境界を溶かし混然一体のアマルガムとしながら、物心ついた頃から伝統を呼吸している者にのみ可能な、ごく自然体にして自在な過激さを示している。同様の作品に『グルダ・ワークス』『偉大なるGの帰還』などがある。（福島）



FRITZ HAUSER & STEPHAN GRIEDER (Switzerland)
The Mirror
CD/Hat Art CD 6037 '90年

元ブルーモーションの両名によるパイプ・オルガンとパーカッションのデュオ。'80年代以降のハウザーはHat ARTよりソロ／リーダー作を発表し続ける他ディープ・リスニング・バンドに加わるなど現代音楽の領域で活動しており、本作も又そう言った作風である。全体に感覚的な演奏で即興性も高いが、それでもパイプ・オルガンの使用がヨーロッパ人としての彼達に与える影響は大きく、いわゆる教会音楽風では無いにしろ神秘的で荘重な響きが感じられる。言い替えればブルーモーションの非ロック的部分の拡大版と言った音であるがスケール、集中度共にこちらの方が圧倒的に高く時に息を呑む程の迫力を持つ。プログレ性のかけらも無いがハウザーのキャリアの中でも最高の出来。（中西）



FRITZ HAUSER (Switzerland)
Die Trommel & Die Welle
CD/Hat Hut Records hat ART CD 6017 '89年

CIRCUS、BLUE MOTIONと、スイスの名だたるプログレッシヴ・ロック・バンドを渡り歩いたドラマーのフリッツ・ハウザーだが、ソロ・キャリアを積み上げて来た現在、寧ろロック・サイドの活動の方が意外感を覚えるくらいのその筋のミュージシャンとなってしまった。ここで言う「その筋」とは、フリー・ジャズをも遠く過ぎ行き、現代音楽そのものに立ち至った先端音楽を指す。パーカッショニストはしばしば音楽越境の達人となるという原理はここにも適用されるだろう。既にそういったアルバムが数枚発表されている。このソロ・アルバムはそうした彼の多重録音による放送劇作品と、パーカッションのみによる作曲作品を収録。彼の関心が音響と運動性、ダイナミズムにあることを教えてくれる。（坂本）



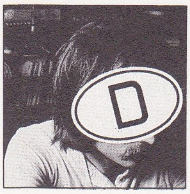
GÄA
Auf Der Bahn Zum Uranus
LP /Kerston 65 014 '?年
CD/Ohrwaschl 無番号

'70年代のジャーマン・マイナー所のマニアックな一作。プログレッシヴな作風と今一つ抜け切れない未整理なドイツらしさが運良く出逢ってしまったようなうまみがある。'70年代ジャーマン・ロックのマイナー所が何であるかをつかんだ人には興味深い内容だと思う。7分～10分の曲が並び、単に並ぶだけでなく変化もあり、そこにはレスリーのハモンド・オルガンや生ギター、更にはスペイシーな効果も加えられ、相当意欲的だったように思える。演奏力は乏しいもののサウンド・コンセプションは比較的はっきりしていたようだ。ロング・ナンバー程面白い。垢抜けないポップな部分は少なめなので、ジャーマン・マニアなら聴いておきたいところ。ドイツのマイナー・プログレッシヴ・ロックの好サンプル。（松本）



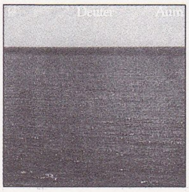
GASH
A Young Man's Gash
LP/Brain 1014 '72年

キーボード（リード・ヴォーカル）、ギター、ベース、ドラムから成る4人組のバンドの作品。（ブリティッシュ・ロックに近い雰囲気を持つ。）Joe Cockerに似たハスキーなヴォーカルは、なかなか渋い唄を聞かせてくれる。また彼の引き分けるピアノやオルガンもツボを心得た演奏内容で、スローながら味のある演奏を聞かせる。（オルガン系のロック・ファンは要チェックかも知れない。）またB面の組み曲では、チェンバロを使用したりオーケストラとの重ね録りをしているので、単なるハード・ロック作品とは一味違った内容に仕上がっている。まとまりが良く、じわりと魅力が伝わってくる好アルバムである。エンジニアリングはConny Plankで、彼らしい音響処理がなされているのも興味深い。（Helmut）



GEORG DEUTER
Deuter
LP/Kuckuck 2375 009 '71年

ゲオルグ・ドイターの音楽は、ニューエイジ文脈で語られる音楽性を持っている。'70年代の後半に表面化する環境音楽、その後のリクライゼイション・ミュージックといった音楽の根底には、'60年代後半に拡がった東洋指向や自然回帰の思想が流れているが、ドイターはその先駆のようなところがある。音楽スタイル／レッテルとしてのニューエイジというよりも、西洋人が東洋を憧れのまなざしを持ってユートピアを描いた時代の色あいを濃く残していて、特にこのアルバムはその模索を感じさせる。次作以後の明確なサウンド・ヴィジョンには一歩至っておらず、多重録音によるエレクトロニクスやシタール等の様々な取り込みがあり実験色が強い。それだけに初期のドイツの未整理な感触が強くマニアック。（松本）



GEORG DEUTER
Aum
LP/Kuckuck 2375 017 '72年

この2作目でドイターの音楽は開花している。水や波の効果音をエレクトロニクスの静かな動きやギター音の反復、チベット系？のベル合奏等にとけ合わせるように使って、とてもなだらかな印象を受ける。東洋指向、自然讃美がよくうかがえる。それは瞑想的ではあっても非常にすっきりと澄んでいて大気のようだ。「Pharaos」のP. VUHやBETWEEN、CLUSTER & ENO等に近いものがある。この音で'72年とは随分と早い。多分〝禅〟等に関係がある人物のように思う。既に開放感がある。彼はこのアルバムの後も、「Celebration」（Kuckuck 2375 040,'76年）、「Haleakala」（同2375 042,'78年）、「Ecstasy」（同 2375 044,'79年）、「Silence Is The Answer」（同 049／050,'81年）他4～5作をリリースした。（松本）



GILA
Gila
LP /BASF 20 21109-6 '71年
CD/Second Battle SB 021

ギラのファースト・アルバム。ギラは２枚のアルバムを残して解散してしまうが、ポポル・ヴフに加入したコニー・ファイトがリーダー・シップをとっていたことで広く知られている。メンバーはダニエル・アルーノ（ドラムス）、フリッツ・シェイング（オルガン、メロトロン）、コニー・ファイト（ギター）、ヴァルター・ヴィーデルケール（ベース）の４人でディーター・ディークスがプロデュースにあたっている。本作でのギラは内的広がりをみせるトリップ・サウンドを演奏しており、セカンドの静寂感はあまり感じられない。しかしその完成度は71年にリリースされたドイツ・ロックのアルバムとしては、いや全ドイツのグループの中でも極めて高水準といえる。（山崎）



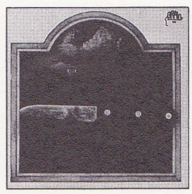
GILA
Bury My Heart At Wounded Knee
LP/Warner Bros. WB46 234 '73年

ギラのセカンド・アルバム。前作が色彩感覚が強いどちらかというとドロドロとしたサウンドを有していたが本作になると、ある意味で昇華した静寂感が滞っている。前作のメンバーのうちコニー・ファイト以外は全員脱退し、新たにポポル・ウヴのフローリアン・フリッケとダニエル・フィッヒェルシャーがゲスト参加している。これはコニーのポポル・ヴフの72年のアルバム「ホシアナ・マントラ」への加入が大きく影響しているといえる。ここではフリッケはピアノの他にメロトロンも弾いている。Ａ面は女性ヴォーカルをフィーチャーしたポップな小品が収められているが、Ｂ面になるとギラの本領発揮といったところ。繊細なコニーのギターとフリッケとのコラボレーションは見事な広がりをみせている。（山崎）



GLOVE UNITY ORCHESTRA
Jahrmarkt/Local Fair
LP/Po torch PTR/JWD 2 '77年

66年シュリッペンバッハが委嘱を受け書き上げた『グローヴ・ユニティ』を演奏するために集まったオーケストラは、70年代に再編後も、構築的なアンサンブルと鋭利な音色、ハイ・エナジーなインプロヴィゼーションを依然トレードマークとしながら、もはやグループはシュリッペンバッハ個人のものではない。その最も極端な例が本作である。編成は通常のビックバンドに、地元のアコーディオン合奏団やマーチング・バンド、ギリシャの民族音楽バンドが加わり、様々な引用や模倣、パロディを連ね、演奏はカーニバル・パレードのあざといまでの雑色性と、仮設テントを巡るような空間的な含みに満ちている。作曲はペーター・コーヴァルト。他にはメンバーによる作曲のみを演奏した『コンポジション』も必聴。（福島）



GROBSCHNITT
Grobschnitt
LP/Brain 1008 '72年

「Jumbo」あたりからイエス風の陽性のシンフォニック・ロックを演奏するようになるグロープシュニットだが、このファーストの時点ではダークな色調の曲を演奏していた。構成的にしっかりとした楽曲となっているのはこのアルバムでもいえることだが,演劇調(シアトリカル）とでもいおうか、アングラ的な暗さを強く感じるサウンドである。エレクトロニクス系や実験的作風の多い'70年代のジャーマン・ロック・シーンの中で、グロープシュニットやバース・コントロールのようなグループのサウンドは、あまり話題にのぼらないが、技術的にも表現的にも十分なものを持っており、再評価をうながしたいグループ達だ。（山崎）



GROBSCHNITT
Ballermann
LP /Brain 2/1050 '74年
CD/Brain 843 076-2

グロープシュニット74年の２nd。だれが聴いてもそれなりに評価できる１stと違い、サーカス的な猥雑さを強く持つ本作は、好き嫌いが分かれるだろう。特にエロックの歌うトップ・ナンバーのような曲を聴いて、強烈なインパクトを感じられるか嫌悪感を感じるか。前者なら本作を名盤と思えるだろうし、後者ならばこの作品が内包しているジャーマン・ロック特有の混沌に、あなたは向かないのかもしれない。少なくとも本作はあなたに無縁の作品だ。アナログでは２枚組だったが、CDでは２in１の形でリリースされている。だが、アナログ時のCD面を、ノン・ストップ編集にして欲しかった。アーティスト不在のＣＤ化が、こういった状況を多く産んでおり、体質の改善が望まれる。(Chihiro S.)



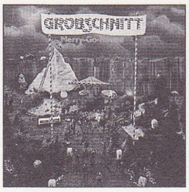
GROBSCHNITT
Rockpommel's Land
LP /Brain 60.041 '77年
CD/Metroname 837 985-2

ロジャー・ディーンを意識したジャケットは数多く存在するが、その中で本作は最も優れたものの一つだろう。国内盤では省かれた内ジャケも美しい。アルバムを重ねる毎に音の厚みと、滑らかな美しさを増して行った彼等の４作め、「おとぎの国へ」という邦題の付けられた本作は、彼等、特にドラマーのエロックが潜在的に持ち続けて来たイノセント願望を抽出し、展開させたファンタジックな童話世界が広がる。基になっているのはキーボーディストのミストによるストーリーだ（ベーシックなカヴァー・イラストも彼）。ヴィルトシュヴァインの優しく力強いヴォーカルも特筆すべき。シアトリカルな演出のみならず、ここでのスタイルは幾分同時期のGENESISを想起させるが、本来の独自性も失われていない。（高山）



GROBSCHNITT
Solar Music Live
LP /Brain 0060.139 '78年
CD/Metronome 837 984-2

グロープシュニット唯一のライブだが、2ndに収録されていた「Solar music」全曲でアルバム１枚埋める、という大胆な企画の作品である。ちょっとはずすと冗漫な作品になりそうな企画だが、ジャケット・ワーク及び演奏から、グループの本質――秘教的儀式性とサーカスのノリが同居するヴィジュアルなステージング／ドイツ的なトリップ感覚等がダイレクトに伝わってくる名作である。出来れば映像も見たかった。曲は新たに書き込まれた箇所もあり、膨らまされている。（トータルで10分以上長い。）冒頭部のインパクト重視のヴォーカル、中間部のSE、後半のエロックの絶叫しながらのスネアの連打等の非常識なノリ――これらが織り成す迷宮世界は、フラッシュ・バックを引き起こすほど強烈だ。（Chihiro S.）



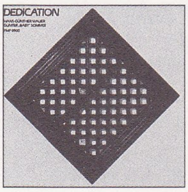
GROBSCHNITT
Merry-Go-Round
LP/Brain 0060.224 '79年

ライヴ盤「Solar Music」に続くグロープシュニット６枚目の作品である。ドリーミーというかファンタジックというか。つまりはジャケットに描かれている遊園地の世界をそっくりそのまま音で表現している。適度なポップさが心地良いし、音に厚みもあり、演奏も安定しているよく出来た作品だと思う。73年の「Ballerman」では不気味なジャケットだったり、77年の「Rockpommel's Land」では思いっきり童話的なジャケットだったりと、グロープシュニットに関してはジャケットが中身を忠実に表しているので初めて彼らを聴こうとする人はジャケットで選んでみるのもよいかもしれない。80年代に入っても地味ながらも良い作品を出してくれたグループだと思う。（小林）



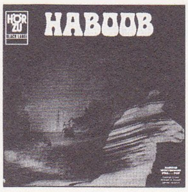
GÜNTER SCHICKERT
Samtvogel
LP/SCH 33 003 '75年

エコー、ギミック、エフェクト対応型ジャーマン・ファンにおすすめのシンガー兼ギター実験奏者。計３曲。基本的にギターが中心のフリー・スタイル。とは言ってもハンス・ライヒェルのようではない。もっとドロ～ンとたよりない。ゴングを抜けた頃のソロのデヴィット・アレンとコスミック系音遊びに「Inventions For Electric Guitar」の時のマニュエル・ゴッチングがいっしょに来たような音楽だ。音は細かで曲は不定形。瞑想的と言うには神経質な音の線の細さが先に立つ。20分前後の二つの大曲でのギター反復は、「Inventions～」にそっくりなので、尚更ジャーマン・ファン向けだろう。しかもより移り気と見えて様々なギター・ギミックが絡む。Brainより一度再発された後、'79年には「Überfälling」（Sky032）を出した。（松本）



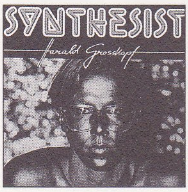
GUNTER "BABY" SOMMER
Dedication
LP/FMP 0900 '82年

チャーチ・オルガンとフルセットのドラムス＆パーカッションの共演。床を這うオルガンの深々とした音色がやがて浮かび上がり、四方を囲む壁面を照らし出していくにつれ、空間の鐘乳洞にも似た壮大な広がりが明らかになる。中空をゆっくりと巡る響きにゴングの残響が寄り添い、そそり立つ音の壁に雷のような連打が応える。ここで演奏は、フリー・ジャズ的なフレーズの取り交わしによる対話ではなく、この奥深い空間をキャンバスに見立てたピクチャレスクな崇高の美学に基づいて進められている。旧東ドイツに属するドレスデンに生まれたゾマーは、ソロ・パーカッションによる「聴音楽」シリーズを続けており、最新作『ザクセン人の宝箱』では、民族楽器を駆使したエスニックな演奏を聴かせている。（福島）



HABOOB
Haboob
LP/Hörzo REP 34002 '70年

ジミー・ジャクソン。あまり知られていない人であるが、ドイツ初期の重要な作品に多くその名をつらねている。アモンデュールII（以下ADII）、エンブリヨ、ナイアガラ、パスポート等々。そのジミーのアルバムともいえるのが本作でナイアガラのジョージ・グリーン（ドラム）、W・パウエル（ギター）のトリオ編成。プロデュースはADIIのオラフ・キュブラー。キュブラーとローター・マイトとは因縁浅からぬ仲で、パスポートの第１作、レミングの踊り、狼の町、マイトのユートピア等で共演。黒人ドラマーでジャズ色はかなり強いとはいえまぎれもなくサウンドはADIIの血縁。ドイツロック初期の息吹きを体感できる１枚。ジャケット・デザインはADIIのフォルク・ログナーが手掛けており彼の多才がうかがわれる。（木野）



HARALD GROSSKOPF
Synthesist
LP/Sky 043 '80年
CD/(Sky CD 3018)

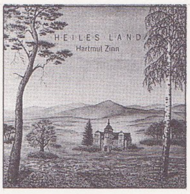
元WALLENSTEINのドラム奏者。'70年代前半の昔、ASH RA TEMPELやシュルツェ辺りとつるみドイツを騒がせた一人。これはいつの間にかキーボード奏者になり見た目も別人に若返ったグロスコフの'80年代作品。彼は'87年にももう１枚のソロ・アルバム「Ocean-heart」（Sky 115）を出しており、現在は２作を編集したCD「Best of」（Sky CD 3018）が出ている。そのもの近年のアシュ・ラ等に通じる内容になっている。リズムはハルモニア「De Luxe」路線。すっきりとしたトーンで音粒が流れるような端から、メロディが遠巻きに輪を描いていくというあのパターン。とても聴きやすく中々心地良い。A面はCDに収録。収録されなかB面は幾らか凹凸のある作風になっている。聴くのならCDが適切。最近３作目も出た。（松本）



HARRY PEPL (Austria)
Cracked Mirrors

CD/ECM Records ECM 1356 833 472 -2 '88年

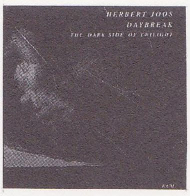
ハリー・ペプルはオーストリア出身のギタリスト。日本では全くと言っていいほど注目されていないが、ヨーロッパの面白いシーンにしばしば顔を出すミュージシャンであり、クリスティ・ドーランやシュテファン・ヴィトヴァーらと並んで要注意のギタリストだ。そのドーランとはデュオでの共演もある。古くはルノ・エリクソンのアルバムへの参加が認められるが、最も有名なのはミッシェル・ポルタルのツアーに参加した傑作ライヴ・アルバム『Mens' Land』('87)だろう（J・ディジョネットも参加)。『Cracked Mirrors』はこれまでの所、唯一の彼のリーダー・アルバムだが、一癖も二癖もある個性と才気がうかがい知れる好盤だ。ヨン・クリステンセン(d)とヘルベルト・ヨース(flh)が客演している。（坂本）



HARTMUT ZINN
Heiles Land

LP/Talent 2372 155 '82年

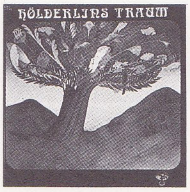
「ドイツのマイク・オールドフィールド」の異名をとるマルチ・プレイヤー、ハルトムート・ツィンが82年に制作した唯一の作品。その異名通り、アコースティック・ギターやキーボード等の各種インストゥルメンツを全て一人でプレイし、それを幾重にもオーバー・ダビングすることによって「ハージェスト・リッジ」にも通ずる内省的なサウンド・タペストリーが形成されている。手法から曲作り、フレージングに至るまでかなりのイディオムをマイクから学び取っていることは明白だが、マイクが持っていたある種の「気高さ」はここではほとんど感じられず、メロディはあくまで素直で優しい。本作の「コピー性」がほとんど気にならないのは、この両者間の感覚の微妙な「ズレ」に理由があるのかもしれない。（内田）



HERBERT JOOS
Daybreak

LP/Japo JAPO 60015 '77年
CD/Japo/ECM Records JAPO 60015 841 479-2

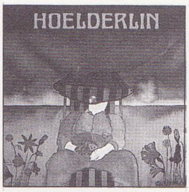
フリューゲルホーン／トランペット奏者、ヘルベルト・ヨースの名は結構古くから聞こえては来たのだが、いかんせん詳しい情報がさっぱりないまま現在に至っており、曖昧な紹介しかできない。少なくとも、ベルント・コンラートの最初期のキャリアにヘルベルト・ヨース・オーケストラへの参加が認められることから考えれば、既に相当の実績を持っているミュージシャンだろう。現在もコンラートと接触を持っていることと、本作の内容を併せて類推すると、本来はクラシック系のミュージシャンである可能性もある。'76年の録音に'88年の録音を1曲追加したCDが現在流通しているが、ここではシュトゥットゥガルト放送交響楽団の弦楽部がフィーチャーされ、非常に深遠な演奏を聴かせてくれる。（坂本）



HÖLDERLIN
Hölderlins Traum

LP/Pilz 2021314-5 '72年
CD/キング KICP 2730

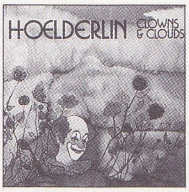
ドイツの神々は既に滅び去り、老廃して役立たずの偽善的な悪臭を放つ秩序に対し、ひたすら異国への郷愁に身を焦がす狂おしさに自らを棒げた詩人ヘルダーリンの悲劇を現代によみがえらせたジャーマンロックの一つの神話的アルバム。一人の詩人の、その生への原点を自己の内に環元せんとする瞬間を切実に謳い上げるナニー・フォン・グルンコウの憂愁に満ちたヴォーカルは、童話的色調を帯びたアルバムのトータル性を但うに余りにも効を成している。当時のシーンに、はかなくも咲いた一輪の花は、かつての神々への、滅びえた英雄への挽歌を民族感情の根拠たる象徴として受けとめることができる。残念ながら、セカンドアルバム以後は、このアルバムに見えるようなジークフリート以後の英雄の姿は見い出し得ない。（丸美屋）



HOELDERLIN
Hoelderlin

LP/Spiegelei 26 511-6 U '75年
CD/WMMS 041

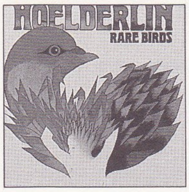
ヘルダーリンの通算2作め、スピーゲライに移籍し、グループ名の綴りをHoelderlinに変えての第1作めである。メンバーは大半が前作と同じであるが、トラッド色の強い1stから3年の時を経て彼等の音楽性はかなりの変化を遂げた。アコースティックス楽器の響きを生かした曲創りは以前からの持ち味であるが、本作以後はよりロック色の強い方向へと向かったのである。例えば本作のA①の曲などからは極度なまでに「太陽と戦慄」期のクリムゾンの影響がうかがわれる。彼等は以後'76年に「Clowns & Clouds」'77年に「Rare Birds」、そして'78年には〝シンフォニック・ロック・グループ〟ヘルダーリンの集大成とも言うべき2枚組ライヴを発表。が、以降は彼等も徐々に時流に乗った音創りを目ざした様だ。（城元）



HOELDERLIN
Clowns & Clouds

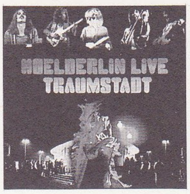
LP/Spiegelei 160.607 '76年
CD/WMMS 043

前作からバンド名を英語表記に替え、歌詩も英語にした彼等。サードに当る本作も、前作同様ぼかしを生かした水彩のジャケットが美しい。ギダリストのクリスティアンの手に依るこのジャケツトの光景一小川のせせらぎとその上を渡る風、揺れる花々、そして道化師一はエレクトリック・ピアノのオルゴールのような調べとヴィオラの絡みによる淡々とした流れと相まって、タイトルと3曲めの組曲〝Circus〟から想起させる郷愁感と叙情を聴き手に与える。ヴィオラ奏者が居ることから嘗てはCARAVANにも喩えられたが、全体を貫く感性はドイツならではのものだろう。ゲストのサックス&フルート奏者も良い味を出している。常にさりげない叙情を求めたこの時期の音は貴重。クラヴィネットの響きも懐かしい。（高山）



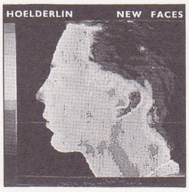
HOELDERLIN
Rare Birds
LP /Spiegelei INT 180.602 '77年
CD/WMMS 045

スピーゲライ・レーベルに移籍してからのヘルダーリンは、シンフォニック・ロック・タイプのグループとして安定したヴォルテージの作品を発表するようになるが、中でも'75年～'78年頃までが全盛期であり、この間「Hoelderlin」「Clowns And Clouds」「Rare Birds」という甲乙付け難い3枚のスタジオ・ワークを発表している。本作は、流石にトータルで4作目ということもあり、曲構成もこなれてきており、洗練度では一番水準の高い作品といえるのではないかと思う。全体的に軽めの印象で、ドロドロしたジャーマンくささがないので、ドイツ・ロック・ファンにはアピール度は低いだろうが、シンフォニック・ロック・ファンには高い評価を与えられるであろう1枚。 (山崎)



HOELDRLIN
Live Traumstadt
LP /Intercord INT 155602 '78年
CD/WMMS 047/048

ドイツを代表するシンフォニック・ロック・グループの一つ、ヘルダーリンのライヴ・アルバム。セカンド・アルバム「Hoelderlin」以降の彼らの活動の集大成的作品である。1977年10月24日、25日のWupperteler Opernhausの演奏を収録している。キーボード、ギター、ドラムス、ヴィオラ、ベースの5人のプレイは、とてもバランスが良く、ドラマチックである。比重は小さいもののヴォーカル・パートのややポップな感じも、彼らならではのもので味わいがある。ヴィオラという、当時のシンフォニック・ロック、シーンにおいて、一風変わった楽器を効果的に使い、独特のサウンドを作り上げたヘルダーリン。本アルバムを聴くことで、そのグループとしての総べてが理解出来る。 (賀川)



HOELDERLIN
New Faces
LP /Spiegelei INT 145.605 '79年
CD/WMMS 049

ヘルダーリン、6枚目（Traumを含む）のアルバム。Christoph Noppeneyのヴィオラを売り物にした、シンフォニック・ロック、グループ、ヘルダーリンは、その集大成とも言うべきライヴ・アルバムを発表して、事実上消滅した。アルバム・タイトル通り、新たな第一歩となった本アルバムでは、大幅なメンバー・チェンジがあり、Noppeneyも在籍していない。当然、音の方も変化しており、シンフォニック・ロック色は大幅に後退している。ヴォーカルとメロディアスなギターを中心にした、軽快なアダルト感覚のロックであり、耳に心地良いが、訴えかけてくるものは少ない。'70年代末、ドイツにおいても、プログレッシヴ・ロックが過去のものになったことを感じさせる作品である。 (賀川)



I.D. COMPANY
I.D. Company
LP/Hör Zu SHZE 801 BL '70年

I.D.とは後にFRUMPYの看板ヴォーカリストとなるインガ・ランフと御存知ダグマー・クラウゼの双頭ユニットの略。COMPANYの方にはFrank St. Peter(sax、fl)、Hans Hartman(sitar、contrabass)、Joe Nay(perc)、Wolfgang Kliegel(vln)の4人がクレジットされている。ハンブルグはWindroseスタジオでの録音。基本的にA面がインガ・サイド、B面がダグマー・サイドになっている。どちらも極端に'70年当時らしい内容だ。前者はブルース・ヴォーカル・タッチだが、それでもフルートが舞いシタールが響きボンゴが郎々と続く中に染まり、当然雰囲気は怪しい。一方のダグマーは完璧にキている。フリー・ジャズ～ミュージック・コンクレートに同調して既にA・ベアーズ並み。必聴なのに幻の1枚。 (松本)



IBLISS
Supernova
LP/Aamok 28 501-5 U '72年

ドイツはフランスと共にヨーロピアン・ジャズの中心地なだけに、'70年代はロックとの境界が曖昧だった。IBLISSもその種の微妙なところにある。楽器編成はsax & fl、g、b、ds、percで、サツクスのリード、ボンゴ等のパーカッションの多用が目立つ一方で、曲はフリーにはならずジャーマン・ロックにありがちな反復がベースになっている。一種、瞑想感がある特徴づいたジャズと言えるかもしれない。4曲の長編の大半が反復のずれを伴って、その上でリード楽器がソロをとる。1曲目がいきなりアフロ・ロック張りのボンゴ連打で始まり、やがてドラムに移行して、いつの間にかギターのバッキングが微妙に変化しながら色をつける、などその種の手法が、全曲共に効果的な使われ方をする。ジャズだとすれば特異だ。(松本)



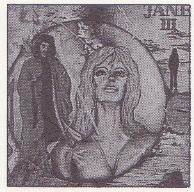
IKARUS
Ikarus
LP/Plus 4 '71年

古めのオルガン・ロックとしてB級ファン好みな音だ。曲調は割とハードな部分が多いが、ac-gのパートやストリングスも混ったりする。くれぐれも古臭い音には違いない。それでもジャーマン・ロックのシンフォニック寄りのアルバムとして、WINDの「Seasons」のような位置づけはできると思う。古めのジャズ・タッチの部分も多い。全4曲の収録でロング・ナンバー揃いではあるが、今一つ展開にとぼしくメリハリがつかないのは、この時期だからいたしかたないか。クラシックの要素はなく、ジャズ、ブルースの素地だ。幾らかフリー・タッチの瞑想感漂よう中間部を持つ大曲のB①の出来がいい。バンドは管楽器（sax、fl…）奏者を含む6人編成。これが唯一のアルバムになる。 (松本)



THE INTERGALACTIC MAIDEN BALLET
Square Dance
CD/Tiptoe TIPTOE 888804 '90年

THE INTERGALACTIC MAIDEN BALLETは'80年代中頃からドイツ国内で活躍している最高に歯切れのいいジャズ・ロック・バンドだ。ＣＤ作品としては'89年録音の本作と、ITMレーベルから'85～'86年録音の『THE INTERGALACTIC MAIDEN BALLET』('91)がリリースされている。参加メンバーが些か興味深く、same titleの方はベースにヴィートゥン・ヴィト、キーボードにクリストフ・シュティーフェル(MAX LASSER'S ARKの主要メンバー)が正式参加。そして本作にはあろうことかジョン・ゾーン(sax)が参加。これはジョン・ゾーンの参加した随一の正統派ジャズ・ロック作品だ。ジョジョ・マイアーは１歳からステージに上がっていたというスイスの生んだドラムスの逸材。今時のジャーマン・ジャズ・ロックの代表選手。(坂本)



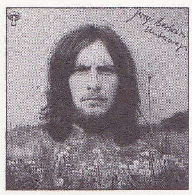
JANE
III
LP/Brain 1048 '74年

この頃までのジェーンは、混沌としたジャーマン・ロック的なサウンドが強く、ハード・ロックとして紹介してしまうより、プログレッシヴ・ロック・サイドのリスナーにも注意をうながしたいサウンドを有していた。音的にはキーボードはほとんど登場せず、ギター主体のサウンドなのであるが、コードをバックにリード・ギターがギュン・ギュンと泣くタイプではなく、思索的なギター・ワークがリスナーのイマジネイションをかきたて、形而上的な世界を感じさせる内容である。彼等のディスコグラフィーは、かるく10枚を越しているので、ドイツ本国では安定した固定ファンをつかんでいたものと思われる。ドイツ以外の国からは生まれてこなそうなサウンドを有するグループだ。(山崎)



JANE
Fire, Water, Earth And Air
LP /Brain 1084 '76年
CD/Metronome 831 748-2

ジェーンというグループは、本当にドイツ的なハード・ロック・グループだ。英米のグループのように熱くならない。淡々と進行していくその曲構成は好き嫌いを大きく分けそうだ。この作品は、タイトルの示す通り、「天地火水」をテーマにしたコンセプト・アルバムである。各曲の構成も比較的単純で、３つか４つのコードをくり返しながら淡々と進行していくタイプだ。しかし、不思議と聴いていてあきがこないのである。キーボードはうしろで白玉で流しているだけだし、本当にシンプルなのであるが、楽曲自体の創り方は無駄がない。そんなつきつめたシンプルさがジェーンの魅力といえるのかもしれない。個人的には本作が一番出来がいいように思う。(山崎)



JERRY BERKERS
Unterwegs
LP/Pilz 20 29131-6 '72年

WALLENSTEINの初代ベーシスト。このアルバムはWALLENSTEIN脱退直後もしくは、「Mother Universe」に並行して製作されたもの。早い話が「Cosmic Century」には居ない人。１曲目など、ほとんど「Mother Universe」調。クレジットを見れば、ユルゲン・ドラゼ(kbd)、ビル・マローン（el-g）がいて、これじゃあWALLENSTEINになって当り前。ドラセのkbdなどそのままだ。更にW&Wの二人もいて、Ohr＝Pilzではおなじみのディーター・デェルクスまでコーラスで参加している。まったく身内ノリだ。が、しかし、他のほとんどの曲はSSWふう。確かにソロ・アルバムだ。計８曲中約半分がWALLENSTEINを思わせる。とにかくドラゼがkbdを弾かないと、ちょいきついアルバム。(松本)



JESSICA
Jessica
LP/Knöterich KN 583 '75年

独の自主制作盤。おそらく唯一のアルバムであろうが、あまり知られていない。1900年前後のドイツの作曲家、マックス・レーガーの作品「４つのソナチネ」を編曲・演奏した内容。キーボード、ギター、ベース、ドラムのオーソドックスなインストゥルメンタル・バンド編成ながら、キーボードはピアノか電気ピアノ系の物以外は使用されておらず、所謂シンフォニック・ロックとは一種異なったサウンドである。むしろ軽快なジャズ・タッチのアレンジが印象的だ。しかし全体的に一本調子で、各メンバーのセンスと技術的な問題に不満が残る。(沢田)



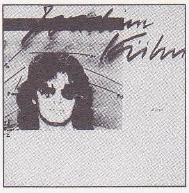
JOACHIM KÜHN
Cinemascope
LP/MPS BASF 21 22270-5 '74年

ヨーロッパジャズロック屈指の名盤。(CMPレーベルのトリガーであるJ.Kuhnは古くから活動するジャズピアニストだがロック色を感じさせるリズムセクションをバックに従えた作品も複数あり本作はそれらの中でも最高傑作。がっしりとしたリズムの上で暴れ回るJ.Kuhnの歪んだエレピが格好良い事この上ないが、更に何曲かではストリングセクションを大胆に導入し煽り立てる様が感動的ですらある。ストリングアレンジに実兄のR.Kuhn。ジャズファンからもロックファンからも敬遠されているジャンルだが傑作が数多く埋もれており、これはその中でも文句無く頂点だ。殆どまともにとり上げられた事が無かった本作をレヴュー出来るだけでも嬉しい限り。CD化と共にもう一度このような爆発する演奏も熱望する。(伊藤)



JOACHIM KÜHN & JAN AKKERMAN
Live
LP /Sandra SMP-2114 '81年(録音'79年)
CD/Inak 868 CD

当時の流れのせいかヨアヒム・キューンも又'70年代後半においては作品のソフト化が進み、低迷の印象が有ったのだがこの作品あたりから立直った様だ。ピアノとギター／ギター・シンセによるデュオ作で同一テーマによる即興を中心とした演奏がニテイク収められている。特に素晴らしいのはニテイク目、ストゥットガルトにおける演奏で前半の丹念に音をつむぎ出す繊細さからアッカーマンのソロを支えるバッキングを経てメロディアスながらも硬質なフレーズが鍵盤せましと走り回る指先から華麗にあふれ出たたみかける様は正にヨーロッパ最強のピアニストの名にふさわしい。一方のアッカーマンもヴォリューム奏法やえげつない早弾きで好演するもやや分が悪いか。尚、CD化の際一部カットされているとの事。　(中西)



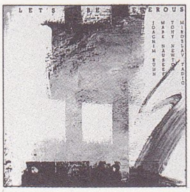
JOACHIM KÜHN
I'm Not Dreaming
LP/CMP 22 ST　'83年

Mark Nauseefの作品へのゲスト参加に続くCMPへの貢献の中でこのレーベルでの初のリーダーアルバム。数人のサポートの中にMark Nauseefの参加をみることが出来る。ジャズ、クラシック、現代音楽の要素を全て吸収したようなアプローチを持つ彼の傑作の中の一つ。「Personl Notes」のようなロック色は無いが、是非とも聴いて貰いたい作品だ。後のソロ作品やジャズトリオ編成に比べて複雑度、ひねくれ具合は全然高い。1曲、弦と管のアレンジメントで実兄Rolf Kuhnの名前がある。リズム隊が持つ揺さぶりを補ってなお余りある研ぎ澄まされた音の配列ひキース・ティペットの静の姿勢のそれに通じる。(伊藤)



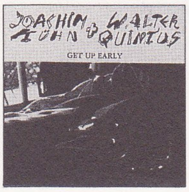
JOACHIM KÜHN
Dynamics
CD/CMP CD 49　'90年

このレーベルに彼はソロを3枚録音しているがその1枚。1曲目のエリック・ドルフィーのペンになる曲は名演奏「Let's Be Generous」にも収録されている。ライナーには「完全なインプロアルバムにすることも出来たが、より演奏の密度を高くするために作曲されたものを使った」とある。確かにティペットのような剃刀のごとく切れまくる印象は薄いが（キューンも同様の鋭さを持ったプレイヤーではある)、しっかりと構成され緩急自在な指さばきを生かすように構築されている。彼はジャズの世界に生きる奏者であり、このアルバムもいわゆるジャズなのでロックファンはその点に注意が必要。過去の演奏を知っているだけにロック編成での演奏も聴きたいと思っていたら「Let's Be Generous」だ。してやられた。　(伊藤)



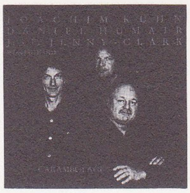
JOACHIM KÜHN, MARK NAUSEEF, TONY NEWTON, MIROSLAV TADIC
Let's Be Generous
CD/CMP CD 53　'91年

ヨアヒム・キューンがここまで本気にエレクトリックをプレイしたのは「パーソナル・ノーツ」以来だろう。アコースティックでも青山で（クソ高い）デートには絶対に向かないシリアスなフレーズをゴリゴリ連発していたがここでは完全に危険人物である。他のメンバーも負けてはいない。ブリブリうなるベースに異様に分厚い音のドラムス、更にはDARKでデヴィッド・トーンを食った男タディッチもここぞと過激に迫る。あっけに取られる間に一曲目の12分が過ぎる。続く曲も歪んだ空間の中で透明な音が響いたりヘヴィなビートがウニョーとよじれたりと終始過激なタッチで進行する。実に格好良いCMPきっての大爆発作。とにかく発散しています。　(中西)



JOACHIM KÜHN ＋ WALTER QUINTUS
Get Up Early
CD/Ambiance AMB 2　'91年

ジャズ・ピアニスト、ヨアヒム・キューンとCMPレーベルのレコーディング・エンジニア、ヴァルター・クイントゥスの連名アルバム。ピアノ・ソロと思って聴いたリスナーは間違いなく腰が抜ける。確かにキューンはピアノしか弾いていないのだが、わざわざクイントゥスが名を連ねている意味は大きい。曲のモチーフは殆どキューンが繰り出しているにも関わらず、アルバムの主役は寧ろクイントゥスなのだ。クイントゥスはサウンドボードを操り、音響と空間を縦横に編み上げ、信じられないような壮大なヴィジョン、広大無辺の音響構造を作り出す。この音楽は体験するほかない。騙されたと思って、1度聴いてみることをお勧めする。同じ顔合わせで『Dark』('88)がリリースされている。　(坂本)



JOACHIM KÜHN/DANIEL HUMAIR /J.-F. JENNY-CLARK
Carambolage
CD/CMP Records CMP CD 58　'92年
CD/ジムコジャパン JICL-89716

ヨアヒム・キューンがこっちを向いたミュージシャンであることを認めるのが最初の1歩だ。勿論、彼がヨーロッパ随一の才能あるジャズ・ピアニストであることは百も承知で、尚彼がこっち側の人間であると仮定することで、多くの素晴らしい発見ができる。どうせ日本のジャズ・ファンなど今までろくにヨーロッパ・ジャズを聴いてやしないのだ。遠慮することなど何もない。ダニエル・ユメール(d)、ジャン＝フランソワ・ジェニー＝クラーク(b)とのトリオは、それこそヨーロッパを代表するピアノ・トリオだが、WDRビッグ・バンド（このバンドにも要注目）との共演盤である本作など、伝統的でありつつ同時に衝撃的なほどに革新的でもある。ジャズを向きながら平気でジャズを突き抜けているのが痛快。　(坂本)



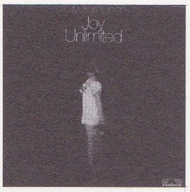
JOHANNES NEUMANN
Cultural Noise
LP/Drops F 668.734 '?年

80年代中期に自主制作されたアルバム。A面５曲とB面３曲からなり、トータルで35分弱の録音である。作曲から録音まで、Neumannひとりの作業による。タイトル曲は、Human Destinationというビデオ作品のサウンドトラックとして制作されたようである。戦争風景のようなカバーからは暗い印象を受けるが、温かみのあるロマンティックかつドラマティックな内容である。ピアノやシンセといった鍵盤楽器の演奏の上に、日常生活の環境音を重ねるという手法で構成されている。「映画のような雰囲気とともに私たちのサウンドの世界へ夢あふれる旅を」……と、各国語で書かれた解説は呼びかけている。捨てがたい魅力を持った、イメージ豊かな作品である。
(Helmut)



JONATHAN
Jonathan
LP/AAR 5052 '78年

Peter Garattoni(ds) とHelmut Grab(minimoog solina…) からなるデュオによるエレクトロニクス・ミュージック。キーボード作品と言った方がイメージが近いかもしれない。曲によってはベース奏者ともう一人のキーボード奏者が加わる。ジャケットの絵が示すように、タンジェリンやクラスター系のサウンドとは違って、SF仕立ての物語ふう。ストーリー性を感じさせる内容なので、むしろヴァンゲリスなんかに近いタイプだ。要するに音世界をつくる。ドラムがリズムをとりだしキーボードがメロディを弾き出すとイージーになるが、情景描写ふうの部分では楽しめる。'70年代後半らしく、参加するベースはチョッパーだったり、キーボード・トーンもすっきりとしたもので全体には流れ気味か。
(松本)



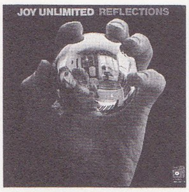
JOY UNLIMITED
Overground
LP/Polydor 2371 050 '70年

彼らの１作目。ヴォーカリストがKen Traylorに交代してからの３・４作目を先に聞いた人は、本作に戸惑いを覚えるかも知れない。(ちょっぴり哀愁を帯びたJOYの唄が中心のポップス路線なので、違和感があるかも知れない。)ガッシリとした体から発せられるJOYの唄は、時には力強く聴き手に迫り、またある時には情感豊かに語りかけてくる。このJOYの唄の上手さは、特筆すべき部類に入るのではないだろうか。他の５人のメンバーの演奏内容もプロとして安定したものであり、ストリングスなどと一体となって、唄をしっかりとサポートしている。プログレ色は無いが、純粋な気持ちでじっくりと味わいたい作品である。
(Helmut)



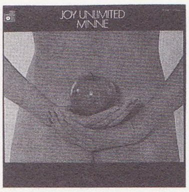
JOY UNLIMITED
Schmetterlinge
LP/Pilz 20 21090-1 '71年

デビュー作「Overground」ーポップ色が強いーを'70年に発表した彼等が２作目としてバレーの為に書きおろした作品である。内容の性格上トータル作と成っている所からもフルート・ソロを巧みに交える等、凝った作風が非常に親しみ易いメロディアスな曲調と相まって興味を引く。しかしながら全体像として浮き上がるものはジョイ・フレミングー本作後脱退ーのハスキー・ヴォイスによるソウルフルな唱法、'70年初頭特有のオルガンの音色、オーソドックスな演奏スタイルでありブラス・セクションさえ挿入されるといった英米スタイルのメロディー・ラインである。初期のアース&ファイアーの様な正統な国際的視点を備えていたが故にドイツ然とした要素は少ないが良質の資質を感じ取ることができる。
(松本)



JOY UNLIMITED
Reflections
LP/BASF 20 21686-1 '73年

女性ヴォーカルのジョイ・フレミングとギター、ウッドウインズ担当のクラウス・ナーゲルが脱け、新たにヴォーカル、ギター担当のケン・トレイラーが加わったジョイ・アンリミテッドの３rdアルバムである。オルガン、フルート、サックス等をフィーチャーした緩急自在の彼らのサウンドからは、ドイツ人気質よりもブリティッシュ・ロックからの強い影響が感じられる。しかしそれは二番煎じ的な軽薄さではなく、自己のスタイルとして完全に消化された安定した音楽性として表れている。全体的な魅力という点では２ndの「Schmetterlinge」もかなりのものだが、彼らの最も成熟した姿はこの３rdアルバムであると言えよう。彼らは'74年に本作と同傾向にある４枚め「Minne」を発表し解散した。
(城元)



JOY UNLIMITED
Minne
LP /BASF 1722331-0 '74年

JOY UNLIMITEDは当時世界中にいた良質のプログレッシヴ・ロック・バンドのひとつであり、初期KING CRIMSONの影響を受けた上で、独自の展開を見せ、特に表現に見合った適度のテクニックが当時のドイツにあっては非常に珍しく、なかなか好感の持てるバンドだった。結構アクの強い演奏をしても爽やかな印象が残るのはこうした優れたバランス感覚のおかげだろう。これは彼らの４作目に当たるが、圧倒的なインパクトを持つ２nd、端正な印象の３rdに比べると、全体に曲が小粒で、トータル性も希薄なため、若干印象が薄い作品だ。とは言え、曲の良さはやはり光る。それまでの英語に変わってドイツ語で歌っており、国内での足掛かりを築こうとしたのではないか、という気がする。
(坂本)



KADASH (Switzerland)
Senoi & Semangelof
LP /Dulunay Records DULUNAY 003
'91年

リード・セクションとアコーディオン、さらにはヴァイオリンやブズーキの絡みを乗せて、砂漠の乾いた風をはらんだリズムが疾走する。中近東的なテイストと都市のスピード感に溢れたインプロヴィゼーションは、決してしなやかな身のこなしと鋭い目付きを失わない。アモン・デュールやアジテーション・フリーをはじめ、ジャーマン・ロックの核に潜む中近東指向が、その憧れの重さに耐え兼ねて、あてどもない夢想へと自閉してしまいがちなのに対し、ここに収められた音は、雑踏のざわめきと路地裏の素早さに満ちている。それはフィルムのための音楽だからか。なお、メンバーのうちコー・ストライフ(sax、surna)は、イレーネ・シュヴァイツァー率いる女性ばかりの即興グループ〝カネイユ〟の一員でもある。　(福島)



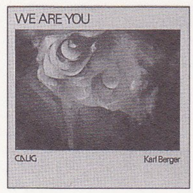
KALACAKRA
Crawling To Lhasa
LP/(private press) KST 2000　'74年

プライヴェート・プレス。幻の１枚として特にサイケ系のマニアの間で評価の高いアルバム。KALACAKRAとはClaus Rauschenbach (g、cnoga、perc、hca) とHeinz Martin (el-g、fl、p、vib、cel、vln、syn)とのデュオのこと。タイトルとジャケのマンダラそのままの音とでも言おうか、俗に言うアシッド・フォークとYATHA SIDRAH, FLUTE & VOICE等のインスト指向とが混り合ったような内容になっている。そのあたりはさすがドイツかな、と思わせる。東洋指向、瞑想指向が強く、ゴチャゴチャしているがTHIRD EAR BANDのようなニュアンスも少なくない。全６曲中、最後の１曲はアコースティック・ブルースの変形だが、他はどれもらしい。この種のアルバムでは出色の作。ブートLPも出回った。　(松本)



KALLE LAAR
(&TAKASHI KAZAMAKI)
Return To Street Level
LP/Ear-Rational ECD 1022　'90年

ミュンヘンを中心に活動する即興ギタリストであるカーレ・ラールは、各種エフェクトを併用して、水の中で色とりどりのセロファンが揺れうごめくような、あるいは閉店後の暗闇の中、オモチャたちがパーティを開いているような、実に繊細極まりない夢幻性に溢れたマイクロ・ミュージックを演奏する。本作は'89年の来日時にも共演を重ねた風巻隆(dr)との共演作。歩行／思索の呼吸に緩やかに寄り添いながらも、気紛れにそぞろ歩き、煎り豆の弾けるような散乱を続ける風巻独特のリズム・ワークと、打ち解けた親密な会話を交わしている。さらにＮＹダウンタウン・シーンからエリオット・シャープ、クリスチャン・マークレイ、トム・コラ、ニック・ディドコフスキーら豪華ゲストを迎えている。30曲入り。　(福島)



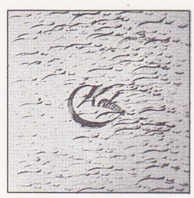
KARL BERGER
We Are You
LP/Calig CAL 30 607　'71年

水銀粒のような素早さで駆け抜けるヴァイブのソロが、やがてペーター・コーヴァルトの逞しく引き締まったベースとアラン・ブレアマンの乾き張り詰めたドラムス（木の樽を叩くような目の詰んだ実にいい音をしている）に併走される。あるいは、ピアノの内部奏法や小打楽器の生み出すパーカッシヴな空間の手触り。ゆっくりと目覚め、次第に手足を伸ばしていくスピリチュアルな勁さを秘めた声（夫人のイングリット・ベルガー）は、時に『サンセット・グロウ』のジュリー・ティペッツを思わせる。この独ハイデルベルグ生まれのヴァイブ奏者(バラフォン、マリンバ、ピアノ等も演奏する)は、72年以来ウッドストックに住み、コミューン的色彩の強いクリエイティヴ・ミュージック・ステュディオを主宰している。(福島)



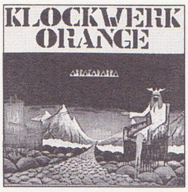
KARUSSELL
Entweder Oder
LP/Amiga 8.55-687　'79年

旧東ドイツのカルッセルはラヴ・ロック様のサウンドを得意とするポップ・バンドで、残された数枚の作品のうち本作の出来が最も良い。イタリア物等には見劣りするものの哀愁感の漂う繊細なフレーズ、やや民族がかった演奏、非常に泥臭いパート、片肘張らないソフトなナンバー…とかなり雑多な要素が詰め込まれている。グループの性格上、プログレッシヴな色合いはさ程濃くはないが、６分強のA①で泣きのメロディーが次々と続く他、B②、B④などでも質の良い歌が聴ける。シンフォニック系よりも、歌物の好きな人に薦めたい。　(江田)



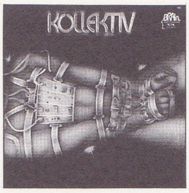
KEDAMA (Switzerland)
At Sunrise Studios
LP/Sunrise 076-1949　'76年

プログレッシヴ系の作品には必ずといっていい位、自主製作なり変形ジャケットという特典が付いたりして、しかも限定でプレスされた枚数が少なければ少ない程、極めて入手困難で高いプレミアが付くと相場が決まっているもの…。このケダマ（毛玉？）なるスイス出身のグループも、そういった部類に属するであろう。限定100枚で、決して変形ジャケットではないが白地にグループ名…etcがスタンプ印刷されている以外は全く不明という、正に幻と言うべき存在の作品。全４曲、'70年代初期のブリティッシュの土臭いオルガンとメロトロンが聴き物で、メンバー個々（恐らく、G.B.Ds.Keyの４人編成？）のプレイも安定して、スタジオライヴテイク一発録りとは思えない位の完成度を持った名作と言えよう。　(大関)



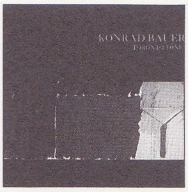
KLOCKWERK ORANGE (Austria)
Abrakadabra
LP/CBS S-81119 '75年

メロディーラインに重きを置いたクラシカルな音作りがなされている。注目されるのはクラシカルロックにトランペットを導入したということ。これが実に効果的でヨーロッパ独得の気品を醸し出す。彼らの創り上げた独自のスタイルといえよう。残念なのは音質の悪さ。まるで自主製作盤を聴いているようだ。「時計じかけのオレンジ」と名乗るこの４人組がデビューしたのは'75年。隣国イタリアのロック界は既にピークを過ぎ円熟期に入っていた頃だ。当時、オーストリアのロック界が環境づくり、人づくりという面で他の西欧諸国に比べて大きく立ち遅れていたことを如実に物語るアルバムだ。未完成のまま姿を消して行ってしまった彼らの、多分唯一の作品と思われる。（江田）



KOLLEKTIV
Kollektiv
LP/Brain 1034 '73年

唯一のアルバム。プロデュースはコニー・プランク。メンバーはJogi Karpenkiel(b)、Waldemar Karpenkiel(ds)、Jürgen Havix(g)、Klaus Dapper(fl、sax) の４人編成。内ジャケがド変形、穴あき５紙ペンシルつき。音はジャズ／ロックの中間を行きながらも、変形・変質しており、そこがマニアックな対象。ジャケットも。サックス、フルートはどちらも軽やかで油ぎる感はなく、そのフローティングなトーンが静けさを保ったパートで生きる。A②、B面１曲から成る前半部あたりにその特徴が出ている。地味ながらリード・ギターの一層眠気を誘いそうなトーンも効果的。全体にうっすらとかすんで沈み気味なサウンドになっている。（松本）



KONRAD BAUER
Toronto T ne
LP/Victo cd017 '?年

G・ゾマーらと結成した東独フリー・ジャズのオールスター・グループ〝ジノプシス〟を脱退後、彼にとって大きな経験になったのが、45秒の残響時間を有する地下貯水池跡でのコンサート『洪水の前に』への参加である。フレーズのずらしやエコーとの対話といった構成の通用する範囲を超えて異常に長い残響は、彼に周辺環境（気象）の操作とフィードバック回路の形成を迫った（この時のソロ・ライヴは『束の間の幸せ』(riskant) に収められている)。本作ではエレクトロニクスがそうした環境／操作回路の役割を果しており、真紅の牙を剝いて襲いかかるオーロラの雄大な凶暴さと、繊細な小鳥のさえずりの間を、ユーモラスな寸劇風の場面すら差しはさみながら、彼のトロンボーンは自在に往復してみせる。（福島）



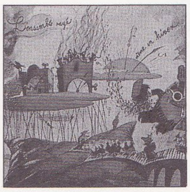
KRAAN
Kraan
LP/Spiegelei 28 778-9 U '72年

KRAANにはこのデビュー作の後、「Wintrup」「Andy Nogger」「Live」「Let It Out」「Wiederhören」「Flyday」「Tournee」「Nachtfahrt」「X」が続く。'83年までは活動していたようだ。このアルバムでの編成は、g & vo、b、sax、dsの４人編成。サックスの色添えが効果的だが、ジャズ色はあまり強くない。むしろ随所でちらつく中近東メロディが、比較的オーソドクスな曲調を変形させて、面白味を増す。どことなく'70年代初期のドイツ臭さをかぎとれるとは言っても鮮明ではなく、荒削りな演奏もあって今一つ焦点がしぼれない。少なくとも青から赤へ層状に変化していく油絵タッチのジャケットほどには、「何かある」と感じさせてくれない音楽だ。コンガの多用、B面でのラテン・ロックふう展開等もアルバムの色ではある。（松本）



KUNSTKOPFINDIANER
(Germany, Polland, Austria)
Kunstkopfindianer
LP/MPS 21 22019-2 '74年

ハンス・コラー(Sax)、ヴォルフガング・ダウナー(Key)、ズビニエフ・ザイフェルト(Vln、Sax)、アデルハルド・ロイディンガー(b)、ヤヌス・ステファンスキ(Ds) のドイツ／ポーランド／オーストリア多国籍編成のジャズ・ロック。一応、曲は有るが、各人のソロと集団即興が基調のセッション色強い物。と言ってもやりっ放しと言う訳では無く部分的には屈折したトーンも有る辺りはやはり当時のドイツか。作曲と大雑把な決め事と自然発生的な部分が交錯する等脈絡が無い割にはそれ程難解な感じを与えないのは暗黙の諒解に沿った音だからだろう。ニュージャズ系の混沌とした感触を残したジャズ・ロックとでも言うべきか。疾走感の有る音ながらどこかやりきれない暗さを感じる。（中西）



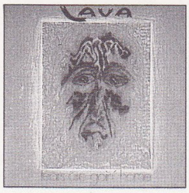
L'ENSEMBLE RAYÉ (Switzerland)
Même En Hiver
CD/(Fr.)AYAA Disques AYAA Cdt 0289 '91年

スイスの後発R・I・O参加グループDÉBILE MENTHOLは、２枚のアルバムをリリース後、消滅してしまったが、メンバー達は現在二つのバンドに形を変えて活動中だ。ひとつがモモ・ロッセル率いるNIMALであり、もうひとつがこのL'ENSEMBLE RAYÉだ。どちらもがDÉBILE MENTHOLより遥かにチェンバー色を強く打ち出しているのが面白い。RAYÉのリーダーはどうやらセドリック・ヴュイルと思われるが、元同僚のロッセル、ジャン=ヴァン・ユグナン、クリスチャン・アドー、ジル・ヴァンサン・リーダーやART ZOYDのディディエ・ピートンらが参加している。曲により編成が変わるので、セッションの性格が強そうだ。AYAAに所属していることからも判るように、軽妙洒脱な演奏が特徴だ。既に２ndもリリースされている。（坂本）



LANGSYNE
Langsyne
LP /Düsselton 2737 '76年
CD/Lost Pipe Dream LP 010 CD

黒地に白く浮かび上った細やかな装飾模様のカヴァー・デザイン。これで音が「ロード・クリシュナ」だったら、今頃ジャーマン・ロック・ファンの取り合いになっているところだが、実際はアコースティック・ギターを中心にしたフォーク・サウンドが基調。トリオ編成による自主製作盤だが、もちろん、部分的にはオルガン、フルート、琴、グロッケンシュピールなどを入れて結構おもしろくしている。フリー・パートやエフェクトこそ少ないものの、やはり東洋色のあるアングラ・ムードも漂よい、何曲かに瞑想ふうの静けさもある。（松本）



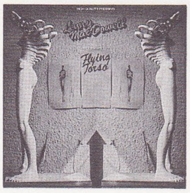
LAVA
Tears Are Goin Home
LP /Brain 1031 '73年
CD/TRC 027

初期Brainレーベルの単発作の一つ。1曲目のホークウィンド崩れには味もそっけもないが、他6曲はアコースティック・ギターを中心にしたフォーク色が強い。そのほとんどがトロ～ンとしている。そのあたりの要素を買われて近年の再発に混ったのだろう。バンドは6人編成だが、一向にバンド作を思わせる曲がない。元気のない弾き語りの背後からリード・ギターがこれまたトロ～ンと鳴り響き、ピアノがパラパラと木霊するように鳴っている。当然かすみがかったような沈滞した空気が醸し出される。アシッド・フォーク・ファン向けなのは言うまでもない。ラスト・ナンバーの〝Piece Of Peace〞がベスト・チェーン。タイトルも何だが、10分間を通してひたすらトロ～ンとしている。（松本）



LAWREN NEWTON (Austria)
2nd Room-2nd Conversation
LP/Extraplatte Ex 316143 '85年

アメリカ西海岸に育ち、オレゴン大学卒業後、西独シュツットガルトへ留学した彼女は、現代音楽を学びながら、即興ヴォーカルに関心を寄せ、'80年の第1作以来ウィーン・アート・オーケストラの「歌姫」を務めている。本作は急速なラップやリズミックなヴォーカリゼーションに加え、純正ジャズ・スキャットも披露したソロ第1作『Timbre』('82年)に続く2作目。ＬＰ2枚にわたるショーケース的な集大成となっており、幅広い音域・多彩な声音・リズミックな軽やかさ・小鳥になったり子供になったりと変幻自在の演劇性……端正に磨きあげられた女性即興ヴォーカルの典型がここにある。ハーモナイザーの導入（一部）は、そうした典型（無添加指向）からはみ出す部分として注目されよう。（福島）



LENNY MAC DOWELL
Flying Torso
LP /Ohrwurm OW2-12-48 '81年
CD/Blue Flame 40332

多種のフルートを駆使して作られた'84年のアルバム、「Balance Of Power」でシンフォニック・ファンにも新鮮な刺激を与えたレニー・マクドゥウェル。彼は主にジャズ／ニュー・エイジ系のフィールドで活動しているのだが、それ以前にはタルやZEPの曲などもカヴァーして「ロックンロール・フルーテイスト」の異名を取るという結構訳の分からん経歴を持つ。'81年にリリースされた本作はフュージョン色が強く、あまりシンフォニック・ファン向けとはいえないものであった。しかし'91年のCD化に際して再録され、「Balance～」路線のヴィヴィッドな作品へと生まれ変わっている。20種以上にも及ぶフルートを縦横無尽に操って作られる独特の空間美は実に心地良い。（内田）



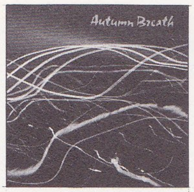
LENNY MACDOWELL
Balance Of Power
LP/Biber BI 6230 '84年

このレニイ・マクドゥウェルの創ったアルバムは従来のドイツ・シンフォニックのスタイルを打ち破る革新的なイメージを持つものである。彼はフルート、グランドピアノ、シンセサイザー類を一人でこなし、他にギター、ベース、ドラムを加えた編成でこのアルバムを制作した。雄大なストリングのWAVEの中から美しく、端正で、リリカルで、そして恐ろしく技巧的なフルートが聴こえてくる様は今まで耳にしたことのないシンフォニック・ロックの領域を感じさせる。強いていえば、ジャン・ピエール・アラルサンの「タブロウ・1」で聴くことのできるリリシズムをフルートで演じ切っているといえばこの作品をいくらか想像していただけるだろうか。録音クオリティも非常に高い。A面3曲。B面は16分の大曲が収録されている。インストゥルメンタル作品。（山崎）



LENNY MAC DOWELL
Live Tapes
LP/EMI 164 24 0123 3 '84年

タイトルが示す通りのライヴ・アルバム。従来通りの軽快かつクリアーなフュージョン・サウンドを核に、ストレートでロック色の強いものから女性ヴォーカル入りのポップなナンバー、更には後の作風につながるシンフォニックなチューンまであってかなり多彩。考えようによれば「雑多」な彼の音楽的嗜好を集大成したものとなっている。通して聴くと選曲にまとまりを欠く感もあるが、彼のフルート・プレイは音が鳴っただけで曲のイメージを一変させてしまうほどのインパクトを放っており、散漫な印象はあまり感じない。ジェスロ・タルの〝Locomo tive (Locomotive) Breath〞のカヴァーなども演っており、そこでのワイルドなフレージングは驚くほど本家のスタイルを継承したものである。（内田）



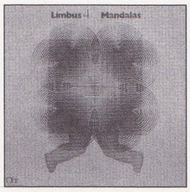
LENNY MAC DOWELL AND CHRISTOPH SPENDEL PROJECT
Autumn Breath
LP/Blue Flame 2186054　'86年

レニー・マクドゥウェルがピアニストのクリストフ・スペンデルと組んで制作したプロジェクト・アルバム。フルート、ピアノ、ドラムスによるトリオ編成でECMにも通ずる透明感に富んだ、澱みのないジャズ・ロック・サウンドを奏でる。時としてフュージョン風に聞こえないこともないが、B.J.リンダー張りのカミソリのようなフルートやピアノの的確なプレイが曲を決してありきたりには終わらせない。タイトル通りの「秋の息吹き」を思わせる、実に爽快な清涼感の残る好アルバム。結構節操のない音楽性をもつレニーが、ここでは実力派のジャズ系フルート・プレイヤーとしての実力を余すところなく発揮している。この後彼はマギー・ライリーを含む自らのプロジェクト名義でロック・アルバムを制作。（内田）



LILIENTAL
Liliental
LP/Brain 0060.117　'78年

MoebiusとPlankが中心になって制作されたと思われる作品。他に4人のメンバーがキーボードやギター、ベース、サックス、フルート、パーカッションなどで参加している。日頃から親交のある音楽仲間がConnyのスタジオで気軽に演奏したという感じで、自由闊達な雰囲気を持った作品である。また、ふわふわとした効果音やのんびりとしたリズムなどが、とてもくつろいでゆったりとした印象を与える。そこから少し踏み込んで聴くと、日常の時の流れを越えて、自然・宇宙の悠久といったものを意識させてくれるような内容である。ある意味で、時代に先んじたヒーリング・ミュージックを作り上げたのかも知れない。（HARMONIAのメンバーも同じような意図で「Deluxe」を作ったのであろうか。）（Helmut）



LIMBUS 4
Mandalas
LP/Ohr OMM 56 001　'70年

ZWEISTEINやPAUL & LIMPE FUCHSの「Sturmischer Himmel」等と並び、ジャーマン・アンダーグラウンド'70'sの更にマイナーな最もやばい所。これ以前にLIMBUS 3「Comic Music Experience」(CPM LP-S 001)があるが、あまりに幻で未聴。電子音楽やフリー・ジャズ等はまだかわいいもので、サード・イヤー・バンドがバッド・トリップして幻覚状態のまま遊んだようなドロ～ンと怪し気な空気、ここには一切の方則や創作めいたものがないだけに遊んで面白がる他手がない。そんな音楽の有り方だ。うざったさの極致、ドツボというやつ。このアルバムは民族楽器を使い時にエスニック・フリーになるが、即興の緊張感もほとんど生じない。脈絡なく本当にヒップでそののめり込みには絶大な陶酔感がある。（松本）



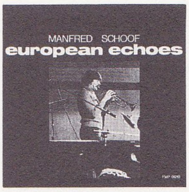
LINDA SHARROCK, FRITZ NOVOTNY, PAUL FIELD, ANDREA HAINDL, RICHARD ISAIAH, HAARRY KLAFFENBCK, NIKO POLYMENAKOS (Austria)
Jazz For Thinkers
LP/R.A.U. 1013　'85年

リフォーム・アート・ユニットは69年に『ウィーンからのニュー・ジャズ』をＥＳＰに録音する（未発表）など、オーストリア・フリーの草創期から活動しており（現在も）、ウィーン・アート・オーケストラ（ＶＡＯ）周辺と人脈を分けあっている。その中心メンバーは、ここに参加しているノヴォツニー(fl、reeds)、フィールズ(vn)とムハンマド・マリ(dr、sax)であり、彼ら三人はまた〝スリー・モーションズ〞なる別プロジェクトでも活動している。彼らの特徴は腺病質な線の細さと、室内楽的な緻密さ、ウィーンの退廃を深くたたえた（時にオリエンタリズムをさえ香らせる）曲想にある。ゲストであるリンダのゴスペルをルーツとする声に、彼らの音は藻のように絡みつき、オフェーリアを水底に引き込もうとする。（福島）



LUTZ RAHN
Solo Trip
LP/Teldec 6.23 663　'78年

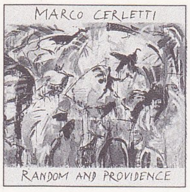
NOVALISのリーダー／キーボーディスト、ルッツ・ラーンのソロ・アルバムは、小品集ながら彼個人のロマンティシズムを凝固させた、何処か地方の一ロマン派作家の短篇集といった趣きがある。NOVALISに限らず、同時代のジャーマン・ロックのロマンティシズムは、空疎なドラマティシズムや虚飾、表面的な熱情とは無縁であるが故に、一般の支持を得るには至らないが、憂愁の中に漂う気品は確かに嘗ての文学作品と通底する。本作のプロデュースはNOVALISの多くのアルバム同様、自身が前衛ギタリストのアヒム・ライヒェル。タイトル曲などには現代的なポップ感覚も散りばめられているものの、宝石の煌き、両面ラストのドイツの森の自然描写とそこに静かに溶け込む様は、やはりロマン派と言えまいか。（高山）



MANFRED SCHOOF ORCHESTRA
European Echoes
LP/FMP 0010　'?年

16名編成のフリー・ジャズ・オーケストラによる本作は、ミュージシャンによる自主レーベルＦＭＰの記念すべき初作となった。ショーフはケルン音楽大学や西ドイツ放送局オーケストラの周辺に形成されたジャズ・サークルの中心人物であり、そこでの人脈（シュリッペンバッハ、ゲルト・デュデクtsら）を中心に、Ｄ・ベイリーg、Ｅ・パーカーts(英)、Ｈ・ベニンクdr、Ｆ・Ｖ・ホーフェp(蘭)、Ｉ・シュヴァイツァーp、Ｐ・ファーヴルdr(スイス)に加え、さらにイタリアからＥ・ラヴァtpが参加しており、タイトルは66年の『グローヴ・ユニティ』の投げかけた衝撃の反響とも読める。重厚・硬質・構築的なアンサンブルと、ハイ・エナジーで疾走感溢れるソロが飛び交う対比のスリルは今も色あせていない。（福島）

MARCO CERLETTI (Swizerland)
Random And Providence
CD/veraBra vBr 2039 2　'90年



さて、殆ど知名度はないであろうこの作品、元CIRCUSのGuitar/Bassプレイヤーのリーダー作。ゲストに当時の仲間Andreas Griederに元BLUE MOTIONのStephan Grieder、他数名。基本的にリズムセクションは居ないがそれは殆どのパートを彼がStickで演奏してしまっているからだ！彼自身「この楽器は技術的にGuitar、Piano、Bass、Drumsという４つのメイン楽器を包括している」と述べている。なるほど、彼ほどの技術を持ってこの楽器を操ることが出来れば全パートの演奏が可能になってしまうのか。曲自体はStick奏者特有の変態的フレーズが繰り返される中、爽やかな部分すらある上層メロディが乗る。曲造りの面白味は一歩ゆずるがそれでも面白いと思わせてしまう技術に基づいた説得力。　（伊藤）

MEMO
Captain Thunder
LP/Polydor 2417 110　'77年



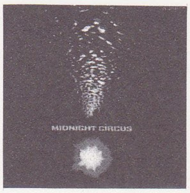
MEMOことMemo Kurtは何枚かのアルバムを出すマルチ・ミュージシャン、シンガーだが、他のアルバムが比較的オーソドックスなシンガー物なのにくらべて、このアルバムは意欲的な部分が目立つ。基本的に彼の、あたかもイタリアもののように甘くメロディアスな歌を中心にしたものには違いないが、アレンジがシンセサイザーやメロトロンを使ってとてもシンフォニックになっている。当然、ヴォーカルに合致して効果的なことは言うまでもない。ドイツとは思えないイタリアのような情の盛り上がりがある。メモはすべての楽器を扱っていて、マルチ・プレイヤー振りを発揮し、もちろん作曲も彼自身によるもの。ドイツで歌物というと他にほとんど思い浮かばないことを思うと例外中の名作と言っていいと思う。　（松本）

METROPOLIS
Metropolis
LP/Pan 87 439 IT　'74年



ジャズ、ロックの両方に煮えたぎらず、フリー・パートがあったりギミックが施されていたり、ドイツにはその種のどうにも中途半端なだけのアルバムが少なくない。METROPOLISなる６人編成が唯一残したこのアルバムもそのたぐい。大曲の部分部分にはキーボード・オーケストレーションをいかしたシンフォニック・パートがあったりして少し気をひくが、ありきたりなヴォーカル・パートや、アフロ・ジャズ・タッチのロック・サウンド等、吹っ切れない部分も多く、印象に残りにくいアルバムだ。いわゆるジャズ・ロックふうなのだが、一本調子なのが難。切れ味のないリズム・セクションの上でかろうじてキーボードがアグレッシヴなソロをとる辺りは聴ける。　（松本）

MIDNIGHT CIRCUS
Midnight Circus
LP/Bellaphon BLPS 19108　'72年



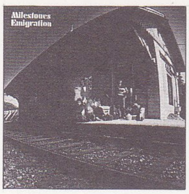
ベラフォン・レーベルと言うと、マイナー・ハード・ロックのイメージが強いが、数多くのハード・ロック・アルバムを創り上げた最強コンビ、P.ホークとD.ダークスがプロデュースしたフォーク・アルバムがこのミッドナイト・サーカスである。深い青の色調を感じさせるオープニングはそのダンディーなヴォーカルと物憂ぐ厳かな曲調からファンタジーあたりを思い浮かべる。アコースティック・ギターの爪弾きが主体であるが、アップ・テンポの展開を随所に挟み、メロトロンやトランペット、フルートを控え目に配することで曲に嫌味のないアクセントをつけ飽きさせない内容となっている。ピルツ系のフォーク・アルバムとは趣きの異なる、よりブリティッシュに近い音だ。シンフォニック色はあまりない。　（高森）

MILESTONES
Milestones
LP/Bellaphon BLPS 3311　'72年



「Emigration」の前、デビュー作。「Emigration」でのシンフォニックな色づけが嘘のようなフォーク・サウンド、小曲指向（？）。まるで'60年代末のブリティッシュ・フォークのように古くみずみずしい響き方をする。ac-gのアルペジオはあまり聴けない。やはり、弦楽器のサポートやピアノを入れた何曲かがアピールも大きく、もちろん女性ヴォーカルのリードする約半分の曲の方が受けるだろう。ほとんどはドイツ語で歌われているがゴツゴツした印象はない。この音なら、ドイツというよりもイギリスの土俵にのせた方が似合うが、のせた途端に一緒くたになって忘れられてしまいそうな気がする。でも完全にブリティッシュ・フォークの方向を向いた内容だ。ドイツでは割合珍しい。　（松本）

MILESTONES
Emigration
LP/CBS 65 738　'73年



マイルストーンズの２ndアルバム。ドイツからリリースされてはいるが、グループのメンバーは共産圏人とドイツ人と、オランダ人との混合と思われる。楽器編成はオルガン、ピアノ、メロトロン、チェンバロ、ギター、ベース、ドラムス等で５人のミュージシャンから構成されている。中期のオメガをプロデュースしていたクリスチャン・コロノヴネツがキーボードで参加している。Ａ面はソフィストケイトされた小品集でポップな面が強調されている。しかしこのアルバムの持ち味は何といっても大曲であるＢ面に集約されているといえるだろう。清涼感のある軽快なプログレッシヴ・ロックがそこには展開されており、リリカルなピアノやオーボエの響きが実に印象的である。１stはフォーク色が強い。　（山崎）



MINOTAURUS
Fly Away
LP /Tonstudio-Langendreer 1001 '78年
CD/Lost Pipe Dream LP 011 CD

ミノタウルスとは人間の体に牛の頭を併せ持つギリシアの伝説上の怪物のことで、少年少女を生にえにして食べたという。困り果てたミノス王はこの獣人をクノッソス宮殿の奥に閉じ込めた…。しかし、このアルバムの内容は、そうした神々しくも怪しげな雰囲気とはかけ離れている。ギターとキーボードを中心としたオーソドックスなハード・プログレッシヴ・サウンド。切々と歌い上げるヴォーカルが特徴的で、それにメロトロンが絡み何とも物哀しい雰囲気を漂わせている。多分自主製作盤と思われるが、国籍は不明。クレジットはドイツ語で書かれているが、それだけでは何とも判断がつかない。とにかく、グループ名だけは、〝謎のグループ〞に相応しいものと言えようか。近年CD再発された。 (江田)



MUMPS (U.K., Germany)
A Matter Of Taste
LP/MPS 68.169 '77年

マンプスも言ってもハットフィールズとは関係無い。これはジョン・サーマン、バール・フィリップス、ステュー・マーティンと言うかの伝説的なザ・トリオの三人にアルバート・マンゲルスドルフを加えたグループである。とは言えかってのザ・トリオの様な三者のみの一瞬のやり取りに命をかけた様なストイシズムから少し離れ、シンセ類を導入し、より具体的な音像を持ったパートもフィーチャーしている辺りはサーマン／マーティンのデュオ作やフィリップスのECMでの初期作とも共通する所。勿論、四者共フリー・ミュージック界の強者であるからにして随所にはさまれる集団即興では爆発的な所を見せるのだがそれよりもトラッド的なラインやスペイシーで叙景的な部分の整然とした印象が強い。 (中西)



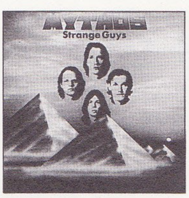
MYTHOS
Mythos
LP /Ohr OMM 556 019 '71年
CD/(Fr.)Spalax Music 14879

ミソスの1st。メロディアスで確実なワークのベースに舞う様なフルートが絡みメロトロン、シタール等が色彩りを添えるといった幾分暗さのある深遠な趣きとハード・ロック・スタイルのギター、ドラムによるパートが統一された音色で噛み合いを見せている。B面のシンセサイザーによる戦闘機の飛来音とドラムによる発砲音、その後に現われる鳥の囀りと鐘の遠鳴り、妙にメロディアスな曲調は視覚的でもあり、この時期のドイツ・ロックに有りがちな曖昧さの少ない安定した作品である。ディーター・デェルクスのプロデュース。STEPHAN KASKE(フルート、ギター、キーボード、ヴォーカル)をリーダーとし4年後に2nd「Dreamlab」を発表。その後、VENUS、SKYレーベルに各2枚のアルバムを残している。 (松本)



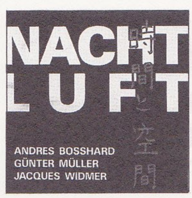
MYTHOS
Dreamlab
LP /Kosmische Musik KM 58.016 '75年
CD/(Fr.) MSI Spalax 14206

MYTHOSは'70年代に数枚のアルバムを残しているが、やはり'71年の「Mythos」と続く2作目のこのアルバムがいいと思う。1作目はオリジナル・リリース元のOhrレーベルの中でも異色な程、ストーリー仕立ての完成度を目指したコンセプト作だったが、こちらはフルートやac-g、Kbdを多用して、1作目以上のフローティングなサウンドを押し出している。コスミッシェ・レーベルに独特の音、響き方が心地良く、特にエコーを使った何曲かは、その特徴がよく出ている。一方でvo、el-gの力量不足も否めず、全体には1作目のような明確かに欠けるのも事実。1曲目の宇宙遊泳をするようなイメージなどは、かなりいい線を行っていると思うのだが。バンドの方向性がやや曖昧に感じられる。 (松本)



MYTHOS
Strange Guys
LP/Venus V78 MY-F1003 '77年

ミソスのサード。従来の彼らが持っていたハード・ロック的な面が強まり、そこにシンフォニック・ロックの要素が加わって、以前の作品とは異なったサウンドになっている。リズム・セクションはシンプルではあるが、確実なもので、ハードなギター、メロディアスなシンセ、目立たないが効果的なキーボード、節々と唄うヴォーカル等を盛り上げている。曲も変化に富み、よく考えられた構成になっている。他を圧倒する個性やスケールの大きさという点で見れば、所謂名盤に見劣りするし、プロ的音作り故に、自主製作盤のようなマニア受けする味わいもないが、ベテラン・ミュージシャンならではの無駄のない、まとまりの良い音作りになっている。地味ながらも出来の良い作品である。 (賀川)



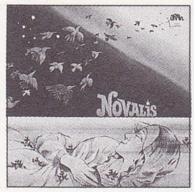
NACHTLUFT (Switzerland)
時間と空間
LP /Jazz & Now 5/For 4 Ears CD 103 '?年

彼らは空間を多方向に用い、時には観客席を3人が囲んで演奏を始める。ジャック・ヴィドマーとギュンター・ミュラーの2ドラムスの間に張られた空間に、アンドレス・ボスハルトがカセット・マシーンやコンピューターを操って、既製音楽やニュース放送の断片、現実音、電子音響やノイズを投影し組み込む一方で、この音風景を先の二人がメタリックなノイズで切り刻み、さらに加速していくのが彼らの基本的方法だが、その間にもリズムと音色を巡るスピーディで繊細な対話は止まることなく増殖を続けている。即興演奏が密度を増し、どれほど加速されても、冷やかな感触と音の飛翔するスペースを失わないのが彼らの素晴らしさと言えよう。なお、本作は中村邦男氏の招聘による来日時のライヴ録音である。 (福島)



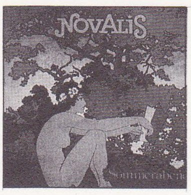
NOVALIS
Banished Bridge
LP/Brain 1029　'73年

デビュー・アルバム。Heino Schünzel（b）、Jürgen Wenzel（vo、ac-g）、Lutz Rahn（kbd）、Hartwig Biereichel（ds）での録音。デトレフ・ヨーブ（g、vo）はまだ参加していない。ジャーマン・シンフォニック・ロックというには'73年らしくおぼろげなサウンドだ。ノヴァリスは、メロディアスな空気を醸すタイプの音楽が特意で、以後もこれは基本的な所で変っていない。A面全てを使ったアルバム・タイトル曲を始めとして、FAITHFUL BREATH等に共通するメロディ加減、ちょっとした催眠作用、なだらかに変化する曲調、等がたっぷり収録されている。オルガンを中心にしたキーボード類の味つけがきいたサウンドだ。ノヴァリスであると同時に、ドイツの'73年頃という印象も強くある。（松本）



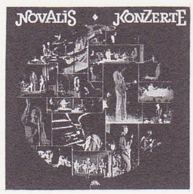
NOVALIS
Novalis
LP/Brain 1070　'75年

1797年5月13日、詩人ノヴァーリスは早逝した婚約者ゾフィーの墓前である神秘体験――生と死、可視世界と不可視世界の合一に関わる霊感を得た。ならばこのジャケットで眠るように横たわる少女は、詩人に夜と死の霊感を授け、詩人としての第二の誕生を促したゾフィーだろうか。シンガー、ユルゲン・ヴェンツェルが脱け、デトレフ・ヨーブ(g)と後にNENAのメンバーとなって我々を驚かすカルロ・カルゲス（g、key）を加えた本作もセルフタイトル通り彼等の第二の誕生を示すものだ。詩人ノヴァーリスの詩に曲を付けたドイツ語による憂いのあるヴォーカル、ブルックナーの交響曲をテーマとしたシンフォニックなインスト。リリカルな歌心とデリケートな情感に彩られた彼等の音楽はここより始まる。（高山）



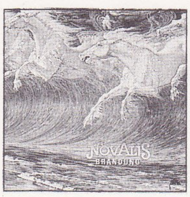
NOVALIS
Sommerabend
LP /Brain 1087　'76年
CD/Brain 841 354 2

76年に発表された3枚目。メンバーはルッツ・ラーン(kyd)、デトレフ・ヨーブ(g)、ハルトヴィッヒ・ビーライヒェル(ds)、ハイノ・シュンツェル(b)の4人でプロデュースはアヒム・ライヒェル。グループ名は19世紀ドイツロマン派詩人のフレードリッヒ・ノーヴァーリス（1772～1801）から採られ、歌詩も彼の詩を使っている。「音の均衡を保つ為に、誰一人勝手なソロ・プレイはしない」というメンバーたちの言葉通りグループ全体の音をトータルなものに仕上げていく方向をとっている。こうした彼らの方法論が最も完成された形が本アルバム「ゾンマーアーベント」（夏の夕暮れ）である。しかしアレンジ面ではセカンドの方が優れている。それは恐らくゲストのカルロ・カルゲスによるものだろう。（いわね）



NOVALIS
Konzerte
LP/Brain 0060 065　'77年

ラヴェルの〝ボレロ〞で始まる'77年のライヴは、前半にセカンド、後半にサード「Sommerabend」からの曲を収めた、定石通りこれまでの歩みの一まとめと言えよう。勿論NOVALISは、と言うより'70年代のジャーマン・ロックの大半は技巧を売り物としていない。ドイツに技術的にもメンタリティの点でもYESに相当する存在が見当らないのはむしろ理の当然だろう。音質自体も今の基準からすれば決して良い方ではないが、それらは本作の価値を貶めるものではない。各楽器とドイツ語によるヴォーカルのナチュラルでイマジネイティヴな響き。特にサードの大作2曲ではゲルマンの森を往くような、夏の宵の幻想を再体験させてくれる。本作から名を連ねたフレート・ミュールベックのフルートも効果的。（高山）



NOVALIS
Brandung
LP/Brain 0060.094　'77年

ルッツ・ラーン(key)、デトレフ・ヨーブ(g、Vo)、ヘルトヴィッヒ・ビーライヒェル(ds、Perc)、ハイノ・シュンツェル(b、Vo)、フレート・ミュールベック(Vo、fl、g)というラインナップも固まり、充実した内容の第5作。ラファエル前派～アール・ヌーヴォーの画家ウォルター・クレーンの「海神の馬」に包まれ、セカンド、サードに続き詩人ノヴァーリスの作品を2編採り上げている本作から感じられるのは、スケールの広がりと力強さだろう。夢想の繊細な表現から、夢の現実化へ。片面を占める大作の構成力、そして詩人ノヴァーリスの未完の代表作『青い花』に収められた詩〝Astralis〞を彼等は力強く歌い上げる。「愛の国は開かれた／ファーベルが紡ぎ始める／世界な夢となり、夢は世界となる」と。（高山）



NOVALIS
Vielleicht Bist Du Ein Clown?
LP/Brain 60.164　'79年

街角のひなびたヴァイオリンに導かれて本作は幕を開ける。この調べに象徴されるように、神話的世界や宇宙をテーマとした前作に対し、ここではヨーロッパ的な、そして市井の哀感と郷愁が打ち出されているようだ。旋律の中を過去の幻影、今はもういない人の影がふっと通り過ぎて行くような。今回はノヴァーリスではなくシラーの詩を基にし、ピアノをバックに歌う終曲〝Die Welt Wird Alt und Wieder Jung〞（移りゆく世界）の淡く儚い夢幻性と憧憬に彼等の真骨頂が見出せる。ストレートな曲想が目立つ中で、淡々としたリズムの上を汽車の効果音に合わせキーボードとギターが流れるインスト〝City-Nord〞（北の街）は、タイトル通り不思議な冷たさが印象的な異色作。余裕の感じられる好盤と言えよう。（高山）



NOVALIS
Flossenengel
LP /Teldec 6.23.980
CD/(U.K)Castle CLC 5052　'79年

ブレインを離れ、アホーンに移籍して第一弾。大海を泳ぐ鯱アトランテの物語を描いたエコロジカルなメッセージのトータル・アルバムとなっている。総べての歌詩をヴォーカルのフレートが手掛けていることから、コンセプトの主導を彼に委ねたことも伺えよう。甘美かつシンフォニックなインスト〝Atlante〟で始まる本作は、FLOYDやCAMELにも通じる、人をふっと異界へと誘うような泣きのギターや、時にこれまで以上に力強い歌と演奏を聴かせ、彼等がより開放的な方向に進んでいることを示しているが、その魅力の核を成すのは、やはり中盤で聴けるドイツ古謡の流れを汲んだ〝歌〟だろう。アコーディオンのようなシンセをバックに歌うタイトル曲など、まさにドイツならではの香りがする。（高山）



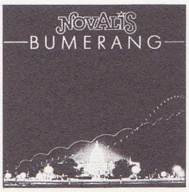
NOVALIS
Angenblicke
LP /Teldec 6.24.529　'81年
CD/(U.K)Castle CLC 5054

'80年代を迎えたNOVALISの８作めはコンパクトでキャッチーな曲をも収めた小品集であった。それは同時期のCAMELやMOODY BLUESが見せた指向性とも一致するが、ドイツ的な情感と夢見るような雰囲気は失われてはいない。何より本作の全体の構成は詩人ノヴァーリスが『青い花』への遺稿として書き残した草案の中の「童話。海。星々の図——撒りまかれた滴——北天の光——雲の国。こだま。変容した聖堂——花園に変わる。不死鳥。スフィンクス。夢——そして揺り籃」という一節を思わせる。夢幻的なキーボードによる〝Danmark〟〝Mit den Zugvogeln〟、叙情的なヴォーカル曲の〝Als Kleiner Junge〟〝Herbstwind〟と粒揃いの佳品ではないだろうか。ジャケットはナビ派の画家F・ヴァロタンによるもの。（高山）



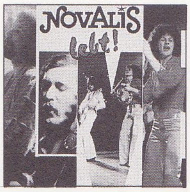
NOVALIS
Neumond
LP/Vertigo 6435 150　'82年

タイトルは「新月」の意。オリジナル・メンバー、ハイノ・シュンツェルの脱退により、ベースは元SFFのハインツ・フレーリンクが弾いている。曲は現代的な響きを持つものが多くなったとは言え、全体を支配するのはこれまで以上に夢幻的な色彩である。特に８分の〝Nachttraum〟は後期のNOVALISでは屈指の名曲ではないだろうか。アコースティック・ギターとフルートによるイントロ、霧のようなシンセサイザーとヴォーカル。この曲からラストの〝Blauer Morgen〟へと至る、夜のかけらが少しずつ散らばり、空気がだんだんと青くなる夜明けの情景をそのまま写しとったかのような流れ。後期の、そしてある意味ではNOVALIS最後の輝きと言えよう。何処か心霊写真を思わせるジャケットの色合いも美しい。（高山）



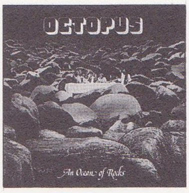
NOVALIS
Bumerang
LP /Teldec 625892　'84年
CD/(U.K.)Castle CLC 5055

NOVALIS事実上のラスト・アルバム。それにしては彼等本来の魅力に欠ける作品集である。日常性を題材に取ったヴォーカル・ナンバーは、例えばイタリアのPOOHであればカラっとした抜けと明るさが魅力となるのだがドイツ気質の（？）ペシミズムとメランコリーが印象を地味で昏いものとし、ポップとしても中途半端、ロマン的な情緒が香るのはフレートのフルートをフィーチャーした〝Spazieren im Morgen〟（朝もやの逍遥）位という結果になってしまった。国内盤ライナーでデトレフ・ヨープが書いているように、音造りには凝った箇所も見出せるのだが。これまで実は最もドイツ・ロマン派的な曲を書いていたデトレフの曲が収められていないのも一因かも知れない。プロデュースはルッツ・ラーン。（高山）



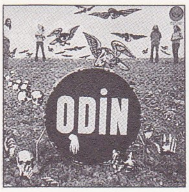
NOVALIS
Lebt!
CD/CSC 7090　'93年

正規盤として'93にリリースされたNOVALISのライヴ。再結成による新譜ではなく、'81年から'84のライヴに元メンバーのルッツ・ラーンがリミックスを施し、同じくヘルトヴィッヒェルがライナーノートを添えたもの。収録曲の多くが'80年代に入ってからの小曲ということもあり、シンフォニック・ロックとしての観点では大曲中心だった先のライヴ・アルバム「Konzert」に及ばないが、時代に沿ったコンパクトで時にモダンな色合いを見せる作風の中にも、ロマン派の代表詩人を名乗るだけの叙情とロマンティシズムの残響は聴き取れる。「Augenblicke」や「Neumond」収録曲の演奏が個人的には興味深い。それにしてもジャケットのフレート・ミュールベックの出立ちは殆どジョー山中だ。（高山）



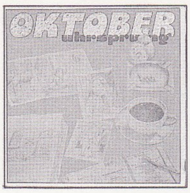
OCTOPUS
An Ocean Of Rocks
LP/Sky 016　'78年

１枚目「The boat of Thoughts」（SKY 009）に続くオクトパスの２枚目、ドイツらしさはあまり感じられず、むしろブリティッシュロックに近い音である。ベガーズオペラの女性ヴォーカル版といったところになるだろうか。腰の入ったオルガンの音といい、気合い200％の歌といい、A①は非常にカッコイイ。ただし、女か男かよく判らない声質は好みの別れるところであろう。メロトロンも顔を出す１枚目と本作はなかなかの好作である。３枚目「Rubber Angel」（SKY 035）は渋いオルガンこそ健在であったが、曲も短くおてんば娘のハードポップに成り下がってしまっているのが残念だ。３枚目以降は他レーベルから12インチシングルを出している。（小林）



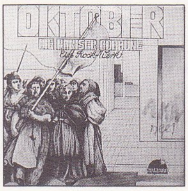
ODIN
Odin
LP /Vertigo 6360 608 '72年
CD/Repertoire REP 4230

手がはえていたり目が飛んでいたりと、ごちゃごちゃとしたジャケットを見ながら、ハード・ロックと言うには走りも重みもなく、そうかと思えばE. L&Pが思いっきり体調を崩したような早いパッセージのユニゾンが入ったり、レズリーを通したオルガンをバックに吹っきれないギター・ソロが乗っていたりするこの音を聴いていると、とにかくドイツだと思ってしまう。ODINにはジャーマン・ロックのドグサレの面白さがある。桶を叩いているようなスネア・ドラムのパタパタという音など、最近の人には不思議に思えることだろう。ザッパ調の小曲あり、フォーク・サウンドありと少々ごった煮。また、オルガンを弾きまくるというロング・ナンバーもある。総じて古臭いサウンドだ。つかみ難いが面白味はある。 (松本)



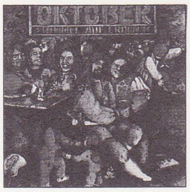
OKTOBER
Uhrsprung
LP/Unsere Stimme US-0024 '76年

計3枚のアルバムを残したOKTOBERのデビュー作。人をおちょくったようなギミックを節々に組み込みながらトータルに聴かせてくれるシンフォニックだかエキセントリックだか、つかみ難い内容だが、2作目以後の冗長さはない。系譜としてはFLOH DE COLOGNE、もしくはエイプリル・レーベル系のがさつい感触の音ながら、アルバムの完成度は結構高い。8人編成という大所帯からもうかがえるように、雑多な曲調が数珠つなぎになっている。意外にストーリー仕立てのようにも思える。結構計算された内容だ。ドイツ語のゴツゴツした耳ざわりも、このアルバムには似合っている。歌詞の比重も少なくないので、意味がわかれば何か意図的なものをつかめそうだが、それは音の方にも表れていそうだ。 (松本)



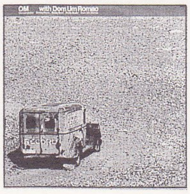
OKTOBER
Die Pariser Commune
LP/Antagon ALP 3211/1-2 '77年

内容が先きか、表現が先きかは、あらゆる表現活動の永遠の命題であるが、(テクニックのみを云々する人も多い)このアルバムはその問題を考えさせるような作品。前作「ばね時計」では一人の人間の階級的認識をテーマにしていたが、今回は1871年の普仏戦争後のパリ市民の烽起、パリコミューンに題材をとったトータルアルバム。この間にメンバーは2人変更して8人編成。内容はキーボードを多用したプロパガンダですばらしい出来となっている。材を過去にとったせいか、いささか哀調を帯びて1stのアグレッシヴな姿勢がうすれたような気もする。〝敵対〟音楽集会という名の過激なレーベルから出された2枚組。この後にも「Himmel Auf Erden (ES2006)」を発表している。 (木野)



OKTOBER
Himmel Auf Erden
LP/Eigel Stein ES 2006 '79年

「Die Pariser Commune」に続くオクトーバーの3枚目。パイプオルガンに導かれるミサ風のコーラスでこのアルバムの幕は切って落とされる。シンフォニック・ロックあり、ロックンロールありと焦点がしぼれていないが、B面はシンフォニック・ファンならすんなりと受け入れることができるであろう。ただし、ジャーマン・シンフォにありがちな甘ったるさや夢幻の世界とは無縁なのでそのつもりで接して欲しい。このオクトーバーは特に歌が上手という訳でもないのに歌の部分を重視しているので、ドイツ語がわからなければドイツ語のゴツゴツした印象が強く残ってしまうかもしれない。本作を発表した後に活動を停止した。 (小林)



OM (Switzerland)
With Dom Um Romao
LP/JAPO 60022 '78年

スイス・ジャズ・ロック界の最重要人物クリスティ・ドーラン(出身はアイルランド)。彼のキャリアの原点をなすのがこのOMで'72年から'82年の間に五枚の作品を残している。四作目にあたる本作ではタイトルに見られる通り元ウェザーリポートのドン・ウン・ロマンが全面的に参加、バンドの音に空間的な拡がりを与えるのに貢献している。本誌50号にもあった様にエレクトリックな編成で自然発生的なジャズ・ロックを奏する彼達のスタイル自体は割とありがちな物でそう言った意味ではさほど突出した存在では無かったかも知れないが、不動のメンバーによる息の合ったコンビネーションによる伸びやかながらも過不足無く安定した演奏自体はかなりの魅力を持っている事もまた確かでもある。 (中西)



OUGENWEIDE
Ougenweide
LP/Zebra 2949009 '73年

ジャーマン・トラッド/ロック。この筋のバンドとしては古くから活動し、9枚のオリジナル・アルバムを出したこともあって、比較的知名度のあるグループ。これはデビュー作に当るもので、2作目以後バンドのヴォーカルを受け持つミンネ・グラウは、まだ加わっていない。こちらはBrigitte Blundという女性が受け持っている。どちらも澄んだ歌声を聴かせてくれるのでさして大差ない。ジャケットの中世のエッチング、その醸し出すイメージが気になるヨーロピアン・フレイバーは、何曲かでずばり出ている。なぜかリズムがワン・パターンなロング・チューンよりも小曲の方が印象がいい。中世音楽ふうに来る。後のエレクトリック色の強さからは遠いアコースティックな仕上りとその感触が温かい。 (松本)



OUGENWEIDE
All Die Weil Ich Mag
LP/Polydor 2371 517 '74年

メイン・ヴォーカリストがミンネ・グラウに交代してのグループ2作目。前作の中世音楽風味とアコースティックな感触とのブレンドとは微妙に違った印象がある。トラッド半分、自作半分の割合だが、このバンドはもともとトラッドの土臭さからは距離があり、洗練されているところに、この2作目に来て徐々に芯のようなものが見え始めている。つまり、リズム・セクションが前作の〝ついで〟ではなく、曲の骨子を担う〝部分〟になってきたこと、そしてグラウの声が前任に比べてやや太いこと、などに関係しているのだと思う。少しずつ力強さが出てきた。ゲストのチェロ、そしてバンドのフルート等も曲調を滑らかにして、全体にこなれてきている。それでいてまだアコースティックな感触が強い。代表作の一つに挙げたい。（松本）



OUGENWEIDE
Ohrenschmaus
LP/Polydor 2371 700 '76年

OUGENWEIDEは、この年2枚のアルバムを出し、翌78年には2枚組のアルバムを出したことからも、この時期がバンドのピークだったかもしれない。このアルバムは次作「Eulenspigel」に近い内容になっている。前作のアコースティック・タッチは後退し、曲／演奏の芯・力強さが、いい意味でエレクトリックへとスライドした感がある。1曲目の小ダンス・チューンのパワーで読める気がするが、el-pの使い方も曲になじみ急にカラフルになった印象だ。2曲目、3曲目といい曲を書いていると思う。曲の山もあり、中世／トラッドの味をそこなわないとてもメロディアスな自作曲だ。ハンマー・ダルシマーとコーラス等からなる4曲目など宗教曲のよう。他にも出来のいい曲が多い。エレクトリック・トラッド色濃厚。（松本）



OUGENWEIDE
Eulenspiegel
LP/Polydor 2371 714 '76年

'73年以来8作品を発表する彼等の4作目。その曲調、編成から仏のマリコルヌ同等本来トラッド・サイドで語られているグループである。エレクトリック楽器を多用し歯切れ良いドイツ語のヴォーカルを骨っぽいリズム楽器に乗せたダンス・チューンを得意とするが本作にはアコースティック楽器の素朴な響きがバランス良く保たれておりバラッド調の曲からもオリジナリティーを感じ取れる。また紅一点ミンネ・グラウもトラッドを歌い熟すに相当する声量を保持している。驚くべきは大半が自作曲であること。ホーン、フルート、ハーモニウムの使用法、曲調はトラッドのそれと差がなくかなりの力量が伺い知れる。幾分ドラムが耳につくがドイツ産ヨーロピアン・エレクトリック・トラッドの洗練された風味が味わえる。（松本）



P.P. ZAHL
Alle Türen Offen
LP/Antagon ALP3216 '78年

自主製作盤。A①の語りからA②の22分以上の大曲は、アコースティック・ソロ（フラメンコ・スタイル）と弾き語りが中心。ジャケットからも窺えるようにベルリンの壁にまつわる政治色の濃いメッセージ的な歌を聞かせる。社会派バンドOKTOBERやJOY UNLIMITEDのメンバーがバックを務め、前者のリーダー格キーボード奏者ピーターが音楽面において中心となっている。B面はA面に比べ癖のあるシンセサイザー・ソロや、テクニカルなギター・ソロが盛り上げる。そして実験色のあるアレンジが施されインストゥルメンタル重視になっている。（吉野）



PANCAKE
Out Of The Ashes
LP/Blubber LIPS BL 801 I '78年

パンケイキは75年にファースト「Roxy Elephant」をリリースし、78年に本作をリリースして解散したバンドである。ファーストは76年《OFFERS OMP 7602》と'78年《BLUBBER LIPS BL 804 H》に再発されているが内容のほうはどこにでもあるようなロックを演っていてさして注目すべきアルバムではない。が本作になるとトリトナスのペーター・K・ザイラーを迎えて麗美なシンフォニック・ロックを演奏している。灰の中から甦る不死鳥を描いたジャケットも必見であろう。前衛的なイメージの濃いドイツ・ロック・シーンの中で、このタイプのシンフォニック・ロックを奏するバンドはそれ程多くはないが、決して見過ごしてはならない1シーンではないだろうか。（山崎）



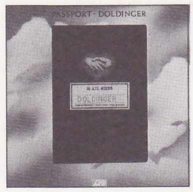
PARZIVAL
Legend
LP/Telefunken SLE 14 635-P '71年

パルジファルは古楽器（ヴァイオリン、フルート、チェロ等）を多用するアンサンブル・グループである。本作は彼等のファーストにあたるもので、翌72年には「Barock《Telefunken SLE 14685-P》」を発売し解散してしまう。75年にこの2枚をカップリングした盤「A German Rock Legend《NOVA 6.28337》」が再発されたがこれも現在では廃盤である。現在彼等のサウンドを聴こうとするのなら81年に発売された「Rock In Deutschland Vol 9《Telefunken 6.24 610 AG》」に収録されているのを入手することができるかもしれない。バロック的な要素を導入したシリアス・アンサンブルとフリーキーな古楽器によるセッション的な演奏を得意としているが、どちらかというと2ndのほうが多少ロック色が強い。（山崎）



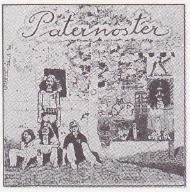
PARZIVAL
Barock
LP/Telefunken SLE 14 685-P '73年

普通のシンフォニックロックファンからは一般に地味な扱い方をされているパルジファルなのだが、このセカンドアルバムに限っていえば、内容的にみてドイツシンフォニックロックの5指にはいる作品と評価してもさしつかえない。曲の構成や演奏にシンフォニックファンをひきつける派手さはないが、バイオリン、ビオラ、チェロ等弦楽器を多用して、中世バロック期の音楽とロックの融合に成功している。バロックといっても彼等の場合、トラディショナルな面は少なく、ビートルズに影響された様なメロディアスで英国的なヴォーカルスタイルに特徴がある。メンバーは全員ドイツ人なのだが、ある意味で最もイギリス的な傾向を持っていたグループといえる。
（坂地）



PASSPORT
Passpor-Doldinger
LP/Atlantic ATL 40299 '71年

'60年代よりTHE KLAUS DOLDINGER QUARTET、そしてDOLDINGER'S MOTHERHOODを通じてジャズ・シーンで活動するクラウス・ドルディンガー（sax）が、'70年代を通して率いたバンド。デビュー作。クレジットは他にオラフ・キュブラー、ローター・マイト、ジミー・ジャクソン、ウド・リンデンベルクとADⅡ絡み。2作目以後のオーソドクスなジャズ／ロックに比べ、このアルバムは陰りも強く、曲に様々なアイディアが盛り込まれて音楽がふくらんでいる。マイトのベースも目立ち、曲もロック色の強いものがある。中々重味のあるアルバムに仕上っている。PASSPORTはこの後も10数作をリリースし、フォルカー・クリーゲルやブライアン・オーガー等様々なミュージシャンが参加する。
（松本）



PATERNOSTER (Austria)
Paternoster
LP/CBS 64058 '72年
CD/Ohrwaschel OW 004

'72年3月、ウィーンでの録音。幻のアイテムの一つだったもの。冒頭のハモンド・オルガンのたなびくようなトーンに回転数を誤ったかのようなヴォーカルが入ってきて、一瞬CD転換ミスか、と思ったりするが、通して聴いて行くと、これがかつてのアーサー・ブラウンに似た物哀しげな色だと気づく。バンドはds、g & vo、org & vo、bの4人編成で作曲のFranz Wippelのハモンド・オルガンがきいている。ギターも泣きのブルース色が強く、ドグサレふうだが、'70年代初期のブリティッシュものが好きな人にはよく通じる音だ。例えばスイスのERITLIFのような古臭いが'70年代頭の空気をたっぷりと吸い込んだオルガン・メインの意欲作そんな掘り出し物といっていいと思う。たそがれるような曲調が多い。
（松本）



PAUL & LIMPE FUCHS
Sturmischer Himmel
LP/Ohr OMM 56.011 '71年

彼らの第1作にあたると思われる作品。後にANIMA SOUNDと名を改め、Pilzレーベルでもアルバムを制作することとなる。普段、彼らは大自然の中で家族や家畜と一緒に生活しているようで、気が向けば楽器を携えて演奏ツアーに出かけるようである。自由で自然な彼らの生き方は、その音楽にも十分反映されているように感じられる。作品を聞けばすぐに分かるとおり、いわゆるフリー・ミュージックである。何種類かの楽器（ピアノ、オーボエ、ホルン、太鼓といった一般的なものから自作の打楽器や弦楽器など多数）を持ち替えながら、おそらく即興的に二人が音を合わせるという形態をとっているものと思われる。固定観念を持たずに、ひとつの個性に接するつもりで聴けば、新しい何かが発見できるかも知れない。（Helmut）



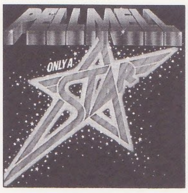
PELL MELL
Marburg
LP/Bacillus BLPS 19090 '72年
CD/Bellaphon 287.09.004

スメタナの「モルタウ」を含む、ペル・メルのデビュウ作。ペル・メルというと、セカンド・アルバム「From The New World」のイメージが強く、トーマス・シュミットのヴォイオリン及びクラシックの名曲をアレンジした演奏に焦点が当ることが多い。確かに、本アルバム最大の聴き物も「モルダウ」であり、原曲のゆったりと、どこか物悲しい雰囲気がうまく活かされた好演である。しかし、他の4曲も出来が良い。ギター、キーボード、リコーダー、コーラス等の演奏は非常に安定しており、そのハードなサウンドは、当時のブリティッシュ・ロックに通じるものがある。実験的なグループの多かった'70年代前半のジャーマン・ロック・シーンにおいて、このタイプのバンドとしては既に傑出した存在だった。
（賀川）



PELL MELL
From The New World
LP/Philips 6305193 '73年

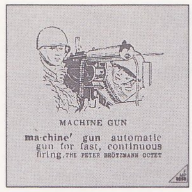
ペルメルはいわゆるクラシカル・ロック・バンドである。72年のデビュー盤「Marburg」ではスメタナの「モルダウ」を、本作ではドヴォルザークの「新世界から」の第4楽章の他にバッハの「トッカータとフーガニ短調」をロックアレンジで演奏している。特にA①、あの有名なテーマをフル・バンドで提示した後にAc.ギターのアルペジオをバックにヴォーカルが入ってくる部分はもはや圧巻としか言えない。さらにトーマス・シュミットのヴァイオリン独奏による変奏部、又テーマ再現部でのドラム・ソロに至っては超B級バンドマニアには絶対にこえられないだろう。グループは76年に「Rhapsody」78年に「Only a Star」を発表、しだいにポップ色を強くしていった。又、本作は78年に再発されている。（裏ジャケのみ違う。） (Chihiro S.)



PELL MELL
Only A Star

LP/Venus V78 PM-F1006　'77年

ヴァイオリニスト、ギタリストがキーボードも兼任し、専任キーボーディストも含め６人のメンバー中３人がキーボードを弾くという編成。そこから察せられる通りのクラシカル／シンフォニック路線。クレジットにはないがクラシックの有名フレーズが随所に使われている。余り話題に上るバンドではないものの、ドイツ圏ではむしろ珍しいストレートなクラシック指向と、本作でのキャッチーで時にハードな感覚は、むしろ他国（伊、仏等）のクラシカル・ロックやHR／HMの聴き手にこそアピールするだろう。幾分コンパクトな前半、そして後半では怒濤のクラシカル・フレーズがドラマティシズムを盛り上げる。大仰な展開の狭間の、静的なパートでのストリング系キーボードを伴ったヴァイオリンが美しい。　（高山）



PETER BRÖTZMANN
Machine Gun

LP /Brötzmann Br 2　'72年
CD/FMP FMP 0090

針を下ろした途端から、演奏はタイトル通りの爆裂ぶりを見せる。音はすべて眼前で沸き立つがごとくみずみずしく、サックスを吹き破り、ピアノを打ちこわし、ベースの弦を焼き切らんとする激烈なソロをすら、一瞬のうちに蹴散らす怒濤の集団即興（時にそれは凄まじいばかりにスイングする）が噴出するたびに、ただならぬ音圧が身体を刺し貫く。本作は68年に自主制作された彼の第２作であり、処女作参加のペーター・コーヴァルトb, スヴェン・オキ・ヨハンソンdrや、ＦＭＰの初期活動を支えた彼の伝説的トリオのメンバーであるフレッド・ヴァン・ホーフェp, ハン・ベニンクdrにブッシ・ニーベルガルbを加え、さらにエヴァン・パーカーts、ウィレム・ブロイカーtsが吹きまくる８人編成。「サックスのヘラクレス」の異名にふさわしいエネルギー・ミュージックの代表作。　（福島）



PETER FROHMADER
Homunculs

LP/(private press)無番号　'87年

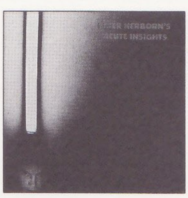
NEKROPOLIS時代から今もソロ活動を続け、最近では米Cuneiformから新作リリースの多い作曲家、ピーター・フローマーダー。'80年代には自主プレスで思う随分に製作した感があるが、このアルバムはその一つと言っていいだろう。44分の演奏をするHomunculus Orchestraなる彼の音楽は、ART ZOYD、それ以上にWHENに近いものだ。オーケストラ物だが、キーボード、サンプリング、合成音等からなる情緒指向ながら刺激を伴なった大作になっている。拡がりと音楽のふくらみは十分にあり、流されそうで流されず、どこか朽ちるようなイメージをはらむ。カヴァー・ワーク、エンジニアリング、ミックスも彼自身。彼の情緒指向はいつもゴシック趣味だが、それがふくらむだけふくらんだ作品と言っていい。　（松本）



PETER FROHMADER
Wintermusic

LP/(Swe.)Multimood MRC 006　'87年

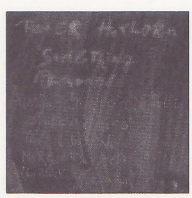
発売は'87年だが、録音は'84年、ミュンヘンのネクロポリス・スタジオにて。つまり彼の自主製作。作曲、ジャケット写真も彼のもの。「Homunculus」もそう言えば'87年の発売だったが、'85年の録音だった。ソロ・スィンギングをとるBirgit Metzgerも両作に居て、「Homunculus」程大掛りな作風でないものの、傾向はよく似ている。モノトーンのジャケット写真でおおよその音楽イメージはつかめるだろう。冬の冷気と静けさが永遠の眠りの静けさと相通じるようで、それは〝Winter Music〟の感触を伝える。彼の音楽は音響効果よりも情緒的なものが先立って有るが、それは感情的な激しさではない。閉鎖してひたすらプライヴェートな産物という気がする。B面は共鳴音を増幅するかのような手法で一層内向的。　（松本）



PETER HERBORN
Acute Insights

CD/JMT Productions JMT 882017
'88年
/ポリドール J32J 59007

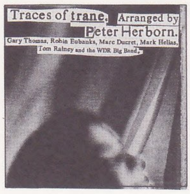
ペーター・ハーボーンは特にビッグ・バンド、ジャズ・オーケストラ等のアンサンブルの達人として最近重要作の集中しつつあるミュージシャンだが、意外なことに彼のことに触れた文章が殆どないことに今気が付いた。経歴等がよく判らないのだ。本人がウッドストック世代と語るように、ロック・ミュージックで育ったことが現在の彼の音楽の基本的背景であることは想像に難くない。'83年にケルンで結成されたACUTE INSIGHTSはトロンボーン奏者としてのハーボーンを聴くことのできる好バンドで、'85年に『Subtle Wildness』を発表し、本作が２ndアルバムになる。無名のドイツのミュージシャン達に並んで、ケニー・ホイーラー（tp、flh）が参加。８人全員のプレイが実に溌剌としていて、ほれぼれとする逸品。　（坂本）



PETER HERBORN
Something Personal

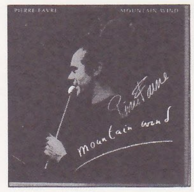
CD/JMT 849 156-2　'92年

かってM・ショーフやA・マンゲルスドルフと共演したと言うからフリー畑の出身か。自己のリーダーバンドでの作品が二枚以上あるらしいが未聴。それらではトロンボーンを吹いていたが本作では作曲／指揮に専念して実際の演奏を行なうのはAURYNストリングス・カルテット。他、ジャンゴ・ベイツ、マルク・デュクレ、ティム・バーン、リンゼイ・ホーナーと言う英米仏のイキの良い所が参加している。特にウェーベルンを良く聴いたとの事で打楽器が無い分シリアスな印象を受けるが、ゆるやかながらもリズミカルで時としてギター、サックス、ピアノを交えた楽曲自体は過度に難解な物では無く特にチェンバー系のファンなら容易に受け入れられる筈。ジャズ・ファンはどう受けとめたのだろうか。　（中西）



PETER HERBORN
Traces Of Trane
CD/ポリドール POCJ-1143 '92年

『Something Personal』('92)に続くハーボーンのアルバムは、ドイツの誇るWDRビッグ・バンドをフィーチャーした大変な力作だ。前作同様、ニューヨークで活躍する錚々たるミュージシャンが顔を揃え、ゲイリー・トーマス(sax,fl)、ロビン・ユーバンクス(tb)、マルク・デュクレ(g)、マーク・ヘライアス(b)、それにNEW AND USEDのトム・レイニー(d)がソロをとる。近年のジャズ・オーケストラ作品には優れたものが数多く存在しているが、ジョン・コルトレーンの作品を採り上げた本作の充実度は特筆に値する。コンポーザー/アレンジャーのハーボーンの才能と、とびきり鋭い切れ味を持ったWDRビッグ・バンドの力量、それにソリスト達（特にG・トーマス）の呼吸が完璧に噛み合った圧倒的な音楽。（坂本）



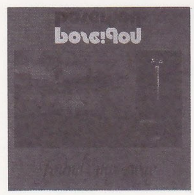
PIERRE FAVRE (Switzerland)
Mountain Wind
LP/Gemini GEM 1044 '81年

'69年には自身のカルテットを結成し、カルテットごとFMPの記念すべき第1作のオーケストラに参加するなど、ヨーロッパ・フリーの草創期から活躍する代表的演奏者。現在はタミア(vo)とのデュオを中心に活動し、合計数百種にも及ぶ打楽器類（大小十数枚のゴングや各種民族楽器を含む）を駆使して、多彩な響きによる精緻なリズムのタピストリーを織り上げる。本作はパーカッション・ソロ(しかもライヴ)ながら、驚異的なポリリズムの織り成す綾のただ中から、金属的な艶を帯びたメロディアスな「うた」がゆらり香り立つ。他ではタミアとの『ソリチュード』（ECM）、幻想的なイラスト・カヴァーに包まれたマルチ・リード奏者ユリ・スティフィンとのデュオ『エクスカージョン』（スプラフォン）等が推薦盤。（福島）



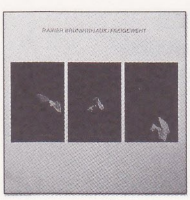
PLAMP (Switzerland)
... Und Überhaupt ...
LP/Canova CA106 LP '78年

Peter Streiff (org、el-p、fl)、Louis Streiff(ds)、Andrea Thöny (b、vo)、Mario Giovanoli (sax)、Peter Tönz (g、vo)、頭文字をとってPLAMP。録音はスイス。多分、ドイツ語圏スイスのバンドと思う。他にアルバムを出しているかもよくわからない。謎の1枚。全体には軽いタッチのジャズ色があるが、澄んだフルートやチェロ（ゲスト）等がリードをとり、プログレ・ファンへのアピールも少なくない。サックスやハモンド・オルガンの比重も大きい。ジャズから出発していることは確か。アルバムを通して軽やかな流れがあって、特に10分近い2〜3曲では各リード奏者のソロをつないで曲調を変えながら聴かせる。透明感のあるトーンが主体で、中でもフルートのパートが多く活躍する。（松本）



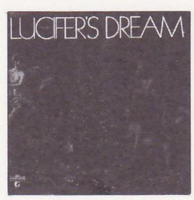
POSEIDON
Found My Way
LP/(private press.)Z 33 010 '76年

キーボード奏者1人、E.ギター1人、ベースとA.ギターあるいはベースとパーカッションを兼ねるメンバーが1人ずつ、それにドラムの1人を加えた5人で演奏している。さらにライヴでは、音響と照明の担当者が1人加わるらしい。リード・ヴォーカルは、A.ギター奏者が兼ねているようである。フォーク・ロック風の歌と演奏の一部にはドイツらしい翳りを帯びた部分もあるが、全般的にすっきりとして爽やかな雰囲気を持っている。A.ギターと音数の少ないサウンドや木訥なボーカルが、そのような印象を与えるのであろう。自主盤という制約が、かえって飾らない気安さを引き出しているようにも感じられる。カバー・アートも含め、素朴な暖かさを持ったアルバムである。（Helmut）



RAINER BRÜNINGHAUS
Freigeweht
LP/EMC 1187 '81年

ライナー・ブリューニングハウスはエバーハルト・ヴェーバーの片腕として、例えばパット・メセニーに対するライル・メイズのように大きな貢献をしているピアニストで、近年もヴェーバーともどもヤン・ガルバレクのレギュラー・グループで活躍を見せている。そんな彼がヴェーバーの助けを借りずに制作した初のソロ・アルバムがこの『Freigeweht』だ。ケニー・ホイーラー（flh）、ヨン・クリステンセン（d）、そしてオスロ・フィルのソリストであるブリンヤー・ホフ（ob）という、結果としてこれ以外の人選など考えられないゲスト達を迎え、ブリューニングハウスはピアノとシンセサイザーを演奏。こんなにも美しいジャズ・ロックを生み出したブリューニングハウスの才能はもっと評価されるべきだ。（坂本）



RALF NOWY
Lucifer's Dream
LP/Grobal 26015-8U '73年

ラルフ・ノーヴィーの1st。彼はこの他に「Escalation《Atlantic ATL 40556 '74》」、「Nowy 2《Atlantic ATL 50 205 '75》、と計3枚のアルバムを発表している。コンポーザーであり、かつバックを彩る甘美なオーケストラ（ストリング群）のコンダクターでもあるノーヴィーはフルート、オーボエ、サックス等も手がける。クリムゾンばりのギターリフで始まるA①から南方志向のみられるラスト・チューンまで実にバラエティに富んだ演奏を聴かせてくれるが、しかし何といってもノーヴィーの本来の持ち味とはムード音楽を想わせるような甘い甘いロマンティシズムであり、それがローター・マイト(アモン・デュール）等、多才なゲスト・ミュージシャン達により演じられるのである。美しいカバーも印象的である。（山崎）



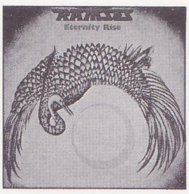
RALPH BEAUVERT
(Switzerland?)
Rite Of Passage
CD/Voiceprint VP126CD '93年

ラルフ・ボーヴェールがどういうミュージシャンなのか私には全く判らないが、レコーディング・ロケーション等から判断して、スイスのミュージシャンだろう。Voiceprintからのリリース予告で関心を呼んでいた。聴く限りでは、割にありがちな、少しポップで実は結構古いタイプのロック・ミュージックを打ち込みでやってしまったという内容で、押しなべて可もなく不可もない。voとkb類を担当するボーヴェールの片腕として活躍するヴィル・シュトレーラーはgとstickを担当。プログラミングはふたりの共同作業だ。面白いのはここにGONGMAISONのグラハム・クラーク(vln)が参加していることで、シャマール・マイトラも関係していたりする。確かにそんな雰囲気の曲もあって、そこそこに楽しめる。 (坂本)



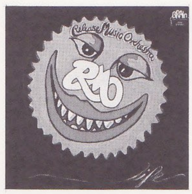
RAMSES
La Leyla
LP /Sky 007 '76年
CD/Sky CD 32/101-102

Skyレーベルといえばフランスのpoleレーベルと並んでカスいシンセ物の巣窟として扱われているが、100枚以上の作品を出していれば当りの作品が１つや２つは出るものである。これはラムセスの１枚目で、昔には国内盤が出ていたと記憶する。シンセ物ではなく、メロトロンを多用した生ダラ・シンフォニックロックである。たまにウニョウニョしたシンセが出てきて気持ち良い。メロディーにも独得の粘っこさがある。ラムセスも、ノヴァリスやフェイスフルブレスやヴァレンシュタインといった'70年代の代表的なジャーマンシンフォと同格に扱ってしかるべきであろう。SKYレーベルということでためらう気持ちもわかるが、フェイスフル・ブレスの２枚目とこのラムセスは押さえておいて損はないと思う。 (小林)



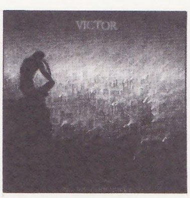
RAMSES
Eternity Rise
LP /Sky 020 '78年
CD/Sky CD 32/101-102

ラムセスの２枚目。前作と同様に必聴盤扱いの仕上がりになっている。１曲目ではオーケストラを導入しておりB.J.H.もまっ青である。B①の〝Windy〟という曲もアコギが生かされておりB.J.H.を想わせる。全面的に前作品にみられたメロディーラインの粘っこさは陰をひそめており、ノヴァリスやヴァレンシュタインに近いサウンドになっている。最終曲のタイトル曲ラストの場面ではこのアルバムでは控え目だったメロトロンが炸裂し、聴く者を昇天させるのである。近年、１枚目と一緒に２in１の形でCD再発されたのだが、バカ売れしているという話は全く聞いていない。このCDについては廃盤になる前に買っておいた者の勝ちであることを忠告させていただきたい。 (小林)



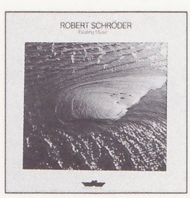
RELEASE MUSIC ORCHESTRA
Life
LP/Brain 1056 '74年

初めてのライブ・ツアーを74年のハンブルク（B①のみアムステルダム）で録音した作品。彼らのデビュー・アルバムでもある。一般的なバンドの楽器編成と比べ、クラリネットやシロフォンといった楽器が加えられている点が特徴的である。どちらかと言えばジャズ・バンドという印象を受けるが、既成の枠に填め込めにくい内容である。これらのリード楽器がバックの演奏と一体となって、流麗でノリの良いサウンドを楽しませてくれる。またメロトロンにも似たオルガンの音色がいい味を出していて、控え目ながらも曲の雰囲気をしっかりと盛り上げている。(時代を感じさせる懐かしい響きである。)TOMORROW'S GIFTの2ndのB①に入っていたベースのフレーズが、本作のB③にも入っているのをご存知か？ (Helmut)



RIGONI/SCHOENHERZ
Victor
LP /Bacillus BLPS 8501 '75年
CD/Bellaphon 290·09·002

Manuel RigoniとRichard Schoenherzの二人によるベラフォン/バシルス・レーベルの異色作。〝A Symphonic Poem〟とあるように、大作、というよりも企画物か。LPは２枚組、厚手のブックレットつきだった。録音はアビー・ロード・スタジオにて。本物のオーケストラが演奏する管弦楽曲／交響曲張りのファンタジックな――「真夏の夜の夢」のような――部分と、リゴーニ／シェーンヘルツを中心にしたバンドの部分とがバランスよく合わさり、切れ目なしの物語ふうにつないでいく。女性スキャット部があるかと思えば、DJに乗せたロックン・ロールがあったりと、いわゆるロック・オペラふう。全体の完成度は高い。クラシックとロックの合体といった実験物ではない。「魔石ヴェンダーの物語」のあの形式。 (松本)



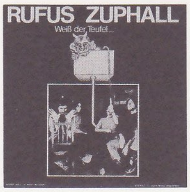
ROBERT SCHRÖDER
Floating Music
LP/IC KS 80.001 '80年

K.シュルツェの始めたICレーベルは、エレクトロニクス・ミュージックの流れを刷新したようなところがある。音楽としての珍しさ、模索、自己表現の時期を過ぎて、効果、周りに置かれるもの、等といったリスナーとの関わりの上でエレクトロニクス・ミュージックの聴かれ方も変化し音楽自体も整え直されていったように思う。ロベルト・シュローダーの2枚目になるこのアルバムも、それ以後のものだ。33回転、45回転のどちらでも聴けるよう製作されているのでCDにするには困りものだろう。当然、双方で随分と印象が違う。部分部分にシュルツェのパターンも見え隠れするが、この時期のエレクトロニクスものとしては、比較的オリジナリティを感じさせる。33回転だと'70年代、45回転だと'80年代になる。 (松本)



ROLF KÜHN JAZZ GROUP
Going To The Rainbow
LP/BASF '71年

ロルフ・キューンは'29年生まれ、'50年代から現在まで様々なメンバー、スタイルで活動をしており総じて水準が高いので一枚で代表させてしまうには大幅な無理があるのだが何分ジャーマン・ジャズ集成では無い以上致し方無いか。ともあれ本作、実弟ヨアヒム他、J・サーマン、A・スキッドモア、T・オクスレー、C・コリア、P・ウォーレンと言う当時の独英米若手注目株を揃えニュー・ジャズ以降を模索する試みとしては英のK・ティペット・グループに並ぶ出来栄え。と言うかメンバーの格から見て判る様に演奏力、緊密度では上回る。もっともその分、ヨーロッパ・ジャズの範疇でくくりきれてしまう事も確かではあるが熱さとクールネスを併せ持つ当時のヨーロッパ・ジャズを代表する一枚には違い無い。（中西）



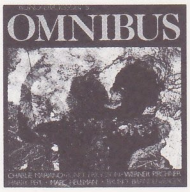
RUFUS ZUPHALL
Weiss Der Teufel
LP /Good Will GLS 10001 '69年
CD/Little Wing LW 1035

'69年と言えばカンやA.デュール等わずかなバンドがデビュー作を出した年だ。相当に古い。RUFUS ZUPHALLはそれらバンド程の型破りな音楽をやっていたわけではないが、ジャズ、ブルース、ロックが混在した荒削りなサウンドの上を涼しい音してフルートがひらひらと歩くという、この時期にしてはプログレッシヴなアプローチが感じられる。当然２作目程のまとまりはないにしても、Ｂ面を費した大曲ではフリー・フォームな演奏も盛りだくさんで、特に後半からのフリー・フルート・インプロヴィゼーション、続くメロディックな曲調への盛り上げ等は、ジャーマン・ロックの先駆として評価されていいと思う。近年LP再発されるまでは音を聴く術もなかったアルバムだった。再度CDにて再発される。（松本）



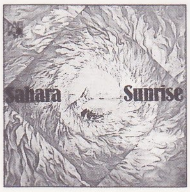
RUFUS ZUPHALL
Phallobst
LP/Pilz 20 21099-5 '71年

RUFUS ZUPHALLの２作目はPilzからリリースされた。デビュー作の感触は、わずかなフルートの使用等に残っているものの、全体にはハード・タッチに、そして整理された音造りになっている。それでも曲によってはメロトロンが吹き出してきたり、アコースティック・ギターのアルペジオによる徹底振りがあったりと、一律には行かない。中にはac-g、vo、ハープシコード張りのel-p、バック：メロトロン等といった叙情派ナンバーもある。ただし曲ごとにカラーリングされている点では、１作目の曖昧さ故のフリーな感触はない。アルバム全体としてはギターのハード・タッチがきいているせいか、ロック色も強く感じさせる。このレーベルでは異色だが、普通ならオーソドックスな中々の好作。（松本）



RUNO ERICKSSON'S OMNIBUS
(Sweeden, Switzerland, Austria)
Runo Ericksson's Omnibus
LP/Four Leaf Clover FLC5050 '81年

ルーノ・エリクソンはスウェーデン出身。現代音楽畑の出で後スイスに活動の拠点を移しM・ポルタル等フリー系のミュージシャンと交流を深める。そんな彼がハリー・ペプルを含むスイス／オーストリアのミュージシャン及びチャーリー・マリアーノと結成したのがこのオムニバスだ。もっともこの作品現代音楽でもフリーでも無く、東洋、中近東的な雰囲気を持ったジャズ・ロック。往々にしてこの手の物はメロディだけそれ風のインチキ臭い代物になりがちだが、さすがに本人の作曲及び各人の演奏共に様々な経験の裏打ちもあってセンス良く重層的な落ち着きと鋭さを併せ持っており他の作品が気になる所なのだが未詳。残念。尚、裏ジャケにはスウェーデン／ドイツ語の他日本語のコメントが付されている。（中西）



SAHARA
Sunrise
LP /Pan 87 306 XOT '74年
CD/Ohrwaschl OW 022

前身のSUBJECT ESQから約２年、バンドはSAHARAと改名して２枚のアルバムをリリースする。ハモンド・オルガンの多用、フルートとサックスの挿入、ハーモニカの使用、すっきりとしたウエスト・コーストもしくは'60's英ビート・ポップス系のコーラス等、基本路線は変っていないが、もう少し出る所は出てへこむ所はへこんだ印象はある。特に鍵盤系はハモンド・オルガンに加えて、ピアノ、メロトロン、ムーグをいかし、曲に多彩さをもたらせた。特に旧B面になる27分強のアルバム・タイトル曲には、バンドの持つ様々な要素を編んだような密度の濃さがあり、これのみを取り出すなら、相当プログレッシヴに思える。当然の英米プログレッシヴ・ロックの亜流に止まらないオリジナリティがある。一聴を。（松本）



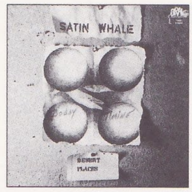
SAMETI
Sameti
LP/Brain 1020 '72年

'70年初頭、メトロノーム傘下のジャーマン・ロック・シーン群雄割拠時代にいち早く商業的ベースを築いたブレイン・レーベルの隠し子、サメッティのファーストアルバムである。とりあえず、参加メンバーに注目すると、アモンデュールIIのシュラットを主軸に、ポポル・ヴフのエリスク、エンジニアとしてのクルト・グラウプナーは余りにも有名な存在。成程、妙に生暖かいパステル調のカヴァーアートは、ファウスト「So Far」のイラスト集を手掛けたエッダ・コェヒェル。凄まじくもお膳立の行き届いた果てに出来上がったこのアルバムは、ブレイン・レーベルのカラーを代表する歴史的迷盤と言える。尚、'74年にワーナーから「Hungry For Love」というセカンドも出している。（丸美屋）



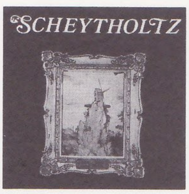
SAND
Golem
LP/Delta-Acustic 25-128-1 '74年

(g、org、ds)＋(vo、syn)＋(b、perc)というトリオ編成のSANDなるバンドの唯一のアルバム。簡単に言えば、ダモ鈴木がある調子でアシッド・フォーク寄りになり、これをVCS3シンセサイザーでよく味つけした、そんなドロ〜ンとしたヴォーカル作。極端に元気のないヴォーカルのほかにも、音響的な面で細工されて、さすがにドイツならではのアシッドな音造りになっている。歌い込むことはなく声が漂っていって加工されるという具合に、メディテイショナルではあるが、どこかコントロールされたような明解さがある。また、エレクトロニクス色も充分にあるものの、使い方がドロ〜ンとしているという点では、反復やコラージュもののシリアスさも薄い。割と特異なアルバムという気がする。（松本）



SATIN WHALE
Desert Places
LP/Brain 1049 '74年

デビュー・アルバム。このあと「Lost Mankind」(Nova 6. 22 248、'75年)、「As A Keepsake」(同6. 22 969、'76年)、「Whalecome」(同6. 28 449、'77年)、「A Whale Of Time」(Teldec 6. 23 602、'78年)、「On Tour」(同 6. 23 976、'79年)、「Die Faust In Der Teche」(Strand 6. 23 715、'79年)、「Don't Stop The Show」(Polydor 2417 139、'81年）と続く。ハード・ロックの重厚感こそないが、ギターとオルガンを中心に手数の多いドラミングを含めて曲が走り、パッションを感じさせる好アルバムだと思う。デビュー作らしい演奏と曲調という気がする。全４曲。展開で聴かすという程でもないので、一本調子ではある。（松本）



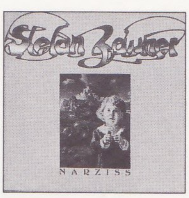
SCHEYTHOLZ
Die Mühle Von Avalu
LP/EMI Electrola 066-31 155 '78年

女性シンガー１名を含む４人組のエレクトリック・トラッド・グループでこれが唯一の作品と思われる。いわゆる典型的なジャーマン・トラッドに分類されそうな音だがアレンジはかなりモダンな感じを受け、またインスト・パートにおいてはジャジーなピアノやクラシカルなハープシコード等が顔を出すなどプログレッシヴ色が強い箇所も多い。ギターの奏法などはリチャード・トンプソンやバート・ヤンシュ等の直接的な影響が窺えて面白い。オウゲンヴァイデ等に顕著であった中世志向はあまり感じられずむしろシンプルでストレートなサウンドであるとはいえ、女性シンガーがリードを取るバラード・ナンバーではその独特の深淵なムードにどっぷりと浸ることができる。ラスト曲の子守唄は絶品。（内田）



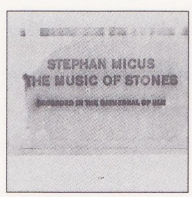
SIDDHARTHA
Siddhartha
LP/(private press)Z 33 007 '75年

ここ数年の間に超レア・アイテムの再発が活発に行われ、聴き手にとって段々と良い環境が整いつつあるようだ。しかし未だ再発の機会に恵まれずに人知れず眠ったままの名作が数多く存在するのもまた周知の事実である。本作もドイツではEPIDAURUSと並んで10万単位のプレミア付きの知る人ぞ知る超レア・アイテムである。'75年に自主製作にて発売された本作は、オルガン、ギターを中心にオーソドックスな５人編成で、音の方も割とオーソドックスではあるが良く練られたプログレッシヴ・ロックを演っている。時折クラシカルなフレーズを折り込んだ彼らのサウンドは、５曲中を通して充分にオリジナリティもあるが、強いて言えばピンク・フロイドに近いかも。（松尾）



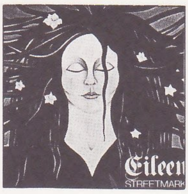
STEFAN ZAUNER
Narziss
LP/Ariola 27026 '76年

ステファン・ツァウナー（AD IIのkbd）は２枚のアルバム（2nd：Prism & Views-vinyl-）を残したマルチ・プレイヤーである。２枚共水準の高いシンフォニック・ロックであるが、どちらか一枚ということになればこのファースト・アルバムになる。彼は一人でキーボード類、ギター、ヴォーカル、ベース、ドラムスをこなし、ゲストに他のドラマーを起用しただけである。的を得たアレンジ。天才的なひらめきを持つセンスの良さ。水準以上の演奏技術。そられが生み出すファンタジー・ワールドは数あるドイツ・シンフォニックスの中でも最高位に位置するものだ。全体的に明るい曲想が多く、多少イエスあたりの持つすがすがしさを感じる。（山崎）



STEPHAN MICUS (Switzerland)
The Music Of Stones
LP/ECM 1384 '89年

静寂の中にゆっくりと広がる波紋が、決して消え入ることなく、いつまでも幻のようにとどまり、小刻みに震え、緩やかにたゆたいながら、折り重なり縫り合わさり、微かに行きつ戻りつするうち、次第に深々と息づき、やがて果てることないうなりとなって、胸苦しく空間を満たす。いまやひとつの生き物と化した教会の薄暗い空間を、尺八やティン・ホイッスルの息遣いが、慈しむように渡っていく(その向こうにカウベルの遠い響きが見え隠れする)。レゾナンスト・ストーンと呼ばれる、ベルトイアの音響彫刻にも似た音具により生み出された空間の、この奥深いしめやかさは、例えばポポル・ヴー『ファラオの庭』を思わせる。ミケシュは本来ギタリストであり、またパーカッションや各種笛類の演奏で知られる。（福島）



STREETMARK
Eileen
LP/Sky 011 '77年

いまは亡きヴォルフガング・ライヒマン(Vo、Syn、g)がSTREETMAR-Kの一員として参加している。メンバーは他にトーマス・シュライバー（g）ドロテア・ラウクス（Key）マンフレート・クナウフ（b）ハンス・シュヴァイス（ds、Perc）、筆者は他のSTREETMARKのアルバムやライヒマンのソロ「Wunderbar」は未聴なので比較できないが、エレクトロ・ミュージックの要素を加味したシンフォニック・ロックと言って良いだろうか。しかし全編から滲み出るこの暗さはどうだろう。耽美派ニュー・ウェイヴのある意味では先駆となるような。他のSkyレーベルのバンドのレコードの多く（OCTOPUS等）は売却しても、本作が手元に残っているのは、精神的な暗さが虚飾でなく、形に昇華しているからかも知れない。（高山）



SUBJECT ESQ
Subjdct Esq
LP /Epic EPC 64 998 '72年
CD/Ohrwaschl 無番号

SAHARAの前身バンド、唯一のアルバム。バンドは'65年にHarry Rosenkind（ds）とMichael Hofmann（fl、sax、vo）が出会った所から始まる。'67年にSUBJECTSを名乗り、やがて当バンドへ、そして４人編成そのままでSAHARAへと改名する。ブルース・ロックとビート・ポップスを下地にして、フルート中心のフローティングなパートや、サックス中心のジャズ色を加味した明るい曲想が特徴。ハモンド・オルガンがリフを固めるブルース・ロック・ベースでもあるが、薄味だ。ヴォーカル／コーラスはそれこそビートルズ流れの'60年代物。それでも曲調が一転したりして、意欲的な所も見え隠れする。CDには'71年ミュンヘンでのライヴ・テイクが２曲追加されている。ハーモニカ・プレイも込みの演奏。（松本）



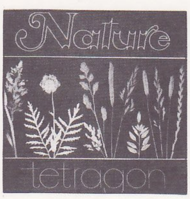
SUDPOOL PROJECT
Time Is A Tango/Yokohama Suite
CD/Bellaphon CDLR 45032 '91年

SUDPOOL PROJECTは、その名の通り、南ドイツ出身の重要なジャズ・ミュージシャンを支援するために'89年に組織されたプロジェクトだ。その第１作として制作された本アルバムではベルント・コンラートとヘルベルト・ヨースのふたりにスポットライトを当て、ふたりの曲を１曲ずつ採り上げている。最近のヨーロッパ・ジャズ・シーンでは幾つかの大変優れた先鋭的なジャズ・オーケストラがシーンの牽引役となって、大きな業績を上げているが、このSUDPOOL PROJECTの演奏も負けじ劣らずの素晴らしい力のこもった演奏を聴かせてくれる。当然のようにジャズと現代音楽が不可分の状態で高密度の融合を見せる。ローレン・ニュートンのヴォーカルはM・ウェストブルックの音楽にも肉薄しようとしている。（坂本）



TANZBAR
Tanzbar
LP/Nature 0060.063 '77年

「踊る熊」の名をもつマンハイムのエレクトリック・トラッド・グループ。男性３名、女性３名の計６名で同国の代表格、オウゲンヴァイデと同系統の中世志向を持ったトラッド・チューンを奏でる。オウゲンヴァイデほどリズムを前面に出していないため一聴した印象はやや地味だが、メンバー全員によるコーラス・ハーモニーやフルート、グロッケンの響きは非常に心地良く、聴けば聴くほど味が出てくる。数曲でリードを取る女性シンガーは声質、歌唱力共特筆もので、特にバラード・ナンバーではその力量が余すところなく発揮されている（ドイツ系トラッドのバラードにはケルトの「崇集さ」とはまた異質の深みがある。ヘルダーリン１stの名唱、〝Peter〞を思い出してほしい）。（内田）



TETRAGON
Nature
LP/Eine Soma SM 1 '71年

ドイツ北部、オスナブルック出身。'70年には、ギタリスト参加以前のキーボード・トリオで前身に当たるTRIKOLON名義作「Cluster」を150枚限定リリース。これは４曲入りで、サイケデリックなオルガンやピアノを多用したNICEの亜流作風ながら、明らかに当グループの布石に、そしてグループの歩みが当キーボード奏者のそれであることも明かす。本作のA①はバッハ、B①はバーンスタインの作をアレンジ。更にジャズ感覚も備わり、ハモンド・オルガンの洗練と多用が映える高水準の自主製作。近年、キーボーダーはウド・リンデンベルグのバンドで活動。（松本）



THINK
Variety
LP/Menge MEL 3301 '73年

元オーケストラ楽団出身の３人のハンガリー人とドイツ人３人で結成されたTHINKの唯一の作品。さすがに演奏の方は安心して聴ける。つややかなヴァイオリンやフルート、軽快なオルガンやドラムス、ブリティッシュを強く感じさせるヴォーカル、展開の多い曲想は、しっかりとしたアレンジに支えられて心地良く耳に響く。全体的にはクラシック色、ジャズ色を伴ったプログレ・サウンドだが、Ｂ面の大曲ではブルースをほろ酔い気分で聴かせるなど幅広い音楽性を窺わせる。ジャーマン・ロックの中でも超マイナーなコレクターズ・アイテムだが、決してＢ級などではなく、これがイギリスのバンドならもっと騒がれているはずだ。ジャーマン色は薄い。（高森）



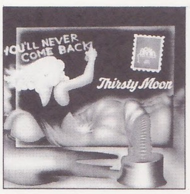
THIRD EYE
Third Eye
LP/Ring 01004 '76年

THIRD EYEはこの1作目以後、「Connexion」(Ring 1030、'77年)と「Live」(View VS 0021、'82年)を出している。どちらも、パーカッションを多用したありがちなジャズ・サウンドになっていて、デビュー作のように興味をひく所はなかったと記憶している。このアルバムはジャズ・クァルテットがメロトロンを使った珍しい例で、ピアノと合わせて結構シンフォニックな効果をあげている。全曲とは言わないが、それだけにジャズ・ベースとは言っても曲もメロディアスで、往年のプログレ・ファンには興味の対象になり得るはず。特にA面の後半部での、ピアノのひくメロディにメロトロンによるコーラスが広がりを加えていく辺りなど中々のものだ。B①のクラシカル・タッチのピアノもいい。 (松本)



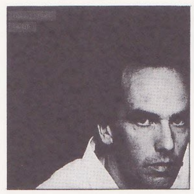
THIRSTY MOON
Thirsty Moon
LP/Brain 1021 '72年

ドラム、エレピ、コンガ、サックス、ベース、ギター、オルガンという構成の7人グループによる作品、プロデュースはConny Plankによる。A面では、サックスとギター、ドラムやパーカッションが渾然一体となってパワフルな演奏を繰り広げており、そのリズムはラテン系のノリを感じさせる。B面に収められた20分を越す大曲では、音の厚みを変えたりテンポに緩急をつけるなど、メリハリのあるドラマチックな展開を目指している。当時流行のフェイザーを用いた「コミック・サウンド」が、今となっては懐かしく感じられる。また、曲の所々に挿入されている効果音の生々しさにはドキリとさせられる。グループは、その他にも3枚のアルバムを当レーベルに残している。 (Helmut)



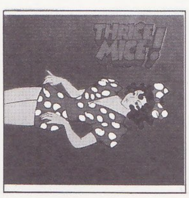
THIRSTY MOON
You'll Never Come Back
LP/Brain 1041 '73年

THIRSTY MOONには計5枚のアルバムがある。これは2作目に当るもので以後「Blitz」(Brain 1079、'75年)「A Real Good Time」(Brain 1079、'76年)「Starchaser」(Sky 053、'81年)と続く。全体には少しアフロがかったようなジャズ寄りのロックで煮え切らなさも残るが、10分台の二つのナンバーでは、各々、ハモンド・オルガン中心のアグレッシヴなサウンドと、エレクトリック・ピアノとフルート等を中心にしたフローティングなサウンドが意欲的な所を見せる。コンガを含むリズム系が走り出すと、EMERGENCY等に共通するBrainレーベルにありがちな特徴のないジャズ寄りのサウンドになってしまう反面で、オルガンやフルートを生かした波の引いていくような静かなニュアンスを出し得るバンドだ。 (松本)



THOMAS DIETHELM
(Switzerland)
Shaved
LP/Spoon 014 '81年

CANのイルミン・シュミットのプロデュースにより本作を発表したスイス人、トーマス・ディーセルムについて、例えばその経歴、前後の作品等に関する知識を筆者は持たない。ただ確かなのはこれが素晴らしいアルバムであり、聴く者に極上のひとときを提供してくれること。時にディレイやハーモナイザーが加えられた彼のアコースティック・ギターとヴォーカルを中心に、ヴァイオリンやパーカッションが踊る曲の懐にほの見える中近東〜スペイン、東欧〜ジプシー音楽の影とその風景。PENGUIN CAFE ORCHESTRAの洗練、DURUTTI COLUMNの静謐の代わりに土着性が息づく本作はライナーの言葉を借りるなら「汎ヨーロッパ的音楽」と言えようか。モノクロの内の豊かな陰影は欧州シーンの奥深さをも示唆している。(高山)



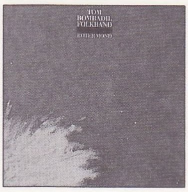
THRICE MICE
Thrice Mice!
LP/Philips 6305 104 '71年

単発のジャズ/ブルース・ロック作。6人編成のうち、サックス奏者の比重が大きく、少したよりないキーボードと協合して比較的特徴のあるサウンドづくりをしている。'70年代頭らしく重さもある。こじつけたようなヘヴィなギター・ソロもあったりして、中々ジャーマンのB級らしい歪んだ構成がその筋にアピールするはず。全4曲、とどれもロング・ナンバー。うまくはないが、インパクトはある。特にサックスのドロッとしたトーンが全体のサウンドに、これまたとってつけたように乗り、知らず知らずの間に、全体を引き上げたりして、歪つなのもが一丸となってドッカとやってくる。暗めのイメージのアルバムだ。要するにMetronomeものにXHOLが突っ込んだような内容だが、曲は走らずハード・ロック感は薄い。(松本)



TIBET
Tibet
LP /Bellaphon LC 1421 '79年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4115

B級作品の多いベラフォン・レーベルであるが、このティベットが残した唯一の作品は、他のベラフォンの作品群とは一線を画す完成度を持っているといえる。6人編成だが、基本となるのは2人のキーボード奏者で、特にハモンド・オルガンの響きとメロトロンの哀愁が耳につく。A面4曲B面3曲が収録されている。どの曲も水準以上の作品であるが、特にA③の輝きが白眉である。曲と構成自体は単純であるのだが、メンバーの感情移入の成せる業であろうか。ドイツ的な部分とオランダ的な感覚が感じられるが、それらは全てあの70年代の熱いシーンに想いを馳せるには十分なもの。 (今野)



TOM BOMBADIL FOLKBAND
Roter Mond
LP/(private press)8701 '?年

ディジタル・マスタリングのクレジットがあるので、おそらく80年代半ばに制作されたものと思われる。古くから伝わる民謡や舞曲のテーマを編曲して新しい解釈を与えたり、自作の曲をトラディショナル・フォーク・ロック風にアレンジして演奏した作品。プサルテリウム(中世の弦楽器)、ヴァイオリン、ハープの他に、ブズーキ、バグパイプといった特色のある楽器やシンセ、E・ギター、サックスなど多数の楽器を加えている。５人の演奏者がそれぞれ複数の楽器をこなし、少ない人数で多彩な表現を可能にしている。男性ヴォーカルによる唄はあまり上手くはないが、哀愁を帯びて懐かしさの漂う演奏には何とも言えない魅力がある。ゲルマン民族の心の素地に触れることができる作品のひとつである。 (Helmut)



TOMORROW'S GIFT
Tomorrow's Gift
LP/Plus plus 1+2 '70年
CD/Second Battle SB 017

バタバタとしたサイケ崩れの展開にフルートや舌足らずの女性ヴォーカルがからみ、メロトロンまで飛び出すこのアルバムは、「勢いで作りました」的なノリに支配されているが、決してタレ流しに終ってはいない。勇み足の多いドラムスは愛敬としても、ユーモアも兼ね備えたジャージィなフルート、ピアノ、オルガンを使い分けるキーボード、控え目ながら堅実なギターやベース、随所に見られる変拍子など聴き所は多い。サイケからフォーク、ジャズ、プログレ、ハード・ロックと多様な音楽性が〝はぐらかし〟的曲展開によって猥雑化し、能天気めいた明るさも手伝ってか変質してしまっているが、時代の様相を見事に反映させている。〝時代が見える〟格好のアルバムである。 (高森)



TOMORROW'S GIFT
Goodbye Future
LP/Spiegelei 28 515-5U '73年

しばしインターコードの名称を併用するスピーゲライ・レーベルには多数の良質な作品があるが本作はシンフォニック傾向にある同レーベルにあってフリー・パートを重視した良質作と言えよう。前作「トゥモロウズ・ギフト」(PLUS1+2) では女性ヴォーカルを中心にあたりきたりのロックを演っていたがこの2ndでは部分的に聴かれるシンフォニックなキーボード、煌々と響き渡るギターがフリー・スタイルのドラム、ベースに溶け込み小変化に富むやや瞑想的な淡々としたサウンドを展開している。グループは本作後消滅し３人のメンバーのうちヴォルフガング (ザッパ)・リンドナー (Dr) は実験作風のデュオ作を１枚発表その後この３人にメンバーが加わりリリース・ミュージック・オーケストラが始動する。 (松本)



TON・ART(Austria)
Mal Vu. Mal Dit.
LP/Hat Hut hat ART CD 6088 '91年

十二音による複雑な作曲と「ジャズ」のオープンなスイング感のモザイクを、緻密な室内楽的なアンサンブルが支えていた前作『Z』(HAT HUT) の編成 (tp、as、bcl、g、b、dr) に、さらにフレンチ・ホルン、バロック・オーボエ、チェロを加え、サウンドの香り高さとオーケストレーションの奥行きを増すとともに、モザイクを構成する相反する諸要素は、充分な熟成を経てトロリとひとつに溶け合っている。メロディアスな変奏とリズミックな交替、映画音楽的な情景提示と演劇的な対比、パロディックなコラージュと滑らかなインプロヴィゼーションが、カラフルな音の厚みの中で重ね合わされ同時に進行していく。こうした試みを作曲側からではなく、逆に即興側から探求しようとする別プロジェクト〝Qui.t〟もある。 (福島)



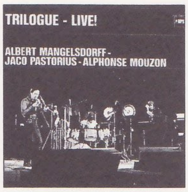
TON STINE SCHERBEN
Warm Ghet Es Mir So Dreckig?
LP/Shneeball 0008 '71年

「何で俺はこんなに調子が悪いんだ？」という憤りをぶつけた作品。グループのスタートは、ギターを中心に据えたフォーク・バンドにあったと思われる。しかし本作ではE・ギター、ドラム等を加えて、とても荒々しくアグレッシブなロックを演奏している。曲の作り方はシンプルで、シャウトするようなボーカルと型にはまったフレーズが何度も繰り返されるうちに、聴衆がだんだんと引き込まれてゆくといったタイプのものである。あくまでもストレートで正直な音楽性に、ある種の好感を持てる内容である。本作はライブ録音のため少し音質の悪い部分があるが、なんら本質を損なってはいないので、ご安心を……。グループは、他にも約10枚のアルバムを制作している。 (Helmut)



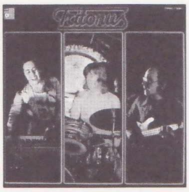
TORTILLA FLAT
Für Ein 3/4 Stündche
LP/(private press)TF-0175 '74年

el-p奏者とperc奏者を含めて６人編成。とても自主製作とは思えないスリリングな演奏が聴ける。切れのあるジャズ／ロックのスタイル。しかもフュージョン・ミュージックのような、ありきたりのメロディと歯が浮くようなこびはほとんどない。ピリッとした曲調とそれに見合う演奏力を伴った軽快な曲の運び、そしてフルートをフィーチュアした柔らかさ、どこをとっても自主製作とは思えない内容に驚く。変な曲調も多く、残響音を生かしたり、パーカッション・パートがあったりと、一筋縄ではない。明確なサウンド・コントロールを感じさせる。とりわけel-pの力量は目立つ。駆け回るかと思えば、これに応じてまたリズム・セクションも適確に動ける。ARTI&MESTIERI型サウンド。幻の名作。 (松本)



TRILOGUE
Live!
LP /MPS　'77年
CD/ポリドールPOCJ-2162

TRILOGUEは'76年11月、ベルリン・ジャズ・フェスティヴァルで唯一の演奏を行なった、驚異のトリオだ。アルバート・マンゲルスドルフ（tb）とアルフォンス・ムゾーン（d）を共演させようというヨアヒム・E・ベーレントの企画で、最後まで難航したベーシスト選びに土壇場で決定したのが、一番実現しそうもなかったジャコ・パストリアスだった。ちょうどWEATHER REPORTの『Heavy Weather』のレコーディングのさなかだったというから、パストリアスの最も充実していた時期のセッションということになる。３人の共演が既にして桁外れの事件だが、銘々がそれぞれの実力を遺憾なく発揮し、しかも高いテンションで噛み合っている。とりわけマンゲルスドルフのヴァーチュオーソぶりには感嘆しきり。　（坂本）



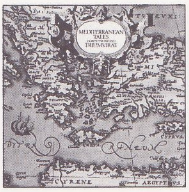
TRITONUS
Tritonus
LP/BASF 17 22384-1　'75年

エマーソン・レイク＆パーマーに影響を受けて結成されたキーボード・トリオは、世界各国に数多く存在するが、残したアルバムこそ２枚と少ないものの、ドイツにおいて、トリアンヴァラートに次いで知られたグループがトリトナスである。ピアノ、オルガン、シンセサイザーを巧みに演奏するペーター・ザイラーのキーボード・プレイヤーとしての実力は、トリアンヴィラートのハンス・ユルゲン・フリッツに匹敵する。独創性、曲自体の出来、魅力という点で見れば、彼の才能は傑出したものと言えないが、プレイヤーとしての力量は並々ならぬものがあり、十分に評価出来る。何を基準に音楽を判断するか、そうしたことを考えさせる作品でもある。（賀川）



TRITONUS
Between The Universe
LP/Acanta 229467　'76年

トリトナスのセカンド。前作のエマーソン・レイク＆パーマー色が薄まり、独自のスタイルを作り出そうという意気込みが窺われる。シンセサイザー、オルガンをテクニカルに弾き捲る部分が少なくなり、シンセサイザー中心のゆったりした演奏を取り入れ、叙景的サウンドを作り出している。しかし、その種のものとしては平均的な出来であり、やや魅力に乏しい。キーボード中心のテクニカルなシンフォニック・ロックとしては、エマーソン・レイク＆パーマーを越えることが出来ないと悟ったペーター・ザイラーの苦悩が感じられる。また、ロック・ミュージックの世界では、プレーヤーとして、ある程度の才能があるだけでは、傑出した作品を作ることが出来ないという一例でもある。　（賀川）



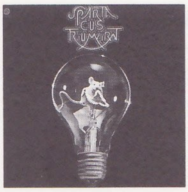
TRIUMVIRAT
Mediterranean Tales
LP /EMI Harvest 1C062-29441　'72年
CD/EMI-Electrola 795367 2

「ドイツのエマーソン・レイク＆パーマー」の異名を持つトリアンヴィラート。その種のタイプ（キーボード・トリオによるシンフォニック・ロック）のバンドとしては、本家は別にして、最も知名度が高く、成功したグループである。そんな彼らのデビュウ作。キーボード・プレイヤー、ハンス・ユルゲン・フリッツのテクニックは素晴らしく、それだけでファンを魅了するものがある。ファースト・アルバムということもあってか、並々ならぬ意欲を感じさせるプレイで、きおい気味の感もないではない。それを好意的に思うかどうかは意見の分かれるところでもある。曲自体の完成度においては、以後の作品に一歩譲るものの、テクニカルなキーボード・プレイを好む人にとっては必聴の一枚と言える。　（賀川）



TRIUMVIRAT
Illusions On A Double Dimple
LP /Harvest IC 062-29 491　'74年
CD/EMI IC538-7 95366 2

〝ドイツのEL&P〞の異名を持つTRIUMVIRATのセカンド。本作でのメンバーはユルゲン・フリッツ (Key、Vo) ヘルムート・ケレン (B、G、Vo) ハンス・バセルト (Perc)。各々A面が「Illusions On A Double Dimple」B面が「Mister Ten Percent」と題された組曲形式となっている。ユルゲンのアレンジによるオーケストラや合唱団を時に加え、エマーソン的なキーボードを中心に進行する様は、なるほどその呼称に相応しい。ユルゲンを始めとした各人の技量と米でも受け入れられそうなヴォーカル部のしっかりとしたメロディは、テクニックに価値を求めず心情や理論理念で勝負の当時のドイツ勢にあってはむしろ異色か。EL&Pファンならずとも、一国に対する一面的な見方を排する意味でも聴いて頂きたい。　（高山）



TRIUMVIRAT
Spartacus
LP /Harvest IC 062-29-567　'75年
CD/EMI-Electrola CDP7 92970 2

彼等の３枚目である本作はスパルタカスを題材にしたトータル・アルバムである。ドイツのナイス＝ELPと言われた彼等だが、その原因はバンド編成とハンツ・ユルゲン・フリッツとキーボード・ワークが比較的似ていた為であろう。ドイツ臭さは全く無く、ブリティッシュ指向のバンドではあるが、曲のセンスの良さは特筆に値する。又、歌詩の出来も良く特にB面の流れは名調子であると言えよう。バンドはこの後ドラマーを代え、さらにヴォーカリストを加え「Old Loves Die Hard」('76) を発表している。他にアルバムとしては1st「Mediterranean Tales」('72)、「Illusion On A Double Dimple」('74)、「A La Carte」('78)、「Russian Roulete」('80) がある。　(Chihiro S.)



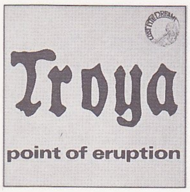
TRIUMVIRAT
Old Loves Die Hard
LP /EMI IC 064-29-567　'76年
CD/EMI 7243 8 28036 2 1

EL＆Pからの直接的な影響を受けたトリアンヴィラート。特にキーボーダーのハンス・ユルゲン・フリッツのキーボード・ワークはエマーソンを手本にしたものである。しかし、EL＆Pは、当時、決して使用しなかったストリングス系のキーボードを多用しているのがこのグループの特徴だ。セカンド「Illusions～」からフィフス「Pompei」あたりまでが彼等の全盛期で２～４（本作）まではそれ程違いのない、構成力のしっかりとした良質のシンフォニック・ロック・サウンドで、本作は小品集ながら、どれも水準の高い曲である。似ているということに目をつぶれば、これ程の高水準のグループはめったにいるものではない。５作目「Pompei」はヴォーカルの比重が増し、ロック色が強い為、好き嫌いをわけそうな作品。（山崎）



(NEW) TRIUMVIRAT
Pompeii
LP /EMI Harvest 1C 064-32466　'77年
CD/EMI 7243 8 28035 2 1

トリアンヴィラート、５枚目のアルバム。ニュー・トリアンヴィラートの第一作でもある。ユルゲン・フリッツ以外のメンバーは全て交替し、キーボード、ドラムス、ベース、ヴォーカルの４人編成になっている。ポンペイ火山の噴火をテーマにしたトータル・アルバムであるが、フリッツと他のメンバーの力量の差は著しく、グループとしてのバランスに欠ける感は否めない。本作以後、サウンドがよりポップなものへと変化するが、それを予感させる箇所もある。しかし、フリッツのプレイに限定して聴くならば、それなりに魅力的な作品と言える。多少シンプルな部分もあるものの、その端正な演奏は、初期の作品に見られたきおいもなく、彼の実力を物語っている。（賀川）



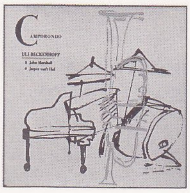
TROYA
Point Of Eruption
LP /Forder Turm T5476　'74年
CD/Lost Pipe Dreams LP 016 CD

自主製作に近い形で発売されたことでもあり、同時期の大手レーベルのレコードと比べると、音質的に見劣りするのはいた仕方ない。それでも、このTROYAが残した唯一のアルバムは捨て難い魅力を持っている。タイプとしては、NOVALIS, FAITHFUL BREATHに近く、メロディを重視したキーボードをメインにした音作りとなっている。テクニックは当時としては水準はいっているものの、今ひとつといったところ。彼らの本領はじっくりと曲を盛り上げて行くドラマチックな曲作りにある。となると、A②、B③が本作の代表的な曲といえよう。FAITHFUL BREATHを以前再発したCodaより、本作もLP再発された後、最近になってCD再発された。その後メンバー４人については分っていないのが残念。（吉瀬）



TRY
Just A Try
LP/View VGNS 2004　'80年

クレジットは、b、voを含めて４人が並記されてはいるものの、あくまでもゲスト参加のようで、TRYなるこのバンドはMichael LappとAmadeus Reinekの二人が正体のもよう。それは音の方にはっきりと示されている。Kbdとgを中心にしたどちらかと言えばアコースティック色のある内容で、音はクリアー、楽器の種類は多く、何よりM.オールドフィールド等が持ち合わせている夢想感がある。安受け合いのシンフォニック・サウンドではなくクラシック・タッチのシリアスさ、ぜい肉のないトーンで１枚を通している。ただ総べての音がほぼ均等に力強く、もう少し陰影のつくような押し引きがほしいところ。サウンド・コンセプションがしっかりしているので安定感はある。落ち着きのある音楽だ。（松本）



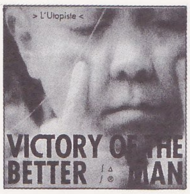
ULI BECKERHOFF
Camporondo
CD/Nabel NABEL 4629　'87年

ウリ・ベッカーホフがどういう経歴のミュージシャンかは全く判らない。おそらくはドイツのジャズ・ミュージシャンだと思われるが、確信はない。少なくともこのNabelレーベルに２枚のアルバムが確認される。昔からドイツのジャズ・ミュージシャンはヨーロッパ各地の著名なミュージシャンと共演して腕を上げ、世に出て来ることが多かったが、これもそんな経緯が連想される作品だ。元SOFT MACHINEの名ドラマー、ジョン・マーシャルと、オランダの生んだオールラウンド・キーボード・プレイヤー、ヤスパー・ファントフをバックに、ベッカーホフが自在にトランペット・ソロをとる。月並みなジャズ・セッションとは一線を画しているのは、全体によく曲が書き込まれているからだろう。納得の行く１枚。（坂本）



UNDER CONTROL (Switzerland)
Kroumir
LP/Konnex ST 5006　'85年

大注目ギタリストChristy Doranを配した痛快ジャズロックバンドの唯一の録音作品。ギタートリオ＋フルートという４人編成なのだがこれがガンガンドライヴしていて本当に小気味よい。このフルートがメインに立っているのだが、こいつが電気的エフェクトをかけまくって吹っ切れたプレイをしているのがこのバンドのカラー。フレーズはかなり変なパターンを持ってきているのだがリズムセクションがストレートに勝負してくるので真っ当なジャズロックのフィールドで勝負という感じが伝わってくる。時たまOZRIC TENTACLESの味が見える部分もある。（このバンドにはドラッグ臭さは全然無いが）。この手の作品はどのジャンルからも評価されないが、せめて選定能力を持っている我々ぐらいは注目しようではないか。（伊藤）



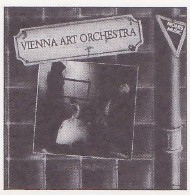
VICTORY OF THE BETTER MAN
L'utopiste
CD/CMP '91年
/ジムコ JICK 89706

ハンブルグのレーベルCMPと言えば、J.キューンやM.ナウシーフ等の活動で知られる先鋭レーベルだが、近時一層の幅を拡げつつある。このアルバムはそうした中の一つ。メンバーは既にキャリアを持っており、中には元NECRONOMICONという経歴もある。内容を例えるなら、TALK TALKの「Laughing Stock」にアーサー・ブラウンのヴォーカルを入れた感じで、朽ち果てたようなイメージがある。ゴシック色が強く迷路に入り込んだような印象を抱かせるかもしれない。いかにも薄暗く湿って重いヨーロッパ大陸ならではの音という気がする。ジャズ・サウンドから枠を破って出てきたCMPにあって、このアルバムはロック・サウンドから突き出ていった点で異色だが、やはりクオリティは充分、強力作になっている。(松本)



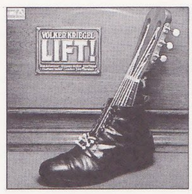
VINEGAR
Vinegar
LP/(private press)WP 710101 '71年

物悲しいヴァイオリンの響きが印象に残るこの作品は、'71年、Werner Purrmannというマイナー??レーベルより発表された。'60年代後半のヒッピー、サイケ、アート・ロック等、様々な要素をごった煮にして自分達なりに消化した様なヘヴィなプログレッシヴ・ロックを展開していて、とても個性的、且つ魅力的な内容を誇っている。アルバム全5曲共にマイナー調のメロディ・ラインを多用した重厚でけだるい雰囲気が支配的である。メンバー7人によるハモンド、ファズ・ギター、フルート、ヴァイオリン、女性スキャット等を駆使した暗黒サウンドはあくまでもゲルマン民族の血が流れる彼らならではのものである。メンバーのその後の動向は不明であるが、本作のみで姿を消してしまうにはあまりにも残念である。(松尾)



VIENNA ART ORCHESTRA
(Austria)
Serapionmusic
LP/Moers Music 02050 '86年

VAOを聴く喜びとは、ローレン・ニュートン(vo)、ウォルフガング・シュニック(as)、ウリ・シャーラー(key本作では冒頭でタンゴを奏でるメロディカが凄い)ら、個性豊かな演奏者たちの技の冴えもさることながら、まずは音楽的才気を黄金色に薫るシャンパンのように弾けさせる、マティアス・リュエグの洒脱で粋な作編曲を味わうことにこそある。静から動、暗から明、モノクロからカラーと情景の鮮やかな転換を滑らかに連ね、天才振付師か舞台監督のように、音の動きや表情を自在に操る彼の手つきは、数多いライヴ盤で詳細に見てとれる。本作はウィーンの劇団セラピオンを題材とした異色作。マジカルな霧に包まれて、音はいつもの華やかさを幾分か押え、代わりに迷宮的な奥行き深さをたたえている。(福島)



VOLKER KRIEGEL
Lift!
LP/MPS 2121753 '73年

詳しい事は判ら無いがフォルカー・クリーゲルは主として'70年代に結構な枚数を出しているギタリストでアルバム毎の出来不出来が激しかった様に思う。そんな中、本作はE・ウェーバー、J・マーシャル、S・サルツマン、J・テイラー、Z・ザイフェルトを迎えている事もあって仲々の出来。クールで抑制の効いた部分とアップテンポのインタープレイ重視の部分からなるがエレピの音色等と相まってどこか懐しい感じを覚える当時の音であるのが嬉しい。各人のソロが随所に聴かれるがザオを思わせるテーマから集団即興を経てリズムをバックに弾きまくるザイフェルトのヴァイオリンはかなりの聴き物。その他の曲も含め'70年代型のジャズ・ロック好みの方には充分の一枚。(中西)



WALLENSTEIN
Blitzkrieg
LP /Pilz 20 29064-6 '72年
CD/Bernhard Mikulski CD20 29064-2
/キング KICP 2731

3枚めの「Cosmic Century」ばかりが有名な彼らだが、もともとは、このデビュー作から知られるようにハード・ロック系のバンドだった。再編後の彼らについては、めったと語られることがなく結構謎だと思いがちだが、こちらはドカス。95%以上の確率で×のはず。で、やはり初期の4枚が勝負だ。テクは3枚めで大胆にシンフォニックス・ロックをやっても、荒が目立ったわけで、それほど期待できない。それでもこの1枚めは、アメリカ人ギタリストがソリッドで仲々重みのあるリフ、ソロを披露して全体をストレートにまとめている。もちろんクラシカルなピアノとメロトロンは既に健在で、ドラムはテク有りだからプログレ・ファンも聴ける。4曲しかない。(松本)



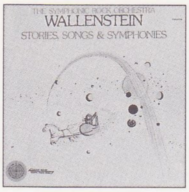
WALLENSTEIN
Mother Universe
LP /Pilz 20 29113-8 '72年
CD/Bernhard Mikulski CD 20-29113-2
/キング KICP 2732

ユルゲン・ドラゼ率いるヴァレンシュタインの2ndアルバム。メンバーはドラゼ(Keyb)の他にハラルド・グロスコフ(Dr)、アメリカ人のビル・バローン(G)、そしてオランダ人のイェリー・ベルカース(B)の計4人である。アルバムの時点で既に彼らはジャーマン・シンフォニック・ロックの頂点に達していたと言えよう。初期ヴァレンシュタインのサウンドはギターがヘヴィーな音色を多用するため全体的にハードな印象を受けるが、核になっているのはあくまでもピアノ、メロトロンをはじめとするドラゼのキーボード・プレイであり、表面的なダイナミックさのみならず、本質的には繊細な面を多く持っているグループであると感ずる。なお、ベースのベルカースは本作後に脱退し、ソロ・アルバムを発表した。(城元)



WALLENSTEIN
Comic Century
LP /Kosmische Musik KM 58006 '73年
CD/Bernhard Mikulski CD KM 58.006
/キング KICP 2738

ベースがディーター・メイアーに交替し、さらにヴァイオリニストのヨアヒム・レイゼを加えたヴァレンシュタインが発表した3rdアルバムである。基本的には前2作の延長線にある作品だが、ギターの音処理を若干変えてその存在を押えめにした分キーボードと新加入のヴァイオリンがフィーチャーされ、シンフォニックな趣きが強くなっている。本作が独シンフォニック・ロックの最良部に属する作品であることは疑う余地もない。自らを「ザ・シンフォニック・ロック・オーストラ」と名乗るのは、当時の彼らが目指していた音楽を明確にしただけでなく、その大いなる自信の表れであろう。次なる4thアルバム「Stories, Songs & Symphonies」では若干パワーが落ちたものの、これもなかなかの佳作である。 (城元)



WALLENSTEIN
Stories, Songs & Symphonies
LP /Kosmische Musik KM 58.014
'75年
CD/ZYX 580142

'30年戦争時代の将軍であり、シラーの戯曲ともなった軍人の名を冠し、自ら〝シンフォニック・ロック・オーケストラ〟を名乗ったWALLENSTEIN。「Cosmic Century」に続く4作めとなる本作は名盤とされる前作の後だけに幾分地味な印象は拭えないが、味わいのある好作品だと思う。タイトル曲のメロディは心に染みる。ラストの〝Symphony For Bela Bartok〟も一聴の価値があろう。ジャケットは彼等の作品中最も美しい。ヴァイオリニストは本作で脱退、ドラマーのハラルド・グロスコフはASHRAに参加、ソロ・アルバム「Synthesist」も制作する。リーダー格のユルゲン・ドラセはベーシストを除くメンバーを一新、77年に「No More Love」を発表。評価は低いが本作をハード寄りにした英国のMAGNUMに通じる音だ。(高山)



WALLENSTEIN
No More Love
LP /RCA PL 30 010 '77年

4作目「S, S&S」発表後、一度は解散したWALLENSTEINだが、キーボード奏者のユルゲン・ドラゼが再編し、メンバー総入れ替えで再スタートしたWALLENSTEIN。バンド名は同じでも別バンドと考えた方がいい。こちらのWALLENSTEINはこの再編1作目以後、「Charlie」(RCA PL 30 045、'78年)、「Blue Eyed Boys」(同PL 30 061、'79年)、「Fräuleins」(EMI IC 064-45 932、'80年)、「Sssssstop」(同IC 064-46 307、'81年) と4作を残すが、これら4作は本当にどうしようもない。別バンドなのは結構だがコマーシャルな上に音楽が死んでいる。そんな中で、この再編1作目は、ドラゼが前WALLENSTEINを幾らか継いでおり、曲によっては相当シンフォニックだ。クリアーでポップ色も備えた好作。 (松本)



WIND
Seasons
LP /Plus 3 '70年
CD/Second Battle SB 016

シンフォニック・ファンには2nd「Morning」が名作として名高いウインドであるが、あまり話題に登らない1st「Seasons」もハード系の名作として再評価されるべきである。鋭い切り込みのオルガンとギターのカッティングに始まる1曲目は、美しいフルートとオルガンによる情感溢れるパッセージを挟みながらも、たたきつけるかの様なハードさが目を見張らせる佳曲。2～4曲目でロマンチックなムードや爽やかなコーラスなど2ndに通じる部分も見せるが、5曲目で再び重厚なオルガン・ハードを聴かせてくれる。ラストの大曲は、けだるく鳴り響くハーモニカの音が印象的なサイケ色濃厚なヘヴィ・エクスペリメンタル・ミュージックで、当時のカオス的なジャーマン・ロックを反映している。 (高森)



WIND
Morning
LP /CBS S65 007 '72年
CD/Trick Music TM 9302

初期ドイツ・ロックにあってファンタジックなサウンドを前面に押し出していた彼等の「Seasons」(Plus 3)に続く2作目、最終作。ステーベ・ライストナー(Vo、Per)、トーマス・ライデンベルガー(G、Vo)、アンドレアス・ブエラー(B、Vo Per)、ルシアン・ブエラー(Key、Vo、Per)、ルッキーシュミット(Dr、Per、メロトロン、P.ヴァイヴ)によるもの。ヴォーカルはジェネシスの、メロトロンの使用法は初期クリムゾンの影響下にあるがジャケットやA②、B②の曲調に象徴される、まさに中部ヨーロッパが育んだと言える爽やかさあるメルヘンの香りが根底を満たしている。的を得たリヴァーヴ処理、繊細なアコースティック・ギターと効果的なメロトロンを特徴とするシンフォニック・ロックと言えよう。 (松本)



BERND WITTHÜSER
Lieder von Vampiren, Nonnen und Toten
LP/Ohr OMM 56.002 '70年

Witthüserのソロ名義となっているが、実際は彼とWestruppの共作と考えてよい作品である。これ以後、二人でアルバムを制作することとなる。彼らの音楽は、基本的にフォーク・ソングに属するものである。本作では吸血鬼をテーマとした物語の形態を取っているが、民衆の思いを代弁するプロテスト・ソングとしての政治的な意味を含んでいる。しかし、堅苦しさなど少しも感じさせない、人情味豊かなものに仕上がっている。ぴたりと息の合った二人の唄は誠実でほのぼのとした雰囲気を醸し出し、鉄琴やハーモニカといった楽器が哀愁を帯びた情感を盛り上げている。録音がシンプルなぶん臨場感に富んでいて、太鼓の低音も印象的である。(なお、昔懐かしいフリッパーのテーマがカバーされている。) (Helmut)



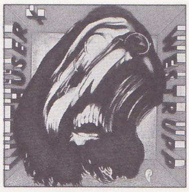
WITTHÜSER & WESTRUPP
Bauer Plath
LP/Pilz 20 29115-4　'72年

デュオでの４作目。ゲストには例によってユルゲン・ドラゼ(Kbd)、イェリー・ベルカーズ(b)、ハラルド・グラスコフ(perc)のWALLENSTEIN勢やコスミック・ギャルのジッレ・レットマン、そしてOhr-Pilz我らがエンジニア、ディーター・デェルクスもいる。デュオのac-g、voが中心になってそこにゲスト陣が色どりを添える形もいつもと同じ。全体に意外かもしれないが物哀しい雰囲気がある。笛の音色などとても質素に響く。Ａ面は割に地味だが、２曲からなるＢ面はPilz流の音響処理のうえで、Ｗ＆Ｗメイン、バックWALLENSTEINとなり、ピアノ、メロトロンもサポート、遠くにはきらきらと「Lord Krishna」Ａ②のようにグロッケンが響いている等、いかにもだ。Ｂ①はＷ＆Ｗの佳曲に仕上っている。　(松本)



WITTHÜSER & WESTRUPP
Der Jesus Pilz
LP /Pilz 2021098-7　'71年

超不人気のフォーク・デュオというレッテルとは裏腹に、特にこのアルバムをはじめとしてOhr、Pilz、Kosmischeがいっしょに来たようなサウンドは、サイケデリックの視点では相当だ。音の位相変化や録音関係では当時群を抜くドイツだけあって、ゴチャゴチャした雰囲気に輪がかかる。ドイツ語のゴツゴツした語感のダミ声でじゃんじゃか演っているバックではド・シンフォニックなメロトロンの嵐だったりと確かに焦点が絞れない。全体に宗教的ムードもあって、それはタイトルどおりのヒッピー感覚。リヴァーブ処理や語りも入ってフォークからはみ出る。　(松本)



WITTHÜSER & WESTRUPP
Trips & Träume
LP/Ohr OMM 56 016　'71年

ベルンド・ヴィットゥーザーとヴァルター・ヴェストルップはオール・レーベルに２枚、ピルツ・レーベルに２枚、コスミッシェ・レーベルに１枚の作品を残したフォーク・デュオである。これは彼等の２ndでありゲストにディーター・デェルクス等が参加している。この彼等やヘルダーリン、ブローゼルマシーネ等の音楽性が素朴さに終始しない神秘的な響きを伴うのは単にリヴァーヴ処理による所のみであろうか。ピルツ系サウンドの中で最もフォーク色の濃い彼等の音色からも英、仏、アイルランド等のフォークにはないドイツ神秘主義絵画の画家達が描いたような深い霧に包まれた森のイメージが浮び上がる。時にはアメリカ指向やユーモアを見せるが本作は４th「Bauer Plath」と共にメロディアスな曲が多い。　(松本)



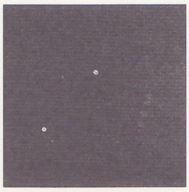
WITTHÜSER & WESTRUPP
Live*68-*73
LP /Kosmische Musik 2/58.004
'73年

Ohr、Pilz、Kosmische Musikの三レーベルを唯一渡り歩いたフォーク・デュオ。デュオでの総仕上げのようなライヴ編集盤２枚組。内ジャケットには、ジャーマン・ロックの引きがねを引いた'68年のフェスティヴァル"Essener Songtage"の時の彼等の写真を始め、「Jesuspilz」を演じた？'71年の写真など、これまでの二人のスナップが並べられている。スタジオ盤とは違ってエフェクトがかけられていないかわりに、ホールの響きがその替わり？をしていたり、聴衆の笑い声が返ってきたり、する。もちろん基本的には生ギターと歌だが、シンバルや笛、様々な小物も用意されており、そして意外にも曲はシリアスな雰囲気がある。それはスタジオ盤以上だったりもする。何やら全体に物哀しい空気が流れる。　(松本)



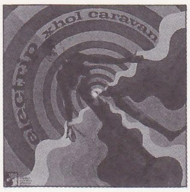
WOLFGAN BOCK
Cycles
LP/Telefunken 6.24390　'80年

彼は、ROLANDのSYSTEM 100Mを中心としたシンセサイザーの解説本をドイツ国内で出しており、早い時期からシンセ音楽に取り組んでいる一人である。Klaus Schulueのプロデュースの下で、初めて制作したのが本アルバムである。作曲はもちろん、ドラム以外の全ての演奏は彼ひとりで行っている。A面のタイトル曲は19分弱の大作で、B面には３つのパートからなる組み曲が収められている。やはりSchulzeの影響をかなり受けているらしく、サウンドの要素には共通するものが多い。うねるようなシンセの旋律や、循環するリズムとドラムがテンポを上げながら迫りくる展開もSchulzeとよく似ている。全体的にナチュラルで明るい感じが、彼自身の持ち味であろうか。Urs Amannによるカバー・ペインティングが印象的である。　(Helmut)



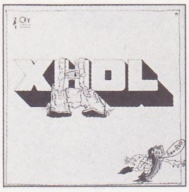
WOLFGANG DAUSER ET CETERA
Wolfgang Dauner Et Cetera
LP/Global 28001-8 U　'70年

ダウナーはドイツの前衛ジャズシーンで有名な人で、「オクメルズ」「フリーアクション」(ジャケットもデザインして才能を発揮)等が日本でも発売されている。「オクメルズ」ではビートルズの曲をアレンジしたりして早くからロックやエレクトロニクスに興味をしめていたが、エトセトラを組んでロックに接近する。'70年に本作、2ndにコロシアムのハイズマンやジャズロックのラリー・コリエル等で「Knirch」そして2枚組のライヴを発表。メンバーはドラムのF・ブレスフルを除いて流動的。'74年には「Kunstkopfindiner」をvlnにズビグニェフ・ザイフェルトを迎えて発表。本作のメンバーはベースにECMで有名なE・ウェーバー、ギターにEMBRYOのジギ・シェワブの5人編成によって、アラベスクなラーガやマニエリスティックなジャズエレクトロニクスを展開する。　(木野)



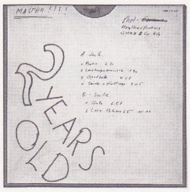
XHOL CARAVAN
Electrip
LP/Hansa 80 099 IU '69年(?)

'68年にSOUL CARAVANの名前で「Get in High」を発表した彼らは、XHOL CARAVANと名を改め２ndの本作を制作した。このあと単にXHOLと名乗り、３rd、４thアルバムをOhrレーベルに残している。サックス、フルートといった管楽器を前面にオルガン、ピアノ、ベース、ドラムなどがサポートする６人編成のバンドである。楽器の音を電気処理しているらしいが、生音と比べて大きく変わっているわけではない。全５曲で、１曲あたりの演奏は比較的長めである。内容はロックとジャズをミックスしたようなもので、一部の曲ではヴォーカルも加わっている。フリー・ミュージックのような部分もあるが、リズムが継続しているので、自然に聞き通すことができる。ちょっとした効果音や小物の楽器を使った演奏が印象的である。 (Helmut)



XHOL
Xhol
LP/Ohr OMM 56014 '70年

Ohrレーベルには、アシュラ・テンペルやグル・グルのような当時のジャーマン・ロックの超出性を代表するアルバムが犇めいている反面、モアーっとしたつかみどころのないサウンドを有したアルバムも散見する。ANNEXUS QUAMやLIMBUS、そしてこのXHOLも定義し難いサウンドを持つバンドである。ブルース崩れのドローンとした間伸びした音は、緊迫感の欠如したフリー・ミュージックのようでもある。サックスやオルガンにもワウワウを掛けて遊んでいるのは、音響効果を狙ったと言うよりは、単なる手抜き精神の成すところであろうが、どうにも盛り上がらず、タレ流されて行く音はやはりドイツならではのような気がする。２流３流と言うよりは番外編といったジャーマン・ロックの謎の部分。 (高森)



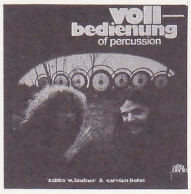
XHOL
Motherfuckers GMBH & Co KG
LP/Ohr OMM 556.024 '72年

俺は何も落書きしてないゾ、というジャケの人を喰ったタイトルの、クソール名義、２作目。それにしてもこのジャケは、つい落書きしたくなる。来世紀になった頃、「クレジット上１曲多い別プレスがある」なんてことに、やっぱりならないか。１作目に似てフリー・ロック調。サックスの垂れ込めるようなトーンも同じ。３曲目は10分近いそのタイトルもずばり〝Orgal Solo〞、しかし確かにソロだが、まるでエレクトロニクス・サウンドによくある持続音だ。終始虫が鳴いていてフルートがエコー舞いしてハンド・ドラムが入っているだけのB①７分間は、変な環境音楽？。二癖程あるが、このバンドはやはりジャズ／ロックの色が強く、A④、B②のロング・ナンバーでは、org、saxが聴かせてくれる。 (松本)



YATHA SHIDHRA
A Meditation Mass
LP /Brain 1045 '74年
CD/(US.)The Laser's Edge LE 1015

ドイツロックには、機械文明への同化と肯定と共に、自然回帰、東洋的神秘主義への憧憬が強く感じられる。南ドイツ－スイス系グループには特にこの傾向が強い感があるが、ブレインの比較的初期に発表されたヤサ・シドラのアルバムは、ポポル・ヴフのような東洋の宗教的感覚に満ちている。単調な細かい反復(Ds、和音楽器)の上に、フルートが息の長いメロディーをのせる、という、インド音楽や東欧の民族音楽の影響がみられる。ロックからもドイツ音楽からも遠ざかる非西洋的音楽である。美しく、静かで自然な音であるが、シーン形成の主導的立場をとり得るようなものでは決してない。他のアルバムが発売されていないところをみると、多分にセッション・アルバム的性格の強いものだったのではなかろうか。 (嶋田)



"ZABBA" W. LINDER & CARSTEN BOHN
Vollbedienung of Percussion
LP/Brain 1047 '74年

「パーカッションのすべて」と題された作品。RELEASE MUSIC ORCHESTRAとFRUMPYの両グループの２人のパーカッショニストが共演している。ピアノやオルガン、ビブラフォンといった音階楽器の他に、ドラム、シンバル、コンガ、鐘、ゴング、ティンパニー、タムタムなど多数の打楽器を用いて、多種・多彩な音色とリズムを多様な奏法で重ねている。本作は超絶技巧的な限界を試すものではなく、あくまでも表現のヴァリエーションの可能性をねらったものである。曲によっては、リズムを明確に打ち出した部分とそうでない部分を対比させることによって、打楽器の表現の多面性を上手く表現している。聞き手によっては、現代音楽の作品という印象を持つかも知れない。 (Helmut)



ZWEISTEIN
Trip・Flip Out・Meditation
LP/Philips 6630 002 '70年

超カルト・アルバム。「こんなアルバムは二度とない」と断言してもいいくらい、手に追えないジャーマン・ミュージックの極北。３枚組、全６曲。曲などというしろ物ですらない。ジャケはエッチングふう銀ピカに厚さ約５ミリの円形鏡が埋め込まれ、内ジャケも異様なコラージュに光沢。それにしてもこの冗長とも徹底ともつかない音楽は凄い。超駄作でも超傑作でもあるはず。サイケ・モードであるとは言える。ギミックの塊のような３枚だ。割れた音をイコライズしたフォーク・ソング、会話、効果音のコラージュ、エコー処理のごった煮、持続音の変形、オルガンの響き、いたずら。何の法則もない。いかれているとしか言いようのない盤だ。まったく音楽的でない。今まで聴いてきた音楽で一番型破りな秘蔵の一作。(松本)



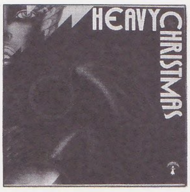
V.A.
Mitten Ins Ohr
LP/Ohr OMM 2/56018 '71年

Ohrレーベルの第２弾コンピレーション２枚組アルバム。残念ながら「Ohrenschmaus」「Kosmische Musik」のような未発売曲／シングル曲は一切入っていないが、少しウィーン幻想派絵画を思わせるカヴァー・ワークは素晴らしい。またリーフレットには収録アーティストの各住所・連絡先が明記されており、'20年以上経った今となっては、ただくやしいだけだったりする。B.CONTROLは「Operation」から、F.DE COLOGNEは「Rockoper～」から、W & Wは「Trips Und～」から、EMBRYOとA.QUAMとASH RA TEMPELとXHOLが各々１stアルバムから、A.DÜÜLが「Paradies～」から、T.DREAMは「Alpha～」から、LIMBUSが「Mandalas」、ANIMAが「Stürmischer～」からの、各々収録になっている。（松本）



V.A.
Rapunzel
LP/Pilz 2029116-2 '72年

ピルツ・レーベルのフォーク系サウンドを有するグループのオムニバス・アルバム。ジェリー・ベーカーズ、W＆W、ヴァーレンシュタイン、エムティディ、ヘルダーリン、ブローゼルマシーネ、ルフス・ツファールの計７バンドの音が収録されている。非常に丁寧に創られたアルバムで、オリジナルは見開きジャケットに加えて、各グループの写真入りのリーフレットがとじ込まれている。コンセプト・オムニバス・アルバムとも呼びたい作品で、未発表曲こそ収録されていないものの、写真１つにしても選び抜かれたものを使用しており、ロルフ・ウルリッヒ・カイザーのピルツ・レーベルにかける意気込みを感じさせる仕上がりになっている。（山崎）



V.A.
Heavy Christmas
LP/Pilz 15 21114-2 '71年

Pilzレーベルに残る２枚のサンプラーの１枚。人目をひく独特なカバー・アートは、Osterwalderによる。本作はクリスマス・アルバムとして企画されたもので、BASFやPILZレーベル関連のアーティストが７グループ参加し、１ないし２曲ずつ演奏している。本作の収録曲はすべて未収と思われる。個別のアルバムには無い、各アーティストのひと味違う演奏に接することができる重要な作品集である。特にJOY UNLIMITEDの作品の出来が良く、JOYとKENの二人のデュエットによる熱唱は圧巻である。DIES IRAEのようにコミカルで楽しい雰囲気のものから、FLUTE & VOICEのようにしっとりと落ち着いた作品まで、多様性に富んでいる。クレジット関係の問題をクリアして、是非とも再発してほしい作品である。（Helmut）



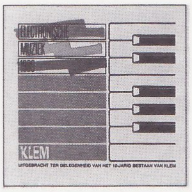
V.A.
Brain Festival Essen II
LP/Brain 0080.017-2 '78年

ブレイン・レーベル所属のミュージシャンによる、第２回ブレイン・フェスティヴァル（'78年２月24、25日、Essen）のライヴ盤。主な参加者はリリース・ミュージック・オーケストラ、ノヴァリス、SFF、F&F、ルーファス等。いずれも本アルバム以外では聴くことが出来ない貴重なテイクである。聴き物はSFFの10分を越える〝Explore/Wizzord〞（彼らの２枚組CDに収録されたテイクと同じもの）、リリース・ミュージック・オーケストラのややファンキーで乗りの良いジャズ・ロック、シンプルではあるがリリカルなノヴァリスの演奏。ルーファスの２曲も捨て難い。ブレイン・レーベルが幅広いジャンルのミュージシャンの良質な作品をリリースしていたことを象徴するような作品である。（賀川）



V.A.(Switzerland)
Heavenly And Heavy
LP/Koh-1-Noor KR-1 '74年

スイスの５つのロック・グループを集めたオムニバス・アルバムで、Henriはフォーク・ロックタイプ、Grunspain Learはハード・ロックタイプ、何枚かLPも出しているErtlifは、メロトロンを大幅に導入したプログレシッヴ・ロックと呼んでもおかしくないサウンド。聴かせるのは、もちろん、Islandである。名作「Pictures」に先がけて'73年に録音された８分に及ぶこの曲は、あの悪魔的ともいえる音作りの域までは達ってはいないが、サックス、キーボード、ヴォーカルの扱い方には彼らの個性がすでにめばえている。メンバーは若干異っており、Benjamin Jager（VO-PERC）、Guge Meier（ds、perc）に、Jack R.Conrad（Kbd）、Dany Ruehle（g）、Werni Froehlich（b）、Bryn Collinson（sax、vo）の６人編成である。（吉瀬）



V.A.
Electronische Muziek 1989
CD/Klem CDI '89年

エレクトロニック音楽の愛好者のクラブが、結成10周年を記念して制作したＣＤ。このジャンルでは有名なミュージシャンの未発表作品が多数収められており、とても貴重な作品である。Christoph Frankeの作品は、往年のTANGERINE DREAMを彷彿させるシーケンサ・リズム健在の切れの良い内容。Klaus Schulueは、女性ボーカルとシンセの組み合わせによるドラマティックな作品を提供している。Walter Christian Rotheの作品は、澄み切っていてしっとりとした美しいメロディと重厚でドラマティックな曲の展開が印象的である。TANGERINE DREAMは、3'27''の〝Lost Tale〞と題される明るく溌剌とした作品を提供している。（Helmut）



●パルツィファル



●アニマ

●アモン・デュール



●アシュ・ラ・テンプル



70's GERMAN HARD ROCK

ジャーマン・ハード・ロック

●高森秀幸

以前マーキー誌上に〝ジャーマン・ハード・ロック・カタログ〞が掲載されたが、不思議な感慨を抱く企画であった。何故ならジャーマン・ロックが取り上げられる場合、その特異な音楽性・思想性の側面から、エクスペリメンタル・ミュージックやヘヴィ・サイケ・ミュージック、エレクトリック・ミュージック、もしくはプログレの定番シンフォニック・ロックといったものばかりで、〝ハード・ロック〞という観点からのアプローチは皆無だったからである。実際あのカタログで初めて紹介されたバンドも多く、ジャーマン・ロックの奥深さを改めて認識したものだ。そしてこの集成においても〝ジャーマン・ハード・ロック〞が一つのジャンルとして設けられることになった。

しかし、〝ジャーマン・ハード・ロック〞をいざ語ろうとすると、たちまち困難な状況に陥ってしまうのである。それはシーンとしての〝ジャーマン・ハード・ロック〞が見えて来ない事によるもので、系統化によるシーンの形成・発展を辿れないからである。それはブリティッシュ・ハード・ロックが、ツェッペリンやパープル、サバスといったバンドを核として一大ハード・ロック・シーンを築いたのに比べ、ドイツの場合、多くのバンドが単発的に終わっている事と、例えばネクターやバース・コントロールといったメジャーなバンドが〝ハード・ロック〞という枠組から多分にずれた活動を展開していった為に、シーンを引っぱる核としての存在が無かった事によるものである。又、音的に見ても、本格派と呼べるバンドは極めて少なく、純粋にハード・ロックと言えるのはあの超メジャー・バンド「スコーピオンズ」(それもVirgin Killer以降の)ぐらいしか思い浮かばない程で、他はプログレ、ジャズ、サイケ、ドグサレ(?)などゴッタ煮的様相を呈しており、客観的な線引きが難しい事からもより一層〝ジャーマン・ハード・ロック〞像を不明瞭なものにしているのだ。

さらには、アシュ・ラ・テンペルやグル・グルといった超ドイツ的バンドでさえハード・ロック的手法を用いており、より混乱してしまうが、この事は、サイケデリック・ムーヴメントから生まれたハード・ロックとプログレッシヴ・ロックが、早期にその独自性を確立し、枝分かれして行ったイギリスから、ドイツへと波及するに至って、再びアマルガム状態に投げ込まれ、そのるつぼ的状況の中から方法論としての〝ハード・ロック〞をジャーマン・ロックが身につけて行ったと考えるならば頷けるのではあるまいか。〝ジャーマン・ロック〞における〝ハード・ロック〞とはスピリットの問題ではなく、音楽表現の一手段に過ぎないのである。つき抜けた潔さを感じるブリティッシュ・ハード・ロックに比して今一つ歯切れの悪い〝ジャーマン・ハード・ロック〞は単にテクニックの稚拙さや、後進性によるものではなく、アプローチの違い、出自性の違いによるところが大きいように思われる。

確かにジャーマン・ハード・ロック・バンドにはテクニック的に2流のバンドも多く、単にブリティッシュの亜流バンドも多い。しかし、その曲展開の脈絡のなさ、異様なまでの屈折感、重苦しさ、時にはユーモアや冗談にまで発展する精神的資質は他国には感じられないドイツらしさに満ちたものである。こうした側面をどうとらえるかによって〝ジャーマン・ハード・ロック〞の評価は変わるだろうし、その線引きも変わって来るに違いない。結局、〝ジャーマン・ハード・ロック〞はその〝ハード・ロック度〞でしか〝ハード・ロック〞としては語れないという事なのである。直接的コミュニケーションとして、フィジカル・パフォーマンスとして〝ハード・ロック〞を求める向きには大方は空振りに終ってしまうであろう事は述べておきたい。

最後に一つの指標として〝ジャーマン・ハード・ロック〞を5つに分類してみたので参考としていただきたい。

①ツェッペリン、パープル、サバスなどのイギリスのメジャー・バンドの直接的影響下にあるいわゆる本格派と呼べるバンド。HAIRY CHAPTER、NIGHT SUN、BLACK-WATER PARKなど。

②ハード・ロック的側面は強いものの、サイケ、ジャズなども取り込み、実験色も見せるバンド。SILBERBART、OUT OF FOCUS、DIES IRAEなど。

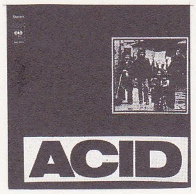
③ギターよりもオルガンをメインにした〝オルガン・ハード〞と呼ばれるタイプのバンド。FRUMPY、SIXTY-NINE、GIFT(2nd)など。

④ハード・ロック的リズム感は残しながらもプログレッシヴ・ロックの領域で語られ得るバンド。2066 AND THEN、ORANGE PEEL、EURENSPYGELなど。

⑤長期的活動を維持し、色々なアプローチをアルバムにより変化させていったバンド。LUCIFER'S FRIEND、NEKTAR、BIRTH CONTROL、ELOYなど。

上記の分類はあくまで便宜上のもので、分類不能のバンドも多く、筆者個人の主観でしかない事をお断りしておく。


●バース・コントロール



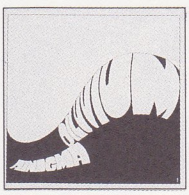
ACID (Austria)
Acid
LP/CBS 65983　'74年

キーボード・トリオ。オープニングのクラプトンもカバーした〝After Midnight〞では、ギターを加えてハードなノリの良い演奏。残りの曲はキーボードのPongerとベースのNovacekの共作となっており、オープニング同様にトランペットやサックスをゲストに迎え、曲ごとに変化を付けている。A④のインストゥルメンタル・ナンバーはブッカー・T・ジョーンズのコピーと言え、全体的にも多分にファンキーな感触を保ち、クリーム以降のクラプトン的アメリカ南部志向を持つ。その為、B④等メロトロンが使用されているが違和感が残る。ヴォーカル部が親しみのある非常に聞き易いアレンジとなっているのが、メジャーからデビュウしたグループらしい。　（吉野）



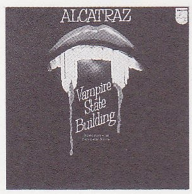
AFTER SHAVE (Switzerland)
Skin Deep
LP/(Swi.)Splendid SLP 50.106　'72年

スイスでは数少いトリオ編成の本格派ハード・ロック・バンド。本作はギターがダビングされている程度でスタジオ・ライヴ的作品に仕上げられ、やはりA①④B①③等ののりの良いナンバーが聞き所となっている。B①のスライド・ギター等荒削りだが勢いのある演奏を聞かせる。アコースティック志向の曲はメロディが弱く退屈させる。プロデュースが悪いのであろう、全体的に曲展開が未整理状態の印象を残す。又このレーベル作品全体に言えるが、録音が悪く音がこもっているのが残念だ。自主製作規模だが最近セカンドを発表。なお現在、コレクターに注目され始めているレーベルがデンマークのスペクテーターであり、本作をリリースしたスプレンディドである。　（吉野）



AINIGMA
Diluvium
LP /(private press.)Arc ALPS 151715　'?年

おそらく'70年代初頭に製作されたであろう自主盤。当然レアー盤としての扱いを受けていたが再発済。ファズを利かせ音が割れているギター、DOORSを想わせるチープなオルガン・サウンド。ヴォーカルも心做しかジム・モリソンを意識している様に聞こえる。そしてリズム・セクションはもたつく。当時のフラワー・ムーブメントにどっぷり漬かったトリップ志向サウンド。ヘヴィ・サイケデリック好事家向作品である。B面全てを占める18分に及ぶタイトル曲を始め、全曲同じ様に聞こえる。これがもし同じ志向のブリティッシュのバンドであったならバラエティを持たせたであろうが、限度を知らないこのワン・パターン徹底はドイツの資質と言えるだろう　（吉野）



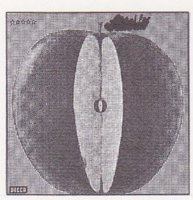
ALCATRAZ
Vampire State Building
LP/Philips 6305 128　'71年

アメリカの刑務所アルカトラス島からバンド名をとり、タイトルはエンパイア・ステート・ビルをもじる等、風変りなコンセプトで制作された本作。A①、B①の10分を超す大作はどちらも当時のドイツ・ニュー・ジャズ・シーンの影響をストレートにうけたジャズ・ロック・サウンドで完成度、演奏力共それなりに高いレベルを誇っているが、やっぱりハード・ロック・ファンにとっては小曲A②、③、B②が聴きものだろう。特にA②はジャーマン・ロック・シーンではめずらしくブルースを渋くきめており、B②ではヘヴィでアヴァンギャルドなギター・ソロが延々と3分以上も続くというかなり興味深い構成をとっている。PLAYED LOUDの記述がこれをものがたっている。　（宇藤）



ARMAGGEDON
Armaggedon
LP /Kuckuck 2375 003　'70年
CD/Kuckuck 11003-2

CWT（英バンド）らを輩出しているクックック・レーベルからデビューした4人組。ARMAGGEDONとシンプルにかかれたジャケットからも察せられる様にきわめてオーソドックスなハード・サウンド。ヴォーカルとギターにはジミ・ヘン色が見られるものの、サイケ色はほとんどなく、その分ストレートなサウンドとなっている。アレンジにも渋さが感じられ、又、J・ベック・グループの〝Rice Pudding〞や、スプーキー・トゥースの〝Better By You, Better Than Me〞をカッコ良くきめる等、年代から考えてもかなり水準の高い内容となっている。しかし、このバンドも本作のみしかレコードは制作されておらず、ドイツ単発組の仲間入りをしているのは残念なことである。　（宇藤）



ASTERIX
Asterix
LP/Decca SKL 16 695.P　'70年

'70年にデビュウしたLUCIFER'S FRIENDの前身バンド。独自のノリを聞かせるA①から、全体的にはB③に顕著だがZEPPELINを想い起こさせる曲を収録。更にA④やB④のHechtのピアノをフィーチャーしたプログレッシヴ指向の曲も加えられている。本作は'70年にリリースされているが、レコーディングはおそらく'69年。この時期、ドイツにこれだけの水準を持ったバンドが存在した事は特筆すべきだし、その後のLUCIFER'Sの突出した音楽性を充分に窺わせる作品となっている。なおJohn Lawtonが再参加したLUCIFER'Sのラスト作「Mean Machine」('81年）迄、Hecht, Horns, Hessleinの3Hがグループを支えていた。　（吉野）



BAUMSTAM
On Tour

LP /BMF BS 6232 855　'?年
CD/TRC 038

ヨーロッパの廃盤市場における俗に言う希少盤というやつは、そのレコード自体の希少価値のみが過大評価されてしまって途方もないプレミアの割に内容の伴わない代物が実に多い訳で、我々コレクターにとってこうした事実は正に頭痛の種と言った所だ。さて本作であるがそのプレミアの問題を除けば特にずば抜けた魅力は期待できないものの、自主製作レベルにあってはまあそこそこの完成度を持っている。ねばりのあるファズ・ギターの音色を前面に押し出したブルース調ヘヴィ・ロックでイギリスのLEAF HOUNDあたりに共通点が見い出せるであろう。B①がライヴ録音になっている他は全篇スタジオにおける一発録りといった雰囲気で割とラフな音創りである。

（松尾）

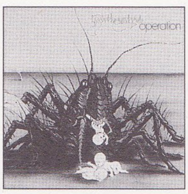


BIRTH CONTROL
Birth Control

LP/Metronome MLP 15366　'70年

'69年に結成されたドイツ最古参グループの１つバース・コントロールの'70年に発表された１st。オリジナルはピルをあしらった円形ジャケットでバンド名（産児制限）を暗示した洒落っ気のあるものであった。プログレッシヴと言うよりは、ヴァニラ・ファッジやドアーズの影響下にあるアート・ロック的色彩が強い。オルガンやチェンバロを多用してのインスト曲も収められているが、'60年代的明るさとポップ性を加味した軽快なもので、クラシカル・ロックと呼べる程の重厚さはない。ラストでドアーズの「ライト・マイ・ファイヤー」がカバーされているが、退廃的ムードはなく、リズミカルで幾分ハード・ロック的アレンジになっている。ハード・ロック・バンドとしての彼らは次作でその意志の統一を図る事になる。

（高森）

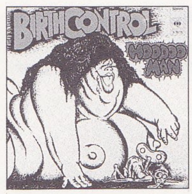


BIRTH CONTROL
Operation

LP /Ohr OMM 56 015　'71年
CD/（Fr.）MSI Spalax 14299

'68年に結成。ドイツも当時イギリスと同様にアメリカからの影響を受けており、このバンドも例に漏れずアート・ロックの流れみ指摘できる。'70年リリースされたファーストはその典型。そして本作（セカンド）は、ハード・ロック・バンドとして'60年代を振り切った演奏を聞くことができる。B③はピアノを中心とし、弦のアレンジが施されたクラシカルな異色曲。本作はイギリスではカリスマ・レーベルよりリリースされており、当時それに合わせイギリス国内でのクラブ・サーキットを敢行している。次作からCBSへ移籍。以降プログレッシヴ色が強まるが、ジャズ・ロック的志向と洗練されたポップ感覚を持ったバンドとして'80年代初頭迄活動を続けた。

（吉野）

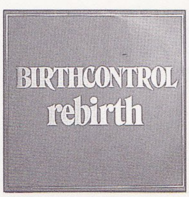


BIRTH CONTROL
Hoodoo Man

LP/CBS S 65316　'72年

名作「Operation」に続く３rd。キーボードが交替し演奏の上では格段の進歩を窺わせる。エマーソンを思わすオルガン主体のアンサンブルは、プログレッシヴ色を強めているが、安定志向が災いして小じんまりとした印象を受ける。ラフではあるがダイナミックな歌唱が魅力のベルンド・ノスケのヴォーカルが浮いてしまっている。唯一前作のムードを残すタイトル曲がパイプ・オルガンによる間奏を含む力作で、プログレ・ファンにもアピールできそうである。ラストの小曲はEL&Pのパロディーのようで蛇足になってしまっている。バース・コントロールは何度かメンバー・チェンジを行いキーボード奏者を取り替えているが、その度にキーボードのカラーが強く出たアルバムを発表しているところが面白い。

（高森）



BIRTH CONTROL
Rebirth

LP/CBS 65963　'73年

ギターのFrenzel、ドラムのNoskeを残し大幅なメンバー・チェンジ後の「再生」と題されたアルバム。ツイン・リード・ギターとなり、キーボードのZeusも前任者より攻撃的なアプローチを見せ、前作よりハード・ロック色が増しているが、ポップな歌メロやブラス・ロック風アレンジなどバンドのイメージが分裂気味になっている。A⑤はメロトロンとピアノによる美しい小曲。今までになかったアコースティックな曲もあるが、これは新任のギタリストDirk Steffensによるもの。メリ張りの効いたノリの良さは新鮮味を覚えるが、一度に色んな事をやろうとした意欲は空回りしてしまっている。そんな中でラスト曲はハード・ロックとポップスにプログレ色が程よくブレンドされた一応の成功作か。

（高森）



BIRTH CONTROL
Live

LP/CBS S 88088　'74年

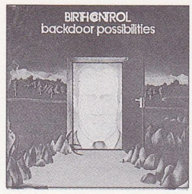
ギターのD.ステファンが抜け、４人編成に戻っての初のライヴ・アルバム。２nd、３rdから１曲づつ、４thから２曲とスタンダードのロックン・ロールの全５曲で２枚組。当然ながら原曲は素材として使われているだけで、長大なアドリブ・プレイが中心のロング・チューンばかりである。やや冗長気味の部分もあるが、その溌溂として伸びやかな息の合った演奏は好感が持てる。Zeusの持ち込んだジャズ・ロック風展開、パーカッションや声によるコミカルなかけ合い、アグレッシヴなオルガンやギター・ソロなど多彩さと言うよりもオーディエンス・サービスに徹している感じが強いのもライヴならではのものであろうか。また音的にも構成的にもディープパープルの「ライヴ・イン・ジャパン」を意識したふしがある。

（高森）



BIRTH CONTROL
Plastic People
LP/CBS 80921　'75年

　これは完全にプログレッシヴ・ロックとして語られるべき中期の名作。意味深なジャケット・ワークからも窺えるようにトータル性の強い作風で演奏の面でも円熟期に入ったそつなさを見せる。未来都市のハイ・ウェイを疾走するかの様な軽快なオープニング、伸びのあるギターのユニゾンが心地良い２曲目、弦楽奏のクラシカルな響きと蔭りのあるヴォーカルがマッチして荘厳な雰囲気に包まれた３曲目のＡ面の流れが特に素晴らしい。Ｂ面の一部で、ブラス・ロックやアメリカ・ポップス風コーラスが見られるものの、曲の完成度は高い。ポップなプログレ・アルバムとしては上位にランクされる事は間違いない。ヘルダーリンからの２人のゲスト参加の他、エディ・ジョブソンなんとジェネシストP.オーリッジの名前も見える。　（高森）



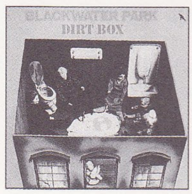
BIRTH CONTROLL
Backdoor Possibilities
LP/Brain 60.019　'76年

　４月の初めのある日、ストライヴァー氏は裏口から旅に出た。扉を開けるとそこには現実の自分と対峙するもう一人の内なる自分が居た…という物語で幕を開ける「裏口の可能性」と題されたこのトータル・アルバムは彼らの８枚目（ベスト含む）にあたる。プロデュースはジェネシス、キャメル、キャラバンを手掛けたデビッド・ヒッチコック。ジャーマン・ロックの中では英米の両方をツアーした数少ないバンドでブルー・オイスター・カルトとジョイントした時はかなり注目された。そのせいか音の方もそれ以後、ポップで聞き易くなっている。メンバーも流動的だが「インクリース」以後、ツイン・ドラムスとなったメンバーでのブレイン・フェスティバルでのライヴはこの頃の彼らのベスト・テイクと言えよう。　（いわね）



BIRTHCONTROL
Bang!
LP/Ohr Today OMM 560. 002　'82年

　新生Ohrレーベルの2枚目。本作の時点でオリジナル・メンバーとして残っているのは、リード・ボーカルとギターの2人だけである。Bernd Noskeのボーカルと彼の叩き出すリズムのリフには独特な雰囲気があり、活動の初期から独自のカラーを生み出している。Frenzelのギター演奏も相変わらずという感じで、曲作りでは中心的な役割を果たしているものと思われる。元来ノリの良いハード・ロックを得意とするバンドで、70年代後半の作品には少しパワーが落ちたかなと思わせるものもあったが、本作では以前と変わらぬ力強いサウンドを聞かせてくれる。暗く重い「ジャーマン・ロック」臭さはあまりない。Ｂ③のように翳りのある曲もあるが、全体としてはストレートで一般的なハード・ロック作品と言えるであろう。　（Helmut）



BLACKWATER PARK
Dirt Box
LP /BASF 2021238-6　'71年
CD/Second Battle SB 020

　BASFというメジャーからリリースされ、又、日本盤も発売されていたにもかかわらず今一つ知名度の低いBLACKWATER PARKだが、その内容はすさまじい。リッチー・ロートレッジのギターを中心としたサウンドはまさにブラック・サバスのりの超ド級ヘヴィ・サウンド、名前からとは言わないが、そのギターはリッチー・ブラックモアとジミ・ヘンドリックスからの影響を受けた正統的ハード・ロック・ギタリストのそれ。７曲どれも素晴らしい佳曲ぞろいだが、特にＢ②の９分にもおよぶ大作はこのアルバムのクライマックス。オリジナル盤はかなりのレア盤である事も付け加えておこう。　（宇藤）



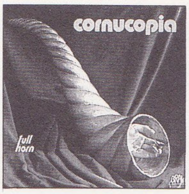
BULLFROG
Bullfrog
LP/Sky 006　'76年

　SKYレーベルと言えばCLUSTERを始めとしたいわゆるシンセ・ミュージック系のレーベルとして多くのジャーマン・ロック・ファンの方は記憶されていると思うが、そんな中でハルリス、ラムセスらと共に異彩をはなっていたのがこのブルフログである。完全にブリティッシュ・ハード・ロックの影響下にあるそのサウンドは当時一線級の活躍をしていたレインボー、UFO、バッド・カンパニーらの曲作り、アレンジをうまく吸収したものであり、特にＡ④、Ｂ①、②の大作はハラルドのオルガンを主体とした様式美追求形の佳曲である。又、プロデューサーであるコニー・プランクの功績も忘れられない。後に２枚のアルバムを発表している。　（宇藤）



CHICKEN BONES
Hardrock In Concert
LP/Procom 027606　'?年（'70年代初頭）

　近年、自主制作レベルでリリースされたロック・アルバムが世界各地で発掘されており、その中のハード・ロックが占める割合はなぜか多いが、本作もその一つ。EPITAPH、BIRTH　CONTROL、GOLDEN EARRINGらの前座で活動していた彼らは、リード・ギターのR・ゲウエッケを中心としたライヴ・バンドで、作曲もすべてゲウエッケが行っている。本作はライヴ・レコーディングでありもろにゲウエッケのギターのみが目立つ曲が続くが、迫力は今一つ。本作のオリジナルは300コピーのみのリリースで、ほとんどがライヴにきた客や親しい友人にくばられた模様。この後、ドラムのW・バラクが母国イスラエルへ旅立ち、バンドは空中分解する。　（宇藤）



CORNUCOPIA
Full Horn
LP/Brain 1030　'73年

7人編成という大所帯で片面1曲と来てはノーマルな音のはずがない。計算されたと言うよりは、その場その場の思い付きで脈絡なく展開していく様な何でも有りのゴッタ煮サウンドは、時にフリーキーで異様な質感を見せる。陳腐さと裏腹のメロディー、浮かれたコーラス、エフェクトによるコラージュ、演劇じみた大仰さ、起承転結しない曲進行など、分裂症的傾向が強い。ファウスト的悪夢に通じるものを感じるが、より雑然としていてとらえどころがない。破綻の一歩手前で踏みとどまっているので、タレ流し的食傷感には悩まされずに済みそうだが、焦点を結べないもどかしさが残ってしまう。もしかしたらこれは傑作なのではないかと針を落す度に首をかしげてしまうような迷作である。(高森)



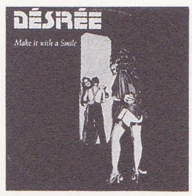
COUNTRY LANE (Switzerland)
Substratum
LP/(Swi.)Splendid SLP 50.108　'73年

スイスのマイナー・レーベルSplendidは数枚のシングルとたった3枚のアルバムを世に送り出しただけで消滅してしまった。しかしこの3枚のアルバム〝After Shave〟,〝Pacific Sound〟、そしてこの〝Country Lane〟は常にヨーロッパの廃盤市場を賑わし続けている。本作はハード・ロック的要素は確かにあるものの基本的にはCRESSIDAやCZARを代表とするブリティッシュ系のプログレッシヴ・サイドに位置する物である。随所に顔を出すアーサー・ブラウン的ユーモア・センスも去る事ながらハモンドを効果的に使い一瞬の隙もなく計算され尽したその構成力は圧巻と言うに相応しい。PACIFIC SOUNDが正規再発された今、本作の再発が待たれる所だ。(松尾)



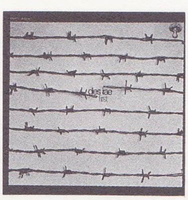
CURLY CURVE
Curly Curve
LP/Brain 1040　'73年

ジャーマン・ロックの殿堂BRAINレーベルから飛び出したこの5人組、なぜかBRAINらしくないサウンドをもったバンドである。前のりのリズム、どちらかというとアメリカナイズされたそのサウンドは同時期のGFRによく似ていて、キーボード入りの編成ながらあまり効果的には用いられていない様子。B④のパープルを意識したと思われる曲で唯一その存在をアピールしている。聴きものはこれまたツェッペリンを意識したB①と前述のB④の2曲のみで、その素晴らしいジャットが無ければまず話題にものぼらなかったと思います。'81年には、もう1枚のLP「Forgotten Tapes」が限定リリースされている。(宇藤)



DÉSIRÉE
Make It With A Smile
LP/(private press.) TCH 76006　'76年

ドイツはハノーヴァー出身のDÉSIRÉEは'76年自主製作にて本作を発表した。溜めのきいたツイン・リードを中心にグイグイ押しまくるタイプで全体の傾向としてはドイツというよりむしろ、英米のバンドに近い、例えばSIR LORD BALTIMOREの様なサウンド形態をしている。ヴォーカル・スタイルはロバート・プラント型。テクニック、楽曲センス共に充分に平均以上の物を持っている為、なおさら自主製作レベルで留まっていた事が惜しまれる。尚、個人的な意見ではあるが、押しまくるだけでなくもう少し引きの部分も持ち合わせていたら、このアルバムを一枚通して聞いた後のワム・パターンのイメージを逸脱できたのかも知れないという気がする。(松尾)



DIES IRAE
First
LP /Pilz 20 20114-7　'71年
CD/Ohrwaschl OW 026

'70年代前半日本では、はっぴいえんど等の日本語ロックに対しての是非を問う論争が盛んに行われた。ドイツでは当時の残された作品を聞く限り、ハード・ロック系では自国語に拘っているバンドは無い。これはLUCIFER'Sは別格、SCORPIONSを例外とすると、ブリティッシュ・ロックの模倣から始め、スタイルを確立する段階に至っていない事を端的に示す例と言える。実際ハード・ロックと言い切れるバンドの数は決して多くはないが、そのほとんどはヴォーカルが弱く、曲展開にめり張りが無いのは否定できない事実。本作は例外的なキーボードレスの本格派。左右のスピーカーにギターが飛び回り、ハーモニカが入った、ブギ的ノリの演奏を聞かせるバンド。(吉野)



DIRK STEFFENS
The Seventh Step
LP/Nova 6.22478 AS　'76年

この名前をきいて、彼のギタリストである事以外の活動を思い浮かべた方は、かなりジャーマン・メタル・マニアだ。そう、彼はあのACCEPTの〝Im A Rebel〟〝Breaker〟〝Midnight Highway〟と言った2nd～3rdの名曲と言われる曲をすべてプロデュース、アレンジしているいわばドイツ・メタル界の影の功労者でもある。さて内容はと言うと、'73～'76年頃のいわゆる3MAらに代表されるリフ主体のストレートなブリティッシュ・ハード・ロックに強く影響されたサウンドで完成度も高いものとなっている。このあとTOLL-HOUSEというバンドを結成し、同じノヴァ・レーベルからアルバムを発表しているが、筆者は未聴。(宇藤)



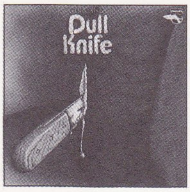
DROSSELBART
Drosselbart
LP/Polydor 2371 126　'70年

ジャケットを見ると思わず〝ウウッ〞と嗚咽を催してしまいそうだが、(みみずゾロゾロ…ちなみにDrosselbartはツグミのひげといった意味だが) これが敬遠されてしまってはもったいない内容だ。サイケ色の濃い、強迫感念を随所に見せるアブナクもおもしろい音が詰っている。特にA④でその天使の歌声を遺憾なく発揮する女性ヴォーカルが､バッキングに回った時の危なさはただものではない。アモン・デュールⅡのレナーテといい勝負だ。ヴォーカルだけでなく曲展開の方も、１曲目のいきなりハレルヤ賛歌、ピアノの聖なる響きを切り裂くかのような歪んだギター、幾分シュプレヒコールじみたドイツ語の狂的コーラスがたたみかけるといった具合に唐突な進行をする。抜けの良いドラムなど録音の良さも特筆もの。(高森)



DSCHINN
Dschinn
LP /Bellaphon BLPS 19120　'72年
CD/Limited

ヨーロッパにおいてイギリスに次ぐロック先進国ドイツ。そのドイツにあって中堅アーティストをあまねくリリースしていたベラフォン (バシラス) レーベルの意義は大きい。このディシンもそうした中でチャンスを与えられたバンドの一つだ。ドイツ・ハード・ロックにはツェッペリン、パープルといったいわゆるメジャー・バンドよりは、ブラック・サバス、スプーキー・トゥースあたりの暗く重いサウンドに影響を受けたバンドが多く、彼らもその一つ。テクニック的には多少問題が残るものの、ピーター・ロレンツの渋いヴォーカルと、よく練られた楽曲はドイツ・ハード・ロックの中でもかなり高位置に位置するものである。本作のみで解散したと思われるのが大変残念である。(宇藤)



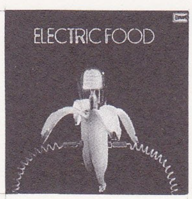
DULL KNIFE
Electric Indian
LP/Philips 6305 107　'71年

ハード・ロックの大切な要素の一つとしてリフの切れ味が挙げられるが、本作を発表したDULL KNIFEはその名が示す通り切れが今いち良くない。とは言えドイツの数あるこの手のバンドの中ではごく平均的レベルを保っている。ハードな曲とバラッド調の曲が約半々づつ収められているが全体の印象はヴァニラ・ファッジあたりに共通する部分が多い。イコライジング処理されたヴォーカルが印象的なオープニング曲から２曲目のプロコル・ハルムの〝青い影〞を想わすバラッドあたりが一応本作の聴き所であろう。適度に哀愁のあるギター・ソロを聴かす曲もあるが、そのヴォルテージが持続しない為、B面ラストまで聞き終えた頃にはかえって気分を悪くしてしまった。(松尾)



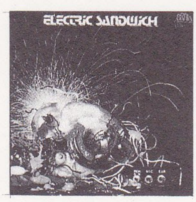
EILIFF
Eiliff
LP /Philips 6305 103　'71年

このバンドにはもう１枚のアルバム「Girlrls!!」(Philips 6305 145, '72年) がある。こちらはデビュー作の方。バンドはサックス奏者とキーボード奏者を含む５人編成で、切れ味の悪いリフ中心のハード・ロック・サウンドの中で、このサックスがむしろヘヴィな感触を与えている。'70年代ジャーマン・ハード・ロックのB級物、いかにもという産物。B面は20分強の大曲になっていて、ギターの冗長さにはすっかり退屈してしまうが、途中で急にシタールのソロが出てきたり、アグレッシヴなキーボード・ソロが曲をつないだり、と多少脈絡のなさがあって、この歪つさはなるほどドイツらしい、と納得したりする。曲造りのバランスの悪さと言うか、未消化なゆえの崩れには'70年代初期の空気を感じとれる。(松本)



ELECTRIC FOOD
Electric Food
LP/Europa E 424　'?年('69年〜'70年)

ELECTRIC　FOODは後にLUCIFER'S　FRIENDを結成するPeter Hessleinが中心となって作られたバンドでありサウンド的にもLUCIFER'Sの前身的要素の強い物である。彼は又、ほぼ同時期にもう一つの前身バンド、ASTERIX ('70,Decca) をも並行してやっていた経歴を持っており、その多才ぶりに驚かされる。本1stでは〝朝日のあたる家〞とツェッペリンの〝Whole Lotta Love〞のカヴァーを、そして2nd〝Flash〞ではフリーの〝All Right Now〞のカヴァーをそれぞれ遊び感覚で収録している。その他のオリジナル曲では彼らの才能が遺憾なく発揮されたインターナショナル指向の充分に魅力的な曲想が目立つ。この時点で既にLUCIFER'Sのサウンド形成の核となる部分は完成されていた。(松尾)



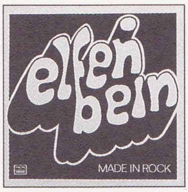
ELECTRIC SANDWICH
Electric Sandwich
LP/Brain 1018　'72年

その名のとおりパンの間に電球がサウンドウィッチされているド派手なジャケットが印象的な本作。'72年という制作年度から考えると少々古めのサウンドである。A①の様なもろにジミ・ヘンから影響をうけたサイケデリックなドラッグ・ミュージックでは、かなりアシッドな雰囲気をかもし出しているが､ヴォーカル曲になると､仲々よく出来たリフ中心のストレートなハード・ロックを披露してくれる。B③などはドイツ・ハード・ロック・バンドには大変めずらしくヘヴィ・ブルーズを気持ちよくキメているのがうれしい。メリハリのあるアレンジはD・ダークスによる所が大きく、地味ながら味のある作品に仕上がっている。(宇藤)



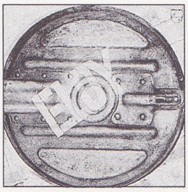
ELECTRIC SUN
Electric Sun, Beyond The Astral Skies, Earthquake
LP/　?年

Rothというと、初期スコーピオンズの黄金時代を築いたギタリストだが、本作は彼のリーダー・バンド、エレクトリック・サンの全作を2in1ならぬ3in2で収録したCD。1st/2ndではジミ・ヘンを意識した部分が目立つが、「Japanese Dream」等のようにジミの呪縛から逃れた楽曲は、読者にも納得がいくだろう。圧巻は元J・タルのC.Bunkerを迎え、オーケストラ・パーカッションや混成合唱をフューチャーして制作された3rdだろう。(これをCDのトップに持って来ている。)スペーシーなシンフォニック・プログレ・ハードと言うべき内容であることは、彼の名前程は知られていないようだ。S字をデザインに取り入れた30フレット以上ある特注ギターの音色は、時としてヴァイオリンのように美しい。　(Chihiro S.)



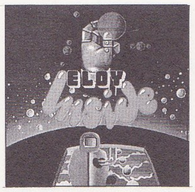
ELFENBEIN
Made In Rock
LP/MDM 無番号　'77年

トリオ編成のオーソドックスなハード・ロック・スタイル。'70年代中頃までの未整理なジャーマン・ロックではなく、国籍不明の音だ。スタイリッシュと言う程に様式美を向いてはいない。ソリッドな感触はあるものの、むしろ英米のハード・ロック'70年代からの影響を感じさせて、吹っ切れなさも残る。例えれば、ステッペンウルフのような切れと吹っ切れのなさのないまぜになったようなサウンドといったところか。ギターはリフを固めても重厚感がなく、むしろブルース調のナンバーなどでのソロの方が冴えがある。全体には割とあっさりとして、泥臭くもない。ヴォーカルは少々迫力不足。自主製作としては、まずまずのクオリティではある。もう一つポイントになるものがほしい気がする。　(松本)



ELOY
Eloy
LP /Philips 6305 089　'71年
CD/Philips 838 821-2

今も活動を続けるエロイと言えば、B級シンフォニック・ロックからエセ・メタル風サウンドへかけてのエロイなのだろうが、このアルバムは、その原点というよりは別バンドと言った方がいいのかもしれない。'68年、ブレーメンで結成されたドイツ・ロック最初期のグループの一つとはいえ、'71年にしてこのサウンドの切れとまとまりはどうだ。まさにエンジニア、コニー・プランクの仕業である。ブルーズともサイケともハード・ロックともフォークともつかない様々な音楽を一色に染めて音をカチッとさせるあたり、この人がいなかったら、このアルバムはただのドグサレになっていたことだろう。ハード・ロックというには多彩で逆に楽しめる。　(松本)



ELOY
Inside
LP /EMI IC 062-29479　'73年
CD/EMI CDP 538-7 90969 2

ハード・ロック色の強かった1stから2年のブランクを置いて発表された2nd。リード・ヴォーカルの脱退、ベースの交替を経てよりキーボードに重点を置いたプログレ・ハード作。ただオルガンのみの使用なのと、派手なソロを取ったりはしないのでインパクトには欠ける。テクニック的に見ても平凡ではあるが、暗めの内省的な曲調とクセのあるヴォーカルは控え目ながらも個性を放っている。ハード・ロックとしては乗りが悪く、プログレとしては盛り上がりの薄いサウンドは中途半端との印象を与えがちだが、こうした音でしか味わえない情感もある事も認識しておいてほしい。夢と現実の狭間の物憂さ、極く軽いトランス状態。そうしたものに楽しめる人は、意外とハマるかも。　(高森)



ELOY
Floating
LP /EMI IC 062-29 521　'74年
CD/EMI CDP 538-7 90970 2

前作のサウンドを継承し発展させた3rdアルバム。暗くたれ込める雰囲気は相変わらずであるが、リズムの切れが良くなっている。A②の大作、B②などに初期ピンク・フロイドから影響が顕著に窺えるが、これは当時のジャーマン・ロックの特長の1つでもある。'70年代半ばにして今だ〝神秘〜ウマグマ期〟のフロイドの亡霊を引きづっているのは進歩がないとも言えるが、それだけにフロイドのジャーマン・ロックに与えた衝撃は絶大なものであったのだろう。また、あの曖昧模糊とした音や曲展開が思索的で冥想的なムードを出すのには効果的であったと言えるが、深い意図があるわけではなく、あくまで時代のムードに過ぎない。エロイはこのアルバム後シンフォニックからメタルへと時代の衣裳を纏っていくのである。　(高森)



ELOY
Ra
CD/(Fr.) MSI CDMS 1058　'88年
/ビクター VICP 5335

現在はプロデューサーとしてFAIR WARNING, LETTER X, GLENMORE等自国のHM、プログレ・ハード系バンドを多く手掛けるフランク・ボーネマン率いるELOY14枚めのアルバム。本作では正式メンバーはフランクとキーボードのミヒャエル・ゲルラッハのみで、他はゲストで賄っており、フランクと似たような立場のギタリスト兼プロデューサー、トミー・ニュートンも参加。イントロのナレーションのバックに流れるシンセのアルペジオはM・オールドフィールドの「Tubular Bells」を想わせる(GLENMOREのアルバムのオープニングもそうだった)。浮遊感のあるトータル形式は彼等のお家芸だが、本作では殆どの曲での打ち込みによるドラムスが今一つ夢想感を損ねているような気もする。キルモア風ギターも聴き処か。　(高山)



EPITAPH
Epitaph
LP/Polydor 2371 225　'71年

デビュー作。オープニングはD.PURPLEの〝Wriing That Neck″＋〝Lazy″風ナンバー。A②は正に「Epitaph」的なメロトロン入りバラード、シンバル・ワークがジャイルスを彷彿させる。A③は7拍子のリフを主体としたジャージーな展開をし、途中に達者なドラムをフィーチャー。B面に移りハーモニーが入るウエスト・コースト風ナンバー、中間部にてサイケ風ギター・ソロが入る。B②は10分に及ぶこれ又「宮殿」風ヴォーカル部から構築的な展開を聞かせる。グループのスタイルは確立されていないが、一定の水準は保った作品となっている。'73年一旦活動を停止。'79年ヘヴィ・メタル・バンドとして再デビューを図り、'83年迄活動を続けた。（吉野）



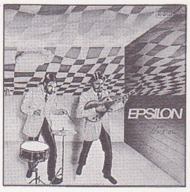
EPITAPH
Stop Look And Listen
LP/Polydor 2371 274　'72年

エピタフは暗く重い屈折したサウンドを持つジャーマン・ハード・ロックの中では珍らしく、アメリカナイズされた清涼感を感じさせるバンドである。特にコーラス・ワークにそれがよく表われている。例によって「エピタフ」的メロディを持つ曲も収められているか、メロトロンは今回使われていない。B①は軽快ながらもプログレ的要素の強い佳曲。ラストのタイトル曲は「エピタフ」をハード・ロック風に解釈したような曲で、長めの間奏部はUFOあたりの影響も感じられる。テクニック的には安心して聴けるが決め手に欠け、アルバム全体の印象を薄くしている。尻切れトンボ的な曲が目立つのもプロデュースの甘さであろう。曲自体は悪くないので惜しいところである。（高森）



EPSILON
Epsilon
LP/Bacillus 6494 001　'71年

ジャケを見て何かを感じたとすれば、あなたはドイツ・ファン、もしくは「Atem」オタクに違いない。まあ音の方は「Atem」でロック!!なわけもなく、まったく無関係。オルガン奏者を含む4人組ハード・ロック・バンド。デビュー作。ワン・パターンのリフとリズムが続き、くすんだオルガンが厚味をつけ、ギターがソロをとったか、曲が展開したか、と思えば崩れるB級所ならではのスカスカだが雰囲気だけは重いあの音。A面の2曲がロング・ナンバーになっていて、そうしたドイツ所が味わえる。ジャズっぽさもちらり。それにしてもリード・ギターは冴えず、リフのダーティーな感触は印象強い。オルガンが入っていて幅をもたせている。当時のイギリスを憧れた音だ。（松本）



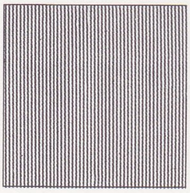
EPSILON
Move On
LP/Bellaphon BLPS 19078　'73年

P・ホーク、D・ダークスのプロデューサー、エンジニアのコンビは、バシラス＝ベラフォン・レーベルを中心に数々のハード系のバンドをシーンにおくり出している。MY SOLID GROUND, TIGER B. SMITHらがその代表格だが、本作もこの名コンビが製作した作品の一つ。全体的にギター、オルガンのアンサンブルをメインとしたオーソドックスなハード・ロック・サウンドだが、ドライヴ感という面で少々迫力に欠ける。が、A②はクラシックの曲をはさみこんだユニークなアレンジ、B③はB・サバスばりのヘヴィなアレンジで楽しませてくれる。リーダーのM・ウィンゾフキーは'77年にMIKE WINN BANDを結成している。（宇藤）



EULENSPYGEL
2
LP/Spiegelei 28 760-7U　'71年

グループのリーダー格である、ジェイムス・スロウは自らを〝ティル″と名乗り、6人の遊芸人を引き連れて71年ハンブルグに現われた。中世のドイツの民間伝承で余りにも有名なオイレンシュピーゲルのデビューアルバムである。「2」となってはいるが、72年に同レーベルから「アウシュス」というタイトルでセカンドが出ている。本アルバムでは、ジャーマンロックに例を見ない潑剌とした自由な演奏が展開され、ドイツ古都にまどろむ憂愁に満ちたフルートとオルガンの音色は、石畳に敷きつめられた中世都市の面影をそのまま偲ばせてくれる。また、思わず吹き出してしまいそうなジャケットデザインもシリアスな中にもユーモラスな一面を欠かさない風俗志向を垣間見せてくれる奇抜な見せ物だ。（丸美屋）



EULENSPYGEL
Ausschuss
LP/Intercord 28780-5U　'72年

ジャーマン・ロックの中で好きなものを10枚上げよといわれ、10枚選べるかどうか。このEulenspygelのレコードを10枚の中にいれるか、いれないかは別として、なかなかの力作にはちがいない。1枚目の方は、ジャケットに感心するぐらいで、到底自分の好みにはほど遠かった。本作は、イギリスのアップル・スタジオで録音され、ジャケットもドイツのグループらしいというか、段ボールがはりつけられているという風変りなもの。全体的には前作の延長線上ながら、それまでのドイツのグループには少ないシンフォニック的な面を耳にすることができる。なにはともあれA面を費やした大作の後半は、圧倒的ともいえるパワーで曲が進行する。当時全盛のメロトロンが大幅に使われいやが上にも曲を盛り上げて行くのである。（吉瀬）



EXCALIBUR
The First Album
LP/Reprise REP 44163 '71年

ドイツ・ハード・ロックの最大の特長と言える事は、ブリティッシュ・ロックのそれの様にいわゆるブルーズから影響があまり見られない点にあると思われる。そういった意味では早くからブルーズ・ロックから脱脚したヘヴィ・サウンドを追求していたと言える。が、しかし、それゆえに出来の悪い物は極端にレベルが下がってしまうのも事実。このエクスカリバーなどはその威圧的なジャケットからは想像もつかない〝軽い〟サウンドで、いわゆる中期ステッペンウルフの様なつまらないアメリカン・ハード・ロックと言ったサウンドで、これと言って特長の無いバンドの代表格である。セカンド・アルバムが製作出来なかったのもうなづける。　（宇藤）



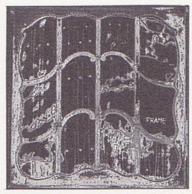
FAITHFUL BREATH
Fading Beauty
LP/FBAA 6963.233 '73年
CD/(U.S.)Laser'9 Edge LE 1011

73年に自主製作として限定発売されたフェイスフル・ブレスのファースト・アルバム。77年に一時再発された(Code CSM-10002-FB)が現在ではCDになり入手可能になった。マンフレッド・フォン・ブトラー(オルガン、メロトロン、ピアノetc)、ハインツ・ミークス(ギター)、ユルゲン・ヴァリッツ（ドラムス)、ホルスト・スタベノフ(ベース）の4人編成でキーボードを生かしたシンフォニック・ロックを奏でている。テクニック的にはさして期待できるものではないがゲルマン人の心からわきでるロマンティシズムは正に叙情である。80年には再編し、スカイ・レーベルよりセカンド「ROCK ON MY HILL《SKY 038》」、翌年81年にサード「ROCK LION《SKY 055》」を発売し、以後ヘヴイ・メタル・フィールドで活動する。　（山崎）



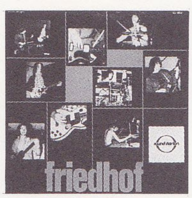
FAITHFUL BREATH
Back On My Hill
LP/Sky 038 '80年

ファースト（'73年）から7年後のセカンド。ヴォーカリストを加え、あとはオリジナル・メンバー。A②とB面全てを費やした曲の一部にてハードな展開が聞かれるが、残りはシンフォニック・ロック。ファーストに失望した人が多くいると思うが、本作は伸びがあり表現力のあるヴォーカルを中心に、曲展開にも工夫が見られ、前作の冗漫な印象は無い。又前作と違いクレジットされていたメロトロンは使用されています。その後メタル色の強い「Rock Lions」('81年)、『Hard Breath」('82年)、「Gold And Glory」('84年)等をリリース。'80年代後期に開化したと言えるジャーマン・メタルの橋渡し的存在のグループとなる。　（吉野）



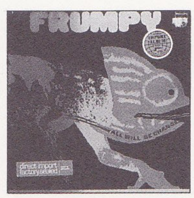
FRAME
Frame Of Mind
LP/Bellaphon BLPS 19107 '72年
CD/Bellaphon 288.09.112

当時のドイツ・ロック系では中堅メジャー・レーベルであったベラフォン。このレーベル所属アーティストはプログレッシヴ・ハードと言われる形容をされるバンドが多い。実際曲によっては出来の良いのがあるが、どちらかに徹底されていない為であろう。両者のファンの間では中途半端な作品が多いというイメージを持たれている。本作やNINE DAYS WONDER等はその典型。A①ヴォーカル・ナンバーやA③の12分に及ぶ曲等プログレッシヴ色の強い曲が収録されている反面、B①の様に本格的なヘヴィ・サウンドも聞かせ、ギターも滑らかだ。全体的に演奏の水準は保たれており、特に切れ味のある小気味の良いハモンド・オルガンが全編活躍。　（吉野）



FRIEDHOF
Friedhof
LP/Sound•Star•Ton SST 0103 '70年
CD/Lost Piper Dreams LP 012 CD

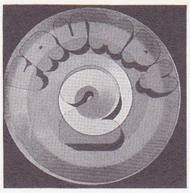
ドイツは当時アメリカ、イギリスに次ぐ世界第3のロック先進国であった事は、当時イギリス、アメリカのミュージシャンが競ってドイツ・ツアーを組んだり、本国よりもドイツでの活動が目立っていたバンドの存在などからも明らかである。逆にいえばそれだけ米英の有名ミュージシャンの存在が'60年代初期のころから身近であったと言うことが言える。それゆえアマチュアもしくはセミプロのプレイヤーもドイツ国内では多かったのだが、本バンドなどはそんなセミプロが偶然ひろわれ、プロダクションがリリースしたいわば自主制作に近い作品。良くも悪くも当時のドイツ・ロック・シーンの様を想像するに十分。終始とばしっぱなしのガレージ・サウンドは多分に若さが感じられる。全曲インスト。　（宇藤）



FRUMPY
All Will Be Changed
LP/Philips 6305 067 '70年
CD/Repertoire RR 4146 WP

FRUMPYは'70年1stである本作を発表後、'71年2ndの「Frumpy 2」、'72年「By The Way」、'73年「Frumpy Live」を発表している中堅グループである。本作オリジナル盤はカメレオンの型をあしらったプラスチックに包まれた変型ジャケットになっていて、2ndもやはり変型物の円型ジャケットにプラスチック・バックの付いた物である。一応一般的には本1stが彼らの最高作と言う事になっているがよりヘヴィな方向性を打ち出した2ndも甲乙つけ難い良質な作品である。彼らの特徴はギター無しのオルガンを中心にブルースを基調とした重く引きずる様な演奏にInga Rumpfのややソウルフルなヴォーカルが重なり合って徐々にその盛り上がりを見せる所にある。
（松尾）

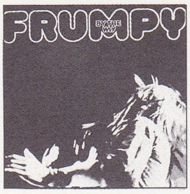
FRUMPY
2



LP /Philips 6305098 '71年
CD/Repertoire REP 4339-WP

このアルバムは、数あるジャーマン・ハード・ロックの中でもベスト3に挙げられる程の情感と熱狂の詰め込まれたフランピー畢生の傑作である。骨太ながらも物憂い蔭りも感じさせるインガ・ランフのハスキー・ヴォーカル、時にはクラシカルに時にはヘヴィに迫るJ.J.クラヴェッツのオルガン、地味ながらも愁いを漂わせるギター、一体となって終始疾走するリズム・セクション。この溢れんばかりの情熱と痛快さはメロトロンも操るクラヴェッツのオルガンによる所が大きいのだが、まさに時代の狂躁と機を一にしているのである。'60年代から'70年代にかけての栄光と挫折が色濃く反映したラスト曲のがむしゃらに突き進んでいく先の目も眩む光景とカタルシスを感じてほしい。（高森）

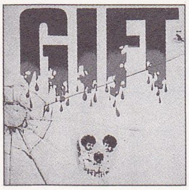
FRUMPY
By The Way



LP /Vertigo 6360604 '72年
CD/Repertoire IMS 7019

軽快なロックン・ロールに始まるこのフランピーの3rdアルバムは、部分的に前作の香りを残しながらも、明らかにバンドの性格が変化してしまった事を物語っている。新たにキーボード奏者を加え、ギターをより以上にフィーチュアレ、ヴォーカル・パートを中心に展開して行くサウンドはJ.J.クラヴェッツの曲作りからの後退からも窺えるように、インガ・ランフとそのバックバンド的色彩が強くなっている。それでも適度なインスト・パートを盛り込み、たたみ掛けるリズム・セクションも健在である。しかしノリの良くなった分、むせ返るような叙情性は後退し、一点に集中していくかのようなひたむきさも薄らいで、そつの無いうまさだけが目立ってしまったようなアルバムだ。（高森）

GIFT
Gift



LP/Telefunken SLE 14680 '72年

'69年、5人のメンバーによって結成されたこのグループは当時〝PHALLUS DEI〞と名乗っていたが'72年の本作発表直前に〝GIFT〞と改名した。尚、本作にクレジットされているギター、ヴォーカル担当のNick Woodlandは本作録音時点では既に別グループ〝SUBJECT ESQ.〞に参加しており、実際にはこのLPは4人のメンバーで製作されている。さて、本1st Albumでは重厚なギター・リフを基調とした横乗りスタイルの曲を得意としているが、'74年の2nd「Blue Apple」では2人のメンバー・チェンジとキーボードの導入によってパープル系の縦乗りスタイルへと変身した。タイプこそ違うが、両作品共それぞれに魅力的な要素を持っていると言える。（松尾）

GIFT
Blue Apple



LP/Nova SDL 8002 '74年

1stの硬派な音作りからメンバー・チェンジしキーボードを加えてのメロディアスで流麗な音作りになった2nd。曲良し、歌良し、演奏良しの三拍子揃った逸品。それ程ヘヴィさは感じられないが、適度な押しと引きを心得ながらも意表をつく展開、割と凝ったアレンジながらもサラリと聴かせる無理のなさが心地良い。オルガン、チェンバロ、ピアノ、シンセ、メロトロンと多彩なキーボードの使い分けと変拍子のさり気ない導入が歌メロを引き立たせ、躍動感を生み出している。特にB①は猪突猛進する前半部から優雅なメロトロンをバックに泣きのギターが舞う中間部への切り返しが心憎いばかりの名曲。B②、③では同一曲をバラードとアップ・テンポの趣向を変えたアレンジで2倍楽しめる。アレンジの勝利。（高森）

GOMORRHA
Trauma



LP /BASF 2020413-8 '72年
CD/Second Battle SB 022

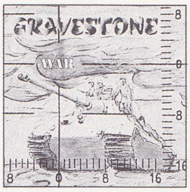
1stでは何となくトリップ・ミュージックを演奏していたゴモラの2nd。相変わらずトリップ然としたサウンドがその中心となっているが、アリのギターはジミ・ヘンを意識したワウワウ、ファズを多用したサウンドへと変化、よりヘヴィな面がクローズ・アップされる形となった。いわゆるドイツらしさという面ではグル・グル、アモン・デュールの1stあたりとはまた違ったアンダーグラウンド・サウンドで、当時はこの様なバンドがドイツにはうようよしていた様である。当時のドイツにはこの様なバンドでも3rdまで制作できる土壌があったのか…と思われる方もいるかも知れないが、このサウンドが当時ジャーマン・ロック・サウンドの主流だった事は事実である。（宇藤）

GOMORRHA
I Turned To See Whose Voice It Was



LP/Brain 1003 '72年

前2作では（2nd「Trauma」は1stのイングリッシュ・バージョンで内容的にはほぼ同じ）サイケ・サイドで語られるサウンドを有していたが、ラスト・アルバムとなったこの3rdは幾分サイケ色を残しながらも本格的な、ディープ・パープルあたりを彷彿とさせるハード・ロックへと脱皮した。変拍子を交えた切れ味鋭いリズムのヘヴィな曲とアコースティックなトリップ・ミュージックに大別できるが、どちらも安定したテクニックとよく練られたアレンジによって水準の高い出来となっている。ジャズやブルースもこなすギターと押しの強いヴォーカルは、ジャーマン・ハード・ロックの中にあってはトップ・クラスであろう。贅肉をそぎ落したソリッドな感覚が全編を貫いていて、引き締った内容の好アルバムである。（高森）



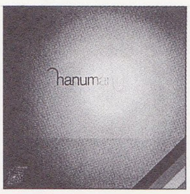
GRAVESTONE
War
LP /AVC Studio Production LP80 020
ST ’?年(’80年前後)

GRAVESTONEは’79年に1stである〝Dooms Day〞を発表後、オリジナル・メンバーはギターのRudiとオルガンのAndyのみを残し大幅なメンバー・チェンジを経て翌’80年、2ndの本作を発表するに至った。1stにおいて全ての曲の作詞、作曲に当っていた言わば中心人物であったWolfgang Rittnerが脱退し、その主導権をRudy Dornerに移した。このメンバー・チェンジが吉と転じて元来の楽曲面での弱さが一掃され、本作ではよりドラマチック且つよりスケール・アップされたサウンドへと飛躍的進歩を遂げた。歯切れの良いギター・リフを中心にあくまでも’70年代スタイルのハード・ロックではあるが後のNWOBHMの一大ムーヴメントの橋渡し的存在とも言える。
（松尾）



HAIRY CHAPTER
Can't Get Through
LP /Bacillus 6494002 ’71年
CD/Limited LMTRCD 03

ディーター・デェルクスの名作業がここにも一つ。数多くの名ハード・ロック・バンドを輩出しているバシラス・レーベルに移籍して2作目。前作では今一歩完成度に不満が見られたが、本作ではよりストレートなサウンドを目指しながらも変拍子等もおりまぜた大曲指向の曲もこなしている。特にタイトル曲は10分を越えるものの展開、アレンジ共よく練られた名曲である。H･タイトルバッハのギターはロリー・ギャラガーらに代表される手数の多いソロを得意としたスタイルだが、ブルーズ色はなぜか薄い。人間の動脈と静脈をイメージしたジャケットも透逸であり、ドイツ・ハード・ロックの中でもきわめて完成度の高い内容となっている。（宇藤）



HANUMAN
Hanuman
LP/Kuckuck 2375012 ’71年

’71年、ミュンヘン出身の4人のアーティスト達によって人知れず発表され本作のみで消えて行ったこのグループ、先ずこの時代にしては異常な位、録音レベルが良い事に驚かされる。音楽形態としてはオルガンを中心にフルート、サックス、ギターが各自一体となってジャージーでスリリングなインター・プレイを繰り広げ、その上にヴォーカルが重なるといった形式を取っている。同レーベルにはMURPHY BLEND, ARMAGGEDON, CWT, LIED DES TEUFFELS, OUT OF FOCUSといったミュージシャンが名を連ねているがこの内、OUT OF FOCUSに近い良質なジャズ･ロックを聞かせてくれる。
（松尾）



HAZE
Hazecolor-Dia
LP/Bacillus 6494 007 ’71年

’71年Bellaphon傘下のBacillusより発表されたHAZEの唯一の作品である。ジャケットの中央部が四角くくり抜かれていてそこにメンバー写真のセロハンが貼り付けてあると言った変型物になっている。適度に曲展開を持ったユーライア・ヒープ型のハード・ロックであるが残念な事にテクニック、楽曲センス共に実に平均的でバンドの個性と呼べる物を探すのが困難である。だがしかし、この乗りの悪いスカスカした音こそが’70年代ドイツであり、その時代を象徴する音である事も又事実である。本作に収められた全5曲は基本的には2本のギターの重々しいリフと長めのソロを中心にあくまでもヘヴィに展開するのであるが問題は音程を外したまま叫びまくるヴォーカルにある。（松尾）



IHRE KINDER
2375004
LP/Kuckuck 2375004 ’71年

ジャケットはジーンズの袋、タイトルはレコード番号、というIHRE KINDERのセカンド・アルバム。他には「Leere Hände」(’70年)、「Anfang Ohne Ende」(’72年)、「Rocksensation」(’76年)、「Live ’82」(’82年)、「Heute」(’84年)が出ている。またギタリストのエルンスト･シュルツも計4枚のソロ･アルバムを出している。さてIHRE KINDERの方だが、このアルバムでは6人編成、音の方は基本的にはオーソドックスなロック・サウンドでヴォーカル物の傾向も強い。それでも曲によってはキーボードをメインにしたフリー～コンクレートふうのパートが挟まれていたりして､所々に面白い部分もある。余程のジャーマン・ロック・ファンでないかぎり、あえて聴く必要もないバンドかもしれない。（松本）



JERONIMO
Cosmic Blues
LP/Bellaphon BI 1530 ’70年

アルバム・タイトルが示す通り、ジェロニモはブルースをベースにしたハード・ロック・バンドで、3枚出しているうち本作は1stである。この作品はポップな曲をヘヴィに演奏するパターンと、あのリーフハウンドを彷彿させる曲展開の二つのパターンで構成されているが、ポップな曲でも軟弱になることなく、仲々の出来となっている。続く2nd「Same」は地味ながら、1stで出しきれなかったブルース色を前面に押し出した名作である。残念なことに彼らはこの2ndをピークに失速し、3rd「Timeride」では平凡なハード・ロック・バンドになってしまった。（多田）

JIGSAW PUZZLE BAND
"First"
LP/(private press.) 66.22150　'80年



ヴォーカル、リード・ギター、リズム・ギター、ベース、ドラムの5人のメンバーから構成されるグループの自主制作アルバム。若い音楽仲間が集まって手軽に作ったような感じがする作品で、演奏水準も決して高くはないし、録音もいたってシンプルである。少し聞いただけではつまらない印象を受けるが、A③からB②をじっくり聴くと、愁いを含んだ味わい深い演奏を聞かせてくれる。ギターが短いフレーズのリフを重ねながら、各メンバーの演奏が一体となり、曲の雰囲気が少しずつ盛り上がってゆく様は、なかなかの説得力をもっている。商業ベースの作品には無い、素朴な魅力がある。敢えて例えるならば、同じく自主制作盤であるGRAVEのアルバムに近い内容である。　(Helmut)

KRAVETZ
Kravetz
LP/Vertigo 6360 605　'72年



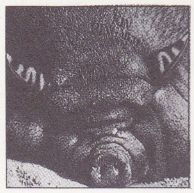
FRUMPYのキーボード奏者Jean-Jacques Kravetzのソロ・アルバム。Udo Lindenberg (ds、perc、vo)、Carl-G・Stephan(b)、Thomas Kretzschmer(g)との編成によるもので、A①にはFRUMPYのヴォーカリスト、インガ・ランフが参加している。全5曲と長編が多く、リンデンベルクとの共作が多い。曲はFRUMPYやATLANTISのようにハード・ロックともオルガン・ロックとも言えそうなもので、よく聴いていると大割りの中でそつなく凝っているのがわかる。派手さはないが各奏者確かな演奏で支えていることもわかる。各曲で各々のソロを混えながらの構成の割には、もう一歩押し引きに欠けるのも一方で事実だ。ソロの部分のインパクトが弱いためかもしれない。B①③の展開は意欲的だが。　(松本)

KIN PING MEH
Kin Ping Meh
LP /Polydor 2371 259　'71年
CD/Second Battle 841 887-2



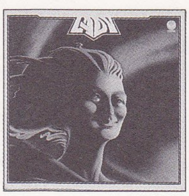
キン・ピン・メイのファースト。彼等はブリティッシュナイズされたハード・ロックを得意とし、その姿勢は一貫している。がA②、B③で聴けるメロトロンを伴うバラードの出来は仲々のものである。歌詞は英語で歌われている。この後、ゼブラレーベルより2枚「KIN PING MEH《ZEARA 2949 005'72》」、「KIN PING MEH《ZEBRA 2949 011 '73》」、ノヴァ・レーベルより2枚「VIRTUES AND SINS《NOVA 6.22 015 74》」、「CONCRETE《NOVA 6.28 370 DP'75》」、バシルスより1枚「KIN PING MEH《BACILLUS BAC 2046 '77》」と計6枚(うち5枚目は2枚組)のアルバムをリリースして解散。2枚のコンピレイション・アルバムに収録されてもいる。　(山崎)

KIN PING MEH
No.2
LP/Zebra 2949 005　'72年



KIN PING MEHは現在までに数枚のアルバムを発表しているがいずれもB級ハード・ロックの枠から抜け切れない作品ばかりである。しかしそんな中にあって比較的我々の興味を引くのはドイツと言うよりもむしろブリティッシュ指向の強い初期の2枚であろう。個人的意見で申し訳ないが取分け1st、2ndの中のメロトロンをフィーチャーしたドラマティックな展開を持つ幾つかの曲がやはりダントツで光っている。本2ndではビートルズの〝Come Together〟を彼らなりのアレンジによってセンスの良いハード・ロック曲に変えてしまった。Conny Plankのプロデュースにより作品全体のバランスも悪くない。この後、枚数を重ねる毎にアメリカナイズされていく。　(松尾)

LADY
Lady
LP/Vertigo 6360 636　'76年



JANEのキーボード奏者Werner Nadolnyを中心とした4人のメンバーから成る本作は製作年度がJANEの活動時期と重複している為、パーマネントなグループと言うよりセッション的な性格を持った一時的なバンドとして考えた方が良さそうである。内容的にはJANEの作風と重なる部分も多々見受けられるが本作の場合はそれより幾分ポップで軽快な印象を与える曲が多く、ハード・ロックとして評価をするならば全体的に作品としての魅力は極めて薄く、光る物は何も感じないと言った所が正直な印象である。個人的に強いて言うならばWerner　Nadolnyのキーボードを多くフィーチャーしたA③の〝Sailor〟、B②の〝World Of Fantasy〟あたりがまずまず聞けると言った所か。　(松尾)

LIGHTSHINE
Feeling
LP /Trefiton HS 1049　'76年
CD/Penner CD 008



得体の知れない自主制作の中でも訳の分らなさでは群を抜いているアルバム。演歌的ドグサレ・メロディーと思わずステレオのヴォリュームを下げてしまう恥知らずの雄叫びがただ者ではない1曲目。コミカルなベースラインと曲の進行を足止めするシャウトに再び赤面の2曲目あたり迄は、B級変態ロックを愛する人にはたまらない、ハード・ロック崩れの曲が並ぶ。3曲目以降は形の悪いシンフォニック・ロックとも呼べそうな、大曲3曲で埋められている。フォーク・タッチの歌メロ、泣きのギター、粘液質のシンセサイザーなど、哀愁を漂わせながらも、どこか不気味な暗さを感じる。クリムゾンのエピタフをいびつに解釈したような悪意も見える。そして例によって狂燥する雄叫び。シンフォニック・ファンはパス？かも。　(高森)



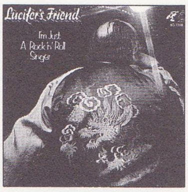
LUCIFER'S FRIEND
Lucifer's Friend
LP /Philips 6305 068 '70年
CD/Repertoire RR 4059-CX
/MSI MSIF 7140

ASTERIXにRietenbachが加わることによって誕生したのが、LFである。前身バンドからLFへの移行がわずか数ヶ月で行なわれている。この 1 stでのヘヴィなサウンドからは、サバス／パープル／ツェッペリン等が多少想起されるが、実際には平行進化的なもので、彼等のエピゴーネンとする解釈は間違い。サタニズムは当時の流行であったし、Horns/Rietenbachによるリズム・セクション等、同時代の他バンドよりは技術的には上である。(ちなみに、Lawtonは当時ブラックモアからのニュー・バンド結成の誘いを断っている) 歌詞にも使われている小人は『死のメッセンジャー』のイメージのようで、その後もバンド・シンボルに使われた。CD化にあたって、ボーナス・トラック 5 曲が追加されている。 (Chihiro S.)



LUCIFER'S FRIEND
Where The Groupies Killed The Blues
LP /Vertigo 6360 602 '72年
CD/Repertoire REP 4143-WP
/MSI MSIF 7141

前作よりスケール・アップした72年の 2 nd。大胆なアレンジや変則拍子が導入され、チェンバー・ヘヴィ・ロックとでも言うべき傑作に仕上がっている。Hechtのピアノがすばらしい。圧巻はラスト・ナンバーで、この時期にこれだけ現代音楽的な重苦しい編曲のオーケストラとバンドとの同居は、世界的に見てもなかったと思う。ジャズ・ヴォーカル風のヴォーカル・ラインにブリティッシュ・ハード的なヴォーカル・スタイル／現代音楽的な減 5 度を多用したバッキング、というミスマッチの極限のようなサウンドは、後にも先にもこのバンドだけ。本作発表後、『騙され、不当な支払いの上、恐るべき借金が残った』バンドは、ライブ活動を休止し、スタジオ・ユニットとして存続することになる。 (Chihiro S.)



LUCIFER'S FRIEND
I'm Just A Rock'n'Roll Singer
LP/Vertigo 6360 611 '73年

前作発表後、ＬＦのメンバーはセッション・ワークに余念がなかった。Lawton はLES HUMPHRIES SINGERS で、Hecht はAR & MACHINESで、HessleinはRATTLES、Udo Lindenberg、果てはJAMES LAST ORCHESTRAで働いた。そうして制作されたこの 3 rdは、アメリカの幾つかの都市で『その年に最もリクエストされたアルバム』となった。トップ・ナンバーや表題作のようにキャッチーな作品と、ラストのように前作の延長上にある作品、Ａ③、Ｂ③のように優れたハード・ロック・ナンバー（これがまた、良い曲なんだ)、と玉石混淆状態の楽曲をハイ・レベルの演奏で聴かせてくれる。ゲスト・パーカッション奏者のBornhold（元Rattles）は、そのままRietenbachの後任としてバンドに残った。 (Chihiro S.)



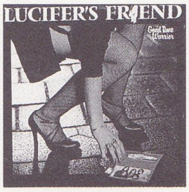
LUCIFER'S FRIEND
Banquet
LP /Vertigo 6360 618 '74年
CD/Repertoire IMS 7017

前作でもゲスト参加していたHerb Geller(sax)、Bob Lanese(tp)、次作でレギュラー化するKarl-Hermann Luer(baritone-sax)を含むブラス／ストリングス・セクション、コーラスと34人のセッション・ミュージシャンを迎えて制作された野心作。シンフォニック・ブラス・ジャズ・ロックとでも言うべきバックとLawtonのヴォーカルのマッチングは、74年制作ということを考えると斬新だ。LFの最高傑作と言うと、 2 ndかこの 4 thかと、意見が分かれることが多いが、傾向が異なるだけに甲乙付け難い。ちなみに米パスポート盤では、1 stCDのボーナス・トラック⑫が収録されていた。余談だが、本作が我国のラジオ番組のテーマに使われていたように思うのだが、どなたか覚えていないだろうか。 (Chihiro S.)



LUCIFER'S FRIEND
Mind Exploding
LP/Vertigo 6360 633 '76年

マルチ管楽器奏者／ヴァイオリン奏者のKarl Hermann Lüerを 6 人目のメンバーに迎えて制作された76年の 5 th。前作よりは 3 rdの路線に近い。Bornholdtは正式メンバーとしてクレジットされながらも、ラスト・ナンバーしかドラムを叩いておらず、他はCurt Cress(元Atlantis等)を使ってレコーディングされている。前作等に比べるとアレンジの凝り方／楽曲に多少のトーン・ダウンが感じられるが、その中でLuerの好演は光る。本作のみの参加なのが残念である。ラストの 2 曲の出来は秀逸である。特に「Yesterday's～」はLFらしいシンフォニック・ジャズ・ハード・ロック路線の、スケールの大きな作品である。尚、本作リリース後すぐにLawtonがユーライア・ヒープ参加のため脱退している。 (Chihiro S.)



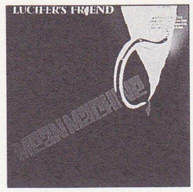
LUCIFER'S FRIEND
Good Time Warrior
LP/WEA ELK 52-087 '78年

78年の 6 th。新ヴォーカリストに元SPINNING WHEELのMike Starrsが参加している。前作以上にストレートな楽曲が多いが、アレンジの凝り方は、さすがルシファーズという感じだ。(同時期のハード・ロック・バンドと較べてみよう。) ラストの「Warriors」のみルシファーズらしい作品で、セヴァスチャン・ハーディーをテクニカルにしたかのような大曲。バンドは本作リリースに伴い、長らく休止していたライブ活動を78年10月より再開する。その後MANFRED MANN'S EARTHBANDの79年のヨーロッパ・ツアーに参加し、Mannに「今までで最上のサポート・アクトであった」と言わせている。 (Chihiro S.)



LUCIFER'S FRIEND
Sneak Me In
LP/WEA ELK 52 203 '80年

アルバムのサウンドを再現するために復活ライブ以来参加していた２ndキーボーディストAdrian Askew（元Edison Lighthouse/Atlantis）を加え、６人編成での７th。当時のはやりであったTOTO、フォーリナー辺りを狙った作品で、本作からLFに触れることは避けて欲しいと思う。全作品中一番ポップなアルバムであり、例によって高水準の演奏であるが、彼等にしては楽曲／アレンジ共に凡庸である。（まあ、わざとそういう風にまとめたのだろうが。）尚、スコーピオンズ、ヴァン・ヘイレンのサポートをしながら本作のプロモートをしたが、あまり成功せず、StarrsとAskewはバンドを離れることになる。 (Chihiro S.)



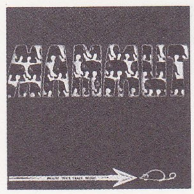
LUCIFER'S FRIEND
Mean Machine
LP/WEA ELK 52 298 '81年

LF史上１st以外では一番HR/HM色の強い好アルバム。彼等らしい高水準の演奏力だ。ユーライア・ヒープから戻ってきたLawtonを迎え、第２期黄金時代の編成に戻ったLFだが、一番HRを要求していない時代であった。LFはその気になれば、ジャズ・ロック、プログレ・ハード、現代音楽的オーケストレーション、ポップ・サウンド等、様々なアプローチが出来てしまう器用なバンドだったが、常に時代に対して出すカードを間違え続けたグループだったように思う。81年秋、LFは小クラブ中心にプロモート・ツアーをした後、82年に解散。尚、Lawtonは新旧LFのメンバーをバックにソロ「Heartbeat (81)」をリリース後、82年にREBELに参加、「Stargazer」をリリースしている。 (Chihiro S.)



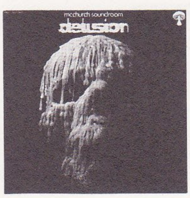
MADE IN GERMANY
Made In Germany
LP/Metronome MLP 15416 '71年

女性がヴォーカリスト、サックス＆フルート奏者、キーボード奏者を含む６人編成。古手のハード・ロック・バンドMADE IN GERMANYの唯一のアルバムは、どことなく第一期パープルを思い出させる所がある。ギター・トーンとオルガンのクラシカル・フレーズ込みのトーン、そして〝Hush〞のような'60年代臭いリズム等がそれふうだ。重厚さや切れのあるリフとは無縁のハード・ロック・サウンド。時代を感じさせる音だ。女性ヴォーカルが割とオーソドックスなこともあってか、ポップなようにも思える。コーラス・パートも多く、荒息混りのフルートがリフのサポートをとったりもする。オルガンのパートが多く曲も幾らかクラシカルな部分があって、そのあたりに聴き所がある。B級だが意外とくすぐるものがある。 (松本)



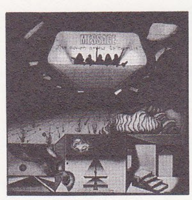
MAMMUT
Mammut
LP /Mouse TTM 5022 '71年
CD/Ohrwaschi OW 013

いかにも'70年代のドイツにありがちなサウンドだ。どこか今一つ煮えたぎらないが、部分部分にオヤッと思わせる所があるそのパターン。ラストの13分の大曲では、ハードなブルース・ロックのアグレッシヴさとフルート、ピアノ・ソロなどが混然としているがそのあたりの乱雑さに難もあれば、逆にこちらの関心も寄せられる。全体にスタジオ・ライヴふうの荒々しさがある。それにしても延々とギター・ソロをとる前で同時にフルートがソロをとるという形もよくわからない。ハード・ロックというにもスタイリッシュでもなく、そこはまさにドイツのアンダーグラウンドな臭いが強く、屈折感が強い。 (松本)



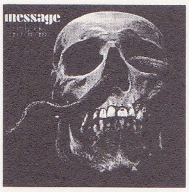
MCCHURCH SOUNDROOM
Delusion
LP /Pilz 20 21103-7 '71年
CD/Ohrwaschell OW 012

ドイツ至宝レーベル、ピルツより、リリースされた唯一の作。オープニングはフルートとアコースティック・ギターに依る、このレーベルのポリシーであるファンタジー色を持つ演奏からハードな展開をする。'70年代を通してドイツの主だったほとんどの作品のエンジニアを担当しているコニー・プランクが参加。A②では曲名通りドラム・ソロをフィーチャーしているが、彼に依る空間的エフェクト処理が施され飽きさせない。ジャケットから黒魔術バンドを想起させるが、その要素は余り感じられない。全体的にはオルガンが鳴り響くドイツによくあるタイプと言えるが、アンダーラウンド感覚を持っているところがこのバンドの特徴と言える。 (吉野)



MESSAGE
The Dawn A New Is Coming
LP/Bellaphon BLPS 19081 '71年

ドイツのプログレッシヴ系グループにおいて、インターナショナル志向を持ち、一応の成功を収めたネクター。彼等はアメリカへ移住、パスポート・レーベルの看板バンドとなる。このバンドのキーボード、タフ・フリーマンが同レーベル（ベラフォン）という関係からゲスト参加している本作（ファースト）は、サウンド的にも弟バンドと言えるハード・プログレッシヴ。A①やB③等、ドイツ・ハード系に多い、キーボードを効果的に使うユーライア・ヒープ・タイプの曲を収録。全５曲、大曲志向だが冗長な印象は免れない。次作も本作と同傾向だが、ノヴァ移籍以降ジャズ・ロック・バンドの色合いを増しながら'70年代末期迄活動を続け、６枚の作品を残す。 (吉野)



MESSAGE
From Books & Dreams

LP /Bacillus BLPS 19 159　'73年
CD/Bellaphon 288.09.119

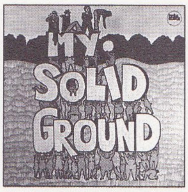
マリー・ステュワートの「The Crystal Cave」という著書からインスパイアされた、という２作目。ジャケットもその線に沿ったものなのだろう。インパクトだけはある。ミスティックな雰囲気は導入部の役割を持つ１曲目の小曲によく出ていたりするが、メインになる10分台の２～３曲は、どれもベラフォン/バシルス系のハード・ロック。どちらかというと重くて暗めのカラー。全体にゴリ押しするような熱気を持ったギターものだが、曲が単調なわりにはリフを刻むギターの重味に欠けて、今一つ重厚感に欠ける。その結果、煮えたぎらなさが当時のジャーマン・ハード・ロックの歪つな感触にもなって、これこそＢ級の醍醐味かもしれない。ピシッと割り切れないゴツゴツした印象が強い。　(松本)



MURPHY BLEND
First Loss

LP /Kuckuck 2375 005　'71年
CD/Kuckuck 11005-2

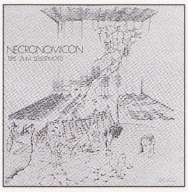
多数のハード・ロック・アルバムを発表しているKUCKUCKレーベルの中でも極め付けの一枚。くすんだハモンドの響きと泣きのギター。重いリズム・セクション、ヴォーカルは上手くはないが切々とした味わいがある。チェンバロも交えての３曲目は静から動へ激しく展開しながらも、霧にむせぶような情景が彷彿とする珠玉の名編。時にはクラシカルに、時にはハードに迫まるオルガンを軸に切り返し多い展開に息つく暇もないタイトル曲は完全にプログレッシヴ・チューンである。ほとんどの曲を作曲しているキーボードのW.R.ユーリッヒはやはりKUCKUCKレーベルの秘宝〝HANUMAN〟の中心人物であり、よりシャープな切れ味鋭いキーボード・ワークを披露している。他のアルバム参加が気になるミュージシャンである。　(高森)



MY SOLID GROUND
My Solid Ground

LP/Bacillus 6494 008　'71年

ジャーマン・ハード・ロックを語る上で最も重要なレーベルの一つバシラスは'73年にベラフォン・レーベルに吸収された後も比較的高水準なリリースを続けるのだが、本作はそのバシラス時代にリリースされた作品の中でもひときわ目立った存在である。ライヴではトリオで活動していた様だが、本レコーディングでは、キーボーディストをゲストに迎え、ピンク・フロイドに強く影響された大作に挑戦した意欲作。リズム・セクションにやや難があるものの、P・ホーク、D・ダークスの最強コンビの手助けもあり、ジャーマン・ハード・ロック独特の重量感のあるサウンドに仕上がっている。本作が唯一の作品と思われる。　(宇藤)



NECRONOMICON
Tips Zum Selbstmord

LP/Best Brehodi F 60.634　'72年

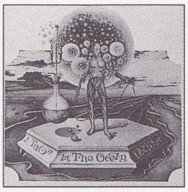
アメリカの恐怖小説の大家H.P.ラブクラフトにちなんで名付けられたグループ名からすると、とてつもない音楽でもやっているかと思われるが内容は平たくいえば、ハード・ロックである。ギターに重点が置かれたヘヴィーなサウンドになっている。男の狂気じみたスキャットから幕を開けるこの骨董品みたいなレコード、その後壮大なコーラスがあったり、一クセも二クセもあるコンセプト・アルバムである。自主製作らしい手がかかった変形ジャケットの方が好事家の興味をそそるかもしれない。この不気味な絵はドラマーのHarald Bernhardによるもので、スティックを持っているよりこっちの方に才能があるのではないかと思う。近年になって、未発表曲、テイク違い、ライヴ録音を本作と抱き合わせた３枚組LPが、リリースされた。　(吉瀬)



NEKTAR
Journey To The Centre Of The Eye

LP /Bellaphon BLPN 19064　'71年
CD/Bellaphon 289·09·022

ネクターという７th「Recycled」のみが評価され、他のアルバムは無視されているきらいがあるが、スコーピオンズを例外とすれば最も成功し後のメタル・シーンにも影響を与えたグループなので、再評価を促したい。さてこの１stは、ハード・ロック系のアルバムとしては唯一(？)のAB面切れ目なしのトータル・アルバムで、アレンジや演奏力には多少難があるにせよ楽曲の出来が極めて良い。(個人的には「リサイクルド」を超えていると思う）大胆なメロトロンの導入、ギミックを多用したSF的空間を表現、哀愁を感じさせるメロディ・ラインや繰り返しによるトランス効果を狙ったリズム・パターンなど、良く練られたストーリー展開を窺わせる。ハード・ロックもOKというプログレ・ファンにこそ薦めたい実は傑作。　(高森)



NEKTAR
A Tab In The Ocean

LP /Bellaphon BLPS 19118　'72年
CD/Bellaphon 289-09-002

１stに引き続いて、ストーリー性の強いプログレ・ナンバーが収められている。大海のうねりを思わせるオルガンが印象的なタイトル曲とフェイド・イン、フェイド・アウトで繋がれた４つの小曲のどれもが魅力的なメロディと地味ではあるが暖か味の感じられる演奏に支えられて独得の雰囲気作りに成功している。Ｂ①のジャージィなギターやピンク・フロイドのウマグマ期を思わせる展開にこのグループのプログレ・バンドとしての側面を強く感じさせるが、ラストの２曲は乗りの良いハード・ロックを聴かせてくれる。正に水を得た魚のごとき演奏に、後にスコーピオンズ、アイアン・メイデンという強者達にカバーされる事になるように、ヘヴィ・メタルの様式美の原型を見い出す事ができる。　(高森)



NEKTAR
...Sounds Like This

LP /Bellaphon BDA 7501 '73年
CD/Bellaphon 290·09·003

スタジオ・ライヴを2枚組に収めた3rdアルバム。ネクターとしては唯一のハード・ロックを全面に押し出した、ハード・ロック・アルバムである。言わば原点を見直す、初心忘れるべからず的発想であろうが、逆に彼らがハード・ロック・バンドとしては平凡なバンドである事を露呈しまう結果となった。極度に控え目なオルガンと対照的にいつになく弾きまくっているギター、リズム・キープに終始するドラムやベースはどれも平均点を超えるものではなく、個性という面から見ても弱い。メロディや曲展開もラフな感じが強く、改めて彼らの魅力が、その繊細なメロディーラインとアンサンブルとして醸し出されてくるたそがれ的ムードにある事を認識してしまう。2、3の曲で聴かれる切ない程の情緒こそ本来の持ち味だろう。（高森）



NEKTAR
Remember The Future

LP /Bellaphon BLPS 19164Q '73年
CD/Bellaphon 289-09-001

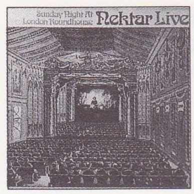
AB面1曲づつという構成、SF的テーマ、ジャケットとどれをとっても当時のプログレ・シーンを反映したアルバムである。全体にゆったりとしていて演奏もシンプル、気負いのなさに拍子抜けする程だが、哀愁に満ちたヴォーカルとほのぼのとしたオルガンの音は確実に夢見させてくれる。これはテクニックがどうの曲展開がどうのインパクトがどうのといった物差しからは測り得ない類のアルバムで、プログレとしてもハード・ロックとしても恐らく成立しないだろう。しかしこのアルバムでしか味わえない香りがある。童心に帰って思い起こす懐かしい一風景がある。ごく私的な愛聴盤として秘かに楽しめばいい。全くタイプは違うのだがノヴァリスあたりと通じる儚さがある。実は名盤。（高森）



NEKTAR
Down To Earth

LP /Bellaphon BLPS 19190Q '74年
CD/Bellaphon 289-09-06

サーカスをテーマにしたネクターの6th。テーマのせいか全体に明るめで軽快な曲が多い。ネクター節とも言える切ない歌メロは随所に聴けるが、サラッとしすぎていて心の琴線に触れて来ない。ホーン・セクションの導入も裏目。次作「Recycled」に通じる曲調も窺われるが、ヴォルテージは低い。時折聴かれる女性コーラスは当時のはやり(?)ピンク・フロイドの「狂気」を矮小化したようでいただけない。いろいろな試みが焦点を結ばず、イメージが拡散されてしまったような印象のアルバムである。このアルバムから次作の傑作「Recycled」への奇跡的な飛躍はジャーマン・ロックの七不思議とでも言えそうで、興味深い謎である。（高森）



NEKTAR
Sunday Night At London Roundhouse

LP/Bellaphon BLPS 19182 '74年

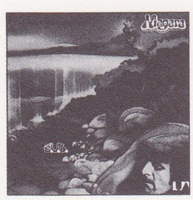
'73年のロンドンでのライヴと'74年のスタジオ・セッションを収めたもの。A面のライヴは、後のニューヨーク・ライヴの荒さの目立つ演奏と違って恐らくネクターが最も充実していた頃のもので、充分聴ける演奏である。2ndの名曲〝Desollation Valley〞の繊細さを損ねる事のない再現は、ライヴ・バンドとしては二流という彼らの汚名を返上させるに値するものだ。2曲目のロング・チューンの出来も良く、この頃のフル・ライヴ・アルバムを望みたいものだ。B面のセッションでは、3rdと同様の即興的でラフな曲が並び、それぞれ傾向の違うものだが、取り立てる出来でないのも確か。ネクター独得の哀愁の籠る歌声もこのアルバム構成では生きて来ない。契約履行の為出されたとしか思えない中途半端なアルバムである。（高森）



NEKTAR
Recycled

LP /Bellaphon BLPS 19219 '75年
CD/Bellaphon 289.09.003

ネクターは69年に西ドイツで結成されたが、76年頃には活動の中心をニューヨークに移している。名前から判断してメンバー全員がドイツ人でないと思われる。少なくともドラムのロン・ハウデンはイギリス生まれで、20歳の頃にはパリのローカル・バンドに居たという経歴の持ち主である。8枚目である本作はフランスのシャートー・ルーヴルとロンドンのエアスタジオでラリー・ファースト(シナジー)をゲストに迎え録音されている。彼等の最もスタイリッシュなアルバムで、A面は特に極端に出来の良いシンフォニック・ロックである。ニューヨークでは大がかりなライトショーを伴ったコンサートを行なっており、その模様を収録した「Live in New York Vol.1」「同Vol.2」があるが、サウンド的には荒さが目立っている。（Chihiro S.）



NIAGARA
S.U.B.

LP/United Artists UAS 29 343 '72年

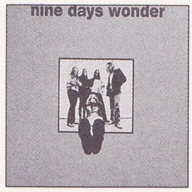
AMON DÜÜL II、PASSPORT、EMBRYOあたりと人脈的に絡むマイナー・バンド。アルバムは「Niagara」(UAS 29232、'71年)、「Afire」(Finger 2960102、'73年)とこのセカンドとの計3枚。このアルバムにはパーカッション奏者が3人いて、うち一人がAD IIのドラマー、そして後にはPOPOL VUHでギターをも兼任するダニエル・フィッヒェルシャーである。彼は既にAD IIに在籍し、'72年7月発表の「Wolf City」まで参加しているから、その合間での参加ということになる。音の方は、ややアフロ気味のパーカッシヴなもので、ジャズ・ロック・タッチ。ジャケットの色使いにプログレ色を期待しがちだが、あまりそちらの要素はない。（松本）



NIGHT SUN
Mornin'

LP/Zebra 2949 004 '72年

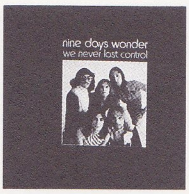
故コニー・プランク最大の遺産である本作。この作品に初めて出会う人は、一体何を連想されるのだろうか。ある人はD・パープル、ある人はB・サバスかも知れない。攻撃的でたたみかけるようなギターは、はからずもリッチー・ブラクモアを連想させ、そのハイトーン・ヴォーカルはルシファーズ・フレンドのJ・ローンばりの迫力をもってせまる。アレンジはサバスそのものだ。だが、彼らにこの様な形容はこれっぽっちも必要ない。それほどのオリジナリティと当時としては考えられないほどの曲構成とテクニックを持っているのだから。後のジューダス・プリーストの出現も予感させる、世界レベルでも最高水準に位置する一枚。（宇藤）



NINE DAYS WONDER
Nine Days Wonder

LP /Bacillus 6494 004 '71年
CD/Bellaphon 288・09・106

いきなりVAN DER GRAAF GENERATORを思わせるイキのいい音が飛び出してきて驚かされるが、ヴァイオリンやサックスの応酬、フリップを思わせるギター・カッティング、ブレイクをふんだんに盛り込んだハチャメチャな曲展開は、テクニックを度外視した自由さに満ち溢れている。あまりに強引で雑然とした演奏は一つのイメージを結ぶ事なく進行して行くが、おもちゃ箱を引っ繰り返したような楽しさと、考えるより先に手が出てしまうような爽快さがある。曲作りの点でもテクニックの点でも上手いバンドとは言い難いが、むしろそうした所を逆手に取って、手を替え品を替え矢継ぎ早に乱れ射ちした行動力が光ったアルバムと言えるだろう。オリジナルはバシルス・レーベルの４番。（高森）



NINE DAYS WONDER
We Never Lost Control

LP /Bellaphon BLPS 19163 '73年
CD/Bellaphon 288・09・113

フリーキーなイメージの強かった前作からキーボードとヴォーカルを中心としたタイトなまとまりのあるハード・ロックに変身した2nd。メロトロンを使用したバラードやVDGG張りのたたみかける展開も見せるが、歌メロの平凡さやノリの軽さはいかんともし難く、２～３流のイメージはぬぐえない。③や⑦は前作を引き継ぐランダムな構成を持つが、コンパクトにまとめようとしたのが災いして、自由度に欠ける堅苦しいものになってしまっている。NINE DAYS WONDERはこのアルバム後、ベラフォンに２枚のアルバムを残すが、いずれもパッとしない作品。ベースのミヒャエル・ブントは'70年代後半に２枚のソロ・アルバムを発表。時代に即したポップなエレクトリック・ミュージックであった。（高森）



NOSFERATU
Nosferatu

LP /Vogue LDVS 17178 '70年
CD/Ohrwaschl OW 020

正体不明、謎の６人のメンバーからなるノスフェラトゥ。当然のシーンの御多聞にもれず、一つのジャンルにはおさめきれないサウンドを有している。かなり個性的なサウンドはC・フェルクのサックス、フルートとR・グローエのオルガンによるところが大きい。ヘヴィではあるのだが、ジャズ、その他の音楽からの良い意味でのエッセンスの吸収が単なる中途半端なサウンドとは違った渋さを与えており、オザンナを連想させる。アンダーグラウンドで活動していたバンドの中ではテクニック、アレンジ共個性的で水準の高いアルバム。こういうのを〝ジェスロ・タルばりのハード・ロック〞というのかな!?（笑）（宇藤）



ORANGE PEEL
Orange Peel

LP/Bellaphon BLPS 19036 '70年

本作は数あるジャーマン・ハード・ロックの中でも筆者のお気に入りの必殺の一枚である。ゲルマン民族の持つ暗黒世界への深い執着と憧れを各メンバーの各ソロ・パートの圧倒的インター・プレイによって描き出して行く様はテクニックがどうのこうの言う以前にアーティスト側からの鬼気迫る精神的エネルギーの発露を嫌が応にも聞き手の心に訴えかけるパワーにまず誰もが圧倒されるに違いない。又、そうした闇のエネルギーがそれ自体、彼らの強烈な個性として成り立っている事は言うまでもない。タイプこそ違うがAMON DÜÜLの持つ精神性に一種通じる物があると言えるかも知れない。ただこちらの方がよりヘヴィで金属質なハード・ロック色の強い物である。（松尾）



OS MUNDI
Latin Mass

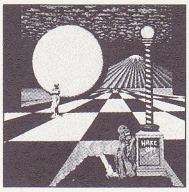
LP/Metronome MLP 15.381 '70年

こういうハモンド・オルガン、ガンガンの上、ブルース崩れの風のギターとモコモコしたリズムが一体となり、ろくでもない行進をして、しかも１曲ときたからには、B級ファンが許さない。おまけに組曲の中味は「キリエ」「クレド」…ミサ曲ときた。これぞジャーマン・アンダーグラウンド・ミサ曲集。どくされのドロッとしたミサ曲は、この時代のドイツらしくヘヴィ。メトロノーム・レーベルこそOhrの先駆け的な実態のつかみづらいレーベルで、こういうブルース崩れの実験的な音楽こそ庶民のロックだったところがヤバい。このアルバムはタイトルのとおり、加えてラテン的な土着感も入り混り、垂れ込める乗り？が強力。２枚めはブレインにより出た。（松本）



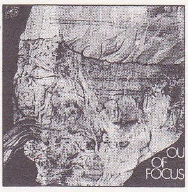
OS MUNDI
43 Minuten
LP/Brain 1015 '72年

前作から２人ばかりメンバーが交代しての２作目。少しは音も整理された印象を受ける。前作がミサ曲を扱うという暴挙に出ていたことを思うと、こちらは曲も細かくなりスケール・ダウンした感は否めない。フルートとサックスのリード部はこちらもやはり多く、前作のモチーフに隠れていたジャズ色が一歩前に出てきた印象だ。新たにチェロ奏者が加わり、フローティングなフルートと共に、曲に滑らかな部分ができている。A②が〝Pictures Of A City〟辺りのクリムゾンに似た曲調とサックス・プレイのためか、エセ呼ばわりされたこともあるが、アルバムを通して聴けば、むしろ遇然に思える。チェロをいかしたA④、リード・ギターのブルージーなソロが聴かせるB①ではメロディックな面を見せる。（松本）



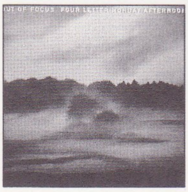
OUT OF FOCUS
Wake Up
LP/kuckuck 2375060 '71年

MURPHY BLENDやHANUMAN等の名作を送り出した中堅レーベルkuckuckに３枚のアルバムを残したOUT OF FOCUSの1st。ハード・ロックと言うよりもウマグマ期のフロイド・サウンドにジャズ風味を効かせたサイケデリック・ロックである。変屈なリフを主体とするロング・チューンが多く、ドグサレっぽい雰囲気も強いが、水準を超えた演奏力がある為、異様な迫力を生み出している。地を這うような粘着質はキレ味良いハード・ロック・ファンには敬遠されそうだが、一度嵌ると抜け出せなくなる程強力。ジャジィでワイルドなフルートとおかずの多いバタバタ・ドラムが気持ち良い。展開しそうで展開しない曲想がこの時期のジャーマン・ロックの特色だが、反面そこにこそ垂れ込める重圧感が生まれると言えようか。（高森）



OUT OF FOCUS
Out Of Focus
LP/kuckuck 2375010 '71年

前作の延長上にある音であるが、変屈さは薄らぎよりジャズ・ロックぽいまとまりのあるサウンドになった。繰り返しのリズムを基に各楽器によるインタープレイで徐々に盛り上げていく構成は不変であるが、粘り気に欠けるせいか醒めた印象が強い。２曲目や４曲目などどこか異国情緒の漂うメロディ・ラインは捨て難いものの曲調がおとなし過ぎる為なんとなく聴き流してしまうアルバムである。テクニック的には充分なものを持っているのだからもっと強引さを出しても良かったのではと思う。前作の魅力はそこにあった訳で集中力を感じさせたが、恐らく破綻を避けてまとめる方向にバンドの意志が働いたのであろうが、皮肉にも文字通りの「焦点ボケ」（Out Of Focus）になってしまった。（高森）



OUT OF FOCUS
Four Letter Monday Afternoon
LP /Kuckuck 2640 101 '72年
CD/Kuckcuk 12032-2

「Wake Up」、「Same」（両作共に再発済）に続くサード。30分にも及ぶ組曲を含む全５曲、大作揃いの２枚組。ドイツ・ハード・ロック系のバンドはトリ編成が皆無に近く、キーボード入りの４人編成が最少ユニットとなっているのが特徴と言える。その為にギター中心のブルース・ロック色が薄くなり、多かれ少なかれサイケデリック色を感じさせるバンドが多い。このバンド、管楽器奏者を含みジャズ・ロックの感触が強い。しかしA面の18分近い演奏やC①のヴォイスがイコライジングされた曲等、トランペットやサックス奏者等ゲストに加え、ドイツ特有の混沌としたハード・サイケ・タッチの演奏も繰り広げるインストゥルメンタル中心のグループ。（吉野）



P 205
Vivat Progressio Pereat Mundus
CD/Ohrwaschl OW 018 '78年

再発元のOhrwaschlはドイツ物を中心に次から次へと超レア・アイテムを出してくるが、このアルバムもそうした中の一つ。海外のサイケデリック／ハード・ロック'60's—'70'sコレクターの執念のようなリリースの仕方だ。５人編成のP 205は、'70年頃からバンドが始まっている。レズリーを通したハモンド・オルガンで音に厚みをつけたオーソドクスなハード・ロックになっているが、迫力不足、ひっかかりも少ない。この内容で'78年というのは少々貧弱だ。一部で話題になっているのも結局はオリジナル盤が珍しいからで、音楽が規準になっているわけではない。やはり超レアで近年再発されたBLACK SPIRITS等も同じく。CDになっているだけにそこは勘違いのないように。このCDにはボーナス曲が１曲追加されている。（松本）



PACIFIC SOUND (Switzerland)
Forget Your Dream!
LP/(Swi.)Splendid SLP 50.104 '72年

近年ベルギーからLP再発されお茶の間に届いたかつての超レアー・アイテム。スイス、'70年代初頭の、ブリティッシュ'70's調泣きのハモンド・オルガンがブルージーに迫る好作。ジャケットの派手さとは裏腹に、溜めのきいたそれはそれは渋い魅力を持った内容で、マニアを唸らせる'70年代初期徹底攻勢。オルガン主体とは言っても、手数の多さやクラシック・フレーズで聴かせるわけではなく、ひたすら引きのばしバックに回ってここぞという時に前に出る。ギターやヴォーカルのふがいなさが惜しい。まあ、通して聴けば一本調子にも思えるが、それでもオルガンは熱く、メロディアスなパートにグッと深味を加える。あまりにもブリティッシュふうと言われれば音も薄いが、当時のスイスとしては出色のブルース物。（松本）



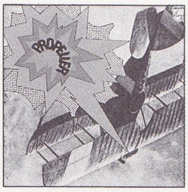
PINK MICE
In Action
LP/Europa E 456　'71年

ハード・ロックやプログレッシヴ・ロックの常套手段であったクラシックからのコード進行やフレーズの流用。本作はそれを正面からコンセプトとした、クラシック・スタンダードのロック化作品。NICE的アプローチを見せる曲は、当然プログレッシヴ色が強いが洗練された印象を残す。一方DEEP PURPLE的なアレンジが施されている曲は中間部にハードなギターやハモンド・オルガンのソロをフィーチャー。曲調はこの２つに大別でき、全体的に演奏水準が高く、特にピアノは目立つ。次作「In Synthesizer Sound」（E 1011）はタイトル通り、「スイッチト・オン・バッハ」の発展形と言える作品。アレンジはLUCIFER'SのHechtが担当。（吉野）



PROF. WOLFFF
Prof. Wolfff
LP/Metronome MLP 15.422　'71年

物哀しく蔭りを帯びたオルガンと泣きのメロディに愁いを湛えた朴訥なドイツ語のヴォーカルが見事にマッチした１曲目は絶品である。地味な曲が多いがどれも愁いを感じさせる曲調で、時折トリッキーなキーボード・ソロやたたみかける展開も見せる。オルガン・ハードと言える程のヘヴィさは無いがオルガン・ロック・ファンには充分納得できる内容である。ただしアコースティック・ギターやフルートを交えてのフォーク・タッチの曲は素朴すぎてハード・ロック・ファンにはつらいかもしれない。謎の多いメロトロノーム・レーベルのアルバムの中では、その妖しげで陰鬱なジャケットも手伝ってかなりのプレミアものだが、〝GRAIL〟(このジャケットも凄い)あたりと並んで、隠れた名盤と言えよう。（高森）



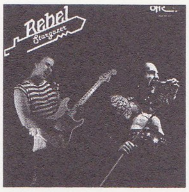
PROPELLER
Let Us Live Together
LP/Philips 6305 114　'71年

ACHIM REICHEL & MACHINESを始める直前のアヒム・ライヒェルがいるロック・ロール/ハード・ロック・トリオ。プロデュースはLUCIFER'Sのペーター・ヘスライン。ブラス・アレンジも同じくLUCIFER'Sのペーター・ヘイト。おまけにg, b, voのヘルベルト・ヒルデブラントは、LUCIFER'Sの１stのプロデューサー。と、何かにつけて絡み合っている。のっけからフェイセズふうのハード・ロックン・ロールで、内容では取り立てるものは大してないが、それなりにビシッと決められてはいる。全体に泥臭く、ハード・ロックの重厚感や切れ、リフなどは望める音ではない。勢いだけはある。（松本）



REACTION
Reaction
LP/Polydor 2371 251　'71年

ロック・ミュージックが多岐にわたって解釈される現在にあっても、トリオというユニットが、ロック・バンドの最小単位として認知され続けているという事実は大変興味深い事である。古くはクリームに始まったこの音楽活動の最小ユニットは例外なくここドイツにも現れる。彼らは強力なリズム・セクションをバックにトリオによる可能性をひたすら追求したハード・ロック・バンドである。が、トリオによく見られるブルーズからの影響はあまり見られず、初期GFRやBBAに代表される重いリズム・セクションとリフ主体のヘヴィなギターのアンサンブルに重点をおいた曲作りを行っている。ドイツ・ハード・ロック界でも10指に入る名作である。（宇藤）



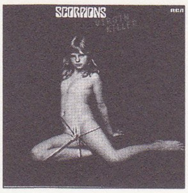
REBEL
Stargazer
LP/Ohr Today OMM 560.003　'82年

新生Ohrレーベルの３枚目。LUCIFER'S FRIENDのJhon Lawtonがヴォーカルで参加している。彼の他にギター、キーボード、ベース、ドラムを加えた５人編成で、シンプルでストレートなロック・ナンバーを聞かせてくれる。時期的にはNWOBHM系の音を期待するリスナーがいるかも知れないが、音はかなり軽目である。プロとして安定した演奏を聞かせはするが、特に技巧的というわけでもない。概して、ジャーマン・ロックのヴォーカルは線の細い印象を与えるが、Lowtonは数少ない「聴かせる唱い手」として、表情豊かで味わいのある唄をじっくりと聴かせてくれる。特に両面の終わりに収録されているようなスローな曲では、その魅力がよく表れていると思われる。(Helmut)



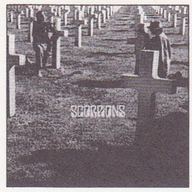
SCORPIONS
Lonesome Crow
LP/Brain 1001　'72年
CD/Metronome 825 739-2

'72年設立された当時のドイツを代表するメトロノーム傘下レーベル、ブレインの初作品。そしてドイツのハード・ロック系では唯一と言えるワールドワイドの成功を収めたバンドのデビュウ作。又後にイギリスへ渡りUFOをビッグ・グループへ導いた立役者マイケル・シェンカーの初レコーディング作でもある。ハード・ロック前段階のヘヴィ・ブルーズ・ロック・サウンド。サイケデリック色もあるが、リズムの切れが悪い演奏。やはりマイケルのSKID ROW時期のゲイリー・ムーアを想わせる才気に溢れたプレイが聞き所。'74年RCA移籍後の２作目において早くもリズム・セクションを一新。元祖メタルと言えるウルリッヒ・ロートを迎え黄金時代へ突入。（吉野）



SCORPIONS
Virgin Killer
LP /RCA 2621820 '77年
CD/BMG ビクター B200 41012

ジャーマン・ハード・ロック界において初めて全世界制覇に成功したビッグ・ネーム、スコーピオンズの初期の代表作であり出世作。ブリティッシュ・ハード・ロックのもつドライヴ感にウリ・ロートのメロディアスなフレーズがうなりを上げるヨーロッパ大陸的サウンドは今聴いても新鮮だ。K・マイネのヴォーカルも世界的成功を収めた最大の要因の一つだろう。スロー・バラードを歌い上げる時のゾクっとする歌声はハード・ロック界でも10指に入れたい存在。唯一の汚点はウリのヴォーカルか!?次作後ウリはバンドを脱退、エレクトリック・サンを結成し、自らが求めるジミ・ヘン・スタイルを追求していく。ジャケは欧米各地で発禁となり、今後このコンセプトが続けられる。 (宇藤)



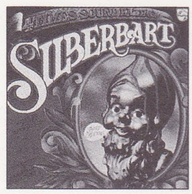
SCORPIONS
Taken By Force
LP /RCA PL 28 309 '77年
CD/BMGビクター B20D 41013

バラードを歌わせたらクラウス・マイネは業界でも屈指のシンガーだろう。それは'90年の世界情勢の後押しを受けたヒット〝Wind of Change〞でも証明されたが、むしろ鳥肌ものの歌唱は初期の昏さを湛んだ情感の中に際立つ。「弦の響きから僕は生まれた。君の心の琴線に触れるために」と謳う本作ラストの〝Born To Touch Your Feelings〞はその精華ではないだろうか。泣きのドラマティシズムの中にもウルリッヒ・ロートのターク・ファンタジィ的な詩とルドルフ・シェンカーの日常性の差異は遠からぬ分裂を予感させる。翌年来日し「荒城の月」をフィーチャーしたライヴ盤発表後ロートは脱退。除々にライト感覚を強めた彼等は世界的な成功を収め、R・ウォーターズの「The Wall」ライヴにも参加する。 (高山)



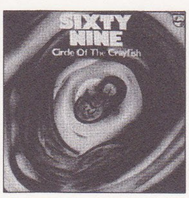
THE SHIVER (Austria)
Walpurgis
LP/Maris Musik 20501 '69年

ギーガーのジャケットから連想されるのはバリバリのジャーマン・アンダーグラウンド・サウンド…と言いたいところだが、実はドアーズ、ヴァニラ・ファッジあたりからの影響が強いいわゆるアート・ロック・サウンド。オルガンのチープなひびきが時代を感じさせるのに十分である。B①ではFORMURA3で有名なミサ曲〝怒りの日〞をベースにした曲を、B②ではJ・コッカーでも有名なS・マーカスの〝Don't Let Me Be Mitunderstood〞をとりあげておりそつなくキメている。おりしも同年アモン・デュールがデビュー、ジャーマン・ロック・シーンが大きく変化しようとしていた頃であった。尚、今から10年前で、すでに現地で5万円以上していた超レア盤である。 (宇藤)



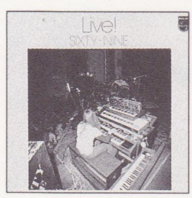
SILBERBART
4 Times Sound Razing
LP/Philips 6305 095 '71年

SILBERBARTは'71年、唯一の作品である本作を発表した3人編成のマイナー系ハード・ロック・バンドである。特に目立った関連アーティストは見当たらない。全4曲の内A①を除いた3曲はいずれも10分を越える大曲で占められている。基本的にはBLACK SABBATH調の重く引きずる様なリフを中心とした曲調であるがリズム・チェンジや曲間のブレイク部分において多少なりともプログレッシヴ・ロックからの影響が見い出せる。海外ではこうしたサウンドをヘヴィ・プログレと呼んでいるが我々がイメージするヘヴィ・プログレと若干ニュアンスが違う様だ。それはともかく、本作の最大の欠点は3人編成のためか、音の薄さが目立ってしまう点であろう。 (松尾)



SIXTY-NINE
Circle of the Crayfish
LP/Philips 6305 164 '72年

キーボードとドラムスの2人から成るユニット。当時多数出現したEL&Pフォローワーの1つと言えるが、もう少しハード・ロック寄りのリズムを持つバンドである。Armin Stoeweはエマーソンと比べるのは難しいがテクニックは充分備えたキーボーディストであるが、曲がリフ中心で起伏が少ないため、そのクラシカルな素養が生かされているとは言えない。意図してのことか、極度にモノクロ的色彩が強く、華麗なクラシカル・ロックを期待する人向きでない。何曲かで聴けるヴォーカルは骨太のハード・ロックのもので、必ずしも曲にフィットしているとは言い難い。それにしてもこの抑鬱感はかなりのもので、無機質さと閉鎖的状況を作り出していて息苦しさを感じてしまう。実験的試みに思われるが。 (高森)



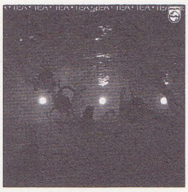
SIXTY-NINE
Live!
LP/Philips 6623 046 '74年

モノトーンに支配されていた1stに比べてライヴということもあってか、ノリの良い曲も多く、躍動感あるプレイも随所に聴ける。オルガン中心の演奏ではあるが、シンセサイザーやピアノも取り入れ曲想は変化に富んでいる。特にバッハをモチーフにしたC②は、冒頭のうねるようなムーグ独得の音色から、パイプ・オルガン風パッセージ、そしてELP的アンサンブルへといったプログレ色の濃い作風で、聴きものである。全体として見れば、伸びのあるヴォーカルがリードをとる曲も多く、ハード・ロック・アルバムと言って良いが、ベースがいないためドライヴ感に欠けるのは否めないところだ。10分を超える大曲が3曲収められていて意欲は充分伝わってくる。 (高森)



SPERRMÜLL
Sperrmüll
LP/Brain 1028　'73年

のっけからチャンカチャンカしたマンドリンにのってシャウトするアメリカン・ロック調のヴォーカルに茫然とし、間奏部でのムーグの意味のないメロディに啞然とさせられるが、終盤での神経症ぎみのギターが妙にカッコ良く、わけもわからなく納得してしまう。こうした、無謀とも言える曲展開や意味のないアレンジは、広くジャーマン・ロックに共通する特性とも言えるし、大きな魅力の一つとも言える。これがわからない人はロックの〝カッコ良さ〞を一面でしか捉えていないので反省するように。この〝粗大ゴミ〞を名乗るバンド、重厚なリズムのヘヴィな曲あり、ブギあり、ポップありと色々やっているが、どれもが妙な屈折感を伴っているのが良い。
（高森）



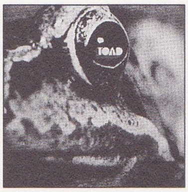
TEA（Switzerland）
Tea
LP/Philips 6305 238　'75年

本作は「Sprouts」('74年）に続くセカンド。A①はメロトロンに導かれたファルセット・ヴォイスからヘヴィな展開。A②はギター・ソロが個性的。A③はアコースティックな感覚の印象的な曲。B①〜②はアレンジが光るキャッチーな曲。B③は本作のクライマックスと言える出来。全体的にイギリス盤がリリースされている事からも分る様に、本格派バンドとしての（特にヴォーカル）実力が示され、曲調は多岐に渡っている。続いて「The Ship」('75年)、「Tax Exile」('76年)発表後解散。後にヴォーカルのマークはスイス出身のハード・ロック系の中において、希有と言えるインターナショナル的地位へ昇ったメタル・バンドKROKUSに参加。
（吉野）



TIGER B. SMITH
We're The The Tiger Bunch
LP/Bellaphon BLRS 19176　'74年

ドイツ・ヴァーティゴより'72年にデビューしたタイガー・B・スミスのベラフォンに移籍しての2ndアルバム。もとよりストレートなハード・ロックを身上としていた彼らだが、本作はエンジニアにスコーピオンズの〝6人目のメンバー〞として知られるD・ダークスをむかえてさらに洗練された作品となっている。バンド自体メンバーはかなり流動的で、ホルガー・シュミットを中心としたユニットとみるのが妥当だろう。バンドは本作で解散、シュミットは他のメンバーをひきつれて'77年に突如カムバック、STRASSENJUNGSというパンク・バンドを結成している。多少エッチなコラージュ・ジャケットも秀逸。
（宇藤）



TOAD（Switzerland）
Toad
LP /Hallelujah X 616　'71年
CD/Aurophon CD AU 32109

Vic Vergent(g)、Cosimo Lampis(ds)、Werner Fröhlich(b)、Benny Jäger(vo)から成るスイスの古手ハード・ロック・バンド、TOADのデビュー作。ロンドンでの録音。録音状態があまり良くないので損をしているが、'71年のスイスとは思えない内容がある。印象としてはSTRAY DOGの1stをもう少しB級にしたところか。特にベースの遊び方は目立つものがあり線も太く、曲にヴァリエーションをもたらせ、勢いづかせて面白い。ヴォーカルは弱めながらインターナショナル指向がうかがえる。そしてギターには粘りがあって熱気もの。曲もワンパターンに陥ることない。当時のイギリスに行ける内容だ。この後ヴォーカリストはぬけて、トリオ編成になる。演奏力があるだけに、それは正解だったかもしれない。
（松本）



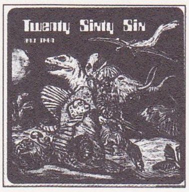
TOAD
Tomorrow Blue
LP/Hallelujah X 626　'?年
CD/Aurophon CD AU 32110

ハード・ロック・バンドはもちろん、ロック・バンドのレコードとしての作品が決して多いとは言い難いスイス・ロック事情の中にあって、3枚ものアルバムをのこしたのは当時では恐らくこのTOADだけだろう。攻撃的なリフをちりばめたヘヴィなA①、B①②③、タテのりのブルーズをきかせるA②、心を洗われるバラードA③と内容も多岐にわたって充実しているのが、この2ndアルバムである。とてもトリオとは思えない重厚なサウンドと練られた曲、冴えたアレンジどれをとっても一流で、もちろんテクニックも安定している。イギリス盤、イタリア盤も発売されており、スイスではクロークスとならび海外で成功した数少ないバンドの一つである。
（宇藤）



TWENTY SIXTY SIX AND THEN
Reflections On The Future
LP/United Artists UAS 29 314　'72年

B級ハード・ロックの宝庫ドイツにあってテクニック、曲作りの両面において一歩抜きん出た存在である。たたみかけるリズム、ヘヴィなギター、表現力豊かなヴォーカル、重厚なキーボード群による緩急自在の曲展開は、プログレッシヴ色の強い、ストーリー性を感じさせるものだ。いわゆるハード・プログレ・タイプと言えるが、これだけノリも良く、なおかつ複雑な曲想を絶妙なバランスで表現したグループとなると他に見当たらないように思える。また、全体を通して重くたれ込めるような暗さや、大曲B①の後半部でいきなりエレクトリックな異次元へと突入してしまうあたり、ジャーマン・ロックの面目躍如といったところか。
（高森）



TWENTY SIXTY SIX AND THEN
Reflections On The Past
LP/Second Battle SBT 001 '91年

未発表曲集。アナログ盤のみでの、２枚組３面収録の変則リリース。Ａ①からＢ①は'71年６月録音。Ａ①の彼等唯一のオフィシャル作品「Reflection On The Future」オープニング・ナンバーのテイク違いから始まる。アウト・テイクスと思われるＡ②のフルートをフィーチュアした曲からＢ①の大曲２曲は、ツイン・キーボードのスタイルを前面に出し本作の目玉と言える出来を示している。Ｂ②から③は'72年３月録音、この２曲、収録時間や曲調からシングル用に制作されたと思われる。ジェフ・ベック・グループ２期に代表される16ビート感覚のファンキーな展開をし、ヴォーカルもソウルフルに熱唱。Ｃ①から③は'71年５月録音。この３曲はライヴ録音で音質は悪いが、演奏力は、スタジオ盤並み。（吉野）



VIRUS
Revelation
LP /BASF ORC15 '71年
CD/Second Baffle SB015

音色としては60年代のサイケ色が濃厚に残るVIRUSの1st。イギリスではキング・クリムゾンやEL&Pがメイン・ストームに踊り出し、ピンク・フロイドがサイケ色を払拭しつつあった時代、ドイツでは今だその残滓に酔い痴れていた事を物語る一編。執拗に繰り返されるリズム・パターンはひたすら落ちていくための原動力であるが、中途半端だと何も産み出さない結果となる。アモン・デュールやグル・グル・アシュラ・テンペルといったバンドは繰り返しの果てに光景を一変させる強靱さを持っていたが故に突出する個性を持ち得たのだと思う。VIRUSはこの点で弱く、ムードに酔っていて詰めが甘いと言える。ストーンズの〝Paint It Black〟の挿入、〝神秘〟に似た曲展開、〝太陽讃歌〟のパロディなど楽しめる内容ではあるが。（高森）



VIRUS
Thoughts
LP/Pilz 20 21102-9 '71年

メンバー表記がないので確かな事はわからないが、恐らく専任のヴォーカリストを加えての２ndアルバム。当然ながら歌を中心にしたコンパクトなオルガン・ハード・ロックに変身し、聴きやすくなった。曖昧さや冗長さはなくなったが、リズム・セクションの弱さとメリハリの弱さで、割と平凡な出来。６人組にしては音が薄いのも気にかかる。このアルバム後、VIRUSはWEEDに発展しユーライア・ヒープもどきのサウンドに変わって行くが、短期間の間にサイケデリック・ミュージックからインターナショナル志向のハード・ロックに変遷し得たのは、変わり身の早さとも言えるが、それだけ強固な個性を持ち得なかったバンドの苦闘を物語っているとも言えそうである。（高森）



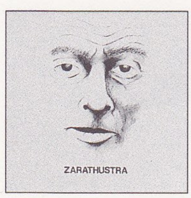
WALPURGIS
Queen Of Saba
LP /Ohr 556 023 '72年
CD/Bernhard Mikulski OMM 556 023

ドイツに限ったことではないが、伝説なり神話なりをモチーフに、その解釈の恣意的な面白さによって作品を残すという傾向が当時多く見られたようだ。ワルプルギスもご多分にもれず、ブロッケン山脈からの魔女たちの狂宴をしっかり残してくれた。Ａ面ラストを除いて、何らインパクトのない虚飾だらけで思い入れたっぷりのハードロックは、出来そこないヴァレンシュタインと思えばよろしい。これ１枚のみ残して颯爽とシーンから退場してしまったのはいいが、後世マニアの頭を悩ましたケシカランアルバムの１枚である。カヴァーアートは明記されてはいないが、たぶんヘルムート・フリッツであろう。ゲストとしてユルゲン・ドラゼのクレジットがある。彼のピアノが聴ける。（丸美屋）



WEED
Weed
LP/Philips 630509 '71年
CD/Second Battle SB 018

'71年、元VIRUS（オルガン・ハード・ロック）のメンバーが中心になって製作されたのがこのWEEDである。VIRUSの時代とは打って変ってここではユーライア・ヒープをお手本としながらもよりアグレッシヴな要素を前面に打ち出している。ただコーラス・ハーモニーの使い方、ハモンドの音色等あまりにもそのヒープの二番煎じ的要素が強すぎる為かえって損をしている。その点さえ気にしなければ作品としてクオリティはかなりの物を持っていると言えよう。インターナショナルな成功を目指したメンバーの入れ込み様が痛いほど伝わって来る。録音状態もかなり良く、各楽器のそれぞれに攻撃的な音がバランス良く分離した状態で録れている。（松尾）



ZARATHUSTRA
Zarathustra
LP/Metronome MLP 15.421 '71年

メンバー自らURIAH HEEPから影響されて作ったバンドであると語っている様に彼らのサウンドはそのものズバリ、どこを切ってもHEEP節であふれている。だがしかし、この時代のドイツにはこのHEEPもどきが実に数多く存在するわけで、そうした症候群の中で本作の存在意義を考えた時、改めて彼らの楽曲面の才能を評価せざるをえない。長らくレアー・アイテムとしてコレクターの間でのみ語り継がれて来た作品であるが、このたび約20年の歳月を経て本国より限定1000枚にて再発と相成った。現在我々が求める'70年代スタイルのハード・ロックとしてはまちがいなく最良の部類に入るであろう。メンバーのその後の活動は今の所、見当たらない。（松尾）

80's〜GERMAN SYMPHONIC ROCK

ジャーマン・シンフォニック・ロック

●松本昌幸

WALLENSTEIN、NOVALIS、GROBSCHNITT。いわゆる廃盤物を除いて、'70年代ドイツのシンフォニック・ロック・バンドを挙げるとすれば、この3グループ位のものだろう。'70年代初期にイタリアでジェネシスが受けたとすれば、ドイツではピンク・フロイドだったという大よその傾向からも、これは納得のいく結果だ。これら3グループとてスタイリッシュなシンフォニック・ロックからは外れている。

さて'70年代後期になりヨーロッパで一早くパンク、ニューウェイヴが定着したドイツだが、その一方で'70年代のスコーピオンズ、'80年代のハロウィンに代表されるように、元来ハード・ロックも根強い国柄だ。そうした勢力に押されるかのように、もともと弱小だったシンフォニック・ロックの流れは、この時期に来て、のきなみ自主制作を強いられたかのような形になる。その中で、もし仮に'70年代と'80年代を区切るエポックなバンドをシンフォニック・ロックで探すならば、一つのポイントはANYONE'S DAUGHTERである。彼らは'79年から'83年にかけて唯一メジャー流通に乗り得た、しかもメロディの薄さを感じさせないサウンドが'80年代の伏線ともなったバンドだった。雑な言い方をするならば、今につながるドイツ・シンフォニック・ロックの流れは、彼らに遡れる。

この'70年代末以後、シンフォニック・ロックは、イギリスを除くほとんどの国で自主制作の内に推移したとは言え、日本ではメイド・イン・ジャパン、フランスならばムゼア、オランダではSIミュージックというように展開の拠点を持った。ところがドイツには未だに大きな拠点がない。流れとしては、'70年代末から'80年代前半にかけて地方都市から自主制作が相次ぎ、'80年代中頃に終息していった点で、フランスに似ている。両者ともにアルバム製作はあるにせよ、ライヴ活動が展開できる程のシーンと呼べるものがないことも同じだ。しかし'80年代中頃以後、フランスではムゼアがそうした自主制作を一つに吸収しながら、今に至るネットワーク、市場の確立をもたらせたこととは逆にドイツの場合は未だに'70年代末以後の自主流通でしかない。むしろ今となっては周辺国に吸収される程である。AMENOPHISやROUSSEAUの旧作、そして新人のCHANGING IMAGEなどがムゼアからリリース、デビューしたことは、そのいい例だ。

こうした背景の一つには、多分にドイツの地理的要因があるのだと思う。ドイツには、イギリスのロンドン、フランスのパリといった中央都市がない。北はハンブルグ、ベルリン、中部にはルール地方、フランクフルト、南にはミュンヘンというように地方大都市の集合国で、中央集権型ではないのである。当然、マーケットは分散されやすい。流通網から外れるもの



●エニワンズ・ドーター

が自主制作というものならば、尚更こうした地理的要因が、ミュージシャンの制作や活動を制約するだろう。頼みの綱は主としてファンの情報交換である。しかし幸いなことに情報のスムースさでは日本並みのドイツのこと、'80年代の中頃には、そうした情報網をつたって多くの自主制作盤が日本にまでやって来た。

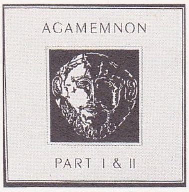
ドイツ系シンフォニック・ロックの音楽面の推移を見ると、これまでに大きな切れ目はないように思える。'70年代末から'80年代前半にかけての自主制作ラッシュ期に、KASHMIR、FLAME DREAM、DRAGONFLYといったスイス勢に粒よりのアルバムがあることもピークに一役買っている。また'72年に結成されたNEUSCHWANSTEIN、'74年結成のBURNING CANDLEなどが、ようやくこの時期に来てアルバム制作したこと、そして'70年代後半に結成されたROUSSEAU、ANABIS、ISKANDERなど多くの新人がデビューしたこと、これらが一塊となってこの時期を形造った。そして'84年頃に終息。ちょうどANYONE'S DAUGHTERが自主制作に移り活動が鈍った時に符合している。'80年代中頃に結成され近く新作リリース予定のあるスイスの実力派DEYSSを除けば、'80年代初頭の上記新人3グループが、'80年代後半に来て完成作もしくは煮詰りを感じさせるアルバムを出したことは、早急に新人が望まれる時期に来ていることをほのめかしているといった状況だろう。



●ノヴァーリス

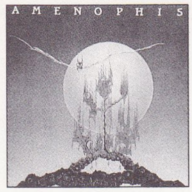


●グロープシュニット



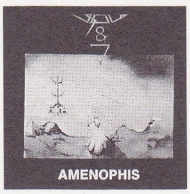
AGAMEMNON (Switzerland)
Part Ⅰ&Ⅱ
LP/Agamemnon AGA 12410 '81年

アガメムノンが残した唯一の作品。トロイ戦争のギリシャ軍総大将でミケーネ王の名から取った彼等は、神話の如き深遠な音世界をアコースティックの楽器を上手く織り混ぜて使い分けながらも、決して派手に展開することはなく、地を這う様に響き渡る端正なメロディとハーモニーを大切にしながらも、時を超えて私達の前に繰り広げてくれるのである。メンバーは基本的にはG、B、Ds、Key & Voの4人だが、各人共皆それぞれに他の楽器もプレイしており、前述のメンバーに付け加えてライトショウを担当している者も参加している。アガメムノンの音には、木の温もりと香り、空と水、空気、大地にマッチした生命力の様なものが宿っている様だ。 (大関)



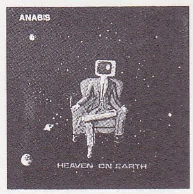
AMENOPHIS
Amenophis
LP /Amenophis 21.856 '83年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4052.AR

'80年代も半ばを過ぎた頃、それまでシンフォニック・ロックが余りフューチャーされることのなかったドイツで次々と'80年代以降に制作された良質のシンフォ作品が発見、紹介された。中でもこのAMENOPHISは本デビューアルバムが'87年に紹介されると共にその内容の素晴らしさから一躍当時のドイツシンフォを代表するバンドとして知れ渡ることになったのである。確かに一部で指摘されるように、リズム隊の弱さからくるリズムの甘さやボーカルの弱さは否めないが、それ以上に彼らが楽曲やジャケットアートで表現している、ドイツの森の中を思わせるような幽玄さや静けさを感じる叙情はそれらの欠点を補って余りある程の素晴らしいものだと言えるであろう。なおCD化に際し5曲の未発表曲が収録されている。(島村)



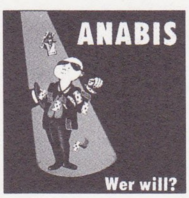
AMENOPHIS
You And I
CD/WMMS 002 '88年

もしあなたがAMENOPHISの1stに感動しその感覚を求めてこの2ndも聞いてみようと思うのならば、残念ながら聞き終えた後に満足を得ることは出来ないだろう。'88年リリースされたこのAMENOPHISの2ndは、1st時の3人からDS&KEYのStefanが脱け、代わりに女性ボーカルを含む3人の新メンバーを加えた5人編成で録音したものである。このようなメンバーチェンジにより作曲面及び演奏面で変化が生じ、ここで聞かれるサウンドは1st的な雰囲気も僅かながらは感じられるものの、全体的には我々を魅了してくれた1stとはかなり異なった、よりモダンなシンフォ色のある普通のロック的なものとなっている。正直言ってしまうと個人的には、本作はAMENOPHIS関連の別バンドの作品として聞いた方が良いと思う。 (島村)



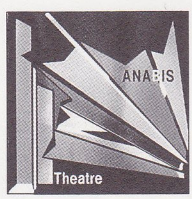
ANABIS
Heaven On Earth
LP /PM 1080 '80年
CD/WMMS 016

アナビスの1st、自主製作である。同国のアイヴォリーやノイショヴァンシュタイン等と並んで、ジェネシスタイプのシンフォニック・ロックとしては高水準に値する素質を十分に兼ね備えたグループであると断言出来る。ガブリエルを意識しつつも独自のカラーを持ったヴォーカリストの歌唱力、安定した曲の構成や演奏、テクニックから察して、かなりの実力者揃いと考えられる。メンバーは恐らく5人編成かと思えるが、その中でトマス・シュミットなる人物(ペル・メルのメンバーと同姓同名!!同一人物という説もあるが?)の名前が挙がっている事から、何らかの関係があるのではないだろうか…?グループは翌年に2nd「Wer Will!!」をリリースするが、こちらも前作の延長線上、素晴らしい出来に仕上がっている。(大関)



ANABIS
Wer Will ?
LP/PM 1181 '82年

名作「Heaven On Earth」に続く2枚目の作品である。本作も前作同様に素晴しい作品となっている。相変らずヴォーカリストはピーター・ガブリエルによく似ている。ギターがもっと甘くなればジェネシスそのものになってしまいそうだ。アナビスの場合、他のジャーマン・シンフォのように、テクニックはないからメロディーセンスだけで勝負するといったバンドではない。各メンバーが確実な演奏技術を持っているため安心して聴いていられる。世界中に数多く存在するジェネシス・フォロワー達の中でもトップ・クラスに位置する彼らの作品。シンフォニック・ロックのファンは絶対にチェックして欲しい。 (小林)



ANABIS
Theatre
CD/WMMS 004 '89年

「Heaven On Earth」「Wer Will!!」以来音信の絶えていたANABISの3枚目。オリジナル・メンバーで残っているのは、ドラムスのMike Morkelのみで、当然のごとく表面には変化を遂げている。全面を貫くコンセプト主義は相変わらずだが、曲はより短く、ところどころで木管をリード楽器として導入するなど、かつての余りにジェネシスふうからの脱却をこころみている。問題の管楽器を入れたインストゥルメンタル・ナンバーからは、自分達の音楽をもう一度見つめ直そうという彼らの気迫が、静かではあるが、つたわってくる。淡々とした中にも、ドイツ人らしい思索とロマンティシズムが満ちあふれる好盤。 (古田)



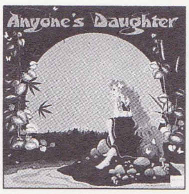
ANDREAS VOLLENWEIDER (Switzerland)
White Winds
LP /(NL.) CBS 26195　'84年

ガンダルフに通じる清浄なインストゥルメンタル・ミュージックを展開するスイス人ハープ奏者、84年の作。アーティスト自身の宗教観に基づいたトータル・アルバムの形をとっているようである。宗教というのは西洋のそれではなく、大地に吹きわたる風や水の流れに同化し自己滅却を遂げる東洋のそれに近い。従ってシンフォニックな構築美を求めても徒労に終わるだろう。その音階のなせる技か日本の琴のように聴こえる箇所もある。ハープの他にドラムス、チェロ、パン・パイプ、鳥の声など自然音によるエフェクト等も加えられている。美しくかろやかな音楽である。他にもその後、多数のアルバムをリリースし、ニュー・エイジ・ミュージック、マインド・ミュージックの分野で知られるようになった。　(古田)



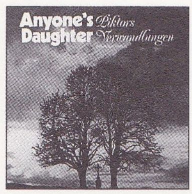
ANYONE'S DAUGHTER
Adonis
LP /Brain 0060.186　'79年
CD/WMMS 025

「ユーロロック」というシーンが日本的で認知された時期にデヴュー、同時代性を持ったバンドとしてファンに忘れ難い印象を残したAnyone's Danghterの１st。手数の多いしなやかなds、コーダルなb、硬軟織り混ぜ、過不足なく歌心あるラインを紡ぎ出すgとkey、そしてジェントルなvoと甘美なコーラスワークと、安定したテクニックに支えられたセンシディヴなシンフォニック・サウンドという彼らの作風は既に確立している。それまではむしろ泥臭さを売りものとしたバンドが多かった中、その洗練されたセンスと音色そのものの美しさは、新しい世代の登場を告げるに相応しい清新な響きに満ちている。４つのパートに分かれた組曲〝Adonis〟や彼らのテーマ曲等、主要ナンバーも多く収録されている。　(山田)



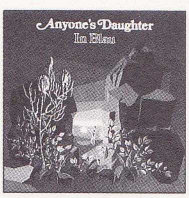
ANYONE'S DAUGHTER
Anyone's Daughter
LP /Intercode INT 145.612　'80年
CD/WMMS 027

大曲指向の１stから一転、コンパクトな９つの曲が並ぶ。それは各々の曲想がより明確になるという意味でとても良い方向へ作用しており、アンサンブル面での進歩と相まって、アルバム全体としても非常に魅力的な一枚に仕上がっている。動のA①②④、B①③、静のA③⑤、B④、ダブル・イメージのB②、どの曲も粒揃いだ。この作品までの歌詩は全て英語だが、語感を大事にしたBarethのVoによく合っており、却って初期の彼らの特徴である瑞々しさが際立っている。Anyone's Daughterといえば、これまで１st、３rd、５thが数多く取沙汰されて来たが、実は彼らの本質はともすれば地味になりがちな４thやこの２ndにあるのではないか。全作品の中でも曲の良さとまとまりという点では一歩抜けている。　(山田)



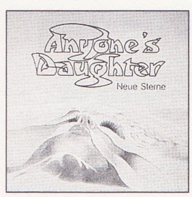
ANYONE'S DAUGHTER
Piktors Verwandlungen
LP /Spiegelei INT 145 624　'81年
CD/WMMS 033

エニワンズ・ドーターの３rdアルバムは、81年１月に行われたコンサートにおけるライヴである。が、Ｂ面の最後になるまで拍手がない。スタジオ録音と思われる程の完璧な演奏力。半分程が朗読。その間の演奏がうすいのはライヴである証拠(ジャケットにabsolut live!と記されている)。１stの「ADONIS」から一貫した音楽性をもち続けているにもかかわらず、本作が違った形に聞こえるのは演奏技術の向上もさることながら、ドイツ語を使っている事と語りを入れた特殊な構成のため。その後の「IN BLAU」では元に戻っている。彼等の作品の中では少々異端だが、同じドイツのグローブシュニットやノヴァリスを完全に超越した、叙情派プログレの最高作と呼んで間違いないだろう。ジャケットもまた傑作である。　(中藤)



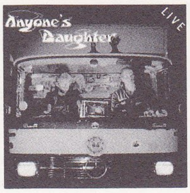
ANYONE'S DAUGHTER
In Blau
LP /Intercord INT 145.632　'82年
CD/WMMS 029

その評価を不動のものとした前作からdsのK.Konopikが脱け、P.Schmidtにチェンジしている。前任者に比べれば幾分シンプルでストレートだ（イエスのBrufordとWhiteの関係をイメージすれば、当たらずと言えど遠からずといった所だろう)。３rdという一つのマイルスーンを経たこの４thではいくつかの変化が見られる。まず歌詩が全てドイツ語に変わり、アンサンブル面でも重みが加わる事により一つ一つの音の説得力が増した。初期の瑞々しに対する情感の深さという中〜後期の彼らの魅力は、こうした様々な面での彼ら自身の熟成に依って醸し出されたものだ。２ndのマテリアルを、３rdというフィルターを通して再構築した作品という言い方も出来るかも知れない。重い手応えには風格すら感じる。　(山田)



ANYONE'S DAUGHTER
Neue Sterne
LP /Spiegelei INT 145.640　'83年
CD/WMMS 031

前半ヴォーカル・ナンバー、後半インストゥルメンタル・ナンバーを配した構成。サウンドはシンプルなビートを強調したアップ・トゥ・デイトなものだが、彼らならではのセンスは上手く残されており、シーケンスを効果的に使用したＡ⑤、Ｂ②⑤等はこの時期ならではの好ナンバー。反面、何気ない感情の機微すら昇華する様な豊かな情感は流石に相殺されており、両者をどう捉えるかによって各々の評価も割れるだろう。同じ頃商業的に成功したプログレ系グループのサウンドの変貌、マイナーでの壊滅的状況も併せ考えた時、当時がいかなる時代が見えて来る。そういう意味で同時代性を反映した一作だが、そうした中にあってパーマネントな活動を続けた彼らが本作で一定の水準をクリアした事は評価されていい。　(山田)



ANYONE'S DAUGHTER
Live

LP /Corona CMC 18001　'84年
CD/WMMS 035

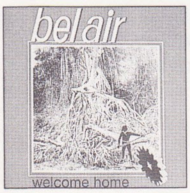
　このアルバムの主題は、「彼らは優れたロック・バンドである」事。そして「何よりも〝Live〟である」事だ。彼らはそのサウンドへ抒情やロマン等、無形の要素を託す能力に長けたグループだったが、そうして各作品へ投影したイメージを、再度ロック・バンドとしての自身の姿へフィードバックし、再演している。各人のソロも交え、ライヴであった3rdを除く選曲もベスト的。特に最後の2曲では、プレイヤーとオーディエンスの交歓／交感により、俄然アンサンブルが白熱し昇華してゆく様がダイレクトに伝わってくる名演。「抒情派」よりも「ロック・ファン」と言うなら3rdよりも本作に軍配を上げる筈。'80年代マスターピースの一つと言って良いと思うが、2 in 1のCDは2曲カットされているのが残念。　（山田）



ANYOND'S DAUGHTER
Last Tracks

LP/A.D.Records 86007　'86年

「Live」リリース後、約2年間の沈黙を経て届けられたのがAnyone's Daughter解散のニュースと本作だった。A面は脱けてしまったBarethとSchmidtの代わりとして3人のメンバーを加えたグループ最後の録音だが、総じて一本調子で魅力に欠けており、解散という事実を裏付ける出来。一方B面は1st録音前の'78年、オリジナル・メンバーによる演奏が収められており、これはA面の失地回復と言って良く、音質は今一つながら安心して聴ける。ここから伝わって来るのは、テクニックや各作品の水準の高さとは裏腹に、そのサウンドの中にはいつも等身大の彼らがいたという事だ。誠実と表現すれば良いのだろうか。それが「巨人」と呼ぶには相応しくない代わりに、今も尚根強い支持者を持つ理由なのだろう。　（山田）



BEL AIR
Welcome Home

LP/(privete press.)LC 666　'86年

　フルート奏者を含む6人組。アルバム・デヴュー以前に英国西部ツアーを行うなど、名前は知られた存在であった。自主制作の本作が1stだと思われるが、演奏技術、音響処理とも非常にチープで素人くさい。学生サークル・バンドのスタジオ・ライブ一発録りといった印象も拭えない。ところがこの作品、容易には忘れ難い魅力を備えている。とんでもなくキャッチーなメロディ・ライン。どの曲も妙に覚えやすい。代表的なのは最終曲。「人生は決して楽なものじゃない。でも大丈夫」「ストットガルトでもう一度この歌を歌おう」という関係者十数人による合唱は非常にプリミティヴな感動を呼ぶ。愛すべきライト・シンフォニック作品である。なお、彼らの2作目はWMMSの記念すべき第1号作品となる。　（ミワ）



BEL AIR
The Sleeping Beauty

CD/WMMS 001　'89年

　出来はデビュー作に較べて遥かに良い。そのままの自主製作LPの時代から既にCD時代へと移っているのだから、録音も数段良い。良いには違いないが、もちろんBEL AIRでの事。'70年代のシンフォニック・ロックを持ち出して来ては当然話にならない。むしろ'90年代の流れやSIミュージックで話をすれば、見事にはまる。タイトル曲の出来などは、そうして見れば、かなりいい線を行っている。ヴォーカルの弱さ（色のなさ）を除けば、ピアノやac-gにフルートが絡んでつくり出す静かな流れから、甘いギター・トーンがメロディの山をつくるまで、曲も前後関係に気が配られ、また展開部もある。展開するには少々力量不足だが、リズム感が良ければ曲によっては相当なものなのだが。と詰めの甘さも否めない。　（松本）



BLUE MOTION (Switzerland)
Blue Motion

LP /Amos LP 5438　'80年
CD/(U.S.)Laser's Edge LE 1016

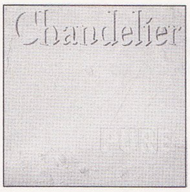
　元サーカスの2人を中心に結成されたブルー・モーションは'80年に500枚限定で本作を発表している。キーボード2台にパーカッションという変則的なトリオ編成であるが、全編にわたり非常にテクニカルで緊張感溢れるインストナンバーが綴られている。割と攻撃的でセンセーショナルな幕開けながら、曲中では動と静のコントラストが見事に表現されており、どちらの場面でもピアノを核にした展開が多く見られる。それをオルガンやシロホンが巧みにエスコート、3人が一体となった演奏で、僅か2日間のスタジオライヴ録音としては異例とも言える高水準の作品を作り上げてしまった。よくサーカス系の居品を「所詮はクリムゾンの亜流」と嫌う人がいるが、本作を耳にすれば一味違った印象を持つかも知れない。　（江田）



BURNING CANDLE
Burning Candle

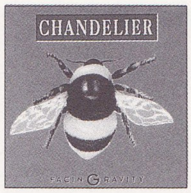
LP/Steyer Disco SD-18025　'81年

　キーボード・トリオBURNING CANDLEの結成は古く、'74年まで遡る。'80年代中頃、このアルバムが入ってきた頃、ANABISやAMENOPHIS等多くの自主製作盤に紛れた感があるが、よく聴くとジェネシス——マリリオンの亜流というよりは、'70年代をひきずるようなある種の古さがあったと思う。決してテクニカルな演奏を特意とするわけでもなく、アップ・テンポな曲調では荒も目立つが、クラシカル・タッチでピアノがリードするA②や、各曲でのハモンド・オルガンのトーンには、ポンプ・ロック以前の感触があって中々味わい深い。ドラムのもたつきがなければ、もう少し人気が出たかもしれない。　（松本）



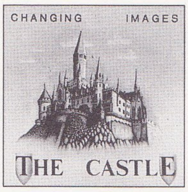
CHANDELIER
Pure
CD/Sisyphus 001 '90年

イントロに続いて登場するゲイブリエルというよりはフィッシュそっくりのヴォーカルを聴くと、「あー、またポンプかぁ」と落胆する人も多いかも知れない。でも、そのヴォーカルを除くとジェネシスの亜流という訳でも無く、シンフォニックと言うわけでもない。ごくオーソドックスなスタイルを持つ５人組である。自主制作レヴェルのサウンドだし、取り立てて個的な部分もないのだが、私は妙に気に入っている。確かにまだまだ荒削りだし、リズム・パターン等は考えすぎで空回りしている所もあるのだが、それを上回る魅力が有る。それは単にポップと言って片付けてしまうのが惜しいメロディの良さとその構成力、そして叙情的なギターとキーボードの絡み具合いである。このセンスが伸びれば将来は楽しみ。（津田）



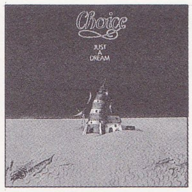
CHANDELIER
Facing Ravity
CD/Sisyphus 021 '92年

格段の成長を見せた２作目。曲想の幅が広がって、実に聴かせどころの多い作品となっている。１作目の最終曲にはおよばぬものの、非常にメロディ・ラインのよい４曲目、日本語のナレーションを導入してメリハリをつけた３曲目、ギターとキーボードによる音の洪水から一転してアコースティック・ギターのしっとりした情感に切りかわる８～９曲目の流れ、15分近い大曲の５曲目。全体として、ジャーマン・ポンプを代表する１枚といいきってよい水準にある。ジェネシス～マリリオン～IQという流れの末節に位置づけられるユーロ・ポンプ勢であるが、本バンドについては、単なるスタイル踏襲のレベルから脱したような印象を受ける。この段階に至っては、ヴォーカリストの声質の類似はジャマなだけである。（ミワ）



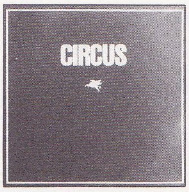
CHANGING IMAGES
The Castle
CD/(Fr.)Musea FGBG 4044. AR '91年

キーボード兼ベースとギターの２人組ユニットのデヴュー作。シャープかつ荘厳なオーケストレーションで構築されたコンセプト作である。ENIDより冷徹で、ニューエイジと呼ぶには楽曲に起伏がありすぎ、キャッチーすぎる。ムード／イージーリスニングというには音像がデジタリーで、シリアス・ミュージックのフィールドに押し込めるには軽快すぎる。こうした背理法で見ていけば、実は強烈なオリジナリティーを有しているといえまいか。複雑なオーケストラ編曲、ところどころに顔を出すヒューマン・ヴォイス、アコースティック・アンサンブル。旧来のジャーマン・バンドには見当たらぬこだわりである。プロデュース、エンジニアリング、カバーアートも手掛けるキーボード奏者は相当な才人といえる（ミワ）



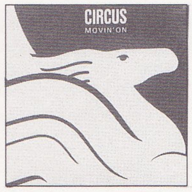
CHOICE
Just A Dream
LP/Rocktopus 202 812-320 '80年

プログレッシヴ＝シンフォニック・ロックが事実上の衰退期を迎えた節目の'80年に突如出現して消えた叙情派のシンフォニック・グループ、チョイスの唯一の作品。そのあまりにもオーソドックスなスタイルはこれまでのドイツにおいて「ありそうでなかった」タイプの珍しいものであり、メロディアスで開放的なサウンドは先達のもつ「ジメジメした」ムードを打破するほどのものだ。テクニックはあくまで平均的だが、切れのよい軽妙なリズム・セクションとセンスの良いキーボード・ワークは「よく歌う」メロディ・ラインとの見事な調和を見せており、独特の「味わい深さ」を引き出している。派手さとは全く無縁だが長く聴ける飽きの来ない音だ。単発で終わったのは登場時期が悪かったためか。（内田）



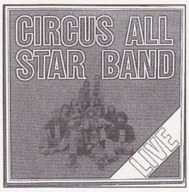
CIRCUS (Switzerland)
Circus
LP/(Swi)ZYT 208 '76年

「サーカス」と名乗るグループはロック界にいくつかあるがテクニック面ではこのグループがピカーだろう。特にリズム・セクションの迫力には圧倒されてしまう。それに多彩なエフェクトを用いたギターが絡み、随所に散りばめられたフルートも効果的で、彼ら独自の音空間を創り上げている。タイプとしてはクリムゾンの亜流派という感が強いが、あくまでも彼らの作品にはオリジナリティーが保たれているといえる。こうした音作りがスイス・ロックの本流であることは、後に登場したアイランドやフレーム・ドリームを聴いてみると容易に判断がつくからだ。なお、編成はb. ds. g. (sax) fl.の４人。キーボード抜きでもこれ程ヘヴィーなプログレッシヴ・ロックができるという点に注目したい。（江田）



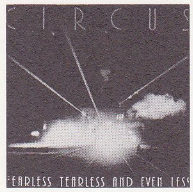
CIRCUS
Movin' On
LP /(Swi)ZYT 211 '77年
CD/Decoder 38701

私の知るかぎり、スイスのグループでアイランドに続くグループはこのサーカスであろう。オリジナリティの面でも演奏水準の高さに於いてもアイランドのほうが数段秀れていることは否定できないが、後期キング・クリムゾンの強い影響下にある彼等のサウンドはかなりのものである。これは彼等のセカンド・アルバム（1st：CIRCUS／ZYT 208 '76）この後、多少ポップ化したサードアルバム（Fearless Tearless & Evenless/ILLUMINATUS 001 '80）を発表、しばらくして解散した。又、彼等の他にゲストを参加させたライヴ・アルバム（CIRCUS ALL STAR BAND/LIVE/ZYT 217）もリリースしている。本作は彼等の最高作で、特にＢ面全てを費したタイトル・チューンが圧巻である。（山崎）



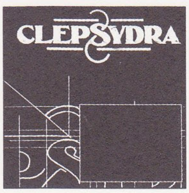
CIRCUS ALL STAR BAND
Live
LP/(Swi)ZYT 217　'78年

ユーロ・ロックのマスターピース「Movin'On」リリース後の'78年1月、Circusは当時のスイス各シーンのミュージシャン9人と共にCIRCUS ALL STAR BANDを名乗り、2回のライヴを行った。その記録が本作。元々テクニカルなアンサンブルの整合感やドライヴ感が大きな特長だった彼らは、CRIMSONと言うよりはYESに近い明快なキャラクターを持っていただけに、ポップ系やフォーク系のミュージャンとの共演もそう違和感はない。以上からも分かる通り、サウンドは「Movin' On」を幾分ポップにした出来と思っていただければ間違いなく、特にB面の大曲は件のタイトル・チューンと双璧を成す、ツイン・ドラムスを含めたアトラクティヴなプレイが乱れ飛ぶ名演。軸となる4人のプレイも勿論特筆もの。　(山田)



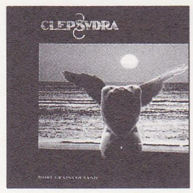
CIRCUS
Fearless Tearless and Even Less...
LP/Illuminatus 001　'80年

端正でリリカルなfl & sax奏者A Griederが脱け、ALL STAR BANDで好プレイを聴かせていたS.Ammann (Key)が加入。そこでは4人と共に作曲も行なっていた事を思えば、彼の参加は半ば必然的人事と言える。ハードながらセンシティヴだったそれまでとはやや異なり、A面〜B①迄はKey中心のより変拍子を強調したものと、ややブルーズィなヴォーカル・ナンバーとに大別される。そしてラストのB②はクライマックスのper中心の圧倒的アンサンブルに向けてシリアスに盛り上がる。彼らは最初言われた「後期Crimson」のイメージが強過ぎ、評価こそされているが、それが実力に見合ったものかどうかは疑問だ。再考を促したい。この後解散、HausetとAmmannがBLUE MOTIONへ向かう事は周知の通り。　(山田)



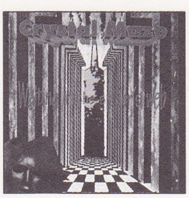
CLEPSYDRA (Switzerland)
Hologram
CD/Cod Tuxedo CCD 4107　'91年

森永のキャラメルのおまけ（と言っても通じない？）がジャケットにくっついたようなCD、「Hologram」。CLEPSYDRAはFLAME DREAMそしてDEYSS以後、とぎれているスイスのシンフォニック・ロック久しぶりの新人になる。アルバム製作のみに止まらずライヴ活動も行っているようで、音の方からしてもSIミュージック等の線上にあるバンドだ。こちらデビュー作は、バンドの勢いが力味になったような、音楽の拡がりに欠ける部分が多い。ヴォーカル中心のメロディック・ロックというイメージに止まる。まだまだ吹っ切れていない。全体に荒削りな印象も残る。ただし2作目へとバンド継続の意欲は強く、ポップな面を押し出す姿勢も見える。　(松本)



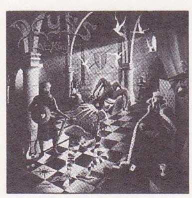
CLEPSYDRA
More Grains Of Sand
CD/Cod Tuxedo CCD 4109　'94年

'90年代のバンドらしくCLEPSYDRAも'70年代バンドのフレーズやメロディ、雰囲気を作曲の要素として、DEYSS休止中の今、スイスで最も活発な動きを見せる。自主流通ルートを通じての売込みやシングルCDをリリースする等、バンド側の意欲がよくうかがえる。デビュー作では堅さが目立った彼等も、この2枚目のアルバムでは余裕が出てきて聴きやすい。ジェネシスの初期の叙情味は'90年代メロディック・ロック派の重要な要素になってもう随分と経つ。CLEPSYDRAもその消化をしたとも言えて、曲中に取り込み全体の流れをつくり始めている。加えてPINK FLOYDの近年の影響も強い。これらは思う程には露骨ではない。ヴォーカルを押し出しインスト部も聴かせようとする。上り坂なのは明らか。更に歩み込みそう。(松本)



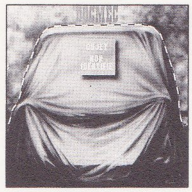
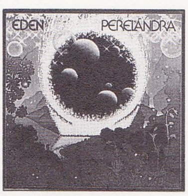
CRYSTAL MAZE
Wating In The Spider's Web
CD/WMMS 019　'92年

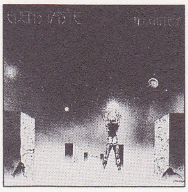
バンドの経歴は不詳。記すべきプロ活動には乏しいのではないかと推察される。曲名に使われている単語(例えばSpider's web, Floating ice, wait, soleiers of time) から、彼らがブリティッシュ・ロックの影響下にあることは明らかである。音の傾向も、ドイツのシンフォニック・バンドを例にあげるより、英蘭のいわゆるポンプ／メロディック・ロック路線といいきってしまったほうがわかりやすい。フロントに立つヴォーカルとギター、バッキングのキーボード、キャッチーなメロディ・ライン。全体にチープで音が薄く、技術的にも難がある。メタル音色のリフを多用するギターにオリジナリティはなく、音は鳴っているのにまったく前に出てこないキーボードは不当である。2nd「Forever」も出た。　(ミワ)



DEYSS (Switzerland)
At King
LP/(private press.) LP30-894　'85年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4017.AR

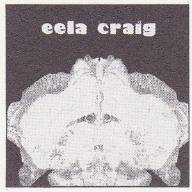
ツイン・ギター、キーボード、ベースという変則的な編成の4人組だが、ヴォーカルとドラムスがゲスト参加しているため、音の方はごく普通のジェネシス・タイプのサウンドである。ジャケットの印象から予感できる通りのいわゆるポンプ・スタイルなのだが、ヴォーカルはゲイブリエル風ではない。ゲストのプレイを除けば、メロディ、アレンジとも水準は高く、自主制作にしてはなかなかの好作である。中期ジェネシスの持っていたある種の清々しさのような感覚が全体に支配しており、色調としては明るい方だ。出来は遥かに2ndの方が良いので本作はかすれがちであるが、単なるコピーから抜け出す息吹は充分に感じられて次への予感を喚起させるに値する一作である。　(津田)

 **DEYSS** **Vision In The Dark** LP / (privete press.) LP 87112 '87年 CD/Deyss CD 87112 デヴュー作から２年経って彼等は格段の進歩を遂げて帰ってきた。前年の弱点であったヴォーカルとドラムスは新しいメンバーに変わっており、一応ゲスト扱いではなくなっている。この短い間に弱点を解消し、更なる発展を遂げたこと自体が彼等の才能を物語るものであろう。ジェネシスの残像が消え去ったわけではないが、マリリオン同様の現代のシンフォニック・ロック的なオリジナリティが確立されたと言っても過言ではないくらいに素晴らしい出来となっている。清冽で純粋、しかもダイナミックで、音の厚みや構成等のスキがなくまさに精緻な精密機械のようで、それでもヨーロッパ特有の叙情性は失われていない。'80年代のスイス・メイドのシンフォニック・ロックの一つの頂点に立つ作品と言っても良いだろう。（津田）	 **DOCMC (Switzerland)** **Object Non Identifie** LP/ (Swi.) Vaveline JAV.C.001 '76年 ジェネシス・シンドロームは今や世界各国に多数存在していて本作もその例に漏れないが、このバンドを単なるコピー・バンド的なものとして片付けたくない理由として、その音楽的教養の高さを裏付けるに充分な各メンバーのクラシックを基礎としたテクニックの確かさが挙げられる。Ａ面はスイス本国の大学や寺院で行われたライヴを編集した物で、Ｂ面はスタジオ録音となっている。録音レベルが違うせいかＢ面のスタジオの方が圧倒的に質が高い。ヴォーカルは「Foxfrot」時代のガブリエルの唄法を確実に受け継いでいる。（松尾）
 **DRAGONFLY (Switzerland)** **Dragonfly** LP/Highfly 11982 '82年 近年に数多くの高水準なグループを輩出しているスイス系シンフォニック勢。ここに取りあげたドラゴンフライも、それらの範疇に当てはまるずば抜けた演奏力を持った存在と言えるだろう。Vo. G. B. Key. Dsの５人から成る基本的な編成で、ソリッドかつシャープな切れ味を持ったシンフォニック&ハードなナンバーから、端正な生ピアノの調べに乗った透明かつ清涼感漂うリリカルな曲まで、'82年作という事も考えると、当時において未熟な感が見受けられたブリティッシュ・ポンプ勢もりも、はるかに超越したブリティッシュナイズされたグループではないか。全曲どれもみな素晴しい出来映えだが、やはりＢ面を全曲費した〝Dragonfly〟が圧巻。一作のみ残して消滅するには余りにも惜しいと言えよう。（大関）	 **EDEN** **Erwartung** LP/Lord 33 523 '78年 男性ヴォーカルと２人の女性ヴォーカルを要するEDENの１st。グループ名からも伺えるとおり、やや宗教がかった部分が感じられるが、清廉で美しいメロディーとそのヴォーカル・スタイルはイギリスならさしずめメロウ・キャンドルかスパイロジャイラか？しかし、それ以上に特筆すべきはその演奏力、構成力の確かさで、緻密で、あるときはハードにあるときは美しく劇的に展開する楽曲の素晴らしさはなんとも言い難い。ハードでエッジの効いたギター、滑らかなヴァイオリン、フルート。華麗なキーボード群。そして、ヴォーカル。シンフォニック・ロックがシンフォニック・ロックと呼ばれる理由の全てがここにあると言っても過言では無い。（渡部　暁）
 **EDEN** **Perelandra** LP/Eden Musik EM 20 001 '80年 さらに洗練された２ndアルバム。ハードなギターで始まる冒頭部にビックリさせられるが、ヴォーカルパートになるころにはいつものEDENになっている。前作同様の圧倒的な演奏力はそのままであるが、全体的にインストゥルメンタル・パートが増え、曲の展開がよりスムーズに、個々の楽器を聞かせるパート、あるいは楽器どおしが絡み合うパートが増えている。また、ところどころにかなり意表をつく部分も出てきて、よりプログレ色と言うかシンフォニック・ロック色が強まっている。清廉なヴォーカルと緻密な構成、圧倒的な演奏力、そしてロックの持つ激しさを見事に融合したこのアルバムこそまさにジャーマン・シンフォの金字塔である。EDENを聞かずしてジャーマン・シンフォニックを語ってならない。（渡部　暁）	 **EDEN** **Heimkehr** LP/Eden Musik EM 20 002 '80年 アルバムにも「これはEDENの３rdアルバムでは無い」と記載されているとおり、主に'74年から'76年に録音されていた未発表曲を集めた物である。つまり、１stアルバム以前の作品な訳で、１st、２ndで聞かれるようなあの劇的で緻密な作品を期待してはいけない。とは言え、EDENの持つ楽曲の美しさは充分伺えるわけで、構成が平板な点が若干気になるが、あのEDEN節に魅了された人には最良の贈り物である。とまあ、これも無視は出来ない作品なのではあるが、それは当然先に１st、２ndを聞いてからの話である。あと、彼らはアルバム・ジャケがまた素晴らしい訳で、是非、アルバムを手にとって見てください。（渡部　暁）



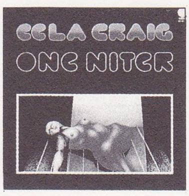
EDEN'S TASTE
Meilensteine
LP/CP 42023　'86年

SFノベルズの挿絵を思わせるカヴァーワークに包まれた、エデンズ・テイストの唯一の作。Vo & Key,G&B, Dsから成るトリオ編成。グループの中心的存在でVo & Keyを担当のMichael Braunは、エニワーズ・ドーターの最終作「Last Tracks」A面でのみ参加していたヴォーカリストだ。音的にも、エニワンズ・ドーター後期の傑作「Neue Sterne」を彷彿させる、所謂現代風プログレッシヴの流れの中に位置するもので、多少ハードで荒削りな面も覗かせるが、ジェネシスやエニドの持つメロディアスかつシンフォニックな要素も備えた、それでいて尚且つ何々風とカテゴライズ出来ない、全く新しいスタイルのサウンド・スペーシーを創造している。洗練された新世代ジャーマン・シンフォニックの優れた好例と言えるだろう。　(大関)



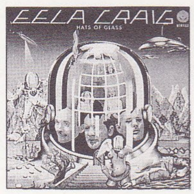
EELA CRAIG (Austria)
Eela Craig
LP/(Aus.)Prodisc 208711　'71年

現在まで存在が明らかにされていなかったイーラ・クライグの幻のファースト・アルバムである。'71年にプロ・ディスクなるレーベルからリリースされたこの作品は、ロールシャッハ・テストを想わす不気味な二ッ折のジャケットに包まれて発表された。'71年というオーストリア・ロックとしては早い時期にすでにこの作品が生み出されていたというのは驚きである。ZuschraderとBognermayrはすでに在籍しており、2作目以降の音とは多少趣を異にする、暗く淀んだ空間である。オルガンを中心にフルートやサックスがメロディを取るプログレッシヴ初期のサウンド。しかし哀愁に満ちており、当時のシーンを想いおこすに足る好盤である。　(山崎)



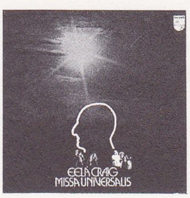
EELA CRAIG
One Niter
LP/Vertigo 6360 635　'76年

Vertigoに移籍しての2ndアルバム。彼らの特徴であるトリプルキーボードを中心とした雄大なサウンドがここに完成している。とにかく、ひたすら空間が広くて雄大である。キーボードの数が多いがそれが塊となってやってくるのでは無く、聞き手の目の前をドンドン奥に広がって行き、透明な空間を形作っている。一部、リズミカルに畳み掛ける部分があるが、全体的に流れがゆったりとしていて世界が大きい。こういう感じは絶対にイギリスからは出てこない、いわゆるヨーロッパ的、大陸的サウンドである。そして、忘れちゃいけないライデルベルガーが泣きのギター、これがまたかっこよく美しい。とくかく、あらゆる意味でシンフォニックであり、ヨーロッパ的なバンド、それがEELA CRAIGである。　(渡部　暁)



EELA CRAIG
Hat Of Glass
LP/Vertigo 6360 638　'77年

新たにリード・ヴォーカリストを迎え制作されたアルバムであるが、基本的な方向性は全く変わっていない。それどころか、新加入のヴォーカリストの歌声がまた透明感溢れる洗練されたもので、まるで最初からEELA CRAIGのために存在していたかのようである。このアルバムと言えば、泣く子も黙る大名曲の1曲目。もうこれに尽きる。他人の曲だってかまわない。徹底的に雄大でクリアかつメロディーが美しく力強いこの曲を聞いて息を飲まないシンフォ・ファンはいないだろう。ヨーロッパの深さが、シンフォニック・ロックの可能性が、全てここに詰まっている。このように完成度の高いこのアルバムであるが、この充実度が次作でさらにトータル・アルバムとして花開く。彼らの快進撃はまだまだ続くのである。　(渡部　暁)



EELA CRAIG
Missa Universalis
LP/(Ger.)Philips 6360 639　'78年

イーラ・クライグの4thアルバムである。「One Niter」以前にもオーストリア本国で発表された自主製作作品が'71年にリリースされている。本作はミサを題材としたトータル・アルバムであるが、荘厳な雰囲気の中にもポップな感覚が見え隠れし、かなり聴き易い音に仕上がっている。彼らの最高作がどれであるかは人によって論の分かれる所であろうが、本作は彼らの持ち味である「透明感のある美しさ」が最も安定した形で発揮された作品といえよう。それにしても、フィードバック奏法を完璧に操るライデルベルガーのギターの美しさには嘆息さえ出てしまう。なお3人のキーボード奏者の内、ボグナーマイヤーとツッシュラーダーの2人はドイツ・テルデックから「Erdenklang」というアルバムを発表している。　(城元)



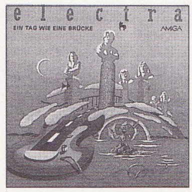
ELECTRA
Adaptionen
LP /Amiga 8 55 501　'?年
CD/Dsb DSB 3198-2

クラッシク・ミュージックをロックに焼き直すという作業は、'70年代に盛んだった。東西を問わない。旧東ドイツの代表的なバンド、エレクトラもそうしたタイプのアルバムを残している。このアルバムは、バッハやモーツァルト、ラフマニノフ、ボロディン等の曲を焼き直したもの。さしずめ、オランダのエクセプション等に相当する。もともとエレクトラはハード・ロックの下地を感じさせるので、ジャーマン・ハード・ロック'70's流にPINK MICEに近いと言ってもいい。全体に軽やかだ。クラシックをポップなアレンジに押し込めたような内容に聴こえる。当時の東側でのロックが許される範囲、もしくはロックのクラシック・コンプレックスを今になって感じさせる程時代は進んでしまった。当時は意欲的な試みだったに違いない。　(松本)



ELECTRA
Die Sixtinische Madonna
CD/DSB 3206-2　'80年

明るくて良い。ドライヴ感溢れる曲調でポジティヴな気分になれる。野暮ったいところがあるものの、サックスやフルートが飛び交い、混声合唱が導入されたLIVEが感動的。LATTE E MIELEもバンド自体の演奏力はズバ抜けているわけでは無いので、ELECTRAの場合も充分OKなのである(笑)。また、スタジオ面(特に"Erinnerung"が秀逸。一緒に歌いましょう(笑))も彼らの魅力が発揮されている。優しく包み込むような浮遊感のあるKey.が味わい深い。旧東ドイツの希望の光であった事がこの作品を聴いていると感じられる。シンフォニック・ファンは勿論、力強いところもあるので、意外にもハード・ロック・ファンの心にもうったえるに違いない。文句無しに素晴らしいアルバム。拍手！　(渋谷)



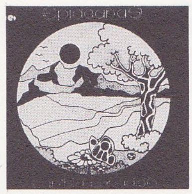
ELECTRA
Ein Tag Wie Ein Brücke
LP/Amiga 8 55809　'81年

旧東独のグループ、ELECTRA。本誌で「Die Sixtinische～」を紹介してから、その後他のいくつかの作品が日本へも入荷した。しかし完成度はいまひとつといったところで、「Die Sixtinische～」を凌ぐ作品はなかった。が、しかし、この作品は、力強くもリリカルな面を備えた好作品で、「Die Sixtinische～」と甲乙付け難いヴォルテイジを持っている。バンドだけの演奏などで派手さこそないが、フルートをリードにした曲や、ドロ臭いフレーズの上に咲く耽美なメロディなどがジワジワと曲想を盛り上げていくのである。旧東独のアミーガ（AMIGA）レーベルにはまだ捜せばいくつかの好作品があるのではあるまいか。ポツポツと発見されるこういった作品を聴くと見知らぬ作品への想いは募る。　(白井)



ELOITERON (Switzerland)
Lost Paradise
LP/Eloiteron LP 4681/01　'81年

サーカス、ブルー・モーション、アイランドといった刺激性の強いバンドに比べ少々小粒との印象は免れないが、正統派のシンフォニックロックとしては水準以上の出来栄えを誇る。メロトロンも去ることながら、ピアノプレイに重きを置いたのは成功だった。特にB面を聴いてみるとその良さが際立つ。acギター、フルートといった割とオーソドックスな要素でそれを巧くサポート、トランペットも要所要所で巧みに立ち回る。ただ、極く一部で変に明るい彩りが施され、若干の迫力不足を感じさせる。なおオリジナルはジャケットの上にニューウェイヴ風にデザインされたモノクロのカヴァーが貼られており、意識的に破かれたドクロの左目の部分から僅かに下地が覗くという面白い趣向になっている。　(江田)



EPIDAURUS
Earthly Paradise
LP /(private press.) E 1004　'77年
CD/RP 12295

'70年代後半のプログレ全盛期に自主制作で発表されたアルバムで、おそらく彼等の唯一の作品であると思われる。ツイン・キーボードでギターレスの5人編成でピアノ、メロトロン、ムーグ、ハモンドに女性ヴォーカルが絡むという絵に書いたような叙情派シンフォニック・ロックの理想形。クレジットには無いがアコースティック・ギターやフルートも登場する。欲を言えば女性ヴォーカルがもうちょっとうまかったらとは思うが、それでもクリスタルな声質のほうだし、'70年代のアナログ・シンセならではの暖かい音色とのマッチングは充分である。ドイツっぽい部分はシンセの音ぐらいで、かえってアクの強さのような部分が欲しい気がする。超一流とは言えないまでも聞き応えが有り、当時の水準の高さを物語る。　(津田)



EPIDERMIS
Genius Of Original Force
LP /Kerston 65063　'77年
CD/WMMS 010

脳味噌のフォトグラフィーを用いた、シュールなイメージが香り漂うカヴァーに包まれたLPからカラフルなCDカヴァーに変更されたエピデルミスの1st.Key.B.そしてリコーダーも兼ねるGとDsの4人編成で、全員がヴォーカルをとるという一風変ったグループは、さしずめ音的にはクセのないジェントル・ジャイアントかバンコといったところか。ある意味では、ドイツ臭さのない洗練された構築美を誇っている硬質のシンフォニック・グループと言えよう。クロス・リズムを生かした曲の構成と展開、強固にまとまってバラツキのない各メンバーのコーラスと演奏テクニック共に、ジャーマン系ということで考慮してみると、申し分のない完成度を持った作品ではないだろうか?彼等はこのあと2ndを発表するが、完全にボルテージは落ちてしまっている。　(大関)



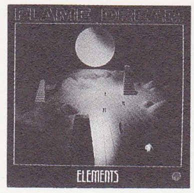
EVERON
Paradoxes
CD/Si Music Simply 26　'93年
/Zero Corporation XRCN-1091

QUEENSRŸCHEやDREAM THEATERのブレイクを契機に、プログレ・ハード的音楽性を持ったバンドが数多く登場しているが、中でも欧州勢の筆頭に挙げられるのがこのEVERONではないだろうか。RUSH SAGA KANSAS等様々な影響関係が憶測できるが、結果としてある音はどれのコピーという訳でもない。そうした北米のバンドに通じる大らかさに加え、欧州ならではの細やかさと透明感。プロデュースを手掛けたEROCとはGROBSCHNITTのエロックだろう。現在むしろプロデューサーとして著名なELOYのF・ボーネマンといい、話題のオランダ人キーボーディスト、ロビー・ヴァレンタインのセカンドに共同プロデューサーとして名を連ねた元KAYAKのP・クープマンといい、何か時の流れと循環を感じさせる。　(髙山)



FLAME DREAM (Switzerland)
Calatea
LP/Philips 6326 067 '78年

スイスを代表するテクニカル・シンフォニック・グループ、FLAME DREAM、'79年の1stアルバムである。トータル・コンセプトアルバムであり、架空の地であるCLATEAをテーマにしている。一部、どこかで聞いたようなフレーズがあるものの、すでにこのデビューアルバムからバンドのキャラクターが確立されている。ベストは2nd、3rdだと思うが、それに比較するとやや素朴な出来と言えよう。また、構成面で意余って力足らずの感も有る。このバンドの持ち味であるスリリングな曲展開と、スピード感あふれるプレイの格好良さはやはり2nd、3rdの方が良いが、それでも抜けきった青空のような音とキーボードの音色はこのバンドの持ち味であり、凡庸なシンフォニック・ロックとは一線を画する。YESファンにお薦めする。　（野呂）



FLAME DREAM
Elements
LP/Vertigo 6326976 '79年

スイスのテクニカル・シンフォニック集団、フレイム・ドリーム。本作品は彼等の2ndである。前作の1st「Calatea」においては曲作りのアイデイア等が先行していて、水準的にも今一歩の感が見受けられたが、それなりに聴き処を持った仲々の好作品でもあった。発表後にギターが抜け、KeyをメインにVo & Sax•Fl, B, Dsの4人で製作された、この「Elements」では、手法と方法論は前作と同じ傾向ではあるが、構成や展開•テクニック的には一段と向上しており、スイスの広大な自然と国土を彷彿させるかの様に印象付ける。クリアーかつ壮厳な演奏が聴き物、仲でも流麗なキーボード群とサックス、フルートとのからみは特筆すべきところ。グループは本作以降、親しみのあるポップ風な音へと移行していった。　（大関）



FLAME DREAM
Out In The Dark
LP/Vertigo 6367 016 '80年

6枚のアルバムをリリースしているフレイム・ドリームは高水準の作品の多いスイスの中でも秀れたシンフォニックを演奏しているグループである。ファーストは荒削りながら、後の成長を予見させるに足る作品であり、彼等が最も高いヴォルテイジを保つのはセカンドからこのサードアルバムに到る時期である。フォース以降は最新のイクウィップメイト、録音技術を導入しながら徐々にポップに平板になっていくが、どれも一聴には値する作品だと信じる。一方、セカンドとサードは甲乙付け難く、水準の高い演奏技術、特にローランド・ルックストゥールのキーボードのセンスの光る現代的イディオムを持つプレイを中心として素晴らしいシンフォニック・ロックを披露してくれる。テクニックもさることながら構成力も見事だ。　（山崎）



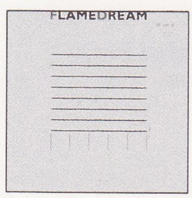
FLAME DREAM
Supervision
LP/Vertigo 6435 144 '82年

「スイスのイングランド」FLAME DREAM、またまたギタリストが抜け4人に戻っての4th.まあベースの人がそこそこ弾けるからわざわざギタリストに給料やらんでもええんだろう、という辺も含めて同時期のジェネシスと軌を一にするポップ転身路費の一作目。と言うことは、今見直されても良い作品という事でもある。ビートよろしいA①こそ産業ロックしているが、一転牧歌的なA②以降は、前作までのような大上段シンフォではないもののポップながらもアレンジには従来の味を残した佳曲が並んでいる。最後の3パートからなる組曲〝Paradise Lost〟は特に、リズムやキーボードの見せ場、緩急豊かな展開もしっかり味わえる。'80年代前半のプログレを許せる人に。　（村本）



FLAME DREAM
Travaganza
LP/Vertigo 6435 197 '83年

さらにポップに、さらに短曲揃いになった5th。フェアライト、シモンズの導入がよりメカニカルな印象を与え、それがバンドの持ち味を活かす方向に作用している。ソロやこれみよがしなプログレ風展開は後退しているのだが、メロディーとアレンジの良さは健在なので、前作が気に入った人なら多分OK。A①は前作に続きリズミック、だがマイナー調の暗い曲（〝Mama〟と同年）で、オーケストラ・ヒットなんて出る（〝Lonely Heart〟と同年）、A③曲中でPlaying The Foolなんて言葉が出てくるのは未練かな？ラストB⑤はこれまた〝Mama〟かはたまた〝Intruder〟か、という感じで異形。そうそう、ヴォーカルはフィルコリ似です。部分コーティングを施したジャケは、目の高さで水平にして光に当ててみよう。　（村本）



FLAME DREAM
8 On 6
LP/Vertigo LP 826 905-1 '?年

'78年リリースされた「Calatea」から数えて通算6枚目。4th「Supervision」あたりからのポップ性は、5th「Travaganza」では未だ未消化の感があり、あまり良い出来とはいえなかったのであるが、この作品では、昔のイメージを払拭し、見事な変貌を遂げたのである。ちょうどジェネシスが、現在のスタイルにおちついたようにである。もちろんここにはポップなナンバーが収められている。しかし、それらは非凡なテクニック、センス、エンジニアリング、あるいはジャケット・ワークで極上のプログレッシヴ・ポップスとでもいうべきものに仕上げられている。サンプリングをうまく使用したキーボーダー、ローランド•Rのセンスも昔のように早弾きこそしていないが素晴らしい。自信を持っておすすめします。　（山崎）



FÜHRS & FRÖHLING (Switzerland)
Ammerland
LP /Brain 0060.105 '78年
CD/Brain 511 978-2

驚異のテクニカル・キーボード・トリオSFFのメンバーであったフュアースとフレーニングがSFF解散後に結成したデュオ形態のユニット。アコースティック・ギターにメロトロン、ムーグ等のキーボード類を絡ませたメロディアスでたおやかな音作りはドラムレスということも手伝って「静」のイメージを強く与える。「動」のSFFとは一見対極に位置するようにも思えるが、テクニックや構成力と並ぶSFFの核であった「ヒューマンさ」をより一層発展させたものと受け取ることもできる。このアプローチは本一作目においてすでに確立されており、ピュアな音色のアコ・ギと暖か味のあるフレーズのシンセが聴き手に心地良い安らぎをもたらす。続いて同傾向の「Strings」('79年)、「Diary」('81年) をリリースした。　(内田)



GALAAD (Switzerland)
Premier Fevrier
CD/(Fr.)Musea FGBG 4070 '92年

スイスは仏語国出身の新人と思われる。ヴォーカル・スタイルといい、せわしない曲展開といい、典型的なポンプ・サウンドのバンドである。12分近い大曲を破綻なく聴かせる力量は認めてもよかろう。特にキーボード奏者の表現力豊かなプレイは、R・ウェイクマンのセンスに近いものもあり、多くの聴きどころを提供している。だが、いかんせんこのタイプのバンドに対する飽食感は拭いがたく、際立った楽曲、極端な演奏力を提示されなければリスナーの称賛は得られないように思う。メンバーはC・Decamps, Pendragonに謝辞を送っている。　(ミワ)



GANDALF (Austria)
Journey To An Imaginary Land
LP /WEA 58 258 '80年
CD/WEA 2292-44890-2

'80年にデビュー、以後現在に至るまでに良質の作品を発表し続けているオーストリアのマルチ・シンフォニック・クリエイター、ガンダルフの記念すべきファースト・アルバム。シンセ群や各種ギターをはじめとする多彩な楽器群を重ね合わせてファンタジック・ワールドを作り上げるという方法論は本作において既に確立しており、アルバム構成の面では未だ発展途上の段階であるものの、心安らぐ叙情派のシンフォニック・サウンドを満喫できる。シンセの多用とメディテイショナルな雰囲気から当時は「エレクトロニクス系」に分類されたこともあったが、本人自らも語るようにやっていることは紛れもないシンフォニック・ロックである。シンセよりもギター・プレイの方に彼のプレイヤーとしての本質を感じる。　(内田)



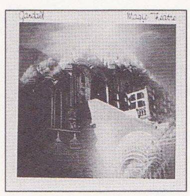
GANDALF
Visions
LP /WEA 58 389 '82年
CD/WEA 2292-44891-2

後に重要なパートナーとなるフルート奏者ロバート・ユリアン・ホルキー及びタブラ奏者をゲストに迎えて作られたセカンド・アルバム。前作を同じくのどかでピースフルな雰囲気が満ち満ちているが、作品としてのまとまりという点では着実なスケール・アップを呈示している。12弦ギターによる「空間作り」も格段に上手くなっており (エレクトリックの奏法を含め、スティーヴ・ハケットからの強い影響が窺える)、持ち前のファンタジックな曲想に彩を添える。また本作独自のカラーともいえるタブラとシタールが引き出す東洋的な響きは何ともいえず心地良い。題材はトールキンの「指輪物語」から取っており、各テーマを小曲のブリツジで絶妙につなぎ、アルバム全体にトータル性を持たせている。　(内田)



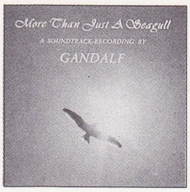
GANDALF
To Another Horizon
LP /WEA 240074-1 '83年
CD/WEA 2292-40074-2

テクニック、作曲能力において前2作から飛躍的な進歩を見せつけた3作目。継続参加のロバート・ユリアン・ホルキーに加え、新たに専任のゲスト・プレイヤーによるリズム・セクションを導入することでシンフォニック・ロックとしての体裁が増したのが勝因だろう。「自然破壊」等の警告的なテーマをはらんだ自作のファンタジーがモチーフになっており、そのせいかこれまでののどかな雰囲気とは毛色の異なるシリアス性が曲の中に見え隠れしている。特に1〜2曲目の息をもつかせぬ展開は圧巻だ。ストーリーがハッピー・エンドに終わるせいか後半に明るめの曲が連発するのが個人的には多少不満ではあるが、これは彼のユートピア志向を反映したものとしてまあ納得がいく。初期の代表作と見る向きも多い。　(内田)



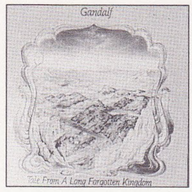
GANDALF
Magic Theater
LP /WEA 24 0293 '83年
CD/WEA 2292-40293-2

前作の進歩ぶりがあまりに著しかったせいかさほど話題にはならなかったが、この4作目も前作と同一路線のシリアス性を帯びた力作であり、ヴォルテイジでは全くヒケを取らない。どころか、作曲、技術面ではさらなる向上点をそこかしこに見い出すことができる。今回は「迷宮」をテーマにその中の架空世界を「7つの扉」になぞらえて描写する形を取っており (ゲーム世代にはあり来たりの題材かもね)、とりわけ13分に及ぶ「第2の扉：砂の城」は出せるポテンシャル総べてを集約した秀曲といえる。ゲスト・プレイヤー (この人凄い！) による中間部のピアノ・ソロが決め手だが、以前からピアノの腕には多少の問題があったことを考えれば (ギターリスト出身のためか？) まさに適在適所の選択である。　(内田)



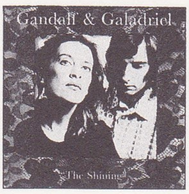
GANDALF
More Than Just A Seagull
LP /Seagull 041252-1 '83年
CD/Seagull 041252-2

ウィーンで行われたアート・パーフォーマンス・イベント、「カモメのジョナサン」のためのサウンド・トラックとして'83年に制作され、自身のプライベート・レーベルよりリリースされたもの。19分に及ぶ1曲目をはじめとしてこれまでになく長大なナンバーが並んでいるが、サントラという性質上「流れに身を任せて」聴くタイプの曲で占められており、シンフォニック系大作でのウリとなるような「曲構成の妙」とは全く無縁である。その意味では同時に並行して作られた「Magic Theater」とは対極に位置するものといえよう。アコースティック・ギターを延々とつま弾くパーツなどは私的要素が極めて強く、アンソニー・フィリップスのプライベート連作を想起させる（だからこその自主リリースか)。 (内田)



GANDALF
Tale From Long Forgotten Kingdom
LP /WEA 240 544-1 '84年
CD/WEA 2292-40544-2

美しい色合いのジャケットが示す通り、ファンタジーの原点に立ち戻った感の強い6作目。「遠い昔に忘れ去られた理想の王国を求めて旅する人々の物語」というバック・ストーリーは彼持ち前のユートピア志向がストレートに現れたものとなっており、その性質上シリアス性よりは初期作で見られていたピースフルなムードが全編を覆う。近作において際立っていた作曲能力や演奏技術の向上は本作でも見事に実を結び、トータル・アルバムとしての完成度という点では頂点を極めたといってよいだろう。アコースティック・ギターの流れるような律べは聴き手に静かな感動と安らぎを与えてくれる。ファンタジー系の某有名女流漫画家が愛聴盤として当時本作を挙げていたこともあった。 (内田)



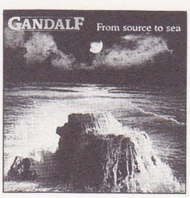
GANDALF&GALADRIEL
The Shinning
LP /Seagull 041254-1 '86年
CD/Seagull 041254-2

連名でクレジットされている「ガラドリエル」（ガンダルフと同じくトールキンの「指輪物語」のキャラクターから名前を取っている）とは前作「Tale From〜」で1曲のみスキャットを担当していた女性シンガー、ピッパ・アームストロングのことである。これまでのストーリー・テリング路線とはやや趣向が異なり、ガラドリエルの伸びやかで透き通ったヴォイスも大体的にフィーチュアした「うたもの」的なアルバムである。多少ポップな感じもしないではないが、バッキングはあの「ガンダルフ節」がガッチリと固めており、慈愛豊かな彼女のヴォーカル・パートを十二分に引き立てている。マイク・オールドフィールドでいうなら「ディスカバリー」的な存在か。この手の女性ヴォーカルものとしては最高品質。 (内田)



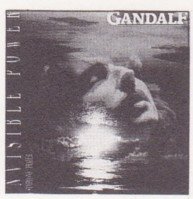
GANDALF
Universal Play
LP /CBS 450372-1 '87年
CD/CBS 450372 2

CBSに移籍しての8作目。スティーヴ・ライヒやフィリップ・グラスに代表されるミニマル・ミュージックの影響が大きく芽生えはじめており、コンピューター・インストゥルメンツの初導入も手伝ってこれまでの「手づくり」的なイメージは大幅に薄れた。シンセ類もシーケンサー的な使用法が目立ち、シンフォニック・ロックというよりは当時ブームとなっていたプライヴェート・ミュージックの一連の作品やシネマ・レーベルにおけるパトリック・モラーツのソロ作といった、いわゆる「ニュー・エイジ・ミュージック」との接点が強く感じられる。従来のアコースティックでファンタジックなムードが後退したためファンの間では人気の低い作品だが、この手法は次作以降で一気に開花していくことになる。 (内田)



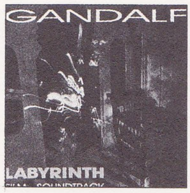
GANDALF
From Source To Sea
LP /CBS 461026-1 '88年
CD/CBS 401026 2

CBS第2弾。生命の起源である「海」をテーマにしたトータル・アルバムで、前作と同じくミニマル・ミュージック的な手法を多用してはいるものの、今回はアコースティック・パーツを強化することによりドライなムードは一掃されている（前作の「宇宙」というテーマは多少安易だったか？)。デビュー以来のナチュラルで心暖まるメロディがキラキラしたコンクレート風シンセと程良く溶け合い、抜群のカタルシス効果（やはりこの人の本質はコレだわ）をもたらす。また打ち込みリズムも曲のダイナミズムを引き出すのに一役買っており、特に1曲目後半で見られるドラマチックな盛り上がりぶりにはハッとさせられる（これまでにはなかったタイプのメリハリのある曲だ)。 (内田)



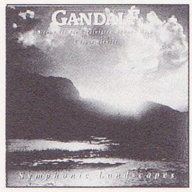
GANDALF
Invisible Power
LP /CBS 465941-1 '89年
CD/CBS 465941 2

プロ活動10年目の節目に出された本作はミニマル・シンフォニック・路線と初期のファンタジック色が理想的な形で合体した一大傑作となった。〝Symphonic Prayer〟という思わせぶりな副題をもつこの作品は5つのムーブメントから成る50分余の超大曲となっているが、作曲面においては気ままなイメージのあった彼からは想像できないほどの細心な配慮がなされており、冗長さはまるでない。何よりもスケールの大きな曲想と楽曲のテンションの高さに驚かされる。ギター・パートの充実ぶりには目を見張るものがあり、ダイナミックなエレクトリック・ギターとナイーヴな響きのアコースティック・ギターの絶妙な使い分けによる静と動の対比は、かの「オマドーン」に匹敵するほどの高揚感をもたらす。 (内田)



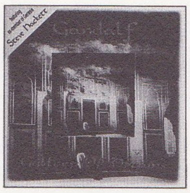
GANDALF
Labyrinth
LP /Seagull 041257-1　'90年
CD/Seagull 041257-2

　オーストリア本国で上映された同名の前衛映画のために制作されたサウンド・トラック集。「Universal Play」で見られたシンセ系ドライ路線を更にのっぺりさせたかのような作風で（ギター・パーツもほとんど機能していない）、全体として小粒であるという感は否めない。同じサントラといっても、あの「More Than Just A Seagull」で強く出ていたミュージシャンとしての「我」のようなものはほとんど感じられず、どこかノルマで作ったかのような息苦しさの残るアルバムだ(制作上でかなりの制約を受けたのかもしれない)。まあこの類の音楽は映像と抱き合わせで語るべきものだから、音だけでの評価は必ずしも正当とはいえないだろうが、「Invisible Power」の後だけになおさら印象が薄い。　（内田）



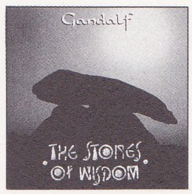
GANDALF
Symphonic Landscapes
LP /CBS 466990-1　'90年
CD/CBS 466990 2

　傑作「Invisible Power」の後を受け、その翌年に作られたオーケストラとの共演盤。「オーケストラ・アルバムを作る」ということがシンフォニック系アーティストの究極的な「夢」であることを考えれば、前作からまた一歩進化したといえるだろう。彼自身のキーボードやギターが壮大なストリングスに違和感なく溶け込み（アコースティック・ギターとの調和が素晴しい）、ナチュラルでヒューマンな「ガンダルフ・サウンド」が新たなテイストを伴って迫ってくる。「チューブラー・ベルズ」のオーケストラ版のような原曲の強烈なイメージに由来するギクシャク感はなく、のどかな雰囲気は従来の彼のイメージを全く損っていない。楽曲としてのテンションは前作に譲るが、完成度では全く遜色ない。　（内田）



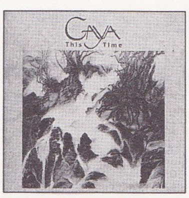
GANDALF
Gallery Of Dreams
CD/Columbia 471064-10　'92年

　持てる力の全てを出し尽くした感のあった前作から約２年のインターバルを置いてリリースされた本作は、何と彼の決定的なプロト・ギタリストの一人であったスティーヴ・ハケットの全面参加を得て制作された。エレクトリック・ギターのバトルからアコースティック・ギターのデュオに至るまで、ハケット独特の「アジ」を自分自身のカラーに取り込んでいるのは見事である。スタイル面で共通する部分の多い両者の間に生じる微妙な個性の「ズレ」が単なる足し算を越えた相乗効果を引き出しているのは面白い。また数曲では現ストレンジャーズ・オン・ア・トレインのトレーシー・ヒッチングスが魅惑的なヴォイスを披露してくれる。ストレートなロック色が出て来た点は結果的にプラスであったと思う。　（内田）



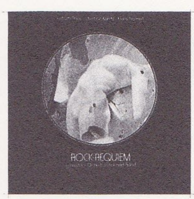
GANDALF
The Stone Of Wisdom
CD/Columbia 472729-2　'92年

　アイリッシュ系の作家ロナルド・P・ヴォーハンの小説、「賢者の石」にインスパイアされて作られた76分の大作。ここ数作の「動」から一転した非常に静的なイメージの強い作風で、ミニマル的なアプローチもほとんど感じられない。最初期のドリーミーなファンタジック路線に立ち戻っていると言ってもよいだろう。題材を「ケトル」から取っているためウーリアン・パイプを使用したり、プログラミングによるパーカッションのパターンをアイリッシュ・ボーランに似せている箇所等も見受けられる。その使用法は意外と的を得ており、彼のケトル音楽に対する熱心な研究ぶりを窺い知ることができる。マンネリズムの波にもめげず次々と新たな方向性を呈示し続ける彼の貪欲な姿勢にはほとほと頭が下がる思いだ。　（内田）



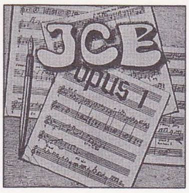
GAYA（Austria）
This Time
CD/Momo MMR 01314　'92年

　オーストリアのGANDALFと多くの共通点の見い出せるアルバム。中心人物のアルバン・ガヤという人は、ウィーンとシュトゥットガルトで美術を学んでいたとのことで、このカヴァーも彼自身が描いている。管楽器の使用もあるが、あくまでも彼のシンセサイザーやギターが中心。透明感の強い俗に言うマインド・ミュージックと呼べるサウンドなのは、想像のできるところ。もう一歩、音の響きや音色に感覚的な切れが欲しい気もするが、古代ギリシャの女神〝Gaya〟から名前をとっているとおり、物語情緒に寄った指向の持主のようだ。　（松本）



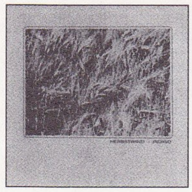
GUNTRAM PAULI, CHRISTIAN KABITZ, KLAUS HAIMERL
Rock-Requiem
LP/Jupiter 6.28639　'?年

　「ロック・レイクエム」と題されたこの２枚組は、'70年代後半に制作されたものである。亡き彼等の友人ローター・トーランドに捧げられたものでg、kbd、ds、b、voというバンド編成の他にオーケストラ、合唱隊を加え、さらに多彩なゲスト（ソロ・ヴァイオリン、パイプオルガンetc）を迎えて完成した力作である。個々のアーティストの持つ技術的レヴェルはかなりな水準に達しているし、オーケストラ・アレンジも十分に堂に入っている。ただバンド演奏の部分とオーケストラの部分の融合がいまひとつスムーズに感じられないのが難点である。ドイツ・シンフォニック・ロックの良質なサンプルとしてあげておく。　（山崎）



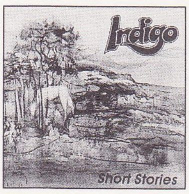
ICE
Opus I
LP /Time Records　'80年
CD/Penner CD 002

アイスはドラムス、ギター、ベース&ヴオーカルの3人から成るグループである。CDのインサートによると'70年代の中頃に結成され、ドイツ各地で300回以上のライヴを行ったらしい。レコードとしてはシングルとLPを1枚ずつ残しており、LPはコレクターズ・アイテムとして500マルク近い値段が付いているとのことである。本作品はそのLPをCD化したものである。本人達はプログレッシヴ・ロック・グループと思っているらしいがサウンドから受ける印象はシンフォニック・ロックの要素を多少持ったメロディアスなロックである。
（賀川）



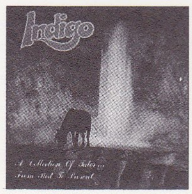
INDIGO（Austria）
Herbstwind
LP /SSU 828　'80年

'77年にデビューしたインディゴは計6枚の作品を残しているが初期では本3rdアルバムが最も完成された内容となっている。シンセ系を中心にキーボード群を前面に押し出した典型的なシンフォニックサウンド。若干新しめの音作りは今一つ押しの強さが足りない感じもするが、清澄度のレベルは常に一定に保たれ、確固たる演奏技術に裏打ちされた味のある演奏が展開される。第二の主役はシンセ音に追随して時にソロを取るギター。A③、B④ではユニゾンやオルガンとのコンビによる若干ヘヴィで泥臭いプレイを披露し、全体の流れに適度なメリハリをつけている。なおグループはダブルキーボードの4人編成。本作ではReinhart Kunstmannなるベーシストがゲスト参加している。
（江田）



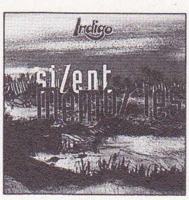
INDIGO
Short Stories
CD/（Aus.）Indigo Music ICD 30.001　'91年

オーストリアのINDIGO（すなわちKYRIE ELEISONのキーボードの後のグループ）が久々にニュー・アルバムを発表した。が、これは余り良くなかった。ドイツ人の良く言う、〝ソフィスティケイティッド・プログ・ロック〟っていうタイプで、リズムが軽く、ポップになったシンフォ系のイメージのことだが、すべてにおいてどっちつかず、何をやるにもイディオム不足という感じなのである。結構、素性の良いラインはあるのだから、まとめ方の過程に問題があるのだろう。聴いていると、部分的に気を惹く部分もあるので非常に残念だ。
（山崎）



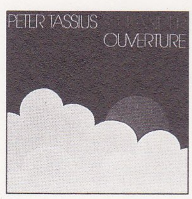
INDIGO
A Collection Of Tales......From Past To Present
CD/（Aus.）Indigo Music ICD 30.003
'92年

デビュウ当時KYRIE ELEISONのメンバーが参加していることで話題となったINDIGO。彼らは'83年にアルバム「Indigo」でレコード・デビュウ、その後、8年のブランクを置いて'91年にセカンド・アルバム「Short Stories」をリリースしている。本CDはファーストから5曲、セカンドから3曲、そして、'85年のウィーンでのライブ3曲(未発表)を収めたオムニバス盤である。キーボードを中心としたシンプルながらもリリカルな演奏も聴くことが出来るが、全体としての印象はややポップかつ明るめでさらっとしたものになっている。
（賀川）



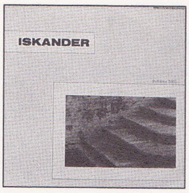
INDIGO
Silent Memories
CD/（Aus.）Indigo Music ICD 30.004
'93年

INDIGOはその前身KYRIE ELEISONの時代から数えると、オーストリアで最も息の長いシンフォニック・ロック・バンドかもしれない。思えば、常に自主製作に甘んじてきたが、全体を聴き通せば、それはむしろ当然という気がする。K ELEISONの頃から彼等は憧れが強過ぎたのかコピーまがいだった。近作は随分とポップに洗練された音楽を目指したが、それも今一つ抜けがない。今回はそんな中で最も明解になっている。なぜなら中心人物のkbd奏者の実質的なソロ・アルバムになって、サウンド・カラーと方向性が一本に集約されているからだ。どれも複雑な曲調をさけたかのようなメロディックなナンバーが並ぶ。一本調子だが以前よりも親しみやすい。録音状態がクリアーなのもいい。
（松本）



PETER TASSIUS & ISKANDER
Ouverture
LP/（private press）SST 010581　'81年

Peter Tassiusと言うクラシック系のピアノ奏者と組んだ1st。全曲Peter Tassiusの作曲でISKANDERの演奏はB面のみに収録されている。A面はPeter Tassiusのピアノ・ソロで完全にクラシック畑の物。彼のきれいかつ華麗なタッチのピアノが美しく響き渡る。B面もPeterの作品だが、ISKANDERが加わり、いわゆるシンフォニック・ロック的な構成の作品となっている。いやいや、泣きのギターにゆったりとしたキーボードと、他人の曲であろうとこれは完全にISKANDERそのものである。このようにA、B面ともかなり毛色の違う内容であるが、実は両面ともそれほど違和感は無いんだよね。シンフォ・ロックとクラシックって実は結構良く合うのかもしれない。
（渡部　暁）



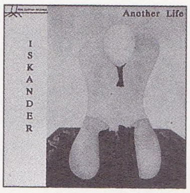
ISKANDER
Bohème 2000
LP /Herkules ETST 027 '82年
CD/Iron Curtain ETST 027-2

イスカンダーというグループのファースト・アルバムは'81年にリリースされた「Ouverture」(ST/PR 010581) で、本作はセカンドである。どちらも甲乙付け難い出来なのだが、このセカンドを選んでみた。この作品は劇場用に作曲されたもので、オリジナル・ヴァージョンを縮めて創られたのがこのLP (完全版はテープのみ発表、後にCD化) である。甘美でメロディアスなリード・ギターにプロフェットの独特な、厚みのあるストリングス。静寂の中に響き渡るフルートの調べ。冷たい、さわると手の切れるような音空間。計算されたサウンド・スカルプチュア。それらが織り成す調べは、端正で悲しく、時に暖かいタピストリー、すべてのナンバーを順に聴いていくと遠い夢幻の国々へと体がすいよせられていくかのようだ。(山崎)



ISKANDER
Mental Touch
LP /Iron Curtain ETST 058 '87年
CD/Iron Curtain ETST 058-2

'82年の 2 nd以来 5 年ぶりの新作で、ギターのMartin Firnissが抜けて、フルート奏者とヴォーカリストが新しく参加している。ようやく方向性が固まってきたようでアルバム全体を通しての協調性が感じられてきた。程よい甘さと、一枚ベールを被ったような淡い色調のシンフォニック・ロックで、ANYONE'S DAUGHTERを更におとなしくしたような感じであるがジェネシスっぽさも出てきた。ドラムスが相変わらず難点 (音、リズム共に) で、それを自覚してかどうかリズミックな展開の入らない曲が多いので、ともするとダラダラしている印象もあるのだが、1曲ごとの単体で評価すれば、彼等独特の魅力と言えないこともないだろう。日曜の朝にボーッとしながら聴く分には良いと思う。(津田)



ISKANDER
Another Life
LP /Iron Curtain 067-1 '90年
CD/Iron Curtain 067-2

前作で参加したフルートとヴォーカルはそれぞれ 1 曲しか参加してなくて、バンド自体は 4 人編成プラスlive engineerという構成になって居る。しかし、曲によってヴォーカルが変わると言うこと以外に目だって変化した部分はないように思う。ただ、アンサンブルは進歩していて、ようやく一人前になったと言うところだろうか。前作まで気になったリズムの甘さも解消されつつあるし、余計な心配をしないで曲に入り込めるようになった。CAMELやANYONE'S DAUGHTERのようなエッセンスはそのままなのだが、Michael Pichmannのとるヴォーカルが妙にブライアン・イーノを思わせて面白い。それにしても相変わらず同じ様なテンポの曲が並んでいて、ヴァリエーションに乏しいが、曲の水準は高くなっている。(津田)



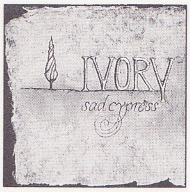
ISLAND (Switzerland)
Pictures
LP/Round 01001 '77年

アイランドはスイスのグループである。'77年にイタリアのリコルディ・スタジオで録音された本アルバムのプロデュースにはアクア・フラジーレ等をてがけたクラウディオ・ファビが起用されている。ペーター・シェラーというマルチ・キーボード・プレイヤーを中心とする 4 人編成だが、ヴォーカル、ドラムス、サックス・フルート・クラリネット、キーボードというかなり変則的なものでベースはペーターがペダル・ベースで代用している。変拍子を伴う驚異的な曲進行はアヴァンギャルド・ロックとシンフォニック・ロックの融合という極めて特異な位置にあるもので、表現主義派のロックとしては最も先鋭的な存在である。ユニヴェル・ゼロのミスティシズムとSFFの構築美をかねそなえていると想えばよい。(山崎)



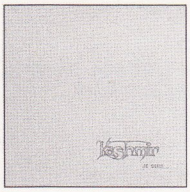
IVIRON
Iviron
LP/Silent Sun SS 7103 '81年

突然変異的作品。12人のメンバー中、ギター、ベースを除くと使用されている電気楽器はメロトロンのみ。純然たるジャズ、純粋アイリッシュ・トラッド、密度の高いチェンバー・ロック、中近東音楽、ファンキーなロックなどが、あるときは独立して、あるときは複合的に展開していく。しかもそのすべてが非常に高純度であり、混沌としたイメージやおふざけ感覚はまるでない。氷のように冷徹である。特に、ところどころで斬り込んでくる純声楽的女性スキャットが秀逸。最終曲では、スキャットの掛け合いからサックス、フルートが盛り上げ、メロトロンでしめくくるという非常にシンフォニックな展開が見られる。北欧はサムラー派よりもプロの臭いが強い。筆者は'80年代ジャーマンの金字塔と見るがどうか。(ミワ)



IVORY
Sad Cypress
LP /Jupiter 202 428 367 '80年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4089

クラシックの指揮者がYESのコンサートへ行って、感動して息子と一緒に作ってしまったバンド、IVORYの唯一のアルバム。初期～中期GENESISを地味にしたような作風で、分厚いキーボードやテクニカルなギターソロといった派手な音作りや、ハードロック的な荒々しさは無い。しかし、ジャケットの絵から受けるイメージ通り、しっとりとした上質の絹のような、端正な落ち着きのある作品となっている。また、ドイツのバンドらしからぬ王道ブリティッシュの香りもあり、ドイツという枠を外しても十分以上のクオリティーを持っている。キーパーソンの出自ゆえか、メロディーやアレンジ、曲の展開などもナチュラルで無理なく、美しい。数あるGENESISフォロワーの中でも最も好ましいもののうちの一つ。(野呂)



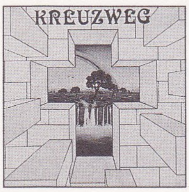
KASHMIR (Switzerland)
Je Suis ...
LP/(Swi.)Disques DL 3300　'79年

カシミールのファースト・アルバムである。スイス国内で自主製作（２つ折ジャケットで、内側にロジャー・ディーン風の夢幻的なイラストが描かれている）された後、ドイツ及びフランス・プレスがジャケット違いの「Alarm！」のタイトルでリリースされた。全てのキーボード類を操るP.GuenatとドラムスのH.Dubellyのユニットで、曲想に多少のバラつきはあるものの、メロトロンを始めとした多種のキーボード群によるシンフォニックな音造りが彼等の持ち味である。生のオーケストラを導入したりして極めて意欲的な作品で、ところどころに荒さが目立つものの、音楽に対する姿勢は純粋なものが感じられ、好感が持てる。初々しさと夢幻性という、プログレッシヴの大切な一ファクターを持つグループとして紹介したい。（山崎）



KASHMIR
Histoire Cruelle
LP/(Swi.)Kobold KOLP 949　'82年

唯一のアルバムをリリースして消えたと考えられていたが、実はスイス本国でひっそりとセカンド・アルバムが創られていた。前作同様P.GuenatとH.Dubellyのオリジナル・メンバーは変化なく、他にドラムス、フルート、ヴァイオリン、ギターetcと計10人のバック・ミュージシャンが参加している。トータルとしての叙情性は前作のほうが強いが、このアルバムでは演奏技術、センス、録音テクニックについて明らかに進歩がみられる。特にそれはA面ラストの曲に顕著で、ここでは叙情性すらも前作を上回っているかのようである。ただ全部を通して聴くと、シンフォニックという見地からのみ考えれば物足りないことも事実だ。どちらの作品を好みとするかは個人レヴェルでの問題であろう。（山崎）



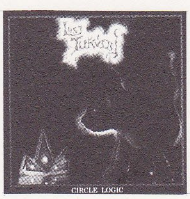
KREUZWEG
Krenzweg
LP/Pila LP 20212　'83年

壁にあけられた十字架を象った隙間。表ジャケットではその向こうに虹のかかったアルカイックな光景が、そして裏ジャケットでは公害や核戦争で汚染され、荒廃した同じ土地が描かれている。〝十字路〟あるいは宗教上ではキリストの受難の道を意味するグループ名共々、本作には人類への警鐘が込められていると言って良いだろう。専任シンガー、ツイン・キーボードを含む６人編成に更にゲストとして管奏者ともう一人キーボーディストが名を連ねている。制作年を10年遡るNOVALISやFAITHFUL BREATHの初期作品とも響き合うドイツ語によるヴォーカルが醸し出す情感は、ドイツ的な内面に沈潜する信仰心故だろうか。Ｂ面、サックスとオルガンが絡む場面は「核融合」辺りのVDGGをも想わせる。（高山）



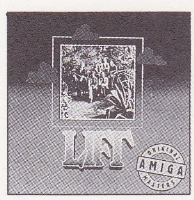
KYRIE ELEISON (Austria)
The Fountain Beyond The Sunrise
LP/(Aus.)Merlin 001277　'76年
CD/(Aus.)Indigo Music ICD 30.002

'76年にオーストリアで限定200枚、自主製作されたキリエ・エレイソン唯一のアルバム。初期のジェネシスすなわちナースリー・クライム、フォックストロット時代からの強い影響下にあるサウンドを有している。メロトロン、ハモンド・オルガン、アコースティック・ピアノ等キーボード群を中心に複雑にからみ合う曲創りのセンスの良さが大きな魅力といえる。ただ残念なことに録音状態が非常に悪く、音が割れてしまっている。いかにも自主製作らしく、観音開きに作られた歌詞カードが添えられている。ギター、キーボード、ドラムス、ベース、ボーカルの５人編成で、ライヴ時にはライティング・スタッフが加わっていた様である。（山崎）



LAST TURION
Cirele Logic
CD/Jumbo CD JU 0501　'92年

LAST TURIONは1992年という比較的近年にデビューアルバムである本作をリリースしたドイツの新進バンド。そのアルバムで聞かれるサウンドは基本的にはポンプロックムーブメント以降のバンドの共通項ともいえるGENESIS風の雰囲気を漂わせるものだが、彼らの場合はメンバーの嗜好が（ブックレットのメンバー写真を見ても伺える？）それ以外にも及んでいるようで、その為、結果的に従来のポンプバンドより頭一つ抜きんでた聞き応えのある作品を作り上げられたようである。それ以外の嗜好というのは聞けば解る通りHMからの影響で、これによりこの作品にはスピーディーさやドライブ感が備わっており、シンフォニックでありながらも野暮ったくなく、静と動が見事に表現されたものとなっているのである。（島村）



LIFT
Lift
LP/Amiga 8.55-550　'77年
CD/DSB 3104-2

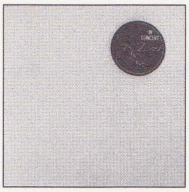
旧東ドイツのシンフォニック・バンド、リフトはギターレスの変則６人編成。'77年に発表された本作はメロトロンが効果的に使われるなど聴き応えのある内容になっている。冒頭から暫くはややポップなフレーズを交えながらほのぼのとしたムードで進むが、Ａ③になって華麗なピアノのイントロと共にメロトロンが参入。Ｂ面に入ると更に佳曲が続く様になる。優しいフルートの音も所々で登場。メロトロンの効用としては短いながらも柔らかいタッチで仕上げたＢ②、オルガンと併用し叙情的な盛上げが最高潮に達するＢ④等が目に付く。（江田）



LIFT
Meeresfahrt

LP /Amiga 8 55 638　'78年
CD/DSB 3214-2

シュテルン・コンボ・マイセンと並ぶ旧東ドイツのシンフォニック・グループの代表格、リフトの２作目。名作との評価も高かった１作目に比べるとテクニカルなパーツが減った分やや平板な印象を受けるものの、基本的には同一路線の好作品といえる。ポップでメロディアスになったといっても同時期の英米のそれを比較するとかなり生硬く聞こえるのは地域的なハンデがもたらす音楽的背景の差異によるものか（ポピュラー音楽に対するある種の「疎さ」を感じる)。曲は多少小粒になっているが、フルートやサックスをフィーチュアしてテクニカルかつドラマチックに盛り上がるタイトル曲は聴きもの。ドイツ語の響きがゴツゴツした質感を与えるラストのバラード・ナンバーもどこか捨て難い。　(内田)



LIZARD (Switzerland)
In Concert

LP/(Private press.)　'81年

スイスのグループと言うと国内事情のせいか多くのグループが出てはいないが、出るグループほとんどが魅力あるアルバムをリリースしている。その裏付けの特徴として高度の演奏技術を持ち合わせている事が上げられよう。さて、リザードだがテクニックに関しては他のスイスのグループに一歩譲ると言わざるを得まい。サウンドは一言でいうならクリムゾンということになろう。しかしながら、パワーに欠けて、二枚組の本作を一気に聴き通すには少々苦しいが、ライヴ盤であり録音状態の悪さも考慮すべきだろう。彼らは'79年ごろから40回近いコンサートを行っていたようで、本作もその中のライヴを集めたもので、ジャケットも白地にステッカーが一枚とシンプルで完全自主製作盤であり、発展途上のアルバムと言った所だ。(杉山)



M.L.BONGERS PROJECT
Pacific Prison

LP/Siegfried 666 372　'78年

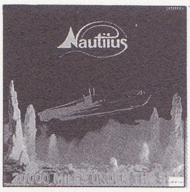
このアルバムはMARCEL L.BONGERSなる人物を中心としたプロジェクトにより1978年に西ドイツのボンで自主制作された唯一の作品で、1987年頃に発掘されるまでその存在が全く知られて無かったという幻のアルバムである。残念ながらその中心人物であるM.L.BONGERSを始め参加している４人のバンドメンバーやこのアルバムが制作されたバックグラウンド等に関しての詳しいことは現在まで殆ど分かっていない。アルバムの内容の方は海の孤島にある牢獄での物語を題材としたトータル作品でサウンドもメロディアスに流れるギターや端正なフルート、そしてそれらを包み込むキーボードによりジャケットアートさながらにロマンティックかつ劇的にそれを表現している。地味ながらも心に滲み入るアルバムである。　(島村)



MADISON DYKE
Zeitmaschine

LP/Racket RRK15. 001　'77年

ノイシュバンシュタインと共にラケット・レコードの代表作となっているマディソン・ダイク。そういえばこの両者のジャケットの構図はよく似ている。裏ジャケを見るとダブル・メロトロンということになるが、それらしい音は出てこない。その代わりストリングス・シンセ（ソリーナの類）は多用されている。まあ、メロトロンを使っていないからといって評価が下がってしまう程この作品はヤワではない。典型的なジャーマン・シンフォに仕上がっており、ヴォーカリストの吹くフルートがいい味を出している。10分の曲とB面全部を使った大作はなかなかの力作。残りの２曲はノヴァリスに近い音になっている。昔はよく見かけたが、最近はあまり見かけなくなってきた。CDとなって後世に残ることを望みたい。　(小林)



NAUTILUS (Switzerland)
20000 Miles Under The Sea

LP/NLP 7801　'78年

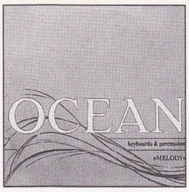
有名な「海底２万マイル」の潜水艦「ノーチラス」号からグループ名をとったノーチラスというグループは'78年に本アルバムを残した後、もう１枚のアルバムをもリリースした。キーボーダーのラルフ・スタッキなる人物（彼はアルバム・カバーも担当している。）を中心にベース、ギター、ドラムスの４人編成の形態をとり、あくまでメロディアスなプログレッシヴ・ロックを演奏している。歌詞は英語で歌われ、曲想もかなりブリティッシュナイズされたものである。テクニック、曲構成とも非常に平均的なグループで特に光る部分はないのだが、端正な姿勢には好感が持てる。A④はリード・ギターのソロとアコースティック・ピアノの印象的な曲である。(山崎)



NEUSCHWANSTEIN
Battlement

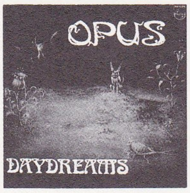
LP /Racket RRK 15.002　'79年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4063

初期及び中期のジェネシスから多大なる影響を受けたグループは世界中に数多く存在するものだが、それらのうち出来の良い例と余りにもお粗末な駄作の二つに大別されるケースが、かなり見受けられる様だ。ここに登場するノイシュヴァンシュタインは、ガヴリエル在籍時のジェネシスの血筋を見事に脈々と受け継いだグループであると言える。が、それ以上にスリリングかつドラマティックな曲の展開や各パートの奏法において、オリジナルよりもはるかな力量を発揮している。朽ち果てた中世の城跡のカヴァーワークをそのまま音にしたと言ってもいいだろう。単なる物真似やコピーという底次元な目標にとどまらず、より以上に彼らの根底にはヨーロピアン古来の構築美と様式美が生き続けているのである。　(大関)



OCEAN
Melody
LP/Tonstudio Bibier T B 507/81　'81年

キーボード２台＋パーカッションというシンフォニック系にしては変則的な構成。〝オペラ・プリマ〞の様なダイナミックさは無いものの、シンセ類多用による陰気なイメージとも無縁だ。波の音で幕を開け、じわじわと盛り上げて行くが、elピアノとシンセが縦横無尽に駈け巡るクライマックスは圧巻。Ａ面ラストではアップテンポのナンバーでリズミカルに決め、ELPの〝ナットロッカー〞風の演奏も聴かれる。Ｂ面に入るとストリングシンセとピアノで美しく軽やか、かつクラシカルなプレイが披露されたかと思うとエルドン風イントロからオールドフィールド風電子音、更にはジャジーなピアノプレイと案外多彩なサウンドが楽しめる。なお'84年にはP KunzがキーボーディストStefan Petersと組んで2nd「Double Vision」を製作している。　(江田)



OPUS (Austria)
Daydreams
LP/Philips 6322 035　'80年

オパスという名のグループは世界中にいくつかあるが、これはオーストリアのオパスである。オーストリアという国はクラシック音楽の都であるにもかかわらず、ロック・グループの数は決して多くない。そんな数少ないグループの中で、インターナショナルな成功を収めたのはこのグループだけである。'70年代後半から活動を始め、数年後にはアメリカのヒット・チャート入りするグループにのし上がった。基本的にはハード＝ポップ路線のグループであるが、このサード・アルバムでは、クラシカルなアレンジの曲等も演奏しており、ジャケットの美しさも相まって以前本誌でも紹介された。ジャケットから印象程はプログレッシヴではないが、オーストリアの数少ないグループの１つとして紹介しておこう。　(山崎)



OPUS
Opus I
LP/Peak BEST Nr.8381　'83年

若干ハードな下地が見え隠れしているものの、プログレファンの嗜好には十分マッチしたサウンドが聴かれる。一部、シンフォニックというよりロッカバラードタイプの演奏も含まれるが、ピアノを筆頭に各種キーボードを巧く使い分けて非常にきれいな音を出しており、重々しいギターが常にバックに控え出番を伺っているにもかかわらず、総合的にみると泣きの部分が勝っているとの印象を与える。Ｂ面ラストのインストはやや趣向が異なり、シンセなどキーボード系の音を前面に押し出した短いながらも最も叙情的なナンバー。本作の製作年度は明記されていないが、'80年代に入ってからのリリースと推定される。２ndアルバムも根本的には同一路線と言えようが、完成度では本作を下回る。　(江田)



REBEKKA
Phoenix
LP /Heute LP 82082 ST　'82年
CD/(Fr.)FGBG 4083.AR

１作目。バンドの母体は'71年にギタリストを中心にできあがっており、その後、インド音楽への傾倒、ドイツが世界をリードしたダンス・ビートへの反発など、曲折を経て本作がリリースされた。まず、タブラ、タンブーラ、ヴァリアフォンといった特殊楽器の導入が目につくものの、基本となるのは旋律重視の甘くゆったりとしたシンフォニック・サウンドである。女性ヴォーカルをはじめ、演奏に技巧性は乏しく、編成のわりに聴きどころも少ない。しかし、深く胸にしみこむリリカルさは強い魅力にあふれている。なお、本作オリジナルの初回プレスは1000枚のみ。海外流出分のほとんどは日本、フランス、ブラジルへ向かったといわれている。仏Museaの再発CDにはインド志向の12分もの未収曲が含まれている。　(ミワ)



REBEKKA
Labyrinth
LP/Ohrwurm O.W.1023　'84年

涙なしには聴けないデビュー作「Phoenix」に続く２枚目。１曲目はいきなりテクノポップ風なアレンジで、ドラムもエレドラを使っているが、このバンドにこの手のサウンドが似合うはずもない。２曲目以降はメロディアスな曲が続いていくことになるが、全体的にはいろいろな事をやろうとしたことが裏目に出て散漫な印象を与えている。もともと上手なバンドではないのだからメロディー重視という姿勢だけをレコードに吹き込んでいれば、１枚目同様に素直な感動を与えていただろう。それでもスケールの大きいメロディーや甘いギターが耳に入ってくると込み上げてくるものを感じてしまう。１枚目を聴く時の半分くらいの涙は流せるのではないだろうか。本作以降の活動は不明である。　(小林)



ROUSSEAU
Flowers In Asphalt
LP /Steyrer Disco SD 18003　'79年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4023.AR

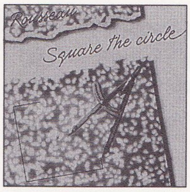
ROUSSEAUの１st。タイトルやジャケットから伺えるようにフルートや甘いギターを中心としたそのサウンドは非常にロマンチックである。このアルバムは全曲インストゥルメンタルで、内容的には「Snow Goose」、「Moon Madness」時のCAMELを思わせる物である。当然、かのバンドとの単純な比較は、楽曲の完成度等一聴して明らかにこちらが不利ではあるが、構成力や演奏力の未熟さあるいはフレージングの稚拙さをロマンチシズムと甘さが充分にカバーしている。そういう意味では、とてもドイツらしいバンドと言えるかもしれない。とは言え、めぼしい物がほとんど無かった'80年代前半からいざ知らず、今聞くには結構覚悟がいることも確かである。「甘さ」のみで酔える人向けのアルバムである。　(渡部　暁)



ROUSSEAU
Retreat

LP/IL 7009 '83年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4051.AR

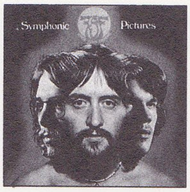
前作の中心的存在であったギターのヨルグ・シュワルツが抜けて、新しいギタリストが加入、更にヴォーカリストも加わっていてオール・インストだった1stよりも曲に幅が出ている。キャメル度は前作を遥かに上回っていて、ここまでやれば拍手喝采である。とは言ってもELPに対するトリアンヴィラートのような悪趣味で形骸化した物ではなく、そのイディオムをしっかりと吸収して自分達のものにした上での発露であり、それは至極自然な形になっているので無理がなく、もはやオリジナリティと言っても良い。彼等の特徴はメロディ・ラインにあり、叙情的でありながらも感情に流されないサラッとした感触を持っていることである。テクニック至上主義でない音楽的バンドの作品と言えるのではないか。（津田）



ROUSSEAU
Square The Circle

LP/Mint LC 7867 '88年

前作より5年の歳月を経て発表された3作目。ギタリストの変更やコンバートもあるが、基本路線は変わらず、さらに洗練させた内容となっている。相変わらずセンシティヴなフルートが活躍、弦楽セクションの投入もあって、ロックのフィールド内で限りなくムード・ミュージックに接近した作品ということもできる。ちょうどCAMELのA、ラティマー失踪期と重なっていたため、筆者は彼が変名を使ってヴォーカル／ギターで参加しているのではないかと疑った。特に一部ヴォーカルと生ギター(技術では及ばぬが)は非常に近似している。CAMELのムーディーな部分のみを抽出した曲想。仏ムゼアはこれを〝リリカル・チェンバー・ロック〞と称している。なお、ルソーは同レーベルのオムニバス作品にも素晴らしい曲を提供している。（ミワ）



SFF (Switzerland)
Symphonic Pictures

LP/Brain 0060. 010 '76年
CD/(U.S)The Laser's Edge LE 1017/18

トリオであるメンバー3人のラストネームをとってバンド名にしたSFFはスイス出身のバンドながらドイツのブレインレーベルより3枚のアルバムをリリースし、またブレインのオムニバスライブに参加していたことから当時はドイツのバンドであると思われていた。本アルバムは彼らの1stであり、どれも高水準の出来である後の2作を含めても、頭一つ抜きん出た完成度を持っている彼らの最高傑作アルバムである。このアルバムで聞けるサウンドは彼らの持ち味である高度なテクニックに裏打ちされた変拍子と、非常にうまくアンサンブルに生かされたメロトロンを後の2作以上に余すところ無く展開し構築したサウンドで、スイスシンフォニックロックの中でもシリアスで孤高の存在感を持つものとなっている。（島村）



SFF
Sunburst

LP/Brain 60. 068 '77年
CD/(U.S.)The Laser's Edge LE 1017/18

1stリリース後、印象的なライブを勢力的に行うことによって、約12,000枚のセールスを記録した彼らは、早くも翌年1977年に2ndアルバムを1st同様ドイツの名プロデューサーであるDieter Dierksのプロデュースの元、ゲストベーシストとしてEduard Brumund-Rutherを7曲中5曲に迎えレコーディング＆リリースしている。これがこの「Sunburst」である。内容的には前作ほど究極的に凝りに凝ったリズムではないのだが相変わらず複雑かつ変幻自在なリズムで、曲によってはその上により音空間を生かしたようなサウンド造りをしている。前作からのインターバルが短いにも関わらず、このように内容の方は相変わらずの高水準を保っており1stに負けず劣らずの作品に仕上がっているといえるだろう。（島村）



SFF
Ticket To Everywhere

LP/Brain 60. 173 '79年
CD/(U.S.)The Laser's Edge LE 1017/18

2ndリリース後も彼らの積極的な創作意欲は止まず、翌年1978年に前作、前々作同様Dieter Dierksをプロデュースに迎えレコーディングし、年が明けた1979年にリリースしたのがこの3rdアルバム「Ticket To Everywhere」である。そんな訳で、本作も基本的ラインの音楽性は以前の作品同様テクニカルで緻密なシンフォニックロックなのだが時代の流れの影響からか、以前より良い意味で若干あか抜けてポピュラリティーのあるものとなっている。ただ、この為によるものか本作レコーディング後バンドは音楽性の相違のため解散、Sehickeは HOELDERLINに参加、残りの2人はF＆Fとして活動していたが、残念なことにGerd Fuhrsが1992年の11月に逝去した為、SFFも2度と戻らないバンドとなった。（島村）



SCHAKTA (Switzerland)
Tales

LP/G+F GFL 1001 '80年

マイナー系シンフォニックの作品の中には決して完成度こそ高くないものの妙に哀愁をそそる魅力的なアルバムが少なくない。本作もそんな中の一枚である。マイナー・コードを多用したアルペジオに線の細いキーボードをからめて静かに盛り上がって行くタイプの曲が多く、フランスのパンタクルあたりに共通する物悲しい雰囲気が全体を支配している。本作は曲を追う毎に物語が進行していく形のトータル・アルバムになっており、その中では魔法の国の悪魔と魔術師の心の葛藤をファンタジックに描き出している。（松尾）



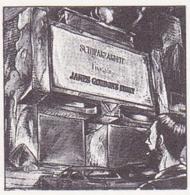
SCHWARZARBEIT
Schwarzarbeit
LP/(private press.)　'80年

今は見掛けぬデビュー作。２作目の時にファンに紹介されたバンドだが、あの頃から今へ、新作が仏Museaから出て、MEKONG DELTAと友達だったとか、そんな事など思いもよらなかった。ただひたすら２作目Ｂ面の夢想感の強いそして何処かドイツの無菌感覚？に通じていくあの流れに浸っていた。その頃からハード＆アコースティックの印象はあったが、一作戻ってこのアルバムになると、その両面がくっきりと分かれて出ている。どちらかと言えば、ハード・タッチなサウンドが目立ち、完成度が高い。自主製作とは思えない確かな演奏力が、一介のハード・ロックには止めさせず、通して聴き終えた後になんとなく滑らかさやしなやかさを残す。派手なようで少しも派手ではない。ハードでも同じ彼等の雰囲気がする。（松本）



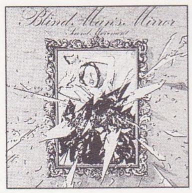
SCHWARZARBEIT
Traum Oder Wirklichkeit
LP/(private press)59009　'82年

有名な裏メコンデルタ？SCHWARZARBEITの２nd。もちろんスラッシュでは無い（笑）。音の傾向はキラキラとしたギターに柔らかいキーボードが被さると言うものでいわゆるシンフォニック系の作品である。Ａ面は、やや軽めのPOPなサウンドでスペイシーな部分に個性を感じさせるが、それだけのものである。この作品の神髄はやはりＢ面にあろう。ドイツの森の中を深々と雪が降るイメージと言おうか、音の隙間に静寂が満ちていて、狂おしい程冷々としている。個人的にはドイツの森と言えばヘルダーリンの１stかこのアルバムのＢ面で決まりである。なお、オリジナル盤にはメンバーの直筆サインが有るものがあり、我が国にも相当数出回っている。当然、ラルフも書いているよん。（渡部　暁）



SCHWARZARBEIT
James Gordon's Story
CD/(Fr.)Musea FGBG 4094AR　'93年

MEKONG DELTAでタメ込んだものをドバっと出すかと思い気や、やはり彼らは大人であった。このような作風は、えてしてナヨナヨして失敗するものだが、このリズム隊で固めているからこそビシッと引き締まって、緊張感のある硬派なものに仕上がっている。的確な人選と思われる（笑）。イマジネーションが膨らむ作品で、解釈は人はそれぞれ異なるが、私には人生の葛藤、ほろ苦さを表現しているように感じた。それでいて、ある瞬間フッと開放感を味わえたりする。枯れた音とでもいうのだろうか？一つ一つの音に無駄が無く、どれも必然性があるように思われる。天空に突き抜けるようなギターと、ナチュラルでアコースティックな響きとコントラストが絶妙である。（渋谷）



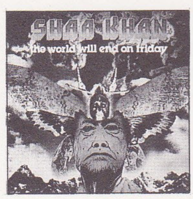
SECOND MOVEMENT
Blind Man's Mirror
LP /Castle CAS 1003　'76年

小気味良いテンポの準シンフォニックサウンドで幕を開ける。派手なキーボードワークは無いが、泣きのフレーズが割と続くため、アイヴォリー、エデンといった〝優等性〟的な音とはまた違った味わいがある。歌詞は全て英語。じっくりと聴かせるパートではフルートが効果的な働きをしており、オルガンの音と相まって時には英国風、キャメルあたりを思わせる展開が見受けられる。'76年という年代にしては割とスマートな曲作りをしているものの、前述のフルートの他、acギター、チェレスタ等により叙情性を前面に出し、要所はキーボードで締めるというパターンは大成功と言えよう。Ａ面中程ではelピアノとサックスを交えてジャジーな展開を見せるが、ここを除けばパートのバランスが崩れることはほぼ無いと言っていい。（江田）



SERENE
Serene
LP/Lava TCH 81001　'81年

カラフルな色彩で彩られた、セレーネの残した唯一の作品。'81年にLAVAなるマイナー系レーベルで製作された（ただし、録音は'79年に行われている）。今まで、ドイツのシンフォニック系はテクニックがなくある種の臭さを引きずっていたもの、と偏見を持っていた者の鼻を明かすかの様に、彼等は演奏とテクニック、曲作りにおいて、それらの要素を排除し曲そのものにも強弱や明暗、動と静のメリハリを効かせた開放的で英米の受けを狙おうとしていた印象さえ感じられる。Voも男性的な力強さと優しさが同居した歌いっぷりで、注目に値する所だろう。アルバムに針を落とすと、そこにはキャメル、B.J.H.UKといったブリティッシュの強者らがオーバーラップしてくる。硬派を思わせる強力な一枚。（大関）



SHAA KHAN
The World Will End On Friday
LP/SKY 015　'78年

これがデビュー作。複数でヴォーカルを取っているが、その内の１人は、ジョン・アンダーソンを意識したような歌い方だ。「世界は金曜日に破滅する」「墓地」といった曲名からわかるようにオドロオドロしい側面を持ち合わせている。もちろんテクニック、作曲能力ともに一流のものではないがタイトル曲であるＡ②などはよくできたシンフォニックロックといえよう。Ａ③はカッコいいハードロック。入門者が手を出すべき作品ではないが、自称マニアックなあなたは手を出しておいてもよいだろう。Skyレーベルにはこの他にも、ストリートマークやオクトパスやアーススターのように今一歩の完成度ながらもマニア魂をくすぐるシンフォニック系のバンドが作品を出している。（小林）



SHAA KHAN
Anything Wrong？
LP/SKY 025　'79年

スカイ・レーベルの作品。おまけにこんなジャケとくれば誰も相手にしてこなかったのも無理もないことだ（そういえばこのバンドの1stアルバムのジャケットも人面プログレしていたっけ）。演奏技術は相変らずだが、アレンジは前作より良くなっているような気がする。方向としては前作の延長線上にあり、トータルでみればわずかながらの進歩がみられる。1曲目や2曲目は完成度の悪いドゥルイドくらいには聴こえるぞ(笑)。ハードロック的なアプローチがなされている曲は実はよくできていて、ユーライア・ヒープみたいでつい挙を握ってしまう。ジャケットのことを考えれば大穴と言い切ってしまってよいだろう。　　　　　　　　　　　　（小林）



STERN COMBO MEISSEN
Stern Combo Meissen
LP/Amiga 8 55 567　'77年

旧東ドイツきってのテクニカル・シンフォニック・グループのデビュー作。77年という時期を考えるとかなり古めかしい、いわゆる「時代物」のロックという感は否めないが（渋い曲調の1曲目がそう思わせるのかもしれない）、キーボード・プレイヤーはかなりのセンスを持っており、後の急成長の片鱗はそこかしこに窺える。トリッキーなキーボードを混じえ、絶妙のコーラス・パート（絶妙のアレンジ！）へとなだれ込む2曲目はジェントル・ジャイアントをも彷彿とさせる佳作。また、かの有名な「はげ山の一夜」では各人の演奏が激しく攻めぎ合い、ニュー・トロルスほどは話題になりにくいが全くヒケを取らぬ堂々たる出来映えとなっている。プリミティヴながらも随所に光るものを持つ好作。　　　　　　　　　　（内田）



STERS-COMBO MEISSEN
Weisses Gold
LP /AMIGA 8 55 567　'78年
CD/キングK32Y 2119

グループ名と同タイトルであるデビュー作に続く、彼らの2作目。邦題「錬金術師の物語」に表される様にトータルコンセプトアルバムである。発表年代や、当時東ドイツであった音楽状況を考えるといささか野暮ったく大げさになりがちな部分も感じられるが、冒頭の語りからテクニカルなキーボードが乱入してくるオープニングに感じられる様にシンフォニックロックの優秀作にカウント出来るはずだ。クラシカルな雰囲気、大胆且つ叙情的な盛り上がりは本作が上だが、ツインキーボードを前面に出し、スピーディに疾走するシンフォニーという特徴を活かした4作目を好む意見も多い。いずれにしろシュテルンの星として東ドイツロック史に輝きを加えたグループだ。　　　　　　　　　　　　（伊藤）



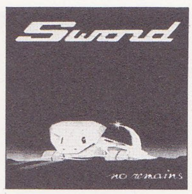
STERN MEISSEN
Reise Zum Mittelpunkt Des Menschen
LP /AMIGA 8 55 811　'81年
CD/DSB 32242

旧東ドイツで活動していた共産圏シンフォニック系の雄である彼らの最高傑作である4枚目。お国がら使用機材がかなり貧弱なのはどうしようも無いが、センス、テクニックを兼ね備えたエネルギッシュな演奏が心地良い。特に中盤の無伴奏ピアノソロから名楽器が重なり合ってゆき後半の盛り上がりへなだれ込んでゆく様が圧巻。鍵盤奏者が2人いる編成になっているが両者ともめりはりの利いた申し分ない演奏を聴かせてくれる。共産圏のグループには貧弱な機材故にばたばたともたついたダサい演奏がままあるが、彼らの軽快に聴かせるキーになっているのはリズムセクションの力強さ。特にベーシストの技量は注目であろう。　　　　　　　　　　　　（伊藤）



STEVEN
Requiem
LP/Srilanka 2080　'80年

ドイツ・シンフォニック・アンダーグラウンドから、本邦未紹介の作品が新たに発掘された。スティーヴンというグループのレクイエムと題されたおそらく唯一のアルバムがそれだ。タイプとしてはドイツのOPUSあたりに近く、タイトでメロディアスなシンフォニック・ロックということができると思う。g、kbd、b、dsの4人編成。アルバムはA面が3曲（うち1曲はさらに2曲に小分される。）B面4曲からなっており、1980年にリリースされている。曲の中心はメロディアスなラインを弾くギターでキーボードがそれをサポートするスタイルはOPUS同様である。カチッときまった演奏にも無駄がなく、全体の印象をタイトにまとめあげることに見事に成功している。良質のアップ・トゥ・デイトなシンフォニック・ロック。　　　　　　　　　（今野）



SWORD（Switzerland）
No Remains
LP/（Swi.）Musk MP 824　'83年

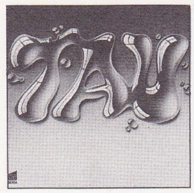
SWORDは1983年に唯一のアルバムである本作をスイスCBS傘下のMUSKよりリリースしたバンドである。このように大手傘下のリリースである為かほぼ自主制作と思われる作品でありながら制作や録音はしっかりしており安心して聴くことが出来るものとなっている。80年代のスイスというとDEYSSが想起されるが、サウンド的にはこのSWORDもDEYSS同様GENESISの影響下にあるサウンドと言えるだろう。しかし、DEYSSほどその影響は色濃くなく、どちらかというとジャケットのSF的イラストの雰囲気からも感じとれるような現代的な幽幻さと、時にハードロック的な雰囲気さえも感じさせる力強さが同居したものとなっており、個性的な仕上がりをみせている。B級ながらスイスの層の厚さを感じさせる作品である。　　（島村）

TANTALUS
Sitting In A Dream
LP/Srilanca 2280 '?年



「タンタルス」とはギリシャ神話に登場するゼウス神の子の一人。不遜にも神々を試そうとして父の怒りに触れ、罰として永遠の飢えと渇きを与えられたという話は有名だ。がカヴァーに取り入れられたビアズリーの絵は非常にメルヘンチックなもので、美しい音を端的に表している。acギター、ピアノ、シンセ等による澄み切ったサウンドが中心。A面途中で若干軽い乗りのパートが顔を出す以外は平均して割と良い出来のシンフォニックサウンドを聴かせている。A面ラストではacピアノ、ストリングシンセで美しく締めくくり、B面に入ると徐々にキーボードが前に出て来てそこはかとなく盛り上げていくという展開には殆ど抵抗無く溶け込めよう。濁りの無い素朴な音作りからは意識的に派手になるのを抑えているとの印象さえ受ける。（江田）

TAU
Tau
LP/Pläne 88304 '82年



ドイツらしからぬジャケット・ワーク。オープニングの軽快な曲にたじろぐ。次なる曲は、ジェネシス調のアンサンブルを持ったドラマティックな出だしで期待を抱かせる。それもつかの間、中間部が平坦で曲が長く感じられる。それはそれで、聴き所の多いマニア好みの曲にはちがいない。A③B①は好みに有らず。インストB②はキーボードをメインにした雄大な曲。B③は後半泣きのギターで盛り上がり、B④はビートルズの「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド」をベースに熱い演奏でアルバムを締めくくる。5人編成のタウの唯一の作品と思われる。（吉瀬）

TRAUMWOLF
Aussen
LP/(private press) '82年



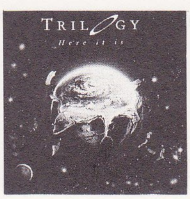
'82年製作の本作はダブル・キーボードに男女ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムと総勢8人編成。キャメルやルネッサンスから影響を受けたと思われる割と軽めのシンフォニック・ロックである。同じドイツのWERWOLFにも似た印象も受けるが、こちらは軽やかに流れる様な曲調が多いためかややインパクトに欠ける。しかし時折目を見張る泣きのギター・ソロが飛び出すあたり聴き所もしっかり押えられている。アコースティック・ギターのアルペジオからアニー・ハスラムにそっくりな声質を持った女性ヴォーカルがしっとりと歌い始め次第に盛り上がっていくタイプの曲が多く、特にB面が楽曲面で充実している。シンフォニックをこよなく愛するファンの方には一聴の価値の有るアルバムであると思う。（松尾）

TRESPASS
The Final Act
CD/(Fr.)MSI UGU 00191 '91年



仏アルモニー誌でプッシュされ、同じく仏MSIからのアルバム・リリースとなったが、純然たるドイツのバンド。ネーミングから察せられる通り、完全無欠なるジェネシス・フォロワーであり、本家との距離はマリリオン、IQらよりさらに近い。P.ガブリエル、ビートたけしなど、いわゆる〝かぶりもの〟に執着するアーティストは多いが、本バンドとヴォーカリストもその系譜に位置づけられる。当然、ライトショー、演劇などを含めた大仕掛けのステージングを行っていた模様。楽曲としては約44分の1曲目が展開、構成力とも相応の水準といえる。当初からオリジナリティを放棄しており、その立脚点による評価には意味がない。バンドは、ビデオ・クリップ、ローカル・ヒット・シングルなど、他にもマテリアルを残している。（ミワ）

TRILOGY
Here It Is
LP /Cain CL 5809 '79年
CD/(Fr.)Musea FGBG 4093

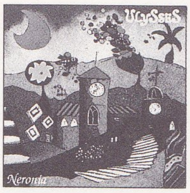


'79年、ドイツの自主制作。ツイン・キーボードを擁する5人組の唯一の音源。全編インストで、バンド名通り（？）エマーソン張りの各種鍵盤を徹底してフィーチュアしている。ムーグやオルガンのやり口はモロという感じだし、例によってリズム陣の甘さも目立つが、聴かせ所は心得ているようで要所に光るフレーズがある。イモッぽい部分も含めて、自主制作ならではの音だ。ちょっとだけ出てくるギターも仲々良い。マイナー臭さは否定できないが、気持ちだけは買いたい、という作品。ちなみにCDの方はジャケットも新しくなり、ボーナス曲も収録されている。（中島）

TUNEFISH
Guitar Poetry
CD/WMMS 003 '89年

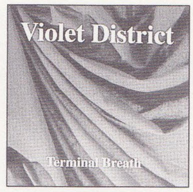


ANYONE'S DAUGHTERのkbd奏者が参加しているグループではあるけれど、それ自体にはさして意味はない。むしろ③で聴かれるガット・ギターをはじめ、ギタリストの健闘が目立つ佳作である。次に特徴的なのは、実に良い声を持ったヴォーカリストを擁していること。多重録音したコーラスを何の不安もなく聴けるというのは、このレベルの作品では珍しくさえある。その声質にぴったりのメロディアスな楽曲は決して悪くなし、現在のジャーマン・シンフォニックの水準を考えると平均的かな、と思わせるものの、録音の悪さ、プロデュースの主張の無さで確実に1ポイントは損をしている。こんな技術的な事柄を突き抜けるインテリジェンスが、元来ジャーマン・ロックの凄さだったはずなのに。（古田）



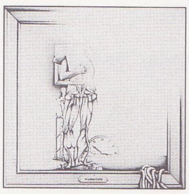
ULYSSES
Neronia
CD/Pyramusic RYRCD 1001 '93年

自らのレーベルよりリリースされた完全自主制作であるが、C.ノーラン＆K.グルームのプロデュースとエンジニアリング、T.ヒッチングスとC.オーシの参加、Thin Iceスタジオでの録音など、オランダはSi-musicレーベルの分派作品と見なしてさしつかえない。曲想も見事に同レーベルおよび'90年代型ポンプ／シンフォニック・ロックに合致する。静と動、押しと引きの多面的展開、リズム・チェンジやぶ厚いキーボード（特に3曲目終盤がすさまじい）、メロディ・ラインを極立たせるべく配慮された楽曲。ペンドラゴンやジャディスにひかれるリスナーならば難なく受けいれられる音傾向である。特筆すべきはバンドが当初から「ファッショナブルなトレンドにはいっさい関わりたくない」と表明していることである。（ミワ）



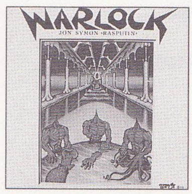
VIOLET DISTRICT
Terminal Breath
CD/Tab-Audio 8619 '92年

とても自主制作とは思えないサウンド・クォリティを持っている。基本は爽やかなシンフォニック・ロックで、英語で歌われていることもあってか全体を通して淡い色調に支配されている。ツイン・キーボードの5人組なのだが、どちらかと言うとギターの比重が高い傾向にある。組曲形式の楽曲がほとんどで、大作指向のようにも見えるが、けっこうコンパクトにまとめられていて聴きやすくなっている。アレンジもシンプルで、不必要な装飾もなくてメロディや各インストゥルメンツの持ち味をしっかり引き立てていて、新人としては出来がよい。大きな弱点として、ヴォーカルに不安定な部分が有り、ここが好みをわけるポイントであろう。単なるジェネシス・フォロワーが多い中で頑張って貰いたいバンドの一つ。（津田）



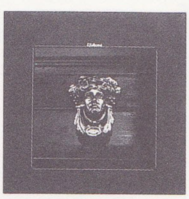
WANIYETULA
A Dream With In A Dream
LP/Klangkunst KK 2811-018-01 '83年

献辞にはE・A・ポー、S・T・コールリッジ、W・H・オーデン等の作家、詩人の名が並べられ、タイトル曲（ポー）を含む殆どの曲で彼等の詩が用いられている。それでは文学的な香りと昏さ漂う作品かと言うと必ずしもそうではなく、聴こえて来るのは都会的とさえ表現し得る'80年代型のシンフォニック・ロック。しかしここには、他のGENESISの代替バンド勢とは一線を画す、言葉にし難いアトモスフィアがある。夢のまた夢と言うには些かカッチリとした音かも知れないが、シンフォニックとネオ・サイケの間を埋めたようなメロディとアレンジには嘗てのジャーマン・ロックには似つかわしくなかったある種の余裕と閑雅さすら窺えよう。このセンスが逆に旧来の聴き手には評価の分かれめとなる筈だ。（高山）



WARLOCK
Warlock
LP/Lava Music TCH 80 501 '81年

Joy Symon（vo、ds）率いるWARLOCKの1st。'84年には「Lady Macbeth」（Lava Music LV 80429L）をリリースしており、同傾向の音が聴ける。ずばりハード・シンフォニック・ロック・ファン向け。雷鳴に大げさなオーケストレーションという約束事にがんじがらめにされたオープニングなど典型的。この傾向は2枚目の方に更に強く出ている。ほとんどこけおどしにしか思えない。1stの方は多少なりともおさえられており、弦楽器のフィーチュアなどもあってシンフォニックな色が強い。A面の流れは結構聴けるが、'80年代のシンフォニック系に多いキーボード・トーンの薄っぺらさ、決まりきったような使い方には悲しいものがある。メロディックではあった所で音楽に鮮明さが今一つ感じられない。（松本）



WELCOME (Switzerland)
Welcome
LP/EMI 058 33869 '76年

Bernie Krauerというキーボード奏者を中心にした3人組、WELCOMEには2枚のアルバムがある。こちらは'76年のリリースなので、スイスとしては古手の部類になる。SFFは別としても、この頃と言えば、DEMON THOR等になるわけで、そう思うと出色のアルバムと言っていいと思う。シンフォニックと言うには、'70年代でブリティッシュ・オルガン・ロックだ。楽器の扱いも上手く、メロトロンが全曲に入っていて所謂オルガン・ロックでもない。その叙情加減が中々滲みるもので、同時に'70年代調の渋さを持ち合わせるから、'70年代物ファンには相当なアピールをしそう。曲は全5曲、大作が多い。これもポイントだろう。未だCDになっていないが、クオリティもレアー度も低くない。（松本）



WELCOME
You're Welcome
LP/Babylon 80003

デビュー作でスイスの'70年代にしては、という内容だったWELCOMEの2作目。前作の、何かあるな？といったジャケットのイメージからすると、こちらは凡庸だが、それはA面とこのジャケットのみ。と言ってもA面もそれなりには聴ける範囲か。小曲が並ぶ。ポップ。ところがB面の大曲になると、これが'70年代のYESによく似た演奏を聴かせてくれる。デビュー作でもその傾向はあったとは言え、2作目になって1作目の渋さ、くすんだ感触の叙情味は一拠に陽性へと転換する。A面の小曲はその余波のようなもので、とにかく洗練され、サウンドの切れも高まっている。そこでYES調に展開する。スマートなシンフォニック・ロックに変化している。その辺りはさすがスッキリのスイス・サウンド。（松本）



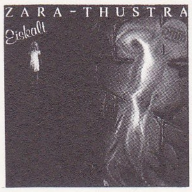
WERWOLF
Creation
LP /(private press.) F 667943 '84年
CD/(U.S.) Laser's Edge LE-1013

女性ヴォーカルをフィーチャーしたWERWOLFの唯一の作品。とにかくこのヴォーカルが美しい。かの英国のアニー・ハスラムもビックリと言うか、ところどころでルネッサンスを髣髴とさせるようなキラメキを感じさせる。ただ、こちらの方はサウンド的にもっとウェットで、全体的にカラフルな色合いの中にも落ち着いた味わいがあり、そういう部分が英語で歌っているのにも関らず、いわゆるドイツらしさを感じさせる。なお、このアルバムのエンジニアはEDENのリーダーのDirk Schmalenbachで、音の広がり、ヴォーカルの声質等々EDENと通じるものをアルバムのあちらこちらで感じる。いや、EDEN関連の他のアルバムと比較しても、かなり上位の方に入るのは間違い無いだろう。シンフォ・ファン必勝!! (渡部 暁)



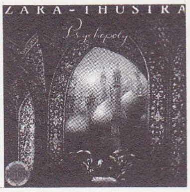
YAVANNA
Bilder Aus Mittelerde
LP/Lord 33545 '84年

ヤヴァンナ(〝果実をもたらす者〟の意)の「ミドルアースの創造者」。そう、これはJ.R.トールキンの創作神話『シルマリリオン』に想を得たトータル・アルバムであり、全曲のタイトルに作品中の人名・地名が含まれている。中心人物D・シュマレンバッハ(Vn、Key)は'80年にもEDENを率いて、トールキンの友人でもあるC・S・ルイスのSF『ペレランドラ』を基にする等、トールキンの作中人物を名乗るガンダルフ同様かなりのファンタジィ愛好家なのだろう。本作はシルマリリオンの音楽的再現と言うよりは、それをモチーフとした作品で、力強いドラムスとヴォーカル、キーボードをフィーチャーした時にMANDALABANDにも通じる洗練されたシンフォニック・ロックを聴くことができる。 (高山)



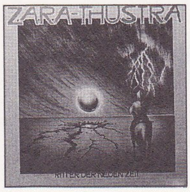
ZARA-THUSTRA
Eiskalt
LP/Teldec 6.25406 BR '82年

同名異バンドが存在するが、こちらは'80年代のバンド。我が国では3種の作品が流通しており、いずれもデルデック社のダイレクト・メタル・マスタリングで非常に音質がよい。バンドのマテリアルが何種存在するのかは確認がとれなかった。日本上陸は'83年の作品『Psychopoly』が先で、完成度は同作が突出している。本作も路線は同じだが、ヴォルテイジはやや低い。基本はエレクトロ・ポップ。ただし、これが一筋縄ではいかない。いちいち壮大なオーケストレーションがオブリガードしてきたり、突然クラシックの純粋歌曲に切りかわったり。最終曲では交響楽的ブギウギ〜スイング・ジャズからグレゴリアン・チャントへ。前衛を意図した実験色、先鋭色はまるでなく、さらりとポップなところが恐ろしい。 (ミワ)



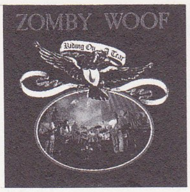
ZARA-THUSTRA
Psychopoly
LP /Teldec 6.25665 '83年

我が国への上陸当初、筆者は本作が'80年代のベスト10に入ると確信したが、10年以上たった今でもその確信はゆるがない。冒頭、誰もが想定するのは全盛期のエニドだろう。その後に続くポップな展開にも、すきまなく壮大無比なオーケストレーションが入ってくる。メイン・ヴォーカルは英国のファンタジーを思わせる声質のよさ。4曲目は交響楽団と混声合唱団でカンの曲を演奏したごとし。中間部のティンパニーの乱舞が壮快。B面では各種打楽器の乱れ打ちから、いきなりオラトリオ〜オペラ的な純粋歌曲に切りかわり、リスナーのド肝を抜く。エレクトロ・ポップ的楽曲はすべてヒット・チャート入りしそうなほどキャッチー。音の仕掛りは極めて緻密。音響面は完璧。なぜ無視されてきたのか、理解に苦しむ。 (ミワ)



ZARA-THUSTRA
Ritter Der Nehen Zeit
LP/Teldec 6. 26065 '85年

ZARA-THUSTRAの'85年の作品。ドイツのシンフォニック・ロックは甘味の強すぎるものが多いが、この作品はやや甘口で情緒に流される所があるものの、情緒一辺倒ではなく、メリハリのある、キーボードを重視したシンフォニック・ロックになっている。音から受ける印象は、ちょうどANYONES' DAUGHTERの5thアルバム、「NEUE STERNE」の音を分厚く大仰にしたような印象。「NEUE STERNE」と同じようなポップ感や疾走感、リズムの音作り(リズムマシーンの多用)があるのは制作年代による影響だろうか?。いわゆるシンフォニック・ロックのファンでも、大仰なアレンジや意外にポップな所が好き嫌いの別れるところだろう。メンバーに同姓が4人も居るので家庭バンドと思われる。 (野呂)



ZOMBY WOOF
Riding On A Tear
LP/Jupiter 25231 OT '77年

アイヴォリーを送り出した事で知られている、ジュピターレーベルから隠れた名盤を残しているゾンビーウーフ。恐らく唯一の作品かと思われる。〝甦った狼の屍〟と訳すのだろうか?少々無気味なネーミングのグループである。サウンドの方もおどろおどろしいヘヴィーな内容かと思いきや、彼等は軽快さと重厚さと兼ね備えた、70年代初期から中期にかけてのブリティッシュ・ヘヴィ&プログレッシヴタイプの曲をプレイしている。劇的なピアノソロで幕を開け、ツインギターとキーボードが程良くからみ合い力強いリズムセクションが加わるという、終始一貫したスタイルで進行させていきながらも、聴く者の心に一曲ごとの持ち味の良さというか、不思議な余韻を残してくれる。77年の作。 (大関)

GERMAN EXPERIMENTAL MUSIC

ドイツ・アヴァンギャルドの最新保守感覚

電子アカデミズムとノイズ

●秋田昌美

シュトックハウゼン、アンリ、ケージといった五十年代〜六十年代に活躍した前衛音楽家たちのCD再発が盛んだ。彼らは主に電子音響音楽、ライブ・エレクトロニクス、即興音楽といった方面のパイオニアたちである事は周知だが、こうしたテイストが今の若いノイズ・ミュージシャンたちに何故か歓迎されている。それが現代音楽の父たちにとってのように音楽的実験ではなく、「感覚」の実験である事に現代的感覚が現れている。というのは、かつて、カン、Kのクラスター、クラフトワーク、アモン・デュール、グルグル、ノイ、ブレイン・チケット、エムブリオといった連中が行った「今から見るといかにもフェイクな」現代音楽的表現と似ている気もする。そして、今、前衛の王御所たちの召喚がドイツ系ノイズ・アーティストたちから行われている点も注目に値する。

LAIBACH、TG、SPKを始めとするリリースで知られるハンブルクのレーベル、WALTER ULBRICHTが提唱したコンセプトは「NEU KONSERVATIW」(新保守主義)だった。WALTER ULBRICHTで実質的に活動している匿名のノイズ・エレクトロニクス・バンドWERKBUNDは、右翼の宣伝ポスターが街頭に人知れず貼られるように、予告なく不気味にアルバムを連発している。WERKBUNDの影のミュージック・コンポーザーがASMUS TIETCHENSである。彼は最初クラスターのハンス・ヨアヒム・ヨーデリウスにテープを見いだされ、ダンジェリン・ドリームのピーター・バウマンの働きかけでEGGからデビューした経歴を持つ。TIETCHENSはSKYで何枚かレコードを出した後、今日のノイズ・アヴァンギャルドのフィールドでずっと活動してきたが、七十年代のドイツ・エレクトロニクスと今日のノイズの流れの中で貴重なパーソナリティである。

「NEU KONSERVATIW」のコンセプトの「危なさ」はドイツ的「前衛」の持つ「危うさ」を表してもいる。それは、クラフトワークのテクノ・シーンでの再評価とともにドイツ的「前衛」の持つ「電子的ナショナリズム」を露呈するはずだ。このコンテキストに照らし合わせれば、今、「前衛」なるものが新しい「保守」として若い世代にアピールしているのは不思議ではない。が、その特徴は前記したように、「テイスト」としての「前衛」であり、「心地良さ」としての「前衛」というセンソリー・エクスプロイテーション(感覚探査)の新しい動向が生まれているのだ。

＊

こうした保守と新感覚の混ざり合った最近の「ノイズ」のドイツ的傾向を端的に表しているのが、CHRISTOPH HEEMANN、FRANK DOMMERT、C.SCHULZ、PFN、といったアーティストたちの作業だろう。

C.HEEMANNは八十年代初頭に結成されたHNASのメンバーで、最近はHNAS以外にソロやエドワード・カスペル(レジェンダリー・ピンク・ドッツ)ジム・オルーク(イリュージョン・オブ・セイフティ)等とのコラボレーション・ユニットMIMIR、メルツバウ、ジョン・ダンカン、FRANK DOMMERT等とのコラボレーションやミックスの作業で多忙だ。HNASは八十年代にはNWW、ASMUS TIETCHENS、AMM、ANIMA等のエレクトロニクス/即興の流れで活動したが、HEEMANN自身、六十年代のESPサイケや七十年代のCAN、ファウストといったジャーマン・プログレからのインスパイアを主張しているように、音楽の持つビザールなテイストやムードを重要視した音作りを行っていた。

HNASのレーベル、DOMは現在DOM ELCHKLANG、DRADOMEL等幾つかにユニット化され、HEEMANNは別にSTREAMLINEという新しいレーベルを作った。このレーベルのラインナップにはLIMPE FUCHS(ANIMA)や灰野敬二も含まれている。HEEMANNの最近の作品はアンビエント・ミュージックやニューエイジの傾向が強まって、益々ムーディーになっているが、長大な流れるようなアンビエント・エレクトロニクスを秒刻みにデジタル・ミックスするマニアックなコンポジションによって万華鏡のような快音を作り出そうとしている。

HEEMANNがFRANK DOMMERTと組んだDOMMERTのLP『KIFERMUSIK』はもっとミニマルでモノトーンなエレクトロニクスだ。必要最低限のノイズ・ループと余白、発信音、強弱等から成るもので、五十年代のステレオ・システムの為のサウンド・チェック・レコーディングを思わせるビザールなテイストだ。ここでは、ケージやシュトックハウゼンの前衛音楽が空間を演出するだけの装飾音楽、つまり、アンビエント・ミュージックとして骨抜きにされているわけである。

HNASのもう一人のメンバー、ACHIM P. LI KHANがFRANK ROWENTAと組んで作ったLP『TIEFPUNKTE MODERNER TONKOMPOSITION』も、かつての「前衛」へのオマージュだろう。文字中心にデザインされたアルバム・カバーはWERGOの現代音楽シリーズ等のパロディだろう。見開きというのもアナクロだが、中写真は居間で8ミリ映画を見てくつろぐカップル。おそらく昔のエロ本から無断借用したものと思われるが、こんなくだらない写真を見開きで使うところはあいかわらずノイズらしい。エドガー・フロウゼの



●HNAS/Willkür Nach Noten
(CD：Dragnet 06)



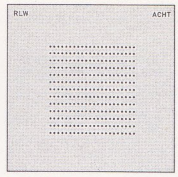
●FRANK ROWENTA, ACHIM P.LIKHAN/Tiefpunkte Moderner Tonkomposition
(LP：Dradomel 05)



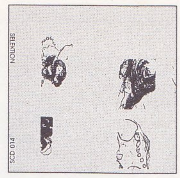
●C.SCHULZ/10.Hose Horn
(LP：Entenpfuhl EMM 02)



●KONTAKTA/Kontakta
(CD：Odd Size OS 13)



●RLW/Acht
(CD：selektion SCD 008)



●RLW/14
(CD：Selektion SCD 014)

『イプシロン・イン・マレイシアン・ペール』の中ジャケと同じようにドイツらしいアイデアだ。音の方は今時誰もやらないような「前衛」的なミュージック・コンクレートだ。

FRANK DOMMERTともコラボレーションを行っているC.SCHULZはHNAS一派の「前衛」よりもっとポップでモダーンな味を出している。C.SCHULZはコロン在住のCARSTEN SCHULZのプロジェクトで、ENTENPFUHL、ERFOLG、QUIET ARTWORKS、ODD SIZE、DOM、EXTREMEといったレーベルから作品をリリースしている。一九九〇年にリリースしたLP『10. HOSE HORN』は、NWWの『SYLVIE AND BABS…』的なビザールなサウンド・コラージュ/アヴァン・ポップだが、鳥や動物の鳴き声、子供の声や陳腐なレコードのサンプリング等を使用しておりガジェット感覚に溢れている。エレクトロニクスの音色もポップだ。おそらく自宅と思われる録音スタジオの名前がカスパー・ハウザー・スタジオというのも苦笑いできる。

同年リリースされたマキシ・シングル『7.PARTY DISCO』はリズムを使ったもっとポップな作品である。「もし、カンやクラフトワークがモダン・スタイルでやったらこうなるだろう」とカタログにはある。確かにC.SCHULZの作品はNWW、HNASといったノイズ・アヴァンギャルドのコンテキストの中でもポップなものだ。だが、もちろんポップといっても市場にアピールするようなポップではなく、もっとアーティスティックなものであるのは言うまでもない。

C. SCHULZはMARCUS SCHMICKERやFRANK DOMMERTらと「電子音響ライブ・アンサンブル」(C. SCHULZ)KONTAKTAを組んでおり、最近ODD SIZEから初CDもリリースされた。シュトックハウゼンの作品名を連想させるKONTAKTAは確かに六十年代の幸福なライブ・エレクトロニクスの今日的ヴァージョンといえる。かつて、「即興」「交換」等という合い言葉のもとに行われた音楽実験がいとも軽やかに行われる様は愉快だ。パロディというよりKONTAKTAのスタンスは非常にナチュラルだ。又、KONTAKTAとも重複するメンバーでPOLなるユニットも組んでいる。未聴だが、「トランス・エスノ・テクノ、ゴング、ジ・オーブ、ON-U、23 SKIDOO等がクロスオーバーしたような音」という事で、それだけ聞いても何とも心地好いサウンドが想像できる。

C.SCHULZ、ARCANE DEVICE、YEAST CULTURE等をリリースしているケルンのレーベル、QUIET ARTWORKSはINA GRM、PHILIPS、EDITION RZ等の電子音響音楽のレコードをディストリビーションもしていたが、主宰者MONIKA WESTPHALのPFNの作りだすミニマルなノイズ・エレクトロニクスはあくまでも優しく心地好い響きだ。

＊

こうした新傾向とは別にドイツ的学究派ノイズも健在だ。その代表的な存在がSELEKTION一派だ。SELEKTIONはもともと八十年代初頭、マインツの大学を中心に活動を始めたバンドPDが発展解消してP16D4と名乗り、八十二年に形成したレーベルである。SELEKTIONはノイバウテンらを生んだ七十年代後半のノイエ・ドイチェ・ヴェレのシーンから突出した音楽/政治/芸術運動のポスト・インダストリアル的な展開を示した。P16D4は電子音響音楽、テープ・コラージュ等の手法をポスト・パンク以後の音楽コンテキストに接合させた。八十六年にフランクフルトのS. B. O. T. H. I.との二枚組コラボレーションLP『NICHTS NIEMAND NIRGEND NIE』に於いてノイズ・コンポジションの新しい方向性としての「エキスチェンジド・ミュージック」のアイデアが具体化された。

SELEKTIONの八十年代の活動は、ポスト・パンクのコンテキストの中でノイズを核にした様々な音響空間の可能性を探査する重要な作業として記憶される。良い意味で彼らはドイツ的「前衛」を継承している。P16D4の中心メンバー、RALFはしばらく活動を停止していたが、最近、RLW名義で活動を再開した。SELEKTIONから一九九二年にリリースされたCD『ACHT』はコンピューターを応用したコンポジションが行われており、又、九十三年のCD『14』は八〇年から九十四年まで十四年間の録音の中からリワークした十四トラックが収録されている。「音楽は未完であり、あらゆるトラックは他の別のトラックと接続可能だ」というエキスチェンジド・ミュージックのアイデアはRALFにとって今彼自身の「歴史的」命題になっているのだと思う。フランスのODD SIZEでのSELEKTIONの初期アナログ盤CD再発化も進行中であり、過去十数年間の実験の再認が進行中だ。それらは、たんに過去へのレトロな遡及ではなく、過去と連続した音の再構築作業という現在進行形の作業だ。SELEKTIONはSLP、ACHIM WOLLSCHEID(元S.B.O.T.H.I.)、BERNARD GÜNTER等のCDリリースも進めており、九十二年のコンピレーション『COMPROMIZE』にSELEKTIONの新しいマテリアルを含めた音の現在形を聴きとれる。



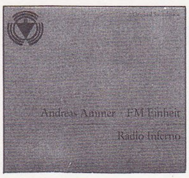
ALFRED HARTH
This Earth!
LP/ECM 1264　'?年



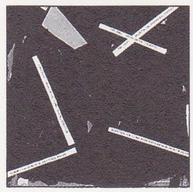
ALFRED 23 HARTH
Sweet Paris
LP /Free Flow Music Production ffm 0291　'91年
CD/Free Flow Music Production ffm 0291

ゲッペルスとのデュオ解消後のハルトの作品では、即興演奏ならジョン・ゾーンとリンジー・クーパーをゲストに迎えた『プラン・エデン』を、作曲作品では何といっても本作を挙げたい。ここで音楽は、死の影を宿した濃密なドイツ・ロマンティシズムに侵されている。ハルトとマギー・ニコルス(vo)が身を震わせながら寄り添い、やがてもつれるように折り重なり合う表層（それは夕闇に閉ざされた暗い湖面の広がりを思わせる）から、バール・フィリップス(b)が息をひそめ耳を澄ます深淵へと、凍りつくほど優雅に、だが冷酷なまでに確実に瞬間を踏み外しながら（まるで冷やかに透き通った鏡の中へと歩むオルフェウスのように）降りていくポール・ブレイのピアノは、死の甘い香りをむせかえるほどに放っている。　（福島）

GOEBBELS & HARTH以前よりフリー・ジャズ・サイドで活動を繰り広げていたハルトだが、ゲッペルズと活動をともにするようになってからは自由な音楽活動を展開。J・ゾーンやP・ブレッツマンとのデュオ活動はフリー・ジャズの枠内でも理解可能だが、ハルトのソロ・アルバムは決して一筋縄では行かない。判る範囲でも『This Earth』('83)、『Melchior』('85)、『Red Art』('86)、『Anything Goes』('86)、『Plan Eden』('88)といったアルバム（一部デュオ・アルバム）が出ている。本作はヴォルフ・ペールケのパリからの書簡に基づく作品だが、'65～'91年の様々な音源を編集している。ゲッペルズ作品と比較したくなる猥雑さと切れの良さ。この企画では写真集とヴィデオも発売されているらしい。　（坂本）



ANDREAS AMMER · FM EINHEIT
Radio Inferno
LP/Rough Trade EGO 203　'93年



ANIMA/ACHIM FREYER
Bruchst cke F r Ilona
LP/Loft 1010/1011　'86年

A・アーメル（脚本）とノイバウテンの中心メンバーであるアインハイト（作曲）との共同作品。タイトル通りダンテの『神曲』に基づくラジオ劇である。同僚ブリクサのほか、フィル・ミントン(熱演!)やジョン・ピール（ラジオ・インフェルノのアナウンサー）達から成る英独伊混成ヴォイス陣にカスパール・ブレッツマン(g)という豪華メンバーのもと、あざといまでに雄弁な声と、重工業的オーケストラに混声合唱、ノイズ・コンクレートにヘビメタ・ギターと、ひたすらにサブライムな音響を積み上げて（時折挿入される軽音楽との眼の眩むような落差)、強迫的なまでにメガロマニアックな音絵巻を繰り広げている。全34場。パッケージにはギュスターヴ・ドレによる『神曲』挿絵８葉が綴じ込まれている。　（福島）

フリードリヒ・グルダ(p)の参加したPilz盤（72年）に聴かれるジャズ的なノリやスピード感、とりわけフリー・ジャズ特有の熱狂的集中と高揚はここにはない。リンペ・フックスの軽やかに跳びはねる声に導かれ、ウッドブロックやスティール・ドラムのオモチャのような音、自作楽器によるドローン、ディレイをかけたチューバのつぶやき、ヴァイオリンの簡単な繰り返し等が、決して空間を埋め尽くすことなく、充分に隙間を空けて、あちらこちらにオブジェのように気ままに置かれている。聴く者はちょうど庭園を散策し彫像や噴水を眺めてまわるように、この「音楽劇」を楽しむことになる。81年加入のゾロ・バベルの軽やかに弾けるドラムスとリンペのヴァイオリンの絡む部分では演奏性が前面に出てくる。　（福島）



ASMUS TIETCHENS
Formen Letzter Hausmusik
LP/United Dairies UD 014　'84年



CASPAR BROTZMANN MASSAKER
Der Abend Der Schwarzen Folklore
CD/Our Choice RTD 195.1248.2　'92年

クラスターへの協力（例えばイーノとの共演盤に彼の名を見出せる）以来現在まで、この黒ずくめの服に身を包んだ「ドイツ・ポスト・アヴァンギャルドの祭司」は本作に聴かれる通り、暗闇に浮かび上がる弦の金属的な輝きや、クリスタル・ガラスの豊かな倍音、ピアノ線の冷え冷えとした硬質な残響に魅せられ、音響の微細にして精緻な内部動作や、崇高とさえ言える圧倒的な顕現を組織する。あるいは『Daseinsverfehlung』において眼前に現れる超高速で遷移／振動／回転／変形する音の柱や、長年にわたる協力者オッコ・ベッカーとの共作『E』に収められた時代錯誤的な前衛主義。それらはすべて、数学的情熱を含むあらゆる音楽的エモーションから隔絶しており、強靱な反人間主義的力線に貫かれている。　（福島）

名前からも想像できるだろうが、カスパー・ブレッツマンはあのペーター・ブレッツマンの息子だ。あの親にしてこの子あり。泣く子も黙るヨーロッパ・フリーのヘラクレスは、究極のノイズ・ギタリストを生んだ。ＣＤなのだから好きな音量で聴けばいいではないか、と言われるかも知れないが、このアルバムはどんな音量で聴いてもギターがメチャクチャにうるさい。よくぞ録音機材が壊れなかったものだと感心してしまうほどの音圧。一応トリオ編成で、エドゥアルド・デルガード・ロペツ(b)とダニー・アーノルド・ローメン(d)がMASSAKERの残りのメンバーだ。しかし、バンドと言ってもここまで凄まじいバランスだと、ロックには聞こえない。特殊な実験音楽を聴いているような面白さ。　（坂本）



CASSIBER
Man Or Monkey
CD/Re'RCCD2　'82年

アート・ベアーズの頃からカトラーは様々なバンド／プロジェクトを国境を越えて同時進行させる様になる。その一つとしてハイナー・ゲッペルス、アルフレッド・ハルト（この両名は以前から連名で活動していた）クリストフ・アンデルスとこのカシバーを組む。元来一枚のみのプロジェクトだったのだが断続的ながらも活動が継続しているのはやはり相性が良ったのだろうか。オリジナルは12'EP二枚組として発表された本デビュー作、カトラーの詞を基にした即興で成立っている。だがそれが信じ難い程の整合性を持つ。とは言え一瞬一瞬に見られる音のスリルは確かに即興ならではの物である。多少の編集を含めてある種の際どい所でかろうじて成立している音楽ならではのこの緊張感はちょっと類を見ない物。（中西）



CASSIBER
Beauty & The Beast
LP/Re Records Re 0110　'84年

CASSIBERの２ndアルバム。全くのインプロヴィゼーションを繰り広げながら、驚異的な音楽を築き上げた前作に続き、同様のコンセプトで望んだ作品だが、今回は前回ほどの成功を納めるには至らなかった。インプロヴィゼーションというのは本来そういうものだろう。信じられないような高みに到達することもあれば、まるで飛翔できないこともある。それほど悲惨な出来ではないのだが、前作が凄すぎた。おまけに方法論を転換した次作、次々作がいずれ劣らぬ傑作と来れば、本作は些か惨めな立場に立たざるを得ない。現在、本作だけがＣＤ化されていないのも、本人達自身があまり納得していないことを意味するだろう。しかし何曲かは埋もれて欲しくない内容であり、思い切った再編集を望みたい気がする。（坂本）



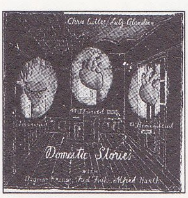
CASSIBER
A Perfect World
CD/ReR Megacorp ReRB0000CD
'87年

３作目、ここから彼等のカラーは変わった。コンポジションの導入。その前にChris Cutlerの偉大且つ膨大な活動の中でも最重要チェックをしておきたいバンドの演奏。いや、ドラマーは彼にならなかったかもしれないという史実から、いや、むしろ根本にはH. Goebbels & A.Harthという高レベルな音楽を提供してきたデュオの進化発展型か。暴力的な主題の提示から音数をしぼり気味にしたり全速力で疾走したり。その上で吐き捨て、叩き付けるようなヴォーカルが踊り、サンプリング音がそれを煽り、ドラムが強力に楽曲を推進させる。全詩と注釈文はC. Cutlerによる。まずは'80年代後半から現在までのレコメン系の最大注目アーティスト。（伊藤）



CASSIBER
A Face We All Know
CD/ReR Megacorp CCD　'91年

全作の路線を継承し発展させた４枚目は同様にChris Cutler、Christoph Anders、Heiner Goebbelsの３人による演奏。細かいセグメントに分かれてはいるが、全体として大きく３パートに分かれている（これは楽曲からというより歌詞の内容からだろう）。歌詞は主にCutlerによって書かれているがAndersやThomas Pynchonによる部分もあり。作曲はGoebbelsとAndersにまかされているが１曲Rene Lussierによるものも。本作ではより明確な作曲がされており、彼等の作品の中では最も取っつきやすいだろう。この演奏内容、既に「伝説の」といって良い来日公演に近く（当然か、あれは'92年だった）いやがうえにも再来日を望まずにはいられない。この作品、最大級の推薦盤。この辺りに馴染みの無い人は本作から。（伊藤）



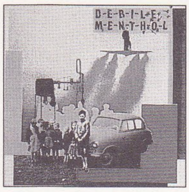
CHRIS CUTLER/LUTZ GLANDIEN
Domestic Stories
CD/(U.K.)Recommended ReR LSM CD
'92年

カトラーと旧東独出身の作曲家グランディーンとの共作であるとは言え、アイディア自体はアート・ベアーズ時代からの物と言う事で果してドイツにくくって良いのかは疑問なのだが、曲を書いているのはグランディーンな訳だし国際交流が盛んなレコメン系やジャズ系は元々国別にくくれる物でもなかろう。ともあれダグマー、フリス、ハルトを迎えた本作、アート・ベアーズの三人が顔を揃えた事からも又、その内容からも安定して信用が出来るカトラーの作品の中でも欠かす事の出来無い物。アート・ベアーズ程表立った切迫感は無いもののダグマーの唄と控え目ながら力の入ったバックには引き込まれる。尚、詞についてはここでどうこう言える代物では無いのでマーキー48号のカトラーの文を参照して欲しい。（中西）



DAS PFERD
Kisses
CD/ITM Records 979.030　'88年

ジャーマン・ジャズ・ロック・シーンを大きく塗り替えてしまったのがこのDAS PFERDだ。当時世界で一番カッコよくぶっ飛んでいたジャズ・ロック・バンドと言っていい。おそろしくタイトなリズムと、はじけるポップ・センス、おしゃれでアヴァンギャルド、という彼らのサウンドは、ある部分で正統的なマイルス・デイヴィスの後継でもある。1st『Das Pferd』('87)にはＴ・コラ(vc)も参加していたが、２ndの本作にはＲ・ブレッカー(tp、flh)、Ｂ・バング(vln)、Ｐ・ブレッツマン(sax)、Ｍ・マズール(d、perc)らが参加。それでこのサウンドだから凄い。リーダーはヤン・カツタ(b)とヴォルフガンク・シュミトゥケ(sax、kb)のふたり。カツタはドイツのラズウェル、あるいはエルボーグとも言える重要人物だ。（坂本）



DEBILE MENTHOL (Switzerland)
Emile Au Jardin Patrologique
LP/(Swi)Rec Rec 01　'81年

　スイスとレコメンの関係はサンライズ・スタジオの存在からしても浅からぬ物が有り、同国の支部は今やヨーロッパにおける中核としての役割を果しているがその第一弾がこれ。バンド自体もNIMALやL'ENSEMBLE RAYÉ等につながり重要。さてそのサウンドだがそれ以前のいわゆるオリジナル・レコメン組が各国で独自に切り開いた圧倒的にクセの強いサウンドを持っていたのに対し、最初からレコメンを意識したかの様な整然とした感触（演奏自体は例の復雑怪奇な物）を持ちそこいら辺りは同期のカートウーン(米)やナツカ(メキシコ)辺りと共通する所。こう言った行き方には賛否両方あろうが作品としての完成度は当然高く又時代柄かニューウエーヴ的な感覚を取り込むなどの持味も有る分コピー的な物では無い。　(中西)



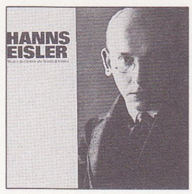
EINSTURZENDE NEUBAUTEN
Kollaps
LP/Zick Zack ZZ 65　'82年

　この音楽を分類すると『ノイズ』に入るのだろうが、実はこの名称『ノイズ音楽』には何の定義もなく、ある物はシンセ音楽であり、ある物はミュージック・コンクレートであったりする。ノイバウテンは５人のメンバーの内、２〜3人が『鉄』を演奏する。これだけなら現代音楽やアヴァンギャルドに幾らでも先例があるが、彼らがオーバーグラウンドに浮上し得た原因は、その鉄の音に都市の音響という概念を付加し、ロックとして提示したという点であろう。様々に加工された鉄板音響に、カリスマ性を持ったリーダー＆ヴォーカルであるブリクサの存在が加わり、初期ジャーマンロックに通底する強靭な音楽性を持つ。近年突如復活ライヴを行ったファウストがこのノイバウテンそのままの音楽を演奏した事実が彼らの重要性を証明している。(中野)



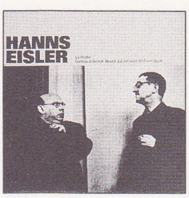
GESTALT ET JIVE
Nouvelle Cuisine
LP/Moers Music 02038　'85年

　ゲシュタルト・エ・ジャイヴ。バンド名からも判る通り、ドイツ、フランス、イギリス、更にアメリカのミュージシャンが国籍を越えて集まったスーパー・グループ。アルフレート・ハルト(sax)を中心に、スティーヴ・ベレスフォード(org)、フェルディナン・リシャール(b)、ウーヴェ・シュミット(d)、アントン・フィアー(d)が集まった。凄い面子だが、ベレスフォードがオルガンを弾いているあたりが尋常なセッションではない。基本はインプロヴィゼーションなのだが、慎重にフリー・ジャズを回避しており、R・I・O系ジャズ・ロック・セッションと言える内容となっている。その後、ハルト＋リシャール＋ピーター・ホリンガー(d)の３人で２枚組の２ndアルバム『Gestalt Et Jive』('86)を発表している。　(坂本)



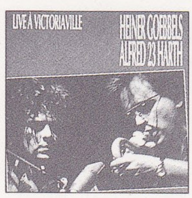
HANS EISLER
Musica Da Camera Alla Scuola Di Vienna
LP /L'Orchestra OLPS 55018
'?年(録音'71年)

　ドイツ一国にとどまらず、ゲッベルス＆ハルト、アート・ベアーズをはじめ、世界の左翼音楽へのアイスラーの影響は計り知れない。ここではリリースの事実は広く知られながら、内容についてはほとんど語られることのなかった２枚の伊ロルケストラ盤を紹介しよう。本作は初期（20代）の新ウィーン楽派時代（アイスラーはシェーンベルクの最も将来を嘱望された生徒であったが、その後師と離反する）の室内楽・歌曲を収めている。耳にする機会の多い「ブレヒト・ソング」に比べ、これらの小曲はすべて、ほとんど「古典的」とさえ言える均整のとれた構成と端正な響きの馨しさに満ちており、後に顕著となる演劇的な対比や、パート間の対立と軋轢といった要素はまだ感じられない。音源は東独ノヴァの作品集か？　(福島)



HANS EISLER
La Madre
LP /L'Orchestra OLPS 55019
'?年(録音'69年〜'70年)

　本作は、マキシム・ゴーリキーの原作をブレヒトが脚色しアイスラーが作曲したカンタータ『母』を収めている。編成は男女独唱各１名＋混声合唱＋朗読者４名であり、ここでは伴奏によりエコノミックなピアノ２台による版を採用している。演奏は語りに遮られながら進み、２台のピアノは（音量的なバランスの上でも）通常の添え物的な伴奏の域を遙かに逸脱して、リズミックな構造を明らかにしながら声と鋭くせめぎ合い、内部の軋轢を高めていく。そしてソロと呼びかけ合う合唱の激昂ぶりがあたりを熱狂で満たそうとするや、コメンテイターの落ち着きはらった語りが冷水を浴びせる。ダグマーの分光器的な名唱を聴き知った耳には、特に女声のクラシック的発声が物足りないが、その分構成の妙は味わい易い。　(福島)



HEINER GOEBBELS & ALFRED 23 HARTH
Live A Victoriaville
LP /(Can.)Victo VICTO 04　'88年
CD/(Can.)Victo VICTOcd04

　既にCASSIBERが始動し、更にはそのCASSIBERをハルトが脱退した後もふたりは共演を継続し、'87年にはカナダで開催されているヴィクトリアヴィル国際現代音楽祭に出演。その時のライヴ録音がこのアルバムだ。スタジオ盤では演奏技術を超越した音づくりを強調していたため、彼らがどれほどライヴ演奏に耐えるのか想像もつかなかったが、ここで明らかにされたのは、彼らが間違いなく超一流の音楽家／演奏家である事実だ。一切のゲストなしで、彼らにしか作り得ない音楽を見事に華麗に披露してみせる。このフェスティヴァルではゲッペルズの『The Man In The Elevator』も演奏されたというから、ゲッペルズへの注目度は凄まじいものがあったに違いない。'93年のＣＤ化に際し、１曲目が追加されている。　(坂本)



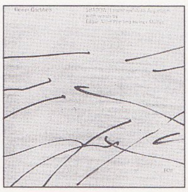
HEINER GOEBBELS
Der Mann Im Fahrstuhl/The Man In The Elevator
LP /ECM 1369　'88年
CD/ECM 1369

カトラーとヘイワードのどちらを選ぶのに迷うと言うのも凄い話だが、結局、別々のプロジェクトで両者共に起用出来てしまうのだから贅沢な話だ。それはともかくヘイワードの他A・リンゼイ、D・チェリー、F・フリス等を迎えた本作、(旧東)独の小説家(?)ハイナー・ミュラーのテクストに音楽を組み合わせた物。いわゆる不条理物めいたテクストの為筋書きの紹介にほとんど意味が無いのだが大雑把に言えばエレベーターに閉じ込められたサラリーマン、脱出を果すとそこは…!?。これでは二時間ドラマだがマジな話テクストを読みながら聴くと大分印象が違う。(英語も使っているから大丈夫)特にリンゼイのニューロチックな声とドイツ語の響きの対比が効果的。勿論曲／演奏共申し分無く格好良いのは当然。　(中西)



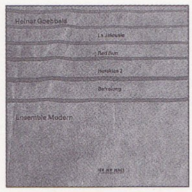
HEINER GOEBBELS & ALFRED 23 HARTH
Goebbels Heart
LP /(Jap.)Eva Records WWCX2042 '92年
CD/(Jap.)Eva Records WWCX2042

ハイナー・ゲッベルズ(kb、etc.)が'60年代末からフリー・ジャズ・シーンで活躍していたアルフレート・ハルト(sax、etc.)と出会い、様々な形態での共演を試み始めたのは'75年のこと。ベルトルト・ブレヒト／ハンス・アイスラーの作品を動機としてたゆまぬ独自の実験を続け、『Hommage: Vier Fauste Fur Hanns Eisler』('77)、『Vom Sprengen Des Gartens』('80)、『Zeit Wird Knapp』('81)、『Indianer Fur Morgen』('82)、『Frankfurt-Peking』('85)、『Live A Victoriaville』('88)を残している。本アルバムは『Zeit Wird Knapp』、『Indianer Fur Morgen』、『Frankfurt-Peking』の3作を日本で編集した究極のベスト・アルバム。ダグマー・クラウゼも参加。　(坂本)



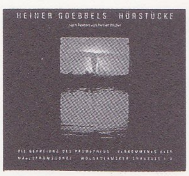
HEINER GOEBBELS
Shadow/Landscape With Argonauts
CD/ECM 1480 513 372-2　'93年

彼を中心にサポートが凄い。チャールズ・ヘイワードにルネ・ルシエ、他に2人。エドガー・アラン・ポーとハイナー・ミュラーのテクストに曲を付けるという形式で16のパートに分かれる楽曲。町中で録音したストリートノイズやサンプリングの音を要所要所で効果的に背景に持ってきたり、会話調の語りを挟みながらたおやかに曲は進んで行く。音の数を詰め込んだ感じではなく、ゆったりと重なり合ってゆく各楽器はそれでもぴりぴりと張りつめた鋭さを感じさせる。これはやはりコンポーズ能力に尽きるところだろう。彼が参加する数ある作品の中でも上位にランクされる、侮れない1枚。
(伊藤)



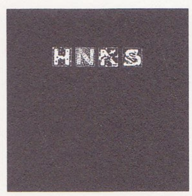
ENSEMBLE MODERN
Heiner Goebbels
LP /ECM Records ECM NEW SERIES 1483 437997-2　'93年
CD/ECM Records ECM NEW SERIES 1483 437997-2

自らの活動範囲を限定しないゲッペルズは、ロック・フィールドにとどまらず、例えば舞台音楽やラジオ・ドラマ作品にも積極的に取り組んで来たが、'88年からは本格的に現代音楽領域に参入し、ユンゲ・ドイッチェ・フィルの室内オーケストラ、アンサンブル・モデルンやパリのアンサンブル・アンテルコンタンポラーンに次々と作品を提供。その全貌がここに初めて明らかになった。アンサンブル・モデルンは直前にフランク・ザッパ作品をアルバム化し、話題を呼んだばかりだったが、このゲッペルズ作品でも大変な成果を納めている。エレクトリック・ギターやサンプラーまで駆使して繰り広げる熱演は現代オーケストラの行方を雄弁に示唆する。ゲッペルズの音楽は些かもひるむことなく力強さに満ちている。　(坂本)



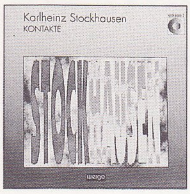
HEINER GOEBBELS
Horstucke
LP /ECM Records ECM 1452-54 513368-2　'94年
CD/ECM Records ECM 1452-54 513368-2

まだリリースされたばかりの『ラジオ劇集』。ＣＤ３枚組の大作だ。これで謎に包まれていた彼のラジオ作品が一挙にその全体像を明らかにした。１枚目の「プロメテウスの解放」、２枚目前半の「没落の岸辺」は'86年にRiskantより発売されたゲッペルズの１stアルバムに収録されていたが、現在は入手困難となっていた。２枚目後半の「メールシュトローム南極」と３枚目の「戦車ハイウェイ」はこれが初アルバム化となる。ハイナー・ミュラー、エドガー・アラン・ポーの言語作品を動機とし、ミュージック・コンクレート手法を駆使した、現代音楽、ロック、ヘヴィメタル、ラップにまで及ぶ音楽の意匠を巧みに織りあげた巨大な音響詩作品集。ゲッペルズがどれほど重要な音楽家がいやというほど判る傑作。　(坂本)



HIRSCH NICHT AUS SOFA (H. N. A. S.)
Bitte Werfen Sie Ihren M ll Aus Dem Fenster
LP /Freedom in a Vacuum VACMLP03 '87年

不明瞭に歪んだ『Abwassermusik』(85年)、ＮＷＷの協力による繊細なエレクトロニクス操作が気怠い昏さに水没していく『Melchior』(86年)、自身のレーベルＤＯＭからの再生不良エレポップ『K ttel Im Frost』(同)と、作品制作を重ねるうちに、彼らは自らのキッチュな資質を見定めたようだ。本作では滑らかなチェロやオルガンによる催眠的なドローン、霧のようなエコーを身にまとい、その名の通り聴く者を深淵に引き込むローレライの呆けたヴォイス、まるであぶくのようにフワフワとした隙間だらけのリズムが、次第に輪郭を曖昧にしながら、室内を薄紫色のほのかな匂いで満たす。リーダー格のクリストフ・ヒーマンにはソロ作のほか〝メルツバウ〟との共同作業や〝MIMIR〟への参加等がある。　(福島)



KARLHEINZ STOCKHAUSEN
Kontakte

LP /Wergo WER60009　'64年
CD/Wergo WER6009-2

　ボーイ・ソプラノにテープ操作を施し、また電子音により声音を合成することによって、『少年の歌』は両者が相互浸透した滑らかな連続体となった。電子音楽による音色的、和声／旋律的、リズム的構成の統一体構築を目指した彼は、『グルッペン』における音高と持続の統一セリー化（32の振動は超低音だが、４なら１秒に４拍のパルスとなる）に続いて、本作で音色スケール（音色の漸次変化・楽音〜ノイズ間の移行）の設定を試みる。もはや主要な音素材は滑らかに変化しながら３次元空間いっぱいに飛び回る電子音であり、ピアノや打楽器はより広範な電子空間へ向けてのオリエンテーションに過ぎない。本作における音色と空間（運動）構成が、後の独電子音楽（ロックを含む）のパレットとなった感すらある。　(福島)



KARLHEINZ STOCKHAUSEN
Sternklang

LP /Deutsch Grammophon 2707
123(2531 281-2)　'76年

　彼は空間をコンポーズする。初期の電子音楽以来、それらはまず音響空間への注視として現れ、時に聴衆を取り囲んでスピーカーやオーケストラが配置された。本作は公園の中に分散配置された５組の演奏グループのための作品であり、基づくべき和声等の初期条件設定や、グループ間をたいまつを持って走り音楽モデルを伝達する使者、時折中央で打ち鳴らされる太鼓によるテンポの調律…といった様々な仕掛けに加え、演奏者は聞こえにくい他グループの音に耳を澄まし、観客をも巻き込んで宇宙的同一化を達成することが求められる。「他の天体からの来訪者への準備を意図した」との彼の説明は、その後ますます明らかになる神秘主義への傾倒をよそに、グルグル『ＵＦＯ』に添えられた例のコメントと響き合う。　(福島)



KARLHEINZ STOCKHAUSEN
Kurzwellen

LP /Deutsch Grammophon 2707
045 (139 451-2)　'87年

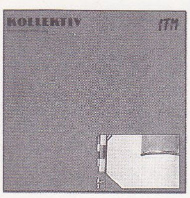
　本作は各演奏者が短波ラジオに耳を傾け、そこから聞こえてくる音に、様々な指定された仕方（模倣・変形・置換等）で反応するものであり、一聴した印象はジョン・ゾーンの『アーチェリー』にも近い。この類似は二つの演奏がともに、演奏の外部に設定されたスケールに基づく管理された（ルール化された）相互作用から成り立っていることによると考えられる。しかしシュトックハウゼンにおいて、本作は『テレムジーク』の民族音楽、『ヒュムネン』の国歌のコラージュの延長上に、すなわち世界音楽を超えて世界の「外」へと向かう動きとして位置付けられ、演奏者は短波ラジオを通して未知なるものの語りかけを聴き取るよう求められる。ここでの電子メディア環境への注視は神秘主義的な色合いを濃く帯びている。(福島)



KLANGRÄ UME
Klangrä Ume

LP/AufRuhr ART CD 001　'91年

　自動車の騒音や足音、群衆の歓声といった現実音を素材としたテープ･コラージュ、語り手により読み上げられ演じられるテクスト、「現代音楽」風の室内楽演奏（硬質なアンサンブルにアコーディオンが鬱しさを添える）が、ライヴ空間を横切り、立ち止まり、時に突風のように吹き抜けていく。過剰なまでに生々しい語りの現前性（自ずと聴者の視点はそこに置かれることとなろう）と、ざらざらした物質性を露にして襲いかかるテープ・サウンドの覚醒効果の不均衡が、すべてが架空のサウンドトラックへと収斂することを妨げる。この衝突と軋轢、出来事に満ちた空間こそが、彼らの提唱するKlangräume＝Sound Spaceであり、都市の空間にほかならない。演奏者では最近自主レーベルを始めたGeorg Gr we(p)に注目。　(福島)



KOLLEKTIV
Feat. Jonas Hellborg

CD/ITM 979.034　'88年

　このKOLLEKTIVというバンドは勉強不足のためメンバー等に関して理解しきっていないのだが、このアルバムは全面的に今や説明不要のベーシスト､ヨナス･エルボーグが参加していることで知名度がある｡演奏ではベースレスの１曲を除いて全曲参加しているのだが､作曲面に絡んでいるのは冒頭１曲目のみ。悲しいかなこの曲が一番ブッ飛んでいて、他の曲はプレイヤーとしてかなりの貢献をしているというレベルから上に行かない。たぶんもともとそういうバンドなのだろうが、最近の先鋭ジャズの面白味を知っているフュージョンバンド、この程度のひねくれ具合では他に幾らでも代役が務まってしまう、という演奏。演奏技術面から見ると文句の付け所はない。
(伊藤)



KOMBINAT M (Austria)
Kombinat M

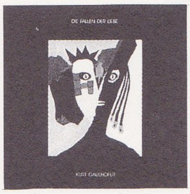
CD/(U.S.)Cuneiform RUNE 48　'93年

　ウィーンから飛び出してきた、痛快爆発型ジャズロック（いや、ジャズロックは適切な表現ではないが他に適当な言葉が見つからない）グループだ。なんと言っても演奏が爆発している。物凄く骨の太い音を出すのにときどきオチャラけてけっつまづく。その次の瞬間には走り抜けている。メンバー５人とも並ではないテクニックとセンスを身につけているが（それもそうだ、殆ど全員正式に教育を受けている）その中でも注目されるのは現代音楽作曲家であるG.Ligetiの息子がドラムを叩いている。ジャズ、クラシック、現代音楽、ロックなどいろいろな音楽を好奇心旺盛に吸収した上で、あえて「図太い」音で勝負をかけた、と解釈できるであろう。本気で今後の活動に期待する。
(伊藤)



DIE KRUPPS
Stahlwerksynfonie
LP/ZICK ZACK ZZ 30　'81年

ファンク・ベースが執拗に繰り返す重く沈鬱なビートが、いつ果てるともなく疲弊しきった身体に食い込み続け、その上でフィードバック・ギターやフリーキーなサックスの咆吼が混ぜ合わされる(A面)。一方、B面では全く同一のベース・ラインのもと、雄叫びや鉄パイプの連打といったよりプリミティヴな音響が、空間をねじ曲げ時間を歪ませる過激なダブ操作にさらされる。いずれの場合も、赤錆の中に重く沈み込んだサウンドは、いっこうにカタストロフ／カタルシスに至る気配を見せず、ただひたすらに内圧と緊張のプラトーを高め続ける。グループ名は、鉄鋼王／死の商人の財閥クルップ家にちなむ。イナー・スペースでコニー・プランクにより録音され、ホルガー・チュカイにも謝辞が捧げられている。　(福島)



KURT GAULHOFER (Austria)
Die Fallen Der Liebe
LP/Vollmond 120 867　'85年

柔らかなブロックフレーテに導かれて幕を開け、触れた途端に壊れてしまいそうな繊弱な音によるスケッチが、いずれも断章のまま、夢見るように連ねられ、ふと浮かび上がっては、またいつの間にか消えていく。鉱物の輝きに魅せられた瞬間／永遠への遠い憧れ。本作は、夜の闇が次第に底の方から白々と明けていく時間に捧げられた「夜の音楽」であり、孤独に凍えた心を癒すべく、静寂に浸み込ませるための束の間の祈りでもある。同じレーベルから他にも数作リリースされており、いずれも木管と弦、ギター、キーボード、声によるたおやかでメランコリックな小品集だが、おそらくは断章構成ゆえの、本作のはかなくも華奢な手触りを採りたい。45回転のため、すぐに終わってしまうのが惜しくてたまらない。　(福島)



LIMPE FUCHS
Muusiccia (Metal/Stones)
LP/Streamline 1004　'93年

アニマの音楽的中核を担う彼女は、憑かれた巫女のごときビザーレな詠唱と、エレクトロニクスとヴァイオリンの倍音が幾重にもエロティックに交錯するドローン・ミュージックを、『アニマ』(87年)として発表し、今さらのように女性原理による音楽の作動を明らかにした。本作では巨大な柱時計のように鳴り響く自作楽器バラストストリングスや銅鑼の高鳴り、ティンパニの連打を鬱蒼と繁らせた深い森を、冷やかな気高さを増した声・ヴァイオリン・石琴が鮮やかに踏み分け歩んでいく。さらには伊トスカナ地方の原野で繰り広げられる狩りの音風景（獲物を追い詰める犬の吠え声と猟銃の発射音が遠く風をわたる）や小川のせせらぎ、牛の鳴き声が映し出され、アミニスティックな神話的世界を編み上げる。　(福島)



MARKUS STOCKHAUSEN
Beings
LP/Fonit Cetra ALP 2017　'87年

カールハインツ・シュトックハウゼンの長男であり、父の作品演奏にも多数参加している。ここに収められた演奏については「すべての音楽は直観的に演奏された」とのコメントが付されており、通常の「ジャズ」即興が基づく対話性は、サウンド・インスタレーション的な音の空間配置に完全に取って替わられている。寸分の狂いもないプラトン的真球型の空間を、エンジェル・ヘアーのように軽やかなトランペットが満たしていく。他に自身のグループ〝アパリス〟やライナー・ブリューニングハウス『コンティニューム』(いずれもECM) への参加があるが、本作のような無菌状態での純粋培養音楽こそが、彼には似つかわしい。なお、共演者ゾロ・バベル(p、syn、dr、perc) は、かの〝アニマ〟のメンバーである。　(福島)



MATADOR
A Touch Beyond Canned Love
LP /What's So Funny About.. SF40
'87年

マニアD、マラリア！を経た女傑グドルン・グート(dr、tp、vo、electronics)を含む女性ばかりのトリオ。覚醒したビートと鋭利なヴォイス、そして多様なテープ効果が切り結ぶA面もさることながら、鋸を挽く音が淡々と時に刻み目を入れていくなか、葬送の鐘に導かれて幕を開けるB②からの展開が素晴らしい。ピアノの打鍵音を背景につぶやき始めた声は、次第に冷気／霊気を帯び、黄泉の国からの風をはらみ始める。あるいはゴシック様式の古城に組み込まれた巨大な機械仕掛け、礼拝堂内に突如響きわたる提琴……。高貴に澱んだ血と蒼ざめた鋼鉄が産み落とした崇高の美学。内ジャケのポートレイトは、彼女達の、まさに魔女と呼ぶにふさわしい、何者も寄せ付けぬ冷やかな美しさを見事に写し取っている。　(福島)



MAURICIO KAGEL
Match Für 3 Spieler/Musik Für Renaissance-instrumente
LP /Deutsche Grammophon 104 993
'?年

カーゲルは31年アルゼンチンに生まれ57年に渡欧、以後ケルンを中心に活動を続ける作曲家である。声の領域の野心的な拡張を進め、楽器演奏の視覚的側面の演劇性／儀式性と機械的反復に注目し、数々の「シアター・ミュージック」作品を作曲した。それらは悪意のこもったフモールによって制度を解体構築するとともに、シュトックハウゼンを含む多くの作曲家たちに、演奏が必然的に有する演劇性について気付かせることとなった。ここに収められている2作品のうち、前者は2人のチェリストが打楽器奏者を審判にスポーツのごとく対決するもの。後者はタイトル通りルネサンス時代の楽器によるアンサンブルだが、回顧的要素は一切なく、楽器特有の過剰な倍音が鋭く波立ち吹き荒れるノイズ音楽となっている。　(福島)



MAULICIO KAGEL
Exotica
LP/Koch/Schwann 3-1391-2 '93年

『エキゾティカ』は６人の演奏者に各々10種類以上の非西欧楽器と、これまた非西欧的な発声を操らせ、アジア／アフリカ産のエスニックな音響の断片がリズミックに渦を巻きながら戦争状態に突入するという圧倒的なパワーみなぎる確信犯的大曲。このアンサンブル・モデルンによる演奏の、いかにもワールド・ミュージック以後を感じさせる緻密な適確さと、グラモフォン盤のV・グロボカール、M・ポルタル、C・カスケル、S・パルムらオールスターによる歴史的録音(72年)の異様な熱気と興奮に浮かされたパフォーマンス色濃い演奏の、どちらを採るかは意見が分かれるところだろう。なお後者は２ギターとピアノによるトニー・コンラッド／アンソニー・ムーア的なミニマル・ミュージック『タクティル』も収録。　(福島)



NO SECRETS IN THE FAMILY (Switzerland)
In A Certain Light We All Appear Green
CD/(Swi.)Rec Rec reCDec 905 '87年

ヴァイオリンに管楽器を含めた５人組の編成、３枚のアルバムがRecRecから出ていることから判るようにカンタベリー現在形の中に属する音楽性を持つが、もっと注目されて良いバンド。その彼等の１st。細かくめまぐるしく表情を変える曲構成におちゃらけた旋律が顔を出したり。というと引き合いにZAMLAを出したくなるが、勿論その手のファンへのアピール度はかなり高い。よりシリアスさが強く、女性ヴォーカル（これがなかなか面白い味を出す要になっている）が全面に出てきている部分とインストのけっつまずくような展開が小気味よい。彼等の作品３枚とも同傾向でどれも楽しめるが本作が一番かっちりまとまっているか？とにかくこのレーベルで「おっ？」と引っかかる好みを持っている人には大推薦盤。　(伊藤)



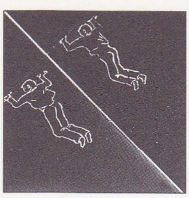
NO SECRETS IN THE FAMILY
Play & Strange Laughter
CD/(Swi.)RecRec Music reCDec 23 '89年

NO SECRETS IN THE FAMILYはスイスで活動しているRecommended系のバンド。Recommended直系バンドの中では最近特に活きのいい演奏を聴かせてくれるバンドのひとつだ。デヴィッド・トーマスあたりの影響を強く受けているようだが、アンサンブルの凝り方はART BEARSやAQZAK MABOULに匹敵する。聴けば聴くほどに納得の行く不敵な音楽。本作は彼らの２ndに当たる。メンバーはアネッテ・シェーンホルツァー(vo、kb)、マルクス・シェーンホルツァー(vo、g、melodica)、ダニエル・マイエンバーガー(b、ukulele、vo)、マーティン・ガンテンバイン(d、fl、sax、acc、vo)の４人。加えてvln、bsn、tuba、vc、obのゲストが参加している（バスーンのビート・ブライナーはMAX LASSER'S ARKの準メンバー)。聴き逃すべからず。　(坂本)



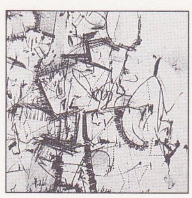
NO SECRETS IN THE FAMILY
Kleinzeit
CD/(Swi.)Rec Rec 47 '92年

知る限りでは最新の三作目。ベーシストが代わっているが音傾向は相変らずの典型的レコメン・サウンド。ある意味では閉じ込った印象を与えるものの軽快にシリアスに茶化しも取り入れて流れ良く進行するそのサウンドの完成度は非常に高く、この手のどのバンドにもヒケを取る物では無い。又、凝りまくった造りなのにどこか軽妙なコミカルさとどんよりとならない不気味さをコミで感じさせるなど枠の中とは言え独自性は確立している。これまでの作品では他のレコメン有名筋との交流は見られ無った様だが、本体ではビル・ジローニスがプロデュース（演奏にも参加）しており、そのおかげかトータルな流れの中でのメリハリが最も良く出ていると思う。ともあれレコメンファンは要注目のバンド。　(中西)



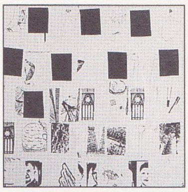
NORBERT M SLANG, ANDY G HL (Switzerland)
Kick That Habit
LP/Uhlan G UP 05 '86年

ラジオやレコード・プレーヤー等、日常身の回りにあるジャンク・エレクトロニクスを音源として再発見したことにより生まれた、『Nack On』(82年)におけるポール・リットンにも似た間歇的でエレクトロ・アコースティックかつパーカッシヴな即興演奏は、続く『Voice Crack』(84年)で、スピーカー、マイク、プロジェクター、光電素子、発信機、ラジオ等が形成する音響的／光学的／電子的な相互干渉の操作へと進展し、音響の稠密さを増して、空間的な濃度を獲得するに至る。本作では、ヤスリをかけたような軋みと電子的な悲鳴が全編を満たしており、彼らの方法論がひとつの極限に達したことを示している。その後16-17のクヌート・レーモン(dr)を加え、ヴォイス・クラックの名で活動を続けている。　(福島)



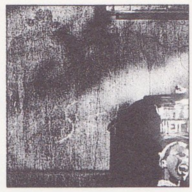
P16.D4
Distruct
LP/Selektion SLP 005 '85年

マインツで活動するポストパンク・バンドP.D.は『Alltag』で示したテープ・ミュージックへの傾斜（街頭の現実音がズタズタに切り裂かれ、あるいは遠く隔てられ夢幻的光景へと変貌する）を、P16.D4への発展的解消により一層顕著にしていく。タイトルは「ディスタント・ストラクチャー」の略であり、遠く離れた他者（本作では14アーティスツ）から送り届けられた音響素材の集積を様々に変容し／切り刻み／重ね合わせ／組み込み／自ら音響を加え作品へと加工していく（未完の）プロセスである。制作にあたっては常に他者との距離感が強く意識されており、あらかじめ与えられた平面の上で行われるコラージュの安易さは微塵もなく、むしろ即興演奏に特有の強度を比類のないほどみなぎらせている。　(福島)



P16.D4・SWIMMING BEHAVIOR OF THE HUMAN INFANT
Nichts Niemand Nirgends Nie!
LP/Selektion SCD 002 '86年

『ディストラクト』の方法論は、S.B.O.T.H.I.との緊密なコラボレーションや、『キャプチャード・ミュージック』におけるクリスチャン・マークレイ、エリオット・シャープ、ニコラス・コリンズ、ナハトルフトらとネットワーキング等を通じ、より電子的かつ構造的な領野において展開・深化・錬磨され、やがて別プロジェクトたるＳＬＰ（即興性の確率的な混入を許すターンテーブル・スクラッチとコンピューターによるデータ・プロセッシングの結合プロジェクト）へと受け継がれていくことになる。本作はその最初の成果であり、ここで素材のプロセッシングは精緻なマトリックスに基づくものの、いまだ即興的な強度を失っていない（S.B.O.O.H.I.やＳＬＰはいささかコンセプチュアルに過ぎる）。（福島）



S.Y.P.H.
S.Y.P.H.
LP/Pure Freude PF 15 '82年

前作『Pst!』に続きホルガー・チュカイの協力を得た４作目。一方ジュフ（この名は梅毒Syphilisの暗示だろうか）のメンバーも、当時チュカイの『オン・ザ・ピーク・オヴ・ノーマル』に参加しており、この時期彼らが緊密な共同作業体制を組んでいたことがわかる。彼らの音はまさしくカンの再臨というべきもので、野卑な民俗的パワーに満ちた前作が『モンスター・ムーヴィー』とすれば、繊細にして曖昧かつ夢幻的なテープ操作と単調で催眠的なビートが、まるで効果音のように交錯する器楽演奏（とりわけチュカイのフレンチ・ホルンは、一種の減速効果と空間的な奥行き、さらにユーモアを付け加えている）とともに、知覚領域を緩やかに浸潤・拡大する本作は『フューチャー・デイズ』に当たると言えよう。（福島）



VLADIMIR ESTRAGON
Three Quarks For Muster Mark
CD/Tiptoe TIPTOE CD 888803 '89年

これはまさしく新世代のジャーマン・ロックと言っていいだろう。こんなミュージシャンが顔を合わせてこんなことをやっているというのが、実にとんでもないことだと思う。メンバーはフィル・ミントン(vo、tb)、アルフレート・23・ハルト(sax、cl、bcl)、ウルリケ・ハーゲ(prog、smpl、kb)、Ｆ・Ｍ・アインハイト(metal、elec、perc)の４人。ミントンはＭ・ウェストブルックとの活動で知られる。アインハイトは元EINSTURZENDE NEUBAUTENのノイズ・パーカッショニスト。だが、主役はハーゲとハルトだ。して、彼らの音楽はと言えば、すこぶるポップなアヴァンギャルド・ロックなのだ（勿論ジャズの要素もふんだんに入っているが）。すべての音楽に精通しているらしい才女ハーゲのサウンド・コントロールが秀逸。（坂本）



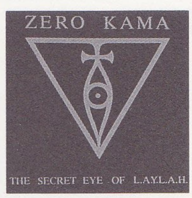
WERKBUND
Skagerrak
LP /Walter Ulbricht Schallfoien WULP 007 '87年

神経を逆なでする低く不明瞭なノイズの強迫的な反復、破裂するような発射音、何か巨大なものがゆっくりと頭上を通過していく、近くで数回の爆発、鋭い反響を伴う打ち鳴らされた金属音、耳をつんざく機械の動作音、やはり何かシステムの作動ノイズに重なる心臓の鼓動、ラジオから流れる勇壮な軍歌……視覚を喚起することのない、暗闇のミュージック・コンクレートが潜水艦内部の閉所恐怖をシュミレートする（付録のポスターには海戦図。センター・レーベルにも海戦風景）。ＳＰＫやライバッハのリリース元でもあるヴァルター・ウルブリヒトが掲げる「新保守主義」（それを最も体現しているのがヴェルクブントであるという）とは、シャルル・モーラス的な反近代主義・反ヒューマニズムの謂ではないか。（福島）



WOLFGANG SALOMON
Luna-Small Step For Mankind
CD/Chance Productions Best.:1003 '92年

ヴォルフガング・ザーロモンの名前はジャーマン・ロックではなく、北欧の音楽シーンに１度だけ登場したことがある。それは即ち、スウェーデンで結成されたVON ZAMLAのベーシストとしてだった。以来彼の名前を見かけることなどついぞなかったのだが、このアルバムによって突如彼の復活が確認されたのだった。これはTHEATRE LA LUBIE（直訳すれば「気まぐれ劇場」）の同名タイトルのＳＦ仕立ての芝居のための劇伴音楽らしい。打ち込みなども丁寧に駆使した実験的かつドラマティックな音楽であり、更に昔の仲間であるミシェル・ベルクマン(bsn)とラーシュ・ホルマー(kb、acc)がゲスト参加しているとあっては聴き逃す訳に行かない。殆ど自主制作に近いアルバムだが、ブランクを感じさせない力作だ。（坂本）



ZERO KAMA (Austria)
The Secret Eyes Of L.A.Y.L.A.H.
LP /Nekrophile NRC07 '84年
CD/Permis De Construire PER 009

ＬＰ裏ジャケットの写真に見られるように、チベット密教の儀式に用いられるカンリンに似た笛、頭蓋骨に皮を張った太鼓類と、本作に用いられている楽器は総べて人骨製であり、演奏は長く尾を引く残響を身にまといながら、プリミティヴなリズムを従え、何か秘められたパワーを喚起するように厳かに進められる。ここでフェティッシュ（呪物）の持つパワーは、生み出される音を通じて、性の創造的な力へと働きかけるのだ。究極のリチュアル・ミュージック。なお、オリジナルはウィーンの「死体嗜好」レコーズよりリリースされたカセット・テープ（同シリーズでは他にゾスキア／コイルの第一作等がリリースされている）。ＬＰにはそのリミックスが収められている（写真はＬＰジャケットのものである）。（福島）

BELLE ANTIQUE
404, SY Bld
3-15-18 Shimo-Ochiai
Shinjuku-ku Tokyo 161
JAPAN 03-954-2055

BELLE ANTIQUE NEW RELEASES IN JULY/AUGUST

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.
WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

GLORY OF JAP'S PROGRESSIVE SERIES



アイン・ソフ
AIN SOPH
クイック・サンド
QUICK SAND -Special Live vol.3-
BELLE ANTIQUE 9472
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑪
8月5日発売

遂に真打ち登場といった感のあるアイン・ソフの'86～'89年のライヴ。この時代のアイン・ソフはダブル・キーボードの編成であり、彼等がキング・レコードからのデビュー・アルバム「妖精の森」以来の、スリリングな演奏とメランコリックな響きをブレンドした独特の世界を描くことに成功しています。又、全10曲がここでは演奏されていますが、内、6曲までが未発表曲です。この時期のスタジオ盤にはない、ライヴ演奏だけに感じることのできるダイナミズム。そして、ダブル・キーボーダーのうま味を最大限に引きだした幽幻な空間。長い活動を続けるアイン・ソフの歴史の中で、最もテンションの高かった時期のひとつ。その記憶が、今、甦ります。



新月
SHINGETSU
赤い目の鏡(仮題)
-アーリー・ライヴ-
AKAI ME NO KAGAMI
BELLE ANTIQUE 9473
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑫ 8月5日発売

長い探索のすえに遂に発見しました。新月のクォリティーの高いライヴ・テープを。'79年秋、ABCホールでの初日。メンバー達に言わせても最もテンションの高かったライヴの1つだという伝説のパフォーマンスです。アルバム制作時ということもあり、演奏自体もウェル・バランスに仕上げられており、又、ファンの間で幻の曲として語り継がれてきたアルバム未収録曲も4曲(不意の旅立ち/少女は帰れない/赤い目の鏡/殺意への船出)が収録されているのも大きな話題となるでしょう。アレンジの巧みさと、ワイド・レンジな演奏、演劇性のあるパフォーマンスで日本のシンフォニック・ロックの代表的なグループの幻の名演がここに再現されました!



新月
SHINGETSU
新月
SHINGETSU
BELLE ANTIQUE 9474
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑬
8月5日発売

新月のライヴ・アルバムの発売と同時に、長らく廃盤状態が続いている新月のオリジナル・アルバムもマーキーより再発することになりました。日本のシンフォニック・ロックの古典というと、この新月をナンバー・ワンにあげるファンが圧倒的だと思います。ジェネシスという御手本があったことは事実ですが、ジェネシスのアレンジを研究し、それを日本的な陰影の中に見事に抽入することに成功した名曲〝鬼〟はシンフォニック・ロックの名作として歴史の中で輝き続けていくことでしょう。又、耽美的な情景を抑制された美意識の中で綴る〝白唇〟、ヴォーカルが様々な声色を使い分ける〝科学の夜〟等、どれもがナイーヴな感性を卓越したアレンジによって表現された佳曲揃いです。

好評発売中



フロマージュ オンディーヌ
BELLE ANTIQUE 9458
¥2,920(税抜価格)
SERIES ①



フロマージュ オフェーリア
BELLE ANTIQUE 9459
¥2,920(税抜価格)
SERIES ②



ヘレティック 1984～88
BELLE ANTIQUE 9457
¥2,920(税抜価格)
SERIES ③



マジカル・パワー・マコ ミュージック・フロム・ヘヴン
BELLE ANTIQUE 9460
¥2,920(税抜価格)
SERIES ④



70'sウェスト・ジャパニ・ロック・シーン
BELLE ANTIQUE 9461
¥2,920(税抜価格)
SERIES ⑤



オリジナル・アウター・リミッツ アウター・マニア
BELLE ANTIQUE 9462
¥2,920(税抜価格)
SERIES ⑥



ゴールデン・アヴァンギャルド ゴールデン・アヴァンギャルド
BELLE ANTIQUE 9463
¥2,120(税抜価格)
SERIES ⑦



伝説の彼方～東京シンフォニック・シンドローム
BELLE ANTIQUE 9464
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑧



ケンソー 空に光る
(アーリー・ライヴ vol.1)
BELLE ANTIQUE 9465
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑨



まどろみ(美狂乱) ライヴ vol.4
BELLE ANTIQUE 9466
¥2,910(税抜価格)
SERIES ⑩

MARQUEE NEW RELEASES



ポーレン
極彩色の宇宙
MARQUEE 9467
¥2,200(税抜価格)
7月25日発売予定

〝カナダのイエス〟の名を欲しいままにしているポーレン唯一の作品。グループ・ネーミングに相応しい幻想美溢れるジャケット・アートを象徴するかのごとく、時に目まぐるしく変幻自在なカタストロフィー、時に感傷的なナルシズムの両面性を見事に兼ね備えた、リリシズムあふれる旋律とファンタジックな曲展開は、手に触れただけでも壊れそうな硝子細工、カレイドスコープの描き出す世界さえも思わせます。G, Key、Vo & B, Dsの基本的な4人編成ながらも、皆互い違いに楽器を持ち替えたり、ヴァイブ、フルートを導入したりと、変則的なパターンでオリジナリティー濃い複雑な構築美を具現化しています。発掘当時、このポーレンとOPUS 5が2大シンフォニック・バンドと並び称された時期がありましたが、静のOPUS 5に対し、動のポーレンとしてマニア達を悩ませた1枚。遂にCD化成ります!!



フィンチ
ガレオンズ・オヴ・パッション
MARQUEE 9475
¥2,500(税抜価格)
8月中旬発売予定

フィンチの残した3枚の遺産は、そのどれもが水準の高い名作としてファンの間で認められていますが、どれか1枚ということになると、このサード・アルバムを選ぶ方が多いようです。ジャズの要素も加えて、意欲的なインストゥルメンタル作品にとり組んだファースト。全3曲の大曲志向と叙情的なフレージングで聴く者の魂をゆさぶるセカンド。そして、全作品中、最も洗練されたエンジニアリングで、彼等の情熱を余すところなく描き切ったこのサード・アルバムと回を重ねることによって彼等が成長していくのがわかり、その頂点が本作であるという大方の見解にはさしたる異論もないことと思います。オール・インストゥルメンタルでありながら、ヴォーカル曲に劣らず饒舌なサウンドであるのは、何といってもギタリストの熱いパッションに満ちたプレイとそれをサポートするキーボーダーの力量によるところが大きいと思います。聴いて下さい、フィンチの情熱の嵐を!!



ミッシェル・ル・フランソワ
幻想楽園
MARQUEE 9470
¥2,500(税抜価格)
9月上旬に延期になりました。



マネイジュ
御伽の国へ
MARQUEE 9471
¥2,500(税抜価格)
9月上旬に延期になりました。



ジョセ・シッド
10,000光年の果て
LPサイズ・カヴァーCD
MARQUEE 9452-S ¥3,500(税抜価格)
ノーマルCD
MARQUEE 9452-N ¥2,800(税抜価格)
8月上旬発売予定

ベル・アンティーク 商品販売店大募集!!

マーキー/ベル・アンティークではできるだけ多くのファンの方に素晴らしい作品をお届けできるよう、販売店を募集しています。輸入盤店/国内盤店を問わず、御連絡下さい。月、2～3度卸売りのリストを発行しています。この中には、上記のアイテム以外にも、直輸入盤等も扱っております。

〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
マーキー/ベル・アンティーク
TEL.03-3954-2055 FAX.03-3954-9563

主要販売店リスト

＊マーキー/ベル・アンティークの商品は以下の主要販売店で入手できます。通販の場合はTELにて在庫確認の上、代金＋送料(1枚なら370円)をマーキー内ベル・アンティーク係までお送り下さい。

〈東京〉

新宿レコード	03-3363-3669
ディスク・ユニオン各店	03-3352-2691 (新宿店)
ピースアイ・レコード	03-3380-7332
プログレッシヴ・アーティストリー	03-5696-3281
マザーズ・レコード	03-3461-1134
ガーデン・シェッド	03-5389-6721
山野楽器本店(銀座)	03-5250-1067
オン・ステージ・ヤマノ	03-3981-4763

〈関東〉

足利市	ヴィンテージ・レコーズ	0284-42-7736
上尾市	サウンド トラヴェル	048-775-1737
千葉市	山野楽器千葉店	043-225-3861

〈東北・北海道〉

仙台市	ディスク・ノート	022-222-2837
盛岡市	ディスク・ノート	0196-54-1153
仙台市	レコード・ギャラリー	022-221-5308
札幌市	グルグル	011-271-0166
仙台市	グレートミュージック宮町店	022-222-1912

〈関西〉

大阪市	ザ・ディスク	06-647-0721
大阪市	ディスクイン・なんば店	06-644-2822
京都市	パララックス・レコード	075-344-0075
神戸市	ハックルベリー	078-332-0766
京都市	タワー・レコード京都店	075-212-7058
大阪市	バックトリップ・レコード	06-634-1757
京都市	コンフォート	075-701-8434
大阪市	フォーエヴァー(3)	06-312-1663
京都市	ジョーズ・ガレージ	075-722-8530

〈東海・中部・甲信越〉

名古屋市	エイト	052-735-0988
沼津市	シーザー	0559-62-9070
新潟市	ディスク・ガレージ	025-228-5460
名古屋市	ディスク・ヘヴン	052-853-3571
名古屋市	マスタング・レコード	052-265-0452
津市	マザーグース・レコード	0592-25-5884
浜松市	ハマラジ	053-448-1133
松阪市	村林楽器店	0598-21-1030

〈その他〉

岡山市	LPコーナー岡山	0862-31-1145
倉敷市	グリーンハウス	0864-21-3108
広島市	バックステージ・レコード	082-242-0069
徳島市	メロディー	0886-53-5576
金沢市	レコード・ジャングル	0762-64-3672
那覇市	高良レコード店	098-863-3061

belle musique d'aujourd'hui

Marquee vol.056

税込定価1,200円/9月25日発売

●Step Across The Border
～フレッド・フリスとその周辺、コンヴェンタムとその後～
●MARILLION
～インタビュー(マーキー流に)、ライヴ・リポート、FISH～
●新月、幻の音源リリース
●Live Progression
～Asian Fantasyリポート他～
●Canterbury Files
～クリス・カトラーに聞く。「La 1919」「The Nudes」
●Magmaとその周辺
●Euro Masterpiece On CD
●アコースティック見聞録・拡大版
～フィオーナ・ジョイス、ロリーナ・マケニット他～
●ユーロ・ロックの巨人達
～ペッカ・ポーヨラ～ 他

別冊ユーロ・ロック集成第2弾

「German Rock集成」

8月10日発刊

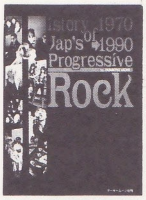
Amon Duul、Ash Ra Tempel、Popol Vuh、Can、Embryo、Kraftwerk、Tangerine Dream、Cluster一派等の中軸は、バンド・バイオ/音楽性を加えての読み物も盛りだくさん。他にジャーマン・ロックと現在の関わり、そして総レコード・レビューを予定。今もって古典でありながら古典に収まらず、音楽の有り方を暗示する重要極まりないシーンを総特集。



「ブリティッシュ・ロック集成」
＊遂に増刷出来/
税込定価￥3600
送料￥380



ユーロ・ロック集成①
「イタリアン・ロック集成」
税込定価￥4000
送料￥380



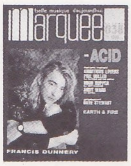
「HISTORY OF JAP'S PROGRESSIVE ROCK 1970-1990」
ヌメロ・ウエノ著
税込定価￥3600 送料￥380

BACKNUMBER

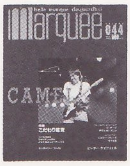
●掲載以外の号は売切れです。
●送料は一冊のみの場合310円、2・3冊は380円、4冊は450円、5・6冊は520円、7冊は590円、8冊は660円です。
●お近くの書店・レコード店でお求めになれない場合は、定期購読をお勧めします。
一年分(6冊)の購読料9,060円(送料込)を現金書留、郵便為替、郵便振替(東京7-27224:マーキームーン社)にて御送金ください。
●送金後2週間以内に本が届かない場合は御連絡ください。(Tel.03-3954-2055)



037 ￥1,200
特集:'91アーティスト・カタログ/オール・アバウト・イヴ/デイヴ・スチュワート/キャラヴァン/ソーニャ・クリスティナ/アニー・ハズラム/バーバラ・ガスキン/アーバン・サックス/アフター・ディナー/ジョン・ゾーン



038 ￥1,200
特集:アシッド[ヨーロピアン&アメリカン・アシッド・カタログ、サイバー・パンク他]/フランシス・ダナリー/アンビシャス・ラヴァーズ/フィル・ミラー/ヒュー・ホッパー/アンディ・ワード/アース&ファイアー



044 ￥980
特集:こだわり感覚[国内盤シングル、私とメロトロン、ユーロ紀行、ミニコミ総覧]デヴィッド・アレン/キャメル/ジュリー・クルーズ/MAレコーディング/ピーター・ゲイブリエル/ピリティッシュ/フォーク



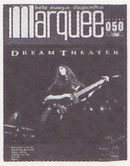
047 ￥1,200
特集:シンフォニック・ロック最前線[後編:日本、アメリカ大陸/センス・オヴ・ワンダー/ページェント他]/アングラガルド/イシルドゥルス・バーネ/アモン・デュール/パスカル・コムラード/ペンタングル



048 ￥1,200
特集:マグマ[インタビュー、レビュー多数]/インタビュー[イアン・アンダーソン、ファウスト、マーク・ナウシーフ、ラルフ・ヒューベルト]/マジカル・パワー・マコ/カンタベリー・ファイルズ:クリス・カトラー/ザ・バダック他



049 ￥1,200
PROGRESSION:音楽の行動[金子飛鳥、大友良英、GHOST、TIPOGRAPHICA、BONDAGE FRUITS]/ユーロピアン・ロック・コレクション・アンコール/ヴォイスプリント・レーベル/フォーカス/ベルナール・パガノッティ



050 ￥1,200
ライヴ・リポート[マドレデウス/ドリーム・シアター/ヴィエナ]/インタビュー[ドリーム・シアター]/チャールズ・ヘイワード/マフィンズ/美狂乱/サムラ・ママス・マンナ/カルメン/シルヴィアン&フリップ



051 ￥1,200
特集:STEP ACROSS THE BORDER[Cuneiformレーベルの概要と主要アーティスト]/ロバート・フリップ・インタビュー/ライヴ・リート[ザ・バダック、ジェスロ・タル、フレアーク、リシャール・ピナス]/パンコ/エニッド/エニワンズ・ドーター



052 ￥1,200
特集:70'sイタリアン・ロック[イタリアン・ロック集成補追/インタビュー:A・ソレンティ、A・ラディウス]/ラッシュ/ペンドラゴン/カトリーヌ・リベロ/CMP/BACKGROUNDレーベル/古舘徹夫/山塚アイ



053 ￥1,200
特集:STEP ACROSS THE BORDER[ニューヨーク、ニッティング・ファクトリー周辺]/サグラド/ヴィジブル・ウィンド/マリリオン/アンジュ/ギリシャの音楽/金子飛鳥/佐藤通弘/デヴィッド・トーン



054 ￥1,200
特集:PINK FLOYD/ピーター・ガブリエル/平沢進/センス・オヴ・ワンダー/ゴールデン・アヴァンギャルド/POU FOU/ジョン・ローズ/ジョン・エスリッジ/スティーヴ・ハケット/GOLDEN BOUGH他



税込定価**3,600**円（本体3,495円）



税込定価 **3,600**円(本体3,495円)